

白物語

ネコ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一般学生が学校から帰る道中、気が付いたらナルトの世界の人物に憑依していた。

そんな死亡率高めな世界で、生きていく為に色々とやっていく話。

※原作別視点※主人公（ナルトじゃないよ）が関わることによる原作逸脱有※ある意味不定期更新※暇つぶし作品※本編完結しました

※

目次

ナルトの世界

1 憑依? | 1

2 仕事? | 6

3 再不斬? | 11

4 チャクラ? | 17

5 忍術? | 22

6 巻物? | 27

7 里抜け? | 32

8 街中? | 37

9 方針? | 42

10 港町? | 47

11 血継限界? | 53

12 出航? | 59

13 船旅? | 65

14 小島? | 72

15 離島? | 78

波の国

16 手配書? | 85

17 注意? | 93

18 休息? | 98

19 尾行? | 103

20 逃亡生活? | 108

21 遭遇? | 114

木の葉の里

4 5	4 4	4 3	4 2	4 1	4 0	3 9	3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	3 1	アカデミー	3 0	2 9	2 8	2 7	2 6	2 5	2 4	2 3	2 2
変化?	点穴?	観光?	任務?	本気?	引越し?	暗部?	事件?	先生?	仕込み?	くノ一?	就職?	手紙?	授業?	入学?		休み?	外出?	誕生?	ネジ?	自信?	実力?	午後?	子守?	里入?
281	273	265	258	251	242	234	227	220	213	207	200	194	188	180		175	169	162	155	148	141	134	126	120

6 8	因縁？	456
6 7	3次試験？	449
6 6	2次試験？	442
6 5	我愛羅？	435
6 4	罨？	428
6 3	1次試験？	420
6 2	偽装？	413
6 1	推薦？	406
6 0	打合せ？	399
	中忍試験	
5 9	達成？	391
5 8	ガトー？	382
5 7	和解？	375
5 6	暴露？	367
5 5	新作？	359
5 4	経験？	349
5 3	自己紹介？	342
5 2	班構成？	334
5 1	卒業？	327
	原作開始	
5 0	卒業後？	320
4 9	想定？	312
4 8	中忍？	305
4 7	居心地？	297
4 6	説得？	289

9 1	空区？	631
9 0	北研究所？	623
大蛇丸死亡		
8 9	南研究所？	615
8 8	争い？	607
8 7	七草島？	599
8 6	水化の術？	592
8 5	雲隠れの里？	585
8 4	名残り？	578
8 3	病気？	570
8 2	クリスマス？	563
8 1	交渉？	554
8 0	霧隠れの里？	546
7 9	水影？	539
7 8	出発？	532
7 7	活動？	525
7 6	お金？	518
7 5	再会？	510
木の葉崩し後		
7 4	木の葉崩し？	502
7 3	計画始動？	495
7 2	中忍本選？	487
7 1	病院？	479
7 0	強化？	470
6 9	治療？	463

114	最後?	820
113	最終決戦?	811
112	一斉攻撃?	804
111	人柱力?	797
110	十尾?	789
109	仙術?	781
108	判断?	773
107	マダラ?	766
106	穢土転生?	758
105	潜入?	750
104	信用?	742
103	帰還?	735
102	裏切り?	727
101	忍び連合?	717
	忍界大戦	
100	五影会談?	705
99	鉄の国?	696
98	条件?	687
97	自来也?	679
96	口寄せ?	671
95	ペイン?	664
94	帰省?	656
	暁	
93	救出?	649
92	爆発?	640

1
1
5

その
後？

ナルトの世界

1 憑依？

気が付いたときには、目の前に拳がせまり殴られていた。

(痛いな……それにしても、なんでいきなり殴られたんだ？)

身体は軽々と吹き飛び、壁に当たってから止まる。そこで、自分の身体の状態を改めて把握することが出来た。

全身……見えるところは手足のみだが、身体中に痣がたくさんある。おそらくこの痣は、先程殴った目の前の人物によるものだろうことは、容易に想像ができた。

身体の痛みはそれほどでもないが、これを日常的にされては、いつか死ぬことは間違いないだろう。むしろ今まで死ななかったことのほうが不思議でならない。

そんなことを他人事のように感じながら、先程殴ってきた目の前の人物へと目を向けた。

その人物は、酒に酔っているのか顔を赤くしたままで、動かなくなったこちらを一瞥すると、殴るのに飽きたのか、酒を飲み始めた。

「いつまでもヘラヘラと笑いやがって！薄気味わりいんだよ！」

どうやら、ただ笑っていただけで殴られたようだ。かなりの理不尽と言ってもいいだろう。

(それだけで殴るか普通？　て言うかここどこだよ……)

何故自分はここにいるのか、まずはそこから考えよう。確か、学校帰りに漫画を買ってそれを読みながら家に帰っていたはずだ。本屋に寄って、いつも通りの道を歩いていたことは覚えている。ただ、そこから先が全く思い出せない――

気が付いたらいきなり殴られているという場面だったのだから、混乱しなかっただけマシなのではないだろうか？それ以前に、これは拉致なのかすら分からない。自分の手足を見るに明らかに子供の手足である。

今いる家の中も木造の小屋のようなもので、中央に囲炉裏のあるだ

けの殺風景な造りだ。囲炉裏の近く、と言うより、男の近くには酒の瓶が転がっていて、端の方に布団がひいてあるくらいだった。

この男は酒に弱いのか、それとも何処かで飲んできたのか分からないが、酔っただけでこつちを殴るようなやつだ。これからも酒を飲む度にこの行為は続くだろう。

わざわざ痛い目に遭いたくはないが、現状がどうなっているのかわからない以上様子を見るしかない。

取り敢えず、殴られた原因は先程男が言ったように、ヘラヘラと笑っているからならば、笑わなければいいだけだ。ただそれだけのこと。

(このまま寝るか……)

体力は一応まだあるが、寝た方が身体の回復は早いに違いない。もしかしたら、次に目覚めたときには夢だった——という展開もある。この微妙な鈍痛があるのは気にはなるが、元々の現実でも痛みに対して鈍かったので夢のなかでもそんなものかもしれない。

そんなことを思いつつ、その日は壁の近くに転がったまま眠りについた。

(ぐっ！)

翌朝、腹部への突然の衝撃に目が覚めた。

「起きたらさっさと稼いでこい！」

どうやら、この男が腹に蹴りを入れてきたようだ。痛みに対して鈍いとは言っても、蹴りを入れてきたことを許すつもりはなかった。

(こいつには、相応の報いを受けさせてやる！)

しかし、今この男に復讐したとしても、その後どうするかを考えると、今は我慢するしかない。

(それ以前に、朝食は無いんだろうか？ かなり腹が減っているんだが……この身体はちゃんと食べてるのか?)

朝食の事もそうだが、今後の事が更に不安になってきていた。見るからにガリガリの身体だ。それでも、動くのは何故か分からないが、精神的に何かが減っているような気がしていた。今はそれのおかげ

でなんとかなっているようだ。

しかし、それはいつ切れてもおかしくはない。現在の状況を把握して手を打たないと、手遅れになってしまう。そう考えていると——
「なにしてやがる！ 早くいきやがれ！」

怒鳴り声の方を振り返ると、男が空いた酒瓶を投げてきた。二日酔いのせいか、狙いは定まっていけないようで、検討違いのほうへと飛んでいく。

しかし、稼いでこいと言われても、どこにいけばいいのかすら分からない。

（ここは、一応聞いておいた方がいいだろうか？ でも、言ったら言っただで、また暴力をふるわれそうだしなあ……）

稼いでこなければ、更に酷いことになるのは間違いないだろう。結局どっちをとっても暴力を振るわれることには違いがないことだった。（どっちをとっても結果が一緒なら、マシな方を取るべきかな）

考えをまとめ終えたところで、男へと確認する。

「何処で稼げばいいんでしょう？」

「いつも通りやればいだろうが！ ああくそ！ 頭いてえ、さっさとこいてこい！」

いつも通りが分からないから聞いてみたが、どうやら男は二日酔いのようで答える気はないようだ。二日酔いでなくても答えたかは分からないが——

男に背を向けて、ため息をすると共に、小屋の外へと出るべく、扉へと手をかけそつと開けると、外から霧が入り込んできた。

まだ、外は薄暗くこんな中で、一体何をして稼いでこいと言っているのか不明だった。しかし、そこで立ち止まっている訳にもいかず、なにか言われる前に外に出た。あれ以上あの場に留まっても、あの男を怒らせるだけなのは目に見えているからである。

（まずは、現状把握だな。人が見つければいいんだけど……）

薄暗い霧の中をしばし散策していると、少しずつではあるが、明るくなってくると同時に、霧自体も薄くなっていく。

一応下を見ながら、道らしきものを通っていたおかげだろう。霧が

少し晴れたそこには、大きめの集落が見えてきていた。

(それにしても、かなり田舎だな)

その集落は、いままで生活していたものとはかけ離れており、一体いつの時代だと言いたいくらいの建物が建ち並んでいた。

(ここで稼ぐっていつも何してたんだ? ……ここで考えても仕方ないな。取り敢えず、あの集落に行ってみるか)

じつとしていても何も始まらないため、集落へと近付くと、その集落の入り口にいた人に声をかけられた。

「今日も早いな。また手伝いか?」

どうやら、集落の入口にいる男とは知り合いのようだった。

(知っている人がいるのは丁度いい。聞きたいことがあるんだよね)

相手の機嫌を損ねぬよう、また、自分の事を聞き出すように言葉を選んで話し掛ける。

「私のことを知っていますか?」

「ん? いきなりどうした?」

「昨日から記憶がはつきりしないので、知っているのならば、教えて欲しいんですが……」

「(あいつ今度は自分の子供も殺す気かねえ。記憶が飛ぶくらいやるとはな) まあいい、ここがどこだかわかるか?」

「分かりません」

「そこからか」

男は溜め息を吐きつつも教えてくれた。

「ここは霧隠れの里だ」

「はい?」

この男が何を言っているのかが分からなかった。

(きつとこの年になっても、厨二病にかかったままなのかもしれない。それとも特撮? でもこの身体だしな……)

そんなことを思っていたが、話は続いていたので、取り敢えず男の話聞くことにした。

その結論として――

「ここがナルトの世界であるということがよくわかった。」

2 仕事？

(なんで、こんなことになってんだ?)

色々と教えてくれた人に礼を言い、いつも行っていると言われた場所へ赴くと、そこには1人の女が待っていた。

「今日は遅かったね。何かあったのかい？」

「少し里の入り口にいる人と話してました」

「そうかい……今日の分は、ここにあるので全部だ」

女が目を向けた先には、洗濯物を入れた籠が幾つも置いてあった。すぐ横に川があることから、この洗濯物の山を洗えと言うことだろう。

「終わったらどちらに伺えばいいですか？」

この言葉に女は不審に思ったのか、表情を少し変えたが、答えは返ってきた。

「私はあそこに居るよ。それと前駄賃は、そこに置いてある」

そう言つて、女は小さな包みの方へと顎を動かすと、話は終わりとばかりに踵を返して、大きな建物の方へと去っていった。

入っていった扉を確認した後、駄賃と言われた包みの中を覗いてみると、そこには握り飯と竹筒が入っていた。

(そう言えば、朝から何も食べてなかったな)

食べ物を見るまで、その事を忘れていたことに気付き、握り飯を掴んで食べる。今まで、ただの握り飯がこんなに旨く感じたことはなかった。一度食べ始めたら止められず、一気に食べていく。

竹筒の方は普通の水だった。しかし、それでもその辺の川の水よりもマシだろうと飲み干す。

(これからどうするかね)

食べ終わり、頼まれた洗濯をしつつ、今後のことを考えていく。

この世界の死亡率はかなり高いのは間違いないだろう。現に、自分は親に毎日虐待を受けているくらいである。

親と言うのは、里の入り口の男から聞いただけなので、自分では親とは全く思っていないかった。むしろこの世界なので、殺っても問題な

いと思っっているくらいだ。

ただ、自分でも親を殺つてもいい、という考え方をするのかと不思議に思っているが、もしかしたらこの身体の前の持ち主の考えかもしれないと思ひ直していた。

この世界にいる以上、その手のことには事欠かないだろう。

洗濯も終わり、籠を持てるだけもって、指示された家へと運んでいく。

籠を全て建物の近くへと運び終えてから、女の入っていった扉をノックを試してみるが、何も返つてこないので扉を開けて中を見ると、女は料理をしていた。

部屋の様子から、どうやらここは厨房のようで、先ほどの女以外にも幾人かの人と料理を作っている。

「洗濯終わりました」

今度は聞こえるように、女の近くで声をかける。そこで女は、こちらに始めて気付いたようで、少し驚くも次の指示を出してきた。

「次は洗ったやつを上干してきな」

「上上がる場所は何処でしょう」

「いつも通り、その脇の階段から上ればいいじゃないか」

女の指差した方へ目を向けると、確かに階段があるのがわかった。入ってきた扉の位置からでは見えないが、女の立っている場所からは見えるところに階段はあった。

「わかりました」

「今日は変だね」

女は不審な表情を隠しもせずに呟き、遠慮なくじろじろと見てきた。

「そうですか？」

「無駄口はいいからさっさと行つてきな」

「はい」

色々と聞きたいことはあった。しかし、女も仕事のため、満足に聞くことは出来ない。現に、話しかけてくるなど言わんばかりに、手で追い払うような動作をしてきていた。そのため、訊くことを諦め

て、洗濯籠を取りに行く。

(そう言えば、この身体は一体何歳なんだ？ 見た感じ、明らかに三歳程度だと思うんだけど、それに対してこの仕事をさせるとか……普通あり得ないだろ)

内心で愚痴をこぼしつつ、洗濯物を干していく。

既に霧は晴れており、遠くまで見渡すことが出来た。場所としては、山で囲まれた盆地と言ったところだろうか。大きな集落に見えていたのは一部だけだったようで、今では全体が見渡せる。

山には、未だに霧が残っており、その先までは見通すことができなかった。もしかしたら、これが由来で霧隠れの里と言われるのかも知れないが……。

洗濯物を干し終わり階段を降りると、料理をしていた人達は休憩中なのか、椅子に腰掛けてくつろいでいた。

「洗濯物を干してきました」

「その皿を洗っておきな。今日は始まりが遅かった分、昼まで余り時間はないからね」

女の視線の先には、皿や箸が乱雑に置かれていた。

返事をするのも少し億劫になってきていた。そのため、返事を碌にせず、皿の山へと近付き食器を洗っていく。食器を洗うのは水洗いではなく、意外にも専用の洗剤があり、更にスポンジのようなものまであった。それらがなかったらもっと時間がかかっただろう。すんなりと食器洗いを終わらせて再度女へと声をかける。

「終わりました」

「今日はえらく手際がいいね。そこに賄いあるから食べときな。昼からまた、皿を洗ってもらおうよ」

「はい(いつもは、これよりも遅いのか……そりやこの身体で今の物量をやるうと思つたら、普通無理だよな……この身体一体どうなってるんだ?)」

この時は分からなかったが、どうやら無意識の内に、体内のチャクラで身体を強化していることを後で知ることになる。

その日の仕事を終えて、家に帰ろうと里を出る際に、里の入り口の

男から声をかけられた。

「酒とツマミを買って帰らねえのか？」

「いつもは、買ってるのですか？」

「買ってるな」

「何処で買っていたかわかりますか？」

さすがに、いつもと違う行動を取ることで、酷い目に遭うことを嫌ったため、男へと訊ねる。

「そこまでは知らねえが、商店で買ってんだろ」

「……ありがとうございます。行ってみます」

「ああ」

そんな風に思われているとは、露知らず商店街の方へ向けて歩いていった。

商店街自体は里に入って真っ直ぐの場所にあるため分かりやすい。そこには、一般人が大半だったが、時折忍び装束を纏った人を見ると、ほんとはどこかの時代劇用の村ではないかと思ってしまうほどだ。

今日の分と言われ貰った金で、酒とツマミを購入し、家路につく。その頃には、また霧が出始めて、周りも薄暗くなり始めていた。

今度は里の入り口の人に止められることなく、家まで帰ることが出来た。しかし、家に辿り着いて酒とつまみを渡したが、結局は殴られ、更に蹴られることになった。

理由は遅かったから——ただそれだけ。

その夜、ひとりの男がこの世を去った。

(呆気ないな。しかも、人を手にかけてのに罪悪感すら沸かない)

この日から、独り暮らしが始まった。

死体については家の裏に穴を掘って埋めておいた。家の中で腐敗してらつては困るからだ。

(取り敢えず生き残るためには、力を付けないとな。ここがナルトの世界なら、まずはチャクラコントロールを付けることからなんだけど、チャクラ自体が分からないんだよな……)

それから数日は同じように、仕事をしながらチャクラについて考え

たが、全く分からなかった。

(これは、誰かに師事しないと、始めの取っ掛かりからして分からない)

そんなことを少し遅くまでやっており、寝ようとしたところで、この小屋に誰かが入ってくるのが分かった。

入ってきた誰かは、いきなりこちらへと駆け寄ってくるのが分かる。

また、理不尽な暴力を受けるのかと、それに対する拒否反応だったのかもしれない。

目の前に氷の壁が出来たと思ったら、侵入者をその中に閉じ込めたのである。

(誰が助けてくれたんだろう)

そんなことを考えていたが、そこで意識はとんでしまった。

3 再不斬？

目を覚ますと、昨日と同じ天井が見えた。

(まだ夢から覚めないか。それともこちらが現実なのか。胡蝶の夢とか勘弁してほしいんだけどな)

身体を起こし家の中を見ると、人が倒れているのが分かった。恐らくは昨日の侵入者だろう。

(昨日のは夢じゃなかったんだな)

改めて侵入者を見てみると、漫画でよく見た顔であることが分かった。

(なんで、この人がここにいるの?)

侵入者してきた人物は、再不斬その人だったからである。よく観察してみると、再不斬は気絶しているようで、わずかだが腹部を怪我しているようだ。服に赤い染みが広がっていた。

(この人なんで襲ってきたんだ? って言うか昨日助けてくれたのは誰? ……取り敢えず、布団に寝かしとくか。腹に血がついてるけど、原作通りなら、このままほっといても、こんなところで死んだりしないだろうし)

再不斬を布団へと運び、一応怪我の具合を確かめようと服を剥いだときに、いきなり手を捕まれた。

「どういうつもりだ?」

「ああ、起きましたか。このままだと私の手が折れるので離して貰えませんか?」

「どういうつもりだと聞いている」

再不斬は、更に不機嫌そうな声で再度訊いてきた。余程今回の行動が理解できなかったのだろう。

「どういうつもりも、腹部を怪我しているようだったので、確認しようとしただけですよ」

「では昨日のはなんだ?」

「いや、むしろ聞きたいのはこっちなんですけど? いきなり襲いかかられるし、それを誰かが助けてくれたみたいだけど、その誰かはこ

ここに残ってないし」

この言葉に再不斬は唾然としているようだった。しかし、それも束の間。疑うような視線を向けつつ訊ねる。

「お前は昨日自分が何をしたのか覚えてないのか？」

「??? それくらい覚えてますよ。朝から洗濯しに里へ行つて……」

「そうじゃない」

何を言っているかと、少し呆れたように否定の言葉を出され、逆に不審な目を再不斬に向ける。再不斬の言っている意味が全く分からなかった。

「何がですか？」

「くつくつく。いやなんでもない」

再不斬は良いものを見つけたと言わんばかりにほくそ笑み、そればかりか笑い声すらあげる。機嫌が悪いイメージしかないと、とても不気味だった。

「ああ。そろそろ仕事に行かないといけないので、私は行きますが、あなたは怪我してるようですし、ここで休んでいいですよ」

「どれくらいで戻ってくる？」

「夕方くらいには戻りますけど？」

何故戻ってくる時間を気にしているのか分からず、正直に答える。

「そうか。俺も里に行かないといけなからな、取り敢えず一緒に行く。少し待て」

「(まだ抜け忍じゃないのか……) わかりました」

そう言うと、再不斬は手を腹部に当てて目を閉じた。

(これが医療忍術なのかな?)

これから過ごしていく上で、必須となりうる忍術である。出来れば教えて貰いたいのが、いまは生活を安定させることが優先だろう。

数分経つと、手を腹部に押し付けたままではあるが、再不斬は起き上がった。

「いくぞ」

「大丈夫なんですか？」

「移動には問題ない」

「昨日はなんで襲ってきたんですか？」

再不斬は、何を言ってるんだ？といったような顔をしてこちらを見てきた。

「お前は、本当に気付いてないのか？」

「何をでしょう？」

「お前が住んでいるこの家付近から死臭がした。それを確認しようとした結果がこれだ」

再不斬は自分の腹部を指差す。この家を調べた結果、この怪我を負ったと言っているようだった。実際にそうなのだが、この時に、どのようにして再不斬に怪我を負わせたのかなど知るよしもない。

「えーっと。つまりどういうことですか？（死臭は分かるけど、なぜ怪我までこつちのせいになる？）」

「ああ。つまりはお前のせいだ」

「心が読めるんですか!？」

「表情に出しすぎだ。聞いた話では、いつもヘラヘラ笑っているやつと聞いていたんだがな」

再不斬は、言葉など無視して、自らの考えを口に出す。事前に調べてきた情報と比較しているのだろう。

自分のことが、知れ渡っていることに暫し啞然としてしまう。一応殺したことがわからないように、毎日酒を買っていたが、再不斬に知られた今、ここに残るのは危険だろう。

もしかしたら、今一緒にいていくことすら危険かもしれない。

「安心しろ。悪いようにはしねえよ」

「心を読むのを止めて欲しいんですけどね」

「それはお前が悪いな。そう言えばお前の名前は何て言うんだ？」

この時、始めて自分に名前が無いことを知った。今まであった人からは聞いた覚えがない。実際親からも呼ばれたことはなかった。そういうったものが書かれた物も、この小屋には無い。

「自分に名前が無いのを忘れてました……」

「……本当みたいだな」

「嘘を言っても仕方ないですからね。親と思わしき男からも呼ばれた

「ことはありませんし」

「なるほどな」

再不斬は、身体をじろじろと見回しながら一人納得する。身体の至るところに痣などの怪我があれば、親から何をされていたかなど、想像するのは簡単だった。

「名前は無くてもなんとかなってるのが現状です」

「名前が無いと後々不便だ。俺がつけてやるよ」

「それでしたら、格好良さげなのでおねがいます」

「名前は格好よりも、単純なものでいいんだよ」

再不斬はどうでも良さそうに、一瞬遠くを見るような目をする。

「そんなもんですかね（変な名前だけは勘弁だな）」

「そんなもんだ。名前はそうだな……白でいいか」

「えっ？」

「分かりやすくいいだろう？」

再不斬の名前を聞いたとき、思わず聞き返してしまった。鏡の無い現状で、自分の姿をまともに見たことがないので当然だ。

（まさかの白だったのかよ！……いや待てよ、血継限界がある分、有利と考えればいいんだ！やる気出てきた！後は死亡フラグを回避するだけ！）

白は、考えを改めてやる気を出すと、嬉しそうに再不斬へと話し掛ける。

「とてもよい名前ですね！」

「この霧を見てつけただけなんだけどな」

「それを言うとき々と台無しですが、よい名前なのでいいです」

再不斬の名前を付けた理由に、少し唾然としてしまうが、自らが何者かが分かり、そのようなことなどどうでも良くなってしまう。

「最初に言っただろ？ 名前なんて単純なものでもいいんだよ」
「確かに言っていましたね。では、あなたの名前はなんというんですか？」

知ってはいたが、ここで訊いておくことで、後々呼びやすくするために白は訊ねた。変に知らないうちに名前を呼んで、怪しまれないよ

うにするためだ。

「再不斬だ。それじゃ立ち止まってないで行くぞ」

「そうでした。仕事の時間が迫ってる」

そう言っつて小走りで進んでいく再不斬に、こちらはやや駆け足でついていくのだった。

一日の仕事が終わり小屋へと戻ると、そこには再不斬が囲炉裏の近くにて堂々と座っていた。

「これは立派な不法侵入です」

「裏のやつは処理しといてやったから、むしろ俺の方がお前に対して貸しがあるくらいだ」

犯罪ですよといつても、再不斬は簡単に返してきた。しかも、白にとつて言い逃れが出来ない部分で、である。

「やはり、あそこから漏れてたんですか、お手数お掛けしました」

「白……お前は一体何歳なんだ？」

「多分身体の大きさから見るに、三歳くらいではないでしょうか？」

「三歳が、大人を簡単に殺れたうえに、埋めることができると思うか？」

「そう言えばそうですね（昔の感覚でいるせいか、できて当たり前と思っつていたけど、普通は無理だよな）」

当初は、ガリガリでいつ倒れてもおかしくない状態だった。しかし、いつしか気付けば身体は、以前の不調など無かったように、肉付いてきている。そして、それが今では普通であると思ひ込んでいたのである。

「それはな。お前が常にチャクラで身体を強化してるからだ」

「……聞きそびれました。もう一度お願いします」

「チャクラつて言つたところから分らないだろうな。まあ、追々説明してやる。取り敢えずは、そいつのコントロールからだな」

こちらを無視して再不斬は、何事か呟き考え始めたが、いままで全く分からなかったものを常に無意識にて使つていることを指摘されたのだから、詳しい説明が欲しいところであった。

「取り敢えず、コントロールの仕方を教えてください」
「そうだな」

この日より、仕事が終わってから帰宅後に、チャクラの訓練が始まった。

4 チャクラ？

「まずは、チャクラを感じることから始めるか」

再不斬は何事も無いかのように言い始めた。

「その取っ掛かりが全く分かりません」

「日常的に使っているだろうが。と言うか、なぜチャクラ切れを起こさないのか不思議なんだが……。まあいい、まずはそのチャクラを止めてみる」

白が、チャクラの存在をよく分かっていると言っているにも関わらず、再不斬はチャクラを止めろと言ってきた。白としては説明不足もいいところだろう。

「チャクラを止めてみると言われても、止め方が分かりませんので、まずは説明をお願いします」

「チャクラって言うのは、精神と肉体それぞれのエネルギーを練り上げることで生まれる。見た感じ、お前の場合は練り上げたチャクラで、身体を強化してるみたいだな」

よく考えると、説明を受けたとしても、認識できないことに白は気が付き言い直した。

「すみません。専門用語が使われて説明されても、やっぱり分からないうので、実技指導でお願いします（言葉で色々言われても覚えられない自信ないし、理解できない……）」

「そうだな。まずは、その手足の痣を消すことから始めるか」

（医療忍術ってかなりレベルが高かったような？ 痣くらいならそこまででもないのかな？）

再不斬のいきなりの提案に驚くも、現状で既にチャクラを使用しているのであれば、それをコントロールするのにはいいのだろう。

白は身体の痣を見回してみる。

全身とっていいほどに痣はあった。

「痣は一杯あるんだ。どれでもいいから、まずは患部に手を当ててみる」

「当てました」

指示された通りに、手を足にある痣を適当に選び、当てて再不斬を見上げる。

「その当てている手に目を閉じて集中してみろ。他のことは一切考えるな」

再不斬に言われた通りに、目を閉じ意識を手と足の接触している箇所へと集中する。この時に、手から足へと何かが僅かずつだが循環しているのが分かった。

今度はその循環している流れを、自分の思い通りに出来るか試してみると、止めることも増やすことも出来たのである。

(これがチャクラなのかな?)

目を開けて、この流れを忘れない内に繰り返していく。目を開けていた為か、流れを早くすることで痣が治っていくのが分かった。薄らとだが、手を当てているあたりが光っているように見える。しかし、その行為を続けるに伴い、身体に疲労感のようなものが溜まっていく。

「出来たみたいだな」

「はい。この身体の中の流れみたいなのがチャクラですか?」

「そうだ。本来は練り上げないといけないが、お前は無意識でやっているみたいだな。当分はいいが、意識して出来るようにもなっておけ」

「わかりました。ただ、結構疲れますね」

チャクラと思わしきものが、身体の中を巡るのに合わせて、疲労も溜まっていく。それは、いつもの仕事よりも疲れるものだった。

「最初はそんなものだ。それを身体中自在に動かせるようになれば、次を教えてやる」

「えーっと。いまでも自在に動かせますけど?」

「……………」

実際に最初の取っ掛かりが分かれば後は楽だった。一度身体の中にあるチャクラを認識出来れば、それを自分の意思にて動かすということが、先ほどのことでコツを掴んだため、いまでは簡単に出来る。それを伝えたのだが――

「わかった。次はチャクラの量のコントロールだ。さつきみたいな力

業ではなくな。痣だったから治つたみたいだが、これが切り傷や毒などの場合はかなり違ってくる。より精密なコントロールが必要な訳だ。一通り怪我が治つたら次を教えてやるよ。取り敢えずは……また明日来てやる」

「ありがとうございます。あつ！ 飯を食べていきませんか？ 弁当ですけど」

「飯はいらないが、そこに転がってる酒を貰っていいかうか」

「どうぞどうぞ。処分に困つたので、全部持って行ってください」

再不斬は、酒瓶を幾つか持つと、小屋を出ていった。

（さて、チャクラについては分かった。後はこれの修行方法だけど、確か木登りだったっけ？ この小屋の壁でやってみるか）

寝転んだ姿勢で足を壁につき、足の裏にチャクラを集中させていく。

（壁にチャクラを吸着つてどうするんだ？ 認識の問題なのかな？）

足の裏へと集めたチャクラを、壁に吸い付けるようにすると、壁からミキミキと音が鳴り始めた。

（これはチャクラが多すぎたか……）

チャクラを減らしていき、音が鳴らなくなった時点で、足の裏が壁に吸い付いているのを確認し、登ろうとしたが、今度は身体がついてこなかった。

（筋力が無さすぎる。チャクラ無かったらほんとに非力なんだな……）

今度は、身体の方にもチャクラを巡らせて、先程と同じくらいのチャクラを足の裏へと持つていく。そして、一歩ずつゆっくりと壁を登っていった。

（取り敢えず成功つと。流石に白の身体なだけのことはある。後は身体を鍛えて、忍術覚えてやることは一杯だけど、なんとかなるかな？）
楽天的に考えながら、壁を移動する訓練をしてから寝るのだった。

次の日も、同じように仕事から帰ると再不斬が待っていた。

（この人いま仕事何してるんだろう？ 上忍レベルだとは思っただけ

ど、暗部だったかな?)

再不斬の、霧隠れの里での仕事内容までは覚えていない。少し考え
ていたが、再不斬の一言でそんな考えはすぐに消え去った。

「早速始めるぞ」

「お願いします」

「ついでに」

そう言うと、再不斬は小屋を出ていったので、白も荷物を置き慌て
て追いかける。

再不斬が向かった先は小屋の裏手であつた。そこには以前、林が
あつたはずだが、木々が一部なくなっており、少し広めの池が佇んで
いた。

再不斬は、その池の上を平然と歩いて池の中央までいくと、こちら
を振り返った。

「(い)まで(い)こ」

「(なんの説明もなしとかスパルタだなあ)分かりました」

昨日の壁歩きの要領で、片足だけを水に浸けてチャクラを調節して
いく。

(今度は放出するような感じにすればいいのかな?)

どうも、単純に放出するだけでは駄目なようで、浮くと言う感覚は
なく、水を盛大に弾いてしまつていた。

(んく……チャクラの密度を上げすぎかな? もっと必要な分だけ
を、水に対して放出する感じでと……)

今度は、水を弾くこともなく片足を乗せることが出来た。それに伴
い、もう片足を水の上に乗せようとしたところで、いきなり水が波打
つ。

いきなりの波に対して、慌てたことにより、バランスを崩し池に浸
かるはめになってしまった。

「警告なしはあんまりだと思ふんですが?」

「いつも、水面が荒れてないと思ふな」

再不斬は、当たり前前のことを言わせるなど言わんばかりに言い切
る。

言っていることは正論だが、わざわざ波を立てることに対しては反感を覚えてしまう。

「それは、初心者に厳しくないですか？」

「俺が帰ったあと壁を歩いていたやつが何を言う」

「どうやら、昨日のことは既にばれていたようだった。特に隠すつもりは無かったので、どうでもよかったが、覗かれていたことにはかわりない。」

「覗きは犯罪じゃないですか？」

「忍びはそんなもんだ」

それを言われると、なぜか納得できてしまう。この世界では特に……。

取り敢えず、不承不承納得せざるをえないのをおいておく。

「早くここまでこい」

「釈然としないなあ」

そう言いつつも、もう一度池から上がり、今度は水面に注意しつつ歩いていく。

（これだと、一度でもコツさえ掴めば、大抵のことが出来そうだな）

多少水面を揺らしながら、再不斬の元へと辿り着くことができた。

「今日はこの水面を走れるくらいにはなっておけ」

「はい」

そう言うと、再不斬は今日の訓練は終わりとばかりに帰っていった。

（よくわからない人だな）

この後すぐに走れるようになってしまったため、逆立ちでやってみたり、水面に寝てみたりと色々試し、最終的に、走っても波紋のみで、音をたてずに動くことが出来た。白はそのことに満足してから小屋に戻っていく。

それを再不斬が見ていることも知らずに……。

5 忍術？

修行を始めて半年くらいだろうか。忍術についてもある程度教えてもらい、今はその復習中である。

この身体は予想通り、白で間違いないなかった。再不斬に持つてきてもらったチャクラ紙で調べると、チャクラ紙が凍ってしまったのだ。

なので現在は、重点的に水遁と風遁を鍛えていた。また、そればかりではなく、幻術や体術についても教わっているが、幻術はまだしも、体術に関しては再不斬が強すぎてお話にならない状態である。

医療忍術については、他人（再不斬）のすり傷くらいであればすぐに治すことが出来るし、自分の身体であればそれ以上の事でも治すことが出来た。本来は人体についての理解がないと難しいらしいが、元々学校にてある程度学んでいた身である。そのため、その辺のイメージについては問題なかった。

それらのことから、忍術については、自信がついてきていた。

（水分身の術）

池の水を利用してだが、自分の分身を作成し、更にその水分身を再不斬に変化させる。

再不斬には、手本として何度か見せてもらったが、水が無いにも関わらず水分身を行っていたので、白としても目標はそこまでいくことにあつた。

どうやっているのか聞いてみたが――

「チャクラを水に変えてやれ」

とだけ再不斬に言われただけで、それ以上は教えてもらえなかった。

（どんだけスパルタだよ！ ヒントにしても分かりにくすぎるし……。もう少し分かりやすく指導してくれても良さそうなんだけど……）

そんなことを考えつつも、手で印を組んでいき、一通りの術を使つていく。そして、終わったなら水遁の練習である。本来は風遁と水遁を

混ぜ合わせるといふ行為自体が、他の人にできないのだが、その点、自分が血継限界であることは分かっているので、それに関しては安心して練習できていた。

（水遁で出来た鏡の中に入って、鏡の間を高速で移動出来たはず。と言うことで、まずは水遁による鏡作りは出来ているから。これの中に入ればいいんだけど、何度やっても入れないんだよな……）

水遁についても、ある程度のことではできるようにはなつたが、血継限界である秘術に関しては、鏡の作成以降、未だに進歩が無かつた。鏡を幾つも出してみたり、半ドーム状に展開することも、できるようになつてはいるが、肝心の鏡の中に入れなければ意味がない。

再不斬に相談しようにも、ここ数日忙しいのか、全く見ない。そのため、聞こうにも聞けない状態であつた。

（せめて母親が生きてれば、たぶん手本として見れたんだけどな……）
無い物ねだりをしつつ、小屋へと戻り、今後のことを考えていく。

（これからどうしよかな……。その内、再不斬さんって抜け忍になるのは間違いない……。はず？ でも、白との出会いって白が親を殺して、呆然としてたところを拾って育ててたから、今と状況がかなり違ってきてる……。もしかしたら、このまま霧隠れの里で過ごす事になるかもしれない。霧隠れの里っていいイメージ無いんだよなあ……。仕事場が、まさかの忍者養成学校だったのには驚いたけど、内容が酷すぎるんだよね）

再不斬に気配の消し方や、移動方法についてお墨付きを貰ったときに、仕事場の探索をしたが、そこは木の葉で言うアカデミーだった。ただし、内容は如何にして相手を拘束、若しくは殺害するかと言つた内容ばかりで、他にもそれに付随する授業ばかりだったが……。

この探索の時間については、仕事を水分身にて替わりに行つていくことで稼いでいた。

（溜め息しか出ないけど、あの内容に比べたら、再不斬さんの指導は遥かに優しいと言わざるを得ないなあ。体術に関してだけは、ずたぼろだけど）

体術時に骨折などもしたことはある。しかし、自分自身に限つての

話だが、医療忍術を使い、小一時間ほどあれば、骨折くらい治してしまえるレベルにはなっていた。

(そろそろ寝るかな)

そう思い、小屋へと向かおうとしたときに、誰かがこちらの方へと向かってきてるのが分かった。

(再不斬さんかな？ でも里の方からではなく外の方から？)

少し様子を見るために、気配を消して様子を見てみることにした。一応、結界の張ってあるこの池の周囲から出ないようにして、極力遠目から観察することに徹する。

(あの人もまだ霧隠れの里に居たのか)

道を堂々と歩いているのは、大きな包みを背負った干柿鬼鮫その人だった。

(あまりお近づきにはなりたくない人物だな。今の状態で勝てる気全くないし、それ以前に逃げ切れる気がしない。見付かったらアウトだろうなあ……)

そんな他人事思考で通りすぎるの見送り、完全に関知範囲から抜けたのを確認してから小屋へと戻った。

(この小屋から外への道って、ほぼ使われてないはずなのに、なんで通ってきたんだ？ 偶々か？)

一度何処に通っているのか確認してみたが、途中から獣道へと変わってしまったっており、その獣道も最終的に無くなり、ただの山の中——というものだった。

なので知っていなければ、あの道が霧隠れの里に繋がっているなど、誰も思いもしないだろう。なぜ、こんな道を作っているのか不思議だが、それよりも、その道の付近に小屋を造って住んでいる方がもつと不思議であった。

(なんで、里の方に住まなかったんだ？ それとも住めなかった？ 理由があったような気がするけど思い出せないな)

なんとか思い出そうとしたときに、虫の知らせというべきなのか、嫌な予感がしたため、気配を消して急いで小屋から離れた。

小屋が見えるギリギリの位置まで移動し、周囲を警戒していると、

里の方から十数名が一人を追って来ているのが見えてくる。

交戦しながら通っているためか、道沿いの木々を巻き込みながら移動していた。

その追われている1人というのが、先程通った干柿鬼鮫で、まるでわざと追ってくる人数を増やさせるためなのか、ゆつくりとした速度で移動していた。

(あれって刀に血とチャクラを吸わせるためかな？ 追ってきた人たちには、荷が重いと思うなあ、他の忍び刀持ってる人じゃないと……。 って、そうか、追ってきてる人たちは、捨て身でただの時間稼ぎか……)

戦闘はかなり一方的なものであったが、遠くから更なる気配が来たところで、鬼鮫は戦闘を中断した。

「来るのが遅いですねえ……。 それでは厄介そうな人が近づいてきたので、ここらで終わらせてもらいますよ」

そう言うと、鬼鮫は印を素早く組む。

すると、鬼鮫の足元から残っていた五名の忍びに、水で出来た鮫が飛来し、食い付かれるのが見てとれる。

鬼鮫は、その結果を確認する前に、その場を立ち去っており、そこらを見たときには既にいなかった。

追い付いてきた人物は、一度止まり五人の死体を確認すると、そのまま道の奥へと消え去って行く。

(嫌な予感を感じるもんだね。 まさか小屋が壊されるとは思わなかった)

先ほどの戦闘で、ものの見事に全壊した小屋がそこにはあった。しかも、全壊というより木っ端微塵と言っていいほど更地に近い状態だった。小屋のあった場所にはほぼ床しか残っていなかったのだから。

溜め息を吐きつつも、警戒を怠らず、水分身にて小屋に近付き何か残っていないか確認をしていると、剥がれた床の下に巻物を見付けた。

(もしかして!?)

他にもないか、床を全て剥がし確認してみたが、見付かったのはその巻物一つだけだった。それでも、今まで何も無いと思っていただけに、ひとつでも、それらしきものが見つけられたのだ。その喜びは大きかった。

（取り敢えず、安全そうな場所に移動しよう。この辺りだと他の忍びが来るかもしれないし）

以前にセーフハウスとして、再不斬に教えてもらった洞窟へと移動していく。家から離れることを優先したため、特に何も持つてはいない。

セーフハウスに無事到着し、白はそこで一晩過ごした。

6 巻物？

小屋が破壊されてから翌日。

身体に纏わりつくような感覚に目覚めると、周囲は明るい薄い霧に覆われていた。

この時、自分が不用心に寝ていたことに焦り、懐に手を入れて巻物の確認を行う。巻物自体は、ちゃんと懐に入っており、それを掴むことで白は安心できた。

(さて、わざわざあの小屋の床下にあつたくらいだから、それなりに大事なものはず……)

巻物を読む前に、隠蔽結界である札を使い、洞窟への入り口を隠す。そして、洞窟内へは遮音結界を貼った。本来なら、探知結界も貼っておきたいところだが、迂闊に外に出て見付かりたくはない。

あの戦いがあつて、昨日の今日なのだから、ここら一体まで探索の手が伸びていてもおかしくないからである。

(もう仕事には行けないな。これからの飯はどうするか……)

巻物を紐解きながら、これからのことについても考えていく。サバイバル技術については、簡単にはあるが、再不斬に教えてもらっているのも、数日は大丈夫かもしれない。しかし、主に獲物の狩り方や捌き方ばかりだったので、山菜や薬草の類いがさっぱりなのである。(食事が片寄るのはなあ……。つと、解けた。中身は何が書いてるかな?)

そこに書いてあるのは、雪一族について少し記入されており、氷遁の術について色々と記入はされていたが、血継限界についてはどこにも載っていないかった。

(やっぱりそんなに甘くはないか。取り敢えず、ここに載っている印の練習でもしますかね。……早く再不斬さん来ないかなあ。飯持つて……)

腹の虫の音を無視しながら、印を素早く組んでいく。両手に馴れたら、今度は片手と続けていき、印を完全に覚えたことを確認してから、ごく少量のチャクラを使い術を行使する。

(氷遁、氷牢の術)

目の前に、鳥籠程度の氷の固まりが出来たことを確認し、それを軽く叩いてみるが、意外と固いようだったので、近くの大きめの石を投擲してみる。

結果として、氷牢には傷ひとつ付くことはなかった。

(チャクラを纏わせた物だったらどうなるだろう？ 後は起爆札に対して、どれくらい持つかも確認したいな)

氷牢の術を解き、影響の無さそうな術については試していく。

そうこうしているうちに、霧が晴れていることに気付き、術の練習を一旦取り止めて、外の様子を確認する。

見た感じでは異常は見受けられなかった。だがだからと言って油断は出来ない。気配を消してゆっくりと移動しようとした時に、真上から声がかかった。

「何処に行く気だ？」

尋ねられた声に、一瞬ビクリと身体が硬直してしまう。しかし、それがいつも聞いている声だったため、振り返りながら返答した。

「いきなり気配を消して声をかけるなんて、人が悪いですよ再不斬さん」

「昨日のは災難だったな」

「全くですよ。気付くのが遅れていたら、死亡確定だったかもしれない。とところで何か食べ物持ってませんか？ 朝からなにも食べてないので腹が減ってしまって、今から食糧を調達しようと思ってたんです」

「兵糧丸ならあるが、飯はないな」

「この際文句言わないので、それください」

「かなり凶々しいな……。まあいい、ほらよ」

再不斬は、懐から小さな袋を取り出すと、その中から一粒取りだし、こちらへと放ってきた。

放られたそれをキャッチし、口のなかに入れる。使用している材料のせいなのか、あまり美味しくなかった。むしろ不味いと言えるだろう。

「好き好んでは食べたくないですね」

「それでも、栄養とチャクラ回復にはうってつけだ。後、何度も言うが、俺が敵だった時のことを考えろ」

「再不斬さんはそんなことしませんよ」

「……まあいい、それより今後どうする気だ？」

「行ってみたいところならあります。その前に完成させたい術もあるんですが……。そうだ！ この巻物をあの小屋から見付けたんですけど、氷遁以外に何か書かれてないか見てもらえませんか？」

再不斬へと巻物を手渡して、中身を確認してもらおうこと暫し、再不斬は口を開いた。

「何も書かれていないぞ」

「えっ？」

再不斬の横に回り込み巻物の中身を見てみるが、そこにはきちんと文字が羅列してあった。その後すぐに、再不斬の顔を見てみるが、冗談で言っているようには見えない。

(もしかして一族の者しか見れないとか？)

「私の目には見えるんですけど、再不斬さんには見えないんですね……」

「はつきり落胆したような声で言われるとムカつくな」

「かなり期待していたので……」

白はガツカリと肩を落とすし落ち込む。この巻物からでは、簡単な術しか使用することはできないからだ。それでも、血継限界である氷遁の術が使えるだけマシなのだが、それでも、落胆は隠せない。

「氷遁以外で何が知りたかったんだ？」

「血継限界……その秘術についてです」

「……この里で、その言葉を出さない方が身のためだ」

「分かりました。知りたいのは、それについての術なんです。ひとつは知ってはいても、印の組み方も分からなければチャクラの必要量も分かりません。この巻物には氷遁ばかりしか書かれてないので、暗号か何かで書かれてないかなあと思ってたんですけどね」

「知ってるのに知らないとはな……。その巻物に解印はあるか？」

「解印？」

「大体こんな形のものだ」

再不斬は地面に、棒を使って模様を描いていく。それを見ながら、巻物を広げて似たようなものがないかを探していくと、巻物の最後のところに、形は違うが複雑な模様を記入してあった。

「形は違いますけどありますね」

「そこに自分の血を付けてみる」

「？ はい」

再不斬の言っていることの意味が分からないまま、親指に歯で傷を付け、血を解印と思わしきものの中央へと押し当てる。すると、それ以降空白だった部分に文字が浮かんできた。

（こういうカラクリもあるのか）

「出たみたいだな」

「はい。これで完成させることが出来るかもしれません」

いましがた巻物に浮かんだ文字を確認していく。そこには、思っていた通りの術と、他にも幾つか他の術について書かれていた。

それらの術をゆつくりと、両手を使い印を組んでいると、再不斬から声をかけられる。

「もう一度確認するが、白が行ってみたいと言うのはどこだ？」

「火の国に行ってみたいですね」

「理由はなんだ？」

「ここよりは平和そうなので……。それに、さすがにあの小屋が破壊されたところに住んでた子供が、当然のように生きてたら疑う人が多そうですからね」

こちらの返答に再不斬は少し考え込んでいたが、結論が出たのか頷くと言葉を続ける。

「では、霧隠れの里を出るぞ」

「あ、はい」

巻物を読んでいたため、反応が遅れてしまった。しかし、内容は聞いており、返事も既に決まっていたのである。

巻物を片付けて懐に仕舞いこみ、身体の柔軟を行う。再不斬の急な

提案には慣れたもので、この発言が出たということから、すぐに、発
つと言うことが分かった。

「準備はいつでもいいです」

「その前に念を入れて変化の術をしておけ」

「変化の術ですか……。んゝ（入り口のおっさんでいいか。変化の
術）」

変化の術にて里の入口に居た男へと変化する。変化したあとに、自
分の身形を確認しおかしいところがないかチェックを行う。

「……まあいい……。少し急ぐぞ。ついてこい」

「はい」

こうして二人はその日、霧隠れの里から出ていくこととなった。

7 里抜け？

霧がくれの里から離れる際に、一般的な街道に出るまではかなりの速度で移動を行った。その理由は、後で分かるのだが、この時はついていくのが精一杯といったところで、理由を聞くところでは無かったのが実状だった。

ある程度里から離れたところで、再不斬は一旦立ち止まり、白の様子を見ている。

「はあ……はあ……速すぎます。はあ……はあ……」

「基本的な体力がないな」

白の方は、息も絶え絶えだと言うのに、再不斬は全く息を乱してすらいなかった。深呼吸を繰り返して息を整えたところで、無駄だと分かっただけでも反論する。

「変化の状態を維持しながら、全力で数時間も山の中を走らせるとか……、普通有り得ないですか!?!」

「大きな声を出すな。……大丈夫のようだな。もう少し行けば、店があるからそこで休憩だ」

再不斬は道の先を見つめながら、白へと答える。

「まだ、先なんですか……。ところでなんで走らないといけなかったんですか？（これって抜け忍になるってことだよな？ 理由なんだろう？）」

「後で教えてやる。ここからは歩きで街道を進むぞ」

「やつと街道を歩けるんですね……。このまま走り続けて、すぐ食べろって言われたら、たぶん吐いてましたよ」

「その時は俺だけで食べるから見ておけ」

「もちろん食べますよ！」

再不斬は、白の言葉を無視して、山の中を歩いていく。その後をついていくこと数分後。大分先にはあるが、街道らしきものが見えてきた。更に進んでいくと、人が疎らに通っていることから、街道であることがわかる。

再不斬は、もう少しで街道といったところで立ち止まると、懐から

巻物を取り出し始めた。

「そのままでは怪しまれる。ちよつと待つてろ」

そう言つて、巻物を地面へと広げて印を組む。すると、巻物の上に煙が沸き出てきた。そして、煙が晴れた後には、笠と背負い籠が現れる。

再不斬は出てきた品を手にとつた。

「これをつけておけ。さすがにこのままでは目立つからな」

「確かに手ぶらだと怪しまれますね」

白は手渡された笠を被り、籠を背負う。見た目は旅商人……といった出で立ちになつた。

再不斬の方はというと、背負っていた刀を外し、巻物の上に置いて印を組み、逆に巻物の中に仕舞つてしまつた。その仕舞つた巻物を服の中に片付けてから、笠を被り籠を背負うと街道へ歩んでいく。

街道は、特に広くもなく整備したような後は無かつたが、いままで通つた人が多かつたのか、一応道としての形はとれていた。

その街道には、人がまばらに通行していた。そのため、丁度途切れるタイミングに、木の陰から街道入り込み、さも最初から歩いていたかのように装う。

「少しつて言うのはどれくらいですか？」

「一時間もかからないだろう」

「それつて少しつて言いませんよ……」

「さつきまで比べれば少しだろう？」

「確かにそうかもしれないけど……」

少しと云う言葉に、釈然としないものを感じながらも、全力疾走よりはマシかと思ひ直し、先程まで満足に見ることの出来なかつた周りの風景を、楽しみながら歩いていく。

季節的にも、山の色合いは綺麗なものだった。

「あまり周りをきよろきよろと見るな」

「初めて里の外に出たんで、色々と興味津々なんですよ」

「特に珍しいもんなんて無いだろうが」

再不斬は少し怒りを含んだ言い方で、白を窘める。白の行動は、周

困の者に怪しんでくださいと言っているようなものだ。せつかく怪しまれないようにと、巻物から品物を出したのにも関わらず、そのような事をされれば多少の怒りを覚えるだろう。

「初めての場所って、なんか見て回りたくありませんか？」

「事前の下調べくらいだな」

「完全に考え方が職業病ですね」

「そんなものだ」

季節は秋と言うこともあり、山は紅葉としては十分に見応えのあるものだった。今までが、生きるために生活していただけに、こんなことを考える余裕が生まれてるのかと、内心では少し驚いていた。特に前の人生では、紅葉を観察するなど考えもしなかったのだから仕方ないのかもしれない。

三十分程度だろうか……街道を歩いていると、街道の横にポツンと団子屋と思わしき小屋が見えてきた。

そう思えたのは、小屋には軒下に長椅子が設置しており、小屋の横にも、団子の旗を立ててあったからである。

「あそこで休憩ですか？」

「そうだ」

「かなりお腹空いてたんですよね」

白はお腹を擦りながら、店の方を見る。昨日からまともになにも食べていないので、お腹が空くのも当然だった。

「白は金を持つてるのか？」

「そこはもちろん再不斬さんに期待してます！」

「……そうだろうとは思ったがな」

店はやはり狭く、軒先に置いてある長椅子が二つだけであり、片方には先客が居たため、もう片方へと再不斬と共に座る。

「団子三串と茶にするが、お前はとうする？」

「団子五串と茶でお願いします」

「よく食うな」

「まともに食べてないですからね」

店員に注文をする。団子がくるまで暇だったので、今後の予定を再

不斬に確認することにした。

「いまどこに向かつてるんですか？」

「海だな」

「海と言うことは船にでも乗るんですか？」

「海を知ってるのか？」

「……海くらいは分かりますよ（この年だと知らないのかも？ 里出たこと無いつて言ってしまったしなあ）」

「何か隠してるな？」

白が答えるまでに空けた微妙な間に、再不斬は不審に感じて問い質してくる。

「秘密の多い年頃なんです」

「……まあいい、どちらにしてもここは島国だからな。他国に行くには船を使わないと行けん」

「そうでしたか（ナルトの世界の地図なんて覚えてないしなあ。全部、陸続きだと思ってたよ）」

話しているうちに、団子とお茶が運ばれてきた。運ばれてきた団子は三色団子で、黄、赤、緑と並んでいる。

（やっぱり団子にお茶は合うなあ）

団子と一緒に歩いてきていたお茶は、ほうじ茶のような味がしており、団子とよくあつたものだった。それに加えて、景色も紅葉を迎えており、風流だなと感じてしまう。

お腹も空いていたこともあり、あつという間に皿の上から、団子がなくなっていく。

再不斬は、呆れるようにしてこちらを見ていたが、朝からまともに食べてない身としては、そんなことを気にしていられなかった。

団子を食べ終わり、お茶のお代わりをしてから、ゆつくりとお茶を飲んでいく。その姿を見て、再不斬がポツリと洩らす。

「お前はじじいか」

「聞こえていますよ」

「聞こえるように言ったからな」

「ひどいですね。こんな若者に向かつて」

「明らかに若者ではないだろ」

何かを探るような目で、再不斬は白を見つめてきた。言動が明らかに子供のものではない。これまでもそうだったが、ここにきて、更にその考えは大きくなっていった。

「見た目は大人、心は子供。間をとれば若者かなと」

「変な理屈をこねるな。食べ終わったんなら行くぞ。夕方くらいには次の街に着いておきたい」

「了解です」

団子屋の支払いを再不斬に任せ、軽く身体を解してから籠を背負い直す。

日は真上から既に傾いてきており、恐らくいまが昼過ぎであることが分かる。先程の話から、夕方くらいと言うことは、歩きで後四〇五時間はかかるとみておいた方がいいだろう。

支払いを済ませた再不斬が出てきたところで、また街道を歩き始める。

人が近くに居ないことを確認し、確認のために聞いておくことにした。

「今更なんですけど、再不斬さんも変化の術を使用してますよね？ 名前はなんてお呼びすればいいですか？」

「そうだな。空とでも呼んでおけ」

再不斬は、上を見上げると、即答してきた。考えるのが面倒なために、思いついたものを言ったのだろう。名前の付け方から間違いなかった。

「分かりやすいですね」

「まあな」

その後は、白はたまに再不斬と雑談を交えつつ次の街へと向かうのだった。

8 街中？

団子屋での予想通り、四時間ほどで街まで到着することが出来た。街へと到着した時には辺りは夕方になっており、もうしばらくすれば、薄暗くなってくる時間だ。

再不斬は街に到着するなり、立ち止まることなく進んでいく。迷いなく進んでいる姿を見るに、以前にも任務か何かで来たことがあるのだろう。

その後を追いながらも、白の顔は前を向いたまま、街中へと視線だけを向ける。

一応説明を受けてはいないが、再不斬が抜け忍の可能性が高いので、辺りを警戒しておいて損はないからだ。

未だに探知系は完全に修得には至っていないのが辛いところではあるが、しないよりマシと思うことにしているのが現状である。

周囲を見渡してはいるが、ここは霧がぐれの里のように、忍びが彷徨っているわけではなく、一般人しか見当たらない。

もしかしたら自分達と同じように、変化の術にて変わっているのかもしれないので、油断は出来ないが、この街は見るからに平和そうなところである。

今通っている大通りには、色々な店があり、人通りも結構な数がある。その大通りを抜けて、小脇の道へと入り、少し進んだところにある建物へと再不斬は入っていった。

(特に表には何も書かれてないけど、ここが今日の宿なのかな?)

再不斬に続くようにして、戸をくぐり抜けると、戸の横に立っていた再不斬がすぐに戸を閉める。

「もつと行動を早くしろ」

「それなら事前に説明してくださいよ」

「後、警戒し過ぎだ。見なくても近くにいたら気付かれるぞ」

再不斬から見ると、白の警戒の仕方は駄目だったようで、注意を受けた。余計なことをしたかと思いつつも、言い訳をする。

「気配を消すのはいいんですけど、気配を探るのはどうもコツが掴み

にくいんです」

「気配をいきなり消すのも止めておけ。探るのもあまりここではするな」

「理由をお聞きしてもいいですか？」

「この国を出たら教えてやる」

「……分かりました」

笠と背負っていた籠を下ろして、一息つく。入った建物は、一階建ての平屋で、建物の中には家具も最小限しかないが、炊事場があるだけ、前に住んでいた小屋よりも遥かに良いところだった。

炊事場には一通りの道具が揃っており、材料さえあれば食事を作ることができるのが分かる。

(久しぶりに、まともな食事を食べたいな)

霧隠れの里では、変化の術をしてもバレる恐れがあったため、外食もまともにできなかつた。

「今日は外食ですか？」

「俺が弁当を買ってくる。もう変化は解いていいぞ」

「弁当ですか……」

「不満なのか？」

少し残念そうな声を出す白に、再不斬は問いただしてきた。金を出し、下手な移動をされては困るのに加えて、食べ物にまで不満を言うては当然だろう。

「温かいものが食べたいなあ」と

「贅沢を言うな」

「ですよ」

「お前が作れるというのなら、話は違ったかもしれないがな」

「っ!? 作れますよ!」

再不斬の言葉に、食いつくようにして反応する。多少の自炊スキルくらいはある。しかし、再不斬がこの提案をするまで完全に自分で作るという事を忘れていたのだった。

「……作れるのか？」

「任せてください!!」

「……まあいい、やってみて駄目なら俺だけ外で食べればいいだけだ」
全く信用していない事を如実に表し、自らは外で食べる事を事前に
言ってきた。

今まで作ったところを見たこともないし、里に居たときも弁当で
あったことを考えれば、再不斬の言葉も頷ける。

「全く信用してませんね」

「俺はお前が料理をしてるところを見たことがないから当然だな」

「その認識を覆してあげますよ。と言うことでお金をください」

「……現金なやつだ。商店街の場所は分かるか？」

「先程の大通りに幾つか店があったので、そこで買ってきます」

「好きにしろ」

再不斬は、懐から小さめの袋を取り出すと、こちらへと投げ渡し、自
らは外から見えないような位置へと移動すると、巻物を取りだして武
器などの点検を始めた。

「では行ってきます」

一声かけてから外へと出る。

変化を解いているので、元の背の高さになっており、目線の高さが
少しの間慣れなかった。むしろ、変化の術を使用したときの目線の高
さの方が、前の人生の時と一緒に違和感を感じなかったくらい
だ。

夕食の材料を購入するべく、大通りへと進んでいく。

辺りはだいぶ暗くなってきているため、少し急ぎ目で向かっている
と、大通りに出たところで誰かとぶつかりかけた。

(おっと。あぶない)

ぶつかりかけた相手を見上げながら、目的の店へと進んでいく。

(さっきの人どこかでみたことあったような……。まあいいや、それ
よりも夕食だ！)

後で思い出すことになるが、この時もし顔を思い出して警戒してい
たらと思うと、ぞっとするのはまた別の話である。

大通りの店にて、一応材料の値段を気にしつつ購入していく。預け
られた袋の中には、小さいながらも結構な額が入っていたが、これか

らの旅程のことを考えると節約しておいて損はないし、元々再不斬のお金であるので、使いすぎはよくないと考えた為だ。

一通りの買い物済ませて帰路につく。荷物は三歳児としては結構な量になってしまっており、端から見たら一生懸命両手で支えているかのようだが、実際は地面に袋がついてしまわないようにしているだけだったりする。

宿に辿り着き、炊事場にて水を出す。その水を使って水分身を行い、更に変化の術にて大人となって調理を始めた。

(分身の術は楽でいいなあ)

一人は材料を切りつつ、もう一人が火を着けてるなどの準備をしていく。

材料を切り終わったら、鍋の中に放り込み、調味料で味を整えるだけの簡単な料理だが、こちらの世界に来てからの初のごちそうでもある。

値段も自分で作ればそれほどかからないし、他にも食べたいものがあるが、それほど料理に精通していたわけではないので、自作できるものは限られてくる。

「なかなかいい匂いだな」

お玉で味見をしつつ振り返ると、すぐ後ろに再不斬が立って鍋の中を覗いていた。

「気配を消して後ろに立つのは勘弁してください」

「それくらい把握しろ。それよりも、それはなんだ？」

再不斬の反応から、見たことがないのだろうかと不思議に思う。材料自体はその辺りの店に売ってあるので、料理として存在しているもおかしくないはずである。

「すぎ焼きって知りませんか？」

「初めて聞く料理だな」

「結構お手軽な料理なんですけど」

「まあ旨ければなんでもいい。いつ出来るんだ？」

「もう少しで完成します。個人的にですけど旨いのは保証しますよ。椅子にでもかけて待っててください」

「味覚が一緒であるといいがな」

再不斬は、一言余計なことを言いつつも、大人しく椅子へと座った。すき焼きの匂いだけでも十分に美味しいと思える物だったのだろう。

(素直じゃないなあ)

水分身の一人に、テーブルの上の準備をさせて本体は鍋の中を確認する。

(そろそろいいかな?)

出来上がりを持ってテーブルへと運び、鍋の蓋をとる。蓋を取った瞬間、再不斬がサツと中身をとっていった。

「(早い……) どうですか?」

「……悪くないな」

そう言いつつも、箸を素早く動かし口へと持っていく。せっかく準備した皿を経由せず、鍋から直接口へと持っていくその姿に、行儀が悪いと注意しようかと思ったが、予想以上に旨かったのか、微妙に笑っているのを見て諦めた。

(美味しいから笑顔になるのは分かるけど、その微妙な笑顔は気持ち悪いです)

こちらは、皿に取り分けて食べていく。二人しかいないなかで、片方が既に皿を使っていない時点で意味がないような気がするが、気にしないよう食べるのだった。

9 方針？

すき焼きを食べ終わり、片付けを水分身に任せて今後のことを確認するため再不斬に声をかけた。

「これから、どうするんですか？」

「次の街で船に乗って波の国に渡り、そこから陸路で火の国に入る」

「仕事ですか？」

「いや。辞めてきた」

「では、今はフリーなんですね（抜け忍確定つと）」

「……そういうことだな」

再不斬は何かを少し考えていたが、肯定した。

「波の国ってどんなところですか？」

「質問ばかりだな」

白の言葉に再不斬は少し呆れているようだ。

「気になることは確認したくはないですか？」

「知らなくてもいいことはある」

「波の国の情報もですか？」

「そうは言わない。しかし、俺もそこまで波の国について知っている

わけではないからな」

「知ってる範囲で教えてください（波の国って、どこかで聞いたことあるような気がするけど、思い出せないんだよね……）」

再不斬は、少し考え込むような動作をしてから口を開いた。

「基本的に隠れ里が無い国で、金を持つてるやつが幅を利かせているところ……、というくらいしか知らんな」

「隠れ里が無いのなら、お金を稼ぐには良さそうなところですね」

「仕事があればな」

「なぜ私を連れていこうと思ったんですか？」

「ただの気まぐれだ」

再不斬は言い終わると、話は終わりとばかりに椅子から立ちあがり、奥に設置してあるベッドへと横になった。

こちらとしても、特にこれ以上聞いても仕方ないと思い、巻物を懐

から取りだしてテーブル上に拡げて印を組む練習を行う。

（この移動方法って、普通の鏡でも出来るのかな？出来るならかなり応用の幅が広がるんだけど……。氷遁だと解ける可能性があるし。それを考えると、四代目火影の飛雷針の術って媒体がクナイとかだから便利だよなあ）

そんなことを考えつつ、ふと今日大通りに出る際に、ぶつかりかけた人物のことを思い出していた。

（あの人ってマダラっぽい顔してたなあ。……ってマダラ本人だったら、あそこで警戒心出した時点でアウトだったかも!? て言うかなんでこんなところにいるんだ？ もしかして、鬼鮫の勧誘？ 取り敢えず気付かれなくて良かった……）

もし気付かれていたらと冷や汗をかきつつ、自分の出会いの不運と、自分が気付かなかった幸運に溜め息をもらす。

「なに溜め息吐いてやがる」

「自分に運が有るのか、それとも無いのか、分からないと思っただけです」

「生きてるんだから、そんなこと気にするだけ無駄だ。死ぬときは死ぬし、生きるときは生きる、それだけだ」

「単純な考え方ですね」

「お前が複雑に考えすぎだ」

「再不斬さんのその考え方は羨ましい限りです」

「……馬鹿にしてないか？」

「全く、これっぽっちもしてませんよ」

印を組む手を止めて、右手の指で丸を作り右目を閉じてみせ、それを再不斬に見せ付ける。

「そういうことをすると、逆に思われることを知るべきだな」

再不斬が手を素早く動かすのが見え、そのすぐ後には、白の上から水が滝のように落ちてきた。

「これはひどくないですか？」

「頭を冷やすには丁度いいだろう？」

びしょ濡れになった服を晒しながら、言い返す白に、反省したか確

認を込めた言い方で、再不斬は返してくる。

「代わりの服なんて持って無いんですけど……」

「そういやそうだな」

「なんか適当に服ありませんか？」

「その家具に入ってる分しかないな」

指差された家具に近付き引出しを開けてみると、確かに服は入っていた。ひとつひとつ見てみるが、どれも大人物ばかりであり、ひとつたりとも子供用の服は入っていない。ここでも溜め息を吐きつつも、服が乾くまでダブダブでもいいかと思ひ直す。

「明日すぐに出発ですか？」

「そのつもりだ。日の出とともに出ようと思っているから、白も早く寝ておけよ」

「出来れば幾つか代わりの服が欲しいんですけど」

「……次の港街で買ってやる」

言われるまで気にしていなかったのか、こちらの服が実際には、ところどころ穴が開いていたり、かなりぼろい見掛けなのに気付いたようで、少し哀れめいた目でこちらを見ながら言ってきた。

もともと住んでいた小屋にも、後二つほど代わりの服はあったが、何れも今着ているものと大差なく、本当にただの着替え以上の価値はなかった。

タオルで身体を拭き、しまつてあつた服へと着がえる。大人の上着だけで、足元まで簡単に届いてしまうので、腰ひもにて引きづらないように捲り上げて止めた。

（こんな時、幼い身体が恨めしいな。と言うか、普通はこの歳でこんな旅はしないだろうけど……）

自分の身体の小ささに、更に溜め息を吐いて脱いだ服を乾かすために、かまどの近くに椅子を持っていき、そこに濡れた服を掛けておく。かまどには、料理を作った際の消えかけではあつたが、その残り火があるので、その熱で乾くことに期待して、印を組む練習の続きをなるべくテーブルへと戻った。

濡れていない椅子に座り直し印を組んでいると、再不斬から声をか

けられる。

「白」

「なんですか？」

「そこまで熱心に忍術を覚える理由はなんだ？」

「もちろん生き残るためですよ」

「生き残るためか……。別にそれがなくても生きていけるとは思わない」

再不斬は、何かを探るような目で白を見つめている。初めてあったときからだが、何かを知っているような動きが目立ってきたのだ。不審に思わない方がおかしい。

「無いよりあった方がいいのは間違いないです。これから先何が起くるか分かりません。事件に巻き込まれて死ぬかもしれないので、自衛目的って言うのが一番です（普通の一般人だったら巻き込まれた時点で死ぬ可能性大だし）」

「それがあるからこそ、巻き込まれるとは思わないのか？」

「そういう考え方もありますけど、もう今更ですね。知らなければ死にかけたわけですし、ここまでできたらいけるとここまでいきます」

「納得してるならいいがな……」

再不斬の言う通り、一般人でいけば普通の生活が送れたかもしれないが、この世界に来てからのことを考えるに、里から離れた位置に住んでいて、親は働かずに酒浸りになっており、毎日暴力漬け、そのうえ通りがかった戦闘の余波で、住んでいた小屋も吹き飛んだことを思えば、あの時点でチャクラなどについて学んでいなければ、死んでいたのはほぼ間違いないだろう。

「俺は寝るから、白が寝るときに火は消しておけよ」

「もちろん分かっていますよ」

再不斬の方へと光が届かぬように、天井から吊るされた器具に暗幕を掛けて、再度印を組む練習を行う。

（先ずは血継限界の印の練習、変化の術の完成、探知忍術、医療忍術……やること上げ始めたらきりがないなあ……。学校に入ればよかったかもしれないけど、霧がぐれの里の学校は危険すぎるし。現状

に満足するしかないかな)

再不斬の方を窺うと、起きているのか、寝ているのか目を閉じて横になってる。

小さな窓はと歩みより、そこからそとを見あげると、大きな満月が見えた。

(もうこんな時間か。今日のところは寝よう)

かまどの中に火が残っていないか確認し、残っているものは砕いて奥へと押し入れていく。

服については、未だに生乾きなので、かまど自体に張り付かせる。多分燃えたりはしないだろう。

そして、いざ寝ようというところで気が付いた。

(ベッドがひとつしかない……)

引出し内にあつた服を取り出して布団代わりにする。その際に、寝心地が良くなるよう、かなりふかふかに服を敷き詰めてからその上に横になり、更にその上に服を重ねていく。見た目は悪いが、横になっている本人はとても満足そうだ。

(これをまともと言っていいかわからないけど、柔らかいところで寝るのは気持ちいいな)

このあとあっさりと、睡魔に負けて寝てしまうのだった。

10 港町？

いつもの習慣が根付いてしまっているのか、夜明け前に目が覚めた。

朝食を作るべく炊事場に向かう。昨日のすき焼きの残りを確認し、材料を付け足してからかまどに火を入れる。

かまどに張り付けてあった服は少し湿ってはいたが、着れなくはない状態にまでなっていた。これならば、着ているうちに乾くだろう。

鍋を再度暖めている間に、米を洗って炊いておく。昨日は時間的に、すぐに夕食が食べたかったので炊かなかったが、元？日本人からすれば、米は主食から外せないものだ。

ひと通りの準備が済み、後は待つだけとなったところで、後ろを振り返るといつの間にか再不斬が既に椅子に座っていた。

「おはようございます(再不斬さんの気配に、全く気付けないのも問題だな)」

「ああ。朝は昨日のやつか？」

「それにご飯を炊いています。結構合いますよ」

「確かに合いそうだな」

「ご飯が炊けるまで少しかかるんですが、あれは片付けた方がいいですか？」

白が指差したのは、昨日作成した白用ベッドのことである。ふかふかにするために、服を幾つもバラバラにして重ねており、片付けようとする結構時間が掛かってしまいそうだった。

「一応片付けておけ。引出しに入れる程度でいい」

「分かりました。適当に入れておきます」

入れる程度で良いと言われたので、気にせず引出しに入るくらいに分けて入れていく。恐らくは、ここに戻って来ることはないだろう。そう思い入れていると、再不斬から一言――

「本当に適当だな」

再不斬本人が、入れるだけでいいと言ったので、言われた言葉を無視して作業を続ける。適当などと文句を言われても、相手をする気は

なかった。

作業自体は入れるだけなのですぐに終わり、再度炊事場へと向かった。すき焼きの方は暖めが完了していたので、テーブルへと持つていくと、待つてましたとばかりに、再不斬が蓋を開けて食べようとしたので、急いで止める。

「ちよつと待つてください！」

「何故だ？」

「まだ完成じゃないんですよ！」

「俺はこれだけでいい」

そう言うのと、再度蓋を開ける手に力を込めてきたので、慌てて言葉を被せる。

「待つてもつと美味しくなりますよ！」

その言葉に再不斬は、ピタツと止まりこちらを見てきた。美味しくなると言う言葉のためだろう。

「いいだろう」

(どんだけハマってるんだ……)

鍋の蓋から手を離し、ご飯の状態を確認すると、ご飯は炊けていた。本来ならもう少し時間がほしいところではあるが、あの様子では、それほど待つてはくれないだろうと思ひ、むらす手間を省いてどんぶりにご飯を盛り付けていく。

どんぶりをテーブルまで持つていき、すき焼きを上からかけて再不斬の前に置いた。

「これで完成ですよ。すき焼き丼です」

「あまり変わったように見えないな」

そう言いつつも、すぐさまどんぶりを手に取り、口へと入れていく。それを見てからこちらにも、どんぶりに同じようにのせて食べた。

(やつぱり、米だよな)

感慨深げに食べていると、目の前にどんぶりが突き出された。その突き出された方を見ると、再不斬がこちらを見つめているのが分かる。

「おかわりだ」

自分でよそえばいいのにと、一瞬思ったが、養って貰っている状況で言えるはずもなく、どんぶりを受け取り、ご飯をよそって再不斬へと手渡す。

「上にのせる量は好きにしてください」

再不斬はその言葉に、すぐさまお玉でどんぶりに大盛りで盛り付け食べ始めた。この調子では、次もおかわりしそうだと思い、ご飯の入った鍋をテーブルまで持ってきて、食事を再開した。

(それにしても、思ったより食べきれないな)

どんぶり一杯で胃が限界を伝えてきていた。前世であれば、まだまだ食べれるところである。

ひと息ついて休んでいると、再不斬も食べ終わったようで、その顔は満足そうだった。鍋の中を見ると、全て無くなっており、ご飯だけはさすがに食べきれなかったのか、残っていた。

「残ったご飯は握り飯にして持っていきますね」

「そうだな」

若干上の空で答えた再不斬へと一応確認しておく。

「かなり食べてましたが、大丈夫ですか？」

「たまにはいいだろう」

(抜け忍なのに、なぜこんなに余裕そうなんだ?)

手早く片付けと握り飯を作り、出発の準備を整える。外は既に明るくなってきたており、予定よりも少し遅れているようだった。

「お待たせしました」

再不斬と共に変化の術を使用し、笠を被って籠を背負い町を後にする。

未だに早朝ということもあり、出歩く人は少かったが、同じような考えの人もいるのか、街道を同じ方向へと歩いている人が数名見受けられた。

「みんな同じ考えなんですかね」

「この時間に出なければ、途中で野宿だからな」

「と言うことは、ほぼ一日歩きなんですね」

「そうなるな」

その言葉通り、途中にあった店に寄り休憩と食事をしつつ、夕方近くになってそれを感じた。

「潮の香りがしてきましたね。港町は近いですか？」

「もうすぐだ」

白は自分の発言した内容に気付かず、港町がもうすぐという言葉に喜んでいようだったが、再不斬には逆に怪しまれていた。

港町へと入ると、奥の方に大型の木造船が幾つか見えた。あれで移動するのだろうか。

乱立する建物は、石で出来ているようで、木造建築物ばかり見てきた白には真新しく感じた。

ここでも再不斬は迷わずに進み、ある建物へと入っていく。そこには、きちんと看板が設置しており、簡易に《渡し舟》とだけ書かれていた。

ここで、渡航のための券を購入するのだろうか。そう思い中に入ると、店員の言葉が聞こえてきた。

「ですから今いる大型船は、最近海賊や天候の関係を想定して造られているので、料金が高くなっているのです。一般の船であれば、後一週間お待ちいただければ到着します。出発は更に遅いでしょうが、こちらの方がお安いですよ」

「早めに出たい。海賊が来る可能性があるということなら、護衛はどういう扱いになる？」

「それは一時的なものを見て間違いないですね？」

「そうだな」

「それでも、安くできて五割、海賊討伐によつては褒賞金を出します」

「それでいい」

「でしたら、真向かいにある派遣会社に、この札を持って行ってください」

店員から黄色の札をなにも言わずに貰い受け、すぐさま踵を返すと、店を出て、真向かいにある派遣会社へと入って行ってしまった。

入って数分後、再不斬が出てきた。

「白。お前も来い」

そう言つて再度中へと入っていく。護衛関係なので、もしかしたらある程度の実力を見せろということかな。と思つてみると、案の定会社の一室にて模擬戦を行うことになった。

始めに自分から行うということになり、三人を纏めての組み手？となった。相手は武器ありで、こちらは無しの状態である。

(普通だったららひどいハンデ戦だな)

審判と思わしき人物からの、突然の開始の合図に三人の内二人が一気に詰め寄つてきたが、特に慌てることなく、その二人間を抜ける際に、手刀を首筋に入れて気絶させ、残りのひとりへと詰め寄る。

いきなりの展開に、ポケットとしていたが、すぐさま切り替えたように、木刀を正眼に構え直していた。

その行動は、一般人としては早かつたのだろうが、こちらにとつては余りにも遅かつたため、木刀を振ろうとする前に、木刀自身を片手で掴み取り、もう片方の手を相手の首へと持つていく。

「これでいいですか師匠？」

「まあまあだな」

師匠とわざと言つたのは、無駄に再不斬の試合を行わせないためである。相手が素人では、特に学ぶべきものがないのは分かりきつていゝる。再不斬も師匠と言われて、なにも言わなかつたところからも、面倒が回避できるならいいかと思つていたに違いない。

「実力は見せたと思うが？」

「十分だ。この札を持っておいでくれ。出航は明日の昼からになる。あいにくここ会社の部屋は、従業員で埋まっているので、宿は別にとつてくれ。その際に、こここの会社の名前と、先ほどの札を見せれば安くなるはずだ」

「集合は昼でいいんだな？」

「ああ。だからと言つてギリギリは止めてくれ。出航の少し前までに来てもらえれば問題ない」

「分かつた」

その後、宿の場所を確認してから、夕食を取つた後に宿へと向かつた。

港町と言うだけあって、宿というよりホテルのような大きさであり。かなりの人数が泊まれるであろうことは容易に想像がつく。

(なんかすっごい違和感あるなあ)

まるで、前世に戻ってきたような感覚で、本日泊まることになる宿へと入っていった。

11 血継限界？

宿の中は、特に色々と飾ってあるわけではなく、ごくシンプルなので、カウンターと広間、それから上へと上がる階段くらいしか無かった。壁は白で統一されており、特に絵が貼られていたりなどはおらず、天井からランプのようなものが垂れ下がっているだけだった。

宿の対応は再不斬に任せて、宿内を確認しておく。無いとは思いますが、もし奇襲などを受けた際に、いつでも逃げる道を確保するためである。

「おい、いくぞ」

再不斬は受付から鍵を貰ったようで、それを指にかけて、階段を上がっていった。こちらと同じように階段を上がり再不斬の後についていく。

二階も一階と同じく、シンプルな造りで、通路の片側には窓。反対側が部屋となっていた。再不斬は一番奥の部屋の前で止まると、こちらに振り返り鍵を渡してくる。

「ここがお前の部屋だ」

「空さんは別の部屋ですか？」

「ああ、俺は隣だな。元々ここには一人部屋しかないらしい」

「なるほど(端から見たら、大の大人二人が同室とか、変な目で見られたら嫌だしね)」

「この世界にそう言った考え方があるのか不明であったが、白としては気になってしまう。」

「明日は、店が開いたら出航前に買っておけよ」

「何をですか？」

再不斬は、お前は何を言ってるんだと言わんばかりの顔を向けてきた。その顔は完全に呆れている。

(何か忘れてるかな？ 明日は船に乗るから、食糧とか船酔い止めの

薬とか？)

「お前が服が欲しいと言ってきたんだろうが」

「ああ！すっかり忘れてました」

再不斬は呆れを隠そうともせず白へとやってきた。

「いらぬのか？」

「もちろんいります！」

「それなら覚えておけ」

「すいません（すっかり忘れてた。変化の術を解いたら、あのボロ服なんだった）」

変化の術で、白自身が見ても、着心地だけが違うだけで見た目は普通の服に見える。その事に思い至り、白は自分の間抜けさに肩を落として謝った。

「夕食と朝食は街中で適当に済ませておけ、前に渡した袋にまだ金はあるだろうか？」

「出来る限り節約したので、ほとんど減ってないですよ。古着でしたら、多分この余ってるお金でもいけると思っています」

「それなら買っておけ。11時にそうだな……この宿前に集合だ」
「分かりました」

その後、再不斬と別れて部屋に入り、窓から外の景色を見る。誰かに狙われているのであれば、危険な行為かもしれないが、狙われているとしても、それは再不斬の方だけのはずであり、自分には関係ないと、自身に言い聞かす。

外は既にどこも暗く、店や建物の付近だけに明かりが灯っており、そこだけがくつきりと見えるような状況だった。そんな中でも、潮の香りだけはこの部屋へと入ってくる。

（久しぶりの海だな。街に入ったときに遠目で見たけど、木造の船ってなんか不安があるなあ。途中で穴が開いたり、腐食してたりしないんだろうか？ 最悪水の上に立てるとはいっても、海を渡りきる自信はないし、波が激しかったら、すぐに捲き込まれるだろうし……。沈まないことを祈ろう）

明日からの船旅のことは一旦忘れて、部屋のなかを確認する。部屋の中はビジネスホテルのようなもので、シャワー室とトイレが別にあるくらいで、部屋にはベッドがあるだけだった。

取り敢えず、一日中歩いた汗を流すべくシャワーを浴びることにした。シャワー室はそこまで広くはなく、二人はいれば狭く感じるくらい空間だった。

変化の術を解いてから服を脱ぎ、身体を洗い終えてから、備え付けのバスタオルを身体に巻き付けてから、暫し考える。

（水場自体が、部屋内にはここにしか無いみたいだし、さすがにトイレの水を使うのは抵抗あるから、ここで訓練するか）

巻物に書かれていた印を思い出しながら、ゆつくりと印を組んでいき、チャクラを練っていく。

（――水遁秘術・魔鏡氷晶！）

印の完成と共に、一枚の鏡が目の前に現れた。その現れた鏡にて改めて自分の姿を見る。

（こうやってハッキリとした鏡で、自分の姿を見るのは初めてだな。……やっぱりこれって白の若い頃だよな？ 見た目が女みたいだ……。せめて普通でいいから男顔がよかった……）

自身の姿に少しショックを受けつつも、術の効果を確認する。恐る恐る指を伸ばして鏡へと近付けると、指はそこに鏡など無いかのように、突き進んでいく。手首まで入ったところで、反対側を確認するも、そこには手首から先は出てはいなかった。

（鏡の中に入れるのは間違いないと……。これって中に居るときに、鏡が破壊されたらどうなるんだろう？ 閉じ込められるとかは勘弁してほしいなあ。取り敢えず、中に入ってみるかな）

鏡の中に完全に入り込むと、そこは真っ白な空間が広がっていた。振り向くと、鏡の形のみだけが、シャワー室を映している。

試しとばかりに、再度鏡の中で術を発動すると、すぐ手前にもう一枚の鏡が現れる。

（移動に関しては、認識するだけか……）

目の前に見える鏡へと移動することをイメージした瞬間、既に移動を終えており、見える景色が変わったことで初めて移動したことに気付いた。

「……これは速すぎなのか、距離が近いからなのか、いまいち分からない

いな。取り敢えず、術自体は成功ってことでいいか」

鏡から出て術を解く。解いた瞬間に鏡はうっすらと溶けるように消えていった。

その結果に満足して、この日は寝ることにした。どうも、この氷遁秘術・魔鏡氷晶は、かなりの負担がくるようで、解いてすぐにかかりの眠気が襲ってきていたからである。

なんとか、ベッドまで辿り着き、そのまま倒れ込んで意識を手放した。

翌朝。日の光を感じると共に、肌寒さを感じて目覚めると、ベッドに備え付けになっている時計は、7時を示していた。

（昨日何時に寝たんだっけ。それほど遅くに寝たとは思えないけど、秘術は消耗がかなり激しいみたいだ。現状では切り札としてしか使えない。あそこまで使いこなすためにもこれから訓練あるのみ！

……それに、昨日は夕食も食べそびれてるし。取り敢えずお腹減ったから朝食を食べに行こう）

ベッドから起き上がり、身体にタオルだけの状況に寒いはずだと納得し、脱ぎ散らかしたままの服を再度着込み、変化の術を行う。

出発の準備が出来たところで、窓から外の景色を見ると、昨日とは違い、港町全体がほぼ見渡せる。

宿に食事をするところが無いためだろう。宿の反対側に例の会社はあるが、その横から飲食店が幾つか並んでおり、それに連なるように他の店が港へと続いていた。

店の奥側は普通の民家が見受けられたので、店があるのはおそらくこの通りだけなのだろう。

（ここだけ見ると、普通の街に見えるのに、平和とは程遠い世界とはねえ）

街の全体図を見える範囲で頭に刻み部屋を出た。一階に降りて、カウンターにいる受付に鍵を返す際に尋ねる。

「ここら辺で旨い店はどこになります？」

「どこも美味しいですが、ここから一番近い店には人が多く入ってい

るようですよ」

「ありがとうございます」

「またのお越しをお待ちしております」

宿をあとにして、早速教えてもらった店へと向かう。宿の窓から見たが、朝7時でも開いている店は2〜3件しか無かった。

受付に言われた店はその中に含まれており、確かに朝から開いているのであれば、味に大差が無い限り、集客率は高いだろう。実際に幾人かが、店へと出入りしているのが見えた。

店に入ると、テーブルがいくつもあり、相席が基本のようだ。適当に空いている席に座る。メニュー表はどこにあるのかと探していると、女性がやってきた。

「ここは初めてですか？」

「ええ」

おそらくメニュー表を探すのにキョロキョロとし過ぎたためだろう。店のシステムが分からない以上こちらとしても聞くしかない。

「朝は魚定食か肉定食のどちらかです。お代はどちらも一緒ですよ。初めてでしたら、新鮮な魚の方がおすすめです」

周囲を見てみると、頼んだ料理はバラバラのようだったが、港町なら新鮮な魚料理が出るだろうと思いつく注文する。

しばらくして運ばれてきた料理を食べる。

(焼き魚と刺身を同じ皿に盛るとは……)

メインが魚で、あとはご飯と味噌汁がついているくらいだった。確かに美味しかったが、毎回来たくなるようなものではなかったように感じていた。

お代を払い店を出る。時刻は八時近くになっており、ボチボチと開店作業を行っていた。

開いた店を巡り古着屋を探しつつ、薬などを調達していく。薬についての知識はほぼ無いため、店員に確認しまくりであったが、他の客がいなかったためか、嫌な顔をせずに対応してくれた。

結局薬局を出たのが、9時過ぎとなっていたので古着屋へと足を進める。

古着屋に入り、ひと通りみてみたが、子供の服はやはり少なかつた。理由を尋ねてみると、この港町に住む人は、互いに譲り合っているようだ。そのため、本当に要らないときに売っているの、子供服の数は少ない。また、買い手も少ないので、店としては丁度いいようだ。

贅沢はいつてられないので、店にある中から、自分の丈に合いそうなものを複数選び支払いを済ませ、背負った籠へと詰め込んでいく。

時刻は10時手前。再不斬との待ち合わせまで十分に時間はある。(時間もあるし船でも見ておくか)

どの船に乗るかは分からないが、事前に船を見るべく、港へと向かっていった。

12 出航？

船を間近で確認するべく、港まで来てみたが、停留してある船はかなりの大きさだった。木造でどうやって、ここまでの大きさの船を造れるのが不思議でならない。

その大型船の内部を見てみたかったが、現在進行形で荷物の積み込み中であり、邪魔になりそうだったので諦めた。

この規模の大型船は、目の前のこの一隻だけのようだが、他の船も大概にして大きいことには変わりない。

(一番大きなこの船には、百人くらい軽く乗れそうだな……)

岩の上に乗って海沿いに歩きつつ、海の中を覗いていく。海の水は透き通っており、かなり深くまで見渡せた。

(本当ならこれくらい綺麗なのが当たり前なんだよな。ゴミなんてひとつもないし。多分あっても釣具くらいかな?)

感傷に浸りつつ元の位置へと戻り、港にある時計を確認すると、10時40分を指し示していた。集合の時間が近付いていることがわかる。

(そろそろ集合時間だし行きますかね)

集合時間よりも少し早くなるが、遅いよりはいいかと思い、宿の前へと歩いていく。宿の見える位置まで来ると、宿の前には既に再不斬が待っていた。

「お待たせしました」

「まだ時間前だが、もういいのか?」

「ひと通りは準備はできました。ただ、食事などはどうしましょう?」

船旅の日程が分からなかったので、そのあたりは何も買ってませんが……」

「それは相手持ちだから気にしなくていい。準備ができたなら行くぞ」

「どちらへですか」

「そこだ」

再不斬が示したのは、宿の前にある例の会社だった。再不斬は、そ

う言うて歩いていき建物の中へと入っていく。

白も遅れないように、続いて建物へとついて入った。中へと入ると、再不斬は昨日の人と何事かを話しており、最後に「先に行っておく」と言つて、白の方へと向き直り、出入り口の方へと歩いていく。近くに来た際に、首だけをくいつと捻り、言外に行くぞと言っているようだ。

(これってついてくる意味あったのかな?)

再不斬の話していた相手に軽く会釈をしておき、建物を出て再不斬の後を追いかける。再不斬は、港の方へと足を向けていたが、途中の飲食店の手前にて立ち止まった。

「ここで食べていくか」

「昼食は出ないんですか?」

「ああ」

再不斬は、返事をすると同時に店の中へと入っていく。なぜ、この店にしたのか不明だが、途中で昼食の事を思い出したんだろうと納得し、後に続いて店の中へと入る。

昼にはまだ早いせいか、店内に人は居らずガランとしていた。再不斬は奥の席へと座り、メニュー表を一瞥すると、すぐさま店員に注文する。

(決めるのはや!)

同じテーブルにつきメニュー表を見ると、丼物がメインのようだ。どうやってここが丼物屋であるのが分かったのか不思議だったが、深くは追及しない。それよりも――

(丼物好きになつてしまったか……)

再不斬と同じカツ丼を注文し、出来るまで待つ。待つこと約10分。注文の品が届いたので、それを食べつつ再不斬の様子を然り気無く確認すると、分かりにくくはあるが、喜んでいるように見える。

(機嫌がいいのは良いことだけ……)。これから船旅がどれくらいかかるか分からない。しばらく丼物はさすがに無いと思うから、その時は機嫌が悪くなつたりするのかな?)

どうでもいいことを考えつつ食べるが、量が多かつたのと、これか

ら船に乗ることを考えて半分ほど残した。さすがに船酔いはないとは思うが、もし酔ったら最悪な状況になってしまう。それを少しでも減らすべく残したのだが、こちらがもう食べないことを知ったのか、再不斬が声をかけてきた。

「残すのか？」

「ええ。船に乗ることを考えると、満腹で乗りたいと思いません。酔うかもしれないし。もともとこれほど食べれません」

「じゃあ俺が食べてやる」

そう言うと、手が霞むほどの早さで目の前にあつたどんぶりを持つていき、一気に食べてしまう。半分ほど残っていた中身はすぐに消えていった。なかなかの食べっぷりである。

「ではいくか」

再不斬は満足したのか、テーブルの上に代金を置くと、そのまま店を出ていってしまった。仕方なくテーブルの上の代金を店員に手渡し後を追う。

「店員に代金は渡さないと、無銭飲食でそのうち捕まりますよ？」

「他に客は居なかったから問題ないな」

「問題大有りです」

「細かいことにこだわるな」

「あれって細かいですか？ 普通、代金は店員に渡しますよね？ あれ？ もしかして渡しませんか？」

「金は払ってるんだから、気にしなくていいことだな」

「そんなもんですか？」

自分の常識が無いのか、再不斬がおかしいのか、こちらに来ての経験が少ないので、分からずじまいでこの場は終わった。

船場までたどり着くと、再不斬は大型船の方へと進んでいき、船の近くにて積み荷のチェックを行っていた男と話し、こちらを指差すと船に乗り込んでいった。

（あの大型船に乗るのか……。嵐とかに対しては安心だけど、木造つていうのが不安だなあ……）

再不斬がおそらく説明したのだろう、軽く会釈するだけで通ること

が出来た。

船に乗り込むと、真ん中に大きな穴が開いており、そこに荷物を詰め込んであり、丁度その穴に蓋を閉めるところだった。

そんな光景に興味は無いとばかりに、再不斬は船内に入っていく。おいていかれては、探すのが面倒になりそうなので、後で色々見ようと思う、今は再不斬の後を追った。

船内には所々で鉄板も使われていたが、ほとんどがやはり木造だった。部屋数は少なく、最初の2部屋は船長と医務室であり、残り4部屋の内2部屋は来賓用の部屋のような。そして、残りが船員用の大部屋であった。そして、白たちは大部屋へと割り当てられていた。

大部屋の中には、特にこれと言って何かあるわけでもなく、トイレがついているくらいだろうか。光を入れるための小さな窓が幾つかついており、そこから日の光が入ってきてはいるが、全体を照らすには足りていない。

(この部屋にはトイレだけで、シャワー室とかついてないのか……。トイレは多分海にそのまま流しタイプかな? そうじゃなかったら部屋に臭いがこもるだろうし。こもったら嫌だな……)

「船の日程だが、何事もなければ3日で着くそうだ」

「意外に早いですね(これだけの木造大型船をどうやって移動させるんだろう?)」

「風がよければ更に早いかもしれないがな」

「船の中を見て回ってもいいですかね?」

「自己責任で勝手にするといひ。俺はここにいる」

「分かりました」

船員と思わしき人に声をかけて、見て回ることにしようと、船内から外へ出ると、そこには人が並んでいた。

「全部で10班いるな」

「いるようです」

「では、1〜6の班は船底で動力確認と順番決め。7〜10班は帆の操作をしてもらぞ」

「そら、移動開始だ」

残るのがおそらくは船長で、船内に案内するのが副船長なのだろう。あくまでまもたぶんだが……。

通行の邪魔になりそうだったので、大部屋へと入り、みんなが過ぎ去るのを待ってから、その後を追う。

通路に一番奥には階段があり、2階分ほど降りると、1番下の階——船底のようだ。そのままついていくと、そこには巨大なカラクリが置かれていた。おそらくは、あれを十数人で回すことで推進力を得るのだろう。

謎が解けたところで、船内から出る。そこでは、帆の操縦訓練を行っていた。閉じたり、開いたり、向きを変えたりと、命綱もなしによくあの高さでやるものである。

「よし。後少ししたら出航だ！今のうちに飯食つとけよ！」

「おおー!!!」

船長と思わしき男は数人つれて、船外にある部屋へと進んでいく。そのあとについていき、間近で見ると、そこは操舵室だった。

(舵取りは帆だけじゃなかったんだ)

そのまま、船の縁沿いを歩き、1周したところで再不斬の元へと戻ると、そこには既に数十人がたむろしていた。先程の飯の合図があったので、ここにて食べる気なのだろう。

再不斬は、元の暗い位置にいるためか、入ってきた船員たちが明るいとところに居るため、あまり影響は受けてないようだ。自分も再不斬の方へと歩み寄り壁を背に座り込む。

「探検ごっこは終わりか？」

「探索と言ってください。海に出るにあたって、その船のことを知ろうとは思いませんか？」

「着くまでの日数と海賊との遭遇数しか興味ないな」

「そう言えば、海賊って本当にいるんですか？」

「いるにはいるが、こんな大型船を襲うようなやつはいないだろう」

「それなんてフラグですか……」

「フラグ？」

「いえ。海賊との遭遇はほぼないんですね？」

「そうだな。普通の船だと、週に1回は狙われているようだがな」

「危険なところですね」

「そのお陰で、安く乗ることが出来てるがな」

話していると、大部屋の扉が開かれて、男が入ってきた。

「休憩は終わりだ！ 出航するぞ！ それぞれ持ち場につけ！」

男は手を叩きながら、部屋内にいた男たちを急かす。その声に、飯を食べていたり、休憩していた男たちは、慌てて部屋を出ていった。残ったのは自分達二人と、先程操舵室に入っていた内の数名のみ。

「あんたらは、一応護衛だからあまりウロウロしないでくれよ。働いてる者に対して目障りそうだからな。何かあつたら呼ぶ。その時に対応してくれ」

男は言いたいことだけ言うと、部屋を出ていった。

(暇だなあ)

しばらくすると、窓の景色から船が動いているのが分かった。これから、数日間ここにずっといるかと思うと気が滅入りそうになる白だった。

13 船旅？

大部屋から出るなど言われているので、仕方なく窓にへばりつき外の景色を見ているが、港から離れるにつれて、見渡すばかり海、海、海の時点で見るのを止めた。

再不斬の他にも数名いるのだが、どうも話しかけづらい。それと言うのも、この部屋に残ってから話しているところを聞いたことが無いからである。

(この人たち仲間内でなにか話したりしないのかな?)

全く会話が無いことに不審を抱きつつも、再不斬の元へと戻り、他からは見えないように、印を組む練習を行う。

(他にやることないなあ)

それからは、夕暮れになるまで何事もなかった。

夕暮れになってからは、ガリガリとなにかが削られるような音が響き渡り、何事かと腰を浮かしたところで、部屋に誰かが入って来た。

「今日の夕食だ。ここに置いてくから勝手にとって食ってくれ」

男はそう言うと、扉の近くに弁当を置いてさっさと行ってしまった。

その弁当を取るべく、こちらが動き出すよりも早く、今までじっとしていた男たちの一人が、弁当の方へと向かった。それに追従するよな形で、自分も弁当を取りに行く。

男は置いてあった弁当から2つ手に取ると、こちらへと渡してきた。

「ありがとう」

「……………」

男はなにも言わずに、残った弁当を他のメンバーのもとへと戻っていった。

(返事くらいしてくれてもよさそうだけど……)

受け取った弁当を再不斬の元へと持っていき、再不斬へと手渡そうとするが――

「夕食の弁当です」

「そこに置いておけ」

「いま食べないんですか？」

「後で食う」

「では先にいただきますね」

「へ食ったふりして、トイレに捨ててこい」

小声で言われた内容に眉をピクリと震わせ、弁当へと目を落とす。見た目は普通の弁当であり、蓋を開けてから漂ってくる臭いにも不自然なものを感じない。

再不斬が小声で話したと言うことは、いま一緒にいる人たちは、敵である可能性が高いのだろう。

食べる前にトイレに行き、タンクから水分身を作り出し、水分身に弁当を食べさせてから、トイレに戻させ術を解く。その後、何事もなような顔をしてトイレから出た。この短時間であれば、全て吐いたとは思われないだろうが、2回もトイレに行った時点で、多少は不審に思われているかもしれない。

しかし、毒の可能性を示唆されれば、これくらいはしないと安心できない。再不斬がいるので、最悪な事態にはいかなだろうが、警戒しておいて損はないだろう。

（船に乗ったら安心だと思っただけだな……。海賊ならともかく、同船内に敵がいるとか勘弁してほしい）

しばらくすると、船員たちがガヤガヤと喧しく話しながら入ってきた。船員たちは食べ終わったようで、それぞれ談笑したり、寝たりとくつろいでいる。

船員たちからは、特になにも感じないが、昼から一緒にいる人たちからは、時折り視線を感じていた。

「へ寝たら動けない振りをしておけ」

再不斬へと、目で了解の返事をし、夜を待った。

夜も更けてみんな寝静まった頃に、例の怪しい人の内の二人が部屋の外へと出ていった。それを薄目で確認し、他のメンバーが動かないのか見ていると、誰かの足音が部屋の方へと近付いてくるのが分か

る。

「みんな起きろ!!」

部屋へと入るなり、大声でみんなを起こしにかかる。かなりの声量だったため、ほとんどの船員は起き上がり何事かと戸の方へと視線を向けていた。幾人かはいまだ眠そうにしている。ここで動いてはまずいので、そのまま寝たふりをしていた。

「何か大きな船が近付いてきてる！ 船を動かすぞ！ 持ち場につけ！」

男の声に、みんなは慌てて部屋を出ていき、残ったのは海賊対策に雇われたであろう人たちと、自分達だけだった。その後にもたしても、ガリガリと言う音が響き、船が動き出したのが窓から見える星の位置で分かる。この音はおそらく錨かなにかなのだろう。

「行ったな……。まあ、ゆつくりしといてくれ。処理は頼んだぞ」
「もちろんだ」

「弁当を食ったのは確認してる。もう動けないだろう。後は海に捨てるだけだ」

「楽な仕事だな」

大声で叫んだ男はそう言うのと、部屋を出て行ってしまった。

「さて、ゆつくりとは言われたが、さつさと終わらせて寝させてもらおう」

「そうだな」

その言葉に、男たちは立ち上がったが、それと同時に辺りが霧に包まれていく。

「この辺り霧がきつかったか？」

「天候にもよるだろう。戸も開けっぱなしだし、上から入ってきたのかもしれん」

「取り敢えず、さつさと終わらせようぜ」

「どんどん濃くなってきてないか？」

「まず戸を締めろ」

そう言っって戸を締めている間にも霧は濃くなり、視界が無くなったところで、横にいるはずの再不斬が居ないことに気が付いた。

(そう言えば、サイレントキリングって言われてたんだっけ?)

霧で見えないことをいいことに、しばらくのんびりと待っていると、霧が晴れてきた。

そこに立っていたのはひとりだけ。後は床に倒れていた。一応胸が動いているので死んではいないのだろう。

「早かったですね」

「一ヶ所に集めて縛っておけ」

「先に尋問しないんですか?」

「後でもいいだろう。どうせしばらくは目を覚まさん」

再不斬はそう言うと、部屋を出ていってしまった。

ランプに火を灯し部屋を明るくしてから、ロープを探す。壁に掛かっていた物を取るが、長さに2人を縛るのが限界だろう。

(3人いるから内二人だけ縛って、もうひとりは練習台になってもらおうかな)

2人を縛り上げ、先程この中でリーダー格だった者を練習台にすることにした。

3人は動かしても全く微動だにしないことから、余程の事がないと起きないことが分かる。縛っていない男に猿ぐつわを噛ませ、トイレへと連れていき、氷遁にて手足を凍らせる。

(これで準備よしと)

港町にて購入した短刀を取り出して、男に浅く傷を付ける。人に傷を付けることに対して、抵抗感が全くないことに、自分の事ながらどこか他人事のように感じてしまっていた。

傷を付けた場所に対して、治療忍術である掌仙術を行う。

(他人に対しては初めてなんだよな……)

チャクラを流し込むイメージで、手のひらに集まったチャクラを傷つけた場所に当てると、傷が浅かったためなのか、すぐに塞がってしまった。

(これくらいならすぐに治るのか。もっと深ければどうだろう?)

今度は深く突き刺すと、男は目を覚ましたのか、苦渋の顔をしてこちらを見てきた。手足を凍らせてある上に、凍らせている部分が床と

一体化しているので、動くに動けないだろう。男は一瞬こちらを見て驚いた表情をするが、傷の痛みでまた苦渋の顔となる。

そんなことは気にせずに、チャクラを込めた手を傷口へと当てていく。今度も治ってはいるが、なかなか傷口が塞がらない。

(もうちよつと込めた方がいいのかな?)

チャクラの量をどんどん増やしていき、血が止まる頃には、男は気を失っていた。

(難しいなあ。深手の場合は止血くらいにして、後は自然治癒に任せた方が効率的かも?)

練習をひとまず終わることにして術を解いた。トイレから男を連れ出し、男の服を割いて、血の付いてない部分をロープ替わりに縛っておく。

その後、着替えを行い、血のついたものをトイレに捨てると共に、トイレを綺麗にしておくことも忘れない。

その後は大人しく待っていると、再不斬が帰ってきた。再不斬は部屋に入った瞬間何かを感じたのか問いただしてきた。

「……何をしていた?」

「暇だったので、忍術の練習をやってみました」

「血の臭いがするぞ。殺してはいないようだが……」

再不斬は、転がっている男たちを見てそう呟く。

「殺っていいなら、色々教えてほしいんですけど」

「教えてもいいが。まずは現状を教えておく。この船自体が副船長に乗っ取られている。いや、いた、と言った方が正しいか。海賊の仲間とは思わなかったが……」

「船長はどうしたんですか?」

「既に死んでたな」

再不斬は心底どうでもよさそうに話をしている。

「これからどうするんです?」

「このまま半日ほど進めば小島に着くようだ。そこが根城らしい」

「海賊の根城ですか……」

「やつが言うことが本当ならな」

「えーっと。小島に着いてどうするんでしょう？」

「海賊と言ったら金を持ってるだろう。これから移動をするにも金は必要だからな」

「まあ、そうですね。海賊なら居なくなっても誰も困らないでしょう……。でも、この船の船員はどうするんですか？」

「この船は海賊に襲われた。それだけだ」

既に再不斬の中では、船員に対する対応は決まっていたようで、即答された。

「なるほど」

「着いたらお前が処理しろ」

「移動手段が無くなりますよ？」

「仮にも海賊だ。他にも船を持ってるだろう」

「曖昧ですね（殺る必要性あるのかなあ）」

再不斬の言葉に納得できずにいたが、次の言葉でそんな考えは無くなってしまっていた。

「島に着いたら鍛えてやる」

「是非願います！ 最近移動ばかりでまともに鍛練できてないの
で」

「実施は船が島に着いた直後だ。ひとりも逃すな」

「わかりました。（情報は、どこから漏れるか分からないし仕方ないね）島につく前に、この人たちで教えてほしいことがあるんですが……」

「なんだ？」

「仮死状態のツボの位置とか色々知りたいんです。死んでしまったら分かりませんから」

「……いいだろう」

「いまからでも大丈夫ですか？ 船の進路とか」

「分身を置いてきているから問題ない」

「では、早速お願いします」

そこからは、ツボだけではなく、人体について教わった。どこを刺せばより苦しむか、どこを刺せば痛みを消せるかなど色々と実施して

い
っ
た。
。

14 小島？

半日ほどたった頃。と言っても、朝日が出てしばらく経ってから、島が見えてきた。

ひと通り再不斬から教わった後、男たちには死んでもらい船外へと出た。

船外はかなり明るく、一瞬目を薄めてしまうほどの光量だった。目が馴染んできたところで、帆の操作をしている船員たちへと目を向けると、疲弊のためか帆を張っている者達の動きはかなり鈍いことが分かる。

追ってきている船を確認するため、船の後方を見ると、確かにこの大型船ほどではないが、それなりに大きな船が数隻、追いかけてきているのが見えた。

(こちらはだいぶ遅いから追い付いてもよさそうなのに、わざと距離をおいてついてきているなあ)

いまの速度は、出航していた時の速度とは、比較にならないくらい遅く、いつ追い付いても不思議ではなかった。もともとが、小島に追い込むことが目的なのだから当然かもしれないが……。

この調子であれば、船底にいる者もかなり疲弊していることだろう。

小島が近づいてきたので、周りから見えない船の影部分に入り込み、水分身を行う。周りは海のため、水については事欠かない。

(いまのチャクラでは5人が限度かな?)

変化の術を維持しながら、チャクラに余裕を持たせたとすると、今の人数になってしまいが、疲弊した相手である以上、十分な戦力だろう。

それぞれに、再不斬から渡されたクナイを持たせ、本体は見逃しがないように、船全体が見える位置に陣取ることにする。帆を上の方で操作している船員が、島に向かってしていると何度も言っているが、副船長の指示が変わることはない。副船長は変化の術にて再不斬が成り代わっているので、指示が変わることがないのは当然だ。また、上

にいるのが数名なうえに体力が限界に近いのか、声もギリギリこちらに届くくらいなのも原因だろう。下にいる者たちもその声を聞く余裕すらないのだから。

遂に小島へと接岸、というよりも座礁に近い形で到着し、ガリガリと音を立てながら錨を下ろしたところで、計画を実行した。

船外には数十名居たが、終わるのはすぐだった。みんな疲弊していたと言うのもあるが、帆の一番上に変化の術を解いた再不斬が、帆の操作をしていた船員を降りながら斬っていったのである。

再不斬が降りてから一緒に殲滅したため、時間はさほどかからなかった。そのため、船底にいる船員を片付けようと、中に入ろうとしたところで、船内からもうひとり再不斬が出てきた。

「ここは終わった。白はこの船に入ってくるやつらを殺っておけ」

「わかりました。再不斬さんはどうするんですか？（これって再不斬さんひとりで出来たんじゃなからうか）」

「後ろの2隻を潰してくる」

「わかりました（腹減ったなあ）」

少しすると、鉤爪のような物が船に幾つも取り付けられ始めた。そのまましばらく待っていると、案の定海賊たちが昇ってきたようだ。

船へと昇りきった海賊たちは、船の甲板の様子に唾然としていたが、その隙をついて、声を出させる前に止めを刺していく。

（第1陣はこれで凌いだけど、後何人くらいいるのかな？）

また、船に取り付けられた縄が、揺れているのを確認し、先程やった遺体は移動させておく。仲間がいなければ、船内に入ったという風に、思わせることが出来るだろうと言う狙いだ。

第2陣に関しては、船に昇りきってから、少し驚きはするものの、船内へ向けて歩を進めたので、後ろから急襲した。

（後詰めに報告とかしないものなのかな？）

第2陣の処理を終えて甲板に戻ると、再不斬がいつの間にか戻って来ていた。

「お早いお帰りですね」

「水分身を置いてくるだけだったからな」

「殺してはいないのですか?」

「今はな」

そろそろ第3陣が昇り終えてもよさそうだったが、なかなか来ないことを不思議に思っていると。

「下の奴等なら片付けたぞ」

「えっ?」

船の縁から接岸した場所を見てみると、そこには倒れた人で埋まっていた。人数的には20人くらいだろうか。特に悲鳴が聞こえた覚えが無いので、ほぼ一瞬でやったことになる。

(これだけの腕があつて、なぜガトーの部下に殺られたのか不思議だ……。カカシさんとの戦闘のせいかな?)

「後は、追つてきていた残りの船の奴等から情報を聞き出して殺るだけだな」

「島には他に居ないんですか?」

「居ないと言っていたが、いまは気にするな」

「では、これから残りの船の方に行きますか?」

「白はこの船の積み荷で、食糧と金になりそうなものを運び出しておけ。大きいものは無視して構わん」

「時間は何時までですか?」

「取り敢えず夕方になったら声をかける。そこまででいい」

「分かりました。ご飯食べてもいいですか?」

「好きにしろ」

再不斬はそう言うと、島の方へと行ってしまった。

それを見送ってから早速ご飯にするべく積み荷の元へと行く。昨日から何も食べていないため、お腹が空いて仕方ない。前までであれば、お腹が減ってもそれほど気にならなかったが、毎食きっちり食べ初めてからは一食抜くだけでやる気ダウンに繋がってしまう。

まずは甲板にある積み荷への蓋を、水分身と協力して上げる。蓋を開けたところで、備え付けてある階段を下り積み荷の置いてある部屋へと行く。その部屋には調理場も付いており、どうやら食材とその他の積み荷で分けてあるようだ。

(調理場があるのは丁度いいけど、すぐ食べたいし作ってあるやつを探すかな)

調理場の方へと向かい、鍋の中を確認すると本日の残りであろう料理が、幾つかそのままになっていた。おそらくこの調理をしたのは海賊の仲間だろう。そのために、片付けるのを止めて、計画を実行に移したのでそのままになっていた。もしかしたら、そのまま食べるつもりだったのかもしれないが……。

(でもこれに毒が入っていないとも限らないし、面倒だけど自分で作った方が安全か……)

使用してない鍋をひとつ取り、材料を水分身それぞれで分担して切っていく。今回はじゃがいも、にんじん、豚肉、これらの材料から作れるものとして選んだのが肉じゃがだ。もし再不斬が食べに来てもいいように、すき焼きと似たような物の方がいいだろうという考えもある。ご飯も炊きはじめて準備は完了した。

(出来るまで少し時間があるな)

出来るまでの間に、船に積んである階段を接岸している部分へと設置することにした。設置してから分かったが、接岸している場所の階段でないため、少し急なものとなってしまった。無いよりマシと思いついて設置する。この階段が意外とひとつひとつのパーツが重く、設置に手間取ってしまう。

(結構きついな……)

四人でやっているとはいえ、本体よりも力の無い水分身では、結局本体が力を入れないといけないので、きついことには変わらない。

階段の設置が終わったところで、汗だくになりながら調理場へと戻ると既に料理は出来ていた。軽く汗を拭いてから食事をとっていると、夕方に来ると言っていたはずの再不斬が現れた。

「いい匂いだな」

「再不斬さんもうですか？(なんかタイミングよく現れたけど、どこかで見えたのかな?)」

「いたどころ」

「どうぞ」

港町の時と同じように、どんぶりに肉じやがをのせて肉じやが丼にして再不斬に手渡す。再不斬の表情は分かりにくいだが、やはり嬉しうに見える。

食事を終えてから、寝る場所やこの島から出る際の船などについて確認しようとする、先に再不斬の方から話してきた。

「この島に人はもういないはずだが、油断はするな。生活する場所はここからすぐのところにあった。ここでお前を鍛えた後にここを出る。最低でも冬前には出る予定だからそれまでにものにしろ」

「努力はしますが、ものに出るかはわかりません」

「……期限はさきほど言った時までだ」

「出来る限りはやりませよ。自分のためですから」

「食糧終わったら食糧から運ぶ。荷車があつたからそれを使つておけ」

「再不斬さんは手伝つてくれないんですか?」

「修行だと思つてやつておけ。俺はやることがある」

「では先に、生活する場所だけ教えてください」

「ついでに」

再不斬と共に、海賊たちの使っていたであろうアジトの場所を確認し、そこにあつた荷車を引いて船へと戻った。

転がっている遺体については、通行に支障が出ていたので、海へと落としスペースを開ける。

そこからは、延々とアジトと船を行ったり来たりであった。金になりそうなものも多かったが、それ以前に船員たちを賄う為の食糧が、予想以上に多かったことがある。船旅の日数が少ないことから、甘く見ていたが、あの人数を考えればそれも当然だろう。

食糧以外は小物とはいえ、アジトに運び終えた頃には、夕方になっていた。

(もうそろそろ時間のはずだけど、何してるんだろう? 取り敢えず疲れたけど、夕食の準備でもしておくかな……。多分再不斬さんは料理なんてしないだろうし)

夕食は、昼に作った物を温めるだけにして、ご飯だけを追加で炊く

ことにした。

辺りが暗くなってきた頃に、再不斬は戻ってきた。

「一応一通り運び終えましたよ」

「それはご苦労だったな。あと、食糧については保存がきくようにしておけ」

「具体的にはどうすれば？」

「それは自分で考えろ。俺もそこまでは知らん」

「適当にやっておきます（無茶ぶりだなあ）」

再不斬は、自らどんぶりを手に取り食事を取る。こちらも、それに合わせて夕食を取った。

今日のところは、これで終わりらしく、再不斬に何をしていたか聞いてみると、この小島に探知結界などを張っていたと簡単に教えてくれた。

確かにこれで、他に人がいないか分かるだろう。

食糧に関しては、氷遁で凍らせることにした。ここには、冷蔵庫なんてない。最悪食べられなくなれば、この島にて食糧を探すことになるだろう。

冬までそれほど時間があるわけでもないのが、逆に救いかもしれないが……。

15 離島？

次の日から早速鍛錬が始まった。

他に人は居ないので、通常時は変化の術を使う必要もない。また、本来の姿で慣れておかないと、いざ本気で戦闘をするというときに、感覚に狂いが出るかもしれないというのもある。ただ、他に見破られないようにするため、変化の術の鍛錬を欠かすことは無い。

始めの方は、午前中に体術を行い、午後からは忍術について教わっていた。ほとんどが実践形式であり、座学というべきものが無かったので、毎日疲弊した状態で眠りについていった。もちろん食事についてはこちらが作っている。初日で毎食作ることが困難だと悟り、次の日からは、朝に大量に作っておいて、それを夕飯までもたせるようになっていた。はつきり言って作る気力すらわかないくらいの疲弊である。

日々の鍛錬にある程度身体慣れてきた頃、再不斬から新たな鍛錬が追加された。

「今日からは常に周囲に気を配れ。例えば休憩していてもだ」

「もしかして寝てる時もですか？」

「ああ」

今までは、再不斬以外に人が居ないというのが分かっていたので安心していたが、ここを出たら油断はできない。この世界で生き延びるために鍛錬をしているのに、その緊張感が薄れているのに今更ながらに気付いた。

（再不斬さんがいるから大丈夫と安心しきってたな。本来なら自分の身は自分で守れるようにしないといけないのに……。気配の察知の仕方については教わってる。さすがに再不斬さんが完全に気配を消した状態を見切れと言われても無理だけど、そこまでのことはまだしないだろうし。それに、これも自分にとっては必須なことだしやるしかない……か……）

その日からは、鍛錬中だけではなく休憩時間に、どこからともなく小さな木の棒が飛んでくるようになり、また、寝ている時にも飛んできた。流石に寝てる時に飛んでくるのはどう反応すればいいのかと

言ったが、「飛んでくる気配を察しろ」と言われただけで、慣れるまで睡眠不足の日々である。

それにすら段々慣れてくると、木の棒から木製のクナイに変わっていき、最終的には本物のクナイへと変わっていた。度々怪我をすることもあったが、治療忍術の練習とばかりに、ワザと投げる速度を上げていたようだ。

体術（こちらは武器と分身有り）に関しては、完全に力の差が有りすぎて、一方的な展開になることが多かったが、忍術に関してはそれなりの手ごたえ……と言えるかどうかあれだが、多少は苦戦を強いらせていると感じることができていた。しかしそれも血継限界の秘術まで使用しての話だが……。

肌寒くなり秋も終わりに近づいて来ているのが分かる頃、島を出る日がきた。

「明日の早朝に天気がよければ島を出る。今日は荷造りをしておけ」

「食料はどの程度持てばいいですか？」

「一応二日分用意しておけば十分だろう。今回は無理やり進むから、それほどかからないかもしれないしな。場所的には、半日もかからずに波の国に着く位置にいるらしいからな」

「そうなんですか？」

「地図と方位針があるからいけるだろう」

「大雑把ですね」

「後は嵐にさえならなければ問題は無いな」

「取り敢えず荷造りをしておきますね」

巻物を取り出して籠を呼び出し、その中に食料を詰めていく。巻物については再不斬から2つほど借りている状況なので、そのうち自分の分が欲しいところだ。

荷造りを済ませて、余った食材にて早めに食事を作っておく。今日は鍛練が無いとはいえ、いつ不意打ちで、クナイが飛んで来るのかわからないので、もちろん食事を作っている間も警戒事態は怠ることはない。

しかし杞憂だったのか、この日に物が飛んでくることはなかった。

次の日になり、夜明け前ではあるが起きて出立の準備を行う。再不斬は未だに横になってはいるが、寝ているのか起きているのか何度見てもよくわからない。試しに何度か小石を放り投げてみたこともあるが、軽く払われてしまった。しかも目を開けずに。

本日分の食事を作り、再不斬に声をかける。

「再不斬さんできましたよ」

「食べたらずぐに出発だ」

「わかりました」

手早く朝食を取り、残りを弁当箱に詰めていく。弁当の準備が終わる頃には若干であるが、空が明るくなってきたており、夜明けであることを伝えてくる。今日は雲が少し漂ってはいるが晴れのようなだ。

「いくぞ。ついでにい」

再不斬はそう言うと、西側へ向けて進み始めた。こちらも遅れないように籠を背負いついていく。

海岸が見えてくると、そこには小型の船がとまっていた。小型と言っても乗員が2人であることを考えれば十分な大きさの船ではある。どこのクルーザーだろうと思えるくらいだ。実際に乗ってみると、流石に船室は無かったが、荷室があるだけでも船内で休めるという安心感はある。半日以内で到着と言っていたので休むことは無いかもしれないが……。

背負っていた籠を荷室の壁に固定してから上に上がる。そこでは既に、船を留めていた縄を斬っている再不斬がいた。その後いきなり――

「水遁・水龍弾の術」

「ええっ!?!」

再不斬はあろうことか攻撃忍術を使用した。船を壊す気かと、忍術名を聞いた瞬間に白は思ったが、その術は完全に制御されており、乗っている船を壊すことなく、一気に沖合付近まで持っていく。この調子で行けば半日どころかその半分以下の時間で到着するのではな

いだらうかと思っていたが、そこまでは甘くはなかった。

「何を驚いている。ここからはお前の番だぞ」

「このまま行かないんですか？すぐに着きそうですが」

「チャクラがそこまで続くはずないだろうが、ここからはお前と自然の風が進む。さっきのはこの島付近だと海流の関係で進むのに時間がかかるからだ」

「つまり、風遁を使えということですね」

「そういうことだ。俺よりも得意だろう？」

「水遁では未だに全く敵う気がしないですけどね」

「そんな簡単に追いつかれては話にならない。舵を交代するから白は帆の操作をしろ。風が止まるようであれば使え」

「これを見越して人はいらなと言ったんですね……」

多少愚痴りたかったが、言っても無駄と分かっているので素直に舵取りを交代し、帆を操作するためのロープを手取る。

風は上手いこと追い風であり、特に必要な操作は無い。少し心配なのは、方角が合っているかくらいだろう。それも、遠目に他の島が見えていることから大丈夫なはずであった。

順調に数時間進んでいたところでパラパラと雨が降ってきた。空を見上げても特に大きな雲は見受けられないことから通り雨か何かの類だろう。と、この時までには思っていたが、予想に反して一気にどんよりとした雲が現れ始める。

「白。急ぐぞー！」

「——風遁・大突破！」

再不斬の声と同時にこちらも帆に向けて、帆が破れてしまわないよう風を送る。長時間は無理だが、近くの島に行くぶんには十分持つだろう。そうして何度か印を組み風を送っていたが、雨は次第に強くなってきているのが分かった。

島まであと少しと言ったところで、再不斬が最後に水遁を使用して無事島に到着する。場所的には小さな湾のような所であるため、もし嵐になってもそれほど被害は被らないだろう。ひとまず、荷室に備え付けてあったロープにて、船の近くにある幾つかの岩と繋げておく。

この処置により、船が勝手に流されることは無くなった。

舵取りの部屋に行くと、再不斬が地図と方位針を見比べていた。その間も雨が弱まることない。雨が強いだけで、風が微風なのがまだ救いだろうか。

「大体の場所分かりましたか？」

「この島は渦の国のようだ。人が居るかは分からないが」

「あれ？西に向かえば、波の国があるんじゃないか？」

「その近くに渦の国もある。予定よりも少し北の方へ来たようだ。まあ進む方向は合ってるからいいだろう」

「渦って聞くと、この船で近づいたときに巻き込まれて、海の藻屑となりそうな感じですね」

「行ったことがないから分からんな。取り敢えず飯の準備をしてこい」

「準備というか弁当は作ってあるのですぐ持ってきます」

荷室へと移動し、籠の中から弁当と水筒を2つずつ取り出して再不斬へと持っていく。食事を終えて、七輪に火を入れて暖を取っていると、雨が少しずつ弱まってくるのが分かった。

「通り雨みたいなものだったんですね」

「嵐にならないだけマシだったな。雨が止み次第いくぞ」

「そうですね。暗くなる前に着きたいですし」

更にしばらく待つと、今さっきまでの雨は何だったのかと言いたいくらいに、空には出発した時と同じような感じになっていて、既に雨も止んでいた。

（海の天気は変わりやすいと……）

ひとつつ教訓を得ながらも、今後、船に乗るのは極力避けようと思っただのは仕方ないだろう。

白は帆の方へと向かい、再不斬がロープを斬るのを確認してから、風遁いて少しずつ方向を転換していく。湾のような形になっているので、前の島のように無理やり出る必要もないのか、今回再不斬は手伝う気はないようだ。

途中までは風遁似て行っていたが、次第に疲れてきたため一旦休憩

にする。

「流石に疲れました」

「まあここまですれば上出来だ。大陸が見えてきたしな。恐らくあそこが波の国だろう。着くまでの間に休んで回復しておけ」

「そうさせてもらいます」

疲弊した身体に鞭打って、暖かい舵取り室にて仮眠をとることにした。

どれくらいの間そうしていたか分からないが、少しは回復した頃に何かの気配を感じてその場から飛び起きる。

「起きたか」

「起こすのに弁当箱を投げないでください」

「優しいだろう?」

「それは、まあ……いつもに比べれば、かなりの優しさですね」

「そういうわけでもう着くから変化して準備しておけ」

そう言われて陸の方を見ると、あと数十メートルくらいの位置にまで来ていた。時刻的には夕方になっていることから、当初の予定通りではあるのだろう。あの雨さえなければもつと早く着いたかもしれないが……。

荷室へと行き変化の術を使用して、壁から籠を外しそれを背負う。

船は港へ行かないようで、そのまま砂浜に突っ込む気のようにだ。

「船が到着次第目の前の山の中に入るぞ。近くに街道が無いとはいえ、誰が見ているか分からんからな。遅れないようにしていこい」

「全力疾走されたらさすがに追いつけないので、取り敢えずまっすぐ進みます」

聞いているのかいないのか、再不斬にスルーされてしまった。やることにかわりはないので、船が浜に乗り上げた瞬間。瞬身の術にて山の方へ向かう。そのまま真っ直ぐに進んでいると、再不斬が待っていた。

「港町はもう少し南の方のようだな。完全に暗くなる前に移動するぞ」

「少し回復したとはいえ、結構消耗が激しいんですが……」

「いくぞ」

「はい」

再不斬は駆け足で山の中を走破していく。速度的にこちらに一応配慮しているのだろう、なんとかかっついていけるペースではある。

左手に海の見える位置をキープしながら港町があるはずの南の方へと向かっていった。

波の国

16 手配書？

辺りが完全に暗くなる前に港町へと到着することが出来た。

この時期に野宿というのは、寒さのために結構厳しいものがある。街に入ってから、宿を手分けして探すことにした。こんな時のためには無いが、血継限界である秘術・魔鏡氷昌の応用で、小型の鏡を作成して、それを通信手段としている。

鏡の中に入っただけの移動さえしなければ、チャクラの消費は微々たるものだ。

二手に別れてしばらくすると、再不斬から連絡があった。

「宿を見つけた。別れたところから、俺の行った方向沿いにある。宿の前に波風と看板があるところだ」

「向かいます」

「俺は先に入って手続きしておく」

「お願いします」

建物の間をショートカットしてもよかったが、知らない街で迷子になったら嫌だなどと思い直し、一旦別れたところまで戻る。

そこから、波風と書かれた看板を探しつつ進んでいくと、年季の入った宿へとたどり着いた。ここに来るまでにいくつか宿はあったのだが……。

(なんでこんなボロいところに?)

宿の中へと入ってみたが、予想を裏切ることなく、外観と同じように古い建物だった。ある意味趣があるといってもいいくらいだ。

入り口近くにある椅子に座っていた再不斬は、こちらが入ってきたことを確認すると、受付へと向かい老婆から鍵を受け取ってこちらへときた。

「荷を置いたら俺の部屋に來い」

ほぼ口パクに近い形での小声にて言われ、鍵番号を見せてくる。それに対して小さく頷き返して部屋へと向かった。

（わざわざ部屋に来いってことは、何かあったのかな？　そう言えば、時刻が遅いとはいえ、人の通りが少なかったような）

港町に着いてから、住宅街の方を回っていたとはいえ、そこからこの宿に来るまでも、人が少ないことに今更ながらに気付いた。

（こういったことにも、もっと早く気付かないといけないな）

部屋の前に到着し鍵を開けて中へと入る。そこには布団しか無く、ただ寝るためだけの部屋ということがよくわかった。窓すらもなく、あるとすれば壁に掛けてある時計くらいだろうか。これだけ狭ければ、部屋数が多そうなので、かなりの人数を宿泊させることが出来るだろうが、この風化具合を考えると、いつ壊れてもおかしくない。宿泊するための人が来るのだろうか、と疑問に思ってしまうレベルだった。

鍵に関しても、簡単に開けられるようなもの（それなりの開錠スキルか物理的にかだが）であるため、念のため金目の物は所持しておくのと、完全に冷えてしまっているが最後の弁当を持っていく。この様子では外食などしない可能性が高いからだ。

籠に仕掛けを一応施して、再不斬の部屋へと向かう。その途中で一番奥にトイレがあるのがわかった。どうやらここは、共用のようだった。

再不斬の部屋にて、事前に訪れる際の合図として教えられたことを実行する。始めに軽くノックを2回。間を開けて再度2回。そうして少し待つと、再不斬が扉が開けてきた。

その隙間に入り込むと、再不斬はすぐに扉を閉じた。

「遅いので弁当を持ってきました、外食にしますか？」

「いや。弁当を貰おう」

やはり弁当は冷め切っており、ご飯などはパサパサというよりも若干固めであった。それでも食べられないよりは遥かにマシではあるが……。

弁当を食べ終わり本題を目で催促する。あまり、こちらから余計なことは言わない方がいいだろうと思ったからだ。部屋が狭いということ、隣の声や床下、天井にて誰かが聞いていてもおかしくは無い。

再不斬が気付かないとは思えないが、用心に越したことはないだろう。

「これからだ、明日の早朝には出るから、今日は早めに寝ておけ。街は監視されている。」

「分かりました。なぜこの宿に？」

「かなり狭い宿だが、休むだけなら十分だろう。誘導だ油断するな。」

「まあ、休むだけなら十分かもしれないけど、常時警戒ですね。」

「時間的にはそうだな……8時までには受付に集合としようか。水分身を置いて5時に出る。」

「十分寝られますね。明日の朝食はその辺で食べますか。どこからです？」

「8時ならその辺の店は開いてるだろう。便所からだ、朝は霧が出るらしい。」

「美味しい店に当たるといいんですけどね。なるほど。」

「ああ。そうだな。後は好きにしろ。」

「では部屋に戻ります。」

これで話は終わりとはばかりに、再不斬は布団に横になる。このような形を取ったということは、誰かが聞いているのだろう。いつもであれば、読唇術の練習とばかりに口パクは長くなるのだが、今回は要点のみだった。

部屋へと戻る前にトイレへと入り中の状態を確認しておく。トイレは寝る部屋よりも大きかったので少しショックではあるが、泊まる人数を考えれば、これくらいの空間は普通かもしれない。窓に關しては木枠で出来たもので、簡単に外せそうであった。用を足して部屋へと戻る。

部屋に入り鍵を掛けて、籠を確認すると、僅かに動かした形跡が見て取れた。慌てず何事もなかったかのように取られてもいい金品を幾つか籠の中に入れていく。元々食材とその調理道具しか入っていないので、盗まれても問題は無い。問題があるとすれば、この籠を確認した者がいるということ。そして恐らくは、扉以外からもこの部屋へと侵入することが可能ということだ。

前者はまだいいとして、後者は完全に不意打ちを受けること前提になつてしまう。

(あの島での鍛錬がいきなり役に立つなんて思いもしなかった)

布団に横になり明かりを小さくする。時間は夜の8時で睡眠時間としては沢山ある。仮眠をしたふりをしつつ、部屋の周囲へと意識を飛ばし誰かいないかを確認する。

(遮蔽物があると、どうしても意識を集中しないと見つけれられないな。これは今後の課題つと……2人か)

横の部屋に1人と天井に1人どうやらいるようだ。ただの監視ならば、迂闊な行動さえしなければ問題ないだろうが、物盗りの類であれば予定を変更しなければならぬ。

どうやら時間ごとに交代のようで、数時間おきに交代しているのが分かる。建物が古いせいもあるのだろう、移動の際の音が完全に消し切れていない。

(ある程度の技術のある組織の人、もしくは忍者かもしれないけど、上忍クラスではないのは間違いないかな。よくて中忍クラス)

監視している相手の情報を頭に控えておき、時計を確認する。もうすぐ指定された5時に近づいていたので、ワザとらしく起き上がり、欠伸をしながらトイレへと向かう。その際に天井にいた者が移動する微かな音がした。どうやら監視は宿全体に行っているわけでは無く、ひとりひとりに担当がついているのだろう。

トイレにて大の方に入り扉を閉めて、気配を確認すると、入口の天井付近にて気配を感じていた。真上に来ていたらどうしようかと、色々考えていたが杞憂に終わったようだ。

その後水分身を行い、自分の気配を消して、水分身に鍵を渡し部屋へと戻らせる。鍛錬の成果で1体分だけではあるが、水なしでも水分身が作れるようになったのは進歩だろう。その分チャクラを多めに消費してしまが、チャクラの最大値を増やしていけばいいだろうと考えていた。

監視が離れたことを確認して木窓を開けると、霧が入り込んでくる。

(そういえば再不斬さんが言ってたな)

未だ外は暗かったが、木窓を潜り外へと音が出ないよう気を配りながら出て窓を閉める。宿から出たのはいいが、どちらに進むべきかと考えていると、突然肩を叩かれ反射的に離れてから、相手が再不斬であることに気付いた。反射的に飛んでしまったので、着地の際に少し音が出たのは仕方ないだろう。気付かれないことを祈りながら、肩を叩いてきた再不斬に対して溜息が出る。せめて少しくらい気配を出しておいてほしいものだった。

再不斬は、こちらの心情を全く気にしないとばかりに指をクイクイとして、ついてこいと言っているようだ。

今度は音を立てぬように、足元にチャクラを送り込みながら建物の隙間を移動していく。港町を入口からではなく、壁の方から出ていき一旦街や街道から離れる。

周囲に誰も居ないことを確認してから、再不斬は話し始めた。

「どうやらいまのこの姿は、手配書に載っているようだな」

「手配書というとお尋ね者ということですか？」

「そこまでではないが、最初に乗っていた大型船の到着先がさっきの港町だ。いつまで経っても来ないから乗員全員の手配書でも回っているんだろう。顔までは書かれた記憶はないが、特徴くらいは伝わっているはずだ」

「街へ入ってきた2人組がその手配書に似ていたので、確認と人数集めのために監視していたというところですか」

「そうだろうな。あの船には余程の物が積んであったようだ。今も探しているくらいだからな」

「大型の積み荷は見ずにそのままにしてありましたからね。見ておけばよかったですでしょうか？」

「そうだな。可能性は低いが忍具であれば欲しかったところだな。今更だが……」

「取り敢えず火の国までは、ここから北西の方へ行けばいいんですよ？」

「そうだな。興味本位で鍛えたがお前はこれからどうするんだ？」

「面白いことは近くで見たいと思いませんか？」

再不斬はこちらが言っていることが分からなかったのだろう。続きを促してくる。どこまで話したのかと思案するも、既に知識について再不斬に怪しまれているのは分かっているので、少しくらいはいいだろうと思いい話すことにした。

「火の国に、木の葉の里があるのはご存知ですか？」

「それくらいは知っている」

「その里内で近々……と言っても数年内ですが内乱が起きる予定です。内乱と言っても一般住民に被害は出ないようですが、その数年後には更に大きな事が起きる予定です。飽くまで予定ですよ？」

「お前は未来が見えるのか？」

「私の血継限界については、再不斬さんに教えた通り雪一族です。雪一族に未来視があれば、簡単に殺られたりはしなかったと思います」「だからと言ってお前に無いとは限らん」

（さすがに騙されてはくれないか）

「未来は人の行動次第でいくつにも変わります。なので知っている私が動けば変わってしまうのは明らかではないですか？」

「変える気は無いということか？」

「全くというわけではないですが、近くで見たいというのが一番の本音ですよ。そういう意味では再不斬さんにあの場で会えたのは幸運でした」

「まるで会えるのが分かっていたかのような」

「再不斬さんに名前を貰えなかったら、たぶんあのまま霧がくれの里に居たでしょうね」

「答えになっていないがまあいい。（多少未来を知ったからと言って出来ることと出来ないことはあるからな）……それで？ どうやって木の葉の里に入る気だ？」

「……どうやって入りましょう？ 孤児院入りだけは何としても阻止したいところなんですよね……」

「普通は親が居なければ孤児院行きだろうな」

（火影の上層部の事について、話してもいいものかなあ）

少し悩むが、相談しておいて問題ないと割り切り話し始める。

「えつとここからの事は内密でお願いしたいんですが……」

「どちらにしても、子供から聞いた話など誰も信じんだろう」

「再不斬さんの言葉として発されると、信じる人もいるかもしれないので」

「いいからさっさと見え」

「はあ……お願いしますよ……。孤児院についてなんですけど、その運営に火影上層部の人が関与していて、その子供を自分の部下として教育、もしくは実験をしているようなんですね。そんなところに行つて血継限界であることが分かったら利用される確率高すぎます」

孤児院がどのような所かは知らないが、三歳で今の技術があれば即連れて行かれるだろう。上忍クラスにずっと隠し通せるほどの技術が、今の自分にあるとは到底思えない。それは再不斬を相手にして常々思っていることだ。チャクラを使わずに生活すれば可能かもしれないが、それでは折角の技術も衰えてしまうような気がしてしまうのだ。

「まあお前の好きにするといい。俺も取り敢えず水の国を出なければならなかったからな」

「再不斬さんはこれからどうするんですか？」

「仕事だな」

「働き者ですね。では、ひとつだけ言っておきます」

「なんだ？」

「働き先には注意してください。鏡については、こちらのチャクラが枯渇しない限りたぶん維持できるので、そのまま持つていてください。数年後に私が再不斬さんのお手伝いをする予定ですので、それまでに色々と足手まといにならないよう鍛えておきます」

「いまその内容を言っただけじゃないのか？」

「先ほども言いましたが、未来への流れを変える気はあまりありませんよ」

再不斬から僅かだが苛立ち始めている雰囲気を感じ取る。

「ここでお前が死ぬとどうなる？」

「ただ死ぬ時期が早くなるだけですね」

「あつさりだな」

「簡単に考えるように教えてくれたのは再不斬さんですよ？」

「そうだったな」

再不斬は毒気を抜かれたように、いままでの気配を散らし、いつもの状態に戻った。

「取り敢えず次の街までは一緒に行きませんか？変化の術を再不斬さんだけが使えば、親子だと思われるでしょうし、手配書からも目を逸らしやすくなると思いますか？」

「いいだろう。そうと決まればいくぞ」

辺りが明るくなってきた頃、次の街へ向けて2人は歩を進めた。

17 注意？

山の中を街道沿いに駆けていると、霧が段々と晴れてきた。完全に霧が晴れる前に、服に付いた葉っぱなどを払落とし、人通りが無いことを確認してから街道へと出ていく。

「全く人通りがありませんね」

「そうだな」

子供らしく、落ち着きが無いように振る舞いながら、周りをキョロキョロと見回して進んでいく。こういう時に自分の外見は便利だった。周りを気にせずに警戒することが出来るのだから。

周囲を見渡すが、特に怪しいところはない。また、何かに見張られているような感じも受けること無く進んでいく。上忍クラスが相手では、見張られていても分からないかもしれないが、再不斬が警戒していないところを見るに、今のところここまでは順調なのだろう。

残念なことは、途中で休憩所のようなところがない事だろうか。

そんなことを考えながら進んでいると、あることが起きた。

「！」

港町においてきた水分身が、何者かによつて殺られたようだ。わざと一般人のような振る舞いをするようにしていたので、殺られることは想定内だが、尋問なりなんなりされて、もつと時間が稼げると考えていた。

表情はニコニコと変えることなく、再不斬に問いかける。

「再不斬さん」

「分かっている」

再不斬にも分かっていたようだ。おそらくは同じような命令をとっていたのだろう。

時間稼ぎが終わったいま、港町からこの街道を通っている自分達は、十分に怪しい部類に入るだろう。殺った際の消え方で、忍者であるとあたりをつけるはずだ。波の国に隠れ里が無いとはいえ、忍者が居ないとは言えない。逆に雇われの忍者がいる可能性が高いだろう。

「どうでしょうか？」

「俺は、次の街までこのまま行くつもりだ。もともとそういう話だっただろう?」

「まあ、そうですね。と言うか、このままだとヤバイのって、こっちだけじゃないですか? 変化の術を使ってないし……」

「そう言うことだな」

既に街道を通っている時に、数人とすれ違っているの、今更変化の術を使用したところで、再不斬と共にいるのでは意味がない。平然と答える再不斬に対して溜息が出そうになるが、どこで見られているか分からないので、表情は崩さずに心の中でガツクリと項垂れる。

(未だに後先を考慮出来ない自分が恨めしい)

昼にはまだ早い時間帯だったが、店の立ち並ぶ場所が見えてきた。

一瞬もう街に着いたのかと思うようなところだが、街道の両脇に数件並んでいるだけで、その先はまた街道が続くことから、自分の考え違いであると分かる。

「少し早いですが食事にしませんか? 朝飯も食べていませんし」

「余裕だな」

「慌てても仕方ないですよ。腹が減ってはなんとやらです。それに、最悪誘拐されたことにするか、再不斬さんが私を背負って連れて行くという手段が「それは無いな。その時は俺だけ安全にいかせてもらう」……ですよね」

「しかし、飯を食うことには賛成だ」

もし追手が来た際の手段を軽く言ってみたのだが、言い切る前に再不斬に即答されてしまった。再不斬にとっては、自分について来ない相手を、守る理由もないので当然のことだろう。しかし、この言葉が食後の白の予定を組み立てるものにはなる。

(再不斬さんについていけば戦闘面で安全だと思ったけど、さっきの言葉から、追いつかれた際に見捨てられるのは間違いない……。まあ、余程の相手でもない限り、逃げ切る自信はあるけど、これからもずっと追われる可能性があるし……。それならいっそ、食後すぐに次の街へ変化の術を使って移動した方が遥かに安全かな? うん、そうしよう)

今後の方針を決め、借りていた物を返そうと懐に手を入れたところで、再不斬から声が掛けられた。

「それは預けておいてやる」

「……次はいつ会えるかわからないですよ？」

「いつか手伝いに来るんだろう？」

「まあそのために鏡を渡してますからね。しかし結構先のことになると思いますよ？ 忘れた頃につてくらいに」

「通信手段としても使えるなら問題ないだろう」

「目的地に着いたら一方通行にしますよ。いきなり声を出されても困るので」

「その辺は好きにするといい。どうせお前の術だからな」

「その鏡が消えたら、私が死んだと思ってください。まあそう簡単に死んだりしませんけど」

「あれだけ鍛えてやったんだ。そんな簡単に死なれては、興味本位だったとはいえ俺の沽券に係わる」

「そんなこと気にするんですね」

「まあ、たまにはな……」

軽口を交わしつつ、店の並ぶ場所へと到着する。再不斬の好きそうな店が無いか見てみるが、軽食店のようなところか団子屋のような休憩所と最後に宿が一軒あるくらいだった。こんな場所で宿に需要があるのだろうかと思うが、港町への距離を考えると、まあ在っても不思議ではない。それほど大きな宿ではないし、飲食店とセットということで寝ることだけを考えればいいという、ある意味港町で泊まったような宿の形態だろう。

軽食店のどこにするかと目線を再不斬へと向けてみるが、どこでもいいのか一番近い店へと入っていった。一番近い店は蕎麦屋のようだ。店は奥に細くなっており、入口のある面はそれほど広くはなかった。中へ入ると、すぐにカウンターがあり、椅子は壁の方に並んでいる。どうやら立ち食い蕎麦屋のようだ。

かけそばを注文すると、奥から女性がカウンターの外側に出てきて、脚の高い椅子をカウンターへと持ってきた。

「お嬢ちゃんはこの座るといいよ」

「ありがとうございます（男なだけど……）」

「お礼がちゃんと言えるなんて偉いねえ。どこから来たんだい？」

「（答え難いことを聞いてくるなあ）えーっと海があるところから」

「海というと港町かねえ。あそこは結構前に船が来なくて大変なことになってるみたいだから、みんな住みにくくなってるなってみたいだよ。って言ってもあそこから来たんなら知ってるだろうね。海賊に襲われたって噂が広がってるから、たぶんいまも海を探し回ってると思うけど、実際のところどうなんだい？ なにやら怪しい連中が、港町を拠点にして探してるっていうじゃないか。水の国からこつちへ来るとしたらってことを考えると「はいお待ちどう」なんだい人が話してる時に！」

「料理が出来たのにお客を待たせる方が失礼だろうが！」

何やら二人で言い合いを始めてしまったが、こちらとしてはとてもありがたいことだった。

（ナイスタイミングだよおじさん！ このお婆さん、世間話が非常に長くなりそうな気がする。それに対して再不斬さんは、知らぬ顔して無視してるし……）

お婆さんの話の途中でチラリと再不斬の方を見てみたが、俺には関係ないと言わんばかりにこちらを見ようとしもない。確かに自分の事を話すのは避けたいが、こつちも一方的に話されるのも勘弁してほしいところだった。

目の前に出されたかけそばを食べるべく、割り箸を取ろうとして、再不斬から割り箸を割ったものを目の前に差し出された。不思議に思い再不斬の方を見ると、眼で気を付けろと言っているようだ。

「ありがとうございます（何を警戒してるんだろう？ 一応注意してるんだけど？）」

訳も分からずに、取り敢えず礼を言ってから蕎麦を一口慎重に食べてみる。特に毒が入っているわけでもないようだし、味も普通の蕎麦である。再不斬の方を見ても普通に食べていることから、こつちのかけそばにも毒などは入っていないだろう。取り敢えず、朝から何も食

べていないので、余計なことは考えずに食事を行う。

食べている間もおばさんとおじさんの言い合いから、こちらへの愚痴に似たマシンガントークへと変わって続いていたが、食べることに夢中になっていることにして無視していた。

食事を終わると、再不斬が二人分のお金を支払った。2人分支払ったのは、変に怪しまれないためだろう。その後すぐに店を出る。おばさんは「またきなよ!」と、店の外まで出てきて叫んでいた。笑顔で振り返りながら手を振っておく。非常に煩わしいことこのうえなかつた。

店のある通りから離れたところで、再不斬に問いかけた。

「なぜ割り箸をくれたんですか?」

「お前はもう少し自分の年齢と体格を意識した方がいいぞ。その年齢で器用に割り箸を割ったり使ったりはしない」

「そういうことでしたか……」

確かに言われてみれば、力が無いはずの年頃の子供が、何事もないように綺麗に割り箸を割ってそばを食べ始めれば、違和感を覚えられないかもしれない。箸を器用に使っている時点で、少しの違和感を覚えるかもしれないが、教育の賜物で済む話でもある。

(ああいう場での立ち居振る舞いにも注意しないとイケないか……。島では再不斬さんと2人だったから気になかったけど、今後は気を付けないとな。それにしても気を付けることが多過ぎるな……。早く年を取りたい……)

少し現実逃避をしてみたが、追われる立場であることを思い出し、再不斬に別れを告げる。

「ではこの辺りでお先に失礼します。それではまたいつか」

「ああ」

何事もなかったかのように、横手の雑木林へと入り山の方へと向かい、街道がギリギリ見える位置まで移動する。

そこで、変化の術を使用して次の街へと向けて駆けていった。

18 休息？

ひたすらに駆け抜けたおかげなのか、日の位置的に三時くらいだろう。次の街へと辿り着くことが出来た。

街の入口と思える場所には、わざわざ柵を設けて門が設置してある。その周囲には、特に街の名前が書いてあるわけでもない。その門からだが、建物が見えるところまで障害物が何もなく見晴らしのいい道が少々長めに続いていた。こんな離れたところに門を造って意味があるのか不明だ。

門の付近から見ると、建物が丘の上にあるので数件しか確認できないが、もしかしたらここは村かもしれない。建物群の全体像見えないので何とも言い難いが、港町からの距離と時間を考えるに、宿泊施設くらいはあると思いたいところだった。

一応、門を潜る前に身だしなみを整えて、丘の上へと進んでいく。(旅に必要なものを買い揃えないといけないけど、ここにはそういった店つてあるかな？ せめて地図くらいは欲しいな……。それと、今後は野宿することも考慮しないといけないだろうし。本格的に寒くなる前に火の国に入りたい……)

門を潜ってしばらく歩いてみると、建物の方から視線を感じた。気付かない振りをしてそのまま進んでいく。この視線がずっと続くようであれば、この街に泊まるのは危険かもしれない。ここで漸く門が離れているのと、見晴らしがよかった理由に思い至った。

(監視がしやすいようにということか……)

丘の上まで登り切ったところで立ち止まり、ここが村ではなく街だということがよく分かった。どうやらちよつとした盆地のような形をしており、この丘のようになっているところから、街全体を一望することができた。

今にして思えば、大陸のメイン街道だと思われるので、それなりの大きさの街に発展するのは当たり前かもしれない。

丘の上から街中へ向けて進んでいくと、幸いにも登って来る間に感じていた視線が外れた。ただ珍しかったのか、それとも、街入りした

者をチェックするための監視の類なのか微妙な所だ。

まずは買い物をするべく店の立ち並んでいる場所へと向かう。港町とは違い、それなりに人通りが多い。普通はこのようなものだろう。むしろ港町が異常だった。

目的の店へと入り旅の準備を整えていく。港町の宿に、籠などを置いてきてしまっていたので、ほぼ手ぶらの状態での移動は、旅人として怪しんでくださいと言っているようなものだ。再不斬と別れる際、巻物や忍具を預かるついでに、カモフラージュ用の旅人道具が、もう1セットくらいあれば貰っておくべきだったかもしれないと、今更ながら少し後悔していた。

他にも色々な店があり、品物についてもそれなりに充実していた。そんな中で店を巡っていると、地図も置いてあった。その描いてある内容は、波の国だけのものであり、しかも大雑把な地図で、道などが書いてあるわけでもなく、街の位置がこの辺にあるというだけの代物だ。その程度のものにも関わらず、結構な値段がつけてある。

(これは自分で覚えた方がいいかな……。メイン街道沿いに進んでいくとして、この地図が正しければ、あと3つほどの街経由で火の国に入れるみたいだし……。一番の問題はどうやって木の葉の里で生活するかなんだけど……。いい考えが浮かばないな。取り敢えず、火の国に入ってから考えよう)

問題を先送りにして今すべきことに考えを戻す。

地図の購入については——お金はある。購入しても、恐らくは火の国まで余裕で足りるだろう。しかし、その先の事を考えると、少しでも節約した方がいいだろうと思ひ、地図を買うのは控えた。ただ、地図の中身を覚えるのは忘れない。地図に少し見入ってしまったら、店主が少し睨んでいるような気がするが、これは仕方ないだろう。

他にも、寒さ対策に、服や毛布を買うのも忘れない。子供用の服を買う時に少々訝しげに見られたが、土産として買うには5着は多すぎたのだろうと自分を納得させていた。

色々と回っているうちに、夕方になったので、宿に行く前に夕食を済ませることにした。店については、適当にその辺りの所に入ろうと

して、久しぶりの漂ってきた匂いについつい反応してしまう。

(そういえば、ラーメンなんて食べてなかったな。木の葉の里にも、ナルトが気に入っていたラーメン屋があったはずだし、味の比較をするのもいいかもしれない)

そんなことを思いながら店の中へと入っていく。ラーメンの種類については至ってシンプルで、しょうゆ、塩、魚介の三種類だった。それに定食がついてきたりするくらいのもんだ。せつかく海に近いので、この場は魚介を選択し、店員に注文する。

仕事の終わりなのだろう、注文してしばらくすると段々と店内に人が増えてきた。人が来るといふことは、味についてはある程度保証されているとみていいだろう。過度な期待はいけないが、それでも少しは期待してしまう。

出されたラーメンは確かに美味しいものだった。見た目は普通のラーメンで、具材がチャーシューだけなのが残念。その代わりにと言ってもいいくらいに、スープに魚介類の味がたっぷりと堪能できたので個人的には満足だ。それ以外で文句をつけるなら、持つてくるときに、ラーメン縁を持つてきているのだが、その時に汁に親指を突っ込むのは止めてほしい。せめて盆くらい使えよと思ってしまう。その場で言っていないのであれだが、周りの客へと持つていく様を見ても同じことをしているのだから、ここではあれが普通なのだろう。慣れてしまえばいいかもしれないが……やっぱりよくないだろう。衛生面的に……。

(お姉さんならともかく、おばさんの指入りはどうかと思う。誰か注意する猛者は居ないのかな……)

注意しても直りそうにはなさそうだが……と、そんなことを思いつつ夕食を終えて店を出る。

街中を歩いていると、たまに視線を感じることはあるが、特に監視するようなものではなく、余所者を見るような感じであったため、この街にて泊まることにした。もし捕まえるのであれば、既にアクシオンを起こしてもよさそうなのに、それが無いのも理由のひとつだ。

宿については、買い物をする際にいくつか聞いていたので、それほ

ど迷うことなく向かう。今までまともな所で寝ていなかったの、今
回だけは少し高めの宿にすることに決めていた。高めと言つてもい
くつか聞いた中で真ん中あたりの値段の宿にただけだが……。

夕食は無いが朝食は有り。部屋にはシャワーとトイレが付いてい
て、共有ではあるが大浴場もあるようだ。受付にて説明を一通り受け
て、宿泊名簿に名前を書く。本名を書くのはさすがにマズイと思い、
悩んでいると偽名と思われかねないので、単純に白の上に一を足して
百とした。自分のことながら安易すぎる。しかし、所詮はただの記帳
であるし、身分証のようなものが無いので、確認されることもないか
らこれで問題ないだろう。

受付にてお金を支払い、鍵を貰い受けて部屋へと向かった。部屋は
一般的なビジネスホテルのようなものだが、前の宿が宿だけに、天と
地ほども違うと実感していた。

荷物を置いて気配を探り、両隣の部屋を含めて、誰も居ないことを
確認してから、部屋の中を見て回る。大体調べ終わり、変な仕掛けが
無いことを確認してから変化の術を解く。窓はあるがカーテンにて
目隠し済みだ。

(今日はシャワーを浴びて寝よう)

大浴場にも行つてはみたかったが、それよりも久しぶりにゆっくり
と休みたい、という気持ちの方が強かった。別段警戒を怠る気は無い
が、島ではいつクナイなどが飛んでくるか分からなかったし、島を出
てからもまともに休んでいない事が大きい。

念には念を入れて、簡易なトラップくらいは仕掛けておく。人が
入ってきた際に鈴がなるような物だが、ないよりマシだろう。島での
鍛錬があつたとはいえ、完全とは言い難いので保険のようなものだ。
その後、シャワーを浴びて寝ることにしたわけだが、ベッドの上
の布団が柔らかくて気持ち良すぎた。入つてすぐに寝てしまったの
は言うまでもない。

翌朝。特に寝ている間に何かあつたわけではないようで、久しぶり
に熟睡できていた。朝に目覚めて、ここまで清々しい朝を迎えること

が出来たのはいつ振りだろうかと考え、こつちの世界に来て、初めてかもしれないことに溜息を漏らす。

このまま二度寝をしても良かったが、本来の目的を思い出した。張っていたトラップを取り外して、変化の術を使用し、荷物を背負って食堂へと向かう。朝の7時ということもあり、それなりに人が入っていた。

食事はバイキング形式ではなく、鍵番号を見せての配膳形式で、料理の乗った盆を渡される。

盆に乗った内容は、ご飯に味噌汁に魚と普通だ。お茶についてはセルフサービスのようで、自分でやかんから注いでいく。適当に空いている席へと座り朝食を食べた。普通の宿でこの食事なら、高級なところだと、いったいどんなものが出てくるのだろうと興味が沸いてしまう。

朝食を食べ終えて、籠を背負い直し受付へと向かう。鍵を返して宿を出たところで、またしても視線を感じた。今度も偶々かもしれないと思い、次の街へと向かって街の外へと歩いていくが、今回は視線が外れることはなかった。

見られているというのは分かるが、それがどこからかと言われると少し曖昧だ。丘の上辺りまで登ったところで、ゆっくりと街を見る振りをして振り返ると、咄嗟に建物の陰へと隠れる人が数人いた。どうやら完全にこちらをターゲットとして尾行、もしくは監視をしているようだ。

もしこれが、この街を出てからも続くようであれば、何かしらの対策をしないといけない。あれほど簡単に監視がばれるようなことをしているので、忍者ではなくただの一般人だとは思うが……。しかし、一般人でも数が多いと厄介になるのは間違いない。

今後の事を考えると、少し憂鬱になりながら次の街へ向けて進む。尾行と監視はこの街限定でありますようにと思いつながら……。

19 尾行？

街道に出たからしばらく経っても、街の方角からの気配——視線が消えることはなかった。それどころか、おそらくは尾行されている。

尾行されている本人が気付いている時点で、尾行といえるのか微妙なところだ。白からしたら、ストーカーに付き纏わられている感じなので、あまりいい気分ではなかった。

一度、何気なく後ろを見たときに、遠目にだが旅人風な人物が2人と、横手の林の方に、隠れているつもりかもしれないが、2人ほど居るのを確認できた。

街を出るときには、丘から門までの距離で、誰も居なかったにも関わらず、今いることを考えると、昨日の時点で、既にマークされて準備していたのは間違いないだろう。

これからの対応で問題なのは、次の街までどのくらいの距離なのか分からないことだ。

(それまでに店があれば、分身をゆっくりと行かせて、本体は先に街へと向かえばいいかな？ だけど、途中で襲われるとなると、逃げるべきか、それとも戦うべきか悩むなあ。昨日からマークされていたことは、次の街、もしくはそれまでに待ち伏せもあるかもしれないし……)

人数がいま後ろにいる4人だけなら、逃げることは話は簡単だが、先の事を考えると簡単には動けない。

街から出た人は把握されているだろうことは想像がつくので、他の人に変化してもすぐにバレてしまう。

なかなか考えが纏まらないまま、歩いていくと、甘味処と書かれた旗を飾つてある店があるのが見えた。時計を確認すると、時刻としては10時頃。ちよつとした休憩としてはおかしくない時間だ。

店へと入る際に、横目でチラリと尾行側との距離を確認する。だいたい50mくらいだろうか。こちらでも移動速度を少しだけ上げていたにも関わらず、最初よりも僅かずつではあるが近づいているのが分

かった。

(ここで通り過ぎてくれたら杞憂でいいんだけど、あり得ないよなあ……)

店へと入り、適当に持ち帰りの品で、時間のかかりそうにない物を注文してトイレへと向かう。そこで、余分なチャクラを使用しない為に、タンクから水分身を造りだし店へと戻らせた。

これで、尾行していた側が店に寄ったとしても、少しは時間が稼げるだろう。ただ、この店で戦闘になったら少し困ったことになるが……。

尾行側の2人が店へと入って来た時に、水分身は無事に持ち帰りの品を受け取り、入れ違いのようにして店を出ていく。尾行側が少し焦ったような顔をしているのは、なかなか面白い。まさか休憩せずに持ち帰るとは思ってたのだろうか。

すぐに店を出れば怪しまれるだろうし、どうするのかを2人でコソコソとやり取りしているようだ。

トイレの窓を少し開けて外に誰もいないかを確認する。林側の追手は先に向かったようで、外に人の気配はなかった。

窓から音を立てないように荷物を出して、自分自身も出ようとしたところ、店内から誰かがトイレに近づいているのが分かった。少し焦って、窓の下へとすぐさま降りたところで、すぐにトイレの戸が開かれた。

(いま、窓から顔を出して下を覗かれると、完全にアウトだな)

入ってきた人物が出るまでそう時間は掛からなかったが、こっちの心情を知らずに、トイレから出るまでにぶつぶつと文句を聞かされていた。その間、こちらが緊張していたことには変わらない。出ていった今も少し冷や汗をかいているくらいだ。

トイレから離れていくのを窓から確認してホッとひと息つく。まさかトイレに来るだなんて予想だにしていなかった。

(何事も色々な可能性を考えとかなないといけないな。余裕を見せていい時ではないし)

その後、さきほどの追手の人物(トイレに入ってきた男)に変化し

て荷物を背負い直し、歩きにくくはあるが、街道から外れて次の街へと向かう。

水分身については、先ほどのところで食べ物を購入しているの、昼食についてはそれで済まさせて、延々と歩いてもらおうつもりだ。その際に、もし戦闘になることがあれば、逃げるようにしているの、時間稼ぎには十分だろう。

最初はこちらが先に到着するつもりだったが、先に到着すると、例え街道から街へと入らずとも、警戒されかねないと思いついたのである。その分、水分身の方が先に到着すれば、そちらへと警戒意識が向くだろうという考えでもある。

お昼前に丁度よく店があった。店の裏手に回り店内の気配を探る。

店内には調理場以外には誰も居らず、街道の方を見てみても誰も来てはいない。安全を確認してから、荷物を店の裏手に置いておいて、店内へと入っていく。

カウンター席に座り、メニュー表を見たところで、調理場にいた男から声が掛けられた。

「こんなところで呑気に飯を食べていいのか？ 相方に任せっぱなしだとまた文句言われるぞ」

何のことか一瞬わからなかったが、どうやらこの男も仲間の内の1人のようで、更に言うならば変化をした自分と知り合いであることが分かる。

(話を合わせないとまずいな)

まさか、店の人まで追手側の仲間とは思っていなかったの、内心焦りまくりである。トイレで独り言を言っていたのを思い出し、同じような口調で返答する。

「いいんだよ。少しくらい」

余計なボロを出さないように短めに答え、早くできそうなものを注文する。

「まあ、愛想をつかさねないことだな。お前さんは、次の街までの人数合わせなんだろう？ それに比べてこっちは飯に睡眠薬を入れるときたもんだ。料理人としちやあ嫌なんだが、ここらで商売するには逆ら

えないところがつらいもんだな。大名に逆らえば一発でお終いだ。ほら、出来たぞ」

「さっさと食べて追いつくことにするよ（人数合わせね……）」

「そうしとけ。全くこんな面倒事いつまで続けるのやら」

出された昼食をさっさと食べ終わり、代金を支払う。

「んじやまたな」

「ああ、また」

ボロが出なかつただろうかと、店の外に出て思うが、今更どうにもならない。料理自体を作っているところは怪しいところが無いかしっかりと見ていたし、特に不審な点はなかった。匂いと味についても、毒の類は入っていないようだったし、あの対応でよかったのだと思うことにした。

問題があるとすれば、尾行していた2人が元来た道を帰ってきた時に、あの店に寄ることによって生じることだが、それまでに離れてしまえばいいだろう。

気持ちを切り替えて、街道に人が居ないことを確認し、店の裏手へと回り込む。

（街道は息のかかった人ばかりの可能性が高いのか……。これがどこまでの範囲で影響しているかだけど、波の国全体だとしたらかなりマズいなあ。休憩は最低限で、さっさと火の国に向かたほうがよさそうかな？）

置いておいた荷物が触られてないことを確認し、改めて背負い直して先へと進む。

次の街までは、尾行していた者たちを無理に追い越さず、逆に遠目にて見える距離をキープする。もし、水分身の方が襲撃を受ければ、その間に先へと進めばいいし、襲われなければ、そのままついていくだけだ。しかし恐らくは、昼食を食べた店の男が言うには、この変化した男は人数合わせ。なので、尾行ではなく襲撃の可能性が高いだろう。

そして実際にその時が来た。

はじめは遠目だったので分かりにくかったが、簡易な関所のような

物が街道に設置されており、そこで荷物の検査をしているようだ。おそらくは、ここで大型船の積み荷の一部でも無いのかを、合法的に確認するためだろう。

荷物の中身を言うだけで、なかなか見せようとしない水分身に対して、そこに居た全員が刃物を抜き始める。それは尾行していた男たちも同じで、林の方に居た男たちも街道へと出てきていた。水分身がわざとらしく後ずさりして後ろに向けて走ろうとしたところで、尾行していた者たちに遮られる。

なにやら相手側が何か言って包囲しようとしているようだが、包囲される前に、包囲の隙間、水分身はこちらとは逆の山の方へと走っていった。それを関所に居たほとんどの者たちが追って行く。

結局関所に残ったのは4人。街道から尾行していた2人と、元々関所に居た2人。尾行していた2人は、これで仕事は終わりなのか、刃物を収めてお金を貰っているようだ。安堵しているのが分かるし、関所に居た2人も油断しているのが分かった。

(後は水分身が攻撃喰らわないように、かつ、あまり追手を引きはがさないように頑張るだけっと)

ただ、尾行していた2人の行動が、事前に予測していたものとなつた場合、それほど時間をかけることが出来ない。

最悪の事態を想定しつつ、水分身によつて時間稼ぎが出来たところで、次の街へ向けて本格的に走り出した。

20 逃亡生活？

次の街について、始めにやったことと言えば、変化の術にて街の人に化けて、食料などの必需品を買い込んだことだ。もちろん、ひとつの店で買い込むことはせずに、色々な店で分けて購入する。ひとつの店で購入すると怪しまれるかもしれないからだ。

あの尾行をしていた雇われの人たちが、途中で立ち寄った店に行くことで、正体がばれる可能性がある。それを報告するかしないかで、時間がどのくらい稼げるのかが変わってくるが、安全策を取るのなら、この街での宿泊するのは諦めて、早々に先を急ぐ必要性がある。食料などの必需品さえあれば、野宿をする為の品を既に前の街にて購入してあるので、最低限は問題は無い。

ただ残念なことは、柔らかい布団でゆつくりと休めないことだろうか。寒い季節に毛布などがあるとはいえ、外での野宿はつらいものがある。小島でそれなりに慣らされたとは言え、実際に1人で行う野宿は初体験だ。不安もある。

今はまだ、夕方にも至っていない。街道をまともに通れないので、どこまで進めるか分からないが、完全に暗くなってしまう前に、寝床になりそうな場所を見つけなければならぬ。

(夜にもし雨が降ってきたら、それを避けれる場所があればいいんだけど)

この街の住人に変化したせいか、特に怪しまれるような視線を感じることもなく、街を出ることが出来た。

予定通り街道を通らずに、街道が見える位置にて並走する。途中に街道の分岐点などがあったが、方角的に村か何かがあるのだろう。人が通っていないことを確認して横断しつつ、先へ先へと進んでいく。

夕方になり、そろそろ寝床を見つけなければと探すが、そんなに都合のよい場所など見つかる訳もない。

(進むか、休憩か2つに1つ……。取り敢えず、お腹も減ったし飯を食べよう)

買っていただいた弁当を食べながら考える。

進むのであれば、街道を暗闇で見失うことのないように、今並走している距離よりも更に近づくか、完全に街道を走るかである。今はまだ人通りが少しはあるが、夜間になれば、人通りなどほぼ居なくなるだろうし、もし人が居て見られても、顔など分かりはしないだろう。休憩に関しては、最低限だが、出来る限り周りから見えにくく、さらに雨が凌げる場所が条件だ。今から探したとして、罨を張って、となるとそのような場所が、見つけられるのか不安な部分がある。

弁当を食べ終わり、結局答えの出ぬまま先へと進む。

（よし！ いい場所あつたら野宿！ 無かつたらそのまま突つ走る！）

方針を決めたら即実行とばかりに立ち上がり、籠を背負い直し、西へ向けて街道沿いに進んでいく。

空が曇っているために月明かりが乏しい。現在は街道にかなり近い位置を並走している。街道に人はいないが、一応用心するに越したことはない。街道でなければ、動物と勘違いしてくれるだろうという期待もある。

どれくらい走つただろうか。時間的には恐らく真夜中あたりになるだろう。ポツポツと遠目にだが、明かりの見える所まで来た。更に近づくと、そこが次の街であることが分かる。

（結局次の街に到着してしまつたか……。まあ、結果オーライかな）

時刻が時刻だけに、街の中は静まり返っている。少数ではあるが、飲み屋の帰りなのか、フラフラしながら帰っている者もいるが……。

（朝までの休憩になら使えるかな？）

周囲に誰の気配もないことを確認してから、酔っぱらいの1人を気絶させ、路地の方に引き込む。周りから見えないように近くにあつた箱を使い、埋め尽くすようにして酔っぱらいを隠してから、その者に変化して休憩することとした。

これでもし見つかつても、言い訳くらいはする時間もあるだろうし、その間に逃げればいい。水瞬身の術は、今のところそう何度も使えないが、この場を逃げることでくらいなら容易いだろう。

軒先と、近くにあつた箱などで簡易な雨と風避けを作り、そこで休

憩をとった。

不満はあるが仕方ない。地面は固いし冷たい。風避けがあるにしても、場所が路地のせいで風が通るので寒い。気絶させた男の酒臭いにおいが漂ってくる。そんな中で眠りについた。

夜明けになり、薄らとだが明るくなってきたことで目が覚めた。特に誰かに起こされた訳でもないし、襲われた訳でもないようだ。路地に入ったところなので、見つけにくいとかわざわざこんなところに入ってくる者もないだろう。

気絶させた男の状態を確認してみるが、意外に温かかった（顔と手については少々冷たかったが）どうやら凍死はしなかったようだ。箱で埋め尽くしたせいで、小さな密室に近い形になり自分の体温で温まったのだろう。地面は結構冷たかったが、この男の着ている厚着の服を見れば、あまり影響はなかったのかもしれない。

男についてはそのまま放置し、箱を片付けておく。直に寒さで目が覚めるだろう。誰かに見つかってもただの酔っぱらいが寝てるくらいにしか思われなはずだ。

片付け終わり、変化の術にて、この街へと入った時の男の姿に戻し、街の目立たなさそうと思われる場所から街の外に出る。

堂々と街への出入口を通っているのは、注目を集めてしまう可能性がある。一応、数人通っているのは見えたが、怪しまれるのは既に懲りているので、同じことが無いように注意していくだけだ。

ここから火の国は近いはずなので、そこに入ってしまったえば、このコソコソと隠れた生活ともおさらば出来るだろう。

まずは移動する前に食事をなるべく街道から見えない場所まで移動を行う。そこで火を焚き朝食をとる。多少煙が出てしまうが、こんな夜明けに、そこまで気にする人はいないだろう。煙自体も薄らと漂う霧で見えにくいはずだ。食事を簡単に作り、食べ終わって片付けをし、先を急ぐ。

街道沿いに行くと、また分岐点に差し掛かった。店にて描かれてあった地図を思い出す。

（そろそろ北の方に行くべきかな？）

木の葉の里の正確な位置が分からないので、この辺りからはほとんど適当と言うか勘頼りである。火の国に入り次第と言うか、火の国と波の国の境が分かっているないので何とも言えないが、ある程度進んだところで、街道を通っている人に尋ねるつもりだ。

（正確な地図があれば、何とでもなるのだけど。みんな、なぜ地図を作って普及しないのかが不思議だなあ。やっぱり戦争の影響？たまたに街道挟れてるところとか見かけるし、原作通りならこの後も危険なんだよなあ）

分岐路を北に向かって進んでいく。街道は意外と人通りが多く、行人や旅人などが行き交っていた。

（これだけ人の通りが多ければ、自分が街道に入っても分からないだろうけど、先を急ぎたいし……。軽食店で休むくらいにしとくかな）

そう考えている間に、店が数件見えてきた。街道から見えないように店の裏手に移動し、何事もなかったかのように街道へと出て、店の中へと入っていく。

未だに昼前。11時頃だというのに店の中は人で賑わっていた。街道には結構な人数が通っているのし、この次の事を考えると、ここで飯を食べるか、持ち帰るかしないといけないだろうから、店に人が多いのは理解できるが、まさか店内で待たされるとは思っていなかった。外に行列が出来ていなかったのも、何も考えずに入ってしまったことに少し後悔する。

待たされることしばし。注文して、料理が来て、食事をして、支払いを済ませ、結局店を出たのは12時過ぎだった。

（あんなふうに行列を待つのはなんか懐かしいな……）

感傷に浸りつつも、身体は無意識で勝手に動いていく。また店の裏手に回って、街道から離れた場所を北へと並走していく。

街道の通りが少なくなってきたところで、木の葉の里がどの辺りかを確認するため、一度街道に出て、人に尋ねることにした。

（行商人っぽい人がいいけど、見る限り居なさそう。適当に向こうから歩いてくる人に聞けばいいか）

街道を少し歩くと、2人組がこちら方面へと歩いてくるのが見え

た。2人は談笑しながら歩いているようだ。話好きならば丁度いいとばかりに声を掛ける。これももし、相手側一人だと警戒されて話しかけづらいが、相手側が2人、さらに言えば、互いに談笑しているような人たちならば、それほどこちらを警戒したりはしないだろう。

「お話の最中にすいません。お尋ねしたいことがあるんですが、いいですか？」

「ん？ なんだ？」

「火の国にある木の葉の里ってところに行きたいんですが、場所が分からなくって困ってたんです」

「ん。おまえ場所知ってるか？」

1人の男は思案気な顔をすると思いつかなかったのか、もう1人の方を見て尋ねている。

「知ってるって言えば知ってるが、正確な場所は思い出せないなあ……。俺が行ったのってかなり昔だぜ？」

「大体の場所だけでもいいので教えてください！（それがないとどうしようもない！）」

土下座でもしそうな勢いで頭を下げる。

「おいおい、そんなことしなくっても教えてやるよ。……ほとんど覚えてないけどな」

「それでも構いません」

「えーっと。俺らが来た道をかなり行って、どっかの分岐路で左に曲がるんだ。それくらいしか覚えてねえな」

「ありがとうございます！（とりあえず北にこのまま進んで途中左に行けばオーケーと）」

「あく。いいっていいって。大した情報でもないしさ」

「親切で言っておくが、木の葉の隠れ里は大陸の中心にあるせい、結構色んな所から狙われる場所らしいからな注意しろよ。一番いいのは近づかないことだけだな」

「ご忠告ありがとうございます。（確かに危険だけど、ある程度原作知ってる分、安全と言えば安全なんだよね。普通に暮らす分にはただ（ど）」

礼を再度2人組に言っ
て先へと進む。取り敢えずは、先ほど言われ
た通り北へ真っ直ぐに。

21 遭遇？

街道での二人組の話を聞いた通りに、北方面へと突き進む。もちろん目立たぬように、街道をそのまま通ることはせずに、離れて並走している。このような速さで街道を進んでは、私を怪しんでくださいと言っているようなものだからだ。

(かなり北ってという話だけど、どのくらいか分からないのが問題だよなあ……)

いくつか分岐路はあったが、こんなに近くはないだろうという思いで、通りすぎていた。

波の国の大きさを考えると、火の国は遥かに大きく、気持ち的にはその中央付近にあるのでは？と思っていたりもするのが原因だ。

二日ほど進んだところで、さすがに行きすぎたのではないかと思いつき、次の分岐路にて曲がることを決心した。

(もう曲がる！ 見つけたら曲がる！ 絶対曲がる！)

そして、実際に分岐路があった。しかし、想像していたよりも道幅が狭く、長年使っているようには到底見えない。本当にこんなところを通るのだろうかと一瞬思うが、一応木の葉の隠れ里だし、と思いつき、分岐路を曲がって直進する。

その結果、もののみごとに到着した――

行き止まりに……。

(ついてない……。と言うか始めから、怪しいと思った直感を信じるべきだった……)

分岐地点から半日ほど費やして進んだにも関わらず、結果がこれである。精神的にキツイものがあったのは言うまでもない。ここまでの道のりが無駄だと分かってしまったのだから。

実際には、行き止まりと言うよりも、より正確に言うならば、行き止まりではなく、獣道がある、というべきだろう。その獣道が奥の方へと続いているが、草木が生い茂っており、これは木の葉の里への入

口では有り得ないだろうと分かっってしまう。

原作では、確かナルトたちは普通に道を歩いて、波の国へと向かっていたはずだ。こんな獣道を通るなど考えられなかった。

変化の術を使用してはいるが、人とあまり関わらないようにと、あれから人との会話を避けて、情報収集を怠ったことが、いま完全に裏目に出てしまっていた。

(いまさら戻るのもなあ。既に夕方だし、ここで野宿でもするか？)

……でも、道があつたつてことは、少なくとも昔？は誰かが通つていたつてことであつて、この奥に人が居る可能性もある訳で……)

しばらくその場で立ちすくみ、どっちにすべきか悩んだが、結局結論が出なかった。

夕暮れも近くなつてきていたので……。

(迷つた時の天頼み！)

と、コイントスにて決めることにした。

(適当に平べつたい石はーつと。あつたあつた。こちら側を少し削つて、こつちが表でいいかな)

懐からクナイを取り出し、平べつたい石を削り始める。簡易なコイン変わりだが、お金がお札である以上、手元にコインがないので作るしかなかった。出来上がったコイン替わりの石を、右手で弾き上へと打ち上げる。

(表だつたら進む。裏だつたら戻る)

コインが落ちていくまでの間が、コインに集中していたせいだろう、とても長く感じるくらいに見入つてしまつていた。そのため、周囲に対する警戒心が緩んでいたと言つても過言ではない。

なので、気付いた時には、誰かが獣道の方からかなりの速さで、こちらの方へと来ていたのである。相手の気配が薄かったのもあるが、それによつて、かなりの接近を許してしまつていた。更に言うならば、こちらへと真つ直ぐに相手が向かつてきたこともあり、白はかなり焦つていた。そのため、波の国のようなこともあつて、攻撃されると思い込んでしまい、先手必勝とばかりに先に攻撃をしまつていたのである。

草むらから出てくると同時に相手へ向けて放つが、難なく躲される。

この時点で、不意を突いたにも関わらず、簡単に術を躲されたことで、逆に冷静になれた。

気付いた時には、かなり近くまで来ていたので、焦って攻撃してしまっただが、先程の動きで、相手が自分よりも格上だと判断し、すぐに逃げの一手を打つために準備をする。

相手の忍者は、避けた位置のまま立ち止まり、油断なくこちらと後方を警戒しているようだ。相手の忍者をよく観察すると、小脇に人を抱えているのが見える。

（人攫いか？ 後方を気にしているということは、追手が来ている可能性が高いのかな？ ……でも、これってこの忍者をこのまま素通りさせれば、こちらには被害はこないんじゃない？ この人確実に自分より強いみたいだし。安全第一にしよう、そうしよう）

少しの間、互いに睨みあうような形で牽制していたが、白は自分の右手にクナイを持ったままだということに気付き、懐に収めて話しかける。

「えーつと。さっきは驚いてこちらから攻撃してしまいましたが、どうやら間違いだっただようです。どうぞお通り下さい」

そう言って、少しずつ道を開けるようにして、道の端へと移動していく。

忍者は、こちらの意図が分からないのだろう。少し困惑しているようだったが、何を思ったのか、何も言わずにいきなり右手にクナイを持ったかと思うと、こちらへと向かってきた。

この時クナイを防げたのは、再不斬との鍛錬のおかげだろう。相手はこちらに向かった瞬間、懐からクナイを取り出し、防いだうえで、力では勝てないと判断し、白は後ろに飛ぶことで威力を軽減した。そして、もしかしたらと、逃げる為の一手として準備していた水瞬身の術で、咄嗟に移動し忍者から離れる。その後は、元来た道を全力疾走した。

しかし、嫌なことは続くもので、気配が追ってきているのが分かる。
（人攫いなら、その子だけで満足してろよ！ 自分に構うな！）
悪態をつきつつ、本気で逃げる為に術を使う。

（―――氷遁・氷柱壁！―――）

氷の柱を幾重にも重ねて壁を作り、視界を塞いだうえで変化の術を解く。さすがに変化の術を維持しつつ全力疾走しながらでは、これから行う術に対する集中力が足りない判断したためだ。

鍛錬の時は術のみでの使用でやっていたので、このように他の事をしながらと言うのは、経験がほぼなかった。そのため、変化の術を解いた時のほんの少しの時間が、この時には大幅なタイムロスになってしまったのは仕方ないことだろう。

（―――氷遁秘術・魔鏡……）

氷遁秘術・魔鏡氷晶にて逃げようとしたが、その前に追ってきた忍者に意識を刈り取られ、白はその場に倒れてしまった。

「まさか相手がこんなガキだったとは。しかも氷遁か……。血継限界持ちとは運がいい。他にもいい手土産が出来たな」

男はそういうと、白をもう片方に抱えて走り出した。が、その走り出した足を止めてしまう。

「<無駄に時間を取ってしまったか>」

男の後方には、1人の和風の着物を着た男が立っていた。

「日向家の白眼を渡すわけにはいかん」

その和風姿の男を見た瞬間に、子供を抱えたまま逃げ切れる相手ではないと判断したが、その時には既に遅く。和風男の接近を許してしまふ。しかし、敵に背を向けて逃げることも出来ず、かといってまともにも戦えば勝ち目はない。咄嗟の判断で、白を追手の男に投げつける。

血継限界は欲しいところだが、今回の任務内容は白眼の確保にある。欲を張って任務を達成できなければ意味が無い。そのため、男に投げつけることで、その隙に逃げるつもりであった。実際に投げた瞬間に背を向けて走り出したのである。

しかし、和風姿の男は、投げつけられた白に対して、見向きもせず

に易々と避けて、背後から男の心臓へと一撃を加えた。

それにより、男の心臓は止まり息絶えた。

和風姿の男は、倒れた男に対して、手ごたえはあったがまだ生きているかもしれないと、油断せずに観察する。そして、男が死んでいることを確認してから近づいていった。

「ヒナタは……気を失っているだけか」

身体の状態を確認し、安堵の表情でヒナタをそっと抱きかかえて、先ほど投げつけられた白の元へ行く。

「この子もどうやら木の葉から攫われたようだな……あの場にて投げつけてきたということは、優先順位としては日向の白眼が上なのは間違いない。しかし、この子供を攫っていたということは、それなりに手に入れておきたい何かがあると見た方がよさそうだな。外傷的には先ほど投げつけられた時の擦り傷くらいか。それにしても潜在チャクラが多いな。ヒナタのよい相手になるかもしれない」

大雑把に観察し、白も抱きかかえたところで、和風姿の男の部下の者が数人到着した。

「当主！お怪我はありませんか!？」

「心配は無用だ。そこの忍びから何か情報を得られるかもしれないから連れていけ」

「生きていますか?」

「いや……。死んでいる」

「分かりました。こちらで調べておきます。ところでその子は?」

部下の男は不思議そうに、当主と呼ばれた男が抱えている子供を見ている。男たちに与えられた情報では、日向家の子供が狙われているとしか聞かされておらず、既に攫われたので必ず奪還するようになると言われただけだ。その情報と照らし合わせても、1人は本家の嫡子だと知ってはいるが、もう1人には日向家において見覚えが無い。

「それについては、後で説明することにしよう。事後処理は任せただ」
「分かりました」

問いかけた男は大人しく引き下がり、死んだ男を背負うと、木の葉の里へ向けて移動を開始した。

残った男たちは、周囲の状況を確認し、情報となる物がないかの探索を行うこととした。

木の葉の里

22 里入？

白が気が付いた時に見えたのは、最後に見た景色ではなく、見知らぬ部屋の中だった。和風な家と言ったらしいのだろうか。その部屋の中央にて、白は布団に寝かされていた。

外はまだ明るくなっただばかりのようで、少し薄暗いように見える。
（取り敢えず、まだ生きてるみたいだ……。気が付いたら学生に戻ってるっていうのは夢の見すぎかな？）

意識があることを確認して、次に身体に異常がないか確認する。

布団の中で軽く身体の各部を動かし、その後、チャクラを身体中に行き渡らせてみるも異常なし。これから生きていくうえで、身体欠損やチャクラ使用不可能などになったら目も当てられない。

（溜息しか出ないけど、格上相手だと、逃げることも出来ないいうえに手加減されるなんてね……。相対して実力の違いが分かるだけでも、自分のレベルは上がってるんだろうけど……。自信なくすなあ……。）

あの場で、自分がなぜ殺されなかったのか不思議だった。しかも意識を刈り取るというやり方で、生かされたことを考えると、手加減されたと見ていいだろう。最初にクナイで襲いかかられたときは、完全に殺す気だったのに、だ。

生きてることに対して安堵するが、ここまで差があるのか、とも思えない知らされる。

再不斬との鍛錬は、かなりの手加減をしてもらっていたことに、今更ながらに気が付いた。こちらの手ごたえや自信を付けさせるために抑えていたのだろう。ある程度拮抗した実力の方が伸び代が高いことが多いので、敢えてそういう風に調整していたのかもしれない。体術に関して厳しかったのは、自分にあつた攻撃方法を見つけろということだったのだろう。

（自分の実力が、今どの辺りなのかを知っておきたいな。それにしても、ここはどこだろう？）

いま自分のいる場所に見覚えが無い。特に拘束されている訳では無いので、意識を失った後に、誰かに保護されたのだろう。

どれくらい寝ていたのか分からないが、不安は募る。

(服は着替えてないけど、懐に入れてた巻物とクナイがない。クナイはたぶんあの場に落としたんだろうけど、巻物は困る。それに、背負ってた籠も無いとなると、この先あてがない)

上半身を起こして部屋の中を見渡すと、持ってきていた籠が目に入った。

(良かった。籠の中のお金が無いと、最低限の生活すらできないし)

その籠に向けて歩き出し、実際に身体を動かすことに関しても問題がないことを確認する。そして、籠の中を見て、そこに懐に収めていた巻物があることに気付き、中身を確認した。ひとつは血継限界術が記された巻物。残り2つは再不斬から預かっている、持ち運び用の巻物である。ただし、クナイについては1本、懐に入れていた分が見当たらなかった。

(クナイ5本中1本紛失か……。クナイ1本で助かったと思えば安いものかな？ あの場所に落ちてるかもしれないけど、あの場所がどこか分からないし、諦めて買うしかないか……。再不斬さんのだけど、クナイはクナイだし、どれも一緒でしょ)

お金についても手を触れられた様子はなく、籠の下にある落とし底の下に敷き詰められたままだった。それを確認し、籠のふたを閉じたところで、人の気配がこちらへと近づいてくるのが分かった。

恐らくは、白の様子を見に来たのだろう。ここまで来てわざわざ殺されたりはしないはず。と思い、籠の近くで待機しておく。相手の意図が分からない以上、ここで逃げてもし方ないし、先ほど上には上が居ると思いついたばかりだったからだ。

障子を開けて入ってきたのは、和風姿の男が2人だった。1人の男の名前は日向ヒアシ。原作通りなら、日向ヒナタの父親である。もう1人については見覚えはないが、同じ格好をしていることから日向家の者だろう。

(ここは日向家か。ということは攫われたのはヒナタだったのかな

?)

「助けていただいてありがとうございます」

取り敢えず、その場にて正座をし、頭を下げて礼を述べておく。経過はどうなったのか分からないが、助けてもらったのは、推測ではあるが事実だろう。

頭を上げずにいると、日向ヒアシの方から声を掛けてきた。

「私は日向ヒアシという。頭を上げてよい、それと名前を聞いてもよいか?」

「失礼しました。名前は白です」

「白か。他に名前は無いか?」

「白しか分からないです（名前についても再不斬さんに付けてもらっただけだし）」

「どこから来たのか分かるか?」

「波の国から来ました。ここはどこなんでしょうか?（付き人の視線が厳しいけど、嘘は言っていないから大丈夫だよね?）」

「ここは木の葉の里だ。そちらにも聞きたいことはあるだろうが、それよりも、先にこちらから聞きたい。子供1人であんなところにいて親はどうした?」

「両親は死にました。波の国にいるよりも火の国が安全と思ったので、頑張って移動していたんですが、場所が分からなくて迷子になってました。そこへ覆面をした男がやってきて気を失いました」

「迷子か……」

ヒアシは思案顔になり、もう1人は「どうするんです?」と言わんばかりにヒアシの方を見ている。しばらく沈黙が流れ、白は耐え切れず声を掛けようとしたところで、逆にヒアシに声を掛けられた。

「これからどうするか決めてあるか?」

「決めきれません。火の国で暮らすことしか考えてませんでした」
「ではここに……、日向家に住んでみてはどうだ?」

この言葉にギョツとしたのは、一緒に居た男である。いきなり当主は何を言い出すのだと、驚きを隠せずに更に言葉まで出してしまっていた。

「当主！ 何を考えているんです！ 日向家に他の者を住まわせるな
ど！」

「別に日向の姓を名乗らせる訳では無い。＜ヒナタと恐らく同じ年頃
だし、一人で波の国からあそこまで来たのだ。体力はあるだろう、そ
れに恐らく忍術を使えるはずだ。ヒナタのよい練習相手になると思
わないか？＞」

「しかし、柔拳については、おいそれと教えていいものでは……」

男の言葉は段々としりつぼみのように弱弱しいものへと変わって
いく。例え柔拳を教わったとしても、日向家に伝わる白眼がなけれ
ば、ほぼ意味が無いことに気付いたのだ。教わることで対処の仕方く
らいは分かるかもしれないが、その対処と言うのも、接近戦はしない
というだけのもので、里の者なら誰にだって理解出来ているだろう。
それを今更理由に挙げてても仕方がない。

「分かりました。ではそのように手筈を整えますが、住む場所などは
どうでしょうか？」

「ヒナタと共に鍛錬をするつもりだ。なので、ヒナタの近くの部屋で
よかろう。今回の事で、多少の自衛手段を持たねばならんことがよく
わかったしな。ヒナタの歳も3つになったし丁度いい機会だ」

（なんか自分の事なのに、話がどんどん勝手に進んでいくなあ。ここ
らの意見全く聞く気なし？ まあ、バックに日向家が付いてくれるな
ら、この里では安心だからいいんだけど……。最悪、孤児院入りして
ダンゾウの元で修行すること考えてたことに比べれば、遥かに好条件
だし良いか。でも、自由時間くらいは欲しいなあ。お金は多少なりと
もあるから、必要な物は多分買えると思うけど、この先のことを考え
ると、修業道具とか揃えるのにお金掛かりそうだし……。稼いでおい
た方が無難かな？）

「では、この子を案内してやってくれ。白もそれでよいな？」

「はい！ ありがとうございます（決まってから同意ですか。そうで
すか。分かってたけどね！）」

子供らしい笑みを浮かべて、再度深々と礼をする。そして、ヒアシ
ンが満足気に出ていこうとしたところで、部屋の外から、誰かが急いで

こちらへと近づいてくるのが分かった。

走ってきた男は、当主を見つけると青ざめた表情で、喋りはじめる。「大変です！ 昨日の誘拐犯の身元が分かりました！ 先日雲の国から使者として来た忍び頭です！ いま大広間にてお歴々方が集まっております！ 至急お向かい下さい！」

「同盟条約を結んだばかりの国の者が何故?!」

「……最初からそれが狙いだったかもしれない」

最後にヒアシが渋い顔でそう呟くと、3人は急ぎ部屋を出ていってしまった。

（昨日っていうことは1日しか経ってないのか。それにしても、これでネジの父親が死ぬんだっけ？ なんて生け捕りにしなかったのか不明だなあ。見た感じでは自分より格上なのは分かるけど、格上同士だと、どちらが強いか分からないし。これはもつと精進しないといけないな）

決意を新たに高めたところで、いまの現状の事を思い出す。

（あれ？ と言うか、案内してくれる話はどうなったの？ まさかの放置プレー？ まあ、確かに緊急を要する事案だし仕方ないか。屋敷の中をこんな時に、うろちよろしてたらマズイだろうし、ここは大人しくしとこう。さしあたって服を着替えるかな。結構汚れてるし……。頭も洗いたいなあ……。誰か来ないかな？）

数日間、着たままだった服を着替えて、荷物の整理を行う。これからの事を考えると、自分にあつた修業が出来なくなってしまうのは痛い。忍者アカデミーに入りさえすれば、多少の自由時間も増えるだろう。入れてもらえることに対して許可が下りればだが……。

それまでは、恐らくヒナタとの柔拳などの練習相手をさせられることになると思うが、ここで、安全に柔拳を受けておくことは、ある意味役得であった。ネジの点穴まで突かれると分からないが、自分の医療忍術で、柔拳を受けた際に、どこまで回復することが出来るのかを知っておきたいところだからだ。

日向家と争うこと自体、無いとは思いますが、この世界は広い。似たような忍者が居たとしてもおかしくはない。自分が生き残るためにも、

色々覚えておいた方がいいだろう。

(ところで、いつまでここで待ってたらいいんだろう？ お腹減ってるんだけど……朝食なし？ 食材が余ってるんだけど、こんなところで料理したらマズイよなあ。仕方ない、我慢して片手での印の練習でもするかな)

結局、この日は朝食を食べることも出来ず、昼過ぎになってから昼食にありつけることが出来た。

1人で食べることになったところから考えるに、存在を完全に忘れ去られていたようだった。

23 子守？

白が日向家に入ってから数日の間に、色々と話し合いがあったようだ。立ち去り際に話していた内容からして、雲隠れの忍びを殺したことによる問題で、ネジの父親が、ヒナタの父親の身代わりになるという話だったはずだ。

日数がかかっているのは、雲隠れの里とのやり取りでもしているせいだろう。そちらに、みんなの意識がいつているせいか、子供であるヒナタと一緒に、部屋で大人しくしているように言われただけで、放置されている。

子供同士と言うこともあり、ヒナタも最初の日には恥ずかしそうにしていたが、本当に最初の日だけで、次の日には一緒に遊ぶようになった。遊ぶというよりも、白としては子守りをしている気分だったのだが……。ヒナタにしてみれば、同世代の子供が今まで周囲に居なかつたこともあり、最初だけビクビクと接してきたが、慣れてしまったようだ。慣れた理由が、白にはよくわかっていない。

その数日間のことだが、寝る時以外の行動が一緒である。風呂にまで一緒に入れられたときには、呆氣にとられたが、子供ならこんなものかと無理やり納得している。

こつちが男であることを、認識しているのか怪しいものだ。特に、髪を洗いたがるのを、なんとかならないかと思案中だったりする。まあ、結局最後には白自身で洗うことになるので、実際無駄もいところだ。

部屋の中でも髪を梳かして色々と弄ってくるのだが、まるで、人形扱いされているようだ。確かに、髪は伸ばしっぱなしなので、胸辺りまで伸びてきてしまっており、弄りやすいのだろう。ヒナタが、自分の髪を弄らないところを見るに、白よりも短いので、コンプレックスかなにか持つてるのだろうか？と思ってしまう。

着るものについては、ヒナタとお揃いの和服のような物を貰えたのでよいが、ここで女物の服を用意されたならば、真剣に抗議しなければならぬだろう。

容姿のせいで、勘違いしている者たちみんなに対して……。

それ以外では概ね不満はなかった。衣・食・住が揃っており、周囲をそこまで気にせず、ほぼ安心して寝ることが出来るというのは、今までの生活から考えるとあまりにも平和すぎる場所だったからだ。行動範囲は狭いが、ヒナタと2人だけでの生活（見張りというか監視役の人が、近くに居る状態ではある）なので、意外と自由な時間を満喫出来ており、ヒナタの相手をしつつも、チャクラを使わずにこっそり体力作りをしていたりする。

そんな平和な時が続くはずもなかった。突然、朝に部屋の戸が開けられたかと思うと、いきなり呼び出されたのである。隣に居るヒナタも、呼び出された理由を知らないようだが、日向ヒアシが呼んでいるというだけで、急ぐようにと言ってきた。

「白も呼ばれたの？」

「一緒にいだけね」

「早く行かないと怒られちゃうよ」

「場所が分からないんだけど？」

「一緒に行こう」

ここ数日、最低限の場所しか案内されていないので、今から向かう場所に心当たりは全くなかった。朝に呼びに来た人に尋ねようとしても、言づけてすぐに何処かへと立ち去ってしまったのである。なので、同じように言われた（先にヒナタの部屋の方から声が聞こえてきた）であろう隣の部屋のヒナタの元に行くと、丁度ヒナタも部屋から出てきていた。そこで先ほどの会話になり、ヒナタに手を引かれて、ついていつている状況である。

（入っていいところと悪いところくらいは、案内して欲しいんだけど……。これって、教えられたところ以外に行くなんていう逆パターンなのかな？ でも、教えられた場所にヒアシさんが居るはずないし……。居るとしても食堂くらいしか思いつかないな……）

そんなことを考えているうちに、目的の部屋へと到着した。白の全く通ったことのない道を通って。ヒナタは白の手を離すと、引き戸を開けて中へと入っていく。それに倣い、白も中へと入って戸を閉め

た。そこには、日向ヒアシが既に座って待つており、ヒナタは既に座っていたので、白もヒナタの横に同じように座る。

目の前には、数日前に見た人物とは思えないほど、憔悴したように見える日向ヒアシがいた。

「父様、お待たせしました」

「おはようございます。お待たせして申し訳ありません。本日のご用件を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あつーおはようございます」

白の言葉でヒナタは、朝の挨拶をしてないことを思い出し、すぐに挨拶を行った。しかし、そんな些細なことにヒアシは拘るつもりも無いようで、やることのみを言ってきた。

「本日よりお前たちを本格的に鍛えることとする。特にヒナタ。お前は宗家としての自覚を持って取り組まねばならん。分かっておるな？」

「は、はい……」

今までのヒナタに対してのヒアシの態度が違ったためだろう。ヒナタは怒られていると思っっているのか、泣きそうな顔で返事をしている。言われた内容を理解しているのか不明なところだ。

（しかし、本格的にと言うことは、基本的なことはしてきていた……と、いうことかな？ こっちは確かにしてきたけど、それを見抜かれた？ でも、ヒナタは、基本的なことをしたようには見えないんだけど……）

そのようなことを考えつつも、余計なことに口出ししないように、ヒアシの次の言葉を待つ。

「では双方立って構えよ」

そのヒアシ言葉に、ヒナタは構えた。両手を前に出し、左足を少し前へとすり足気味に出していく。恐らく基本的なことと言うのは、型の練習か何かをしていたのだろう。それを横目に、白は重心を落とし、どちらの方向に対しても対応できるようにしておく。

ヒアシは、こちらの構えには興味がないのか、ヒナタの構えを見て頷くと、急に白へと向かってきた。白が反応できたのは、ヒアシが速

度を抑えていたからだろう。チャクラを練らずにいたせいで身体の動きは遅かったが、初動が早かったおかげで、ヒナタとは反対側へと転がるようにして回避し、すぐに元の体勢へと戻す。流石に、力量差がありすぎるため、追撃は無いだろうと思いつながら2人を視界に収めた。

しかし、実際に狙われていたのはヒナタの方で、ヒナタはヒアシの拳を同じような動作で弾き、時には打っている。ボクシングのスパarringみたいだなあと、白は他人事のように見ていたが、その組手は一定の型をしたのか、終わってしまった。

「二応は覚えているようだが、動作が遅い。次は2人でやってみよ」

その言葉に、白は構えを解かないままで、その場に留まった。やってみよと言うのは、柔拳を使えと言うことではなく、組手をしろと言う意味だろうと分かったからだ。それに対して酷く狼狽したのはヒナタだ。まさか白とやりあうことになるとは、思っても居なかったのだろう。構えすら取らずに、どうしていいか分からないと言った状態だ。白としては、ここにいる存在理由でもある訳なので、当たり前という意識があり、このことに関しては躊躇いなど一切ない。

しかし、狼狽した相手を倒すのは簡単過ぎて、こちらにメリツトが全くない。そのため、相手が落ち着くまで待つつもりでいたが、そうはいかなかった。

「最初に言ったことを忘れたか!」

その声で、ヒナタはすぐに構えをとるが、未だに狼狽しているのは明らかだった。

(荒療治といくしかなさそうな感じかな?　　というか、怒られてばかりだから伸びなかつたんじゃないの?　　ヒナタって褒めて伸ばすタイプなんじゃ……。まあいいけど)

ヒナタは、構えたまま動きそうになかったため、白から動くことにした。チャクラなしで、どこまでいけるのかも図っておきたいところだからだ。

先ほど見た感じでは、手技のみでの応酬をしていたし、ヒナタ自身の動きは型をなぞるようなもので、とても遅いものだった。そこで、

左手の掌底を放つことで、左手を犠牲にし、右手の本命を打つつもりだったのだが、ヒナタは全く反応しなかった。危うく左手をそのまま顔に当てる手前で気付き、寸止めすることが出来たのは、白が最初から止められると思つて放つた為に、力がそこまで入っていないからだ。

呆然とその寸止めされた光景を、ヒナタは固まったまま見ていたが、白が手を引いて下がったことにより、ハツとして、今がどういう状況だったのか理解しようだ。

「もう一度だ。白は寸止めなどするな。始めよ」

その後の組手では、白が一方的に攻撃することが多かった。最初は様子見のつもりで軽く当てていたのだが、それすらもヒアシにはお気に召さなかったようで、更に攻撃するように命じてきた。はつきり言つて実戦経験が皆無のヒナタと白では、チャクラの有無にかかわらず、実力差が有りすぎたのは言うまでもない。

たまにヒナタも反撃してくるが、動作が遅いうえに、攻撃の起点が掌なのだろう。そこで触ろうと必死なのが伝わってくる。しかし、それに当たりにいけば、ヒアシの手前、わざと当たつたのだと見抜かれてしまう恐れがあるので、躲すしかない。そのような組手が昼頃まで続いた。

昼になり、終わりを告げられると、ヒナタはその場にしゃがみ込み、ハーパーと汗だくになりながら頭を垂れていた。同年代の相手に対して、全く攻撃が当てられなかったことを悔やんでいるのか、それともヒアシに無様な姿を見られたことに対してなのか、その辺りは分からないが、落ち込んでいるのは確かだろう。

白は、息がそれほど上がったりまではしていないが、汗を掻いているのは一緒である。さすがにチャクラ補助なしというのはきついものがあつた。

「午前はここまでとする。汗を流し、午後1時からヒナタは柔拳の型の訓練だ」

話は終わりとばかりに、ヒアシが稽古場を出ようとしたところで、白は慌てて声を掛ける。

「ピアシ様お待ちください。私はこの後どうしたらよいのでしょうか？」

「午後は好きにしたらよい。但し、屋敷からは出るな」

そう言うと、ピアシは稽古場を出て行ってしまった。

(はあ……。かなり性格が厳しくなってるなあ……。しかも、組手の途中から怒りの形相になったりするし。っていうかあれが白眼なのかな？ 目の周りが筋立ってて、怒ってるようにしか見えなかったけど。あつ！ そんなことよりヒナタだ)

白はヒナタへと駆けよる。ヒナタは未だに頭を垂れたままだったが、息自体は整ってきたようだ。

「ヒナタ立てる？」

「……………」

ヒナタはこちらの声が聞こえていないのか、下を向いたまま何も答えようとしなかった。

(このままだと、午後からのことで精神的にやられてしまうんじゃないか？)

自分のせいっていうのは嫌だな……)

喋る気力すらないヒナタへ声をかける。

「取り敢えず、汗を流してお昼を食べよう」

白は、チャクラにて身体を強化し、動かないヒナタに肩を貸すような感じで、ひとまず風呂場へと向かう。風呂場に到着して、ヒナタの服を脱がす。午後からと言うことは、恐らくそれほど時間はないだろう。白は服を着たまま取り合えず先にヒナタを優先することにした。

お湯をかけると痣に沁みたのか、痛そうな表情をしたが、白は構わずに全体にお湯をかけ汗を洗い流す。洗い流したところで、ヒナタから声が掛けられた。

「白は強いね」

「経験の差だよ」

「私も強くなれるかな？」

「今よりは強くなれるよ」

ヒナタは明らかに自信喪失しているようだった。今までは相手が父親だったからという考えがあったのだろう。それをこうも、同年代

の子供にあしらわれては、自信を無くすというものだ。

「それよりも、午後からも鍛錬でしょ？」

「……うん」

憂鬱そうに返事をしている。午後からはもつと厳しいと思っ
ているのだろう。実際、これまでの稽古よりも厳しくなるのは間違いない
はずだ。精神的ダメージに、先ほどの肉体的ダメージが加わっては、
かなりの弱気になってしまふのではないかと白は考えた。そのため、
白が関わったこと少しでも軽減することにした。

「今からやることは、誰にも言わないでね」

「？」

「秘密ってこと」

「秘密？」

「ん。他の人に知られると、僕が困るんだよね」

「わかったよ。誰にも言わないね」

「分かってくれてなによりだよ。ちよつと痣になつてる部分見せて
ね」

痣や内出血しているような箇所を手を当てていき、治療していく。
身体に関しては、白が付けたものなので極力治しておきたいと思つた
からだ。

痣や内出血がひいていき、それに伴う痛みが無くなったことに、ヒ
ナタは驚きの表情をしていた。服にて隠すことが出来ない部分につ
いては、怪しまれぬように治療しなかったが、その他については、こ
れでいいだろう。白は、一通り治療し終わり、声をかけた。

「これで、痛む場所はほとんどないよね？」

「すごいね！ ありがとう！」

ヒナタは物凄く喜んでいたが、次の白の言葉で元に戻ってしまった。
た。

「午後からの鍛錬頑張つてね」

「……うん」

落ち込んだヒナタを後押しして着替えさせて、食堂へ行くように
言つたが、手を離さなかつたために、そのまま一緒に食堂へと行くこ

とになってしまった。汗を流せぬままに……。

24 午後？

午後の1時手前になり、白はヒナタと別れた。ヒナタは別れ際に、物凄く不安そうな顔をして白を見ていたが、白にはどうしようもないので、笑顔で手を振りながら見送るだけだった。

(さて、午後は自由にしていみたいだし、屋敷内の探索をしておこうかな)

まさか、明るいうちに自由時間が得られるとは、思ってもいなかったことなので、ヒアシの言葉には驚いた。折角の機会なので、明るいうちに正確な屋敷の配置を覚えておこうと移動を開始する。

宗家と言われるだけあって、屋敷は広かったが、その構造自体は意外と単純なもので、とても覚えやすかった。子供の視点から見ると広いと思うが、慣れてしまえばそれほどでもないだろう。部屋の数が多いので広く見えるだけのようだ。部屋の中を確認していききたいところではあったが、無暗やたらに開いて、余計ないざごぎに巻き込まれたくは無いので、開いてまでは確認していない。

(これで大体屋敷内は見て回ったかな……。ん？ あそこに架け橋がついてる。しかも壁の向こう側につながってるみたいだ)

そこには壁の一部が無く、その間を通すように渡り廊下のような橋が架かっていた。壁の近くには小川が流れており、屋敷をつなぐものとしては少し長めの橋に見える。

こちら側の屋敷については、一通り見終えたので、続いて向こう側の屋敷を見るために、橋を半ばあたりまで進んだところで、進んできた方の屋敷に居た人に声を掛けられる。

「おい。確か白だったか？ 何をしている？」

振り向いた先に居たのは、目覚めた部屋にヒアシと一緒に来た男だった。

「ヒアシ様より、午後からは自由にしていと言われましたので、屋敷の探索を行ってました(あんたが案内してくれなかったから、自分で確認してるんですよ!)」

「いくら自由にしていいとは言っても、屋敷内をウロチョロとしてい

い訳では無い。部屋にて大人しくしておけ」

(それをあんたが言うのか……。それは自由とは言わないし、それって軟禁って言うんですよ？ 知ってますか?)

相手は日向家の者であり、ヒアシがあの場合に連れてきたということ、それなりに信賴しているのだろう。そのような人物に文句でも言おうものなら、どんなことになるか分からない。しかし、ただ単に、自由を束縛されるのは勘弁して欲しいところだったので、少しばかり融通が利くように方向性を変えてもらうことにした。

「でしたら、部屋には何もないので、出来れば色々な本などを読みたいのですが構いませんか？」

「……まあ、本くらいならばよかろう」

白の部屋の中に、特に目ぼしいものが無いことを思い出したのだろう。部屋にて大人しくしておけと言った手前、何もなしと言うのは、子供に対して思うところがあつたのか、許可が出た。話は終わりばかりに、進みだそうとする男を引き留める。

「お待ちください。出来ればいいのですが、本の置いてある部屋を教えてください。お屋敷が広くて、ここがどこだか分からないので」

「ならばついていこう」

男はそう言うと、スタスタと進み始めた。白も橋の向こう側に興味はあつたが、見つかった上に部屋に戻るよう言われた以上、ここを通ることは出来ない。後ろ髪を引かれる思いで、白は男の後を追った。

着いた場所は意外にも、白の部屋の近くだった。ある意味灯台下暗しである。さして部屋の広さは無かったが、本棚には本がびっしりと詰まっており、暇つぶしには丁度よい物量だろう。

「この部屋の物は閲覧可能な本だ。まずは、この辺りだな」

男が手渡してきたのは、日向家に関する歴史書と木の葉の里の歴史書だった。

「日向家に居る以上、最低限の知識くらいは詰め込んでおけ」

「分かりました。それと先ほどの橋の向こうにも、お屋敷があつたように見えたのですが、あそこは行ってはいけない場所なのですか？」

「宗家と分家、その違いだ。詳しくは渡した本に書いてあるから読め」
「ありがとうございます」

白は礼をしたが、男はそれに見向きもせず、さりとして何も言わないまま、部屋を出て行ってしまった。

（さて、歴史書を見るのはいいんだけど、その他に何が置いてあるくらいは把握しておかないとね）

本はこの部屋の管理者の性格が反映されているのか、棚ごとに本の種類を分けてあり、とても探しやすいものだった。一通り本棚の配置を覚えたくらうえで、取り敢えずは手渡された本を読むべく部屋へと戻った。

歴史書の方は、木の葉の里の成り立ちから、初代火影である千手柱間の功績に始まり、四代目火影までの功績が記述してあった。そこには、第一次忍界大戦についても記載されていたが、所々注釈が入れてあり、その注釈が、あまりにも木の葉の里側からの視点だったので、どこまでを信用していいものか分からないものだった。

歴史書とは別の、他の本を捲ってみると日向家の家系図的なものが記入されていた。それをパラパラと読んでいく。そこには、正しいかどうかは不明だが、木の葉の里の地図なども記載されていた。

（地図の整合性は兎も角として、大体の位置くらいは把握しておきたいけど、火影岩があそこに見えてるから、この屋敷は地図で言うところの辺りか。忍者アカデミーってどこにあるんだろう？　ここの場所は、この地図全体からいうと端の方だから、多分遠いんだろうな……）

ひと通りパラパラと読み進めて行くうちに、先ほどの橋の意味を理解した。ただ単純に線引きしているだけで、こちら側の屋敷が宗家。壁を隔てた向こう側が分家。と、なっているようだ。

分家にいるネジに会ってみたかったが、現状では父親が死んだばかりの為、宗家側の人間を恨んでいるだろう。白が宗家側の人間として見られるかは微妙なところだが、住んでいる場所が場所だけに、巻き込まれて恨まれる可能性は高い。中忍試験が終わるまでは、積極的に関わらない方向でいくことにした。

（この悔しさをバネにしてネジって強くなるはずだから、そつとして

おこう。陰ながら応援しておくよネジ！」

本を大体読み終えた頃、外は既に日が傾き、夕方になっていた。時計を確認すると既に5時を過ぎている。5時には部屋に居るように言われたため、てつきり誰かが呼びに来ると思っていたが、そうではなかったようだ。言われた時間を過ぎてても、誰も来ないところを考えると、また忘れられているのでは？という疑問が沸き起こってしまう。

本を再度読み直す気にもなれず、体力作りの為に筋トレを行っていると、6時頃になって、ヒアシ本人が部屋の扉を開け、その場にて言うてきた。

「ヒナタは稽古場にいるので連れて行き、一緒に風呂と食事を済ませておけ」

一瞬だけ呆気にとられるが、言葉の内容を理解して返事をする。

「分かりました（こういうことって、普通大人がやるものなんじゃない……）」

ヒアシは言うだけ言うと、そのまま立ち去ってしまった。

白が稽古場へ向かうと、そこには倒れているヒナタがいた。荒い息さえしてないので、まさかと思いついて駆け寄ってみると、どうやら気絶しているようだ。

それを確認してひと安心し、ヒナタを部屋へと連れて行く。部屋にて横にして、ぎつと診てみるが、特に外傷はなかった。おそらくは、疲労によるものだろう。しかし、これから毎日この調子では、いつか壊れてしまうのではないかと思ってしまうほどだった。

（6歳のアカデミー入学まで保つのかな？ まあ、現状では跡継ぎだし、壊すようなことはないとは思うけど……）

ヒナタが目覚めるまで、その横で筋トレの続きをしていると、ヒナタは7時頃に目が覚めた。身体を起こそうとして、体力が無いのか、途中まで起きていた体勢を崩し、また、寝た状態へと戻る。

「さて、どう切り出そうかな）立てる？」

「……………〈無理〉……………」

「動けそうになったら教えて。あと食事は出来そう？」

「……く食べたくない」

余程、午後からの鍛錬が堪えたのか、声が小さい上に元気もないようだ。まあ元々午後の鍛錬の前から元気についてはなかったが、ここで明日まで動かなければ、ヒアシ本人より言われたことを実行出来なかったということになる。自分の信頼確保も大事だが、ヒナタも汗を流して、食事を摂っておかないと、後々困ることになるのはヒナタ自身だ。その為、ヒナタが動かざるを得ない言葉を掛ける。

「ヒナタにお風呂と食事を済ませるように、ヒアシ様に言われてるんだけど。今日は寝ておく？」

「!? 起きるーっ!」

ヒアシと言う言葉は効果てきめんのようで、ヒナタは必死になって起き上がろうとする。それを白は、ヒナタを支えて立ち上がらせた。

「お風呂と食事どっちからにする？」

「お風呂がいい」

「分かった。痛かったら言っただけ」

その後はゆっくりと移動し、風呂へと向かう。いつもは、髪を触りたがるがそんな元気もないようだ。逆に白がヒナタを洗い、次に食事を摂るべく移動する。食事については、既に用意されていたので、それを温め直し食べさせようとしたが、手もまともに上がらないようだった。仕方なく食べさせる。少々吐きそうになりながらも食べさせて部屋へと連れ帰った。その際に何度も「ごめんなさい」と謝ってくる。

（変な謝り癖ついちゃったかな）

「今日はゆっくり寝た方がいいよ」

「くごめんなさい」

ヒナタは、ベッドに横になって安心したのか、ひと言つぶやくとそのままスヤスヤと寝入ってしまった。それを確認し、そつと明かりを消して部屋を出る。

「覗きは余り感心しないと思うのですが……」

廊下は暗く、目だけでは誰も居ないように見えるが、白は部屋の中から廊下に人の気配を感じていた。部屋を出て、その気配の方向へと

視線を向けて、その存在を確認した時に、わざと気配を隠さなかったのかと思ひ直す。

「今日は色々調べていたようだな」

「はい。こちらに来た際に、ヒアシ様と一緒に居られた方に、木の葉の里などについて知っておくように言われました。私自身も、こちらに身を寄せさせていただいていますので、今後の事を考えて知っておくべきと思ひ、調べていたのです」

「なぜ、今日は手を抜いた？」

「(はつきり言った方がいいのかなあ) えーっと。それはですね……」
なかなか答えようとしないう白に対して、ヒアシの方から徐々に圧力が掛かってくる。

「どんな内容でも構わんはつきり言え」

「ヒナタ様と私とは、戦闘に関する経験に差がありすぎると思われます。恐らくヒナタ様は、今まで型の稽古ばかりされてこられたのでは無いでしょうか？臨機応変に対応出来ていません」

「実戦経験か……」

ヒアシはしばらく考え込んでいたが、思ひ出したように聞いてきた。

「お前はどこでそれを手に入れた？」

「(それって言うのは経験のことだろうなあ。再不斬さんの名前出すわけにはいかないし。ぼかしとこう) 両親が死んでから一時期ではあります。運よく旅人に教えてもらいました。その人とは波の国が出る際に別れたので、いまどこにいるのか分かりません」

「その者にどこまで教わった？」

「ひと通りの体術、忍術、幻術については教わりました」

「ひと通りか(ひと通りには、体術だけとつても目を見張るものがある。これに忍術と幻術までとなると……)」

ヒアシはまた考え込んでしまったようで、辺りに沈黙が漂う。

(少し寒いから、早く話を切り上げて寝たいんだけどなあ)

既に暦は1月に入っており、本来なら少し寒いではなく、肌突き刺さるような寒さなのだが、白の一族の恩恵なのか、痛みに対して鈍

いせいなのか、本人は全く気付いていない。

考えが纏まったのか、ヒアシが声を掛けてきた。

「明日からは、お前も午後の鍛錬に参加せよ」

「分かりました（大切な自由時間が……）」

ヒアシが立ち去った後に、白はガツクリと肩を落として部屋へと戻っていった。

25 実力？

次の日。いつもは、白の部屋へと呼びに来るヒナタが、今朝は時間である6時になっても現れなかった。今日は、こちらから呼びに行ってみるか、ヒナタの部屋へと向かう。

ヒナタの部屋にてノックをしてみると、なにやら呻き声は聞こえるが、しばらく経っても戸が開く気配はなかった。

(そろそろ、朝食を食べておかないと、午前の鍛錬に間に合わないと思うんだけど……。無理にでも食べさせるべきかな)

そう思い、戸を開けて中に入って確認すると、ヒナタは起きていた。ただし、起きてはいるのだが、一生懸命動こうともがいているだけで、動けていない。おそらくは、今までよりも厳しい鍛錬のせいで、筋肉痛かなにかになっているのだろう。動かすたびに、顔を苦痛に歪めている。

ヒナタの元へと近づき、主に手足を治療していく。痛みが徐々に和らいできたのか、ヒナタはホツとしているようだ。

「白、ありがとう」

「どういたしまして」

手足に關しての治療を終えて、本来の目的である食事へと誘う。現在の時刻は午前6時半。昨日の呼ばれた時間が7時であることを考えると、朝食などにとれる、時間的猶予はあまり無い。

「ちよつと遅れ気味だから、急いで朝食を食べに行こう」

「うん」

疲労感までは抜けきっていないのか、あまり元気のないヒナタを引き連れて食事を済ませ、その足で稽古場へと向かった。

稽古場には既にヒアシが、何も言わずに座して待っていた。今回は、ヒナタからは入ろうとしなかったため、ヒナタの手を引くような形で稽古場へと入っていく。昨日の事が少しトラウマになっているようで、ビクビクと震えているようだった。

「おはようございます。お待たせいたしました」

「おはようございます」

時間的には7時前に到着しているのだが、ヒアシの顔を窺う限り、表情が険しいままだ。より言うならば、ヒナタの態度を見て、更に険しくなったと言うべきかもしれない。

「これより、昨日と同じように組手を行う。双方離れて構えよ」

「はい」

「……はい」

白はすぐさま横へと2人を視界に入れたまま離れて、ヒナタと距離を置き、昨日と同じように構えた。ヒナタの方はと言えば、少々緩慢な動きではあるものの、背を向けて離れてから構えをとる。その光景を見て、やる気が無いと感じたのか、ヒアシからヒナタへと叱責が飛んだ。

「ヒナタ！ お前は昨日何を聞いていたのだ！」

その言葉に、ヒナタの顔色が一瞬にして悪くなり、昨日の事を思い出したのだろう。身体が少し震えているようだ。

「もうよい！ 端の方で見ておれ！」

このままやつても、昨日と同じ展開になると思ったのか、ヒアシはヒナタを下げさせ、代わりにヒアシがヒナタの位置に立った。

「丁度良い機会だ。どの程度のものか実力を測っておきたい。どこからでも来なさい」

先ほどのヒナタとの対応との違いに、一瞬呆気にとられるも、白としても木の葉の里のトップレベルの人との実力差を、実際に感じるこゝとが出来るので、全く不満は無かった。むしろ、こちらからお願いたいくらいだったのだ。今まで鍛錬したことのある相手が、再不斬だけだったし、それも今となつては出来なくなつていたので、白としても丁度よい機会だった。

「体術のみでしょうか？」

「そうだな。ここでは術を使うには狭い。今は体術だけとしておくか」

「分かりました」

会話の間にもチャクラを練りこみ身体中に満たす。ヒアシの方から何かを仕掛ける様子はなく、白眼のみを使用して構えすらとつてい

ない。完全にこちらの出方を待っているようだ。

(先手必勝！)

水瞬身の術とまでは行かないが、チャクラを足に充実させ、一気にヒアシの懐へと入った。今までヒナタとの組手で見せてきた速度で想像していれば、決して考えられる速度ではないし、油断が生じるはずだ。その思考の隙について一撃を入れるつもりだった。当たったとしても、それほどダメージはないと思うが、今後の事を考えれば、ある程度は使えるやつであることを、アピールするにはいい機会だろう。

そんな考えは、突きを放ち終わった後すぐに取り消した。当たってもおかしくない距離で、手ごたえが無いことに気付いた瞬間、天井へ向けて飛び、上から全体を確認するべく、張り付いて見渡すが、ヒアシは何処にもいなかった。

そこで、首に手を当てられて、初めてヒアシが白の後ろに居ることに気付く。ヒアシは首から手を離すと先に下へと戻り、元の位置へと行った。白もそれに続き下へと戻る。

「その歳にしては、なかなかの動きだな」

ヒアシはなにやら納得したのか、最初の険しい顔が普通の無表情へと変わっていた。ヒナタの方はと言えば、先ほど何が起こったのかよくわからなかったのだろう。驚いたような表情をして固まっているようだった。

「率直にお聞きしたいのですが、今の私の実力はどの程度なのでしょうか？」

「そうだな。体術のみだけで言えば、下忍にそうそう負けることなどないだろう」

「なるほど。ありがとうございます(これで下忍レベルとか、木の葉の里おかしくない?) いや。体術だけの話だし、他のものを組み合わせれば……それでも恐らく中忍レベルだよ。この歳だからまだまだ先があるし、頑張りますか)」

ヒアシは最初に居た場所に座り直すと、再度ヒナタに声を掛けた。「いつまで呆けておる！ 次はヒナタ、お前の番だ！ さっさと構え

なさい！」

「はいっ！」

突然の大声に、ヒナタはビクツとなりながらも、急いで位置に付き構えをとる。白は、相手がヒナタであるため、纏っていたチャクラを消して、純粋な肉体のみの体術に移行したのだが、ヒアシによって止められた。

「白よ。チャクラを纏って構わん。その代り躲すのではなく防御に徹せよ。ヒナタは今後、白眼を使用したまま鍛錬を行え」

「分かりました(名前を呼ばれたってことは、アピールが成功したってことかな?)」

「はい」

開始の合図も何もなかった。そのためなのか、攻撃役であるヒナタが向かってくる気配がなかったので、仕方なくこちらから近づく。ヒナタの眼の周囲が変わっていることから、既に白眼を使用しているんは分かるが、集中力がいるのか、はたまた負担がまだ大きいのか、かなりきつそうだ。

そんなヒナタへとゆっくりと近づいていき、ある程度の距離まで来ると、ヒナタの方から攻撃してきた。どうやら、自分の間合いに入ってくるのを待っていたようだ。

チャクラを纏っていない昨日の状態でも、ヒナタの攻撃が当たらなかったのに、今回は躲すことなく防御だけとはいえ、チャクラを纏っているのである。しかも、攻撃が両手だけな上に掌底がメインなので、躲すことなく、突いて来れば腕を掴み、払って来ればその流れを変えていくという、昨日より組手の難易度が少々上がっているものの、チャクラによって逆に下がっている感じだった。

しかも、組手を始めて1時間もしないうちに疲れたのか、ヒナタは荒い息を付き始めていた。それでも、白眼の使用を止めないところは、頑張っていると思うのだが、構えが最初の頃よりも崩れてきており、両腕が下がってきている。

これ以上続けても、あまり意味がないのでは?と、どうするべきかと思ひ、ヒアシの方を窺うが、ヒアシは止める気も無いようで、何も

言ってこない。どうやらこのまま続けさせる気のようにだ。

結局は、途中から両腕が上がりなくなり、足自体もガクガクと震えている状態まで続き、そこでやっと終わるように声が掛かった。

時刻は11時。昨日よりも早く終わったが、未だに午前中である。ヒナタの様子を見るに、昨日の午後の鍛錬が終わった時のような状態になっていた。昨日よりも震えながら立っている分、多少マシな状態だろうか。

午後の鍛錬についても、昨日と同じように1時からと言われた。今後ともそのようにしていくとのことだ。白はヒナタを連れて、着替えさせ、昼食までの時間を休ませる。

(これはヒナタには辛いかもね。限界ぎりぎりまで体力を使うのはいいとして、先に精神を鍛えないと、強くはならないと思うなあ)

昼食近くになり、ヒナタを起こして食事を取りに行く。午前中の鍛錬が効いているのか全く元気がない。

「そんな感じだと、また怒られるよ?」

この言葉を聞いて泣きそうな顔をしてこちらを見てくる。ヒナタ自身、どうすればいいのか分からないのだろう。自分では頑張っているつもりでも、こうも実力差があっては、ヒナタを鍛えているヒアシとしても不満を抱かずにはいられないだろう。しかも相手は同年代なのだ。その不満は、あのネジの件も含めて更に大きいに違いない。

「今はいっぱい食べて体力を付けることだね」

「あんまり食欲ない」

「それでも食べないときついと思うよ」

食事を摂り終わり、少し休憩したのちに、稽古場へと向かう。やっぱりと言うべきか、ヒナタの足取りは重い。

午後からの鍛錬は、予想通り型の練習だった。その型の練習相手が、ヒアシから白に変わったただけのようだ。ヒアシはそれを見て、ほんの少しでも対応が悪ければ注意していく。

始めはゆっくりと動いていき、徐々にスピードを上げていく。そして対応できるギリギリの速度で止めて、それに慣れてきたら、またほ

んの少し上げるといった感じだ。このやり方については特に何も言われなかったところをみるに、同じようなことはやっていたのかもしれない。

白が打ち込み、ヒナタがそれに対して対応する。そして今度はヒナタが打ち込み、それを白が対応する。それを交互に繰り返した。午前中の鍛錬を思えばかなり楽だろう。ただし、これは型の訓練であり、実際に動くとなればそんな余裕などなくなってしまっただが……。

2時間ほどを続けてから、型の練習は終わったが、休憩もそこそこ、今度は午前中と同じ内容をする事になった。それをまた2時間である。結局ヒナタは昨日と同じ状態になっていた。いや、気絶してないだけ昨日よりはマシかもしれない。

そんなことが数週間の間に、日々の鍛錬が終わった後、ヒアシ自らの実力を測るため、忍術や幻術、それを総合的に含んだ戦闘技術などを見せる事になった。

その際に氷遁についてはもちろん使用していない。こちらとしては、堂々と自分の鍛錬も出来る上に、相手も強いいため安心して攻撃できてよかった。結局、最後には狙ったかのように、首筋に手刀を寸止めされて終わるが、満足できるものだった。

そんなある夜に、白はヒアシに呼び出されて部屋へと向かった。

「失礼いたします」

「そこへ座れ」

ヒアシに指示されたところへ座り、白はヒアシの言葉を待つ。少し静寂が流れた後にヒアシが話し出した。

「しばらく家を空ける用事が入った。私が戻るまで、いつも通り、お前たちのみで鍛錬を行うように。ただし手加減はするな」

「分かりました」

「用件はそれだけだ」

「少しよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「鍛錬内容に忍術などを使用してもいいでしょうか？」

白の提案に、ヒアシは少々悩んでいるようだった。今まで体術のみ

で鍛錬しただけに、自分の居ないところで、他の内容に切り替えることに不安があるのだろうか。

「どのような術かによる」

「分身の術です」

「それならば必要ない」

それはそうだろう。白眼にて見れば、ただの分身の術など全く意味が無いのだから。

「いえ、水分身の術の方です。あれならば実体があります」

「そう言えば使っていたな。確かに多対一も経験すべきか。それくらいならよかろう。他に無ければ下がっていいぞ」

「ありがとうございます」

ヒアシが家を空ける期間がどの程度かは分からないが、その間に多少はヒナタに自信を付けさせるべく、部屋へと戻る傍ら、今後の方針を考えていた。

26 自信？

少し早いが、今では白の方から、ヒナタを呼びに行くと言う流れが出てきていた。どうやらヒナタは、鍛錬自体に苦手意識、というよりも嫌悪感が強いのかもしれない。毎日褒められることは一切なく、叱られるのみでは、そのような考え方になっても仕方ないかもしれないだろう。それまでの、ヒアシのヒナタへの対応がどのようなものかは分からないが、性格が急変したのであれば、この歳ではトラウマものだろう。もしも、あのような事件が無ければ、もう少し接し方が変わったはずだ。

所詮もしもの話ではあるのだが……。

「ヒナタ起きてる？」

扉をノックし中に居るヒナタへと声を掛ける。いつもヒナタは、この時間には既に起きているので、この問いかけは迎えに来たという合図のようなものだ。これもまたいつも通りだが、返事はすぐにこないうえに、その声自体も弱弱い。

「……うん」

「朝食を食べに行こう」

ゆつくりとだが扉が開き、元気がないヒナタが現れる。性格が既にこの時点で、小心者のような感じになってしまっているのは間違いないだろう。そんなヒナタを少しでも元気づけるため、朝食を摂るべく向かう途中に言葉を掛ける。例えそれが少しの期間かもしれないが、精神的にもよいだろう。

「ヒナタは、今日からの鍛錬のことは聞いている？」

「……聞いてない」

「今日から僕とヒナタの2人で鍛錬をしておきなさいだって」

「？」

白が言っていることの意味が、ヒナタには分からなかったのだろう。いつも2人で組手をやっているのだから、ヒナタにはその違いが分からなかった。ヒナタの顔を見て、そのことに白は思い至り、言葉を変える。

「ヒアシ様は忙しいから、鍛錬には来れないらしいよ(どれくらいの期間か分からないけど)」

「本当?」

「うん」

ヒナタは白の言葉に、明らかにホツとしたような顔をしている。白にとつて、ヒアシのヒナタへの鍛錬は、ヒナタがどう思っているか分からないが、再不斬の鍛錬に比べて、大怪我や命の危険がないだけ遥かに生ぬるく感じる。それに、ヒナタを強くしようと鍛錬してくれているヒアシを、白自身は嫌つてはいなかった。むしろ熱心に指導しているとも思えるくらいの良い父親だ。

この世界に来てからいきな殴られ、しかもそれが理不尽な理由。そのうえ父親は働かずに、子供に働かせるという環境に放り込まれたのだ。それに比べると、ここは天と地ほども差がある。

朝食を食べ終わり、少し早い稽古場へと向かう。朝食前に、今日はヒアシが不在であることを伝えたにも関わらず、未だにヒナタの足取りは重かった。そんなヒナタの手を引っ張って行き、稽古場へと入っていく。そして、稽古場へと入ったことで、いつもの場所に、いつも居るべき存在が居ないことを見てやっと信じたようだ。

「これで信じてくれたかな?」

「うん」

「でも鍛錬はするよ。昨日ヒアシ様に言われて、いつも通り加減はするなって言われてるから」

「!?!」

その言葉に、ヒナタの顔色は悪くなっていった。これまでの付き合いで、白はヒアシに言われたことは違えたことは無いし、鍛錬を楽しんでいるようにも見えたからだ。それに加えて、もしかしたら今日からは、鍛錬がきつくなくなるかも、という考えもあった。

(言い方が悪かったかなあ。上げといて落とす感じになっただけ、内容はいつともよりまだマシだと思おうし)

「ただし、いつもとやり方は違うからね」

「?」

「(う)う(う)ことだよ」

白は水分身の術を行い、2人になる。水の無いところで水分身を作り出すのは、今の白でもかなりきつい。しかし、日々の鍛練で出来るようにはなっていた。それを見てヒナタは驚く。

「分身の術が使えるの?」

「ただの分身じゃないよ。実体があるからね」

「分身の術じゃないの?」

ヒナタの不思議そうな顔を見て、3歳児にそこまでの知識がないのは普通かとも思い直す。それに加えて、肉体的な鍛錬ばかりで、勉強に費やしている姿を見たことが無い。白は、ヒナタを寝かしつけてから、この世界の知識を集めるべく、自己鍛錬に加えて、日向家にある本を読んで学んでいるが、それにヒナタを加えようかと少し考えて諦める。

(今、この鍛錬に勉強なんて加えたら、たぶんついてこれなくなってしまうだろうし、やめとこう。確かヒナタは賢かったから、アカデミーの授業でも十分でしょ。その前に確かめたいことを先にやっておくかな)

「まあ。その辺はあまり気にしないで。その前に白眼でどっちが本物か分かるか教えて」

ヒナタに後ろを向かせて素早く入れ替わり、こちらを向いてもらうよう声を掛ける。影分身は、チャクラを平等に分けてしまうので、白眼でも見切れないようだが、水分身は本体よりも遥かに弱いので、白眼を使えば本体が分かるかもしれない。ヒアシとの実力確認のための模擬戦の時に、聞ければよかったのだが、なかなかそこまで図々しく言うことが出来ずに、ヒナタに見てもらおうことにしたのだ。

「ど(う)う?」

「え(っ)と……。た(ぶ)ん(こ)つ(ち)かな?」

ヒナタは、悩んだ挙句に水分身の方を指差してきた。全く自信がないのが、その表情や仕草からよくわかる。

「分からないなら分からないで教えてほしいかな(現状ではヒナタは白眼を完全に使いこなしてないのかな? この件は保留にしとこ

う)」

「ごめんなさい」

「いやいや。謝らなくてもいいよ。それよりも、そろそろ時間だし鍛錬を始めよう」

「うん……」

いつものように2人は定位置に着き構えをとる。しかし、もう1人の白が、部屋から出て行こうとしたことで、ヒナタは困惑しているようだった。

「こちらは気にせず、そちらの相手をしてみてね。たぶんヒナタなら倒せるはずだよ」

ヒナタは、倒せるという言葉に反応し、目を見開いて驚いている。今までまともに、白へと攻撃を当てたこともないのに、倒せるとその白が言うのだ。驚くのも無理ないかもしれない。

「僕はちよつと次の準備をしてくるから、いつも通り組手をして。ちなみにそつちは分身だから、思い切りやっていいよ」

ヒナタに言葉を残して、稽古場を後にした。

積極的に攻めるように水分身には指示している。手加減はしないようにしているが、ヒナタがそれをどう捉えるかによって、倒す時間も変わるだろう。最初は様子見で、倒すのに時間が掛かるかもしれないが、一度倒してしまえば、次からは倒すまでにそれほど時間は掛からないはずだ。そのため、複数の水分身を作るべく台所へと向かっている。

更に2人分の水分身を作りだし、稽古場へ戻ると、完全に受けに回っているヒナタがいた。倒せるという言葉が信じられなかったのか、それとも未だに様子見をしているのか分からない。しばらく様子を見ておこうと、壁際に行こうとして部屋に入った時にそれは起こった。

それまでヒナタは、攻撃を捌けていたようだったのに、こちらに気を取られたのか、入ってきた白を見て硬直してしまい、水分身の攻撃をまともに受けてしまったのである。一応すぐにヒナタは立ち上がったが、シヨックを受けていることには変わりない。

(折角いい感じで捌けていたのに、何で攻撃を受けたのかな?)

白には理由が分からなかったが、ヒナタから見れば、突如部屋へと入ってきたうえに、人数が更に増えていたことで驚いてしまったのである。そのため組手中であるにも関わらず、固まってしまい、まともに水分身の攻撃を受けてしまっていた。

「もう一度構えて。すぐにその分身を倒してしまおう」

「倒せるのかな……」

「倒せるよ。さつきまでは、攻撃を防げてたみたいだし、後は隙をついて攻撃するだけだよ」

「うん……」

(倒して自信を付けさせるつもりだったけど、もしかしたらこのままだと、あまり効果が見込めないかも)

結局は倒すのに昼頃まで掛かってしまい、そのまま昼食となった。いつもとは違い、疲労困憊といった風にはなっていないが、水分身を倒しても、ヒナタに自信は付いていないようだ。手加減されてわざと勝たされたとも思っているのだろう。

水分身が、いくら本体より弱いとは言っても、多少の強度がある。しかし、柔拳を受けてしまえば簡単にやられてしまうのだ。ヒナタ自身が教わり、身につけようとしている技術が、どのようなものを理解させないと先へは進めなさそうだった。

午後から増やそうと思っていた水分身を取りやめて、先に柔拳について説明しておく。一撃でも当てれば分身が消えることも説明し、分身自体も強くは無いことを説明したうえで、再度組手をさせた。

今度も、最初は受けに回っていたが、突きを放ってきた腕に対して、偶々かもしれないが、掌でその突きを払った。突如として水になった分身に対して、ヒナタは啞然としていた。自ら攻撃をしてないのに、何が起こったのか分からなかったのだろう。

「これで分かってくれた?」

「なんで消えたの?」

「さつきの、手を払う時にヒナタの掌が分身に触れたからだよ。ヒナタの攻撃は、少し相手に当てるだけでも倒せるんだ。分かってくれ

た？」

「……………」

何も言わないヒナタに、理解したのか分からなかったが、今回は更に短い時間で倒したことはない。そのため、次のステップに進むことにした。

「次は2人同時に相手をしてみよう。取り敢えず今日は3人くらいを目標ね」

そういつて、水分身2体との組手をさせる。さすがに白眼があるとはいえ、始めから前後での攻撃はさせずに、同一方向からの攻撃のみとして、1体を倒したらすぐさまもう1体を送りだし、徐々に方向を広げていくことにする。

延々と続く水分身からの攻撃に、ヒナタは途中から疲労のためか、攻撃を受ける回数が増えていき、最後にはいつものように、立ち上がれないまで疲労していた。

（さすがに2体で少し方向が離れただけでも対応が出来ないか……。でも倒せてるんだから、これで手ごたえなり、何かを掴んでくれればいいんだけど……）

いつも通りに、まともに動けないヒナタを連れていく。夕食まで済ませ、部屋へと戻ってからヒナタに今日の事を聞いてみることにした。

「今日の鍛錬で自信は付いた？」

「分からない」

「え？」

ヒナタの言葉は、白にとっては予想だにしていなかった。水分身とはいえ、2体を同時に相手にしているのだから、多少なりとも自信くらいはついていると思っただけだ。

「えつと。2人同時に相手が出来るんだから強くなってるよ。自信を持っていいと思うよ」

「……………そうなのかな？」

（既にここまでネガティブ思考になっていたなんて……。ヒアシさん戻ってくるまでになんとかなるかなあ）

ヒナタに少しは自信をつけてもらおうと言葉をかけるも、あまり変わることは無かった。いつもと違い、父親からの指摘（ヒナタにとっては叱責かもしれない）が無かった分だけ、精神的に参ってないだけだった。

27 ネジ?

ヒアシの任務内容は不明だが、しばらく空けると言っておきながら、結局1週間ほどで戻ってきてしまった。白としては、最低でも2週間は戻ってこないと思っただけに、かなり短く感じてしまう。ヒナタにとっては、1週間といえど、束の間の精神的休憩になったかもしれないが……。

その間のヒナタの成果と言えば、水分身2体での、前後からの攻撃であろうと、対応できるようになったことくらいだろうか。本来であれば、もつと数を増やしたいところだったが、手数が増えると、どうしても対応できなくなってしまっている。

1週間前よりは成長しているのだが、如何せんネガティブ思考のせいか、自信を持ってないでいるようだ。ヒナタ自身が、成長しているのを認識しているのにも関わらず、自信を持ってないという、白にとっては理解しがたいことだった。

ただ、ヒナタだけの鍛錬をするだけではなく、白自身もヒアシの居ぬ間に、柔拳についての対応策を試していた。白の脚に柔拳を使ってもらい、それを治療するというものだ。

脚に触れられた瞬間、一気に力が入らなくなった。今までチャクラにて強化していた身体が、強化していたチャクラが無くなったことにより、素の状態になったのがよくわかった。脚と言っても太腿の部分だったのだが、そこから先へのチャクラ供給すら出来ないようだ。ただし、チャクラが供給できないだけで、筋力さえあれば普通に移動することは出来た。

ヒナタに礼を言いつて寝かしつけ、寝たのを確認してから自分の部屋へと戻り、医療忍術を使用する。今までは、外傷に対する治療は行ったことはあるが、このように、内部のことに関しては初めての試みであるので、うまくいくのかが分からない。原作では数日で治っていたようなので、もし治療出来なかったとしても、自然と治るだろうと、ヒアシの居ないこの時に実施することを決めたのである。どれくらい不在期間があるのかが不安だったが、その時の言い訳についても

考慮してるので、大丈夫だろうと思っている。

一応その日の内に、治療することは出来たが、無駄に時間とチャクラを使用してしまったため、受けないことを前提にした方がいいと再度認識する。今回は、治療できることが確認できただけでも十分だろう。ただ、これが腕などの、治療する際に必要な部位に、受けてしまった時をどうするかが問題だが、その時は逃げようと心に決めた。そこから無理に攻撃しても不利なだけで、最悪死ぬ可能性すらある。勝てる可能性が薄い時点で、結局は最初から逃げる気満々なのだが……。

ヒアシが戻ってきて最初に行ったのは、どのような鍛錬を行ったのかを確認することだった。

水分身の術を2体作りだし、ヒナタと双方ともに構えて、ヒアシの合図とともに開始する。この構えの段階で、ヒナタがかなり緊張しているのが分かったが、合図が発せられた以上、白には止めることは出来ない。水分身は二手に分かれて、手始めに左右から同時に攻撃を行う。

ヒナタが、本来の実力を発揮できれば、この程度の攻撃は全く問題無いはずなのだが、緊張のせいか未だに動きが鈍く、回避するのが精一杯といった感じだ。しかも、少しではあるが、水分身の攻撃を受けている。

(父親が居ると居ないとで、こころも違いが出るとは思わなかったな)

やっとのことで、ヒナタは1体目の水分身を倒した。それを確認し、再度水分身を作り出して攻撃をさせる。その後、少しだけ時間が経過したのちに、ヒアシは止めるように言ってきた。

「もうよい。やめよ」

ヒアシの失望したようなその言葉で、水分身を下げさせる。多対一の経験を積ませるという意味では、1週間と言う短い間で、2人掛かりに対して対応できただけでも、良いとは思うのだが、ヒアシにはお気に召さなかったようだ。

(こんな予定じゃなかったんだけどなあ。分身でもいいから、変化したヒアシさんを置いておくべきだったか)

それほど時間が立っていないにも関わらず、ヒナタは既に息を乱し

ていた。昨日の時点であれば、この段階では息を乱すことなど無かつたし、攻撃を受けることもなかった。今回見ている限りでは、緊張により動きが鈍くなり、それによって動作が後手に回ってしまう上に、その焦りによって防御が疎かになり、水分身の攻撃を受けるという悪循環が出来上がっていた。

ヒナタにとって悪いことは続くもので、ヒアシの次の言葉でヒナタは硬直してしまう。

「明日より私が鍛錬を行う。白は定期的に鍛錬に呼ぶので、その心積りをしておけ」

以前よりも動きが鈍くなっているように感じたのだろう。ヒアシ自ら徹底的に鍛えるようだ。ただそうになると、白はの間どうすればいいのかが不明である。

「私はその間どうすればよろしいでしょうか？」

「以前と同様でも構わぬが、もし鍛錬したいのであれば、分家にネジと言う者がいるので、そちらと鍛錬せよ。話は通しておく。ただし、午前から午後の終わりの時刻にはここへ参れ」

「分かりました。ありがとうございます(ネジと鍛錬かあ、あんまり気が進まないなあ……。ネジの父親の関係で、ネジを鍛えろってことなのか？ まあ、一度会ってみないとなんとも言えないか。でも点穴は受けてみたいな、現状で天穴なんて突けないだろうけど……)」

少々考えごとをしながらも、ヒアシの居た時と同じ通常の鍛錬に戻った。今までの速度と違うためだろう。ヒナタは、水分身の方の速度に慣れてしまっていたせいか、全く白の攻撃に対応できていなかった。

それを見ていたヒアシは、更に表情を険しくしているように見える。ヒナタはその表情を見る余裕さえ無く、最初の緊張は無くなったが、いまは攻撃を避けるだけで必死なようだ。結局は避けれずに攻撃を受けている訳なのだが、ここで手加減をすれば、ヒアシから叱責を言われるのは目に見えているので、そうすることすら出来ない。

この日は、いつもより早めに終わることとなったが、内容としては、気を失っても無理に起こして続けさせ、立ち上がることさえ出来なく

なるまで行われた。

次の日。いつもより更に元気のないヒナタを稽古場へと送り出し、早速分家の屋敷の方へと向かう。ヒアシが話を通しておくと言った以上、早めに会っておくに限る。

屋敷を繋ぐ橋を渡り、分家の方へと向かう。今回は誰に咎められることなく通ることが出来た。

ネジの搜索をするべく外周の廊下を回っていると、庭にて子供が鍛錬しているのが見えた。この歳で日向家にいるのは、ヒナタとネジくらいのはずなので、あそこで鍛錬しているのはネジで間違いないだろう。

そこへ近づいていくが、ネジはこちらの存在に気付いていないのか、鍛錬を止める気配が無い。

折角集中して頑張っているようなので、ひと段落つくまで廊下に座り、その鍛錬の光景を眺めることにした。ヒナタよりも年上ということもあるのだろうが、型の速度は早く、仮想敵？に対して攻撃しているように見える。相手は大人であったり、子供であったりと様々だ。

一通り倒し終えたのか、それとも休憩のためか、鍛錬を終えたようなので声を掛けた。

「こんにちは」

「っ?!……誰だ?」

ネジは声を掛けられたことで驚き、警戒心剥き出しのままこちらへと聞き返してきた。誰もいないと思っていたところに、いきなり声を掛けられたのだから、驚くのも無理はないかもしれない。

「僕の名前は白と言います。宗家の方から話を聞いてると思うけど、一緒に鍛錬するように言われてきました。あなたはネジさんで間違いないですか?」

「言いたくない。それに相手はいらない」

素気なく即答される。白としては予想の範囲内の返答であるため、特に気分を害したりはしない。今のネジにとって、宗家は憎しみの対象でしかないのだから、その宗家から送り込まれたような人物を相手にはしないだろう。

「では、もし相手が必要になったら言ってください。それでは失礼しますね」

立ち上がって部屋へと戻ることにした。これで、義理と言うか義務は果たしたし、ネジの相手をしなくていいのであれば、自己鍛錬や勉強に充てることが出来る時間が増える。そのことに少しうれしくなりながら去ろうとしたのだが、ネジからの声掛けで足を止めざるをえなかった。

「待て！ 今、相手をしてもらおう」

いきなり気が変わったのか、ネジはそう言ってきた。その眼は明らかに白を敵視しているようで、恐らくは、ここで完膚なきまでにやっつけてしまおうとも思っているのだろう。

（宗家の人間ではないんだけどなあ。そんなに敵視しなくてもいいと思うんだけど）

呼び止められたからには相手をせざるを得ず、近くにあつた草履を履き庭へと出る。

「ルールはあるんでしょうか？ 昼までには戻らないといけないのです」

「倒したら終わりだ。すぐ終わる！」

その言葉を言い終わると同時に、こちらへと走り寄ってきた。一撃で終わらせるつもりなのか、純粹に掌底の一突きを身体に当てるつもりのようなだ。フェイントなども無く、恐らく今のネジの最速の一撃なのだろう。ただ、あまりにもその攻撃は直線的に過ぎた。

（これを胸に受けたらさすがにまずいなあ。わざと負けるつもりだったけど予定変更。一度負けることを覚えてもらおう）

相手との力量差をまだ見抜くことが出来ないのだろう。ネジは当たると確信した表情をした瞬間に、白は素早く屈んでネジの足を引っかけた。

ネジは、目の前で急に白が消えたことで、足を引っかけられたことに対応出来ず、その勢いそのまま倒れてしまうが、すぐに起き上がった。その表情からは信じられないといったものから、怒りの顔へと変わっていく。

「では失礼します（きて、終わったし帰ろう）」

「待て！ まだだ！」

「倒したら終わりとお聞きしました」

「倒されてない！」

（子供の屁理屈か……）

はつきり言つて、相手にするのが面倒になりそうな感じがしている。この調子ではネジが納得するまで続きそうだった。

「どうすればいいの？」

「倒すまでだ！」

そう言うのと、今度は構えをしつかりととり、じわじわとこちらへと近づいてきた。もう先ほどの油断は無いようだ。相手の全体を捉えて、すぐに対応できるように警戒しているのが分かる。一定の距離まできた時に、ネジは一気に間合いを詰め、連続で攻撃を仕掛けてきた。

白はそれを冷静に対応していたが、このままでは終わらないと、途中でネジの両手首を掴み取り、一本背負いの要領で投げ飛ばす。その後はさすがネジと言うべきか、投げ飛ばされたにも関わらず、体操選手のような形で前宙をして、綺麗に着地をやつてのけた。そして、すぐさまこちらへと向き直り構えをとる。

（これは本格的に面倒かも）

手加減をしているとはいえ、この調子ではいつまでも終わりそうにない。ただ、この時の救いは時間が有限であったことだろう。

「すみませんが、そろそろ時間なので戻らねばなりません」

「勝ち逃げする気か！」

（別に勝った負けたはどうでもいいけど、このままだとなかなか引きそうにないし。憎しみ増えるかもだけどあの言葉を使おう）

「ヒアシ様から、時間になったら来るように言われているんです。当主に逆らったらどうなるか、あなたは知ってますよね？」

「……………」

ネジは、父親とヒアシとの稽古場でのやり取りを思い出したのだろう。そのまま黙ってしまった。これで、今後は何も言つてこないだろうと、白は稽古場へと行くため廊下へと向かう。

「では失礼します」

ネジの横を通り過ぎる際に、ネジへと声を掛けていったのだが、意外にも返事があつた。

「お前は宗家の者なのか？」

「……いえ違います。ある事情で宗家に住まわせていただいているだけです（まあ、宗家には助けてもらつた恩があるから言うこと聞いているんだけどね）」

「そうか」

「ではあまり時間も無いので行かせていただきます」

そう言つて廊下へと上がり、宗家の屋敷へと向かおうとしたところで、ネジから声が掛けられた。

「俺の名前はネジだ。明日も来いよ」

「時間がありましたらまた来ます」

そう言い残して、今度こそ白は稽古場へと向かつて行つた。

28 誕生？

ヒアシとのマンツーマンによる指導になってからというもの、日が経つにつれて、ヒナタが精神的に少しずつ弱っていつているのが分かった。終わった後に、励ましの言葉や、次の日への負担を減らすための治療も行っているが、効果が薄い。

気になって、どのような鍛練をしているのか聞いてみたが、教えてはくれなかった。教えたくないというよりも、思い出さたくないが正解だろうか。

毎日痣や擦り傷、切り傷はあるが、軽傷ばかりなところを見るに、手加減はされているのがわかる。その為、内容的には変わっていないのだろうと推測するしかない。

性格を少しでも前向きにするために、現状ではヒナタに、このまま持ちこたえてもらうしか無いだろう。メンタルケアなどしたことはないし、もう少しすれば、妹が生まれるはずだ。それで、鍛練からは解放されるだろうから、そこから少しずつでも改善していけばいい。今は現状維持か、下がり幅を小さくすることだ。

白の方は、晴れていれば午前中にネジのもとに行き、体術の鍛練を行っていた。チャクラ強化なしで、ネジの方も純粹に体術だけの組手だと、気の抜けない良い勝負になるので、双方ともに有意義なものとなっている。

ネジの、宗家に対する想い、と言うか憎しみのようなものは変わらないようだが、白に対する対応が変わっただけでも、付き合的に楽だ。ネジに本当のことを話そうかと何度か思ったが、もしそれを信じて、今のやる気を妨げると、それが悩みの元になり弱くなってしまうのでは？と思いい、話してはいない。

午後からは、鍛錬以外でも日向家にある本を読むことにしているのだが、目ぼしいものは一通り読んでしまっていた。約1年もいれば、十分に読める物量しかなかったとも言える。と言うよりも、知りたいと思っている、忍術や医療、薬学に関する本があまり無いのだ。別の場所に保管されているとは思いますが、最初に案内されたときに、閲覧可

能なのは、この部屋と言われたことから、白が見たいと思っている本や巻物のある部屋については、他者が見ることが出来ないものが置かれているのだろう。そこへ、興味があるので見せてほしいなど言えるはずもない。

今は、忍術、肉体の鍛練、と覚えたことの復習を行っている。忍術の改良についても行いたい、そこまでの具体的な案が出来てない。えに、部屋でやるには狭いということもある。

(当面はこの生活を続けるしかないか)

日々の鍛練で強くなってきたのは分かるのだが、実戦でどこまで通用するのかが分からないのが、今のところの一番の不満な点だろう。ヒアシの、ヒナタに対する個人指導が始まってからというもの、ヒアシとの手合せを全く行っていない。たまに稽古場へと呼ばれて、ヒナタとの組手という名の模擬戦を行っている。しかし、白とヒナタの力量が、逆に差がひらいているようようだ。ヒナタ自身も進歩はしているのだが、どうやら白の方が進歩の幅が大きいようで、その日は一段と、午後からの鍛練でボロボロになっているヒナタを介抱することになる。

そのような日々が約2年過ぎた。

ネジに関して言えば、体術で白はネジに負け越している。いくら日向一の天才といえど、そうそう離されれないと思っていたのだが、その認識は甘かったようだ。言い訳かもしれないが、柔拳に日々を費やしているネジに対して、白の方は忍術などの他のものにも手を出している。差が徐々にひらいているのが分かった。チャクラを使用しようかと考えたこともあるくらいだ。

(ヒナタも僕に対してこんな感じで考えているのかな?)

差がひらいていくと言うのは、あまりいい気分ではない。しかも、ヒナタに関してはネジと同じように、おそらく柔拳のみを鍛練しているはずだ。このような思いや考えは白よりも更に上だろう。

そのヒナタだが、性格はなかなか変わらない。むしろ、白との模擬戦にて自信を失っていると言ってもいいだろう。ただし、最近では体

力がついてきているのか、怪我の程度については以前のままで、自分の足にて部屋へと戻れるくらいにはなっている。今ではヒナタの部屋にて話が出来るくらいだ。白が読んだ本の内容を話して、それに対しての使い方や考え方の意見交換のようなものだが、ヒナタに鍛錬の事を忘れるには良い気分転換になっているだろうと、今まで読んでいなかった物語の本なども読むようになっていた。

ある日、ヒナタの方から先に話してきた。いつもであれば、白の方から話すのに、ヒナタからと言うのは珍しいことだ。その話の内容は、ヒナタがいま抱えている悩みだった。

その内容を聞いて白は、ヒナタの考え方に対して、自分の思い違いであることに気が付いた。ヒナタは、鍛錬が嫌なのではなく、父親に認められたい、褒められたいという思いがあり、自分の成長が、父親の期待に答えられていないことに自己嫌悪に陥っている、というものだったのだ。そのことで、日々の鍛錬に対して、後ろ向きな考えになっていつてしまっているようだろう。

(内容的には強くなればいだけなんだけど、それはもうすぐ叶わなくなってしまう。いつその事割り切ってもらえないけど、これはマズイかも……。取り敢えず今は無難に声を掛けるしか思いつかない)

「今は、自分に出来る最大限の事をやればいいと思うよ。ただ、無理をして身体を壊しては意味が無いから気を付けてね」

「……うん」

現状でもヒナタは、精一杯頑張つてはいるのだろう。それが報われないと、白には分かっているだけに、いまは単純な励ましの言葉しか出すことが出来ない。

そして、とうとうその日がやってきた。

ヒナタの妹が生まれたのである。

その日は鍛錬もなく、日向家は盛大に祝っていた。新しく生まれた家族に対して祝うのは当然かもしれない。この日ばかりはヒアシも険しい顔を嬉しそうに笑顔にしていた。ここにきてから、初めて見た顔だ。

みんなが嬉しそうに笑顔で祝っている席の中。ネジは欠席のよう
で来ていなかったし、ヒナタの方を見ると、微妙な笑顔を浮かべてい
る。笑顔なのだが、少し引き攣っているような感じと言うべきだろう
か。

ヒナタの視線の先を追うとヒアシの姿が目映った。ヒアシのあ
のような顔を見るのは久しぶりなのだろう。しかも、その笑顔は、自
分に向けられたものではなく、他の者——自分の妹に向けられてい
るのである。祝ってあげたいが祝いたくない、嫉妬のようなものだろ
う。

その次の日から、鍛錬の内容が変わってきたようだ。いつもであれ
ば、ヒナタ自身にて歩く体力が辛うじて残るくらいなのだが、昔と同
じように床へと倒れてしまっていた。そして時には、いままで軽傷の
打ち身で済んでいたものが、骨が折れていたりと様々だった。

極めつけは、夕方に迎えに行ってみれば、稽古場には誰も居らず、部
屋へと戻ったのかと思えば、ヒナタの部屋へと行ってみるも居なかった
ので、仕方なくヒアシの部屋へと訪れたのだが、その時に、ヒナタが
入院していたことが分かった。

「失礼いたします。少々よろしいでしょうか」

「なんだ？」

「ヒナタ様は何処でしょうか？」

「木ノ葉病院に運んである。数日もすれば、すぐに退院してくるだろ
う」

ヒアシが最初何を言っているのかすぐに分からなかった。ここ最
近の鍛錬がおかしいとは思っていたが、入院までいくとなると、明ら
かに今までの鍛錬に比べてやりすぎである。どのような内容をして
いたのか聞きたくなり、我慢できずに訊ねてしまっていた。

「何をされていたのかお聞きしても構いませんか？」

「話すことはない」

ヒアシには、鍛錬の内容を話す気は無いようで、対応自体も素気な
い。これ以上聞いても、機嫌が悪くなるだけだろうと判断し話題を変
える。

「失礼しました。それではその数日間ですが、鍛錬は無いようですよ、買い物をしてきてもよろしいでしょうか？」

「何をかう？」

「閲覧可能な本について一通り読み終えましたので、本などでも購入しようかと」

「その程度なら構わんが、日向家に泥を塗るような行為をすれば……分かってるな？」

「勿論です」

「話が以上なら下がれ」

「失礼いたしました」

ヒアシの部屋を後にして、白は自室へと戻った。自室に戻ってから本に載っていた地図を見直す。この屋敷から出たことが無いので、木ノ葉病院というのが何処にあるのかが分からない為だ。

ヒアシには本などを買いに行くと言ったが、見舞いにも行く気だ。ただ、見舞いに行くと言っても率直に言っても通じない可能性があったので、自分に必要なものを買に行くと言おう名分に変えた。実際に本は読み終えていたので、購入したいと思っていたし、忍具についても見ておきたいということもある。一番は早く屋敷の外へ出たいという考えかもしれないが……。

次の日。朝食を食べ終えて、籠からお金を取り出し街中へと向かうべく玄関へと向かったのだが、玄関を出る際にまた例の煩い男にあっってしまった。事前にヒアシへと話してあったので、渋々とだが認めた。ただし、またしても条件を付けられてしまった。出るのは昼以降からで、いつも鍛錬が終わる時刻である夕刻までに戻るように言われたのである。

日向的には、一応白を保護しているので、屋敷内ならともかく、街中でのなにかされれば日向の名に傷が付くというのは理解はできる。しかし、納得はできなかった。午前中ではなく午後だけで、時間的にはマシだったかもしれないが、1日外で探索も含めているつもりだったのに、それをこうも潰されては、この男に殺意を抱かずにはいられない。

(こども運が無いとは……、この男が居なくなれば多少マシになるのかな?)

漏れ出そうとする殺意を抑えて、笑顔にて対応して部屋へと戻り、自分自身を落ち着かせる。

(こんな時はネジと組手しよう。確か今日はアカデミー休みのはずだし。それに身体を動かして気分転換したい……)

それから、午前中にネジを見つけて組手をした。完全に負けはしたがすすきりし、モヤモヤとした気分は無くなっていった。

「今日は何かあったのか?」

「なぜそう思ったの?」

ネジとの会話は、途中から敬語を使う必要はないということ、ネジに言われて、今では普通に年齢を気にせず話をしている。

「最近、白の方から来るのが少なかったのもそうだが、今日の組手で、始めの方の動きが雑だった」

「それはネジがアカデミーに入ったから誘いにくいんだ。今日の組手に関しては、ちよつと嫌なことがあつてね。気分転換に身体を動かしたかつたんだよ」

「俺は気分転換でしか誘われないのか……」

「そこまでは言わないよ。でも、この前もそうだけど、今日も明らかに手加減してるよね? 実力がひらきすぎると鍛錬にはならないし、むしろ個人でやった方がいいと思うよ」

この手加減についてはすぐにわかった。ネジは、白の速度に合わせて組手を行っているのである。時期的には、忍者アカデミーに入学してしばらくしてからだろうか、それが顕著に表れ始めたのは。

格下相手に合わせてやったところで、伸び代は小さいだろう。それよりも個人で鍛錬するか、実力が同程度、もしくはほんの僅かでも上の者とやった方が身になるはずだ。

「そんなことはない。俺の周りについてこれているのは白だけだ。アカデミーにも少しは期待していたが、そんな奴はいない」

「ついていけないから言ってるの。そろそろ時間だから行くよ。また誘うかもしれないけどよろしくね」

「ああ。またな」

白は木の葉の里に来てから、初めての外出に再度気分を高揚させて、お昼ご飯を食べるべく宗家の屋敷へと戻っていった。

29 外出？

気分転換を終えた白は、午後からすぐに屋敷の外へと出た。

屋敷の門から出たそこには、大きな通りが横たわっており、近くに大きな建物などは無いが、街の一部と言っているほどの場所だった。本で見た地図からは、もつと街から離れた場所にあると思ひ込んでいただけに、その光景を見て白は足を止めてしまっていた。

(昔の地図なんて参考にするもんじゃないな)

止めていた足を再度動かし、火影岩の方面へと向かって歩きながら考えていた。参考にしていた地図では、日向家の屋敷は木の葉の里の外側にあつたはずだが、そこからかなり発展したのだろう。明らかに里の外側付近とは言い難い。

ひとまず、道行く人に本屋を尋ね、木の葉の里内の地図と他に複数冊の本を購入した。地図については、さすがに個人の家の名前まで記載されてはいなかったが、店などの名前は大体記載されていたようだ。大体というのは、何を基準としているか分からないが、記載されていない店が、本屋の目の前にあつたからだ。

(店は経営次第で潰れたり、新しく出来たりするから対応が難しいのは仕方ないとして、さすがに病院の位置までは変わらないはず)

地図を片手に、現在地と病院の位置を確認しながら向かつていたが、途中でそれに気付くことになった。

(お見舞いの品を買ってない……。病院のお見舞いといえば……)

病室に着く前に気付けて良かったとは思うが、肝心の品物を何にするべきか迷っていた。歩行する速度も格段に落ちてしまう。何かいいものは無いかと、周りをキョロキョロと窺いながらあるいていた。そこで目に留まったのが花屋である。

在り来たりな品物だが、無難であるし丁度良いと、白は花屋へと入っていった。

店の中に入ると、さまざまな花が置かれており、入口に設置してある花からだと思われるものが微かに香ってきた。店内を見て回っていると、花の漂ってくる香りが変わっていく。花の匂いが混ざって、

充滿しているのではなく、それぞれの花の香りが分かるようになっていた。

一通り回って見るも、どれが良いのか分からない。見た目で選ぶべきか、それとも良い香りの物にするべきか。どちらも白個人の好みであつてヒナタの好みではない。それなりに長く一緒に居るが、好き嫌いについて知らないことに思い至つた。

更にどうするべきか悩んでいると、花屋のレジにて座っていた女の人に声を掛けられた。

「こんにちは。何を悩んでいるの？」

「こんにちは。お見舞いの花を何にしようか迷つてました」

「もし良ければこちらで選んであげるけど、どうかしら？」

「お願いします。こういうことには慣れてないので助かります」

「受け答えがすっかりできて偉いわね。うちの子にも見習わせたいわ。……お花だったわね。送る相手がどんな人かと、お金はどのくらいを考えているか教えてもらつてもいいかしら？」

送る相手と言われても、ヒナタの名前を出すわけにはいかず、その代わりに性格が内気であること等や、予算についてはそれほど気にしないでもいい旨を伝えた。

「そうね、それだったら、この花だったらどうかしら？」

女の店員が選ばれたのはアジサイだった。

「相手は女の子みたいだし、この時期ならこれでいいわね。あじさいの花言葉に元気な女性というものがあるから、よくなりますようにつて言う意味も含まれてるから選んでみたわ。お気に召したかしら？」

「はい。それでお願ひします（選ぶのが面倒だ）」

花を見舞い用に包んでもらい、支払いを済ませて店を出た。ここまですれば、木ノ葉病院まですぐそこのはずである。一応念のために忘れ物が無いかを確認する。

木ノ葉病院は庭が広く、今までの病院のように、駐車場で敷地を使っていたりなどは無かった。受付にてヒナタの病室を確認して、見舞い用の帳簿に記帳してから、部屋の場所を教えてもらつてから向かう。

その部屋は真っ白な個室だった。音も立っておらず、誰も居ないと
言われても信じてしまいそうなものだ。

ベッドにて休んでいるヒナタへと近づくと、未だにヒナタはベッド
にて寝ているようだった。しかし、身動きをしていないようだったの
で、少し慌てて駆け寄り、口に手をかざしてみる。息はすっかりして
いるし、診た限りでは外見的に異常はなさそうだ。服を脱がしてみな
いと確実なことは言えないが、おそらくは柔拳を受けた可能性が高
い。それにより、内臓系にダメージが入り入院になったのだろうと推
測している。

近くに気配を感じたためだろう。ヒナタは目を覚ました。

「こんにちはヒナタ。入院したと聞いて心配したよ。怪我の具合はど
う？」

「心配かけてごめんね。怪我については気にしないで、すぐに治ると
思うから」

起きたヒナタは、いつもより更に元気がなかった。白の方では、本
日行った鍛錬の内容を聞いて推測を補完してしまいたかったのだが、
先に言いたくないという、遠回しな拒絶の意思が含まれて、ヒナタが
言っていることが分かり、確認のために聞こうとしていた内容を変え
ることにした。

「ヒナタはこの街に詳しい？」

「私もあまり出たことがないから、あまり分からないかな」

「そうか、そうだよね。僕と同じで屋敷から出たことないだろうし」

ヒナタの返事を聞きながら、お見舞いに持ってきてあった花を病室
に飾る。

「紫陽花？」

「元気になるようにだって。花屋の店員さんが教えてくれたよ。ここ
に飾っておくね」

「ありがとう。わざわざごめんね」

「いいよ。何か他に買ってきてほしいものはある？ 午後は街中を見
て回るつもりだから、欲しいものがあれば買ってくるけど？」

「ううん。気にしないで大丈夫だよ。数日で戻れるって聞いているか

ら、私の事は気にしないで」

「……わかった。それならこれを渡しておくよ」

そう言つて白がヒナタに手渡したものは、先ほどの本屋にて購入したノートと筆記用具だった。手渡されたヒナタは、どうすればいいのか分からないようだ。

「風景画でも描いてれば、時間なんて、あつという間に過ぎてしまうと思うよ。何に使うかはヒナタ次第だけだね」

「大事に使うね」

「無くなつたらまた買えばいいよ」

「＜友達からの初めてのプレゼントだし＞」

「何か言つた？」

「な、何でもないよ！」

ヒナタは慌てているようだが、病室にて始めに会つたころよりも、元気になったように見える。その後、他愛ない話をして1時間ほどいたところで、病室を後にすることにした。

「また明日も来るから、今日のところは帰るね」

「うん。今日はありがとう」

病室を後にして、再度街中の探索を開始する。屋敷へと戻る時間を考慮すれば残り2時間ほどしかない。その為、主要となる場所を本日は巡ることにした。始めにメイン通りを進み、どういった店があるのかを把握しつつ、火影の居る建物の近くまで向かう。そこまでたどり着いたところで、そこから里の出入口へ向けて違う道を通つて行った。この辺りは、普通の店もあるにはあるが、店メインというよりも、どちらかというと宿屋がメインのようだ。

里の出入り口付近には、前面と片側の側面の壁取り払われた小屋が建ててあり、そこに2人ほどが座っているのが見えた。額当てからして木の葉の忍だとは思ふのだが、何をしているのかが分からない。興味本位で聞いてみることにした。

「こんにちは。ここで何をしてるんですか？」

「んん。なんだガキか。こっちは忙しいんだからどつか違ふところで遊んでろ」

「そこまで言うことないだろう。ごめんな。お兄ちゃんたちは、ここを通る人たちで、怪しい人が居ないか確認する仕事をしてるんだ。わかるかな?」

「あつははっはは!!! お兄ちゃんってガラかよ! これは他の奴に言わないとな! そうだ! お前が幼女を狙っていると付け加えといてやる!」

「おい! いきなり何言い始めてる! 全くの誤解だ! そんなことしてみる! お前の秘密もばらしてやるからな!」

「俺に秘密なんてないね!」

「ほお。実は狙っている娘がいるというのを、俺が知っていたらどうするよ。」

「そんな……なぜ知ってる!?!」

「カマ掛け成功!」

この後も、何やら2人で盛り上がっていたようだったので放っておき、白は屋敷へと戻っていった。戻ってからは、購入した本を読み鍛錬を行う。アカデミーの内容の載っている本を購入しようとしたのだが、内容については、小学生レベルのものが多かったので、より専門的なことが載っている本の方を購入していた。

(明日は忍具類の購入と街の探索の続きで、ラーメン屋一楽を探してみるのもいいかも)

現在滞っているのは医療系忍術と普通の忍術である。基礎的なこととは書いてあるのだが、応用が書かれたものが今回寄った本屋には置いていなかった。もしかしたら本屋には置いてないのかもしれない。見つからない場合はあまり気は乗らないが、ある人に教えを乞うしかないだろう。ただし、その場合1人は後に危険に晒される可能性が高すぎる。もう1人は見返りを求められるかもしれないが、そのくらいは問題ないだろう。

結局はここ数日の内次第なのだが……。

忍術の書について見つけることが出来たのは、アカデミーの本に毛が生えた程度の、応用的なものしかなかった。聞いたところによると、下忍になった際に担当の上忍などから授かるものであり、それ以

外だと家系に忍者が居れば教わることがあるというものだった。

このままでは、忍術に関しては、いまある術の改良くらいしかあまり出来そうにない。改良が完成次第、教えを乞うしかないだろう。

医療に関しては、薬師カブトを探すつもりだ。どこかの医者の子と分かっているだけなので、調査が難しいかもしれない。こちらはリスクが高いが、それなりにメリットが大きいのも確かだった。この里で今いる最高の医療忍者であるはずなので、期待が大きい。その選択の前に、居る場所を見つけられればという、前提条件が付くのがあれだが。

数日後にヒナタが退院する日がやってきた。一緒に屋敷へと戻り、ヒナタの部屋に行った際見せてもらったのだが、渡したノートには風景画を描かずに、どうやら今までに持って行っていた花を、押し花としていたようだ。

嬉しそうに出来上がりを見せてくれたので、「よく出来てるね」と言っただけを見たものの、このままでは枯れてしまうのではと思わずにいられたかった。

入院前よりも元気になっていることは確かなので、余計なことはいわず、街中を巡ったことなどを色々と話してその日は終わった。

時間はまだあるとは言え、医療に関しては、薬師カブトの件は諦めて、自分でやっていくしかないだろう。一通り街を探してみたが、見つけることが出来なかった。それ以前に、薬師という医者すら見つからなかったのでもうしようもない。

人体に関する資料に関しては本屋にあつたのでそちらで勉強していくしかないだろう。実践が出来ないので、どのくらい力量が上がっているかの把握が出来ないのが難点なところだ。

忍術に関しては、今の忍術の改良がうまくいけばいいのだが、それが無くとも最低限の事は出来るだろうが、今は将来に備えて力を付けておかねばならない。そう思いながらその日は就寝した。

30 休み？

退院してからというもの、日々の鍛錬にてヒナタが大怪我をすることは無くなった。

いつも疲れ果ててはいるが、特に目立った外傷も見当たらないことが増えてきている。きっと入院したことで少し元気になっていったことから、よい息抜きが出来て、成長しているのだろうと思いい、鍛錬が終わった後、いつも通りヒナタの話し相手をしている。入院してからのというもの、押し花が好きになったのか、屋敷内の庭に咲いている花を押し花にして、よく見せてくる。趣味が出来るのはいいことなので、相槌をうちながら、もつと色々な花を押し花にしてみてもと薦めていた。

それが出来るような余裕が生まれたのも、今まで毎日鍛錬に費やしてきたいたのが、週に1度だけ、鍛錬に休みの日が挟まれるようになったからだ。

白と同じで、午後だけという条件付きで、しかも最低でも白と一緒にというものだったが、外出の許可も下りている。ヒナタが入院をしたことで、ヒアシに心境の変化でもあったのだろうか、それとも何か幻術でも掛けられているのかと疑ってしまう。ヒアシに幻術を掛けられるような者がこの屋敷内にいるとは思えないが……。

退院後、定期的に呼ばれていた日にちよりも、少し早い日程でヒアシに呼ばれて、ヒナタと組手を行った。そこで初めて、ヒナタの日々の怪我の度合いが少ない原因が分かった。

入院時のような怪我を恐れてなのか、ヒナタの方から攻撃をしてくることが、少なくなっていたのである。前はこちらの打ち込みに対しても、少しは反撃しようとしていたのだが、それがほとんどなくなり、攻撃を捌く防御の方に重点をおいたものとなっていた。これならば確かに、攻撃時の隙も少ないので、怪我をするリスクは低くなるだろうが、自らが攻撃しないといけないような場面に遭遇したときに、困ることになるだろうことは目に見えている。

途途中でヒアシはどう考えているのだろうかと思いい顔を見るが、

その表情に変化はない。ただ2人の組手を見ているだけだ。今までであれば、あれこれと指摘、指導をしていたと思うのだが、今回はそれもない。訝しみながらも、組手をやり終え、その後はいつもと同じように過ごした。

初めてのヒナタの休みの日の前日に、ヒアシからヒナタ共々呼び出されて、週に1度鍛錬を取りやめて、休みとする旨が伝えられた。本来であれば、毎日鍛錬するのではなく、休息を入れることが大事なことなので白としては今更感が強かったのだが、ヒナタはそうではないようで困惑しているようだった。

話はそれだけだということで、ヒナタだけ先に部屋へと戻るように言われて、白のみ部屋に残される。

「4月よりアカデミーにヒナタと共に入学してもらおう。それに伴う書類などは、こちらで作成して提出してある」

「(アカデミーには通えるみたいだ)ありがとうございます。できればいいのですが、その書類を見せていただいてもよろしいでしょうか?」

「そうだな生年月日など不明部分は、こちらで埋めてあるので、その辺りを覚えておく必要があるだろう」

そう言つて、1枚の資料を執務机の上から取り出すと、こちらへと渡される。そこには、名前、住所、生年月日など些細な事柄しか記入されておらず、最後にアカデミー入学に関する説明文の下に、責任者の署名が記されているだけだった。署名の欄には日向ヒアシと記入されている。

ただ、この書類にて納得できないことが1つあった。生年月日については、これを記入した日なのだろう。1月9日と記されており、別段いままで気にもしてなかったのでいいのだが、その次の項目に問題があった。

「1つだけお聞きしたいことがあります」

「なんだ?」

「私の性別は男です。しかし、ここには女として記入してありますが、理由があるのでしょうか?」

「……………。ヒナタの世話をするには丁度よかろう。何か問題はありますか?」

「いえ…………。ありません(最初の沈黙と取ってつけたような言い訳…………絶対男だと思ってなかったな!?)」

「話は以上だ」

「失礼いたします…………」

白は、アカデミーに通わせてもらえることに関しては、嬉しく思っていた。元々そういうつもりでいたが、金銭面などの事もあり、なかなか言いだすタイミングが取れずにはいただけに、ヒアシの方から言うてくるとは思ってもいなかったのである。

しかし、まさか女として申請されているとは思っていなかった。確かにヒナタの近くに居る分には、女として申請しておいた方が都合がよいのは確かだろう。確かアカデミーでは、くノ一としての授業があったはずだ。ヒナタの性格からして、1人で行動していた可能性が高い。女友達でも作れば、多少は明るくなるだろう。そう思い込み、無理やりに自分を納得させながら、白は部屋へと戻った。

次の日になり、最初の休日ということで、街中の案内をすることにした。鍛錬が無いということで、部屋にてどうしようかと悩んでいたようだ。もし、白が誘わなければもしかしたら、1人で鍛錬を行っていたかもしれない。

そんなヒナタの気分転換もかねて、やや強引に連れだしたのだが、今までほとんど外に出たことのないヒナタにとって、街に恐ろしいイメージでもあるのか、人とすれ違うたびに、白の背後へと隠れて服を掴んでしまう。

何故かと思ひ、ヒナタの顔を窺うと少し震えているのが分かる。よく考えれば、1度攫われたことを思い出した。もしかしたら攫われたことで、大人に対する対人恐怖症にでもなっているのかもしれない。こればかりは、このまま隠れてばかりではしょうがないが、その内に慣れてくることを祈るしかない。

そうして人避けのようにして歩きながら、よく行く店舗などを回っていく。本屋などはもちろんのこと、押し花が好きそうだったので、

ヒナタへの入院の見舞い用に、よく買いに行っていた花屋なども紹介していく。

花屋には特に興味があつたようで、少し長めにその店に居てしまっていた。結局、長時間いたにも関わらず、押し花用に1輪の花を購入しただけだった。お金を持ってきていないヒナタに、何度も謝られたが、安い上に1輪であるので、謝られると逆に白の居心地が悪くなってしまう。そのため、誕生日プレゼントということにして受け取って貰った。ヒナタは、不思議そうに首を傾げるばかりだ。なぜ誕生日が理由なのかが分からないようだった。

(そう言えば日向家に来てから、誕生日を祝つてるところを見たことないな。生まれた時は盛大に祝つてたのに。こちらの世界では誕生日は祝つたりしないのかな?)

そんなことをして街を回っているうちに、1日という休日の時間はすぐに過ぎていった。

「1日ではさすがに全部は回りきれないから、また来週に行こう。そろそろ言われてる時間に近くなってきたし。今日の最後にどこか回っておきたいところはある?」

「ううん。特にないよ。ありがとう」

「それなら、最後に来年度から通う忍者アカデミーを見てから帰ろう」
「うん」

これから通うことになるアカデミーをヒナタに見せておくのもいいだろう。そう思い、その日の最後にアカデミーへと向かった。

そして、もうすぐアカデミーに到着するといったところで、まさかの人物——ナルトがいた。ナルトは、木から吊るされたブランコに、1人でポツンと静かに座っていた。この時期から既に、周りの視線。忌避に気づいていたのだろう、覇気というものが全く感じられない。

ヒナタもその姿が気になったのか、そちらの方を見ている。しかし、白が止まらずにアカデミーへと進んでしまっているの、止まらずにいるようだ。

(ここで関わってもなあ。ナルトには悪いけど、今はヒナタだけで精

一杯なんだよね。アカデミー内なら多少はいいけど、休日まで関わりと遊び相手に終わりそうだし……。それに、ここで変に関係もつたりすると、我愛羅とか今後の関係で変なことになりそうだから放置確定っつと)

ヒナタが、ナルトの事を気になっているのは分かったが、そういったことを気にせずに、アカデミーの場所と、どのような施設があるのかの説明をヒナタへ行う。

「という事で、アカデミーについての説明はこんなところかな。後はここから、日向家までの道を覚えればいいだけだよ。何か質問はある?」

「ないよ。でも……、あの……」

アカデミーに関する質問は無いようだが、ヒナタはチラチラとナルトの方を見ながら、言い淀んでいる。自分でも何をどう言ったらいいのか分からないのだろう。

白としても、ただあそこにいるだけのナルトに、一体何が気になるのか分からなかった。なかなか続きを言い出さずに時間だけが過ぎていく。

「ヒナタが気になってるあそこの子もそろそろ帰るだろうし、見た感じ僕たちと同じ年くらいだから、アカデミーでその内会えるよ。それよりちよつと急いで帰ろう」

「うん。そうだよね。また会えるよね」

そう言って急ぎ帰るが、人通りが少なくなったとはいえ、途中で服を掴んでくるので、仕方なくヒナタを背負い、急ぎ屋敷へと帰って行った。

アカデミー

31 入学？

初めてのアカデミーへの登校日。その日はいつもより早くに目が覚めた。

入学のために特に興奮していた訳でもなく、いつも通りの時間に寝たにも関わらず、辺りがまだまだ暗い時間に目覚めた。

無意識に、柄にもなく、アカデミーへの入学を楽しみにしているのかと、起きた時には思った。時間を確認すると、時刻は4時だ。起きるにはまだまだ早い。なぜこんな時間に起きたのだろうか、思った瞬間に、ハツとして辺りを警戒した。

こんな時間に起きるなど、昔であれば他者からの攻撃もしくは、誰かが近付いてきた時だからである。

しかし、特に誰かが近くにいるようなことはないし、どこかから攻撃が来ている訳でもない。それに、加えて自分の身体に異常もなかった。そのことに白は安心したが、それと同時に自分の警戒心があまりにも薄くなっていると気付かされた。

日向家に来てからというものの、安全であると安心しきっていたことに思い至る。鍛錬にて強くはなっているが、肝心の危機感が無ければ、今後の事を考えるにいつ寝首をかかれるとも限らない。

(完全に平和ボケしてるな……。あの感覚を取り戻さないと……。始めに明日からの、目覚まし代わりにのトラップを準備でもしよう)

目覚ましを改良し、音がなる代わりに、避ける等の行為をしなければ、物が身体に当たるような仕掛けを作成する。始めは物が当たる程度で、徐々に危険度を上げていけばいいだろうとの考えだ。

仕掛けを終えたところで、起きるにはしばらく時間があつた。明日からにしようと思っていたが、時間があるのであれば、試しておいてもいいだろうと、二度寝に入る。

結果的に、仕掛けが発動する前に起きてしまい、効果を確認出来なかったもので、なんとも言えなかったが、明日からに期待することにし

てその日は始まった。

トントンと、ヒナタの部屋の扉をノックして声を掛ける。

「ヒナタ。時間だよ」

「もう少し待って」

今日の返事はいつもと違うものだった。いつもであれば、相手を待たせることなど無いのに、この時ばかりは「待って」と言ったのだ。少し意外であったが、自分の意見があるのであれば、少しずつでも遠慮せずに出させるべきだろう。

本当に少しの時間でヒナタは出てきた。

「おはよう」

「おはよう。待たせてごめんね」

「あれを待ったというなら、ほとんどの人が待つてることになるから気にしなくてもいいよ。それより何をしていたの?」

ヒナタを頭から足まで順に見ていくが、見た目は特に変化が無いように白には見受けられた。何か道具を持っていくのだろうかと思っていたが、今日は特に必要な物は無かったはずだ。そう疑問に思っ聞いてみたのだが、恥ずかしそうに指を合わせるだけで、なかなか何も言おうとはしない。

そうしてやっと出てきた言葉は。

「えつと……。変じゃないかな?」

色々と言葉を省略しすぎていて、一瞬何のことかと思ったが、どうやらアカデミーへ行くのに、おかしいところがないか確認していたのだろう。同じ年齢の子供たちが来るのだ、そんな中で周りと違うかもしれないと不安になって、服をきちんと着れているのか確認していたのだろう。

服については、鍛錬時の黒い着物のような服ではなく、白を基調とした服を着ている。この服に関しては、ヒアシは気にしていなかったようなので、あまり乗り気ではなかったが、物言いが嫌な男、日向コウに頼むことにした。そして買ってきたのが、白を基調とした服である。白の方で買って良かったが、変に委縮されても困るので、日向家として買ってもらったのである。

コウは、白に対しては厳しいので、会話自体が好きではないが、ヒナタに対しては結構甘い部分があるので、ヒナタ関連については頼みやすい。

「いつも通り大丈夫だよ」

白にとつては無難な返事をしたのだが、ヒナタはその言葉にホツとしたようだ。何度かこの服を着て、休みの日に街へと繰り出しているので、見慣れており、逆にどこが気になるのか、白としては聞きたいくらいだ。

しかし、白にとつては、色気よりも食い気である。ヒナタの気持ち一段落した所で、ヒナタに声を掛ける。

「朝食を食べに行こう」

「うん」

朝食を摂るために歩いていると、ヒナタから聞いてきた。

「白はその格好で行くの?」

「そうだよ」

白個人としては、特におかしいところなど見当たらない。元々そこまで服にこだわりは無いし、動きやすければ良いと思ってるくらいだ。なので、安い服を見繕って購入し、そのままそれを着ている。

「いつも、休みの日に出かけてる服なんだけど、何か問題ある?」

薄い青を基調とした服で、下は黒のズボンにしている。別段サスケをイメージしたわけでは無いが、色的には青が好きなのと、値段が安かったからである。確かに女としてアカデミーに申請されてはいるが、服まで女物を着たいとは思わない。今のところ選ぶ基準が、安い、着易さ、色、なわけだが。

「ううん。何でもないよ」

その後は、アカデミーへと向けて行く前に、部屋にて髪を梳かされた。切らずに放置しており、特に手入れをしているわけでは無いのだが、髪は綺麗なままだ。

小さいころに髪をヒナタが弄っていたので、そのままにしていたが、鍛錬が厳しくなってからというものそれも無くなった。あの頃に切っておけばよかったかもしれないが、そんなことを気にしてもいな

かったので、そのままだったのである。それが、鍛錬の休みの日が出来たからというものの、時折こうしてヒナタが白の髪を弄ることが増えてきた。もしかしたら、あの頃を懐かしんでいるのかもしれない。

ヒナタも満足したようなので、アカデミーへと3人で向かった。3人と言っても、白、ヒナタ、ネジではなく、もう1人は日向コウだ。初日と言うことで付き添いとして通学に限りついてきている。

ネジにも一緒に行こうと思いついてみたのだが――

「ねえねえネジ。アカデミーと一緒に通わない？　ここから出るのは一緒なんだし」

「それは構わないが、……ヒナタ様はどうするんだ？」

「一緒に行くよ。ヒアシ様からお世話をするように言われてるからね」

「……すまないが、2人で行ってくれ。よく考えたら、朝は鍛錬をするから時間が不規則になり待たせてしまう」

ネジのそれは遠回しの拒絶だった。今の段階で、ヒナタと一緒に言うのは我慢できるものではないのだろう。しつこく食い下がっても、ネジは困るだけだろうと思えば返事をする。

「気が向いたら声を掛けてね。大体8時ごろに出るつもりだから」

「ああ。分かった」

極力、出る時間が被らないようにと、アカデミーへの出発時間を伝えておく。これで朝に気まずい状態の鉢合わせは回避できるだろう。

そのようなやり取りがあり、結局は2人＋付き人1人でアカデミーへと行くことになったのである。

アカデミーへの道を通るにしたがって、どんどん子供たちが増えてきていた。保護者である大人も一緒にいるのだが、休みの日の特訓？の成果もあってか、ヒナタが白の背後に隠れるようなことは、ほとんどなくなっている。

アカデミーへ着くと、アカデミーへの出入り口の扉の前に、人だかりが出来ていた。おそらくはあそこにいる人たちが今回の保護者なのだろう。ほとんどが女性のようで、世間話でもしているのか、いくつかのグループになって話し込んでいる。

子供たちの方はと言うと、みんなバラバラだ。保護者の近くに居たり、グループで遊んでいたりと、これからこの子供たちと、付き合うことになるのかと思うと溜息が出そうになる。

「ではヒナタ様。本日のアカデミーへの入学式が終わりましたら迎えに上がります。＜白はそれまでヒナタ様のお世話だ。分かっているな＞」

「もちろんです」

「それではヒナタ様、失礼します」

白へと、ヒナタへは聞き取れないようにして、小声で伝えてくると、ヒナタへと挨拶をして早々に屋敷へと戻っていった。

「ここで立っていてもなんだし、中に入ろう」

ヒナタの手を引いてアカデミー内に入る。今年のアカデミーへの入学人数は40人のようで、2クラスに別れるのだが、白はヒナタと同じクラスに配属されていたし、席についてもお隣同士になっている。

ここまで露骨にされると、裏でアカデミーに対して、日向家が掛けあつたとは思えない。

教室内には既に数名が座っており、その中にうちはサスケもいた。後ろからしか分からないが、1人物静かに座っているところを見るに、格好つけてるつもりなのだろう。

この段階で、白はサスケがどの程度動けるのか見てみたくなり、何かないかと教室内を探すが、目ぼしいものは見当たらなかった。

分からないように机の下にて印を組み、小さな氷の粒を作成する。それを上に放り投げた。小さな氷の粒は、放物線を描くようにサスケの頭へと向かい当たる。

サスケは頭を触り、周囲へと目を向けるが、こちらはヒナタを見ている振りをしているため、気付かなかったようだ。

(現時点ではネジの方が実力が上かな? まあ、アカデミー内で気を張ってる生徒なんていないかもだけど……)

そんなことを考えていると、どんどんと生徒が増えてきた。しかし、まともな席についているのは少数で、他は教室内にて遊んでいる。

ヒナタはと言うと、緊張の為か、下を向いて大人しくしている。

白としては、周りの生徒に大人しくしていてもらいたかったのだが、言ったところで無駄だろうし、変に目立つ真似もしたくは無かったので、時間になるまで、他の生徒の観察を行うことにした。

結局のところ、原作の主要メンバーは同じ教室になったのだが、時間になってもナルトは来なかった。時間になり、先生が入ってきて出席をとっていた頃に、廊下をドタドタと走る音が響き渡る。

そして、この教室の扉を盛大に開いて、大声での第一声が。

「うずまきナルト参上だつてばよ！」

遅刻した上に堂々と名乗りを上げる勇気はさすがだと思うが、周りも誰も反応せずに沈黙が流れている。先生は忌避の目を隠そうとせず、席を指示して座るように言った。

それでもナルトは何やら、文句というか、みんな自分に恐れをなしてるなどと喚き散らしながら自分の席へと座った。そこで、一安心したのか本音がボソリと漏れたのが聞こえた。

「くいきなり寝坊しちゃったつてばよ！」

白の位置は、上り階段を挟んで反対側の机の一番近い側に居る為、その声が辛うじて聞こえたのである。いきなりの言葉に笑いそうになるが、それを堪える。寝坊を誤魔化すためにしたのか、それとも自分を印象付けるためにしたのか分からないが、お笑いとしてみる分には面白いだろう。こちらに被害が及ばなければだが……。

先生からは軽く話があり、そこから自己紹介を行った。自己紹介でも簡単に済ませる子もいれば、長々と話し出す子もいる。

簡単に済ませたの言うまでもなくサスケで、名前だけしか言っていない。逆に長々と話していたのはナルトで、途中先生に席に戻るよう言われるまで続いた。流石に自分の好き嫌いまでならいいが、何故か誇らしげに、自分がいままでしてきたことを話し始めた上に、その内容がイタズラに関することばかりだったのである。

どこが誇らしいのか全く分からないが、ナルトのこの頃はこんなものかと思ひ直す。話の途中で遮られたのが不満なのか、文句を言いながら席へと戻っていった。

それから入学者全員が集まり、その前で3代目火影の挨拶が行われた。なにやら良いことを長々と言いそうだったが、そこでやってくれたのがナルトだった。話の途中で声を出してぶった切ってくれたのである。この時ばかりは、ナルトに拍手したい気分ではなかった。こういう場面での長い話は苦手である。

その後、ナルトは先生に取り押さえられるも、火影の一言で離され、火影の話は手短かに終わった。

内容は簡単に言えば、頑張って立派な忍びになるように、といったようなものだ。意思とかその辺の事を言ってくるかとも思ったが、この年の子供に言っても、理解できるか怪しいところだから言わなかったのかも知れない。

話は終わり、該当の教室へと戻り、明日からの注意事項を話してから、その日のアカデミーの入学式は終了となった。

「ヒナタ。終わったし帰ろう。コウさんが待ってるよ」
「うん」

ヒナタの生返事におかしいと思い、ヒナタの視線を追うと、そこにはナルトが黒板に落書きしているところだった。

「ナルトっていう名前みたいだね」
「うん」

相変わらずの生返事に、このままでは駄目だと思い、顔の前で猫騙しをして正気に戻らせ再度伝える。

「外でコウさんが待ってるから行くよ」
「あつ！ ごめんね」

それからヒナタを連れてアカデミーを出ると、日向コウが待っていた。

「ではヒナタ様帰りましょう」
「はい」

いつも通り、コウはこちらを一切気にせずに、ヒナタにしか声をかけない。こちらへの声かけは、注意するか、ヒナタ関係のことばかりであった。白としては、こちらへの干渉さえしてこなければ、いい人なのだが、干渉してくるので、好きではない。

この日からやっとアカデミーへの入学が出来た。白としては、本屋にて売られていないような内容の本が置いてあることを願うばかりだった。

32 授業？

最初はこのようなものかもしれないと、初日の授業を終えてから思った。

午前中は、アカデミー内をぞろぞろと、そしてガヤガヤと騒がしくしながらクラス単位で歩き回り、ひとつずつの部屋の説明を先生がしていく。授業の行われている教室は、廊下側からの見学だけを行い、それ以外の場所では部屋の中へと入っての説明だった。アカデミー内をグルグルと回っただけでお昼になってしまった。

本当ならばもっと早めに終わったのだが、予想通りと言うか、ナルトは行く先々でイタズラをしているが、先生は全く取り合おうともせず、後片付けを冷たい目で命じるだけである。その片付けを待っていたので時間が掛かったのだ。ナルトは途中から、イタズラに飽きたのか、それとも効果がないと思ったのか、大人しくついてきてはいたが、かなりご不満の様子だった。

午後からの授業の内容は、あまりにも簡単すぎるものだった。文字の練習や計算などをやるはめになるとは、想像していたよりもレベルの低さに溜息しか出ない。

忍者アカデミーというからには、忍具や忍術などについての説明があると考えていた。しかし、よく考えてみれば、いまの年齢は、前で言う小学生である。忍具や忍術などの説明を受けるためには、確かに、文字が読めなければ理解できないだろうし、計算についても必要だろう。

そう思ったのは、隣の席で真面目に授業を受けているヒナタがいたからだ。クラス全体を見回して、既に授業内容を理解してそうな生徒は少なく見える。既に理解してそうな生徒——サスケなどにとつては暇そうだ。

初日の授業を終えると、同じ教室内の生徒が色々と話しかけてきた。昨日はすぐに帰ったり、他の子もいきなりは話しかけづらかったのだろう。

話しかけてくる内容としては、「これからよろしく」といった軽い挨拶

搦がほとんどだった。ヒナタも挨拶は出来たのだが、声が小さく、下を向いてこちらに助けを求めるような目線を向けている上に、更に白の袖を掴んでいるので、相手にとってあまり好い印象ではないだろう。

(仕方ないフォローしとくか)

「自己紹介はしたから知ってると思うけど、名前は白。隣のヒナタとは友達なんだ。ヒナタはちよつと恥ずかしがり屋なだけだから、気にしないで。ヒナタ共々これからよろしくね」

「ふくん。まあいいんじゃない?」

少しヒナタを値踏みするような視線を向けた後に、女の子は立ち去って行き、他の子にも回っているようだ。

このような感じで、ヒナタに対してのフォローはしていたが、好意的に受け取る子もいれば、どうでもよさそうな子、あからさまに不機嫌そうな子など様々だった。この辺りは、ヒナタが他の生徒に慣れてくるまで仕方ないだろう。

(ヒナタに関しては徐々に慣れて行ってもらおうとして、この内容の授業が続くなら他の事が出来そうかな)

次の日からも同様の授業内容であったために、早速行動に移すことにした。

ヒナタに図書室に行つてくると伝えると、一緒に行くと言う返答があったので、行動を共にしているが、こういう言い方をしてしまうと、ヒナタは断つたためしがない。ヒナタには悪いと思ったが、ヒナタを1人教室に残しておくのも心配であったため、休み時間に一緒に図書室へと連れて行くことにしたのである。

図書室にて、有益な本や巻物が無いか探す。整理整頓が出来ていないからなのか、それともわざとなのか、本の並びがバラバラである。ただ、読めそうな年齢順に分けてあるだけマシだった。白は、高学年の生徒が読む棚へと移動し、忍術や幻術の書を手にとって中身を確認していく。本屋に売っていない内容ではあるのだが、これから先に習うであろう物ばかりだった。授業中の印の練習には丁度よいかと、出入口にて暇そうにしている先生へ、貸し出し許可を貰い部屋を後に

する。

ヒナタは結局何も借りぬまま、ついてきただけになってしまった。

「何も借りなかったけど、良かったの？」

「まだ、そんなに読めないし、時間があんまり取れないから……」

「そうだね。ごめん」

「白は悪くないよ。……それにしても白はすごいね。そんな難しそうな本を読めるなんて」

「色々勉強してるからね。それよりも、そろそろ休み時間が終わるから教室に戻ろう」

よくよく考えれば、ヒナタに勉強をする時間があったとは思えない。あつたとしても、早朝くらいだろう。アカデミー終了後にも鍛錬は続いている。夕食の時間が休憩のようなものだが、その後も続けているので、夜に勉強する時間などないだろう。いつも疲れ果てている姿を見ているので、そこから無理をして勉強しているとは思えない。

ヒナタには、悪いことをしたなと思いつつ、ヒナタと共に教室へと戻っていく。

授業の開始時間ギリギリに戻ったせいかもしれないが、教壇側の教室の戸が少しだけ開いており、その上に黒板消しが設置されていた。設置したのは、おそらくナルトで間違いないだろう。これに気付かない先生などいるのだろうかと疑うが、わざわざ自分で潰す必要はないだろうと、空いている戸ではなく、閉まっている方の戸を開けて教室へと入ることにした。

予想通りではあるが、黒板消しに引つかかることもなく、先生は戸を開き黒板消しが落ちてくるまで見守った後に教室へと入ってきた。そして、誰がやったかを確認するために口を開こうとした時、その前にナルトが名乗り出た。名乗り出たというより、失敗したと悔しそう言っている。その様子に、先生は淡々と床に散ったチョークの粉を、次の休み時間に掃除をしておけと言うのみで、そのまま普通に授業が行われた。

ナルトはつまらなさそうにし、返事もせず授業を受けていたが、ヒ

ナタはチラチラと後ろを振り返り、そんなナルトを憧れのような目で見ている。引っ込み思案なヒナタにとっては、あそこまで自分の意見を言えるナルトが羨ましいのかもしれない。

（この頃から気にしてたのか……。まあ、あれだけ目立つことをしてれば、注目を浴びるのは当然かもしれないけど……）

こちらはと言えば、ナルトがクラスの注目を浴びてくれているので、印の練習などには事欠かない。先生自体も、あまりナルトと関わり合いになりたくないのか、こちらの方へはあまり近づいて来ないで、なおさら好都合だった。たまにイタズラの度合いが大きくなることがあり、自分の席でどこから持ってきたのか、煙玉などを使うなどあったが、あちらへと注意が行くので我慢している状況だ。まあ、我慢できずに消しゴムを投げつけたこともあるが、白が投げつけたことに気付かず、辺りをキョロキョロとするばかりである。

最近ではやっと秘術の改良に成功したので、その実践も踏まえて授業を受けている。前までは、秘術による手鏡は音声だけしか伝えることが出来なかったが、いまでは、手鏡の向こう側を見通せるようになっていた。その為、水分身に本を捲らせて、その内容を手鏡にて見ること、授業中であるにも関わらず、他のことを学んでいるのである。

下手に授業以外の本を広げていては、怪しまれること間違いなさだろう。それに3代目火影は、遠見の術かなにかが出来たはずだ。ナルトを気にかけているので、その周囲に居る人物にも注意を向けているだろう。その点、手鏡であれば、自分の身嗜みを整えていると思われるだろうし、女生徒が持つても不思議ではないので、先生から見ても怪しまれないだろう。こんなことで、アカデミーに女で申請していたことが役に立つとは思わなかったが……。

これが出来るようになってから、一度再不斬に色々と教えてもらおうかと思い、映像を繋げてみたのだが、そこに映った光景は真っ暗だった。おそらくは、荷物の中にでも入れているのだろう。もし、戦闘中や隠遁中であつたなら文句を言われそうだったため、定期的に繋げてみるようにし、見えるようになるまでは音声による接触は控えて

おくことにした。

アカデミーでの授業に関して、机上の勉強はいいのだが、一番困るのは外に出たの運動だった。はつきり言って現状では何の鍛錬にもならない。気分が悪いと言って欠席することも考えたが、ヒナタを一人にしてしまう上に、欠席ばかりしては、アカデミーの方から日向家に何を言われるか分からないので、この時ばかりは自重して大人しくしている。

そんな日々を過ごして季節は夏に移った。

朝の目覚まし代わりに飛来物は、今ではクナイに変わっている。布団に刺さってはいけないので、掴むようにしているが、そろそろ慣れてきたので、時間をランダムにするか本数を増やす必要があるかもしれないと考え中だった。

この身体になってからというものの、夏という季節は、一番苦手な季節になった。この季節ばかりはシノと同じようにフード付きの服を着るようになってる。肌も露出しないように薄手の長袖だ。この季節の日差しを肌を受けると、結構な不愉快感が生まれてくる。もしかしたら、日焼けによる痛みかもしれないが、痛みに対して鈍いため判断できない。

「白は暑くないの?」

「もちろん暑いよ?」

「この季節になると長袖を着ているのは何故?」

「日焼けしたくないからかな?」

「そうなんだ」

ヒナタは、白に対しては普通に話せるようになったのだが、未だに同じ教室の生徒には、ヒナタから声を掛けることはない。相手から話しかけられた時に、白の袖を掴まなくなったのと、あまり頭を下に向けない分だけ、進歩していると言っているかもしれない。しかし、口数が少なく、目線も相手に合せようとしなない為、すぐに話相手が違う子に移ってしまっている。

現状では、ヒナタが白の付属品的扱いのようだ。特に、白から他の

子に対して話しかけていくことは無く、いつもヒナタと話しているのだが、それでも話しかけてくる子はある。話題は色々であるが、大概が白の方へと来るのである。術の効果を確かめるために、街中での情報収集をしているのだが、話しかけられた際に、その内容を知っていたため、何やら情報通と思われるようだ。それ以来、白へと話しかけてくるようになったのである。その時は、いつもの愛想笑いで、ある程度の受け答えをし、ヒナタを巻き込んで少しずつでも、クラスに馴染めるよう改善している最中であった。

この頃に忍者アカデミーの大増築が行われた。なんでも数年前の事件のせいで、本来はもつと早くに大きくする予定だったが、里の方の復旧に予算を使ったため、予算が足りずにいまに至ったらしい。確かに、アカデミー内をよく見てみれば、古い部分と新しい部分があり、過去に何度か増改築したような痕跡が見受けられる。

（数年前って確か歴史書では九尾の方だったかな？ それ以前に増築する必要あるのかな？ まあ木の校舎から石作りの校舎に変わってるみたいけど）

増築に関しては、工事中は危険な為、そちらの方へと近づかないようにと言われていたが、そんなことを言えば動き出す人物がいることを理解しない先生に、そろそろ学習したらどうだろうかと思ってしまう。

まあ、言っても言わなくても一緒だったかもしれないが……。

33 手紙？

夏も終わりに近づき、秋になってきた頃、遅めの夏休みというよりも秋休みが始まった。

この世界にも夏休みのようなものがあるのかと思っていたが、先生の話や聞くに、秋休みと言っても、実際には、忍者アカデミーが中忍試験の会場となるため、一定期間は立ち入り禁止というだけで、そのため、アカデミー自体が休みとなったただけだ。

(そう言えば確かに中忍試験があったな。すっかり忘れてた)

期間は2週間ほどの短い休みだが、色々試すにはよい機会だろう。秋休みについては当然ヒアシも知っており、その間は、アカデミー入学前と同じようにヒナタの鍛錬に当てるようだ。

白の日向家での扱いだ、最初はヒナタの組み手の相手だったが、途中から完全にヒナタの世話役になっており、日向家の大多数からは疎まれていたような状況だ。数年間いるのに未だに両者の間には溝がある。しかし、白としても別段その溝を埋める気はない。その内に日向家を出ようと考えていたからだ。

そのための足掛かりとして、この休みの間に働き先を見つけることにした。身元が不十分でも、雇ってもらえそうなところを探すのに苦労しそうだが、2週間もあれば見つかるだろうと思っている。求人広告については既に情報収集済みだ。

働くのは秘術を併用した水分身に行わせる。水分身を長時間維持することが出来るのは、今のところ3体が限界だ。精神エネルギーはともかく、肉体エネルギーが足りないのだろう。身体がまだまだ出上がっていないので仕方がないが、それでも長時間維持できるということは、チャクラとしてはかなりの量を保有していることになる。

その内の2体にて仕事をしてお金を稼ぐつもりだ。ヒナタはどうか分からないが、白は日向家からおこづかいを貰ったことは無い。衣類(鍛錬時のヒナタと同じもの)と食事と住むところを提供してもらっているだけでもありがたいのに、こづかいまで求めるわけにはいかないだろう。初めに籠の中を確認して、お金を持っていると判断さ

れているかもしれないが、そこまでは不明だった。

(多分、本とかを購入するのにお金を要求しなかったから、持っていると
は思われてるんだろうな……)

仕事の間、本体は基本的に日向家にて行動するつもりだ。そうしないと、白眼にていつ見破られるか分かったものではない。なので、本体が自由に行動できるのは午後のみとなる。その時間は、事前に里外れの近い場所にて、自己鍛錬にはよさそうな場所を見つけていたので、そこで鍛錬を行うつもりだ。

途中アクシデントがあつたものの、やっと秋休みに入り、午前中はネジとの組み手を行っていた。当然と言えば当然だが、上級生も秋休みだ。そのため、アカデミー内で秋休みに組み手をしないかと、手紙を通して伝えてきた。こちらとしては、体術のよい鍛錬になるのでいいのだが、伝える方法がこの場合は最悪だった。もうちよつと考えて行動をして欲しかった。

その最悪というのが――

「ねえねえ白。さつき上級生の人から手紙を渡すように言われたんだけど。はいこれ」

そう言つて、女生徒から手紙を受け取り、さつと目を通す。手紙はネジからのものだった。

内容は簡潔に、

『秋休みの午前中に一緒に組手をしないか?』

と、いうもので、返答は今日のお昼に屋上で返事を聞かせてほしいというものだ。

手紙という手段を選んだのは、ネジは宗家に近づきたくは無いらしい、白が分家に疎まれていることを知っているので、宗家に入り込んでいる分家の人に頼むのも気が引けたのだろう。それに加えて、アカデミー内では白が、ヒナタと常に一緒に行動しているので、話をかけづらかったに違いない。

素早く読み終わり、手紙を封筒に仕舞い直し机の下へと隠すと、それを覗こうとしていた女生徒から声をかけられた。

「もしかしてラブレター?」

「違うよ。ちよつとした用件が書いてあっただけ」

「そんなこと言つて、実はそうなんでしょ？　ちよつと見えたけど、返事をしてくれつて書いてあるのが見えたんだから！」

なにやら興奮し始めて大きな声を出し始めた女生徒に、教室内に居た周りの生徒も気になったのか、何事かとこちらへと顔を向けてきた。

(勘弁してくれ)

白としては、そう思わずにはいられない状況だ。変に目立つような行為は避けたかったのにこれである。

「本当に些細な用件だから」

「それだったら、その手紙ちよつと見せてよ」

(これを見せると、尚更変な風に捉えられなくもないし、かと言つて見せないと誤解が広がるし。どうしよう……)

しばらく悩んでいたが、人の噂もすぐに消え去るだろうと思ひ、後者の考えを選択することにした。それに、手紙の中にはネジと差出人の名前が入っている。ヒナタも、ネジのヒナタに対する視線には気づいているはずなので、迂闊にここで名前を出されるのもまずい。

「ちよつと、この手紙の内容を見せることは出来ないかな」

「やっぱりラブレターなんじゃない！　みんなに教えてあげなくちゃ！」

そう言つと、その女生徒は、白が何かを言う前に、他の女生徒へと手紙について話に行つてしまった。それに合わせて、教室内は、またざわざわと騒がしい元の状態に戻つたが、聞こえてくる内容のほとんどは、先ほどの会話の内容だった。心の中でこんなことをしてきた、相手——ネジに対して怒りがわいてくる。

(おのれネジの奴め！　いつか絶対仕返ししてやる！)

いつもの笑顔を保ちつつも、思わず机の下に仕舞つた手紙を握りつぶしてしまつていた。そんなことを白が考えているとはつゆ知らず、ヒナタから声を掛けられる。

「上級生に知り合いがいるなんて、白は凄いね」

「そうでもないんだけどね(知り合いと言つてもネジしか居ないんだ

けど)」

「えつと……。さっきの手紙だけど、やっぱりラブレターだったの？
〈白は綺麗だしね〉」

ヒナタもやはり気になっていたようだ。まあ、あれだけ横で騒がれれば気になつて仕方ないかもしれない。しかし、ヒナタから言われるとは心外だった。ヒナタは白が男であると知っているはずである。鍛錬の組手の時に、受けが重点的になるようになってからは、一緒に風呂には入っていないが、分かっているはずである。最後のヒナタがボソリと言つた言葉がとても気にはなるが……。

「それは絶対に違つてと言ひ切れるんだけど、内容をここで言うわけにはいかないのが、つらいところかな」

「いつでも相談してね。私に応えられるかわからないけど……」

「そんなことはないよ。悩みつていうのは、1人で抱え込むより、誰かに言うことで楽になることもあるんだから。例え答えが返つてこなくてもね。〈内容次第だけど〉」

そんなことで昼休みに、ヒナタには水分身を付けて、ネジへと文句を言うべく屋上へと向かう。この時には既に仕返し内容を決めていた。

屋上では手すり付近にてネジが待っていた。そこへと近付いていくとネジの方から声を掛けてくる。

「思っていたよりも早く来たな。いきなり呼び出してすまない」

「そんなことより、よくもやってくれたね、ネジ」

「何のことだ？」

「ネジはもう少し頭が良いと思つていたのに、考えなしであんなことをしてくるなんて思つてもみなかったよ」

「内容がさっぱりわからないんだが？」

ネジは本当に理解できていないようで、首を傾げている。

「手紙についてだよ。伝え方が間違つているとは言えないけど、その方法が間違つてる」

「つまり？」

「つまり……、あの手紙がラブレターだと、同じ教室の人に思われて

るってこと」

「な……なぜだ？ 内容は鍛錬についてだったはずだが……」

ネジは白から伝えられた内容に、かなり動揺しているようだ。そのような意図で手紙を渡したわけでは無いのに、その結果が自分の思っていたものとは、全く違うことに影響していたのだから当然かもしれない。

「手紙を渡すっていう行為を、人に見られるっていうことは、それなりのことを考えないといけないんだよ。しかも見られるなら未だしも、その手紙を同じ教室とはいえ、よくも知らない相手に頼むから、さっき言った結果になってるわけ」

「手紙の内容を見ればそんな考えはなくなるはずだ！」

動揺から立ち直ったのか、ネジは自分の書いた内容におかしいことは無いので、そのように思われることはないと思ったようだ。

「どちらにしても一緒だよ。手紙の内容を簡潔に書きすぎてる。あれだと秋休みの間に一緒に居ましようと思えられてもおかしくない」

「……それもそうだな。すまない」

どうやら、自分の書いた内容を思い出して、どういう反応をするのか考えたようだ。ネジの教室でも、女生徒は同じような話題にて盛り上がっているのだろう。

「まあそれはいいよ、今後気を付けてくれれば。それよりも、鍛錬の話ならこちらこそ喜んで受けるよ」

「そうか！ それは助かる」

「でも、分家の強い人に頼んだ方がよくない？」

実力的にあって、チャクラを纏っていない基本体術では敵わないので、こちらにしかメリツトはないのだが、その辺りをどう考えているのか、白は気になってはいたのだ。

「そちらについては、午後から鍛錬してもらえるように頼んだ。だから、そのための午前中なんだ」

「そう言うことね。わかった」

「呼び出してすまなかつたな」

「まあ、ネジがこういう風にして伝えてくる理由も大体分かるから、呼

び出しに「関しては」気にしないでいいよ」

「何か含みのある言い方に聞こえるけど……、気のせいかな？」

「それじゃあ戻るから、また」

「おい！」

ネジが、こちらへと手を差し伸べるような形で固まったのを、横目でチラリと確認し、足早にネジを置き去りにしてその場から去っていく。

この返事に関して、わざと同じ教室の女生徒に後を追わせていた。いつもヒナタと2人で行動をしている白が、1人で行動しているのを見れば、返事をしに行くと思つたが、実際にその通りになってついてきたのである。

声については、離れていたため、ほぼ聞き取れないはずだし、この最後の状況を客観的に見れば、白がネジを振つたように見えるだろう。それにいつまでも、彼とはどうなったかの、どこまで進んだなどと聞かれるよりはいい。

ネジについては、告白したけど振られた、という噂が立つかもしれないが、いい気味である。

溜飲を少し下げて、未だに慣れない女子トイレにて、水分身と入れ替わり教室へと戻った。

これが、秋休み前に起こったことであつた。

34 就職？

午前中にネジとの鍛練を終えて、ヒナタと昼食を食べた後、早速外へと向かった。

変化の術にて姿を変えて、秘術によつて改良された水分身から求人情報を受け取り、それを片手に該当の店へと向かう。

(まずは1件目！)

仕事の内容と給料との兼ね合いが良いものから当たっていく予定だ。

その1件目は、病院での夜間の患者の看護だった。看護といっても、別に治療をするわけではなく、何かあった際に担当のものを呼び出すというものだ。

仕事として内容を見る限り、病室を回って異常があれば、知らせるという単純なものなので、楽なものにも関わらず、夜間の仕事のせいか給料がいい。

更に給料が良かったのは、医療に携わることだったが、医療忍術に關しては、本体でないと出来ないので早々に諦めた。

影分身が出来れば変わったのだろうか、知識も印の切り方も分からない現状では、出来ないので仕方がない。

「すいません」

「どうかされましたか？」

「求人広告を見て来たのですが」

受付の女の人に、求人情報の紙を見せる。

「どこで受けることが出来るんでしょうか？」

「こちらの件でしたら、あちらの部屋の中にて、担当の者がおりますので、そちらにて受付しております」

「ありがとうございます」

受付の女の人に教えてもらった部屋へと向かい、ノックをするが返事が無い。訝しみながらも再度ノックすると、かなり不機嫌そうな声が聞こえて来た。

「何なのよ!？」

その声はかなり不機嫌そうであった。扉をゆつくりと開けて部屋に入ると、そこには、1人机の上で、『カリカリ』と音を立てながら書類と格闘している女の人が居る。

「あの、失礼します。求人受付はこちらでよろしかったですか？」

「受付で聞いたから来たんでしょ!? それくらいわかんなさいよ!」

私は今忙しいの! そっちにある書類に、必要事項記入出来たら持つてきて!」

女の人は、こちらを見向きもしない上に、更にイライラとした感情を隠しもせず、記入用紙のあると思われる場所を、持っていたペンで一瞬指示すると、すぐに書類仕事に戻ってしまった。

その指示された場所へと向かい、置いてあった記入用紙にぎつと目を通す。名前や年齢など色々記入事項があり、そのあたりについては、適当に埋めることが出来るが、住所と身元保証人だけは別だ。

(取り敢えず埋めれるところを埋めよう)

そこだけは空欄のまま他を記入していく。ひと通り記入し終わってから少し迷いはしたが、空欄の部分には無しとだけ記入した。実際この姿の人物は、木の葉には存在しないので、住む場所も後ろ盾も無い。

「記入し終わりました」

「そこに置いといて、後日こつちから連絡するわ」

女の人は、イライラが納まったのか、幾分声の質が変わった。

言われた場所へと記入用紙を置くと、既に何名もの応募者が居たようだった。おそらくは、募集期間的に言ってもまだまだ増えるだろう。それに加えて、書類の内容審査をするとなると、結構な時間が掛かる可能性があり、記入内容から言って落とされる可能性が高い。どうせならと思いいま結果を聞かせてもらうことにした。

「えーつと。いま判断することは出来ませんか？」

「あんだ、最初に私が言ったこと聞いてなかったわけ? 今、忙しいのよー!」

先ほどまでの声の質が、最初の方の声へと戻っていく。これは駄目だなと確信するが、完全に断ってもらうために、聞き直して聞いてお

くことにした。

「それはお聞きしたんですが、何分住む場所も身元保証人も居ないので、連絡の取りようが難しいのです」

「はあ？ んじゃ却下。そんなやつ雇うわけないでしょ。ああもう！

無駄な時間を使わされた！」

「やはりそうですか……。失礼しました」

記入内容を確認した段階で、ある程度予想していたとはいえ、やはり駄目だった。むしろこのような大きい病院にて、身元の不確かな者を雇うとは到底思えなかった。

このようにして、2件目3件目と回っていくが、雇ってくれるところは無く、次の日からも同じように回っていくが一向に成果は無い。あつたとしても短期的なバイトのようなもので、はつきりいつて日雇いの為、その日の賃金をその日のうちに貰うというものだ。しかも内容が力仕事ばかりで、その日の食事代に毛が生えた程度の金額だった。塵も積もればと言うが、短期的なものの為、いつ求人が出るのか分からないし、単発なので簡単には増えない。やはり、長期間雇ってくれるところがいいだろう。

10日が過ぎた頃に、本格的に焦り始めた。求人広告のほとんどは既に回り終えている。残っていそうなのは、夜の店だけなのだが、女性限定な上に仕事内容や給料が応相談とよくわからない。なんとなく想像はつくのだが、自分が男なだけに、女に変化した水分身とは言え自分が、男の相手をするという行為に、かなりの抵抗があった。(取り敢えず、これ関係は没と……。どうせまた住所とか身元保証人が必要だろうし。それにしても、まさかここまで雇ってもらえないとは思ってもみなかったな……。こうなると、単発の求人を探しまくってやっていくしかないのかな……。)

秋休みの期間があれば、いけると思っていた過去の自分を殴ってやりたかった。計画を立てたはいいが、その計画を安易に考えすぎた。何でも上手くいくとは限らないのである。

次の日の午前中での鍛錬でも、特に自分では普段通りに動いている

つもりだったのだが、ネジに心配される始末で――

「白は調子が悪そうだな」

「特に体調面で異常はないよ?」

自分の身体、健康状態共に常にチェックしているし、いまでも異常は特にない。

「なんというか、何か考え事をしているのか分からないが、いつもよりワントempo動作が遅い気がする」

「そうかな? そうなのかも?」

「何か心当たりでもあるのか?」

「そうだね……。世の中上手くいかないなあと思ってるくらいだよ」

「それは当たり前だ。取り敢えず、今日のところは止めておこう。そんな状態でやってもお互いあまり意味が無いからな」

「ごめん」

「謝る必要はない。気にするな」

「今日中には気持ちの整理を付けて、明日からは気を付けるよ」
「そうするといい」

まさかネジに、組み手での自分のちよつとした動きだけで、考え事をしていてと分かってしまうととは思わなかった。確かに、午後からのことを考えて少し憂鬱な気分であり、更に残りの期間が短いことから焦っていたのは事実だ。

（何事も気持ちの切り替えをしないとやっていけない。人を殺した時には簡単に切り替えられるのに、こんなことで切り替えられないなんて、まだまだだな）

その日の午後は、単発の求人を見つけたため、そのまま現場に直行し引越しの手伝いを行う。運ぶ荷物の量は結構なものだったので、なぜ忍びの方に依頼を出さないのか聞いてみたところ、仕事自体は早いのだが、依頼する為のお金が少々高いとのことだった。そのため忍びに頼むのは、お金を持っている人や、早急になんとかしてもらいたい人などらしい。今回はそこまで急がない上に、場所が近いということもあり、2日に分けて運ぶようだ。

確かに、一般人向けの依頼斡旋所があり、忍びの依頼斡旋所よりも

安い。一般人にとって、忍びに頼むまではいかないような内容であれば、安い方へと依頼を出すのは普通だろう。

次の日の午前中は、水分身に任せてネジとの鍛錬に集中する。そして、午後からは本体にて引越し作業を行った。午前中は家の中の整理や掃除などで力を使わないのだが、午後からはその整理した荷物の運搬なので、力が必要なのである。その為、今の水分身では荷物を運べるのが心許ないため、本体にて午後からの運搬作業を行った。

その日の午後3時ごろには、作業も無事に終了して賃金を受け取った。失礼だとは思ったが、その場にて中身を確認すると少し多めに入っている。

「えっと。少し多いみたいですが？」

「あんたの見かけによらず力持ちなお蔭か、思ったよりも早く終わったし、見た目と違って丁寧にやってくれてたからね。まあ気持ちの問題さ。だから受け取っとしておくれよ」

「ありがとうございます（見た目は余計だよ！ これでも前世の姿なんだからな！）」

思うところはあったが、深々と頭を下げてお礼を言い。軽く世間話をしてからその場を後にした。

（結局仕事に付けたのは、単発の3件だけか。しかも常時求人のところにはいないと、すぐに定員が埋まってしまおう。今回は主婦っぽい人たちが多かったから、力仕事で目立ってちよつと貰える額が増えたけど……、そうそうこんなことは起きるはずないし、これからどうしようか……。安くてもいいから、安定したお金が欲しいな……）

秘術による水分身を通して求人を見ても、新しい求人は無い。それに、再不斬の方も映る景色は真つ暗なままだ。途方にくれながら、街中を歩いていると、ラーメン一樂が見えたため、久しぶりに寄ることにした。

時間が時間だけに人は居らず、貸切状態だ。人が居ないならと、真ん中の席に座り注文をする。

「とんこつラーメン1つ」

「はいよ」

これからのことを考えて待っていると、とんこつラーメンが出されると共に、声が掛けられた。

「溜息ばかりついてどうしたい？」

「どうやら無意識のうちに溜息をついていたようだ。」

「溜息なんてついていたのか。気付かなかった」

「なんか悩みがあるなら聞いてやるぜ。聞くだけだけどな！」

その後、ラーメンを食いながら、ここ約2週間の出来事を愚痴っていた。自分でも思った以上に、このことは堪えていたようだ。

(こんなオヤジに愚痴を言っても仕方ないのになあ)

ラーメンを食べ終わり、更に愚痴を言い終わる。愚痴を言ったことで少しはマシにはなったが、根本的な解決にはなっていない。愚痴を言っている間、店のオヤジは黙って聞いてくれていた。

「愚痴を聞いてくれてありがとう。これ御代ね。んじやまた」

「ちよつと待ちな」

「ん？」

「うちで雇ってやってもいいぞ」

「……えっ？」

「なんだ？ 不服だったのか？」

「いやいや。いきなりだったから驚いただけで、全くそんなことないって！」

「まあ、そんなに大した金は出せんがな。寝るところについては、俺と同じ部屋だ。しかし、飯付きだから安心しな」

「ほんとにマジで助かるよ！」

「早速今日からだ。まずはこのやり方を覚えてもらおうぞ」

「オッケー！ 任せてくれよ。この身体になってから覚えるのは早いんだ！ 何でも言ってくれ！」

実際に、白の身体になってからというものの、物覚えもよくなり、身体能力がおかしいくらい高いことにはなっていた。前世？の頃とは大違いである。

「??? 変なことを言うやつだが、やる気はあるみたいだな！ こつちに来いって……、そっぴや名前はなんて言う？」

「(げっ。考えてなかった。もう面倒だし、店に迷惑掛かるかもだからこのままでいいや)俺の名前は白って言うんだ。これからお願いしまっす」

これまで使ってしまった偽名も思い浮かんだが、それを使うことによりこの店に影響がでないとも限らないので、本名を使うことにしたのだった。考えるのが面倒というのも大きかったが……。

「よし。白こっちだ。もうすぐお客さんが来始めるころだから、今日やることを先に言うておく。まずはやることはお客さんへの水出しと後片付け、それに皿洗いだ」

「りようかーい！」

『ピピピピピ』

せつかくこれからと言う時に、腕時計が音を鳴らした。時刻を確認すると、4時半。そろそろ屋敷に戻らねばならない時間である。

「どうしたい？」

「先にトイレ済ませてくる！ トイレどこ？」

「店の奥の入ってすぐのとこだ。出たらちやんと手を洗えよ！」

「そんなことはあつたりまえだよ！」

トイレに入り、依頼幹旋所に居る方を、周囲に見られないところへ移動させて術を解き、新しく水分身を作り出して、店へと送り出す。本体は変化の術を解き、窓から外へと出た。

水分身の片目には、見た目では分かりにくいのが、秘術による目になっている。それを通して視覚の共有と、指示された言葉を本体の方でも聞くことが出来る。これで、本体が働く際にも影響が出ないだろう。両手に小さめの魔境氷晶を作りだし、それを片目と片耳に当てながら屋敷へと急いで戻っていった。

秋休み中に無事、就職先が見つかって良かったのだが、お客さんの顔を覚えるために、片目に手を当てて生活することが多くなった。その内に、声だけで顔が分かるようにならないと、わざわざ片目を塞ぐ行為をしないといけない。もしくは、手鏡を見るという行為をしないといけないが、頻繁に手鏡を見ていては、鏡でないことを誰かに見られる恐れがある。

店のオヤジに言われたことだが、1度でも来たことのあるお客さんの顔くらいは、覚えておけとのことだ。これが意外と大変だった。店にやってくるお客さんが、思っていたよりも多いのである。店でやることは覚えたのに、顔ばかりは初見の人も来るため、なかなか油断が出来ない。そのため、手鏡よりも片目を押さえる行為をしているのだが、それに伴い、心配性が1人いる。

「白。最近目を押さえることが多いけど大丈夫？」

「大丈夫だよ。ちよつと覚えることが多くて、目が疲れてるくらいだから」

「白はすごいね。体術も出来て、勉強もしてるなんて。それに比べて私は、体術だけを頑張ってるのに、未だに白に勝てないし……」

「ヒナタよりも先に始めたんだから、そんなに簡単に抜かれたら困るよ。それに最近は防げるようになってきてるから、こっちの方が焦ってるんだよ。」

「そうなの？」

「安心していいよ。少しずつ上達はしてるから」

話題が勝手に逸れていくのはいいのだが、この後ろ向きの思考はどうしたものかと考えさせられる。やつと、一緒に居る時で、女子生徒限定かもしれないが、教室内の人であれば話せるようになってきている。最初の頃に比べれば随分進歩したものであった。

そんなことで、日々は過ぎ去り、1年の最後に試験があった。試験と言っても、1年の時に教わったことの復習のようなものだ。読み書き計算など、聞いていなくても間違いようが無い。しかし、変に満点

をとると、対抗心を燃やしてくること請け合いな人物が居るので、計算問題にて空白を入れておいた。間違った答えを書くのにちよつとした抵抗感があつたからだ。

試験に関しては、成績にあまり関係なく、みんな2年生へと上がることになった。

ここからの内容は、忍びとしての授業の始まりである。クラスに変更は無かったが、男女にて授業が分かれることがあつた。通常の授業と、くの一の授業は日によって変更され、2クラスの内片方に女子生徒、もう片方に男子生徒と別れて行うことになっている。

男の方は、体術など体力作りがメインだったが、女の方と言うと

「本日より、くの一としての授業を始めますの。まずくの一とは、忍術だけではなく、女性としての幅広い知識と教養を身に付けなければなりません。スパイ活動する際に、普通の女性として振る舞えなければ苦勞しますからね。今日は感情表現について行いますの。丁度人数も偶数ですし、お隣通し2人でペアとしますの。それでは、お互いに向き合ひましょう」

（感情表現って何するんだ？ まさか、こんな授業があるなんて思わなかつたなあ。まあペアってことだし、ヒナタと組むから問題ないかな）

各席には本来3人ずつ座っているのだが、男生徒が居ないため、今は2人ずつ座っている。当然と言えば当然だが、白はヒナタの隣に座っていた。

他の子を見てみると、サクラとイノがペアなのが見て取れる。いまはサクラも、ヒナタと同じような性格で、かなり大人しい部類だ。と言うよりも泣き虫サクラと言われているくらいである。きつとこれを機に、イノに引つ張られて、どんどん性格が変わっていくのだろう。そう考えると、イノのサクラに対する性格矯正または、改変と言った方がいいだろう。その技術には目を見張るものがある。

「感情表現って何をするんだろうね？」

「怒ったり泣いたりするのかな？」

「やっぱりそう思う?」

「たぶんだけど……」

ヒナタは自信なさそうに言ったが、実際その通りになった。

「それでは、さっそく始めますよ。まずは笑顔からですの。相手に作り笑いと悟られぬようにすることがポイントですの。そこで、過去にあったことを思い出しながらやると、上手くいきやすいですの。それをペアに見てもらって、おかしなところがあれば教えてあげるように。それでは始めてよろしいですよ」

この後も笑い方や泣き方、怒っている振りなど、色々なことをしなければならなかった。

(正直もう勘弁してくれ!)

そんな中で、特に困ったことがあった。それはヒナタの落ち込んだ振りである。過去の事というか現在の自分の事を想像したのか不明だが、振りとかではなく、本当に落ち込んでいるのだから、立ち直らせるのに少々手間取ったのは言うまでもない。

(このくノ一の授業はとても危険だ……。精神的に……)

幅広い知識はいいとして、教養だけは中身が男であることから、精神的に辛いものがある。しかも、この感情表現の授業の最後には、1人ずつ教室の前に出るように言われた。

「それでは顔だけではなく、身体全体を使って何か1つ感情を表しましょう」

と言われたのだ。身体全体と言われてもやりたくなく、いつもの微笑み顔でいたら、案の定「もつと頑張りましょう」と言われてしまった。余計なお世話である。

(これが試験だったら落第確定に近いな。ナルトの気持ちが少し分かる気がする)

他の日は、実際の花を見てその名前を覚えたり、歌を歌ったりと、かなり平和な授業だった。一番最初の授業が、白にとってハードだっただけに、その後がとても楽に思えたくらいだ。おそらく、延々と感情表現の授業が続いていたら、ヒナタだけではなく、白も精神的に参っていたかもしれない。

男女合同の通常の授業の方では、チャクラについて学び、それに伴う忍術や忍具についての説明をするようになっていた。忍術と言っても火遁や風遁ではなく、身代わりの術や分身の術のような基本忍術だ。しかも実際にやるのではなく、先生が見本を見せるだけと言うだけだ。見たことが無ければ参考になるのだろうが、知っているのので、バイトの方を頑張っている。

忍具については、この学年で使う忍具についてのみ勉強するようで、学年が上がるごとに使う忍具が増えていくようだ。知らない忍具については、触れないように言われ、落ちていたりしたら先生に言うようにと言われた。ひと通り教えて危険であると認識させてもよさそうなものだが、まだ年齢が低いので、起爆札などでイタズラをされないように教えたくはないのだろう。

この頃から、ナルトが度々授業を脱出するようになった。きつとどこかでイタズラでもしているのだろう。被害がこちらに来なければ、どこでイタズラをしようと構わない。しかし、ナルトが居てくれていたお蔭で、先生が近づいて来なかったのに、最近は来始めたし、目を押さえているのをヒナタと同じように心配してくる。居なくなつて初めてわかるなんとやらである。

(ナルト防波堤はどこに行つた！ あいつがいないと先生が来るじゃないか！)

別にナルトが悪いわけでは無いのだが、ナルトを罵りつつ授業を受けていた。生徒には被害は無かったようだが、担当していた先生はそうもいかなかったようで、授業を抜けられて何やら言われていたようだ。自習になるような何かをやっているあたり、結構大事なのかもしれない。自習自体は、白として大助かりなのだが……。

日は移り、くノ一の授業は教室内ではなく、屋外での授業も増えてきている。今日は里の中ではあるが、近くの花畑まで移動し、そこで授業を行うとのことだった。

「みなさんいますね。それでは授業内容を言いますの。今日の授業内容は生け花です！ 各自で思い思いの花を集めましょう」

「「「は〜」「」」」

先生は、各自とは言っていたが、ここまでくると、さすがにグループがある程度出来ており、1人で行動している子は少ない。

もちろんのことだが、白はヒナタと共に、どんな花にしようかと話しながら移動していた。

「さて、適当に綺麗なのを取って行こう。あそこのなんて綺麗そうだし」

そこには1本だけ目立つように咲いている花があった。生け花なので、1本だけでは駄目だろうが、メインにはなるだろうと思いつくとしたのだが、ヒナタから声が掛けられた。

「適当は駄目だよ。先生は思い思いの花って言ってたよ」

「その思い思いが、適当で綺麗な花だった場合はどうすればいいの？」
「えーっと。それは……」

半分本当、半分冗談で言っただけだが、ヒナタは真剣に考え始めてしまったのである。特に困らせるつもりはなかったのに、冗談だと言うつもりだった。しかし、そう言う前に、三人組がなにやら『キヤーカー』叫びながら、目の前を先生の元へと走って行ったので、ヒナタに冗談だと言うタイミングを逃してしまった。しかも、通った後を見ると、白が先ほど取ろうとしていた花を踏んでいつていたのである。

（あいつら！——氷遁・氷柱壁！——）

3人組みの足元へと小さな氷柱を作り、足を引っ掛けさせて転んだのを見て氷遁を解除する。3人組は綺麗に揃ってヘッドスライディングを決めていた。服は汚れるかもしれないが、草花が多いのでそれほど痛くは無いだろう。

その見事なヘッドスライディングに溜飲を下げて、3人組が走ってきた方を見ると、イノとサクラが居るのが見える。たぶんだが、3人組がサクラに何か言ったのに対して、イノが何かしたのである。

先ほどの3人組は、弱気な生徒に絡んでくることが多く、ヒナタも最初の方は何度か言われたが、白が情報通であることと、その白の親友であるということから、絡むことが無くなった。その分の被害が他の生徒、特にサクラの方に行っているのかもしれないが、そこはイノ

がなんとかするだろう。ということでは放置している。

この日の生け花の授業も、騒がしく汚れたせいで泣いている生徒も一部いたが、つつがなく終了した。

数日後には、また秋休みに入る。今回の休みの計画は出来てはいるが、計画内容の方向性が違う方向へと行っているような気がしないでもない。しかし、今後の事を考えるとやり遂げなければ、ならないと気合を入れて挑まねばならないと思うのだった。

36 仕込み？

いま現在、忍者アカデミーの秋休みの期間中である。

そこで当初の計画通り、とある人物に色々と教えてもらっているのだが、内容はかなり厳しいと言えるだろう。

手始めに必要な量を調整からだ。ここで間違えると全てが無駄になるので、慎重にならざるを得ない。

「絶対に間違えるな。最初はゆっくりでいいからな」

言われてしまっているが、この過程を成功させるために、慎重になりすぎていて、かなり速度が遅いことは自分でもよく分かっている。しかし、少しのミスが失敗に終わるかと思うと、慎重になってしまう。次に、必要な量を練り合わせる。これについては、加減が分からないのでなかなか大変だった。口頭にて教えを受けているが、感覚的なものであるため、自分でそれを掴むしかない。

「これでどうです？」

「まだまだ足りない！」

見ただけで分かるのかとも思ったが、文句ひとつ言うことなく集中して再度練り合わせる。教えを受けている身で文句など言えるはずもない。

かなりの集中していた為だろう。額から汗が滴り落ち、それが頬を伝い顎に至る。それが溜まり下へと落下し、それに気を取られて集中を欠いてしまった。練り合わせることに集中しすぎて、完全に油断していた。

「何してやがる！」

「すみません！」

「もう今日のところは終いだ！」

「このままやらせてくれ！」

「いまからちんたらやってられん！終わりと言ったら終わりだ！」

「はい……」

自分のせいで失敗したとはいえ、こうまでも厳しいと先が思いやられる。最初に、魂を込めろだのなんだのと色々と言われたが、訳が分

からなかったもので、要は集中してやれば良いと思っていたが、そうすると今回のように、一部が疎かになることがある。

この計画は初めは無かった。しかし、いずれは避けて通れなかっただろう。言われたときはすかさず返事をしてしまったが、早計だったかもしれない。

「そろそろ一年か……」

それは、白が部屋にて勉強をしていた時に、聞こえてきたのである。気になったのでそちらへと耳を傾けた。

「どうかしました?」

「いやなに……。白が来てから月日が経つのが、早えと思ったただけだ」
「まあ、あつという間でしたねえ」

「それに物覚えがいい」

「だから最初にいったじゃないですか、自信あるって」

「そうだったな」

実際に言われたことは、素早くこなし手落ちなどほぼ無かったはずだ。始めは何度か怒られたが、同じ間違いはいまのところしていない。

「よし!」

「なんですか? いきなり大声出して」

「そろそろいいだろう。明日からは仕込みを教える!」

その仕込みという言葉に、とうとう次の段階に来たか! と、テンションが上がってしまい、本体の方で即答してしまっていた。何事も、自分がやっていることで、次の過程に進めるとなると嬉しいものである。

「おお! やる気はあるんで任せてくれ!」

「よし! じゃあ、いつもより早めに起こすからな。後悔すんなよ!」

「オッケー! オッケー!」

こうして次の日の朝3時起きて、遁甲術を使い、細心の注意を払って屋敷を抜け出す。そして朝の6時には、また帰ってくるという生活をしている。

初日は覚えるのも大変だったが、それ以外にも大変なことはあった。

「昨日の夜遅く白の部屋に、誰か他の人居なかった？」

「1人だったよ？（もしかして聞かれてたか？）」

「気のせいなのかな？」

「気のせいだよ。うん。きっと鍛錬でヒナタは疲れてたんだよ。食事をしっかりとって、今日も鍛錬頑張ってるね」

「うん。白に追いつけるように頑張るね」

（目標が俺ですか……。普通同門のネジとかじゃないの？ そう言えば、ネジとヒナタって組み手してるところ見たことないな。もしかして、俺が居なかったら、本来はネジが組手の相手だったとか？）

ヒナタの言葉には少し焦ったが、押しに弱いところを突いて、強引に話題を変えて追及を回避したのである。

話は戻り、はつきり言って、麵の作成を馬鹿にしていたわけでは無いのだが、汗が入っただけで、駄目だと言われるとは思ってもみなかった。今までは、運搬や掃除などの準備を行っていたので、仕込みについてはノータッチだっただけに、そこまで気を使って作っているとは思っていなかったのである。

スープの作成の仕方でも覚えた頃には、既に秋休みは折り返しを過ぎていた。残りの秋休みは1週間もない。

「こんなに早く覚えちゃうなあ、大したもんだ」

「まあ、何度か同じミスやっちゃいましたけどね」

「最初は誰でもそんなもんだ。俺もあの頃は若かったな……。これで満足せずに、日々精進しろよ」

「このラーメンは、この里のどこよりも旨いのに精進も何もないですよ」

「馬鹿野郎！ 向上心が無けりや、旨いもんは作れないんだよ！ それにもっと旨くなるー！」

「旨くですか？ んー。これはこれで気に入ってるお客さんがいるんで、完成でいいと思うんですよね。なんで、他のを作ってみたらどうですか？」

「他のだど?」

他という言葉に反応して、オヤジの眼がこちらをギラリと睨みつける。

「いやいや。ラーメン以外って意味じゃなくてですね。とんこつとか、しょうゆとか、みそとか単品はあっても、とんこつしょうゆとか合わせたものってのがないじゃないですか。なんで単品は完成として、他の味に挑戦してはどうかなあ、と……」

慌てて言い訳をして、新しい味への挑戦を勧めた。それというのも、このオヤジはラーメンに人生を掛けており、ラーメン関係以外は作ろうともしない。しかし、言っていて、どんどんとオヤジの眼が殺気を帯びたように鋭くなってきたので、白の言葉尻が段々と弱弱しいものになってきてしまっていた。

「お前というやつは!」

「すみません! 出しゃばりました!」

「なんでもっと早く言わねえ!」

「はっ?」

オヤジがこぶしを握り締めたのを見て、怒られると思っただけだが、怒られる内容が思っていたものと違った。

「そうだ。なんで気づかなかったんだ。色んなお客さんがいるんだ。それに対応してこその一樂つてもんだ。時間は掛かるかもしれんがやっつけてやるぞ!」

オヤジは一人で盛り上がり、店の前まで出て大きな声で「俺はやっつけてやる!」などと叫んでいた。白としても、とんこつしょうゆは食べたかったなので、心の中で応援しつつ、そろそろ夕方近くになってきたことを確認し、準備に取り掛かった。

そうしている時に、オヤジが店に戻ってきたかと思うと、1人の子供と一緒に戻ってきていた。

「俺のやる気を分けてやる! そんな湿気た顔せずに食ってけ!」

「お金ないってばよ」

「今日は気分がいいんだ。ただで食わせてやるよ!」

「……おっちゃん俺見てなんとも思わないのかよ」

「元氣のないガキだと思ってるさ。うちのラーメン食えば元氣になるってもんよ！」

オヤジが連れてきた子供というのが、落ち込んだ表情をしたナルトだった。席に強引に座らせると、いつもの手際でラーメンを作っている。白も一応、客という考えで水をだしたが、まさかこのタイミングでここに来るとは思ってもいなかった。

(そう言えば、ここで働き始めて来たことなかったな)

オヤジはナルトにラーメンを出して食わせていたが、泣きながら食うナルトは、教室などで見るものと違い、かなり新鮮だった。それを見て、顔がにやけていたのだろう。オヤジに殴られてしまった。

「ニヤニヤしてんじゃねえ」

「いや。殴ることないんじゃないの?」

「うるせい。お客さんが食ってるときは邪魔するんじゃないねえ!」

「<その大きな声の方が邪魔してると思うなあ>」

「なんか言ったか? ん?」

「何でもないでつす」

再びこぶしを握り締め始めたので、手を顔の前で『ぶんぶん』と振り何も言っただけよ……とアピールして、オヤジの視線をナルトに戻させる。

ナルトが食べ終わるまで、オヤジは特に何も言わず静かに見守っていた。それを見て白は、1年前の自分の時もそうだったなあと思いつす。

「兄ちゃんも俺を見てなんとも思わないのか?」

「泣くほど旨そうに食うやつだとは思ったぜ?」

「おっちゃん達、変だつてばよ」

「その言葉遣いの方が変だと思うけどな。つてまた殴る!」

「いつもは丁寧な対応する癖に、今日だけ素になるんじゃないやねえ。それにさっき言っただろうが、邪魔すんなど」

「いやいや。聞かれたから答えただけで、俺悪くないんじゃない?」

「それに食べ終わってるし」

「ぶん」

そこで、時計が鳴り始めたので、いつもと同じように入れ替わり、屋敷へと戻った。この日から、ナルトはちよくちよくと店に来るようになっていた。

(この秋休み、なぜか一楽に通い続けてしまった……。しかも、まともに鍛錬できたのって、体術と遁甲術だけだし……。まあ遁甲術に関しては、かなりのものになったと思っておこう、そうしよう)

そんなある日、一楽に三代目火影である猿飛ヒルゼンが来た。いきなりこのことで白は驚いたが、オヤジの方は驚いていなかった。どうやら昔店に来たことがあるらしく、オヤジとはその時に知り合ったらしい。普通に雑談に興じていた。取り敢えず、お客さんになるのか?と思ひ、水は出したが、ラーメンを注文する気配はない。その際にオヤジの方から声を掛けられる。

「自己紹介くらいせんか」

「……白と言います。いきなり火影様が来られるとは思いませんでした」

「ちと色々あつての。ここ最近これなんだから来たんじや」

「それだけじゃないでしょう?ここに来たのはあの子のことですかい?」

「……そうじや。お主のあの子に対する態度が変わらんのが不思議でならん」

「これが俺の性格なもんね。うちのラーメンをうまいと言うやつに、態度を変えることなんぞありませんな」

「そつちのもそうじやろ?」

「こいつは、俺が見込んだんだ。そんな考え持つてる訳がねえ」

「そうか」

火影はどことなく安心したような顔を見ると、

「これからもよろしく頼む」

と言つて帰つていった。

(さっきの言い方からするに、水晶で見られていたってことだな。あれは感知出来ないから厄介なんだよ……。でも、ここで追及されな

かっただってことは、取り敢えず遁甲の術で上手くいつているのか？
いや、楽観はできないな。泳がされてる可能性もある……。特に悪い
ことをしてるわけじゃないから、見つかったとしても言い訳は出来る
けど、弱みを握られるのは……。常に見てるわけじゃないから、い
まのところ移動には更に注意して行くくらいしかないか)

37 先生？

時が過ぎるのは早く、いまはアカデミーでの生活も3年目に入った。

2年生での最後の試験は変化の術だったが、一応みんな自分以外に変化することが出来た。誰でもいいと言われ、最初の子が先生に変化すると、みんな揃って先生に変化し始めたのだが、まだチャクラの練り方とイメージが出来上がっていないのだろう、痩せすぎたり、太りすぎたり、顔の形が違ったりとまともに変化の術が出来たのは半数にも満たなかった。

そんな中、先生とは違う人に変化したのは、サスケとナルトくらいだ。

サスケはイタチに変化し、ナルトは女性に変化して驚かそうと思ったのだろうが、変化しきれていない。一応ナルトには見えないので、変化の術としては成功？なのだろうが、みんなから大爆笑をうけていた。

その中で我慢できなかったのか、その後すぐにナルトはどこかへ走り去ってしまった。さすがに顔や体の形がアンバランスではあったが、自分が失敗したことを棚に上げて笑っているやつらは、一体なんなのだろうかと思ってしまう。

後でわかったが、あの後に、街にいたずらに行ってしまったようだ。忍者アカデミーに苦情が入ったことで、先生が苦い顔をしていたのを覚えている。そのせいかもしれないが、先生も我慢できなかったのだろう、3年になってすぐに先生の交代があった。

「新しくこのクラスを受け持つことになった。うみのイルカと言う。これからよろしくな」

その後、今までの自分の経歴を軽く説明していた。中忍試験に合格してそんなに年数が経っていないとのことだ。忍びが自分の事を、簡単とはいえ、情報として与えるのはどうなのかと思ってしまう。

その後、生徒の名前を1人ずつ呼んで返事をさせて、顔と名前を確認すると授業を始めてしまった。名簿帳を見ながら名前を呼んで

いたので、そこに生徒のプロフィール的なものが載っているのだろう。もしかしたら、前任者の先生からも聞いているのかもしれない。そのためか自己紹介を再度せずに済んでいた。

授業のやり方は、前の先生と同じで変わりはない、ナルトがいる間は、こちらへと近付いて来なかった。未だにナルト防波堤は健在である。

3年目になったからなのか、定期的な試験が増えてきた。別段試験の成績が進級に影響するわけではない。しかし、アカデミーを卒業する時の最終試験だけが、卒業出来るかどうかに影響することだった。ただし、それまでの試験は卒業後に反映されるので、覚えておくようにと言われた。

(スリーマンセルの振り分けだろうけど、今40人だから1人余るな……。どこかがフォーマンセルになるのかな?)

白は、今のところの成績表を見る限りでは、全て40人中5位以内には入っている。通常であれば、スリーマンセルチームのトップとして振り分けられるはずだが、イレギュラーな存在であるため、どうなるかは分からない。

「君たちの実技の実力を知りたいと思うので、第2演習場に出てくれ」
座学をひと通り終えた頃、次は実技に入った。机上ばかりだったせいか、ほとんど生徒は外に出ることを喜んでいて、特に気合いが入っていたのは、言うまでもなくナルトだ。

第2演習場と大きさに言ってはいるが、ただの手裏剣などの投擲場のことであり、それほど広い場所ではない。端的に言うとな校舎横の庭である。そこに丸太の的などが置いてあるだけだった。

「基本忍術である分身の術からやってみようかな。見本として、そうだな……。サスケやってみられないか?」

イルカに言われたサスケは、不機嫌そうな態度を表していたが、明らかに喜んでるのが分かる。自分の力を見せつけることが出来るので嬉しいのだろう。

サスケが分身の術を使用し、3人になったところで、ナルトが目立とうと大声を出して、勝手に分身の術を行った。

「それくらい、俺にも出来るってばよ！ 分身の術！」

出来た分身の術は、1人である上に、なぜか倒れこんでいる。分身の術としては失敗なのだが、相手の意表を突くにはいいかもしれない。周りのみんなからは、その光景に笑い声と文句（サスケ君に敵うわけがない、身の程を知った方がいいなど）の言葉の嵐を受けている。それにナルトは耐え切れなくなったのか、サスケに勝負を挑み、分身に突撃して勝手に自爆していた。

（分身は実体がないんだから、肉眼でも地面の状態を見れば分かるだろうに……。ナルト哀れだな。今度、一楽に来た時にはスープ増量でもしてやるか）

イルカは、特に止めることもなく、ナルトをそのまま放置して、次に手裏剣術など他の物へと移っていく。それを悉くサスケに見本をやらせる辺り、ナルトを挑発しているのではないかと勘繰ってしまふ。確かに、サスケの成績は一番だが、見本を全て生徒1人にやらせるのは、先生としてどうかと疑問に思わせる。

ひと通り終えて、約1名——ナルトだけがボロボロになってはいたが、イルカは特に気にした様子もなく、みんなを引き連れて教室へと戻っていく。ヒナタだけは、かなり気にしていたようだが、声を掛けるようなそこまでの積極性が無いため、みんなと一緒に移動しながら、一番後ろにいるナルトをチラチラと見ていた。

「そこまで気になるなら。医療室に連れて行ってあげればいいと思うけど?。」

「でも……。迷惑じゃないかな?。」

「あれくらいすぐに治ると思うよ。まあ、あそこまで失敗して変に氣遣われると、逆に惨めに思うかもしれないけど」

「……やっぱり迷惑なんだ」

「どう思っかは相手次第だから、絶対とは言えないけどね」
「うん」

結局は流されるままに教室へと戻り、授業を再開した。

そして次の日。授業が始まってからもナルトの姿は無かった。いつもであれば、アカデミーに出てきてから、どこかにイタズラに行くのだ

が、今日は朝から居ない。

「白。ナルトが居ないようだが何か知っているか？」

「なぜ、僕に聞くのですか？」

「席も近いし、知っていそうだからなんだが……」

「予想でしたら答えられますが、どこにいるかまでは知りません」

「予想ではなにをしてるんだ？」

「ペンキを持って、街でイタズラでもしてるのではないでしょうか？」

実際に、朝から街中をペンキを片手に、落書きしまくっているナルトを、情報収集役の水分身にて確認している。恐らく、また忍者アカデミーに苦情が入るだろう。白の言葉を聞いて、少し考えると、イルカ先生はすぐさま行動に移した。

「戻ってくるまで自習とする！ 各自教科書を読んでおくように！」

そうやってイルカ先生は、教室を出て行ってしまった。教室内からは「やったー」だの「さすが白！」だのとお祭り騒ぎだ。これまでの傾向からイタズラをしているのは目に見えているが、病気などで休んでいるという可能性は、考慮しないのだろうかと思ってしまう。

結局その日にナルトと先生が戻ってくることは無く、代わりの先生が途中から授業を行った。

それから数日経った頃。イルカ先生のナルトに対する扱いが完全に変わっていた。以前であれば、教室にて居眠りやいたずらをしても、無視したり、「あいつはいいんだ」と言っていたのに、今では態々怒りに近付いて来るのである。ナルト防波堤が決壊してしまったので、これでは満足に勉強や鍛錬、顔覚えに集中できていない。

イルカとナルトの2人で、一楽に来るようになったことを考えると、何かしらのイベントがあったのだろう。1ヶ月も掛からないうちに、こうまで変わるとは考えられなかった。しかし、これでナルトの精神は多少マシになるだろう。一楽のオヤジも嬉しそうにして、2人のチャーシューの量を増やしていた。

ナルトも、内容に関してはあまり変わらないイタズラはするのだが、その回数は以前と比べるとかなり減っているように思える。特に屋外にて行う授業に関しては参加率が高い。机上で黙って聞いてい

るよりも身体を動かす方がいいのだろう。

(机上の授業が一番いいんだけど、くノ一の授業よりマシか……。男女合同で行う屋外授業の方が気が楽だし)

本日の授業内容は忍び組み手だった。円の中にて組み手を行うもので、始めに対立の印、そして組み手が終われば和解の印を行うというものだ。

始めに呼ばれたのはサスケだった。ここまでは良かったのだが、次の言葉で固まってしまう。

「サスケの相手は白だ。2人は円に入るように」

「えっ?」

周囲の女子生徒からは羨ましがられたが、こちらとしては大迷惑である。溜息が出そうになるが、指示されたからには仕方がないと、円の方へと向かっていると、ナルトが割り込んできた。

「こいつの相手は俺がやるってばよ!」

「あんなナルト。そう何度も我が儘は聞いてられないんだ。今回は体術の成績順だ。男子と女子同士で行うことにもなる。だからナルトを呼ぶのはまだまだ先だ」

イルカ先生の言った内容を聞いて、この組み合わせになったことが分かった。勉強に関してはある程度手を抜いていたが、体術に関しては、周りへの牽制と言う意味を含めて、生徒に対して負けたことは無い。ただし、サスケや一部の男子とはやったことが無いので、この辺りで調整をしておいた方がいいかもしれないと思いを切り替える。

(こんなところで裏目に出るとは思わなかったけど、良い機会だし分らないように負けよう)

あまり気にして見ていなかったのも、サスケがどのくらいのレベルなのか不明だったが、それほど強くないと分かる。はつきり自分以下であると分かるだけに、逆にどのくらいの手加減をしていいかが分からないくらいだ。

(まずは様子見かな)

ナルトをイルカ先生が、円の外に出して控えさせ、代わりに白が円の中へと入る。

「では対立の印をしてから始めること」

その言葉で両者対立の印を結んだ瞬間にサスケが動き出した。サスケは様子見などせず、一気に終わらせるつもりのようなのだ。なんの捻りもなく、真つ直ぐに走ってきた。顔への突きをフェイントに、足を払うつもりのものであったので、それに便乗して足を払われてから受け身を取り、その受け身の移動で、さり気無く円の外へと出てから立ち上がる。

「円の外に出たのでそこまで！2人とも和解の印を」

白は円の方へと戻りサスケと和解の印をした。女子生徒からの声が非常にうるさいことになっている。

「お前なかなかやるな」

「いえ。サスケ君が早くて対応できませんでした」

サスケの中では、足を払った時点で終わりだと思っていたのだろう。それが、受け身を取ってすぐさま立ち上がったのだから、それなりに体術ができると思われたに違いない。

それからは次にヒナタが呼ばれた。あれだけ鍛錬をしているので、クラスの生徒に負けることはないだろう。現状でヒナタに勝てるのは、体術であればサスケくらいではないだろうか。

そんなことを考えながら、女子生徒たちの方へと戻ると、女子生徒に囲まれてしまった。

「まずは私と和解の印をしてもらおうから！」

「一体何の話？」

イノが囲んだなかから一歩前に出ると、堂々と腕を組み仁王立ちして宣言してきた。

「何ってサスケ君と和解の印を結んだでしょ！ 独り占めしようなんてずるいわよ！ 早く手を出しなさい！ 次の3番手は、私が呼ばれるはずなんだから！」

そんな話をしているうちに、ヒナタの忍び組み手は終わったようで、イノがイルカに呼ばれていた。

「ほら早くー」

イノに無理やり右手を掴まれ、和解の印を結ばされた。和解の印を

結んだイノは、上機嫌になったようで、忍び組み手をなるべく円の方へと向かって行く。

その後は順番に、女子生徒のほとんどと和解の印を結んでいくと言う作業に追われてしまい、まともに忍び組み手を見ていない。中にはなかなか手を離さない子もあり、次の子に文句を言われていた。

こんなことは懲り懲りだと、女子生徒たちから少し離れた位置にて、ヒナタと忍び組み手を見ていると、ヒナタから声を掛けてきた。

「大変だったね」

「全くだよ」

「でもなんでわざと負けたりしたの？」

「そこで勝ったらどうなったと思う？」

「えつと……。どうなるの？」

「まずサスケ君のことを好きな女の子がいっぱいいるよね？」

「うん」

「もしあの場で勝ってたら、さつき以上に大変なことになりそうだったからだよ（女子だけじゃなくサスケにまで目を付けられるからなんだけどね）」

「？」

ヒナタには言いたいことが伝わらなかったようで、首を傾げている。白は、詳細に説明するのが面倒になり、簡単にまとめることにした。

「世の中を上手く渡するには、時に負けることも必要ってだけの話」

「白は色々考えてるんだね」

「まあね」

そんなことで、概ね平和な日々が過ぎていたが、それから数か月後事件は起こった。

388 事件？

いつも通り、情報収集のための水分身を街中に歩き回らせていたのだが、ある噂が引つ切り無しに立ち上がった。

その内容と言うのが、うちは一族の皆殺しという内容だ。

確かに、1日だけサスケがアカデミーに来ないということがあったが、その日にうちは一族はサスケを残してイタチに皆殺しにされたようだ。現場を見てみようと、うちは一族の居る、里から離れた場所へと野次馬根性で見に行つたが、血が所々残つてはいたものの、既に死体は処理された後だった。

（万華鏡写輪眼の月読だっけ？ あれ受けて1日で復帰できるサスケは凄いな）

サスケは、何を考えているのかはよくわからないが、教室にていつも通りに自分の場所にて座っていた。

周囲の生徒たちの間でも、うちは一族がサスケを残して死んだことを話しているが、そのようなことを気にした風もない。

この日からサスケの実習での取り組み方が変わってしまった。今までは、相手に余裕を見せたり、手加減をしていたのだが、今ではどんな相手であろうとも、完膚なきまでにやってしまうのである。

それが更に女子生徒たちには恰好よく見えるようで、人気がうなぎ登りになっていったし、それが気に食わないのか、ナルトが実習のたびに絡んでいき瞬殺されるのが、日常茶飯事になりつつあった。

サスケを応援する女子生徒が多い中、そんな諦めない姿が恰好よく見える人物もおり、横でナルトに声援を送っているのだが、周囲の女子生徒の声に阻まれて、ナルトには全く届いていないだろう。

「えーっと。ヒナタは何でナルトを応援してるの？」

「それは……」

人指し指を何度も突き合わせて恥ずかしそうにしているが、理由を話す気は無いようで、下を向いてしまった。その間にも、既に決着はついており、ナルトが倒れているのが見て取れる。開始早々やられたのだろう。

「まあ。ヒナタが誰を応援しようと、ヒナタの自由だと思うよ」

未だに思考の渦に入っているヒナタに、言葉を投げかけるも、全く聞いていなかった。上手く説明するための理由を作っている最中なのだろう。

そんなことはあつたが、概ね今までの平和な生活と変わることが無い。

そんなある日の午前中に、教室にていつも通り過ごしていると、イルカ先生に呼び出しを受けた。

「白。昼休みに教員室に来てくれ」

「理由をお聞きしてもいいですか？」

「それについては、教員室にて話す」

「分かりました」

白には呼ばれた理由に心当たりが無かった。成績に関しては上位の方をキープしているし、授業態度に関しても特に目立った行動はしていない。理由は教員室にて話すとのことなので、その時に分かればいいかと、白は承諾した。

昼休みに入り、イルカ先生に話を聞くべく教員室へと向かう。教員室の場所について知ってはいるが、入学後の案内以来入ったことが無い。確か、太い丸太のような柱から出た、ひだのような机になった物がいくつもあり、その丸太ごとに各学年の先生が集まっていたはずだ。そのため、すぐ真横に他の先生が居ることになる。教室にて話せない内容だが、教員室では話せるということは、他の先生に知られても問題のない内容なのだろう。

そう気軽に考えながら、教員室へと入っていった。

「失礼します。イルカ先生に呼ばれましたので来ました」

「こっちに来てくれ」

イルカに手招きされてそちらへ行くと、何故か呼び出すまでもない質問をし始めたのである。

「最近の調子はどうだ？」

「調子と聞かれても回答に困るんですが？」

「そうだな。クラスの連中とは上手くやれているか？」

「自分なりに上手くやっているつもりです。転入したわけでもないのに、その質問の意図が不明すぎます。そろそろ本題に入っていただけませんか？」

イルカは困ったような顔をして頭を掻きつつ、本題を切り出した。「呼び出した理由だったな……。午後からの授業は受けずに、火影様の居られるところに行ってくれ。理由についてはそこで聞かされることになってる」

「と言うことは、イルカ先生は内容をご存じなんですか？」

「知ってはいるが、いま俺が言える立場ではないんだ。すまないが、火影様から直接聞いてくれ。その後なら答えられる。あと、今回の内容に関しては先生たち以外には他言無用だ」

「はあ……。分かりました。話がそれだけなら失礼します」

呼び出しを受けた理由を聞けると思ってきたのだが、ただの伝言役でしかないイルカに、思わず気の抜けた返事をして、踵を返したところで慌てたように声を掛けられた。

「もう1つだけ、これだけは言っておくが、まだまだ時間はあるから、後悔しないようにじっくりと考えることだ。俺から言えるのはこれくらいだな。それと通行証を渡しておく」

「通行証ですか？（そんなのがあるのか）」

「これがないと捕捉されるからな。無くさないように気を付けるんだぞ」

「分かりました。この通行証の返却はどうすればよろしいですか？」

「そこまでは聞いてなかったな。すまないが、向こうにいる者に聞いてくれ」

どこか抜けているイルカ先生より通行証を受け取り、それを懐にしまってから教員室を出て行く。

（時間はあるって言ってたけど、内容的に考えさせられる類のものと言うとなんだらう？ 火影関係だと、一楽くらいしか想像がつかないんだけど）

一度教室に戻り、ヒナタに午後からは居ないことを伝えて、昼食後に火影のいる場所へと向かう。

火影の居る建物の前にたどり着き、その建物の前にある門をくぐる時に、変な違和感を感じた。

（これは結界内に入った感覚に似てるな。と言うことは通行証がないと、これに引つ掛かって暗部辺りが動くってことかな？）

火影のいる場所が不明だったので、中に入る人に聞きながら、火影の居る部屋へと無駄に長い階段を昇って行く。事前に聞かされていたのか、子供が火影の所に向かうことに関して、誰も咎めようともしない。

火影の部屋へとノックして入る。部屋の中は綺麗に整頓されていたが、キセルの煙のせいも、微かに煙草の香りが漂っている。

「そんなところに立っておらんと、もうちよいこつちへ来たらどうじゃ」

「失礼します」

白は、火影の机の前まで来て平然と立っているように見えるが、部屋に入ってからかなり緊張していた。

「お主を呼んだ理由についてじゃが、その前に聞きたいことがある。アカデミー卒業後のことを考えとるか？」

「卒業後ですか？ 卒業したら上忍の元スリーマンセルで下忍扱いとなるのではないのですか？」

「大凡はそれであつとるが、詳しくは知らんかったか……。卒業前に進路についての希望を出すようになった。通常はさつきお主が言った通りで間違いではないが、選ぶ部署によってはその限りではない」

「それは初耳です」

「成績が卒業後に影響すると話は受けんかったか？」

「それはお聞きしましたが、そのようなことだとは思ってもみませんでした」

アカデミーを卒業したら、問答無用でチームを組まされると思っただけに、火影の言葉は意外だった。

「まあ、それはよい。卒業後に考えている者はあるかの？」

「一応医療方面で考えています」

「医療忍者か……」

「いけませんか？」

「そうではないがの。その選択肢に暗部を入れてもらえんか？」
「……暗部ですか」

まさかの選択肢に少し引き気味になる。それもそうだろう。暗部と言われて良い印象はなく、逆に死亡率が高いイメージしか湧き出て来なかったからだ。

「すぐに結論を出さずともよい。まだ卒業までに時間はあるからの」
「暗部にて行う内容をお聞きしてもいいですか？」

「一般的には影にて動く。警護なり監視なりじやの」

「今更ですが、なぜこの話が私に來たのでしょうか？」

「アカデミーでの成績や態度において、教員が推薦をするようになっての。目ぼしい生徒は、早ければ今の時期より候補として挙げるようになってる。そこで今回候補に挙がったのがお主と言うわけじゃ」

「もつと上の者は居たはずですが、なぜ私なんでしょうか？」

「それは候補として選んだ者に聞かんとわからんの」

「そうですね……」

「他にはないかの？」

「いえ。ありません」

「ゆっくり考えることじゃ。それと、このことは日向家には話してあるから、その辺りは気にせんでいい」

あまりの内容に意気消沈しながら火影の部屋を後にして、忍者アカデミーへと戻る。最初は足取りが重く、溜息が何度か出たが、なぜ選んだのか理由を聞いただすべく、段々と足取りが早くなっていった。

「お聞きしたいことがあります」

「いやゝ。意外と早かったな」

授業の合間の休み時間にイルカを捕まえて、すぐさま教員室へと連行し聞いただした。

「なぜ選んだのか説明を求めます！」

「そんなに大きな声を出さずとも聞こえてるから落ち着け」

「俺はいつでも落ち着いてますとも！」

「だから落ちつけって。選んだ理由だったな。一応候補として成績上位者を数人挙げたんだが、通ったのが白だけだったんだ」

「かなり適当にしてしまったんですね？ 生徒の事情も鑑みずには？」

ジト目でイルカを見つめると、イルカは焦ったように笑いで誤魔化そうとし始めた。

「あっはっは」

「笑い事じゃないですよ」

「いやだってだな。他の先生に聞いたたら、普通通らないって言うし、いつも成績上位者を挙げてるらしくてな。俺も先生になってから日が浅いし、その通りにやってみたら、まさかの大当たりでな。俺も通るとは思ってたなかったんだよ」

「大当たりどころではないと思うんですが？」

「いや。あそこは優秀な者が行くところだから、選ばれるってことは結構というか、かなり凄いことだぞ？」

どうやら、イルカの中では暗部イコール優秀と言う図式が、頭の中で出来ており、それ以外の危険度などが欠落しているようだった。ナルト達が中忍試験を受ける時には、あれだけ早すぎるだのなんだのと言っていた人物と同一人物であるとは到底思えるはずもなかったが、先生になって日が浅いせいで、そこまでの考えに至っていないのかもしれない。

「その結論が早く出た場合はどうなるんでしょうか？」

「通例を挙げるなら、来年にでも卒業試験を受けて下忍として扱われて、そこから専門の訓練を行うとは聞いているが、内容までは分からないな」

「いえ。そっちではなく断る方向で」

「断るのか!?! せっかく候補として選ばれたのに?！」

白の返答に驚愕しているようであったが、いまのところ考えを変えらるつもりは白にはなかった。

「後方支援である医療の方に進みたいと思っっていますので（危険度が高すぎなのに行くわけがないだろ!）」

「まあ待て、ここに来た時も言ったが、まだまだ時間はあるんだ。そう結論を急がずともじっくり考えたらいいさ」

「考えが変わることはないと思いますが……」

「おっと。そろそろ次の授業だ。帰ってきたからには受けてもらう。それと、この件に関しては何の者に話すのは駄目だぞ」

「何度も言われずとも分かってます」

「分かっているならいい。さあ行こうか」

イルカと共に教室へと行き、授業を受けたが、授業後の休み時間に、ヒナタに問い詰められることになるとは思ってもしなかつた。

39 暗部？

アカデミー卒業後の進路に選択肢が増えたのはいい。その選択肢が暗部などの危険なところでなければだが……。

ヒナタへの言い訳はともかくとして、屋敷に戻った際に、ヒアシからの呼び出しがあったので、ヒアシの部屋へと向かった。

「失礼します」

「来たか。暗部の話は聞いているな？」

「本日お聞きしました」

「時期は問わんが、アカデミー卒業後を期限にして暗部にいつてもらう」

「(拒否権なさそうだなあ)理由をお聞きしてもよろしいですか？」

「少々取引をしてな。いずれ話すことになるだろう。それと暗部入りについては、アカデミーの者には話さずに、火影様に直接お伝えしろ。話は以上だ」

「分かりました……。失礼します」

ヒアシが話を打ち切ってしまったため、これ以上聞いても無駄と悟り、ヒアシの部屋を後にして自分の部屋へと戻る。

(ゆつくりと考えればいいとか言ってたけど、その期間で自分を納得させろってことじゃないか……)

その日は鍛錬どころではなく、今後のことを考えている内に、あつという間には過ぎ去ってしまった。

翌朝。結局寝ずに朝日を迎えてしまっていた。その間に如何にして、今の状況を自分に都合のいい方へと持っていくかを考え、それを実行に移すべく行動することにした。

(久しぶりに徹夜したな。いつ振りだろうか?)

徹夜したにも関わらず眠気はなかった。それというのも、ランダム時計のお蔭で、毎日緊張という名の仮眠であったので、常に気を張り起きているのに近い状態であったからである。

ヒナタと共に登校し、早速授業が始まる前に教員室へと向かう。

「失礼します。イルカ先生よろしいですか？」

「おお。おはよう白。どうかしたか？」

「昨日の件で、火影様とお話したいのですが、日程調整をしていただけませんか？」

「もう返事をしてしまうのか？ もっと考えた方がよくないか？」

「こういったことはすぐに処理しておかないと気が済まないので、早ければ早いほどいいです」

「その考えには賛同するが……。わかった。話しておくよ」

「お願いします」

イルカは白が断ると思っっているのだろう。とても残念そうな顔をして白の申し出を受けた。おそらく、取引の内容とやらについても聞いていないのだろう。そうでなければ、拒否権がこちらに無いことを知っているはずなのだから。

（元々イルカ先生が、候補に選んだせいで、こんなことになってるんだからな！）

早朝にイルカ先生に話をして、日程調整をしてほしいと言ったにも関わらず、その日の午後に行くこととなった。あまりの早さに、火影は暇なのかと思ったほどである。

通行証を手渡された時に、以前の物を返し忘れていたことを思い出したが、行った時に返せばいいかと思ひ直し火影の所へと向かった。

「失礼します」

今回は緊張することもなく、火影の前まで歩いていく。

「ほほ。遠慮が無くなってきたの」

「昨日の件ですが、拒否権が無さそうです。そこで、こちらも要望を出したいのですがよろしいですか？」

「拒否権うんぬんは一応あったぞ？ 遅いか早いかの違いだけじゃが。それはそうと要望を聞こうかの」

「それは拒否権とは言いません。要望ですが、自分の自由となる時間が欲しいです。週一の休みでいいので」

「その辺は、お主の上司と相談することになると思うかの」

「そこを口添え願います。それと任務に就くのはいいのですが、上忍クラスと一緒に行動させてください」

「それは安心せい。暗部に入っておるものは、ほぼ全て上忍クラスじゃ」

「(上忍でもピンキリだから困るんだよな……)上忍でも強い人をお願いします」

「強さにも色々あるからの」

「ああもう！ めんどくさい！ 死にたくないんで、任務に就くのは俺を守るくらいの方がいいってことですよー」

あまりにも惚けた言い方をしてくる火影に、我慢が出来ずに素が出てきてしまう。それを見て火影は微笑むと、やつとかと言わんばかりに話し始めた。

「さっさと本音を言わんからそうなるんじや。一楽ではそれでやっとなつたじやろ？」

「やつぱりバレてたのか。まあ薄々そうかもとは思ってたけど」

「今後はトイレの中でも注意するんじやな」

「プライベートって言葉知ってる？」

「知つとるよ。それはそうと、暗部入りを納得してもらつといてあれじやが、今後の事について話すぞ」

「納得はしてないけど了解」

「お主には、このままアカデミーへと通ってもらおう」

「すぐに卒業じゃなくて？」

火影の言葉は意外であった。すぐにでも卒業して、暗部入りするための訓練に入ると思っていたからである。

「その辺りはちとあつてな。住む場所についてはこちらにて用意するので、日向家からは出てもらうことになるかの」

「ん？ 結局今の生活と変わるの住む場所くらいってこと？」

「違いについては、お主に上司を一人付けるから、そちらに任せることになつとるから聞くといい」

「はあ……」

「なんじや覇気がないの。一楽の時とは大違いじや」

「必死にひっそり生き残ろうと頑張ってるのに、全部台無しにされたらそりゃへこみますよ」

「ふむ。それはすまなんだな。ではお主の上司を呼ぶとするかの」
「それって、今、天井に居る人？」

「ここまで来たら遠慮は要らないとばかりに、部屋へと入る前から感じていた気配の方へと、指差しながら尋ねる。」

「なるほど。優秀じやの」

火影は白の言葉に納得すると、手を打ち鳴らすと、面をした暗部の者が部屋内に現れた。

「お主の隠遁はまだまだのようじやの」

「悟られるとは思っていませんでした」

「誰であろうとも侮ってはいかん。教育が足りなかったのが原因じやな。お主の前上司に言っておこうかの」

「やめてください！ 割と真面目に！」

「まあよい。こっちがお主の部下になる白じや」

声からして若い男であることは分かったが、面をしているので誰かが分からない。面を取ったところで分からない可能性の方が高いが……。

「よろしく」

「えっと。よろしくお願いします」

「面を取って挨拶せんと分からんじやろ。それと名乗らんか」

「ああと。失礼」

男は面を取り外して改めて挨拶を行った。

「初めまして、ようこそ暗部へ。僕の名前はヤマトと言う。君の上司になる者だ。よろしく」

「(ヤマトって見た目あのヤマトだ。確か優秀だったはず？ この頃はどうかんだろ?) よろしくお願いします」

「見た目が若いからって、そんな疑惑の目をするようではまだまだだね」

「そうですね」

「なんか可愛げがないなあ。見た目だけかい？」

「勘違いされる前に言っておきますが、女ではなく男です」
「えっ!?!」

「なにっ?」

ヤマトが勘違いしていそうな発言をしたために、その勘違いを正そうと思いつたのだが、火影まで反応するとは思ってもみなかった。「なぜ火影様まで、いま知ったみたいな顔をしてるんですか? トイレを覗くような人が……」

「いや、なに……。もちろん知っておったとも……」

火影は目を泳がせながら答えるが、その姿には説得力が全くなかった。

「確かにトイレを覗くのはどうかと思いますね」

そこへ白への援護射撃がヤマトから入った。それにより、更に火影は慌てふためきはじめる。

「いや。ちと本人に会ってみて、そう、おかしいと感じての、見てみたら分かっただけで、一回しか見とらん! それに見ていた時は男じゃったし!」

「そうやって、いろんな人を覗いてるんですね」

「これだから弟子の自来也様も……」

「ええい! うるさい! これより先の事は他のところで相談せい!

わしは忙しいんじゃ!」

「怒ると身体に悪いらしいですよ」

「もうお歳なんですから、身体には気を付けてください」

「早く出て行け!」

火影は顔を真っ赤にすると立ち上がって大声を上げて捲し立ててきたため、白はヤマトと共に急いで部屋を出た。

「ふう、あんなに怒るなんてね。さて、まずは説明するためにも、今後君の住むことになる場所まで案内しよう」

「お願いします」

「それにしても、男とは思わなかったよ。情報では女として聞いていたからね」

「それはヒアシ様のせいですね。アカデミーへの申請を女として出したので、そのまま登録されたのだと思います」

「このことを知っているのはどれくらいいるのかな?」

「ほとんど知らないのではないのでしょうか？日向家の方は知ってると思いますか……」

「そうか……」

その後は、住む場所と言われたところに案内されたが、高級感など全くない、何処にでもあるような普通のちよつと古いアパートだった。

「ここですか？」

「そうだよ。今日から君の住むところだ。中に入ろう」

アパートの内装自体も外見とそう変わり無く、設備も一般的なものだ。1人で住むには十分と言えるだろう広さと、家具類も整っていた。

「家具も準備してあるということは、既に決まっていたということですね」

「いや……。そういうわけでもないよ。ここは違う用途で使用していたんだけど、ヒルゼン様のご要望で、ここを君の住む場所としたんだ」「そこはかとなく嫌な予感しかしません」

「それも含めて説明するよ」

「お願いします」

始めに説明を受けたのは、今後のスケジュールだった。昼は忍者アカデミーにて警護及び監視、終業後に訓練を行うというものだった。「ヒナタの警護についてはいいんですが、ナルトを監視する理由が不明なんです？」

「情報収集が得意と聞いている。理由くらいは推察出来るんじゃないのかい？」

「九尾関係ですか？」

「そういうことだよ」

「もしかしてこのアパートって……」

火影と九尾の2つの単語から関連付けられる可能性を頭に浮かべ、それが言葉に出てしまう。

「そう。ナルト君の住んでいるアパートだ」

「流石に問題児の子守りまではしたくないんですが……（ナルトの面

倒を見るなんてマジで勘弁だよ！」

「監視であつて子守ではないよ。それに暗部に入ったら、任務に対して拒否は出来ない。文句くらいは言えるけどね」

「……暗部ってどれくらいで出られるものなんですかね」

机に頬杖をついて、ヤマトから窓の外の景色へと顔を移動させる。午前中は晴天だったにも関わらず、午後になってから曇り空になってきており、まるでこれからの白の人生を表しているかのようだった。

「そんなに遠くを見つめて現実逃避しても駄目だよ」

「まあ、危険が少なそうだというのには安心しましたけどね」

「ああ。もちろん通常の任務にも同行してもらうつもりだから、その時はアカデミーを休んでもらうよ」

「えーつと、そう言えば聞き忘れてましたが、休みつてあるんですか？」

「君次第だけど、基本的にはアカデミーと同じにしようとは思っていない」

「ありがたい話です」

「任務が入ったら簡単に潰れちゃうけどね」

「泣ける話です……」

その後も生活費から緊急時の連絡方法、注意事項など、最低限のことを伝えられているうちに、日は傾き、夕方となってしまっていた。

「そろそろアカデミーが終わる頃だから戻るといい。日向家の当主方には、僕の方から先に連絡しておこう。もう言わなくても分かっているとは思うけど、今回君は暗部入りを断った形を取ってもらおうよ」

「分かってますよ（ヒナタとネジへの説明どうしようかな……）」

「それと通行証を1枚返してもらおうよ」

「そう言えば返すの忘れてたんです」

懐から2枚の通行証を取り出して、机の上に並べると、通行証に記された番号を確認して、ヤマトはその内の1枚を白へと手渡した。

「こちらについては、ここまま持っていてくれ。今後はこの番号が君の番号となるから、誰にも渡してはいけない。こちらについては回収させてもらおうよ」

「分かりました」

「では、今日のところはこれで解散だ。荷物は今日中に移動して片付けておいて。明日から早速始めるよ」

「りょーかい」

ヤマトと別れアカデミーへと向かうが、ヒナタとネジへの説明をどうしようかと悩んでいたため、その足取りは非常に鈍いものだった。

40 引越し?

ヤマトと別れた後の、アカデミーへの帰り道。

日向家から出て、違う場所にて生活することの理由については、アカデミー到着までに考えていたので、ヒナタに説明するのは簡単だったのだが、それを納得させることが難しかった。

今までずっと一緒に生活してきただけに、突然出て行くことに対して驚くと共に、なぜ前もって教えてくれなかったのかと、問い詰められたのだ。

それを宥めすかしながら屋敷へと戻り、最終的には……

「詳細はヒアシ様に聞いて」

という、白としては情けなく、ヒナタには反論できない言葉を選ばざるをえなかった。

(このくらい、他の人に対しても強気でいければいいんだろうけど。なぜに俺だけ?)

ヒナタの中での、白の存在感と依存度が高いために起こっているのだが、そのことに白は全く気付くことはない。

ヒアシの元に行かないといけないと言って、ヒナタと別れヒアシの部屋へと訪れる。

一応、本日より暗部入りした旨を報告したが、既にヤマトより聞き及んでいたためだろう、返事は簡潔なものであった。特に言われたことと言えば、日向家の服については置いていくように言われ、代わりに服を準備してあるとのことくらいだろうか。

ヒアシの部屋を後にして自室へと戻る。特に生活に必要な小物などを、買い揃えている訳では無かったので、そういったものは無かったのだが、本類に関しては結構な物量があった。取り敢えず、本以外を昔から持っている籠の中へと納めていく。それに加えて、もう一つの巻物から籠を呼び出して、入るだけの本を詰め込んでいった。

(巻物を買うか作るかしないといけないけど、買うと高いんだよなあ……作るには知識が足りないし……ヤマトさんにその辺り含めて聞

いてみるか)

籠を巻物内に収めて、残りの本に関しては水分身にて運ぶことにした。ネジに関しては何も遅い時刻であったために、アカデミーにて後日話そうと後回しにしようとしたのだが、どこから聞きつけたのか、屋敷から出た際にネジに呼び止められた。

「俺に何も言わずに行くとはな」

「少し遅い時間だったから、言わなかったというより言えなかっただけ。理由については、明日アカデミーで伝えるつもりだったし」

「それなら今、聞いておこうか。アカデミーで話されて、以前のようなことになっては困るしな」

「結構根に持つね」

以前の告白して振られたという噂が広まった影響で、かなりネジは居心地の悪い思いをしたようだ。ネジもサスケと同じようなタイプで、周囲とは距離を置いているので、誤解を解く機会がなく、噂が沈静化するまで何もできずにいたのだった。

「元々僕は日向家の人間じゃないからね。分家の人たちには疎ましがられていたし……そこへ以前から探して貰っていた引き取り手が見つかったから、行くことになっただけ」

「確かに……分家の人が話していたのを聞いたから、この場に居る訳なんだがな」

「納得してもらえて良かったよ（ヒナタは納得してくれなかったみたいだし）」

「納得はするが、言わなかったことを許したわけでは無い」

「いや……許す許さないの問題は関係ないような」

「事前に一言くらいあるべきだろう?」

「いや……まあ……そうなんだけど……急に決まったことだし……」

「それは言い訳だ。今までの事を含めて、今週の休みの9時に分家の庭で手合せをしてもらう」

「今までとあんまり変わらないような気がするけど、それでいいならこっちはいいよ（ヤマトさんに言っとかないとな）」

「もちろん、いままでのような組み手ではなく、本気でやってもらう

ぞ」

どうやらネジには、今までこちらが抑えて鍛錬していたことが分かっていたようだった。結構な月日を共に鍛錬していれば、自ずと分かかってしまうものかもしれない。

「……わかったよ。ただし、やるのは1度だけというのがこちらの条件」

「それで構わない」

「それでは行くよ」

「ああ。またな」

ネジに別れを告げて日向の屋敷を後にし、新しく住むこととなるアパートへと向かった。

(この世界では引越したら近隣の人に挨拶するものだろうか?)

挨拶するべきであれば、何か渡さないといけないのかと考えながら、鍵を開けて部屋の中へと入っていく。そして、早速荷物を整理するかと籠を呼び出したところで、横の部屋から何かを殴るような音が聞こえてきた。

何事かと思い、壁に顔を近付けて耳を澄ませると、『ボスツ！ボスツ！』と何かを殴っているような音と共に、掛け声まで聞こえ始めてきた。その声の主は集中し始めたのか、段々と声が大きくなると共に殴るような音も早くなっていき、終いには近隣の方々から苦情が入った。

どうやら思っていたよりも、聞こえてくる音のしている部屋とは、かなり壁が薄いようで、隣の住人との境だけかもしれないが、音がよく通るようだ。

(同じアパートって言ってたけど、まさか隣とは……)

声の主はナルトであり、どうやら今日の練習にて、またサスケにやられたようだ。それを想定してなにやら格闘しているようだが、既に夜であることを考えるとかなりの迷惑行為だろう。この事が続くようであれば、対策を考えないといけない。

そう考えていると、案の定苦情が入ったようで、窓や玄関の方から怒鳴り声が聞こえてくる。

苦情が入った後は大人しくしているのか、その後は静かになった。溜息交じりに、荷物の整理を終わらせて、部屋内にトラップを仕掛けていく。そして寝る前に、起床時のランダム目覚ましの仕掛けも忘れずに設置した。

次の日。いつもの起床時間になってから、朝食の事をすっかり忘れていたことに気付いた。冷蔵庫を開ける時に何かあることを祈ってはみたものの、見事に中身は空であることに酷く落ち込む。

アカデミーへと通う時に、途中で買ってから食べることにして、折角だからと鍛錬を行うことにした。

時間まで鍛錬した後に、軽くシャワーを浴びてからアカデミーへと登校する。少しいつもより出る時間は遅いが、どうもナルトはこの時間にアパートを出ているようで、いつものナルトの登校時間にアカデミーへと到着した。ナルトの真後ろに付くような形で教室へと入る。(真後ろ歩いているのにナルトは気付いてないのか?)

教室へ入ると、ヒナタは既に登校しており、こちらを向いて、未だに機嫌が悪そうな顔をしている。どう納得してもらおうかと、考えながらヒナタの隣へと座ると、少しばかりじと目で見つめてきた。

「おはようヒナタ」

「おはよう白」

「昨日の件なら何度も謝ったんだから、そろそろ機嫌を直してほしいんだけど?」

「そのことはいいんだけど……」

ヒナタは言いづらそうにしているが、昨日の件以外にて、何か機嫌を損ねるようなことをした覚えのない白は、それならば何のことだろう?と考えていくが思い浮かばない。

「えーっと。なんで機嫌が悪そうなの?」

「機嫌が悪いわけじゃないんだよ。ただ……ちよつと、その……」
「言ってくれないと分からないんだけど?」

「えっとね。なんでナルトくんと一緒に来たのかな?」と思つて

確かに、ほぼ一緒というか、ナルトの真後ろについて教室へと入ったが、そんなことで機嫌が悪くなるのかと思ひもしなかった。しか

し、ヒナタのナルトへの想いと、ナルトの登校する時間帯に、ヒナタが教室の扉をよく見ていたのを思い出し、だから今の状態になったのかと納得した。

「それは住んでる場所が近いみたいだね。たまたま登校の時間帯が一緒になっただけ」

「本当？」

「本当だよ」

取り敢えずは納得してくれたのか、イルカが来たことで授業が始まり、話は打ち切りとなった。

（監視は一応アカデミー内だけで、ヒナタの警護の方を優先していいって話だし、明日からは気を付けよう）

1日の授業が無事終了し、ヒナタと共にアカデミーを出ると、日向コウが待つていた。どうやら、白の代わりとして送迎を行うようだ。ヒナタは寂しそうに挨拶を交わすと、コウと共に屋敷の方へと帰っていった。

白は、これからの訓練のために1度アパートへと戻った。途中で食材を購入しておくことも忘れない。

訓練のための場所は、夜間と言うこともあり暗かったが、白には月明かりにて視界は十分に確保できていた。地形としては木が疎らに生えており、近くに小川が流れているのが見える。そのような中、平地部分の中央にてヤマトは待っていた。

「待ちました？」

「いや。まだ時間ではないし気にしなくていいよ。僕の元上司なんて遅刻が当たり前だったからね」

「それはどうかと思いますが（カカシさんのことかな）、それにしても、これからも夜間に訓練ですか？」

「たまにアカデミーを休んで、昼間も訓練することにはなるけど、基本は夜間だね」

「了解です」

今までは、アカデミーにて隠れながら鍛錬していただけに、堂々とアカデミーを休んで鍛錬に打ち込めるといふ条件は、白にとって魅力

的なものだった。その間のヒナタへの警護については、他の者にて行うとのこと、そこまでの頻度ではないようだ。

「その前に暗部での君の名前を決めておこうと思う」

「やっぱり変えないと駄目なんですか？」

「と言うわけで、候補を考えていた訳なんだけど、ヒミコなんてどうだい？」

「こちらの話を無視な上に、既に候補があるんですか。ちなみに何故女の名前なんですか？」

「別にそういう意図があるわけでは無くて、秘密の子供ということからヒミコって取ったんだ」

「それなら秘密の人ということから、ヒミトでもいいですよ？ い

つまでも子供な訳ではないんですし」

「……それもそうだね」

名前についてはかなりの時間を使って真剣に考えたのだろう。白の言葉により落胆しているのが、雰囲気によくわかった。

「ではそれで登録しておくけど、正式に暗部として1人で動くことになるのは、君に実力がついてからだ」

「それはその通りだと思えますし、そうでないと困ります」

「なので、君の実力を知りたいと思うから、まずはこの演習場で模擬戦をやらう」

「分かりました」

その返事をした瞬間に、瞬身の術にて距離をおき、小川の近くに移動し、霧隠れの術を使用する。

「なかなか早いね」

徐々に霧が濃くなっていく中、ヤマトは未だに元の位置から動く気は無いようで、余裕があるのが声からよく分かる。

（——水分身の術——）

霧にて辺りの視界が十分に効かなくなったところで、水分身を5体作りだし、水分身に攻撃を仕掛けさせている合間に、隠遁にて周囲へとトラップを仕掛けていく。

ほどなくして、水分身がやられたところへ、再度ヤマトから声が掛

けられた。

「この霧の中で相手の場所が分かるなんて大したものだね」

(どうやって防いでるんだ?)

ヤマトがいる場所は分かるのだが、この霧の中で防いだ方法が分からない。視覚だけでも共有しておくべきだったかと思っただが、仕掛けは十分に設置し終えたので、霧隠れの術を解除する。

「おや? もうかくれんぼはいいのかい?」

「意味が無いようなので」

霧が晴れたそこには、恐らく木遁にて作ったであろう格子状の壁と、ヤマトの分身体が存在していた。

(水遁は使う気は無いし、かといって今覚えているのは、ほとんどが身を守るためのものだから、攻撃って言ったら体術か忍具しかないんだよなあ……)

「今度はこちらから行かせてもらおうよ」

そう宣言すると、木遁の壁を解除し、一直線にこちらへと分身体が向かってきた。

「——土遁・土流城壁——」

ヤマトの術の効力により、地面が揺れたかと思うと、さながらドーム状のような形で、地面が壁のように聳え立ち、それが広範囲にわたって闘技場のように囲んでしまった。折角仕掛けたトラップのほとんどが意味を成さなくなってしまったのは言うまでもない。

「——風遁・大突破——」

その間にも、近付いてきていた分身へと風遁にて足止めを行う。1体ずつ相手取ろうとしたが、足止め出来たのはほんの僅かな間だけだったため、すぐに他の分身体も復帰しこちらへと向かってきた。

「——水遁・水障壁——」

水遁にて、ヤマトの他の分身が来るまでに、その内の1体と1対1になるよう囲み、接近戦にて挑むが、ほぼ体術の技量が互角な上に、他の分身体からの攻撃で簡単に水障壁は破られてしまった。破られた後には、分身体に周囲を囲まれていた拳句に、いつの間にか木遁によって、分身体と共に檻の中に居る状態だった。

「これで終わりかな」

「ちよつと大人げなくないですか？（木遁分身つて思ったより強いな）」

「今の實力だとギリギリ中忍レベルだね。その歳でそれだけやれば十分だと思っけど」

「中忍ギリギリと言われても、素直に喜べないんですが」

「忍術の速度は大したものだ。それに体術に関してもそれなりのようだし、鍛え甲斐がありそうでよかったよ」

「鍛錬は欠かさず行ってきましたから。主に自衛のために」

「既に自分の属性について知ってるようだからあれだけど、忍術については水遁と風遁を今後は重点的に鍛えていくよ。もちろん他にもやるけどね」

「そこに、医療忍術を追加して欲しいんですが」

「ここで更に、鍛錬の追加を言い出すとは思ってもみなかったヤマトは、逆に心配そうにこちらに確認してきた。

「それはいいけど、やれるのかい？」

「前に休みの日が欲しいと言ったのを聞いていたと思うんですけど、医療忍術とか他のことを覚える為の時間が欲しかったからなんですよ」

「そういうことだったのか。それなら紹介をするのはいいけど……医療忍術には向き不向きがあるから出来るとは限らないよ？」

「その辺りは心配しないでいいです。掌仙術なら既に使えますんで」

「なるほどね。では今週の休みからでもいいけるようにしておくよ」

「あつ。すみません。行くのはもしかしたら来週になるかもしれないですね」

「ここで、ネジとの約束を思い出し、行けないかもしれないことを伝えておくことにした。

「わかった。話をしておくから、相手が決まったら休み前までに連絡するよ」

「お願いします」

「と言うわけで今日のところは終わりとしよう。明日からはピンバシ

とやっていくからそのつもりで」

「鍛錬なら喜んで！任務はお断りですが」

「何か言ったかい？」

「何でもありません！それでは失礼します」

既に時刻はいつの間にか真夜中となっているため、急いでアパートへ向けて走っていった。

「あの歳で、あのレベルの忍術にチャクラ量。印スピードに至っては上忍クラス。戦闘に対してどうも実戦経験がありそうだけど、術自体は消極的な術ばかり。経歴はどこかの里の忍びの子供か……波の国って話からすると、親は霧隠れの里の忍びかな？ 彼は僕に監視されてるなんて思ってもみないんだろうけど……火影様も人が悪い」

その後ヤマトは、今日の報告のために火影の元へと行くのだった。

41 本気？

ネジとの約束であった休みの日。生憎天候は小雨であった。このような天候でもやるのだろうかと思いつつ、ネジならやりかねないと、着替えを準備し日向家へと向かった。

分家側の屋敷の前に到着すると、門前でネジが待っていた。

「来ないかと思ったが、来てくれて何よりだ」

「小雨とはいえ、この中で本当にやるの？」

「条件はどちらも一緒だ。それよりもさっさと始めよう。この時を待ってたんだ」

「待つほどのこともないと思うけどね」

ネジと共に庭の方へと向かい、縁側に荷物を置いて、いつも組み手を行っている場所にて双方定位置に立つ。

「本気で来ないとすぐに終わるからな」

「本気でいっていいんだね？」

「もちろんだ」

「——水遁・霧隠れの術——」

ネジが言葉を言い終えると共に、後方へと飛びながら術を使用する。小雨の影響により、すぐさま辺りは霧により視界が塞がっていた。

「白眼の前では無駄だ！」

「一瞬で終わらせるよ！」

（秘術・魔鏡氷晶）

霧の中、ネジから一定距離を置いて魔鏡氷晶を配置する。ネジは完全に受けて立つつもりのように、その場から動かず、迎撃する気のない。これは好都合と、左手にて印を結び、高速移動と共にネジの身体へと拳を叩き込んでいく。

「がはっ!？」

ネジは移動しようとするが、白はその場から逃がすつもりはなく。連続にて攻撃を叩き込んでいき、ネジが倒れたところで術を解除した。

(霧隠れの術で氷遁の存在は隠せたはずだし、ネジにはただの高速体術に見えたはず。一応これが今の俺の本気なんだし、本望でしょ)

「ネジ立てる?」

「な……なんとか……な……」

よろよろと立ち上がるネジに肩を貸して、縁側へと運ぶ。ネジは身体にかなりの痛みが走るのか、縁側に着くなり横になってしまった。しばらく休んだ後にネジは落ち着いたのか、先ほどのことについて聞いてきた。

「さっきの……あれはなんだ?」

「本気でいくつて言ったじゃないか。ネジに拳を叩き込んだせいで、こっちも被害甚大。身体が出来上がってないのに、高速移動時に攻撃は厳しいね (今後は忍具で攻撃するようにしよう)」

そう言つて、ネジへと右手首を見せる。高速移動に伴う攻撃は、自分の肉体で攻撃するにはリスクが高すぎた。拳を叩き込むたびに、手首への違和感が徐々に大きくなり、終わった後に確認すると青黒く腫れていたのである。

「無理をしすぎだ」

「いやいや。本気出せっていったのはそっちでしょ?」

「病院には付き添う」

「この程度で行くつもりは無いよ (自分で治すから)」

「しかしだな」

「自分の方を心配した方がよくない? 手応え的にかんりのものだと思うけど?」

「ああ。流石にここまでとは思ってなかったからな」

「ネジが病院に行つて来たら?」

「これくらいなら問題ない」

「それこそ、こつちだつて問題ないよ。取り敢えず着替えてから帰るよ。午後から行きたいところもあるからね」

「ああ。しかし、ここまで差があるとは思わなかった……。まさか何もできないままやられるなんてな……」

ネジは、ここまで差があるとは思っていなかったのか、身体の痛

みもあつて、顔をしかめたままだった。

「純粹に体術だけなら負けてたかもね」

「瞬身の術か、なにかだろう？見極められると思ったが、俺もまだまだ未熟だということだな」

「まあ、体術も極めたら凄いと云うことで……。それじゃあ着替えてくるよ」

「俺は、しばらくここで休んでいく。帰る時にでも寄ってくれ」

呼吸などは落ち着いたいるようだが、未だに身体は痛みで動かないようで、ネジはその場に留まることにしたようだ。ただ、着替え終えてネジのところへ行っても、未だに横たわったままだったため、ネジを病院へと無理やり連れて行き、その後、ヤマトに手配してもらった医療忍者の元へと向かった。

その医療忍者は、病院ではなく、医療に関する研究所の方に配属された人だった。医療忍者に会う前に、右手首の状態を治しておく。

「お忙しいところすいませんが、よろしくお願いします」

「構いませんよ。準備は出来ていますので、こちらへ」

紹介された医療忍者は、白一色の服を着ており、頭にまで髪が垂れ下がらないようにするためだろうが、髪全体を覆うような帽子を被っていた。その医療忍者について行き、案内された部屋へと入ると、部屋の中央に台座があり、その上に巻物が置かれていた。その巻物の上に、医療忍者が魚を乗せる。

「適性はあるということでお聞きしていますが、一応こちらとしても確認したいので、見せていただきます」

「分かりました」

「方法は簡単で、その巻物の手と書かれている部分に、両手を一度置き、その後両手にチャクラを集中させて中央に置かれている魚に重ね、魚の細胞を活性化させて、新鮮な状態までにもっていくことです」

これについては、今までのやり方と違うために、始めは少々手間取ったが、無事に魚を新鮮な状態まで持っていくことが出来た。

「素質は申し分ないようです。では、他のことを覚えて行ってもらいましょう。ここは医療に関する研究所なので、技術を学ぶには良いと

「ここですからね」

「私に貴重な時間を割いてもらってもいいのですか？」

「医療忍者を育てると言うことは、里にとつてとても有益なのです。特に素質があるものであれば、手を貸すのは当然と言えますよ」

次に向かったのは、医療に関する知識が積まれた書庫だった。

「ここで、肉体に関する知識と、医療に関する知識を学んでもらいます。ただ、すいませんがここからは、自分で学んでいただいで、分からない場所があれば、まとめて聞きに来るようにしてください。私は隣の部屋にいますので」

「分かりました」

医療忍者は、そう言うのと部屋を後にした。白は、まずどのような本があるかを見ていく。

（こちらは未だに研究中のものか……。んでこつちが既に完成したもの……。まずは完成したものから見ていきますかね）

自身のチャクラを使用したチャクラメスや、毒の抜き方などが書かれてはいた。チャクラメスに関しては試すことが出来たのだが、毒の抜き方については、どうしようもないので、やり方のみを覚えておく。肉体欠損による修復術も載ってはいたが、大規模な術式な上に大量のチャクラと時間が必要になっていた為、早々に諦めることとした。

（取り敢えず、今は自分だけで出来ることを覚えて行こう）

肉体の構造については、書店にて置いてあった本の中身とそれほど変わることが無く、変わっていたことと言えば、チャクラが密接に絡みついているというものだった。そのチャクラの神経についても、人によつて場所が少し違うので、参考程度にしかならなかった。

そのようにして、平日の昼間はアカデミー。夜間はヤマトとの訓練。休みの日には研究所へ行き、医療忍術と目まぐるしく活動を行っていた。今のところ、任務についての同伴の要請がないので救いとも言えるが、一楽については、手鏡や片手に魔鏡水晶を持っておくという行為が手間であったので、メガネを掛けて、片方のレンズを他が見えるようにしている。

これにより、片目の視覚は制限されるが、元々気配察知は得意なの

で、通常生活にてそれほど困ることは無い。あるとすれば戦闘の際に、後手に回る可能性があるくらいだろう。

月日は経ち、アカデミー3年最後の試験を行うことになった。今回も変化の術と言うことで、火影に変化するというものだった。以前は先生という目の前の人物に変化すれば良かったが、今回はその人物が居ないので、難易度的には上がっているだろう。

この中で有利そうなのは、ダントツでナルトであると言ってもいい。定期的にナルトの様子を見るために、火影自らがナルトに会いに来ているため、見る機会がかなり多いはずだ。

イルカは一枚の写真を見せて、「後は各自のイメージを基に変化すること」と言つて、名簿順に試験をしていく。大体の生徒は以前と違い、それなりに火影に似ている。そのような中、ナルトだけは何度変化しても似ていなかった。後姿だけならば似ていると言えないこともないが、真正面から見ると、明らかに偽物であると分かってしまう。

ナルトも以前と比べれば、遥かに上達しているのは分かるのだが、如何せんわざとやっているのではないかと思わせる変化に、イルカはもう一度やってみるようにつたが、結局結果が変わることは無かった。おそらくは、また成績が一番下となることは間違いないだろう。

アカデミーも4年に進級し、授業内容もそれ相応なものとなってきた。今まではアカデミー内での授業がほとんどだったが、アカデミーから少し遠方にて行うことが増えてきたのである。

内容としては、場所の把握をするためだと思われるが、演習場内にいる先生たちを探すというものだった。最初はただ立って待っているだけだったのだが、それが段々と難易度を増していき、今では隠れている先生たちを見つけ出すところまできている。

なので、机上よりも実習がメインとなることが増えたのは間違いない。これからは更に、実践メインの授業が増えていくことだろう。

夜間の鍛錬についても、ビシバシやると言われただけに、忍術メインではあるが水遁系をメイン、風遁をサブと言った形で攻撃用の術式を習っていた。攻撃系の術式に関しては、さすがに自身のチャクラだ

けでは、威力が相手に届く頃には弱いものとなってしまいうために、ヤマトの術で水を周囲に作ってもらい、そこで訓練を行っている。

「それなりに形にはなってきたようだね」

「威力と精度がまだまだですけどね」

「確かに水龍弾は威力が、水龍鞭については精度が足りない」

「ですよね」

「ただ、この術は上忍レベルだから、今の時点で使えるだけでも大したものだよ」

「そうですか？ 水が無いと使えない上に、使いこなせていない時点で、駄目だと思ってるんですけど」

白としては、水の無い場所でも使えるレベルにまでもっていきたいので、結果的に不満なのだが、ヤマトとしてはこの段階でも十分のようで、今の成果に満足しているようだ。風遁についても攻撃系を1つ覚えたのだが、これについては威力はともかく、便利であるため結構な頻度で使用している。氷遁については、ばれないように使用しているため、あまり進展は無い。敢えて言うなら、剣や千本を作れるようになったくらいだろう。

「卑屈になることはないさ。それにしても、物覚えがよくて助かるよ。僕が任務の時にもサボっている様子は無いし、医療忍術に関しても、手が掛からないと聞いているからね。この調子なら、近々任務に同行させてもいいかもしれない」

「出来るだけ安全な任務でお願いしますよ」

「流石に最初から、そんなにきついものは無いとは思うけど、こればかりはわからないな」

暗部の任務は突発的なものが多いため、ヤマトが度々任務にて夜間の訓練が無い時はあるが、その時は霧隠れの術を使用し、水分身相手に鍛錬を行っていた。再不斬にサイレントキリングのやり方を教わろうにも、連絡がつかないので、独自に真似てやっているのが現状である。

今のところ、ヤマトの木分身2体までなら、同時に相手取り、勝てるレベルになっていることから、強くなっている実感はあったが、ヤ

マト本体の実力はかなりのもので、木遁を使われると簡単に負けてしまふレベルである。なので、任務に関しての同伴については、安全なものであることの方がいいに決まってはいるが、ある程度の危険であつても、安心感があるのは確かだつた。

(いざとなつたら、秘術を駆使して逃げる！)

今では片手印だけで氷遁秘術を発動出来、その範囲も知覚できる場所まで移動出来るだけに、瞬身の術よりも遥かに早いうえに使い勝手がいい。問題はチャクラの消費量が多いことだが、以前の使用してすぐに倒れてしまつた時と比べて、チャクラ量も上がつており、連続で使用しても問題は無かつた。

「任務と言うのはどこまで行くことになるんですか？」

「そうだね。里内での調査だつたり、他国への追い忍の追跡だつたり色々かな」

「やっぱり他国もあるんですか……」

「それは当然だね。特に同盟を結んでいる里との、極秘のやり取りなんかある時はよく駆り出されるよ」

「現状水分身でバイトしてるんですが、流石に他国となると維持できません。どうしたらいいですかね？」

「任務がどのくらいの期間続くか分からないから、その間休むか、もしくは辞めるしかないだろうね」

「やっぱりそうなりますか……」

「取り敢えず、今日はここまでにしよう」

「はい。それではお先に帰ります」

本日分の訓練を終えて、アパートへと戻つた。一楽については、恩もあるし、情報収集の場にも役立つているので、辞めるという選択肢はない。しかし、水分身の最大範囲が里内であることから、他国に出た時点で、水分身は勝手に消えてしまふ。事情を正直に一楽のおやじに話すわけにもいかず、どうしようかと模索するのだった。

4 2 任務？

いつまでも、ウジウジ悩んではいられないと、一樂の店主であるテウチにある程度の事情を説明することにした。

内容的には、親が経営するアパートに住むことになった、と言うものと、それに伴い親の手伝いをしないとイケないので、突発的に店を休まねばならないと言うことで伝えた。

親の経営と言うより、暗部又は火影の金でアパートに住んでおり、その手伝い——もとい任務をしないとイケないと言うのは、一応合っていないもない。

テウチは、今まで放っておいた親が、掌を返したような態度に怒ってくれていた。しかし、親がこちらを心配して言ってくれたことなので、無碍にはできないのと、親の体調があまり良くない、ということなどを伝えると、逆に「そういうことは早く言え！」と頭を軽くだが叩かれ「親を大事にしてやんな」と言ってきた。

テウチが良い人なだけに、嘘をつくのは心苦しいが、任務の関係上そうせざるを得ないだろう。ただ、新しいメニューであるところつしようゆラーメンが出来上がり、店に来るお客さんが増えてきたので、ここで白が抜けると、おやじ1人で店を回さないといけないので、新しくバイトを雇った方が良いのは確かだった。

その事を相談すると、おやじはあっさりと解決策を言ってきた。

「元々お前さんが来たところにバイトを雇うつもりだったんだ」

「でも突発的に休むから、そんな急に来れるような人なんていんの？」

「ああ。俺の孫娘だ」

「えっ!? おやじさん結婚してたの!？」

「女房には先に逝かれちゃったが、子供はいるぞ」

白は、おやじの言葉に一瞬啞然としてしまう。ずっと独り身だと思っていたのだ。部屋の中には他の人の居たような跡など無く、また写真なども飾られていなかったためでもある。

「ここに来て一度たりとも会ったことないんだけど?」

「たまたま息子が来てたな」

「どの人かわからないけど、そんな会話全くなかったよね？」

「元氣な姿を見れば十分つてもんよ」

「そんなもんなのかなあ……」

「それに、何度か会いには行ってるしな」

「ああ。たまにある臨時休業はそういうことね」

「そういうことつた」

「納得したよ」

その後の話し合いの結果、主に孫娘の方に店へ来てもらうことになり、白は来れるときに来たらいいと言うことで、話はまとまった。孫娘の年齢は十代後半らしく、器量もいいとのこと。店の事は心配せず、親の心配をしろと念押しされてしまったくらいである。

しかし、当初どうなることかと思っただけだったが、辞めなくていいえに、来れる時に来たらいいと言うのは、非常に白としても助かる内容だった。

一楽の件が片付き、安心して日々を過ごしていたが、そんな日々が続くはずもなく、早速ヤマトより初任務が伝えられた。

「任務を命じられた。場所は砂隠れの里だ」

「もしかして、戦闘になるとか言わないですよね？」

「そんな大層なことじゃないよ。中忍試験の内容についての巻物を届けるだけさ」

「それを暗部が行う理由が分からないんですけど。忍鳥に任せればよくないですか？」

中忍試験は例年行われており、内容に関してそれほど変わり映えはない。そのため、忍鳥などに巻物を届けさせるか、中忍以上の者に任務として届けさせるのが一般的であった。

「はつきり言っつて、君のための任務みたいなものだね」

「どういうことですか？」

「今のうちに火の国や砂の国を見ておけつてことだよ。暗部として動き始めたら、自国だけではなく、他国の地理についても知っておかないと動きにくいからね」

「確かに、小さい頃に拾われてから、木の葉の里から出たことないですね」

ヤマトの説明は納得のできるものだった。早さを優先するような事態になった際に、地図を見ながら行くなど、行動が遅くなって仕方がない。それならば、事前に知ることによって、その無駄な行動が無くなり、より早く動けるようになるだろう。

「と言うわけだけど、暗部としてではなく、通常の任務として行くことになるから、君は砂隠れの里に着いたら、どこかの店か宿で待機してもらおうよ。下忍でも無いわけだし」

「観光しててもいいですか？」

「任務だって聞いてたかい？」

「言い方が悪かったです。街の調査をしてもいいですか？」

「言い直しても駄目だ。指定した店で待機してもらうことに決めた」

「横暴すぎませんか？」

「これは命令だよ。まあ、お店くらいは選ばせてあげるよ。余程変なところでなければだけどね。それと砂隠れの里内については、同盟国とはいえ、他国の忍びが無暗に動くと非常にまずいことになりかねない」

「仮初の同盟ってことですね……。まあ、待機するところに、どんな店があるのか楽しみにしときます」

「出発は明後日だから、アカデミーの方には僕の方から言っておこう」

「お願いします。それと、どれくらい日にち掛かりますかね」

「往復で10日もみれば十分だと思うよ」

「意外と掛かるもんですね」

「地理を覚えるためにゆっくり歩いていくからね。ある意味、君の言った観光と変わらないさ」

この時は、観光しながらいけるし、気が楽だと思っていたが、実際に任務になってから間違いだと思付かされる。

任務前に、忍者アカデミーの同じ教室の女子生徒たちに、家の手伝いのため休むことを伝えて回り、一楽にもしばらく来れないと店のおやじに連絡をしておいた。

ヒナタに関しては、自分から他の輪に入ることは無いが、話を振られれば、普通に会話が出るレベルには達していたので、それほど心配はしていない。アカデミー内での警護と言われても、先生たちがいる現状では、警護とは名ばかりのものであると分かるだけに、ただの意識付けであることは明白だった。

初任務当日。快晴であり、日がこれでもかと降り注いでいた。集場所である、木の葉の里の入口にいるヤマトの元へと向かうと、白が挨拶を行う前に、ヤマトの方から開口一番に声を掛けられた。

「そんな恰好で行く気かい？」

「当たり前じゃないですか」

「雨は降ってないよ？」

「これは日傘と言うんです」

「……その恰好……物凄く怪しいよ」

フード付き長袖の服に、長ズボン。そこにメガネを掛けており、片側は完全に曇っているようになっていたので、片目しか窺えない。そこへ雨も降っていないのに傘まで持っており、背にはリュックということも目立つ格好だった。

「日傘とリュック以外はこの季節の標準的な服ですよ。まあメガネは外してもいいんですけどね。それと、あまり夏って好きではないんですよね……」

「その恰好では目立って仕方ない」

「分かりました。では日傘を諦めますよ……」

「日傘というのは初めて聞いたけど、それは置いておくとしても、まず、その服装が怪しすぎる。相手に無用な警戒をさせてしまう可能性がある」

「アカデミーの同じ教室に、似たような恰好をしてる子がいるんですが……」

「その子が、今回の任務に行くわけじゃない」

「しかし、こういった服しか持ってません。後は訓練でよく使用している、頂いた忍び用の服くらいなんです？」

「はあ。仕方ない。先に服を買いに行こう」

「ええ〜……。このままでいいじゃないですか」

「駄目だ。戻るよ」

ヤマトに腕を掴まれて、近くの服屋へと連れて行かれた。

「フードの変わりは帽子にするとして、やつぱり長袖なのかい？」

「それはもちろんですよ。本当は半袖が良いんですけど、日差しがきついと肌に不快感があるんで、こればかりは仕方ないです」

「分かった。では待ってるから買ってくるといい」

「えっ!? 買ってくれるんじゃないんですか？」

「君が着る服だろう？」

「これって一応任務なわけですよ？ 服装を変えろと言う命令ですよ？ その辺り上司としてどうなんでしょう？」

「いや。しかし。君のその格好は怪しすぎると思うんだけど……」

白の言葉にヤマトは、少し怯み、言葉尻が自信なさげになってきていた。

「残念です。服装を変えろと言っておきながら、服屋の前まで無理やり連れてきて、無責任にも後は勝手にしろだなんて……。見捨てるんですね？」

「いや。見捨てるとかそんなことじゃなくてだね」

ヤマトは慌てたように言い訳をしようとしていたが、この時、思いもよらなかったのは、周囲の人が白の言葉を聞いてヒソヒソと話し始めたのである。

「彼氏が無理やりあんな恰好させてるみたいよ」「あのセンスは酷いわね」「最近の男は無責任みたい」「彼女が可哀想ね」「あんな男に無理やりですって」「見捨てて……」「相手は小さな子」「変態ね」

話の内容が白たちへと聞こえて来た時には、2人揃ってアイコンタクトを交わすと、すぐに服屋へと入っていった。そして店に入って開口一番――

「精神的にもう駄目です。任務遂行に支障が出るレベルの攻撃を受けました」

「君はまだしも、僕の扱いの方が酷かったよ……。今後まともに、この

道を通ることが出来ない……」

白は、長年同じような服を着ているせいか、今の服を気に入っており、センスが酷いと言われたことと、女と思われたこと、それに加えて小さいなどの言葉で、精神的なダメージを受けていた。

ヤマトに至っては、この近辺を通るたびに、さきほどの奥様たちに噂されることだろう。

先にシヨックから復帰した白は、ヤマトが店の扉の横にて座り込んで、ぶつぶつと何かを言っている間に服を選ぶことにした。しかし、センスが無いと言われた手前、一通り見たものの自信が持てなかつたので、結局のところは、店の人に旅人用の服を選んでもらっていた。

「御代はあそこに居る人から貰ってください」

「はい。一緒に来られた方ですね。まいどあり！」

「ヤマトさん。先に里の入口に行っておきますね」

「くなぜ僕がこんな目に」

ヤマトは、白の言葉が聞こえないのか、蹲ったままだったので、店主に伝言と御代請求を任せて、先に里の入口へと向かった。新しく着ているのは、浴衣のような恰好で、袖は長く、手の甲まで隠されており、足の方に関しても足首近くまでの長さがある。これにメガネを掛けてリュックを片手に門まで来たのだが、「逆に目立つのでは？」と慣れないせいもあって、落ち着きなくソワソワとして、ヤマトが来るのを待っていた。

待つことしばらくして、ヤマトがこちらへと走ってくるのが見えた。

「そんなに急いで来なくても逃げたりしませんよ」

「そんなことじゃなくてだね！」

「さあ。準備も出来たし行きましょう」

「あのね。僕があの後どんな目にあつたと思ってるの!？」

「興味が無いです。それよりも任務が大事でしょう?」

「こんな時にそれを出すのかい……。はあ……」

ヤマトはガックリと肩を落として項垂れている。

「大事な部下に、服を買ってあげただけじゃないですか」

「大事な部下って君が言う言葉じゃないよね？」

「さあ、お喋りはここまでです。出発時刻は過ぎてるので行きましよう」

「僕が一応上司なんだけど」

「細かいことを気にしない気にしない」

未だにぶつぶつ言っているヤマトと共に木の葉の里を後にした。

4 3 観光？

1日目は昼過ぎに木の葉の里を出発したせいもあり、木の葉の里から近くにある歓楽街で宿をとることになった。

「今日はここまでにしておこう」

「こんなによつくりでいいんですか？」

「最初に言った通り、君のための任務でもあるんだ。一通り街を見て回ってくるといい」

「ああ。それも含んでるんですね。了解です。適当に回ってきます」

「訓練の代わりであることを覚えておいてくれ」

「着替えた方が良さかね？」

「そうだね。夜間に動くのであればその方が良いだろう。ただし、隠遁の術にて移動すること。大丈夫だとは思うけど、余計なトラブルは起こさないでくれよ」

「分かってますよ」

宿にて食事を摂り、着替えてから歓楽街を回っていく。歓楽街と言うだけあって、色々な遊び場や酒場、果てや賭博場まで揃っていた。

歓楽街は、木の葉の里に比べれば、規模として小さいが、その分密集していて迷路のように入り組んだ形になっている。そんな中を屋根伝いに一通り見て回った後に、今度は店の中へと変化の術を使用し入っていく。

ゲームセンターやスロット店、賭博場などを冷やかし交じりで見学していく。

ゲームセンターと言っても、前世のように豊富な種類がある訳でもなかった。スロット店では、落ちていたメダルを拾ってやってみたが、当たるはずもなく、早々に切り上げたのは言うまでもない。賭博場に至っては、スロット店でこの手の運は全くないと悟っただけに、どのようなものかを見ただけで終わった。

（所持金を使わないで正解だったな。ギャンブル運が全くないことだけはよくわかった）

1人で遊んで面白いわけでもなく、ギャンブルにも運が無いと分

かった為、店をある程度回ってからは、早々に宿屋へと帰った。

「戻りました」

「意外に早かったね」

「もつと面白いもんだと思ったんですけどね」

「ここは遊べるところが色々あつてかなり人気なんだけど」

「訓練の方が良いということがよくわかつたんで、今後はさつきと進みましょう」

「行きは昼間、帰りは夜間のつもりだから、そういうわけにはいかないんだよね」

「そうですね……（今後は終わったら鍛錬でもするかな）」

その後も、街を巡りながらの移動を続け、砂の国に入ってからしばらくして、今回の任務の一番辛い状況に追い込まれていた。

「もう駄目です。引き返しましょう」

「駄目だ」

「このままではやられてしまいますー！」

「そう簡単にやられはしないよ」

白は、汗だくになりながらヤマトへと訴えかけるも、ヤマトはどこ吹く風と言わんばかりに、白の提案を却下する。

「せめて、どこかで休憩を」

「さつきからそればかりだね」

「だって暑すぎるんですよ！ それにこの風！」

砂の国に入ってから、砂隠れの里に近付くにつれて、木々が無くなり、周囲の光景が石や砂へと変わっていった。それにより、気温が上がっている。その上、風が少々吹いてはいるが、その風には砂が混じっており、更なる不快感を白に与えていた。

流石に、ここまでの事を予想していなかっただけに、夏の砂の国への立ち入りは、楽なんてものではなく、とても危険なものであると認識していた。

岩陰にて休みながらも、やっとの思いで砂隠れの里への入口へと到着する。

「あの隙間を通った先が砂隠れの里だよ」

「早く……涼しいところへ行きましよう……。ちよつと、熱中症と脱水症状気味なんで……」

「かなり消耗してるのはよくわかるよ」

途中途中で休んではいたが、それで周囲の気温が下がる訳でもなく、水遁で水を出してもすぐに温かくなり、風遁などは周りの砂を叩きつけられるという最悪な状況だった。水遁を隠している以上、どうすることも出来ず、消耗したままここまで来たのである。

「そこで止まれ！」

砂隠れの里への通路を通る前に、砂隠れの忍びより声を掛けられ、通行証の提示を求められる。

「木の葉の里の者か？」

「ええ」

「この時期と言うとアレのことか……通っていいぞ」

「それでは」

「すいません。もう無理です——」

通路の手前にて止められ、日差しのアまりの強さに、白はそこで意識を失った。白が倒れる前にヤマトが慌てて支え、倒れるのを防ぐ。

「おい。大丈夫なのか？」

「どうも、この暑さにやられてしまったようですね」

「慣れない者には大変だと聞いていたが、ここまで酷いとはな」

「ええ。倒れるとは思いませんでした」

「取り敢えず、医療設備のあるところへ案内しよう」

「助かります」

ヤマトは白を背負い、砂の忍びに案内されて砂隠れの里へと入っていった。

白が目を覚ましたのは夕暮れになってからだだった。部屋の壁は石で出来ており、隅の方で水が流れていた。その水で風の入れ替えでもしているのだろう。部屋の中は今までの暑さが全くない。

「……何処だ？ 最後どうなったっけ？ 確か、砂隠れの里に着いたのは覚えてるんだけど、そこから記憶が無いな……」

思い出そうと考え込んでいると、ヤマトが部屋へと入ってきた。

「全く。心配したよ」

「ここは何処です?」

「砂隠れの里の病院だよ。今日……というより明日の夕暮れまで休んで、今度は夜間に移動だ」

「お手数おかけします」

「ここまで耐性がないとは思わなかったね」

「こつちも倒れたのは初めてですよ。砂の国恐るべし」

「今後はこれも課題としようか」

「そんな拷問酷すぎます!」

「慣れてもらわないとね」

ヤマトを見ても、笑顔でニコニコとしているため、本気で言っているのかいないのか判断がつきにくかった。そんなことはお構いなしとばかりに話を続けていく。

「さて、君はここで明日の夕暮れまで待機だ」

「仕方ないですね」

「僕は美味しい物でも食べてくるよ」

「嫌がらせですか?」

「他意は無いよ。それではゆっくりと病院食でも食べててね。くれぐれも大人しくしているように」

「はあ……」

それから、大人しく横になっていたが、それまで寝ていただけに眠気がくることはなかった。あまりの暇さ加減に、せっかく砂隠れの里に来たのだからと、周囲の気配を探り、誰も居ないことを確認して、水分身を作り出す。そして、変化させて砂隠れの里内を散策させに行かせた。後は、メガネを装着してリアルタイムで里内の様子を窺うだけである。

本体は、ヤマトに言われた通りに、ここで待機して大人しくしているので、言われたことは一応守っている。もし、突然帰って来られても対応できるだろう。

砂隠れの里の建物は、石作りばかりで、木で出来たような建物がほとんどない。里内でも、時折風が吹き砂が舞い上がっているのだが、

住民が気にした様子もなく、たまに目に入った人が、目を擦っているくらいだった。

そんなことで、里内を散策していたのだが、何が怪しかったのか、砂の忍びに呼び止められてしまった。

「その者止まれ！」

言葉を発せられた方へ振り返ると、2人の忍びがいるのが目に入る。

「何か？」

「この先は風影様の居られるところだ。何用で来た？」

どうやら知らない間に、一般人が来てはならないところへと来てしまっていたようだった。2人の忍びは明らかにこちらを警戒しているのが分かる。穏便に済ませるべく、話をすることとした。

「この里には来たばかりで、色々と見て回っていたのです。この先に風影様が居られるとは知りませんでした。どうやら近付いては駄目なようなので戻ります」

「その前に色々と聞きたいことがあるので、ついてきてもらおうぞ」

「……分かりました」

怪しいとは思われても、忍びかどうかまで判断できないようで、拘束こそされなかったが、前後に挟むような形で連行されていた。

(このままだと、ちよつとまずいかな?)

連行されている途中に、少し細い道を通る機会があったので、その脇道へと入り込みすぐさま術を解く。

ここまで大人しくついてきていた人物が、いきなり横へと飛んだことで意表を突かれたのか、前を歩く忍びは仕方ないにしても、後ろの忍びは一瞬の硬直後、後を追うもそこには誰も居なかった。

(術は解いたけど、あの場に水が残る以上、忍びだと思われたらどうなるか……。ヤマトさんには、バレないようにしよう)

その後しばらく経ってから、ヤマトが食事を終えて戻ってくると、手には土産と思わしきものを持っていた。袋には饅頭の文字が見える。

「大人しく待っていたようだね。お土産を買ってきたよ」

「いい匂いしてますね」

「ここでは有名らしい。それにしても、砂隠れの里の内で何かあったようだね」

白は、ヤマトから袋を受け取り、中身の饅頭に伸ばしていた手をピタリと止めてヤマトを見る。

「何かあったんですか？（もしかして大事になってる?）」

「どうも砂の暗部が動いてるみたいだ」

「どこも暗部は忙しそうですね」

「まあ。僕たちは関わり合いにならない方がいいさ。関係ないだろうからね」

「饅頭いただきます（きつと、きつきの件とは別件に違いない。そう思っておこう）」

そのまま饅頭を食べていたが、ヤマトは宿の方へと戻るようで、明日また来ると言い残すで行ってしまった。白としては、暇ではあったが、砂の暗部が動いているとなれば、下手なこととはできないため、仕方なく次の日まで待つことになる。

次の日、朝日が入るまでに気配を探っていたが、病院であるにも関わらず、数名ほどこちらの様子を確認しに来る者がいた。里へ最近入った者についても、把握するために見に来ているのだろう。

朝食後にヤマトがやってきた。

「全くひどい目にあつたよ」

「どうかしたんですか?」

「君と別れた後に、砂の方から呼び出しを受けてね。昨日怪しい者が居たそうなんだが、そのことについて色々と聞かれたよ。知らないと言っても、この里に入った時期が悪かったせいかなかなか信じてもらえないしで、大変だった」

「任務については向こうも知ってるんですよ?」

「もちろん知ってはいるけど、それは見逃す理由にはならないね。この機会について思われたら何でも一緒だよ。小一時間ほどで済みはしたけど、あまり気分のいいものではないね」

「お疲れ様でした（ほんと申し訳ないです。ヤマトさん）」
「全くだよ」

「昨日、この部屋の近くにも数名来たんですが、その関係ですかね？」
「恐らくそうだろう。たぶん診断結果を見て、様子見だけに留めたんじゃないかな？」

「そういうことですか」

「どうやら、昨日の暗部の話は、白の水分身の事のようだ。その影響でヤマトにとぼっちりがいったようだ。しかし、ここで白が犯人だと知られると、更に状況が悪化してしまうのは間違いない。そこで、白はこのまま話さずに砂隠れの里を出ることを決めた。」

「夕暮れまで時間があるので、何かまた食べ物お願いします」

「少し厚かましくないかい？」

「この暑い中、外に出てまた倒れるということですか……」

頭を垂れて溜息を漏らし上目づかいにヤマトを見上げる。

「こつちが溜息をつく方だと思うけど、分かったよ。昼食後にも何か持って来よう」

「よろしくお願いします」

この日は、体調を万全にすることに努め、夕暮れ時には十分に元に戻すことが出来た。夕暮れと言っても暑さはまだまだ残ってはいるが、直射日光がないだけ遥かにマシなものであった。帰りの準備についてはヤマトができてしまっており、白がすることは特になく、何のためか、ここまで来たのかが分からなくなるほどだった。

「砂隠れの里を見て回ったかったなあ」

「その前に、君の弱点を克服しておこうか」

「弱点ではなく体質です」

「それは余計悪いよ。まあパンフレットを見て回った気であることだね」

昼食後の土産と一緒に、ヤマトは砂隠れの里の簡易マップを持ってきてくれていたが、実際に見て回りたいというのが白の本音である。

夕暮れ時に出ることについては、事前に言っていたのか、特に怪しまれることなく里外へと出ることが出来た。話を聞いてみると、日

中の移動に関して白の体調に影響が出るために、夕暮れ時に出発するということで話していたそうだ。ヤマトに感謝された時、白としては微妙なものだった。

「さて、後は帰るだけだ」

「早く砂の国を脱出しましょう」

「それだとまるで僕たちが逃亡者みたいじゃないか」

「それは被害妄想です。暑いから嫌だという以外の他意は、全く！

これっぽっちもありませんよ！」

「そんな力説しなくてもいいよ。確かに日中は暑いからね。それに、道は来る時に十分見れたから、帰りについては急いでも問題ないよ」

ヤマトからの許可が出たことで、急いで砂の国から出るために全力で駆けていた。急がないと、太陽という名の悪魔が顔を見せてしまう。この時ばかりは、ヤマトを置き去りにして、太陽が出るまでの間に出来る限り駆けて行く。

それでも、なぜか見失わずに追いついてくるヤマトに感心しながら、2日後には木の葉の里に辿り着いた。辿り着いた時には、安堵と疲れのために、アカデミーへの申請した残りの日で休養をとったのは言うまでもない。

44 点穴？

季節は夏から秋に変わり、もうすぐアカデミーは秋休みに入る。白にとつての辛い時期が過ぎ去ったところだ。そんな折に、珍しくヒナタから相談を受けた。

「白ちよつといい?」

「何?」

「今度の秋休みなんだけど」

「うん?」

「妹のハナビちゃんと試合をすることになったの」

「試合って言うのと組手だよな?」

「そうなんだけど、その試合で今後の事を決めるから、お互い全力で行うようにって……。全力って言われても、今までもそうしてただけど……。どうすればいいのかな?」

ヒナタはヒアシの言葉に困惑しているようだが、今後の事という言葉で白には理解できてしまっていた。

(まさかこの時期とは思ってなかった。そう言えばそんなイベントがあったけど、まだ先だと思ってたな……)

今更慌てても、出来ることが少ないことを理解してしまう。秋休みに入るまで日数もなく、今から鍛えたところで付け焼刃にしかならない。今出来ることを頭に思い浮かべて、直ぐに実行へと移すべく、試合を行う日を確認する。

「それはいつやるの?」

「えっと秋休みに入って直ぐだけど……。?」

「もう日が無い!」

「えっと。どうしたの?そんなに慌てて」

「逆に聞きたいよ。なんでヒナタはそんなに落ち着いてるの?」

「今後の鍛錬が変わるだけじゃないの? 最近ハナビちゃんとの組手で、引き分けが多くなってきたから」

ヒナタは、ヒアシの意図を違う風に捉えていることが分かり、白としては顔を引き攣らせてしまっていた。

「昼休みに屋上いくよ！」

「えっ？」

（ヒナタが全力を出して互角ということは、相手が全力を出した場合、負ける可能性が……）

アカデミーに入ってからというもの、ヒナタの実力がどれほど上がっているかが、ほとんど分からないのと、ハナビの実力が完全に未知数なため、ヒナタの実力を調べたうえで作戦を練ることにした。

昼休みに屋上へとヒナタを連れて行く。屋上には誰も居なかったが、後続が来ては面倒であるため階段の扉を閉鎖しておく。無理やり開けようと思えば開けられるが、無理に通ってくるような生徒は居ないだろう。屋上に用があると言うのは早々あるものではない。

一応、目立ちにくい場所を選び、ヒナタと一定距離をとる。

「今の實力を見せてもらうよ。先に攻撃してきて。もちろん柔拳と白眼を使用して」

「え？でもそれだと、もしも当たった時危ないよ」

「対策は出来てるから遠慮はいらない」

「……そこまで言うなら行くからね」

ヒナタの攻撃は以前よりも速度は上がってはいたが、身体の成長分であると考えると、成長しているとは言いがたい。しかも、攻撃に関しては、素直なせいも単調であるため分かりやすかった。

（これは柔拳対策を使うまでもないか……）

医療忍術を学んでいる時に、色々と工夫を凝らした結果、あることが出来るようになったのだが、ヒナタとの実力差があまりにも開いているので、使う必要性がなかった。

「ここまでいいよ」

「やっぱり白は強いね」

「次は防御の方を見るよ。今回は昔とは違って、寸止めと言うより軽く当てるからね」

「うん」

再度ヒナタから一定距離を置いて、一気に距離を詰める。始めは様子見でゆっくりと攻撃していき、対応できているのを確認しながら

徐々に速度を上げていく。

ヒナタは防御の方を、あれからも重点的に鍛えていたのか、攻撃の方はさっぱりだったが、防御の方はかなり成長していた。

「大体わかったよ」

唐突に切り上げて、終わりであることを示す。ヒナタは安心した表情をしたが、次の瞬間には落ち込んでいた。

「白に追いつくどころか、どんどん離されている気がする」

「言ったはずだよ。簡単には追いつかせないって。それはそうと、ヒナタが現時点でハナビちゃんに勝つてると自信を持って言えるのは何？」

「えーっと。体力かな？」

「ちよつと待つてね。最初に引き分けが多くなつたって言うけど、まだハナビちゃんには負けてないってことでいい？」

「うん。お姉ちゃんとして負けるわけにはいかないよ」

「その考えは、試合の時は捨てて挑んで。妹してではなく敵として考えること。それがヒアシ様の言っていた全力つてことだよ」

「そうなんだ……」

これまで、ヒアシの元で一緒に鍛錬していたことと、ハナビが妹であることから、怪我をさせないようになどと考えていたのだろう。そのため、攻撃面に関しては伸びが無いに等しかったが、防御面では十分に成長していた。

(防御はいいけど、攻撃が駄目つてことは、どうしても持久戦に頼らざるを得ないけど、それでヒアシさんが納得するとは思えないな……)

「ヒナタは人の身体に点穴つて言うのがあるのは知ってるよね？」

「あるのは知ってるけど、私の白眼では見えないよ？」

「でも、白眼を使えば、線は見えてるんだよね？」

「それは見えるけど」

「試合まで時間がないから、今から点穴を見えるようにするよ」

「それは……難しいよ。それに正確に突かないといけないんだよね？」

相手は動くから、そんなに簡単にはいかないと思う」

「誰も相手に使うとは言つてないから」

「え？」

点穴は、ネジならば習得することは出来るかもしれないが、ヒナタには難しいだろう。それに、誰も試合相手に使用するなど一言も言っていない。ヒナタは勘違いしているようだったが……。

「取り敢えず始めよう。まずは、利き足を足首から膝あたりまで出して、白眼で線を見たらこの筆で辿って見せて」

白は筆を取り出し、ヒナタに手渡した。ヒナタは言われた通り、線をなぞるようにして筆をはしらせていく。線を描いた後に、白は左手に千本を持ち、右手に意識を集中させてチャクラを練り上げていった。手にチャクラが十分に集まり終えたところで、そのチャクラを針のように指先へと更に集中させる。

「ヒナタ。今から線沿いにチャクラを流し込むから、チャクラに動きがあつたら教えて」

困惑しているヒナタを余所に、意識を集中したまま、ヒナタの脚の線沿いにチャクラを流し込み、刺激を与えていく。

「あつ。チャクラが増えたよ」

その言葉に左手に持っていた千本にて、ヒナタから指摘のあつた場所に小さな傷をつける。それを両脚へと順に施していった。

「これは何？」

「ここがヒナタの脚の点穴の場所だよ」

「でも点穴を突いたら流れが止まってしまうって聞いたけど……」

「それは攻撃を目的とした時の話。逆に増幅することも可能なんだよ。これでも一応医療忍術を勉強してるからね」

「それは分つたけど、自分の点穴が分かつても試合では使えないよ？」

「試合のある当日に、ここを僕が突かせてもらおうよ」

「それって……いいのかな？」

「ピアシ様には全力を出すようにって言われてるんだよね？これはあくまでヒナタ自身の力を増幅するものだから問題ないよ（一種のドーピングだけだね！）」

ヒナタはあまり納得していなかったようだが、この試合に勝たないと、この後が大変なことになるのが分かっているだけに、妥協は許さ

れない。

「それじゃ、増幅したチャクラの扱いに慣れてもらうためにも、明日からはここで組手をするよ。もう昼休みも終わるから戻ろう」

本来ならば、利き足だけではなく、他の部位についても増幅したいところではあるが、試合までの日が無い。それならばと思いついたのが、この点穴を利用したチャクラの増幅であった。白眼を持っている白だけでは不可能なことだが、ヒナタ自身が白眼を持っているので、後は点穴を探しだし、医療の知識を生かしてチャクラの流れをコントロールするだけである。

本来はチャクラメスを、道具を使わずに使用できるように訓練していたのだが、今は指先から針程度のチャクラを出すのが精一杯だった。今回はそれを応用出来たので、結果的には良かったと言える。

効果はそれほど長い時間続かなかったようで、1時間程で通常の状態に戻ってしまったようだ。

それから3日間と、短い期間あつと言う間に過ぎてしまった。

ヒナタは、チャクラの増幅分にもなんとか慣れたようで、劇的とまではいかないが、移動速度は以前よりも十分に上がっている。技量に關してはこのまま行くしかないのが心残りだが、今更変えることは出来ない。

「最初はいつも通り防御をして、ヒナタが攻撃するまで、今の速度を相手に知られてはいけないよ。もし攻撃に失敗した場合は、持久戦に持ち込むしかないことを覚えておいて。後は中途半端に攻撃しないで！いいね？」

作戦を伝え終わり、秋休み当日を迎えた。日向家に向かうと、門前にてヒナタが既に待っていた。

「おはよう」

「おはよう。準備はいい？」

「うん」

日向家の前とはいえ、脚を出すのが恥ずかしいのか、ヒナタは顔を真っ赤にしていたが、そんなことはお構いなしとばかりに、白は手へ

と意識を集中させていく。

点穴への処置を終えて、ヒナタに異常がないことを再度確認してから、再度作戦を念押しして送り出す。

「ここから先はヒナタ次第だよ」

「頑張つて来るね」

「頑張るんじゃなく勝つてね。後悔したくなければ」

「うん」

ヒナタが行ったのを見送ってから、自分の訓練へと向かう。秋休みと言うことで、朝からヤマトと訓練をすることになっていたのだが、この日ばかりは時間をずらしてもらっていた。その為、その日の訓練内容がいつもよりも厳しくなった。

その日の訓練は夕暮れ時に終わり、疲れた身体に鞭打って日向家へと向かった。

宗家への直接訪問は気が引けたが、結果が気になるので、ヒナタを訪ねることにした。しかし、対応として出てきたのは日向コウであった。

「ヒナタは居ますか？」

「今は誰とも合わせられん」

「ではいつであれば会えますか？」

「そんなことをいう必要はない。特に用事が無いようであれば早く帰れ」

「……分かりました」

その後も分家の方にて、ネジにそれとなく聞いてみたが、まだ情報が来ていないようで知らなかった。

仕方なくその日は家に帰ることになったのだが、この秋休みと言うのが、中忍試験のためであることを思い知ったのは次の日である。

「早速だけど、今日からの訓練は無しになった」

「何故ですか？」

「中忍試験があるのは知ってるよね？」

「それはもちろんです」

「その設営を僕たちも手伝うことになったんだよ」

「設営って、もう今日を合わせて3日くらいしかないですけど、何するんですか?」

「2次試験で立ち入り禁止区域を使用するんだけど、事前にトラップが仕掛けられてないかを確認する作業があるんだ。そこで、人手が欲しいという話が上がってね。一気に終わらせたいみたいだ」

「あそこ広いですもんね」

「そういうことだから今から行くよ。それと、一応この面を付けてもらう」

「わかりました」

渡された暗部の面を被り立入禁止区域へと向かった。どうやら最終の班だったようで、通るゲートは既に決まっていた。その後は、言い渡されたゲートを通り、罾が仕掛けられていないことを確認しながら、中央の塔へと向かう。途中で危険な動物もいると聞かされていたが、それは下忍にとってであり、今の白には全く問題にはならなかった。逆に食料として捕獲しようとして止められたくらいである。

「トラップがあるかを探すのって結構大変ですね。全く見つかりません」

「一応見逃しが無いように、何班かに分かれて同じ場所を通ってるからね」

「これって徒労に終わる可能性大ですよね」

「まあ否定はしないよ」

結局は、白の言葉通りに徒労と終わることになり、何事も無く中央の塔へと到着した。中央の塔へと入ると、他の上忍や暗部の面々が揃っていた。

「お前たちで最後だな。では報告をする。解散だ」

やはりと言うべきか、白たちが最後だった。まとめ役と思わしき上忍が言った言葉で、その場に留まっていた者たちは、すぐさまその場を離れていく。しかし、そのすぐ後に暗部の人から声を掛けられた。

「テンゾウとヒミトはここで待機だ」

「分かりました」

「えっ?」

「どうかしたか?」

「いえいえ、何でもありません。言い忘れてたけど、君はここで二次試験が終わるまで待機だから」

「聞いてないですよ! しかもテンゾウって誰ですか!?!」

まさかの居残り発言に、待機指示を出した暗部が居なくなつたのを確認してから、ヤマトへと詰め寄る。

「納得する説明を要求します」

「まあ話は簡単で、君の実力は中忍以上、上忍未満なわけなんだよね。だから下忍たちの試験の邪魔にならないように、ここを使用する期間はこの中央の塔で待機ってこと。他にも、中忍の人も待機だから、僕たちだけではないよ。ちなみにテンゾウっていうのは僕の事だね」

「そうですか……。名前の件はいいとして、つまり、実力的に不安なため外に出すわけにはいかない?」

「そういうことだね。訓練はこの建物内でも出来るから安心していいよ」

「いえそつちのことではなく……。いえ、取り敢えず、待機命令が出た以上どうしようもないですからもういいです」

結果的に、中忍試験の後始末を含めて、立ち入り禁止区域から出ることが出来たのは、秋休みが残り2日程になつてからだった。

45 変化？

立ち入り禁止区域から出て、自由行動になってからは、迅速に行動した。急いで暗部の面を取り、服を着替えて日向家へと向かう。

結果を知ったところで、それが覆ることは無いが、気になって仕方がないのだった。

宗家に直接行ったところで、また門前払いされては敵わないと、分家の方へ行つてネジに確認することにした。日数的には、既に情報が分家にもいつてもおかしくは無いだろう。そう思い、分家の方を伺いネジを呼び出してもらおう。

「ネジに聞きたいことがあるんだけど」

「いきなりだな」

「たぶん聞いたら機嫌が悪くなるのを承知で単刀直入に聞くんだけど、宗家の2人の勝負どうなったか聞いている？」

「そのことか……」

宗家という言葉にネジは顔をしかめるが、少し考えてから白の質問に答えた。

「ヒナタ様が勝ったとは聞いているが、その内容までは知らない」

「その後の事までは知らないよね？」

「知らないな」

「だよな」

「なぜそんな事を気にするんだ？」

「ちよつと手伝ったからね」

「手伝う？」

「点穴をちよつとね」

「何？」

「いや、なんでもないよ。教えてくれてありがとう。久しぶりの休みだから帰って寝るよ。また！」

「おい。話はまだ——」

ネジはまだ何か言いたさげにしていたが、白としてもここ数日、中忍試験の関係で、寝ずの番が続いており、寝るためにアパートへとそ

のまま帰った。

(これで安心して眠れる)

心配事が無くなったことで、残りの2日間(正確には1日と少しだが……)を休養に充てることにした。

秋休みも終わり、アカデミーへの登校日。白は少し早めにアカデミーへと向かった。登校してきたヒナタへ、一応の結果確認と、おめでとの言葉を送るためである。

登校してきたヒナタはいつもと変わりなく、普段通りの挨拶をしてきた。それに加えて、試合に勝てたことを喜び、お礼を言ってきたのはいい。しかし、後継者争いの勝負に勝ったので、その後にヒアシから今後の事についての説明があったはずなのに、いつもと変化がないことを不思議に思い聞いてみることにした。

「ねえヒナタ」

「どうかした?」

「ヒアシ様から今後どうするとかの話って何かあった?」

「しばらく様子を見るって言われただけだよ」

「え?」

てつきり、今回の勝敗によって、宗家の後継者を決めると思っていた白にとつては想定外なことだった。恐らくは、ヒアシにとつても、ヒナタが勝つとは思ってもしなかったのだろう。見切りをつけるための試合で、ヒナタが勝ってしまったので、見切りの期間を先送りにしたようだ。ヒアシは、ヒナタとハナビの才能の差と実力を、この時点で見極めていたに違いない。それが、予想しないことにヒナタが勝ったので、今回のようなことになったのだろう。

「えっと。しばらく様子を見るって言われたの」

「と言うことは、また今回みたいな試合が組まれるってことだね」

「そうなのかな?」

「すぐには試合をしないとは思うけど、気を付けておいて。それと試合前に日にちが分かっていたら教えて」

「うん。分かったら教えるね」

取り敢えずの危機を脱したが、油断はできない状況であることには

違いない。確か、中忍試験終了後には、ヒアシとネジとの仲も改善していたはずなので、もし負けて落ち込む期間があったとしても、その期間は短い方がいいだろう。

白は自分を無理やり納得させて、ヒナタと雑談しつつ授業が始まるのを待っていた。

日にちと言うのはあつという間に過ぎるもので、今は4年の最終試験を迎えていた。最終試験の内容は分身の術で、授業で何度も行っており、失敗する生徒はいない。

ナルトに関して、分身体がいきなり倒れた状態と言うままなのが、分身の術には違いない。評価としては最低だろうが、それは仕方がないだろう。後、昨年と違うのは、試験官にミズキという先生が加わったことくらいだ。

爽やかな外見なため、密かに女子生徒に人気がある先生だ。性格も至って優しく、親身になって対応してくれるから余計にそう思わせるのだろう。ナルトに対しても見た目の対応は、他の生徒と変わることは無く接している。これが、本性で無いと分かっていなければ、今後の事を予見できる者など誰も居ない。しかし、そのお蔭でナルトが多重影分身を覚えるので、ミズキに関しては放っておくことにしている。

忍者アカデミーも5年ともなると、本格的な演習が開始され始めた。

始めは、スリーマンセルで班を組み、リーダーを決めて生徒同士で巻物の奪い合いを行うというものだった。みんな腕に巻物を取り付けられ、それが奪われた者は死亡扱いとし、リーダーが巻物を奪われた場合は、その班自体が負けというものだ。

「ヒナタ。リーダー頑張つて！」

「ヒナタより白の方がいいんじゃない？」

「私もそう思う」

「じゃんけんで決まったんだから文句を言わない」

「まあ、ヒナタも結構強いから、私がリーダーじゃなければどっちでも

いいけどね。これで成績上がるのは間違いないんだし」

スリーマンセルの班として、女子生徒を一人誘い今回の演習に挑んでいた。男子生徒を入れてしまうと、ヒナタが恐縮してしまうからである。結果的にサスケのいる班には負けたものの、他の班には勝った。と言うよりも、サスケ一人でリーダーを悉く狙って倒してしまっているのも、他のメンバーとの協調性など無いに等しい。しかも、サスケがリーダーなのでみんなどうしようもないようだった。白としても、わざわざ争いの火種を作りたくは無かったので、巻物取り合い合戦にはそれほど真剣に取り組んではない。

他にも、フォーマンセルで班を組み、拠点を決めて、そこに巻物をおいて奪い合いをしたりと、授業内容としては、生徒同士の直接的な戦闘は少なくなるように配慮してあるようだった。

くノ一の授業の場合の一例を挙げるとすれば、スパイを割り出すというもので、先生からそれぞれ違う内容が書かれた紙を渡された。生徒は、その情報を収集し、かつ分析しなければならぬ。そこまではいいのだが、白がスパイに選ばれる確率が異常に高かった。後になればなるほど、スパイでもないのに、スパイとして見られてしまったくらいだ。

アカデミーに関しては、演習がより実践的になってきたということくらいだろう。白としては、それよりも、アカデミー以外での訓練などの方が重要だった。

ヤマトには未だに勝てないが、実力が上がっていつていることは実感できている。水が周囲にあれば、木分身相手に負けはほぼない。

最近では、本体であるヤマト相手に模擬戦をしているのだが、ヤマトが相手だと、水遁系主体で戦っているせいも、土遁により簡単に防がれ、更にその防いだ土遁の壁で周囲を囲み、接近戦にて追い討ちを仕掛けてくるのでたまったものではなかった。水遁系を見られないようにしているだけに、毎回、最終的には同じようなパターンで負けることが多い。

「中距離や遠距離の戦闘はいいとしても、接近戦がまだまだだね」

「相手が強いと分かっているのに、接近戦に挑むなんてありえなくない

ですか？」

「時と場合による。……時間稼ぎやチャクラの温存、相手の実力を確かめるため。理由を挙げたらいっぱいあるけど、接近戦の技術があつて困ることは無いよ」

「それはそうなんですけどね」

「今後は接近戦の訓練に切り替えていこう」
「分かりました」

この日から接近戦主体の訓練になるのだが、環境の変化はそれだけではなかった。医療方面に関しても変わったのである。

今までは、分からないところを聞くといったやり方で進めていたのだが、何を思ったのか、医療担当の忍者が、結構な頻度で、実技を含めて教えてくれるようになったのである。

最初は道具を使用してのチャクラメスも、道具を使わずに出来るようになり、それが出来るようになれば、薬の調合までさせてくれるようになった。調合と言っても手伝いではあるのだが、どのような効果があるのか、材料は何かなどを教えてくれるので、机上では分かりにくかった部分も補完出来て、とても充実した内容だった。

最近では、手術にまで同席させてもらっているの、医療技術の向上としてはかなりのものになってきている。

(ヤマトさん辺りが報告受けているみたいだし、医療関係も力を入れてくれるように言ってくれたのかな？ こつそり気遣ってくれる辺りさすがヤマトさん。それともまさかの火影？ いや……。ないな……。)

白は、ヤマトへ心の中で感謝しつつ医療技術の向上にも努めていた。

そんなある日、訓練後にヤマトから火影の言伝を聞かされた。聞いてみると内容としては、ナルトの監視に対する報告書の中身の詳細を聞きたいというものだった。しかも、火影の執務室ではなく、訓練後に家に来てほしいというものだ。

詳細と言われても、日々の内容を綴っただけのものなので、詳細も何もあつたものではない。そのため、呼び出す理由がよくわからない

かった。ヤマトへその場で確認しても「僕も聞かされていない」と言っており、伝え終わったらすぐに帰ってしまった。

モヤモヤとした気分のまま火影の家を訪問すると、小さな子供が玄関を開けて出てきた。

「お前誰なんだなコレ？」

「白と言います。火影様に呼ばれてきたのですが、居られますか？」

「怪しいやつに教えることはないんだなコレ!!」

火影に呼ばれて家に来たはずなのに、この対応はどのようなのだろうかと思わずにはいられなかった。このまま帰ろうかと真剣に考え始めたところで、奥から火影が現れた。

「これこれ木の葉丸。わしが呼んだんじや。怪しくは無いぞ。夜分にすまんなこつちじや」

「失礼します」

火影の家に上がったのはいいが、明らかに木の葉丸は白を警戒しており、後をつけてきていた。隠れもせずについてくるあたり、堂々としすぎて何も言う気が無くなってしまう。流星に部屋の中にまでは入ってこなかったが、扉の外で聞き耳を立てているのは分かる。

それに呆れていると、誰かに連れられてどこかへ行ったのが分かった。何やら叫んでいたのも丸分りである。それに対して火影は溜息をついたが、早く本題に入ってほしかったので、白の方から切り出した。

「報告書の詳細を知りたいとのことですが、その内容以上のものは特にありませんよ」

「報告書については問題ないんじや」

「それでは用件は何ですか？」

「ナルトのやつに、それとなく術の稽古をつけてやってくれんか？」

火影の全く予想だにしていなかった内容に、少し絶句してしまう。

「……それは命令ですか？」

「いや。お願いじやよ」

「それなら断ります。それにそういうことはイルカ先生の役割でしょう？ 筋違いもいいところですよ。頼むのであればそちらへしてください」

さい」

「イルカには頼んでおるんじやが、ナルトのやつはどうもイタズラの方に興味がいつてもうての。上からだけではなく、同じ年の方からも思ったんじやよ」

「それこそ、本人の意識が変わらない限り、同じ年の者が言ったところで変わらないですよ」

「駄目もどいいんじや。頼む」

火影は頭を下げてまで白へと頼み込んできた。ナルトの事をかなり心配しているのだろう。

「条件を付けさせてもらっていいですか？」

「……内容によるの」

「1つ目は、教える術は変化の術だけと言うことです。これだけは他に比べてまだ素質がありそうなので（教えなくても勝手に出来るようにはなるだろうけど）」

「それで構わん。あと、1つ目と言うことは他にもあるんじやろ？」

「2つ目に期限ですが、卒業までということにしてもらいたいですね。出来るようになるなら問わずに」

「期限を付けるのは当然じやの。まあ、そこからは上忍をつけることになつとるから、その者に任せることになるし、問題ないの」

「では最後に、結界忍術と口寄せに関する書物があれば欲しいです」

「なぜその書物が欲しいのか聞いても構わんか？」

「結界忍術は身を守るため、口寄せはそのままの意味ですよ」

「結界忍術については、お主が前から言っておったから別として、何か口寄せしたい動物でもおるのか？」

「ええ。やはり、1人では出来ることに限りがありますからね」

「ふむ。……書物の内容について制限を付けて良いのであればよからう」

火影は少し悩みながらも、白の要求を呑んだ。過去に大蛇丸のような者が居ただけに、少し考えさせられただろう。

「全く役に立たないとかいうのは無しですよ？」

「上忍レベルの物であれば文句は無かろう？」

「それでしたらいいんですが、いついただけですか？」

「いまから取ってくる。少し待っておれ」

「もしかして準備してたんですか？」

「そんな訳なからう」

そう言うのと火影は部屋を出て行ってしまった。そうして待つっていると、2つの書物と1つの巻物を持って火影が帰ってきた。それらを机の上に置くと、腰を叩いて椅子に腰かける。

「少々古いが、内容の方は保証するぞ」

「書物は分かるんですが、こちらの巻物はなんですか？」

「巻物が無くば口寄せ契約も出来まい。それはそうと、ナルトのこと頼んだぞ」

「ここまで条件を呑んでいただいたんですから、任せてもらっていますよ」

本当は、もっと欲しいものがあつたのだが、余計な疑惑を抱かれては困るので、内容を絞って怪しまれないようにしていた。

46 説得？

火影邸を訪れた翌日。ナルトに変化の術を教える見返りとして、前払いで貰った本を片手に、白は朝食を摂っていた。

今回頼まれた内容は、無視していても勝手に達成されるものであったが、こうして欲しいものを貰った以上無視するわけにもいかない。ただ、教えるのはいいのだが、現状ではナルトとそれほど親しい仲ではないのが問題だった。と言うよりも、男子生徒との繋がりが薄いのである。

いきなり、いつも話しかけないようなクラスメイトが、術を教えると言っても、ナルトの性格上教わったりはしないだろう。逆に意固地になって拒否してくる可能性の方が高い。

最近、シカマルたちと一緒に怒られているので、むしろそちらの方に依頼したほうがよいとは思いますが、素直に教えるような者がいない。

シカマルに頼んだところで、面倒くさがり。チョウジに頼んだところで、おやつを要求されたうえに、教えられるか不安がある。キバに至っては、笑うだけ笑って終わりそうだ。

結果的に、自分しかいないと考え直し、どうやって教えようかと思案していて思い付いた。

その思い付いたことを実行に移す。

その週の休みの日。一樂の店員として、働いているところに、昼間からナルトがやって来た。

「いらっしやい」

「みそラーメン！」

「はいよ。みそいっちょよう〜」

ナルトが、みそラーメンを旨そうに食べているところへ話し掛けた。

通常のお客さんであれば、おやじに怒られるところだが、ナルトに関しては、食べている最中に話し掛けても怒られない。火影から言われているので、逆に話しかけると推奨するくらいだ。

「午後から暇かい？」

「暇と言えば暇かな」

「ちよつと教えて欲しいことがあるんだよ」

「なにになに？」

「それは後で言うから今は食べてしまつてよ。へ教えてくれたら、次回無料券付けちゃうからさ」

「任せとけつてばよ！」

午後からは、店を途中で抜けるかもしれないと、事前に言っていた。なぜ抜けるのかまで言っていなかったが、ナルトとの会話後に、店のおやじに目線をやると、頷いてくれた。

何も言わずに、アイコンタクトで通じる辺り、長く付き合ってきただけはある。まあ、途中で抜けても、常時バイトのアヤメさんがいるというのが、抜けやすい理由でもある。

今回、教えて欲しいという言い方をしたのは、ナルトが内容をどれほど理解しているか確認するためであったりする。もし、理解していなければ、教えられる振りをしながら、わざとらしく教えれば良いと考えていた。

ラーメンを食べ終えた後、ナルトと共に歩きながら、変化の術について教えて欲しいと言うと、ナルトがよく隠れて特訓する場所に連れてきてくれた。

「早速頼むよ」

「えっと。集中して印をこんな感じで組んで……」

ナルトにとっては真剣に教えているつもりなのだろう。しかし、ナルトのあまりの説明の仕方にも、白は脱力してしまった。説明したところはいいのだが、それ以外で抜けている場所が多く、チャクラ自体についても、理解しているとは言い難い。

(時間が掛かりそうだなあ)

心のなかでぼやきながら、ナルトに言われた通りにやっても、出来ないことを分かっているながら、実際にやってみせる。

「出来ないね」

「なんでだつてばよ？」

「集中って言っても、実際にはどうやっているのかな？」
「んん。おれってば、こうやって葉っぱを額に乗せて集中してんだけど」

この日は結局、ナルトにやり方を少しづつ矯正させるだけに終わってしまっただけ。出来るまで付き合うという約束のもと、次の週には基本的なことを覚えさせるところまでできた。そして、更に次の週には、変化する相手をイメージするところまでできているのだが、どうしても額の葉っぱの方へと集中してしまうようで、イメージの方に集中出来ていない。

そこで、ナルトのイタズラ心を利用することにした。

「この変化の術って、誰かに化けてイタズラしたらどうなるんだろうね？ たとえば火影様とか」

その言葉にナルトは少しの間、固まってしまっていた。ナルトは最初の頃の失敗で、イタズラに忍術を使用するということを止めてしまっていたせいで、そのことを思いつきもしなかったのだろう。それを白の言葉によって、イタズラ心に火が付けられたようで、目が見えるうちにやる気を漲らせていた。今なら残りはイメージだけである。

「ちよつときさ！ ちよつときさ！ やってみるから見ててくれよな！」

「ああ。もちろんだとも！」

そこからは、火影に似せるべく何度も変化の術を繰り返した。その結果、どこから見ても火影そっくりになることに成功したのである。

「もうどこから見ても立派な火影だ」

「へへ。おれってば今日から火影かあ」

「俺から言うことはもうないな」

「そういや、兄ちゃんはやかったのか？」

「ああ。もういいんだ。俺は一樂で頑張っていくよ」

「そうだな。兄ちゃんにはラーメン屋が似合ってるってばよ」

ナルトからの励ましを受けて、変化の術についての特訓は本日で終わりとなった。

しかし、それから数日もしないうちに、火影からの呼び出しを受け

ることになる。

今回は火影の家ではなく、執務室の方への呼び出しであった。

「なぜ呼んだか分かっておるな？」

「いえ。分かりませんが」

「……ナルトに術を教えるよう頼んだのはワシじゃから、その点については礼を言おう」

「前払いで報酬を受け取っているのですから、当然のことをしたままです」

「問題は、その変化の術でワシに変化しとることなんじゃ」

「やはり、身近な人には変化しやすいのでしょう」

敢えて火影になるようにナルトに言ったことは言わず、変化する対象を選んだ理由を告げる。

「ワシの姿でイタズラし始めてしもうての。ほとんど困っておるんじゃよ」

「そこまで責任は持てません。ここはナルト本人とじっくり話し合っではどうですか？」

「話はしたんじやが、なかなか止めんのじやよ」

この後も、話を聞く限りでは、ナルトが忍術を使えることに対して嬉しそうに話をするのだが、イタズラにその忍術を使うので困っているという話が延々と繰り返して続いていた。

「それで結局呼ばれた理由はなんでしょう？愚痴を聞くだけであれば帰りたいのですが」

「単独任務をしてもらおうと思つての」

「まだ正式な暗部でもないのにですか？」

「このままでは、火影としての影響も少なからずあるからの。それにお主は今回の原因の一端でもあるんじや。速やかに解決出来るよう頼んだぞ」

「暗部の初任務がコレって、なんか情けないというかなんというか。面つけないと駄目ですか？」

「いや。取り敢えず解決してくればいいだけじや。解決出来たら、お主の暗部としての任務達成記録に付けておくから、安心していい

ぞ」

「それはやめてください。恥にしかありませんよ。お互いにとって……」

「それもそうじゃの……。では件数だけ計上しておくかの」「そうしてください」

今回は、頼みではなく、暗部としての命令であるため、すぐにナルトを発見するべく移動を開始した。ナルトの監視をするために、ナルトのゴーグルの片方に秘術を使っている。そのため、ナルトがゴーグルを着用していれば、大体どこに居るのが分かる。

ナルトがゴーグルを通常の目的で使用してしまうと、片方が見えないので不審がられてしまうが、ゴーグルを額当ての代わりに用いているだけなので、その心配もない。

掛けている眼鏡を使い、ナルトのゴーグルの視界を映す。

（全く。休みの日までイタズラに精を出すなつての。せつかくの医療忍術の時間が……。つて今日は商店街か）

商店街にてナルトの居る場所まで行ってみると、ナルトは火影の姿を保ったまま、ペンキと思わしき物が入ったバケツを片手に商店街の壁にイタズラ書きをしていた。曲がりなりにも忍者アカデミーに通っているだけあって、一般人がナルトを捕まえられるはずもなく、そんなナルトを一生懸命追い掛け回していた。

追い掛け回している人たちは、中身がナルトであることを知っているのだろう。口々に「またやりやがった！」だのと言っているし、落書きの内容にも、『うずまきナルト』と堂々と書いているのだから。

丁度いいことに、ナルトはこちらへと向かってきていた。ナルトは余裕のつもりなのか、後ろを向きながら、追ってくる人たちを見て、何が嬉しいのか笑っている。

白は、商店街の路地の方へと入り、変化の術を使用した。そうして油断をしているナルトの前に立ち塞がり、一瞬でバケツを奪い取り、首筋に手刀を入れることでナルトの意識を刈り取る。それにより、変化の術が途切れて元のナルトの姿に戻った。

「おお。すまない。捕まえてくれてありがとう」「今日こそ嫌と言うほ

ど痛めつけてやる!」「あんまり関わらない方がいいんじゃないか?」「ずつとやられっぱなしだったんだぞ?」「でも、例の子だから近寄るのもねえ」

追いかけていた面々は、追いついたことでそれぞれ話し合っていたが、なかなか結論が出そうになかった。追いかけたはいいものの、実際には手を出しにくいのだろう。それ以前に、関わり合いになりたくないというのが大きいのだろうか。

「みなさん落ち着いてください。私が皆さんの建物の落書きを消します」

「そんなことは、そいつにやらせればいいんだ」

「そうだ!・そうだ!」

「消せと言われて正直に消すと思いますか?むしろ被害が増える可能性もあると思うのですが?」

白の言葉に、みんなは「それもそうだな」と不満ではあるが納得はしたようだった。

「それと、落書きをされた建物の前に水を撒いてください」

ナルトを小脇に抱えて、落書きをされた建物に行く前に、みんなに言うしておく。みんな不思議に思いつつも、指示に従ってくれたお蔭で、チャクラを無駄に使わずに忍術を使用することが出来た。

(水遁・水龍鞭)

水龍鞭を使用して落書きを消していく。既にコントロールはマスターしており、細かい作業も出来るようになっていた。それにより、書かれて間もないせいもあるが、瞬く間に落書きを消していく。消し終わってからは、感謝の言葉を投げかけられるが、誰も近付いてこようとはしなかった。恐らく小脇に抱えるナルトの存在のせいだろう。「では消し終わったようなので失礼します」

瞬身の術にて移動し、ナルトがよく利用している秘密の特訓場へと向かった。

変化の術を再度使用して一楽の店員になっておく。そして、未だに寝ているナルトの顔を叩きナルトを起こした。

「おい。大丈夫か?」

「ん〜。まだまだ〜」

起きたはいいが、寝ぼけているようだ。そこへ顔に水を掛ける。

「なんだってばよ!」

「起きたか?」

「どうしてにいちやんがいんだ?」

「たまたまさ」

ナルトは周囲を見回して、なぜこんなところに居るのか、分からないといった風に首を傾げている。気絶している間に連れてきたのだから分からなくて当然なのだが、ナルトは一生懸命思い出そうとしているようだった。

「火影様に化けてイタズラばかりしてるみたいだな」

「やつと火影になれたんだ! これでみんなを見返してやるってばよ!」

(火影のじいさんに化けたからと言って、火影になったわけじゃないから……)

ナルトの目標が、火影になることと、里のみんなに認めてもらいたいという考えは分かるが、現状では逆効果でしかない。一応そのことを確認する。

「ナルトは火影になりたいんだよな?」

「もう火影だってばよ!」

「そんな見た目よぼよぼの火影でいいと思うのか?」
「っ!」

ナルトの心情を余所に、更に言いくるめていく。

「ナルトが本当に火影を目指すなら、そんな爺さん火影の恰好をするより、その火影を軽く超えるくらいにならないと駄目なんじゃないか? そうすれば里のみんなも認めてくれると思うぞ」

「それだ! やってやるってばよ!」

「頑張って立派な火影になれよ。じゃあな(これで火影の爺さんに変化することはないだろ)」

その日から、偽火影被害は無くなった。そして数日間ではあるが、ナルトのイタズラもなりを潜めていたのだが、結局は机上の授業の時

などに抜け出しイタズラをし始めた。この事ばかりは、白としてもどうしようもなかった。ただ、意識だけは変わったようで、手裏剣術などについては上達し始めている。

その事を報告書として書いてはいるので、火影もそれを見て喜んでることだろう。

47 居心地？

最近ではあるが、医療忍術の習得難易度がかなり上がってきていた。最初の頃の自学自習は一体なんだったのかと思うほどだ。

手術の見学から始まり、それが徐々に手術の助手へとなり、更にはメインで執刀を行うようになるまで来たのである。見学に関しては、他の医療忍者も居たのだが、助手をするようになってからは、担当上忍と2人で行うことが多かった。正式な医療忍者でもないのだから、いいのだろうか？と疑問は沸くが、折角の機会を無駄には出来ないのので、積極的に行っているのが現状だ。

しかし、それが最近では検死までするようになってきている。医療忍術に関係あるのかと考えたが、医療忍者であれば、検死に携わることもなるだろうと思いついて、特に異論を挙げずに続けていた。

(きつとこの人は、医療忍者として期待してくれてるんだろうな)

「君はそれにしても優秀だね。物覚えもいいし、血や死体を見たところで動揺することもない」

「慣れだと思えますが」

「慣れだけでは片付かないとは思うがね。それはそうと、アカデミーの生徒と言うことだが、卒業後のことは考えているのかい？」

「ええ。まあ……」

卒業後のことについては、既に決まっているようなものだが、それを言うわけにもいかず、歯切れの悪い返答をしてしまう。それをまだ決まっていなと思うたのか、提案をしてきた。

「卒業後は私の元へ来ないかい？」

「行きたいのは山々なのですが……、実は日向家に世話になった身でして……、進路についての決定権がほぼ無いのです……」

「世話になったとは？」

「小さい頃に命を救われましてね、そこから数年間ですが、日向家にてお世話になったんですよ」

「そうだったのか。しかし、だからと言って将来の事まで束縛されることは無いと思うがね」

「それはそうかもしれませんが」

「まあいい。時間も無いことだし今日のところはここまでとしておこう」

「ありがとうございます」

本日分の検死を終えて、臭いを落としアパートへと帰宅する。その途中で買い物をするために商店街へと寄ると、知り合いが買い物をしていた。

少し驚かそうと、気配を消して背後へと回り込み、振り向いた際に人差し指が頬に当たるようにして、肩に手を置いて声を掛ける。

「やあ」

「キヤーー！」

(そんなに驚かなくても)

肩に手を置いて声を掛けただけでも関わらず、サクラはいきなりすることに驚いたのだろう。振り向きもせずには叫びながら前へと駆けだしてしまった。周囲の人たちを見て、この状態は不味いとすぐに追いかける。

「サクラ待って！」

「えっ?」

すぐにサクラに追いつき、名前を呼ぶ。そこでやっとサクラは立ち止まり後ろを振り返った。

「声を掛けただけで悲鳴を上げるなんて酷いよ」

「いきなりだったからびっくりしちゃって」

「こんな時間買い物って珍しいね」

既に時刻としては、夕食の時間のはずである。それにも関わらず、食料品店に買い物にをしに来ているサクラが珍しく、サクラの買い物に付き合い会計を済ませたところで、少し話をしていた。

「調味料を切らしてて、買って来てって言われたんだけど、親がついでとばかりに他のも頼んできたの」

「だからこんな時間だったんだ」

「白も買い物?」

「そうだよ。どちらかというところの方には用があるんだけどね」

白が指差した方にあつたのは弁当コーナーだった。朝食と昼食は自作しているのだが、夕食に関しては鍛錬などの関係で弁当で済ますことが多かった。疲れた後だとなかなか作る気がおきないのである。

「お弁当を食べてるの?」

「夕食は大体弁当かな」

「……家に食べにくる?」

「いや。急に人が増えたら大変だろうし止めておくよ」

「今日はカレーとサラダだから人が増えても大丈夫だと思う」

「確かにカレーだと、大目に作りそうだけど「おおーいサクラ! 迎えに来たぞ〜」……」

会話の途中に遠くから、大声で割り込んできた人物が居た。言葉の内容からサクラの知り合いと当たりを付けて、サクラの方を見ると、サクラは溜息をついていた。

「えっと知り合い?」

「お父さん」

「斬新な髪型だね」

「うん……」

近付いてきているサクラの父親の髪型は、まるでヒトデのような形をしていた。サクラは少し恥ずかしそうに顔を下に向けている。色々な意味で恥ずかしいだろうが、人の趣味にまで口は出せない。

「おっと。お友達かい?」

「白と言います。サクラさんにはアカデミーでお世話になってます」

「おお! 白ちゃんか! 貫禄がある。どおりで箔が付いているんだな! はっはっは!」

「お父さん! 止めてよ恥ずかしい!」

いきなりの内容に白が固まっていると、何を勘違いしたのか、サクラの父親は更に言葉を続けていく。

「おっと。少々高度すぎて分からなかったかな? 私の行動『ぐほっ!?!』」

恐らく高度と行動を掛けようとしたのだろう。サクラの鳩尾への

無言の一撃によって、腹を押さえて苦しみだした。

「もういいから。それよりも、友達を夕食に誘いたいんだけどいいよね?」

「ああ。もちろんだとも。マヨネーズは買ったかい? どれを買うか迷ったり『がはっ!?!』」

苦しみからすぐに復帰したと思ったら、今度はアゴにアッパーカットが入っていた。綺麗に入ったせいかわ、倒れて気絶しているように見える。今度も言い切る前に潰されたところを見るに、反射的な動作であることから、これが日常的に行われているのだろう。

「許可が出たし行こう」

「えっと。放っておいてもいいの?」

サクラの父親が気になり、目線を向けるも、サクラは全く気にしていないようで、白の腕を掴み歩き出した。アカデミーに入った頃の大人しかった面影が全くない。

「気にしないで、すぐに復活してくるから」

「まあ。それでいいならいいんだけど」

サクラの住むアパートへと辿り着いた時に、丁度サクラの父親も追いつき、夕食に招かれることになった。気絶状態から簡単に復活できる辺り、サクラの父親も慣れているのだろう。慣れたいとは思われないが……。

「おかえりなさい」

「ただいまお母さん。悪いんだけど、夕食もう一人分の準備お願い」

「あら。お友達を連れてきたのね。イノちゃん以外を連れてくるなんて初めてじゃない? 準備するから少し待ってね」

「おじやます」

流れに任せてしまい、ここまで来てしまったことを少し後悔していた。自己紹介をしながら、食事が始まってからも、親子の漫才は続いたのである。夕食をご馳走になっている手前、無視するわけにもいかず、苦笑いで聞き続けるしかなかったのである。

内容が面白ければ良かったのだが、迎えに来た時に、店でも発したようなオヤジギャグばかりだった。それに対してサクラが突込みを

入れて、母親がそれを面白そうに見ている。

(普通の家族って言うのは、やっぱりこんな感じなんだよな。今までが特別だっただけにある意味新鮮だ)

白はほとんど会話に入れずに、居心地が少々悪かったが、久しぶりの他人の手料理に懐かしさを感じていた。

「ごめんね。急に誘っちゃって」

「そんなことないよ。夕食誘ってくれてありがとう」

「でも、お父さん迷惑だったよね？ あれってたぶん場を盛り上げようとしたんだと思う。イノの時もそうだったし、普段より調子にのっちゃったみたい」

「優しそうな家族でよかったんじゃないかな。大事にするべきだよ」

「優しいと言えば優しいけどね。あのダジャレさえなければもっといいんだけど」

「そこは人それぞれの個性ということで、それじゃあ帰るよ。またアカデミーで」

「またね」

サクラに見送られながら、家路についた。精神的に疲れ果てていたので、そのままベッドへと入ってその日は寝てしまった。

それからは、サクラ繋がりでもイノとも仲良くなり、フオーマンセルの演習やくノ一の授業の際には、ヒナタと一緒に4人で行動することが多くなった。

そうして、ヒナタも4人での行動に慣れて来た頃に、また任務である。今回は川の国の雨隠れの里の中忍試験の内容通知だった。

「今回は水の多そうなところでよかったですよ。また砂隠れに行けつて言われたら、どうしようかと思っていたところですよ」

「そんなに同じ場所は続かないさ。それよりも、今回行くところはかなり危険だから注意してくれ」

「巻物渡すだけですよね？　なんで危険なんですか？」

「昔の話だけど、雨隠れの里は大国の中間に位置しているせいで、戦争に巻き込まれることが多かったんだ。そのせいで住民たちは、他里の者に対してあまりいい感情を持っていない。入国するのにも手続き

が大変なんだ。入国してから問題が発生したら、戦争にも繋がりかねないんだよ」

「そんな危険な場所には行きたくないんですが」

「我が儘を言わない。それに手続きはちゃんと踏んでるから、そういう危険にはならないよ」

「絶対とは言えないですね……」

「まあ、内容としてはBランク任務だからね。もちろん戦闘も考慮されてる」

「下忍にもなっていないのにBランクなんて、酷すぎますよ」

「実力的には問題ないと判断されたんだ。愚痴はその辺にしてさっさと終わらせるよ」

この後の国境沿いの入国審査からして時間が掛かった。今回は暗部の面を付けての行動であるため、余計に時間が掛かったと言ってもいい。しかも、巻物を渡す相手が大物だけに、簡単に入国できるはずもなかった。

時間は掛かりはしたが、手続きをヤマトに丸投げしている状態で、横で立っておくだけだったので楽だったのだが、あまりにも暇だったのは言うまでもない。

入国を果たして、やっと雨隠れの里に着いたと思ったら、雨隠れの里に入るのにも、更に手続きが必要だった。しかも里に入るまでに丸1日掛かったのである。中忍試験の内容通達の巻物以外にも、里に入る為に必要な書類があり、その書類の確認作業のために1日待たされたのだった。

「なんでこんなに嚴重なんですか？ やりすぎでしょう」

「ここの里……長の方針だから僕たちがどうこう言うことじゃないよ」

「それはそうなんですけど、かなり閉鎖的ですよね」

「トラブルになりそうな発言は控えるように」

「そうでした。すいません」

ヤマトとの会話を止めて目的地に向けて進む。

その目的地にあったのは城だった。今までが普通の街や建物ばかり

りだったので、このような城を見るのは、この世界に来てから初めてであった。城に入る前に、今度は武器を置いていくように言われ、軽く身体検査までされた。

そこまでしてやっと入城出来たのである。そして、城の最上階まで上がったところに、今回の書状を渡す相手がいた。名を半蔵と言い、忍びの世界では知らぬものが居ないと言うことだが、実際の戦闘場面をそれほど知らない白にとっては、知らないに等しい人物であった。「これが今回の中忍試験の内容を認めたものです」

半蔵の代わりに、半蔵の傍で控えていた者が受け取り、その書状を持って印を組み、何かを確認した後で半蔵に手渡していた。巻物に危険が無いか確認しているのだろう。半蔵は渡された巻物を開き、中身を確認する。一通り確認したのか、既に準備していた巻物をこちらへと渡してきた。

「確かに受け取った。そちらに此度の調整役と受験者を送ろう」
「承りました。それでは失礼いたします」

出る時にはそれほど時間が掛けずに出ることが出来た。特に揉め事が起きることなく出れたことに安心する。渡していた武器を確認しながら返してもらい、城を離れたところでいきなり門の付近が爆発した。

その光景を唾然として見ていると、爆発させたと思わしき者たちが、門の方へ向けて走っていくのが見える。

「やはり内戦はまだ続いていたか」

「内戦ですか……。てつきりヤマトさんが、むしゃくしゃしてやっってしまったかと思いましたが」

「君とはじっくり話し合わなければいけないようだね」

「それよりも、今襲ってるやつらの仲間と思われたら嫌ですし、さっさと離れましょう」

「そうだね」

城から離れたのはいいものの、先ほどの門の爆発により、里から出るのに2日掛かってしまったのである。出国については、半蔵より渡された巻物により、すんなり通れたのでよかったが、あそこまで嚴重

であると何度も行きたいとは思わない場所であった。

48 中忍？

それは、雨隠れの里からの帰還途中の出来事だった。

「巻物届けるだけでBランク任務なだけはありませんね。普通だったらCランク程度なんでしょうけど」

「そうそう。任務で思い出したけど、ヒミトには今年中忍試験を受けてもらおうよ」

「はい？」

「いい返事だ」

ヤマトは白の聞き返した言葉に対して頷く。それに慌てたようにして白は、言い返した。

「今のは返事ではないですよ！ どういうことか説明してください！

中忍試験って、下忍にもなっていないのになれるはずないでしょう！？」

「誰も白に受けろとは言っていないよ。ヒミトとして受けるんだ」

「どういうことですか？」

肩書上、白はアカデミーの生徒だが、ヒミトとしては下忍の扱いになっているとのことだった。中忍試験を受けるための任務件数については、医療での件数がカウントされているので、十分に要件を満たしているらしい。

「中忍試験にも種類があつてね。君の場合は、後方支援としての中忍試験を受けてもらおうよ」

「と言うと、医療に関してと言うことですか？」

「そうでないと、下忍同士のスリーマンセルで受験しないといけないからね。今回は君が医療忍術を学んでくれていて助かったよ」

「そんな裏ワザがあるとは思いませんでしたよ」

知っている内容と言えば、情報収集や戦闘ばかりだと思っていたのである。実際に手伝ったことのある内容も、同じような物であったためそれしか無いのだと思い込んでいた。

「全員が前線で戦えるわけではないから、この試験分けは当然だと思おうよ」

「確かにそうですね」

ヤマトの言葉は納得できるものだった。全員が同じ中忍試験を受けるのであれば、それなりに技量はあるはずだが、実際にはそこまでの技量はない。

その部署に特化したものが逆にいるくらいだ。

「それにアカデミーの6年生になれば、各自の進路を聞かれるはずだ。特に希望する場所が無ければ、そのまま一般的な下忍として育てられる。選んだとしても、その方面の才能が無ければ、すぐに違う場所に回されることもあるんだけどね」

「では、進路は医療方面で出しますね!」

「まあ、君の場合はどこを希望しようと決まってるんだけどね」

「ですよね……」

任務から帰還した後には、詳細について伝えられた。

いくつかの書類をテーブルの上に広げられ、その中から一枚の写真の載った書類を渡される。

「まずは、その人物に変化して受験すること」

「この姿のままだと都合が悪いですもんね」

写真に載っている人物には全く心当たりは無かったが、受験するためだけの人物なので特に気にはならなかった。

「それと、一応報告は受けているけど、医療忍術についての知識と実技は大丈夫かい?」

「試験の内容にもよりますが、大丈夫だと思いますよ。色々と経験を積ませてもらってますし」

「下忍レベルの医療忍術だから落ちることはないと思うけどね」

試験の詳細内容については流石に教えてもらえなかったが、筆記試験と実技試験があることだけは教えて貰えた。ペーパーテストに関しては、最悪時のことを想定して準備はしておくことにし、実技だけがどのレベルなのが少し心配であった。

秋休みに入り、中忍試験の会場である忍者アカデミーへと向かう。試験会場の入口は下忍たちで溢れており、入口が開くのを今か今かと待ち構えていた。

(少し早く来すぎたかな?)

時間より少し早めに来たのだが、扉が開いていないとは思わず、少し待たされることになった。扉が開かれるまでの間、受験者を眺めていると関わり合いになりたくない人物が目に残る。

その人物は、色々な受験者に話し掛けたりしているが、白にとつてはそれが情報収集のためだと分かった。その人物はあろうことか、こちらへと向かってきたのである。1人離れていたので目立ったのかもしれない。

「やあ。君も受験者かい?」

「ええ」

「僕は薬師カブトと言う。君の名前を聞いてもいいかな?」

「ヒミトと言います」

よりによつて、薬師カブトが話し掛けてきたのである。大蛇丸の配下であることを知っているだけに、個人的に近づきたくない相手であった。

「ヒミトは初受験かい? 去年は見かけなかったけど」

「はい。今年が初めてです」

「僕は去年受けたんだけど落ちてしまつてね。今年も懲りずに受けに来たのさ。それはそうと、君は1人のようだけど他のメンバーは何処に居るんだい?」

「医療忍術での受験なので1人です」

「ああ。そうなのか」

(俺に興味を持たずに、他のライバルに興味を持つてくれよ!)

この時、時間になりアカデミーの入口の扉が開放された。それに合わせて受験者がアカデミー内へと入っていく。ここが好機とばかりに、白も向かうことにした。

「アカデミーの扉が開いたようなので行きますね」

「そうだね。またの機会があれば会おう」

「ええ。また(そんな機会が来ないことを祈りますよ)」

扉を通つて指定された教室へと入っていく。教室内には数名しかまだ来ていなかった。座席表を確認して割り当てられた席へと座り、

試験の為の準備を行っておく。

ほどなくして、受験者が続々と教室へと入ってきた。みんな医療関係の本を持ち込んでおり、机の上に広げて時間ギリギリまで覚える気のようにだった。

そんな中、そういった書物を持ってきていない白は、ある意味目立っていたと言っているが、他の者は自分の事で精一杯なのか、気にかける者はいない。

時間となり、そこへ試験官が数名ほど教室へ入ってきた。

「これより医療忍者としての中忍試験を行う。流れとしては、始めに筆記試験を行い、その後実技試験となる。合否については、明日の昼に、アカデミー入口にある掲示板に貼り出す。ああ、それと、筆記試験については1時間後に用紙を回収する。何か質問はあるか？」

特に誰からも質問はなく、それを見て試験官は頷いた。

「では用紙を配る。始めの合図とともに始めるから、それまでは裏を向けておけ」

全員に配られたのを確認すると、試験官から「始め」の合図が出た。用紙を捲り問題内容を確認する。全部で20問その内10問は選択式だった。

(これは楽勝過ぎないか?)

試験問題の内容は、各臓器の応急処置方法、それに伴う経絡系に関するもの、他にも毒草や薬草の見分け方などで、知識としては広く浅く知っていれば良いといったものだ。

この手のことに関しては、医療忍術を習い始めた当初の内容であり、白にとっては中忍試験とは到底思えなかった。

(もつと難しいと思つて、カンニング用に水分身をアパートに待機させてたのに、完璧に無駄だった)

出題される内容として、手術の方法や注意点、薬に関しては調合などを含んでいると考えていただけに、拍子抜けされたのだった。

1時間後。用紙を回収された後、受験者は試験官に連れられて別室へと移動していく。辿り着いた先の教室には、人形5体とその手前の台座に箱が置かれていた。

「実技の試験は至って簡単だ。ここにある医療用人形を掌仙術にて目覚めさせる、それだけだ。時間は30分とし、5人同時に行っていく。出来た者から隣の部屋に移動だ。出来なかった者についても時間経過後に隣の部屋に移動しろ。順番については、箱の中に番号の書かれた紙が入っているので、手近な者から引いていけ」

そう言い終わると試験官は椅子に座ると、他の試験官と話し始めた。聞こえてくる内容は、誰が受かるかというもので、どうやら試験を賭けの対象にしているようだ。しかも、試験官は医療忍者ではなく、通常の中忍のようで、「楽な試験の方で助かった」などと言っている。

一番楽なのは情報部の暗号解読班の試験のようで、そこは筆記試験のみで終わるそうだ。

そんなことを聞いていると、ほとんどの受験者が箱から紙を引いたようなので、白も紙を引いた。

(残り物には福があるっていうけど、この数字って一番最後の方なんじゃ？先に引いておけばよかつたかな？)

受験者は、ぱつと見た感じ50名程度。そして白が引いた数字は45番だった。

数字の若い順番の者たちが人形の前にそれぞれ並び、他の者たちは教室の端にある椅子にて待つこととなった。

どうやらこの人形は、かなりの量のチャクラを供給しないと目が覚めない仕組みのようで、早い者で20分、遅い者だと制限時間を過ぎてしまうと言うものだった。しかも、人形ごとに指定された場所が異なっており、そこへ正確に掌仙術を使用しなければ目が覚めないと言うものだ。マーキングしてあるので優しくはあるが、今のところ半数近くの受験者が時間オーバーしていることを考えると、意外と難しいのだろう。

そうして数時間待たされた挙句、難しいと思っていた実技試験は、あっさりと終わってしまった。今までの待ち時間は一体なんだったのかと思われるほどだ。10分程度で試験を終えてしまったことを考えると、他の受験者の技量が不足しているのか、この試験が難しい

のか微妙なところである。

隣の部屋へと入ると、人形の試験を通過した受験者たちが椅子に座って待っていた。どうやら、早くても遅くても待つことに変わりはないかったようだ。

次の試験は粉末の効果を調べるというものだった。一人ずつ先ほどの番号に合わせた粉末を渡される。

「ここにある器具を使って、今渡した物の名称と効果を試験官に伝える。それで試験は終わりだ。終わった者から帰っていい。それでは始めろ」

やっとそれらしくなってきたと思っていたが、開けた瞬間に裏切られたと思った。渡された袋を広げると、そこにあったのは、病院などから依頼があつてたまに作っている薬草の粉末だったのである。開けた瞬間に漂ってきた匂いから、まさかと思つたらこれであつた。

一応試しに少しだけ確認してみたが、間違いようが無く薬草の粉末である。溜息を漏らしながら試験官に名称と効果を伝えると、「運が良かったな」と言われてしまった。運も実力の内と言うならまだしも、それでいいのかと思つてしまう。

実際には、渡された物ごとに制限時間が設けられていて、それを基に採点されるのだが、それを白が知る由もない。

アカデミーを出てアパートへと帰宅しようとしたところで、ヤマトが待ち構えていた。

「待ってたよ」

「どうかしたんですか?」

「中忍合格おめでどう」

「まだ結果は出てないですよ」

気の早いヤマトに苦笑いをしながら答える。内容からして落ちることは無いだろうと、白自身も思っていたからだ。

「筆記試験の採点は既に終えているし、実技内容を聞いた限りでは、君が落ちるとは思えなかったんでね」

「かなり拍子抜けな内容でした。もっとレベルが高いものかと思つて、カンニングの準備までしていたのに」

「使わなくて良かったね。カンニング行為は一発不合格だ」

「それはバレたらの話ですよ。そんなお粗末なことはしません」

「……君はやはり医療忍者には向いてないと思うよ」

何やらヤマトは溜息を吐いて白に言ってくる。

「ところで、合格祝いのために来てくれたんですか？」

「本題は別にあつてね。明日から火の国の大名様の警護に入ってもらうよ。期間は中忍試験の予選が終わるまでだ」

「人使いが荒いですね」

暗部の活動をしてからと言うもの、白に休む時間はほとんどなくなっていた。

一部は白個人の趣味も混ざっているのですが、完全には言えないが、それでも溜め息をつかずにはいられなかった。

「と言うわけで、今夜中に移動するから準備しておいて。夜7時に迎えに行くよ」

「分かりました。ただ、明日に合否判定が貼り出されるらしいんですが、結果はすぐに分かりますかね？」

「それは戻ってからでもいいだろう？結果が変わる訳でもないのだから」

「まあ、そうなんですけどね」

「では後で」

そう言い終えると、ヤマトだったものは木分身だったようで、道の手の方へと移動すると、最初からそこにあつたかのように、自然な状態で木に変わってしまった。

白は、任務の準備をするべく、その場を後にしてアパートへと戻るのだった。

49 想定？

「準備はいいかい？」

夜7時。時間通りにヤマトはアパートを訪れてきた。

「勿論ですよ」

「では行こうか」

里から出る際に2人は暗部の面を付けた。特に変化の術を使用している訳ではないので、ヤマトと並ぶと身長差が浮き彫りになる。しかし、今は夜中であるため、誰もその事を指摘したり気にする者はいない。

そのような意味では、夜中の移動はとても楽だと言えた。

「今回の任務は大名の護衛ってことですけど、具体的には何をするんですか？」

「はつきり言って特にすることは無いと言ってもいい」

「つまり？」

「君の好きな安全な任務ってやつだよ。たぶん」

「全然具体的ではないんですが？しかもたぶんって……」

「暗部で大名様の警護をしてるんだけど、今回はそれに僕たちが組み込まれたわけだね」

その後、ヤマトより大名の警護について説明があった。説明のあった内容は、特に何もすることが無い、と言ってもいいような任務である。

木々の合間を抜けた先にある街。そこには時代劇のような街並みが広がっていた。

「なんですか？ この街は。今までの街と全く違うんですが」

「なんでも大名様の趣味らしいよ。雅がどうか」

自分の趣味だけのために、街全体を造り替えることに白は呆れていた。しかし、これだけの権力があるのであれば、誰かに狙われる恐れもあるのです、その点で言えば確かに警護は必要だろう。

街に着いてからは、待機していた暗部の者と合流する。

「今回の交代要員で新しく入ったヒミトです」

「そいつがそうか。それにしてもかなり若いようだが大丈夫か？」

「実力については保証しますよ」

「テンゾウがそう言うのであれば、そうなのだろう。では、俺は戻るから後は頼んだぞ」

「分かりました」

待機していた暗部の者はそう言い終わると、その場からすぐに帰ってしまった。

「暗部の人って結構刀を背負ってる人が多いですが、何故ですか？」

「忍術よりも武器の方が早いこともある。クナイではないのは、リーチがある分有利に働くからね。後は接近戦が得意って言うのも理由のひとつかな」

「忍術で一氣にやってしまった方が早いと思いますけどね」

「君の印速度は普通ではないことを自覚するべきだよ。それと、周りへの被害を考慮しないといけないときは、どうしても接近戦になりやすい。そういうった意味でも必要なことだ」

ヤマトは接近戦が如何に重要であるかを、交代の時間まで延々と語っており、交代の暗部が来た時はやっと解放されたと喜んでいた。

「では、所定の位置に移動するよ」

「了解です」

警護は常に8人体制で行われていた。その中で、白たちは大名の住む城の北側を担当することになる。城の北側には、小川が流れ、その向こうに広めの平地があり、その奥には木々が見えている場所だった。

白は城壁の外側を、ヤマトが城壁の内側を担当することとなった。場所については、じゃんけんで決めたのだ。負けてしまった白としては、城の内の方が更に安全であるため良かったのだが、諦めるしかなかった。

半日ごとに警護任務を交代していく。その警護の際、余りの暇だったため、小川の水を使って音を立てないように術の訓練をしていた。それを見ている者がいるとも知らずに……。

次の日の朝。警備に当たっているはずの暗部から連絡が届いた。

「君は昨日何をしていたのかな？」

暗部からの連絡を見たヤマトは、無表情でこちらへと近付いて来ながら質問してきた。

「と……特には、何も……」

あまりの不気味な接近に焦りながら後退するが、壁に阻まれ、それ以上後退出来ずにいると、更に近付いてきたヤマトは、途中で溜息を漏らすとそこで立ち止まる。

「はあ……帰ったら任務の重要性について、しっかりと教え込まないと駄目みたいだね」

「えーっと。内容が分からないんですが？」

「早い話が忍術を見せろと言うことらしい。君は昨日の夜一体何をしたんだい？」

「水遁系の術の訓練をしていただけなんです」

「それが原因か……暗部は大道芸人じゃないんだよ？ 全く……昨日それを大名様に見られていたらしい。音も無く、月明かりに照らされている龍の姿が素晴らしいとかなんとか」

「そーいや城の天辺にいますね。横からだ見えにくいと思っただんですが、上からは考慮してなかったなあ」

白は頭を掻いて誤魔化そうとするが、ヤマトは呆れているだけだった。

「面倒事はこれつきりにしておいてよ。大名様には敵が来たために対応した。ということにしてあるらしいから」

「すいません……」

それからは大人しく警護の任務を行ったが、敵が現れることは無かった。

中忍試験本選の前日。夜更けと共に大名行列は木の葉の里に向けて出発した。夜間にも関わらず、移動には大量の明かりを用意されており、そこだけが昼間のような明るさを発していた。それが長蛇の列のごとく続いているのである。白はその光景を見て呆れていた。

(お金を湯水のごとく使うなあ……勿体ない)

その大名行列と共にこの葉の里へと入り、やっと任務も終わったと

安心して帰ろうとしたのも束の間、ヤマトに白は捉まってしまった。

「どうかしましたか？」

「君にはこれからとてもいい話を聞かせてあげよう」

ヤマトはそう言うのと、白の腕を掴み連れて行った。そこから更に数時間、みつちりと任務の重要性について聞かされたのは言うまでもない。

任務から解放されても、次の日が休みなわけでは無く、アカデミーへと登校した。入口の掲示板に張り出されている紙を見て、合格していることを確認し教室へと向かう。

任務明けと言うこともあり、いつもより遅めに登校した白が教室に入ると、落ち込んでいるように見えるヒナタがいた。

「おはようヒナタ。元気なさそうだけど何かあった？」

「……私どうしたらいいのかな？」

ヒナタの落ち込み具合はかなりのものようで、自己嫌悪しているようですらある。

「結局なにがあったの？」

「去年のハナビちゃんとの試合なんだけど。……今年もあったの」

「えっ!？」

「そこでハナビちゃんに負けて……」

その時の事を思い出したのか、ヒナタは更に落ち込んでしまい、言葉が途切れてしまった。

1度勝ったので油断していたが、確かに去年、この時期に試合を行っている。それが今後行われたいとは限らないだろう。ハナビに才能があれば尚更だ。

「白。ちよつといい？」

そこへイノとサクラがやって来て、白を連れ出す。

「ヒナタが大変な時にアカデミー休んで何してたのよ。ヒナタに理由を聞いても大丈夫としか言わないし、ずっとあの調子よ。責任もってなんとかしなさいよね！」

「イノちゃんそこまで言わなくても。白も忙しかったみたいだし、こ

れから元気づけてあげればいいと思うよ?」

「僕が居ない間ヒナタの事を見てくれてありがとう。ちよつと事情があつて落ち込んでるみたいなんだ。事情が事情だけに言えないんだけど、しばらくはこの状態が続くと思う。早めに立ち直つてもらおうよ努力するよ」

「努力じゃなくて立ち直らせなさいよね。あんた親友なんですよ。私から言いたいことはそれだけ。じゃあね」

「待つてよイノ! 白ごめんね。イノも一生懸命やったんだけど、効果が無くて。ちよつと白に八つ当たりしてるだけだから気にしないで」

言いたいことだけ言い終えると、イノとサクラは教室へと戻つていった。白もゆつくりと教室へと戻つていく。

(どうしたらいいかなんて、こつちが聞きたいくらいだよ)

その日は、ヒナタから事情を聞くだけで終わつてしまう。聞き出すだけでもひと苦労だった。

内容は思つていた通りで、今後鍛錬を行うのはハナビのみとなつてしまつたようだ。ヒナタに関しては「勝手にするといい」と言われてしまい、最初の「どうしたらいいのか?」に繋がつたわけである。

結局数日間、色々と声を掛けてみたが、なかなか落ち込みは治らない。それでも、諦めずに説得を続けて少しは持ち直してきているが、完全とは言い難い。ただ、ある話題をすると、落ち込みを忘れて話を聞いてくるのである。

それはナルトのことであつた。仕方なく、そちら方面から話題を振つていくと、聞いてくる理由が分かつた。

ヒアシの発言から、親に見捨てられたと思ひ、屋敷を飛び出して我武者羅に走つたそうだ。その先で人にぶつかつてしまい、その後、そのぶつかつた仲間数人に絡まれたところを助けてもらったとのこと。

助けてもらったはいいものの、追いかけてきた日向家の人に連れ帰られたせいで、満足にお礼を言えなかつたらしく、その事も気にしていたようだった。

(いつの間になんなフラグを立てていたんだ、ナルトのやつ……)

内容に不満はあるが、意識の切り替えにはいいので、早速ナルトへとお礼をするべく作戦を立てる。作戦と言っても簡単なもので、ヒナタがお礼と共に一楽の無料券を渡すだけだ。

ただお礼を言ったただけだと、ナルトは忘れていた確率が非常に高い。何のことか分からずに首を傾げることだろう。それを見てヒナタが落ち込んで本末転倒であるため、一楽の無料券にてインパクトを与えてナルトを喜ばせるというものにした。

これならば、ナルトも喜び、それを見てヒナタも喜ぶことだろう。白としては内心複雑ではあるが……。

お膳立ては整い、休みの日にヒナタを迎えに日向家に訪れた。ヒアシから勝手にしろと言われて数日は自己鍛錬をしていたのだが、いくら鍛錬してもハナビには敵わない思ったのか、止めてしまっていた。今は説得により、違うことでヒアシを見返そうと言って勉強に力を入れさせているが、一時凌ぎにしかならないことは分かっている。ヒアシが求めているものと違うので、それが報われることはないのだ。しかし、それをヒナタに直接伝えることは出来ない。今は違うことに専念させる方がよいだろう。

日向家の屋敷の前でヒナタは待っており、離れた位置からでも、妙にそわそわしているのが分かる。

「お待ちせ」

「まだ時間よりも早いよ」

「そうだけど一応ね。それに集合時間前には着いておくものだよ。それよりも行こう」

「うん」

休みの日に外へ出るのは久しぶりなのか、それともいつもと違う道を通るせいなのか、ヒナタが服を掴んできた。そのことに対して白は懐かしむような顔をしている。

ほどなくしてアパートに着いた。白にしてみれば帰ってきたというのが正しいかもしれないが、ヒナタが家を知らないので仕方がない。

「ここがナルト君のお家？」

「そうだよ」

「じゃあ頑張ってるね。僕は外しておくから」
「えっ!？」

ヒナタは箔と一緒に居てくれると思ったのだろう。驚いて白を見つめてきた。

「お礼をするのはヒナタであって僕じゃないでしょ？」

「それは、そうだけど……」

「仕方ない。無料券は持ってきてる？」

「持ってきてるよ」

ヒナタは無料券を取り出してこちらへと見せてきた。

それを見て白はナルトの家の扉を叩く。その扉を叩く音で、中の気配がゆっくりとだが動いているのが分かった。

扉が開く瞬間に瞬身の術でその場から消えて、アパートの廊下端まで移動し、そこからヒナタたちを窺った。ヒナタは一瞬にして消えた白と、パジャマ姿で出てきたナルトを見て固まってしまったようだ。

「朝から誰だつてばよ」

「……………」

ナルトは眠そうに目を擦っているが、既に時刻は10時を回っており、普通であれば起きている時間である。しかし、ナルトが昨日夜更かして訓練（恐らくイタズラのためだと思われる）をしていたのを知っているだけに、この時間までは寝ているだろうとは思っていた。なかなか話を切り出さないヒナタを余所に、ナルトは言葉を続けている。

「ん〜?どつかで見たような……あー!お前つてば同じ教室のヒナタだろー!」

「えっと……その……うん」

「あくやっぱりな。ところで何しに来たんだ？」

「こ……これを」

ヒナタは無料券を両手で掴み、ナルトへと差し出した。ナルトはそれを見て一気に眠気が吹っ飛んだようだ。

「一楽の無料券! ありがとだつてばよ!」

「ううん。私こそありがとう」

ナルトは無料券を受け取ると、大喜びでヒナタの手を掴み上下に動かしている。ヒナタもお礼を言っているのだが、ナルトは何のお礼なのか分かっていないだろうし、ヒナタも緊張しているのか内容を伝えきれしていない。

「わ、私もう行くね!」

「おお! またな!」

耐え切れなくなったのか、ヒナタはその場を急ぎ離れてしまった。ナルトはと言うと、手を振って見送った後に、無料券を眺めてニコニコしながら家の中へと入っていった。おそらく昼は一楽のラーメンに決まりだろう。

急いでヒナタの後を追いかけて掴まえる。ヒナタは顔を真っ赤にして息を乱していた。

「はいはい、落ち着いて。息を吸って吐いて吸って吐いて」

「どう? 落ち着いた?」

「うん……ありがとう」

落ち着かせたヒナタを連れて、近くの公園へと行く。

「一応お礼も出来たことだし、よかったね」

「ちやんと出来た?」

「できた、できた」

「本当に?」

「本当に」

ヒナタは自信が無いのだろう。白を見て不安そうに何度も聞いている。白としても、これ以上不安にさせないために相槌を打ち続けるしかなかった。

50 卒業後？

あれ以来、ヒナタはよくナルトを目線で追いかけるようになってしまった。今までも気にしていたようではあるが、それが顕著になった感じである。

別段それにより成績が下がったりするわけでもなく、この時ばかりはヒアシの事も忘れていたようなので、特に止めもせず静観していた。

ヒナタがよくナルトを見ているのに気付いたのか、イノによく「止めときなさい！」と最初の方は言われていたが、今ではからかうネタにされている。それくらい会話出来るようには、落ち込みから回復したと言っているだろう。

白としては、本当ならこの落ち込むという行為を無くしてしまいたかったが、中忍試験までもたせるところか、一年しか延長することが出来なかった。なかなか上手くないものである。

アカデミーも5年の仕上げに入る。そこでの最後の試験は身代わりの術だ。

基本忍術なだけに、ここまで来ると出来ない生徒の方がいないと言っている。しかし、出来ない生徒が1名いた。いつも通りのナルトである。

ナルトは、通常の実習では身代わりの術は出来ていた。しかしその日は、明らかにナルトの体調が悪いことが見た目で分かった。まさか失敗するとは誰も思わなかっただろう。一応試験を行う前に心配したイルカが後日にするか確認したのだが、ナルトは虚勢を張って「大丈夫だってばよ！」と言い切ったのである。そして、失敗した後のナルトは、腹を押さえて教室を出て行ってしまった。

健康管理も忍者の責務の1つである以上何も言えないが、ナルトは何か悪い物でも食べたのだろうか。そして、我慢できずにトイレに向かったのだということが推察できた。

イルカは溜息を漏らすと、後続の生徒たちの試験を続けていく。肝

心な時に運が無いナルトだった。

試験も終わり、アカデミー最後の年である6年生になった。

授業内容はほぼ実習になっている。教室に戻るのは着替えや昼食の時からいだろう。休み時間でさえ、そのまま外の演習場にいることが多い。

演習にて怪我をする生徒も少なからず出ているが、それだけ実戦に近くなっているのだろう。白にとっては物足りなさすぎたが……。

合間合間に暗部としての任務も入り、更には医療忍者の中忍という肩書きを持っているため、平日に休んで病院で手術をすることもある。医療に関しては、この1年で必要経験を積んでおけとのことだったが、既に白として学んでいるので2度手間になっていた。

(報告書上がっていないのか？既に経験済みなのに。やっぱりヒミトとしての実績を上げないといけないのか？)

上に対しての疑問は尽きないが、何度聞いても「何事も経験」で済まされるため聞くことを諦めていた。

白が6年に上がったことで、ネジがアカデミーを卒業し、通常の下忍になった。

そのネジに祝いの言葉を送るべく、プレゼントと共に日向家分家を訪れたが、昼間は演習場の方で訓練を行っているとのこと、そちらの方へと向かう。

(確か担当上忍ってガイだったよな。直接会ったことないけど、やっぱり暑苦しい人なんだろうか?)

演習場へと着くが、生憎ガイの姿は無かった。代わりにボロボロになって俯せに倒れている人と、その人に対峙しているネジ。それを少し離れた位置にて見ているテンテンの姿があった。

恐らく倒れているのはリーだろう。顔が見えないので何とも言えないが、スリーマンセルの班メンバーを考えると間違いないはずだ。

「おつかれさま〜」

「白か。久しぶりだな」

「えつと。知り合い？」

「ああ」

テンテンの問いに、ネジは気まずそうに答えている。

「白と言います。アカデミーの6年生です。ネジには色々とお世話になりました。と言うわけで、はいコレ卒業祝い」

「……………」

白はそんな気まずそうなネジに近付き茶菓子を手渡した。中身は甘味堂の串団子なので、もしこの場で食べても、他の人に分けることも可能だろう。

その光景を見てテンテンは何やら笑うのを堪えていた。ネジは下忍になってもクールな性格だからだろう。なかなか見れる顔ではない。

「中身は食べ物だから早めに開封することをお勧めするよ」

「分かった」

テンテンは落ち着いたのか、自己紹介してきた。

「私はテンテン。そこで寝てるのがリーって言うの。よろしくね」

「よろしくお願ひします」

倒れているのはリーで間違いなかった。

「それにしてもやりすぎじゃない?」

「そいつは体術だけで忍者になると言っているんだが、はっきり言って白以下だ。体術に自信があるようだったから多少は期待したんだがな」

「リーがネジに最初に負けた時に言っていたのがこの子ってわけね。そんな風には見えないんだけど」

「相手を見た目で判断するのは危険だ」

「たぶん過大評価してるよ。それにリーさんだって、これからなんだろうし、例えば今がどうあれ、油断はしない方がいいんじゃないかな? (まだ下忍成り立てだから、体術もそこまでじゃないだろうし)」

「白がそう言うのなら、そうなのかもな」

ネジはリーを見て、白の言葉に半信半疑のようだ。しかし、この1年と少しでかなり成長するはずなので、白の言っていることは間違いない。

「それでは、訓練の邪魔になりそうなので失礼しますね」

「またね」

見たところ特に大きな怪我もないし、かなり手加減されたのだろう。倒れたまま、と言うよりも気絶したリーを放置してその場を後にした。

数か月後に、他里に行く任務が来た。

今回の任務は、新しく出来た里への中忍試験の案内をするのではなく、来年からの中忍試験参加に伴う調整を行うようだ。白たちはその調整役の警護である。

新しく出来た里の名前は、音隠れの里。出来たばかりと言うこともあり、木の葉の里に比べると里の規模がかなり小さく、住んでいる人も若い人ばかりだった。

（大蛇丸が里長だっけ？ まあ、この段階ではまだ安全だろうけど、ここにはあまり近付きたくないなあ。目を付けられたら最悪だし）

本来であれば、出来たばかりの里の方から調整に来るべきなのだろうが、木の葉としても音隠れの里の状況を確認するために、調整は音隠れにて行うことになったようだ。警護の内容にその事が含まれていると説明を受けていた。

実情を知る白としては、どう報告するべきかと悩んでいたが、結局は見た目通りの報告書を行った。一応、注意喚起として「出来たばかりの里であるため、今後の動向には注意が必要」と言ったのだが、その真意をどこまで上が汲み取るかは分からない。

変に本当の事を報告しないのは、本当の事を報告すると、ダンゾウ辺りに危険視されかねないためだ。いつの断面で大蛇丸と接触しているのかが分からない以上、余計なことを報告することは出来なかった。

「以上が中忍試験の概要となります。実際の内容については、その年に別途調整を行いますので、音隠れの里から調整役を派遣していただきます。説明は以上ですが何かご不明な点はございますか？」

「いえ。特にありませんよ」

音隠れの里の調整役は見たこともない男で、特に護衛を付けるわけ

でもなく1人で対応していた。

木の葉側も調整役は1人なのだが、他里と言うこともあり、暗部4人付きで行動している。敵地と分かっているだけに、少ないとは思いますが、ここで何かあろうものなら、大蛇丸の計画が潰れることになるだろう。そのため、安全だと分かっているにしても、白としては逃げる準備を整えていた。

話し合いも終わり部屋を退出する際に、音隠れの調整役が中忍試験とは関係ないことを話した。

「木の葉の里は優秀な暗部の方が多そうではないですね。そちらの方などかなり若そうに見えるのですが」

明らかに白を見ながらの発言である。この時、白は面を付けているだけで、特に変化の術を使用しているわけではない。長い髪が邪魔なので、結んで服の中に仕舞いこんでいるくらいだ。

「暗部には優秀な者しかおりませんよ」

「これは失言失礼しました」

「いえ。それではこれにて」

(変化の術くらい使用しとくべきだった……)

無事に木の葉の里へと帰ることが出来たが、音隠れの里の調整役が、白を気にしていたのは間違いない。今更どうしようもないため、今取り掛かっている忍術の完成を急ぐことにした。完成させるにはある条件が必要なのだが、それについても見通しは立っているので、アカデミー卒業まで生き残ることが出来れば、今後の生存確率は飛躍的に上がるだろう。

木の葉の里に帰ってきてからも、訓練に任務にアカデミーと自由になる時間はなかった。そうして過ごしていると、火影より呼び出しがあった。

「何か用ですか?」

「その態度。お主も変わらんの」

「ちゃんと人によって使い分けてるんで」

「……まあよい。今回はヒミトの件で呼んだんじや」

「なんかしましたっけ?」

ヒミトとしての活動は、ヤマトからのお仕置き、もとい、オハナシをした時から真面目に取り組んでいるため、ミスはもちろんのこと不手際など無かったはずであった。そのため思い当たる節が無かったのである。

「ヒミトを本日より上忍として扱うのでそのつもりでな」

「はっ？　って言うかそんな簡単になれるの？　試験とかは？」

火影の言った言葉にかなりの衝撃を受けていた。特に何もしたわけでもないのに、いきなり上忍である。

「中忍になってからの実績と里への貢献度。それで試験を受けることは可能じゃが、他にも上忍数名より推挙の上があった者で、火影自らが認めた者については上忍になれるようになってる」

「新手の嫌がらせと思っ正しい？」

「忍びにとつて上に上がるということは名譽なことだと思っがの」

「危険な任務が増えそうで嫌なんですが？」

「安心せい。上忍とは言うても医療忍者としての上忍じゃ。お主の腕がかなりのものだと思っておるぞ」

「まあ。それなりには自信はあるけど……」

この時には、一般的な手術から検死まで一通り出来るようにはなつていた。助手すらも、ほぼ必要ないくらいである。

「それにの、医療忍者はなかなか育たんのじゃ。まず適性が無ければ話にもならん。適性があつたとしても、それが結果に繋がるわけでもないしの。優秀な者は早々に上げてしまいたいのじゃよ」

「そんなものか。それで、上忍になつた時に損することは？」

「得することの方が多しと思っがの。まあ、それについてはこの本に記載してあるので読むとよい。どれを損と思っかはお主次第じゃしの」

「いっばいある訳ね……」

白は肩をガツクリと落とし火影から一冊の本を受け取り、その場でパラパラと読みはじめる。しかし、本の内容——条項が多すぎて溜息を漏らした。

「これってこの里の条項が全て載つてない？」

「当たり前じゃ。飯にも上忍ならば知っておかねばなるまい」

「他の上忍みんな知ってるの？」

「……たぶんの」

「知らないわけね」

火影は惚けるつもりなのか、明後日の方向へと目を逸らす。こんな条項を全て覚えている者など極少数なのだろう。

「最低限知っておくべきことはヤマトより聞いておるはずじゃ。後は医療方面を覚えればいいじゃろ」

「まあ、暇な時でも見とくよ。誰かさんのせいで忙しいから！」

「さて、無事に話も終わったことじゃ戻っていいぞ」

「もう突っ込むのにも疲れて来たよ」

火影の執務室を出てアパートへ戻ると、ヤマトがやってきた。

「やあ」

「また任務ですか？それとも医療関係の依頼ですか？」

「おいおい。僕はそんなことばかり君に持ってきてるわけでは無いよ」

「他に何かありましたっけ？」

「取り敢えず中で話そう」

ヤマトは手に袋を持っており、それを机の上に置くと中身を出した。袋の中身は料理であり、箱から出した瞬間に良い香りが漂い始める。

「上忍おめでとうー！」

「ああ。そういうことですか。えーっと、ありがとうございます」

「あんまり嬉しそうではないね」

「これからもっと忙しくなるのかと思うと気が重くて」

「それについてだけど、上忍になったことで言っておくことがある」

「なんです？」

「折角の料理が冷めてしまっっては勿体ないから食べながら話そう」

この日に白の卒業後の事などについても色々と聞かされたのだった。

原作開始

51 卒業？

ヤマトより聞かされた内容は、火影とヒアシとの取引内容を含んだものであった。

「そんな取引やってたんですか」

「木の葉の里としては当然のことだと思うよ。……君のことは別にして」

「それが罷り通るんですね」

「以前から出ていた案なだけに今回試験的に行ってみるらしい。そういった意味で君は適任ということだね」

食事をしながらの話だったが、途中で白は箸を動かす手を止めてしまう。卒業後の進路が決まっていることは、分かっていたつもりだったのだろう。しかし、今ヤマトから聞いた話が本当だとすると、考えていたよりもだいぶ楽な内容だった。

食事を終えてヤマトが帰宅した後も、白は話の内容を思い浮かべながらその日は眠りについた。

白が上忍に就任してから変わったことと言えば、今のところ指示する側に回ったくらいだろう。指示と言うより教育だろうか。週に1回という頻度ではあるが、手術や検死以外にも医療忍者の下忍に対して講義を行うことになっていた。

本来であれば、こういった手順にて、下忍過程を過ごしていくのかと見せつけられていた。白の時とは大違いである。講義の内容も易しいもので、手取り足取りとはよく言ったものだった。白の時はいきなりの中忍試験だったので、余計にそう思わざるをえなかったに違いない。

暗部の方もヤマトと一緒に行動していた時とは違い、火の国内限定ではあるが、単独任務が増えてきていた。任務内容については基本的に調査ばかりだ。任務内容については、ヤマト曰く配慮してくれているとのことだったが、白にはその配慮があまり伝わってはいなかった。

た。

調査と言つても簡単に情報が集まるわけでもなく、数人は手にかけている。情報収集にも限界があるので、尋問を行つたりもするからだ。しかし、尋問のスキルが白には無いため、見せしめにして情報を聞き出していた。元々が潰すための証拠集めといったものなので、それも気にしないでいい要素の1つだったりする。

後は中忍試験の試験官の1人になったことだろう。医療忍者の方ではあったが、試験官の中に最低1人は医療忍者を配置することのことだ。もし、試験内容に不備があれば、すぐに対応できるようにするためではあるが、他にも医療忍者が居る中で選ばれる辺り運が無い。

その中忍試験のための打ち合わせで、白は5日間ほど部屋に缶詰にされてしまっていた。試験内容を決めるのに3日使い、内容に不備が無いかを確認するのに残りの2日というものだ。

結果的に、特に質問してくる受験生がいなかったで白は安堵していた。毎回あのようなことをしているのかと思うと、白に無駄なことをしていると思わせるには十分だった。

秋休みも終わった頃に進路に関する書類が配られた。持ち帰ってから、よく検討して提出するように、ということだったが、既に白は決まっている身なので、その場で提出していた。もちろん配属先は医療忍者である。

「やっぱり考えは変わらなかったか」

「他には何があるんですか？」

「そうだな。通常の下忍だったり、情報部だったり。中には親の意向で、アカデミーを出ても忍びにならないなんてことがある」

「忍びにならないなんてありませんか？」

「特に木の葉の里の情報を持つていては無いからな。それに誰も忍びに向いているわけでは無い。強制は出来ないさ。ただし、保護者とは話をさせてもらうけどね」

「そうですね……（普通だったらかなりの選択肢があるんだな）」

そんなこんなで色々あったが、概ね束の間の平和を満喫していた。後は卒業試験の日を待つばかりであった。

そして、アカデミー卒業試験前日。いつものごとくナルトはイタズラをしに出かけてしまった。明日が試験と言うこともあり、教室での注意事項を言っていたのだが、他の先生がイルカを呼びに来たため自習となる。

「またナルト君かな？」

「そうじゃない？と言うかそれ以外考えられないよ」

「ナルト君いつも元気だね」

「なぜあれだけ怒られてもイタズラをし続けるか分からないよ（ヤマトさんに怒られたら静かになるような気がするな）」

「何事も前向きに捉えてるから」

「行き過ぎだと思っけどね」

白の眼鏡を通して見たナルトは、火影岩に落書きをしている真つ最中であつた。見える範囲では上からロープで吊つているようだ。2本のロープが上から伸びているのが見える。

（ロープとかいつ切れるか分からないものに頼るなんて怖くて今じゃ考えられないな）

そんなことを白が考えていると、イルカの声が聞こえてきた。

「何やってんだ！ 授業中だぞ！ 早く降りてこい！ 馬鹿者ー」

!!!

「やべー！ イルカ先生だ」

（うわっ！ ぐるぐる回るな！ 気持ち悪いだろ！）

ナルトはイルカに声を掛けられて慌てているのか、恐らく足を岩に付けようとして失敗し、その場でグルグルと回転し始めたようだ。それをゴーグルを通して見ていた白にとってはたまったものではない。白はすぐに見るのを止めて目を擦り始めた。

しばらくすると、縛られたナルトがイルカに連れられて教室へと戻ってきた。イルカの怒鳴り声が教室に響き渡るが、ナルトは全く堪えていないようだ。

「はい、はい」

と、ナルトは空返事をしている。

その態度と言葉にイルカは更に怒ってしまい、復習テストを行うこ

とになった。テストは変化の術で先生に化けるといふものだ。あの訓練の成果で、ナルトの変化の術に関しては完璧であった。しかし、白はこの先を知っているだけに溜息を漏らしている。

そこで、白はナルトの番の時に、ヒナタがどういう反応をするのか見ることにした。

ナルトは予想通りお色気の術を使用し、イルカは鼻血を出して仰け反っている。

「ヒナタ。そろそろ目を覚まそうか」

「そんな……」

ヒナタはナルトを見てショックを受けているようだ。それはそうだろう、今までこのような術を見せたことは無い。しかし、これから先では結構な頻度で使用する術になる。女性に見せるものではないが……。

「ナルト君はね、ああいうことを考えてるんだよ」

「そうだったんだ……」

ヒナタは何やら考えて、下を向いて残念そうな顔を見ると、何かを決意したような顔をして頷いた。

「私頑張るよ!」

「えつと? まあ、頑張るのはいいことだね」

「<ああいう人がタイプなんだ>」

「えっ!?!」

何やら聞き捨てならないことをぼそりと呟いたが、白の順番になって呼ばれたので教壇の方へ向かわねばならず、白はヒナタに確認することが出来なかった。

ヒナタも次の順番の為、テストが終わってから確認してみたが、はぐらかすばかりで、まともに取り合うことはなかった。

そして試験当日。卒業試験は分身の術で3人以上に分身するといふものだった。1人ずつ隣の教室へと呼ばれていく。その為、隣の教室に居た生徒もみんなこの教室にて集まっていた。

いつも20名いる教室に、倍の40名いると、少し圧迫感があるのは仕方ないだろう。順次呼ばれて行き、教室にいる人数が半数以上呼

ばれたところに、とうとうナルトが呼ばれた。そしてしばらくすると、イルカの「失格！」という大きな声が聞こえてくる。

「おい。まさかと思うけどナルトのやつ失敗したのかな？」

「そうじゃないか？」

「ウソだろ？あんな簡単なので失敗するかよ」

「でもナルトだぜ？」

「それもそうだな」

教室に残った生徒たちも、先ほどのイルカの声が聞こえたのだろう。口々に先ほどの失格と聞こえた件について話をしている。ヒナタは驚きのため固まっているようだ。

少しして白も隣の教室に呼ばれた。担当はイルカとミズキである。その担当が座っている前の机の上には、木の葉の里の忍の証である額当てが置かれていた。

「いつでも始めていいぞ」

「はい。分身の術」

それなりの成績を残すために、白は少し多めの5人に分身した。それを見て先生たちは満足そうに頷く。

「合格だ。この額当てを渡そう」

「ありがとうございます」

白はイルカから額当てを受け取り、更に隣の教室へと移動した。そこには試験を受けた生徒たちがいたが、ナルトの姿は見えない。

少ししてヒナタも教室に入ってきた。恐らく失敗するのは、余程の事が無ければナルトくらいだろう。

ヒナタは辺りをキョロキョロと窺っている。ナルトのことを探しているのだろう。

「ナルト君なら居ないよ」

「っ!？」

「取り敢えず卒業おめでとう」

「ありがとう。白も卒業おめでとう」

「ありがとう」

「ナルト君落ちちゃったんだ……」

「きつとイルカ先生の事だから、補習させて再試験させるんだとおもうよ」

「だから居ないのかな？」

「さあ、そこまでは分からないかな」

この日卒業と共に、その後の進路についての話があった。40名の内1名（ナルトは失格として）は除外して、12名は忍びにならずに家の稼業を継ぐようだ。残りの27名については忍びの道に進むとのことで、忍者登録後に班分けがある。忍者登録は明日行い、明後日に班分けを行う予定だ。

白にとって、今日と言う日は重要な案件があるので、任務などに呼ばれないよう隠れていなければならなかった。

そしてその時はやってきた。

（やつと動いてくれたか。いつ動くかと待ってたぞ。それにしても、なんで誰も気づかないんだ？　もしかしてまたイタズラと割り切ってる？）

白が待っていたのは、ナルトが火影の家に侵入することだった。それにより、ナルトが禁術の記された書を持って移動する。流星に侵入に気付いた火影に見つかるが、例のお色気の術にて一撃で沈んでいた。この世界の男の、女性に対する免疫の低さを実感出来る出来事だった。

ナルトは秘密の修行場にて巻物を広げ始めた。近くの小屋からの明かりと、月明かりにて十分に視界は確保できている。

（多重影分身が何故禁術なのか不明だけど、これ覚えたかったんだよね）

白はナルトのゴーグルからの情報を基に、内容を記憶して印を組んでいく。チャクラを等分に分けるだけあって、数を増やせばチャクラ量が減り、少なければ増える。通常の戦闘に使用できそうな数は、白としても10体が限界だった。時間を短くすればもっと増やせるだろうが、それでは役に立つ場面が少ないだろう。

（数が少ない時は影分身を使用して、一気に増やすときは多重影分身、といった感じかな？　多重影分身で短時間とはいえ1000体とか

九尾の力は凄いな)

白は覚えたことに満足すると、アパートへと戻っていく。アパートに戻ったそこには、暗号にて書置きが残されていた。書置きの中身はナルトの捜索である。白は変化の術を使い、暗部の面を装着して森の方へと移動していった。

白が森へと入った時には、既に局面は最終段階に入っており、ナルトがミズキをボコボコにしている最中だった。

白がナルトたちの元へ到着した時には、額に木の葉の額当てをしたナルトが、イルカに抱きついて喜んでるところだった。イルカは痛い痛いと言いながら、ナルトと共に笑っている。身体の状態からして死ぬことは無いだろう。

「喜んでいるところすいませんが、書の回収をさせていただきますよ。それとあなたの応急処置をします」

「ああ。すいません。お手数おかけします。ナルト！ お前も謝れ！」

「悪かったつてばよ」

「私は任務で動いてるだけです」

イルカの一番ひどい傷は背中の中だったので、そこだけ集中的に治し、増血丸を渡す。

「後は病院に行けば十分でしょう」

「ありがとうございます」

「すげえ！ どうやるんだつてばよ！」

白は息巻くナルトから書を受け取り、-googleに掛けた術を解いた。今からは-googleの代わりに額当てを着用するので、googleに用は無いからだ。その後白は、ボロボロになったミズキを抱えて火影の元へと向かっていった。

52 班構成？

ナルト事件の翌日。晴天の中、火影岩を背景に忍者登録用の写真を撮影が行われた。その後、教室に集められて1人1人に各自の事を記載する用紙を配られていく。そこには、先ほど撮影された写真が既に貼り付けられていた。

「ナルト、本当にあの顔で写真撮ったのか……」

「ナルト君やっぱり合格してたんだ」

白は呆れ顔でボソリと呟き、ヒナタは安堵の溜息を漏らしている。

ナルトの顔には墨と思われる物で偽歌舞伎役者のような模様を描いていた。本人は格好良いと思っっているのだろうが、傍から見ると可哀想な人しか見えない。教室の中で明らかに浮いていた。

担当の先生は特に何も言わずに、記入された用紙を回収すると、教室を出て行ってしまふ。もし、担当していた先生がイルカであったならば、叱ったうえで再度撮り直しをさせることだろう。

「明日の説明会って班決めだよな？どんな班になるのかな？」

「大体の予想であれば言うけど？」

「予想で十分だよ」

「まずイノとシカマルとチョウジは同じ班になるだろうね」

「どうして？」

「木の葉のイノシカチョウって聞いたことない？」

「あるけど……もしかしてその関係？」

「そう。だから、あの3人は組むことがほぼ確定してる。後は、サスケ君とナルト君が組むことくらいかな」

「後のメンバーは誰になるの？」

「誰だろうね？」

ヒナタはナルトと一緒に班を望んでいるようだが、そうはならない。班構成については、原作知識として白は既に知っているのだが、それを教えるわけにはいかない。

それに、白というイレギュラーの組み込まれ方もあるので絶対とは言い切れないからだ。そのため白は、明日の説明会まで楽しみにして

おくことを伝えていた。

その後、別の教室に1人ずつ呼ばれていく。自分で記入したプロフィールを基に面談をするためだ。ここでの面談も明日の班構成に少し影響を与えるということだが、白には関係のない話だった。

ナルトが呼ばれてしばらくすると、何やら騒がしくなってくる。

「絶対何かやらかしてくれるよね」

「ナルト君、大丈夫なのかな？」

「たぶん却下されてるだろうね。あの顔写真だと」

「それにしても何か言い合いしてるみたいだけど……」

言い合いはすぐに終わったようで、ナルトは再度写真を取りに屋上へと移動していったようだ。その後を小さい子供が追いかけている。

白の順番となり、教室に入ると、先ほどの担当の先生と火影が座って待っていた。

「失礼します」

「そこに座りなさい」

「はい」

火影たちの机から少し離れた位置にある椅子に白は腰かけた。普通であれば、火影の前ということもあり、委縮する生徒もいるのだろうが、白からはそのような態度は窺えない。担当の先生はそれを良い方に捉えたのか、通常であれば、生徒の緊張を解すためにも一般的な会話を挟むのだが、白の場合には、前置きなく本題に入っていた。

「登録書の注意事項については読んでもらえたかな？」

「はい。既読済みです」

「記載事項についても問題ないようだし……。火影様から何かありますか？」

「忍びとして、これから色々あるとは思いますが頼んだぞ」

「アカデミーを卒業したばかりの私に、出来ることは少ないと思いますが、善処していこうとは思いますが」

火影と見詰め合うことしばし、担当の先生が割って入った。このままでは進まないと思ったのだろう。

「以上で終わりです。明日の説明会には時間までには来るように」

「分かりました。失礼します」

白はヒナタに先に帰る旨を伝えると、木の葉の里の入口まで行き、門を少し出たところで立ち止まった。

「おいおい。そこを勝手に出られると困るよ」

後ろから門の係の者が、慌てて外に出ようとする白に声を掛けてきた。

「安心してください。これ以上は行きませんよ。アカデミーを卒業したばかりなので、これからの事を思って、外を見てみたかっただけです」

「それならいいんだが、勝手に抜け出すのだけはやめてくれよ」

「数分邪魔にならないように門横に居させてもらいますね」

「数分くらいならいいが、直ぐに戻るんだぞ」

「はい」

門の係の者はそれだけ伝えると、元の位置に戻っていった。それを確認した白は、係の者に言った通り門の横へと移動する。そして、ここで影分身を使用した。

「では手筈通りに」

白は、影分身に荷物を持たせて送りだし、白は木の葉の里へと戻っていった。係の者に言った通り数分の出来事だった。

忍者登録を終えた翌日。アカデミーの一室を借りての説明会が行われた。総勢28名。みんなそれぞれが好きな席に座っている。ヒナタはナルトの隣に座る勇気が無いのか、斜め後ろの位置に座ってナルトを眺めていた。その隣に、白はいつもの定位置と言わんばかりに座っている。

教室にだいぶ人が増えてきたところで、サクラの怒鳴り声が白の元へと聞こえてきた。

「ナルトどけ！ 私はあるたの向こう側に座りたいのよー！」

そう言うと、サクラはナルトを抑え込み、まるでそこには誰も居ないかの如く隣の席へと移動していく。

(この後って確か……あれ見たらヒナタは幻滅したりするのかな?)

ナルトは、サクラに乗り越えられてから機嫌が悪くなり、唸りなが

ら机に突っ伏している。サクラの対応が気に食わなかったのだろう。そうしている内にナルトがサスケの目の前へと移動して、机の上から俗にいうヤンキー座りでサスケを睨みつけ始める。一触即発の雰囲気、それを見ていたヒナタは慌てていた。

ナルトの態度に、周囲に居た女子たちが怒り始めて、ナルトに対して罵詈雑言を吐いていく。いつまで経っても、なんらかしら騒ぎ事を起こすことで有名なナルトなだけに、女子からはかなり嫌われていた。更に、毎回サスケに絡んでいくことも要因の1つだろう。

そして、睨みあいが続いていた時に、ナルトの後ろに居た男子の肘が、ナルトの尻に当たり、それがナルトを押す形となった。睨みあいの距離が短すぎたせいだろう、そのままナルトは姿勢を保持できずに、サスケとキスするはめになっている。

(顔が近かったとはいえ、あれを避けられないとなると、サスケの反応速度はまだまだかな)

白は他人事のようにその光景を見ていた。ヒナタはと言うと、呆然としてそれを見つめている。

「ヒナタ。正気に戻って」

「!? ……夢を見てたみたい」

「夢じゃないから。現実だから」

「……やっぱりそうなんだ」

やはり、先ほどの光景を認めたくはなかったのか、ヒナタは夢と思いつつも、事実を伝える。それを聞いて、ヒナタは顔を下に向けて落ち込んでしまった。

周囲の女子たちも驚きで固まっており、ナルトを押した男子も、何が起こったのか聞かされてバツが悪そうにしている。

そんな中、女子の中で一番最初に現実に復帰したサクラが、ナルトをボコボコにしたのは言うまでもない。

「決めたよ白ー！」

「いきなりどうしたの?」

俯いていたヒナタは、何かを決心したような顔を上げて、白に宣言

した。

「私がナルト君を元の道に戻すよ！」

「まあ、頑張つて……」

「これから頑張つていけば、元に戻るよね？」

「かもね……（ポジティブ思考なのはいいけど、こういうポジティブは求めてないよ！）」

ヒナタは、ナルトとサスケがデキていると確実に勘違いしているようだ。白はそれを修正する気にもなれずに肩を落としていた。

時間になり、イルカが教室へと入ってきた。それを見てみんなそれぞれ席へと着いていく。全員が席に着いたのを確認してからイルカは説明を開始された。イルカの説明にあった、スリーマンセルについて反応が上がった。それはそうだろう、この場に居るのは28名。3人で割ると1人余る計算になる。

「説明は以上だ。ただ、みんなの言いたいことも分かる。人数の関係上1つの班のみはフォーマンセルである基本小隊になる。やっていくことの内容は変わらないんだ、あまり気にするな。それから、各別に1人ずつ上忍の方が付き、その上忍の方の指導のもと任務をこなしていくことになるので、指示には従うこと」

（さて、他の班員にたぶん影響は出ないだろうし、同じ班員と仲良くしましょうかね）

班の1部メンバーと担当上忍については、ヤマトより聞かされているので白は知ってはいるが、それが他の班に影響するのかまでは分かっていなかった。

「では次に第7班。春野サクラ、うずまきナルト、それからうちはサスケ」

サクラとナルトはそれぞれ一喜一憂していたが、次の発言に、教室に居た生徒たちは呆れる者もいれば、固まってしまう者までいた。

「イルカ先生！なんでよりによって優秀なこの俺が、こいつと同じ班なんだってばよ！」

（アカデミーでの成績が、毎回最下位だったのに自分の事を優秀と発言するとはね……）

イルカも呆れたようにナルトを見て説明したが、それを引き金にしてナルトがサスケに喰って掛かる。しかし、間にいるサクラに防がれ、逆にやられていた姿を見ると哀れを誘うものだった。

「次に第8班。犬塚キバ、油女シノ、日向ヒナタ、それから白」

（やっぱりヒナタ以外のメンバーは変わらないか）

「俺の班が4人かよ」

「始めから基本小隊で行動出来る。効率的だ」

白の元へキバとシノが話しているのが聞こえてきていた。キバは他の班と違うことが不満なようで、ぶつぶつと文句を言っている。シノはキバとは違い前向きな考えを持っていた。

「一緒の班だよ！頑張ろうね」

「そうだね」

「嬉しくないの？」

「先生の説明は終わってないよ」

少し待ってから教室が静かになったのを確認し、イルカは言葉を続けた。

「ただし、この班については以前から検討されていたフォーマンセル。スリーマンセルの部隊に1人医療忍者を付けるというものだ。そこで、白にはその1人になってもらう予定だ。任務時には一緒に行動するだろうが、訓練などは別行動することもあるだろう。その辺りは担当の上忍の方に聞いてほしい」

イルカはそう言い終えると最後の班員を言い始める。

「そういうわけで班は同じでも、居ないことが多々あると思う」

「でも一緒の班には変わりないよ」

「それはそうだけどね」

イルカは平均を取ったと言っているが、ある程度の圧力が掛かっているのは、班構成を見れば明白だった。明らかに偏りが出ている。偏りのある中で平均的にするのにイルカは苦勞したことだろう。

「午後からは、担当の上忍の方を紹介するからそれまで解散！」

白はヒナタと共に食堂へと行き食事を済ませて、ヒナタに班のメンバーについて訊ねていた。

「ヒナタは同じ班の人の事を知ってる？」

「よくは知らないけど、子犬と一緒に居る人とサングラス掛けてる人だよな？」

「そうだよ。あつ！こっちに來るみたいだ」

噂をすればなんとやらで、キバとシノが白たちの元へと歩いてきていた。真っ直ぐに白たちの元へと向かっていることから、何かしらの用事があるのだろう。

「白と……ヒナタで合ってるか？」

「合ってるよ。僕が白でこっちがヒナタ。これから同じ班なんだしよろしくね」

「やっぱり俺たちの事知ってるか、まあいいや。俺はキバだ。それと頭の上に居るのが赤丸。よろしくな！」

「クウーン」

「シノと言う。よろしく頼む」

「ヒナタです。よろしくお願いします」

班内での挨拶もそこそこに、キバが本題を切り出してきた。

「てことで挨拶はこれくらいにして、白に聞きてえんだけど、俺たちの担当上忍って知ってるか？」

「多分でいいかな？」

「毎回多分とか予想とか言ってるみたいだが、外れてねえだろ？だからそれでいいぜ」

「女の人で幻術使いということくらいかな」

「女の担当上忍かあ」

「上忍である以上、男も女も関係ない。要は実力の有無だ」

キバは大丈夫なのかと懐疑的な顔をしている。シノについては、顔を隠しているので表情は不明だが、言葉の内容から、実際に会って判断するということだろう。

「それにしても、そんなこと、どこで知ってくるんだ？」

「私も知りたいかも」

「興味があるな」

3人共に知りたかったようだ。白は、この件について事前にヤマト

より聞いていたとも、それ以前から知っていたとも言えなかった。

「色々と秘密があるんだよ」

「これだから女って奴は……。隠し事が多すぎるだろ」

「やっぱり秘密なんだ」

「残念だ」

（紅上忍が新米だから、補佐として付けられたなんて言えないからねえ）

それから、昼休みも終わりに近付いてきたので、4人揃って教室へと戻っていった。

53 自己紹介?

昼休みも終わりに近づき白たちが教室へと戻ると、今度はバラバラに座らずに班ごとに座っていた。

白たちも空いている机に座るが、人数の関係上4人で1つの机は狭かったので、2人ずつで分かれて座っている。

そうして昼休みが終わるとイルカ先生に続いて、上忍が入ってきた。上忍は男ばかりだったが、その中で1人だけ女がいたのですぐに分かったのだろう。8班のメンバーは、みんなそちらの方を見ていた。

「8班のメンバーは私についてきなさい」

そういうと、唯一の女である紅は、教室を出て行ってしまった。8班のメンバーは急いで立ち上がり、教室を出て紅の後に続く。

(紅さんって、近くで見ると輪廻眼に見えるな)

教室を出て到着した先は演習場だった。ここで何をするのかとみんな疑問に思っているようだ。

「私は夕日紅。あなたたちの担当上忍よ。まずは自己紹介として、あなたたちの事を教えてちょうだい」

「俺はキバだ！ って他に何を言えばいいんだ？」

「何でもいいわよ。たとえばあなたの頭に居る子についてでもいいし」

「ああ！ こいつは赤丸っていうんだ。赤丸！」

「ワンツ！」

「俺の家族だ。赤丸と散歩するのが日課だな」

その後も、赤丸との話が続いたが、途中で紅に止められ次の者の自己紹介へと移った。キバはまだ語り足りなさそうに少し不満顔である。

「油女シノ。蟲使い。趣味は虫を集めること、以上だ」

「お前簡潔すぎるだろ！」

「では次行きますね。白と言います。以上です」

「おい！それこそ名前以外何も分からないじゃねえか！」

「えっと。自己紹介してもいいのかな？」

「ヒナタ頑張って」

「無視するんじゃない？」

「虫の話か。それならば話すことは色々ある」

「お前はちよつと黙ってる！」

「言い争いはやめなさい。言いたくなければ無理に言わせる必要はないわ。けど覚えておきなさい。この班はこれから一緒に行動していくのだから、今の内から仲間として、相手に自分の事を知っておいて貰わないと、後々困ることになるし、チームワークなんて生まれないわよ」

紅は明らかに白を見ながら言ってきた。白は改めて自己紹介を行う。

「改めて、名前は先ほど言った通りです。好きなことは自由があること。嫌いなことは自由が無いこと。趣味は色々です」

「それってあんまり前と変わらなくないか？」

「ちゃんと好き嫌いまで言ったよ？」

「んん。確かにそうだよな」

「では次ヒナタどうぞ」

「<いいようにあしらわれたな>」

シノの呟きはキバには聞こえなかったようだ。白はシノに向かって、人差し指を口に当てて黙るように促している。

「日向ヒナタです。えっと。好きなものは甘い物です！ 嫌いなものは甲殻類が苦手です！ 趣味は押し花をします！ 以上です！」

ヒナタは、大きな声で一気に捲し立てるように言い終わると、顔を真っ赤にして下を向いてしまった。みんなの前での自己紹介が恥ずかしかつたのだろうか。

「ところで、なんでこんなところで自己紹介なんだ？」

「演習場に来たってことは、演習場を使用するようなことをするってことじゃない？」

「白の言う通りよ」

紅は白の言葉に頷くと、この演習場に来た目的を話し始めた。

「今からあなたたちの実力を見せてもらおうわ。一応アカデミーの方から聞いてはいるんだけど、実際に確認してみないと分からないからね」

「確かにその通りだ。俺も担当となる上忍の実力を知っておきたい」
「なんだ。そういうことかよ」

「ここに来た時点で気付いてよさそうだけど……」

「うっせーな！ 細かいことをぐちぐちいつてんじゃねーよ！」

「はいはい」

「やめようよ、2人とも」

ヒナタの仲裁により、2人は言い争いを止めた。キバはまだ何か言いたそうにしていたが、白はそれを素知らぬ顔で受け流している。

「取り敢えず、自己紹介順に実力を見せてもらいましょう。他の人は離れていて」

「よっしゃ！ 俺からだな！」

キバはやる気満々の表情で、紅を見ると赤丸に声を掛けた。周囲の状況など気にしてもいないようだ。

「やるぞ赤丸！」

「ワンツ！」

キバ以外の3人が離れる前に、キバは紅へと赤丸と共に襲いかかった。

「はあ……。全く」

キバの行動に飽きれながら、紅はキバと赤丸の攻撃をあしらう。キバと赤丸との連携は、この時点ですでに完成されていると言ってもいいだろう。しかし残念ながら、その連携が通じる相手ではなかった。掠りさえさせないのである。

「ちくしょう！ なんて当たらねえんだ！」

キバは攻撃が当たらないことに苛立ち始め、頭に血が上っているのか、攻撃が段々と単調になっていく。そこまで様子見をしていた紅は、キバに一撃を入れるとあっさりと気絶させた。

「ここまでね。白はキバを看なさい。次はシノ」

「はっ」

「了解した」

白はキバの服を掴み引き摺るようにして、邪魔にならない位置に移動している。赤丸が心配そうにキバの周りを回っているが、ただ気絶しただけで外傷はほとんどない。少しあるのは、攻撃を躲かれた時に自分で地面に転がった結果だ。白は特に気にした様子も無く、そのままキバを寝転がし放置していた。

「俺はキバのようにはいかない」

「いつでもいいわよ」

紅とシノの2人は、その場で対峙していたが、先に動いたのは紅の方だった。瞬身の術にて最初に居た場所から移動している。紅の元居た場所には虫が集まっていた。

（虫は結構厄介だよな。小さいし気付かれにくいし）

シノは虫を使って攻撃しているが、虫たちが全く追いついていない。

その後も、シノはその場を動くことは無く、紅ばかり動いていた。結局最後には、キバと同じように気絶させられていたが、それも仕方ないだろう。戦闘を虫頼りにしているので、シノ自身に紅の攻撃を避けるすべがないし、虫で防ごうにも、それ以上の速さで迫られては防ぎようがないからだ。

「白はシノを連れて行きなさい。次はヒナタ」

「はい」

「えっ？あの。次は白じゃ……」

「白は医療忍者として聞いているわ。今回の事で実力を見るのは違うでしょう……」

「でも白は私より「ヒナタ頑張っただけ」……」

ヒナタが余計なことを言う前に、白は言葉を被せてきた。口にチャックのジェスチャーをすると、シノの脇に両腕を通してキバの元へと連れて行っている。それを見てヒナタは何かを言いたそうにしていたが、何も言わずに構えをとった。

ここでヒナタが、紅に知っていることを言えば、白にとっては動きづらくなってしまうだろう。紅には、医療忍術が使えるという情報

だけいつているので、白としては他の情報を今の段階で伝えることは出来なかった。必要ならば上から伝えるはずだからだ。

白の素性については、日向家に居たということくらいは知っているだろうが、どれくらいの実力があるかなど、紅には分からないだろう。分かるのであれば、アカデミーでの成績くらいだ。

ヒナタと紅の勝負が始まり、それを見ていたが一向に双方とも動かなかった。ヒナタは完全に防御の型である待ちの構えであるし、紅は様子見をしているため動きが無い。

今回、先に動いたのは紅だった。ヒナタが完全に動く気が無いことが分かったのだろう。紅の方から仕掛けていく。一瞬で終わらせるつもりは無いようで、手加減しながら攻撃をしているのがよくわかるものだった。前の2人の時とは対応が大違いである。

しかし、速度が上がるにつれて対応しきれなくなってきたのか、ヒナタの呼吸が乱れてきていた。そして、追いつかなくなり、ヒナタへ寸止めされたところで終わりを告げられる。

「実力は分かったわ。ヒナタはキバたちの元へ行きなさい」

「は……い……」

昔ほど鍛錬をしていないせいだろう。ヒナタは短時間であるにも関わらず、息が上がりバテているようだ。ヒナタが白たちの元へと合流するべく、歩いて行ったところで、今度は白が呼ばれた。

「最後に白来なさい」

「なんででしょう?」

「あなたには聞きたいことがあるの。あなたの成績は上位であるにも関わらず、医療忍者を目指しているのはなぜ?」

「後方支援の方が安全だと思ったからですよ。平穩無事に、面白おかしく過ごしていければ、それが一番だと思いませんか?」

紅はここで、白という人物の考え方を理解した。白の考え方には賛同できるものはあるが、今の時代にその考え方では厳しいものがある。

「考え方は分かったわ。でも、フォーマンセルで動く以上、最低限の戦闘行為はあることは分かるわね?」

「ええ。まあ。フォーマンセルで動くとなさる可能性が
ありますね」

「分かっているなら話は早いわ。今からあなたの実力を
みます」

「さっきは関係ないと言われませんでした？」

「今回誰も怪我をしなかったし、あなたの医療としての
実力を見る機会がなかったから、違うことで実力を見るのは
おかしくないでしょう？」

「では、あそこに寝ている二人に、怪我を負って
もらおうということ……冗談です」

白が不穏な言葉を発すると、紅は目を細めて白を睨み
付けた。冗談でも、仲間にわざと手傷を負わせると
言ったからだ。

「いつでもきなさい」

「ではいきますね（幻術使われると困るから、視線を
ずらしてつと）」
白はアカデミーでの実力に力を抑えて挑んでいた。し
かし、触れることは触れられるが、全ての攻撃は軽く防
がれてしまっている。フェイントを掛けても、それに見
合うスピードが無いので見極められて対応されてしま
うからだ。傍から見ても、純粹に体術だけでは敵いそ
うにもなかった。武器を使用すれば、まだ多少は手傷
を負わせることは可能かもしれないが、そこまでの必
要性を感じなかったのだろう、そのまま体術のみで挑
んでいるようだ。

（流石に上忍なだけはあるな）

白は特に慌てることなく攻撃を繰り返していたが、
途中で止めになった。紅にしてみれば、全ての攻撃を
軽く防いでいるにも関わらず、白は慌てることなく、
淡々と攻撃してくるのでおかしいと思っただろう。

「かなりの技術があることは分かるけど、そんなもの
ではないでしょう？」

「ただの医療忍者に、戦鬪面で過度な期待はしな
いでください」

「……確かにそうね。ここまでとしましょう」

白の最初の発言と体術の技量に、医療忍者である
ことを忘れていた紅は、あっさりと引き下がった。その
後、紅と共に離れていた3人の

元へと向かう。キバとシノは気絶から回復しており、2人とも白たちを見ていたようだ。

「上忍相手にやれるなんてすげえな！ 俺の時は攻撃しても触れもしなかったってのに！」

「手加減してくれたからだよ」

少し興奮気味なキバが、白へと詰め寄ってきた。それを仰げ反りながら白は答える。キバの態度は、ここに来た時の態度とはかなり違っていた。シノはその服とサングラスから表情を窺うことは出来なかったが、ヒナタは当然とばかりに頷いている。

「みんなの実力は分かったから、明日から早速訓練を行います。それと、任務も並行して行っていくので時間は守ることに。今日は解散とします。集合はここに8時です」

「よっし！もっと強くなるぞ！赤丸！」

「ワンツ！」

「了解した」

「わかりました」

「はい」

この日、紅班は自己紹介を含めての実力確認だった。他の班はと言うと、鈴取りの演習を行ったのは、結局カカシ班だけであった。アスマ班などは、親睦のために焼き肉店へ行くなど、担当上忍によって色々と変わっていると白が知ったのは後日だった。

54 経験？

自己紹介を行った翌日から、訓練を行っていた。任務より先に、連携をある程度固めておこうという狙いだ。

キバ、シノ、ヒナタにて紅相手に連携して攻撃を行っていく。今回の訓練では、前回の実力確認とは違い、多少の手傷を負うこともあったので、白の医療忍者としての出番もあった。

班で行動するばかりではなく、週に1回の講義も続いているし、更にアカデミーから行っている医療の手伝いも継続中だ。講義は同じようなことを今年も続けていた。しかし、医療の手伝いに関しては更に深いものへと変わっている。

下忍になつてからだが、死体を使つての整形術や縫合術、手足の置換術など、明らかに下忍に教える度合いが過ぎたものとなつたのだ。白もヒミトとして下忍に教えているので、その差は明確だったと言えるだろう。

ずっと白を担当している医療忍者は、いつもと変わりが無く、色々と教えてくれているので、白としてはその知識と経験を吸収していくだけだった。

自己紹介後、数日間たったが、未だ任務を受けずに班内での訓練が続いている。訓練の成果として、形は出来てきていた。基本となる攻撃パターンとしては、キバと赤丸にて攻撃を行い、ヒナタが相手の後ろから逃げ道を塞ぐような形で待ち構える、そして2人が敵の目を引き付けている間に、シノが虫にて攻撃するといったものだ。前衛2人の内どちらかが負傷した場合には、シノの虫が代わりを引き受けて、その間に白が手当てを行う、というのが手早く出来るようになってきた。

そのような連携の形が定まってきたところで、任務を行うこととなった。

「今日から任務を行っていきます」

「やっとな初任務だ！」

キバは任務を楽しみにしていたのだろう。紅の言葉に大はしやぎ

だった。

(キバは元気だな。シノはいつも通りと……。それにしてもヒナタ元気が無いな。何かあったのかな?)

シノは紅の言葉を聞いても何の反応も示さなかったが、ヒナタは集合してからというもの、ずっと暗い表情をしていた。

みんなで依頼所へと向かう途中で、白はヒナタに声を掛けた。

「ヒナタ何かあった?」

「……ううん。何でもないよ」

「そう? 元気無さそうに見えるけど」

「大丈夫。心配かけてごめんね」

「大丈夫ならいいけど。何かあったら言ってね」

「うん……」

この日8班で最初に行った任務は店の手伝いであった。キバは初任務のあまりの内容に不満を漏らしていたが、Dランク任務など雑用がメインである。キバの思い描いていた任務はCランク、またはBランク以上のことだろう。

店の手伝いと言っても、接客をするわけではなく、裏方の方で荷物の運搬などがメインだ。荷物が壊れやすい物のため、慎重に運んで欲しいという条件付きではあったが、内容的には問題は無い。むしろ、白1人でも十分な内容でもあったからだ。

荷物の量はそれなりにあり、8班全員でそれぞれ分けて運ぶことになった。ここでは医療忍者など関係なく一緒に持ち運ぶ。紅に何かを言われたキバは、最初とは打って変わってやる気を見せて、多めに荷物を持っていた。

(あんなに荷物持って大丈夫なのか? 壊れやすいつてこと忘れてるんだろうか……。まあ紅上忍が付いてるみたいだから大丈夫だろうけど。問題はこつちだな)

シノはマイペースに自分が持てる荷物を持つと、慎重に運んでいる。白もシノと同程度の荷物を持っていた。実際にはもつと持てるのだが、もう1人をフォローするために抑えているのだった。そのもう1人であるヒナタはと言うと、荷物を持ち何かを考えながら運んで

いる。明らかに心ここに在らずの状態だった。

前をまともに見ていなかったからだろう、ヒナタは転びかけて白がフォローへと入る。それが何度か続き、その度に謝ってくるのだが、任務が終わっても直る気配が無かった。

そのため、白はヒナタを問いただしたのだが、そこで原因が分かった。

昨日、紅が日向家を訪れた。その時にヒアシとの会話を偶然ヒナタが聞いてしまったのだ。しかも、その内容と言うのが、ヒナタを見捨てるといったようなものだった。今まで、ヒナタなりにヒアシに認め貰えるよう努力してきたが、それを全否定された上に、日向家には不要と言われれば当然落ち込むことだろう。

しかし、それを聞いたからと言って白にはどうしようもなかったが、次のヒナタの発言にて驚くことになる。

「しばらく白の家に泊まっていいかな?」

「えっ?」

「駄目かな?」

「駄目と言うわけでは無いんだけど……」

白の立場上よくは無いのだが、このままヒナタを放っておくわけにもいかず、白は了承した。

ヒナタの所在が不明なのは不味いと思い、紅に事情を説明していた。日向家への言伝をお願いしておくためだ。そして任務後解散となり、白たちはアパートへと向かったのだが、ここで更に問題が発生した。

「こっちはナルト君の家だよ?」

「そうだね」

アパートの階段を上がり、家の扉の鍵を開けた段階でヒナタは気付いたようだ。

「もしかして、ナルト君の家の隣?」

「もしかしなくてもそうだね」

「なんで言ってくれなかったの?」

先ほどまで落ち込んでいたのが嘘のように、ヒナタは白を問い詰め

てきたのである。今まで白の家の場所を知らなかったのもそうだが、それがナルトの家の隣と分かったのだから、ヒナタとしてはもつと早くに知りたかったのだろう。

「聞かれなかったから……」

「聞かないと教えてくれないんだ」

どこか悲しげな顔をしていたが、部屋に入って隣から聞こえてくる騒音により、嬉しそうな顔に変わっていく。

（食事は作るからいいとして、問題は着替えとかだよなあ）

そのようなことを白が考えていた時に、訪問者が現れた。紅である。

「これにヒナタの着替えが入っているわ。ヒナタの事はお願いね」

「ピアシ様は何も言われなかったんですか？」

「しばらくはここから通わせてあげて」

「……昨日と同じようなことを言われた訳ですね。分かりました」

「助かるわ。それではまた明日ね」

「はい。ありがとうございます」

部屋へ戻ろうと踵を返したところで、廊下に立っているヒナタに出会う。

「はい。ヒナタ着替えだよ」

「うん……」

ヒナタは先ほどの会話が聞こえていたのだろう。また元気が無くなっていった。そんなヒナタを連れて台所へ行き一緒に食事を作る。

（こういう時は違うことで気を紛らわせるに限る）

この日からヒナタと一緒に住むことになった。

最初の頃はドキドキしていた白も、数日もするとヒナタのいる生活に慣れてしまっていた。元々、日向家でも同じようにして、小さい頃から一緒に過ごしていたので、慣れるてしまうのに時間は掛からなかったのである。

そんな折に、木の葉の里から出していた影分身から連絡が入った。

「やつとガトー見つけた」

「結構時間かかったな」

「ガトーの所在を知るのにたらい回しをくらったから仕方ない」

「やっぱり島の方に居る感じ?」

「居るね。たぶん雇われてるはず。と言うか、今その島にいるんだけど意外と広い。それと貧乏人ばかり」

「見つかりそう?」

「最悪ガトーを締め上げる」

「それだと立場悪くならない?」

「あー。やっぱり地道に探すしかないか」

「あれがあればよかつたんだけどねえ」

「だよねえ」

再不斬に渡した秘術による手鏡に向けて、何度か話し掛けてみたものの反応が無く、視界も暗いままだった。白は不審におもいつつも放置していたのだが、影分身を手に入れた当初、鍛錬していた時に、本体が気絶したことで謎が解けた。

寝ている状態ならば、術が解けることは無かったのだが、気絶した状態だと術が解けてしまっていたのである。

そのため、木の葉の里に入った時には既に術が解けており、再不斬へと繋がっていると思っていたその視界も暗かったわけだった。

「広いと言っても限りはあるんだし、搜索と鍛錬ガンバ」

「そつちこそ退屈と窮屈と不自由な生活ガンバ」

自分で自分を励ましている姿に滑稽さを感じ、白は苦笑いをしてアパートへと戻っていった。

それから数日後にまた連絡が入ってくる。

「見つけたんだけど、近寄っていいのか悩む」

「なぜ?」

「いるのが再不斬さんだけじゃないんだよね」

「そーいや部下がいたんだっけ?」

「ただの取り巻きにしか見えなかった」

影分身からの情報では、再不斬以外にも部下と思わしき忍者がいるようだ。しかし、だからと言って立ち止まるわけにもいかず、白は影分身を急かす。

「まだCランク依頼の方には載ってないけど、たぶんそろそろ載るはずだから急いでよ」

「分かっている。最悪時は動くからそのつもりで」

「最初からそのつもり。こっちはいつでもいける」

「では突撃をしてくる」

「交戦とかはやめてくれよ」

「その時次第」

「だよね」

暗部にいる関係上、任務内容を見る機会があった白は、Cランク任務の確認を行っていた。そこに波の国への護衛依頼が入っているか確認するためだ。

未だに依頼はないが、護衛依頼でカカシ班が波の国へ行くまでに、白には修得しておきたいことがあった。それをするために再不斬へと影分身を送り出したのである。

影分身と最後に交信をしてから、少し待っていたが、白への連絡はなかった。

その頃影分身が何をしていたかと言うと……

「はいはい。そこを通してね」

堂々と真正面から再不斬の居る建物へと突撃していた。

「どこの者だ？」

「教えても意味が無いかな」

「怪しい奴だ。捕らえるぞ」

「殺つても構わんだろう」

「怪しい奴でいいよ、もう……。んじゃ通してね」

「簡単に通すと思っっているのか！」

「もういい殺るぞ」

「止めておいた方がいいと思うけど？」

「ふざけるな！」

建物の入口に居た2人は、白に向かい走り出した。それに構わず白も2人への歩みを止めない。

2人が白へと攻撃するべく、鉤爪のついた方の手で切り裂こうとした時、そこには既に白の姿は無かった。

「どこに行った?!」

「幻術か?」

2人は辺りを見渡して白が居ないことを確認すると、幻術と思い込んだのか、幻術を解くために印を組んだりお互いに触りあったりしていた。

当事者である白は既に建物内に入っていた。単純に瞬身の術を使って進んだだけなのだが、2人と白の間には明らかな実力差があり過ぎて、2人では目で追えずにいたのだ。そのため、白としては悠々と建物内に入ることが出来ていた。

(負傷させたら、後で何言われるか分からないから仕方ない。ここかな?)

建物内の部屋数はそれほど多くなく、白は気配のある部屋を1つずつ見ていく。

「間違えました」

「すみません」

「どうぞごゆっくり」

「ああ、よかった」

4部屋目にして目的の部屋を見つけた。部屋へ入るとそこには、ソファーに身体を預けて寛いでいる再不斬と、その傍らに立つ女性が居た。

「お久しぶりです、再不斬さん」

「……お前白か?」

「分かってもらえて何よりです。忘れられてるかと思いましたがよ」

その時に、今まで開けた部屋に居た者たちが部屋へとなだれ込んできた。

「囲め!」

1人の合図に白の周りを取り囲む。包囲が完了した所で再不斬は話を続けた。

「死んだものと思っていたぞ」

「こちらもまさか、気絶したら術が解除されるなんて思ってたので、こうして来たわけですよ」

「入口に居た2人はどうした？」

「2人でなんか触りあいしてましたよ。あっち系の人なんですかね？」

「……まあいい。それで？」

「別れた時に言いませんでしたっけ？」

「そう言えば別れた時に何か言っていたな」

「ええ、あの時に借りた物を返しに来たのと、後は確認のためですね。と言うかこの周りの人たち誰です？」

今更ではあるが、生ぬるい殺気を放つ周囲の忍者たちを白は指差す。流石に会話の邪魔になりそうだったためだ。

「俺の部下だ」

「部下居たんですね」

「あの後合流したからな」

「まあ、それはさておき、周りの人たち邪魔なので眠ってもらいますがいいですか？」

「クツクツク。やれるならやってみるといい。あの頃よりも使えるようになってるんだらうな？」

「もちろんですよ」

囲んでいる忍者たちのレベルは下忍から中忍レベル。白に敵うはずもなく即座に蹂躪されていく。囲んでいる者たちが全て倒れるまで1分も掛からなかっただろう。それを愉快そうに再不斬は見つめていた。

「手加減が上手くなったようだな」

「最近そういうことばかりしているもので、後これが借りていた物です。もちろん新品ですよ」

再不斬へ巻物とクナイを放り投げるが、それを受け取ったのは再不斬の傍らに立っていた女だった。

「えーっと。あなたにあげたわけじゃないんですが？」

「知り合いのようだけど、敵ではない保証など無い」

「まあ、疑うのはいいんですけどね。それから、再不斬さん確認したいことがあるんですがいいですか？」

「聞くだけは聞いてやる」

「なぜガトーに雇われてるんです？ 再不斬さんならお金を奪うことくらい、楽に出来そうなんですけど」

「別に金に拘っている訳じゃない。しかし、あつて困るものではないからな。それと、雇われている理由は想像つかないか？」

「想像つかないから聞いてるんですが……」

お前なら分かっているだろうと言わんばかりの顔で、再不斬は白に聞いてくるが、白には心当たりが全くなかった。それを見て分からないと判断した再不斬は理由を述べる。

「力を付けるためだ」

「つまり、ここを拠点にして力を蓄えるということですか？」

「ああ」

「再不斬様。そこまで話してもよろしいのですか？」

少し慌てたようにして女が会話に割り込んできた。

「こいつにならいいだろう。確認したいことはそれだけか？」

「ここを動く気は無いみたいです。連れ出してくれた恩もありますし、ある情報をお伝えします」

「言ってみろ」

「今この島に橋が造られてますよね？ その橋造り職人の抹殺依頼がガトーから出ると思うんですが、その職人がこの島に向かうために、木の葉の里の上忍1人と下忍数名を護衛に雇いますので注意してください」

「なぜ、そんな先の事まで分かる？」

白の言った内容に流石の再不斬も疑わずにはられないようだった。それはそうだろう。言ったことが本当であれば未来予知に等しいのだから。

「再不斬さんなら、俺が今どこに居るのか知ってるはずですよ」

「そういうことか。それで？ お前の事だそれだけじゃないんだろう？」

「ええ。ここからが本題なのですが、誰が来るか教えるので、俺を鍛えてもらえませんか？」

「いいだろう」

「再不斬様！ 話からすると奴は敵である可能性が！」

「黙っている」

「……………」

「では先に伝えておきます。護衛に来る人の名は……………」

55 新作？

影分身からの情報が届いたのは次の日の昼頃だった。

その日は久しぶりの休みと言うこともあり、白はヒナタと共に居間で寛いでいた。寛いでいるとは言っても、白は忍術書を読み、ヒナタは押し花作りをしている。

<<こちら2号。応答求む>>

<<こちら本体。少し待ってくれ>>

白はヒナタから離れて自室へと戻っていく。ヒナタの近くでボソボソと呟いていては怪しまれるからだ。自室へと辿り着いた白は交信を再開する。

「それでどうかしたか？」

「例のブツが出来た」

「出来栄えは？」

「中々いい」

「では向かう」

白は、影分身との交信を終えて、ヒナタの元へ行き出かけるために声を掛けた。

「ヒナタ。これから出かけない？」

「どこにいくの？」

「まあ、それは着いたらわかるよ」

「??？」

白は未だに困惑しているヒナタを連れて家を出た。道すがら、どこに行くのかと白を見詰めるヒナタを余所に先へと進む。

そうして向かった先にあったのは一軒の店であった。

「えっと。ここがどうしたの？」

「この店の新メニューを食べに来たんだ」

「新メニュー？」

「そう。今日からだからね。ヒナタも食べてみて、それを話題にナルト君に話し掛けてみるといいよ」

「っ!？」

着いた先にあった店の名前は一楽。そこで本日から『とんこつみそ』という新しいラーメンが出ることになっている。店先には特に宣伝らしきものは無いが、常連客がいるので、新メニューの話が広まるのはあつという間だろう。

この新メニューの味見を影分身がしていたため、本体である白は影分身を解くことが出来ずにいた。影分身を解いてしまえば、味見をした経験までもが戻ってきてしまい、楽しみが減ってしまうからだ。

そんな訳もあり、新メニューを食べるためと、影分身の切り替えを行うために、一楽へと来たのだった。

暖簾を潜ると、そこには黄色い頭に渦巻き模様の入った橙の服を着た人物がいた。ナルトである。良く考えていれば分かったことだが、基本的にナルトは、家でカップラーメンを食べるか、一楽でラーメンを食べるのか2択しかない。今日は一楽の日だったのだろう。

ナルトは堂々と真ん中の席に座っているの、白は一番端の席に座った。ヒナタは立ったまま固まっている。白の隣に座ればナルトの隣となり、かと言って反対側の端に座れば、避けているように見えるからだろう。ヒナタの中で葛藤しているところで、白がヒナタへ声を掛けて選択肢を無くしてしまう。

「ヒナタ。早くここに座りなよ」

白はにこやかに笑いながら、隣の席をヒナタへと勧める。明らかに確信犯であった。

白の「ヒナタ」と言う単語にナルトが反応を示し、白たちの方を振り向いたことで存在に気付いたようだ。

「やあ。久しぶり」

「久しぶりだってばよ」

「ほら、ヒナタも早く座って」

ヒナタの腕を掴み、席に座らせると早速と言わんばかりに注文をした。既にナルトの前にはとんこつラーメンが来ており、それをナルトは食べようと、割り箸を伸ばしているところだった。

「とんこつみそ2つね」

この時まだとんこつみそは、メニュー表に並んでおらず、ナルトは

存在を知らなかったようだ。注文の内容に目を見開き、訊いてきた。「とんこつみそってなんだってばよ！」

「新メニューだよ」

「そういやメニュー表に載せてなかったな。おいっ！今のうちに載せとけ！」

「りょーかーい」

白の影分身はマジック片手に、メニュー表の一番下へと追記している。

「そういや値段決めてなかったけどどうします？」

「うーむ。とんこつしようゆと同じ値段にしとくか」

「はいよつと」

メニュー表へと値段を書き込まれる。それを見てナルトは食べる気満々のようだ。……ようだではなく実際に注文した。

「とんこつの次にそれを頼むってばよ！」

「よく2杯も食べれるね……」

「すごいね」

ナルトの注文の仕方に、白は呆れ、ヒナタは羨望の眼差しを向けていた。一樂のおやは笑顔で注文を受けると、3つ一気に作り始める。なぜ3つ一気にかと言うと、ナルトのラーメンを食べる速度にあった。

ナルトは既に半分ほどを平らげていたのだ。この調子で行くならば、次のラーメンが出来た頃には食べ終わっていることだろう。

そう待つことも無く3人の前に注文したラーメンが届いた。ナルトは残りスープがもう少し、といったところまで食べ終わっている。

「ではお先に」

「いただきます」

(言われた通り、味はなかなかだけど、前作のとんこつしようゆには及ばないな。人の味覚はそれぞれだからあれだけ)

スープまで食べ終えた白は、代金を2人分カウンターのの上に置いて席を立った。

「ちよつと席を外すよ」

「ええっ!？」

まだ食べている途中のヒナタに声を掛けて、店の外に行き裏手へと回る。そこで先に待っていた影分身を再度入れ替えた。

(影分身の無駄遣いのような気がしないでもないな……)

その後、一樂の入口の方へと回り、店内の様子を隠れて見ていたが、ヒナタからナルトへ声を掛けることも無く、また逆もなかった。ナルトはラーメンに夢中。ヒナタは恥ずかしがって食事中断。白は溜息を漏らしながら店内へと戻った。

(今はあれだけど、将来有望株なんだしヒナタは一応人を見る目があ
るのかな?)

ヒナタの将来を憂いつつ席へと座り直す。

「ただいま」

「おかえり。どこに行ってたの?」

「ちよつとね。それより食べてしまわないと伸びるよ」

「もう。お腹いっぱいかな」

口に合わなかったのか、それとも横にいるナルトのせいか、ラーメンは半分ほどが残されていた。それを見て口を開く人物がいた。

「こんなに美味しいのに残すのか?」

「お腹いっぱい……」

「じゃあさ! じゃあさ! 俺が食ってもいいか!」

「え? うん。どうぞ」

ヒナタはナルトへラーメンを差し出すと、ナルトは喜んで食べ始めた。

「びばどな! びばた(ありがとな! ヒナタ)」

お礼を言っているつもりなのだろう。ラーメンを啜りながら言っているのです、正確に何を言っているのか分からないが、ヒナタには伝わったようだ。ヒナタは頬を染めながら照れているように見える。

(ラーメン3杯目とか……どこにそんな入っていくんだ?)

ナルトが食べ終えるまで待った後に、店を離れて白はヒナタと共にアパートへと戻っていた。ナルトは用があるようで、一樂からは別行動を取っている。1人で特訓でもするのだろうか。一緒に帰れると

思っていたヒナタは残念そうな顔をしていた。

「今から一人で鍛錬でもするんじゃないのかな」

「休みの日まで凄いな」

「班によって休みはバラバラみたいだけど、ヒナタは下忍になるまで休みなんてほとんど無かったんだし、休める時に休む癖をつけといた方がいいよ」

「白はいつ休んでるの？今日も忍術書を読んだし、夜もたまに居ないよね？」

「そうだね。休むにも色々あるんだよ。ヒナタの押し花と一緒に、趣味に近いものかな」

「忍術書を読むのが趣味？」

「まあそんな感じかな？」

その後、白は医療を学びに行き、それが終わってアパートへと帰ってきた時に、白が昼間に言ったセリフをそのままヒナタから返されていた。

任務と訓練をある程度消化した頃、Cランク任務のリストに波の国への依頼が記載されていた。

(とうとう来たか)

影分身へと連絡を取り、状況を伝えていた。向こうでは、術については習得しており、残りは実戦の方だけとなっているようだ。計画が順調に進んでいることに白は安堵していた。

(再不斬さんには忠告はしたけど、後はどうするかはあちら次第かな……。流石にそこまで口出しできないし)

翌日には記載されていた依頼が受諾になっていたこと、そしてナルトが家に居ないことから、カカシ班が依頼を受けたことは間違いなかった。

ただ、どこから聞きつけたのか、キバが任務を受けに依頼所へと行った時に、紅へと喰って掛かったのである。

「紅先生！ナルト達がCランク任務受けたんだ！俺たちにも受けさせてくれよ！」

「まだDランク任務数回しか受けてもいないのに、Cランク任務は早

いわ」

「じゃあナルト達はいいつてのかよ！」

「そういうわけでは無いわよ。ただ、物事には順番があつてね」

「俺がナルトに負けてるはずがねえ！」

キバはナルトに何か言われたのだろう。キバにとってはナルトは下だという思いもあり、それが自分よりも上のランクを受けたことで、キバのプライドを傷つけていたようだ。対抗意識を燃やしていることを理解した紅は係りの者へと視線を向ける。こうなつては、いつまで経つてもキバは言い続けるからだ。

「Cランク任務の内容を見せてもらつて構わないかしら？」

「お見せできるのはこちらになります」

「ありがとうございます」

紅は、係の者が示した広げられた巻物を手に取り中身を見ていく。途中その視線が止まり、吟味するように内容を確認していた。そしておもむろに頷く。

「この任務を引き受けます」

「荷の護送ですね。隣国の湯の国までとなりますがよろしいですか？」

「ええ。構いません」

「それでは手続きをしますので、しばらくお待ちください」

それを聞いたキバは喜びを露わにして、赤丸の両脇に手を入れてぐるぐると回っている。シノは特に変化は無く、ヒナタは不安そうにしていた。

（これはある意味休暇に等しい！ 一応任務だし！ しかもCランクで荷の護送とか美味しすぎる！）

合法的に休めることに白は内心喜んでいた。木の葉の里に居ると、暗部として駆り出されることが多いのである。そのため、短期的にとはいえ、木の葉の里の外への任務。しかも内容が楽で安全なものについては大歓迎であった。

準備を整えて再度集合することを伝えられて一度解散する。準備と言つても、それほど大した物を持っていくわけでは無い。白は医療

忍者であるため、戦闘用の忍具の他にも、医療器具に加えて薬なども持たねばならないので別だったが……。その為、準備を先に終えたヒナタを集合場所へと送り出していた。

白が準備を整えて集合場所へ行くと、既に白以外のメンバーが待っていた。

「お待たせしました」

「準備に時間が掛かるのは仕方ないわ」

「さっさと行こうぜ」

「それほど待つてはいない。キバなど忘れ物を何度も取りに帰って来る」

「いくなよシノ！」

「医療忍者だもんね。準備に時間掛かるよね」

白以外のメンバーの荷物は少なく、背中の方に襷掛けのような形で背負っていた。白は小さいとはいえ箱を背負っている状態だ。そのため、1人だけ浮いているように見える。

「揃ったわね。準備はいいかしら？」

「いつでもいける！」

「準備は万端だ」

「シノに同じく」

「準備は出来てます」

全員の声を確認すると紅は頷いた。

「ではこれから護送する荷物の場所へと向かいます。相手方に迷惑が掛からないように」

「それについてですが、護送というと僕たちが荷を牽く、または持たなければいけないのでしょうか？」

「その通りよ」

「ええっ!? そんなの聞いてねえぜ！」

紅の言った言葉にキバが騒ぎ始めた。護送と聞いて荷物を守ればいいとだけでも思っていたのだろう。

「キバ。あなたの望んだCランク任務よ。これ以上何か言うのであればごちらにも考えがあるわ」

任務の合間にある訓練で、度が過ぎれば痛い目に遭うということを思い知らされていたキバは、直感的にこれ以上逆らっては不味いと理解し、無言で上下に首を何度も振った。

「分かってくれて嬉しいわ」

紅はにこやかに笑うと先に進み始めた。それを他のメンバーは追いかけていく。

「よかったねキバ。あれ以上余計なこと言わなくて」

「ああ。分かってるよ」

「自業自得だ」

依頼人から渡された物は、既に荷車に乗せられていた。荷車には馬が取り付けられている。荷車を引く使役動物であるのだが、誰が馬の手綱を持つかで少し揉めた。

「俺は嫌だぜ」

「虫の知らせがあった。両手は開けておきたい」

「この中で一番荷物持つてるから遠慮＜面倒くさい＞」

「私はどちらでも……」

「駄目だよヒナタ。嫌なら嫌と自己主張しないと」

「それだと全員駄目じゃねえか」

「ではどうする？」

「ジャンケンなんてどう？」

「もうそれでいいや」

「異論は無い」

「私は何でも……」

ジャンケンの結果。言い出した者が当たるという言葉を白は実感していた。キバと最後まで争った結果、負けてしまったのである。そのため、現在、白が馬の手綱を引いて歩いていった。

「あーあ。どうしてこうなったんだか」

「白が言い出したんだろ」

「暇そうだね。換わってあげようか？」

「やなこと」

主に白とキバが話しながら、紅班は湯の国へ向けて進んでいった。

56 暴露？

湯の国の目的地までは2日かかる。木の葉の里を出発してその1日目。夜になり、その日は予定通りの宿場街に到着することが出来た。辺りはまだ明るい、これより先に進むと野宿となってしまう。それにそこまで急ぎの依頼ではないこともあり、この宿場街で宿を取ることにしてあった。

宿を取ったと言っても、荷は荷車に括り付けられているため、宿内に持ち込むことはできない。そのため、荷物の番を決めなければならなかった。その荷物の番については、スリーマンセルにて行い、1人ずつ休憩を取るというものだ。この時、馬の手綱を牽いていたということで、白が一番最初に休憩することになった。

「旅館の人に聞いたのだけど、最近盗賊が出ているそうだから、何かあったら呼びなさい」

「紅先生は一緒にいてくれないのかよ」

「私は今回見ているだけのつもりよ。助言はするけど、基本はあなたたちだけで対応なさい。但し、戦闘になりそうであれば、先ほども言いましたが呼ぶように」

「俺だけでもやっつけてやるぜ！」

「はあ……。シノとヒナタ。頼みましたよ」

紅は「何かあったら呼ぶように」と再度言って自室へと行ってしまった。その後もキバはぶつぶつと文句を言っているようだったが、誰も突っ込もうとはしない。愚痴の矛先が向いてはかなわなないからだ。

荷物の番の中に、馬の世話が入っていないだけ、まだ良かったと言えるだろう。馬の世話をしたことのあるメンバーなど居ないのだから。そのため、馬については既に預かってもらっていた。

白も休憩となっていたが、残ったメンバーが心配なため、影分身で遠くから見張らせていた。

なぜ遠くからかと言うと、紅班は探索・感知が得意だからである。薬にて体臭を消しているとはいえ、油断は出来なかった。赤丸は臭い

を消したのでいいとして、シノの虫を使つての探索範囲が、どれくらいか分からないからだ。そして、定期的に白眼で周囲を警戒するヒナタも厄介だった。その為必要以上に、影分身は離れた位置で様子を見るしかなかったのである。

ただ、この時ばかりは離れていたことが、良い方向に働くことになった。

少し暗くなり始め、人が少なくなってきた頃に、明らかに一般人とは思えない集団が現れたのである。しかも場所は宿場街が見える高台。白が隠れてキバたちを見ている場所であつた。

その現れた集団の会話に耳を傾けていた白は、内容から盗賊と断定した。数名は先に送り込んでいて、既に狙いを定めていたのである。その中に護送対象である物も含まれていた。

（こいつらが紅さんの言つていた盗賊か。数人は宿場街にいるみたいだけど、数人ならあの3人でも対応できるかな? —— 水遁・霧隠れの術）

高台を霧が少しずつ覆い始めた。夜であることと、そして霧が膝下しか覆つてなかつたことで、そのことに盗賊たちは気付かなかつた。十分に密度の濃い霧が充満したところで、白は仕掛けた。

—— 水遁秘術・千殺氷翔 ——

片手にて印を組み術を発動させた。

「ぎゃー!!」

「ぐあつ!」

「いてええ!!!」

盗賊たちの足元から上空へ向けて、千本の形をした物が一気に突き進む。悲鳴を上げられた者は、まだ軽傷の部類であると言えるだろう。十数名居た盗賊たちの内、半数以上は所々穿たれた箇所を押さええて呻き、残りの者は動かぬまま倒れていた。

（次はこつちと、 —— 水遁秘術・千殺水翔 ——）

上空に向けて再び、残りの霧が千本となって空へと向けて上がっていく。その進路に居る者を貫いて。

（水遁の時よりも威力が落ちる分、術の展開速度はやっぱり早いな）

水遁で同じような術があったので、水遁でも出来ないかと改良した結果であった。

そこで、上空へと上がっていた氷の千本が下へと落ちてくる。その時には、そこに立っている者は居なかった。しかし、それで終わるはずもなく、次の術が盗賊たちを襲う。

（――風遁・風切り舞――）

幾重もの風の筋が、盗賊たちを縦横無尽に蹂躪する。術を解き終えたそこに、人の形をしている者はいなかった。生きている者が居ないことを確認し、残党が戻ってきた時の事を考えてその場に留まる。

宿場街の方でも騒ぎが起きたようで、キバたちも戦っていた。相手は3人。始めに荷車を奪い、それに盗んだ物に乗せて行こうと思ったのだらう。しかも、それを守っているのが子供であったために、格好の標的となったようだ。

しかし、相手はただの盗賊。子供とはいえ忍者に敵うはずもなく、あっさりとやられて捕まってしまう。捕まえたことで気をよくしたのか、キバは大声で騒ぎたてているようだった。

その声に気付かない紅と白ではなく、2人は荷車の元へと向かった。紅は別件で起きていたし、白は通常の生活が仮眠であるため、すぐに行動出来たのである。そして、そこで倒れている3人を見て、紅は事情の説明を3人に求めていた。

「それで。これはどういうことかしら?」

「襲ってきたから返り討ちにしてやったぜ!」

「つまり、この者たちは噂の盗賊ということね。すぐに縛り上げなさい。私はこの街の詰所に話をしてきます」

紅は言い終えると、その場から消え去った。残された4人は倒れた3人を縛り上げていく。

「俺がいる限り、荷物には触れさせねえ! 荷物の護送は俺に任せとけってんだ!」

「頼もしいね。それなら明日の朝まで交代は不要だね」

「そうか。そこまでキバが言うのであれば仕方ないな。次はキバの休憩だが先に休ませてもらおう」

「折角決めた順番なんだし、休ませてあげた方が……」

「ヒナタ何を言ってるの？ キバが任せとけって言ってるんだよ。本人の意思を尊重してあげないと失礼だよ」

「そうなのかな？」

「そうそう」

「いや。休憩は欲し「まさか自分の言ったことを曲げたりしないよね？」……」

「では先に休ませてもらう」

「用があつたら呼ぶよ」

シノは頷くと、宿の中へと入って行く。それを見届けてからしばらくすると、紅が警邏を率いて戻ってきた。

「待たせたわね。荷の方に付いていてちようだい」

「わかった」

「わかりました」

「はい」

捕縛した3人を引き渡し、キバ、白、ヒナタの3人は、そのまま荷の護衛に移った。その時に、影分身を解除したことで、他にも盗賊が居たことを知る。

（あつちの高台か……。その内、誰か見つけるだろうから放置でいいか。それよりも……）

白はキバへと視線を戻した。

「それよりも、紅先生が盗賊が出るっていうから期待したけど、この程度なんだな。弱すぎるつつうか、齒ごたえつてもんがないよな。ヒナタもそう思うだろ？」

「えーっと。油断はしない方がいいと思う」

「油断なんてしてねえよ。あいつくらいなら、俺1人で十分だって話をしてんだよー！」

キバは相手を倒すことしか頭にないようだ。本来の任務は、荷物の護衛であることをすっかり忘れている。もし、高台にいた連中まで一気に襲いかかられては、キバはともかく、荷物の方は無事では済まなかつただろう。

(これは、明日の朝、お叱りコースだな)

他人事のように考えながら、荷物の護衛を務めることになる。

翌日の朝。荷車の前で紅班全員が集合していた。昨日の件を含めて事情を聞いた後、説教を受けているのである。何故か白も含めて……。戦闘になりそうな時には、1人は呼びに来るよう伝えたにも関わらず、全員が戦闘行為を行ったからだった。

説教が始まってしばらくした時に、詰所の方から人が走ってきた。内容は昨日の件で、協力者としての紅へ確認を含めて連絡をしに来たようだ。

「はあ……はあ……ふう。おはようございます。間に合ってよかったです。昨日の件について、お聞きしたいことがあるんですがよろしいですか？」

「ええ。構いません」

「ありがとうございます。昨日引き渡していただいた盗賊の仲間についてなんですが、何かご存じないですか？」

「知りませんね……。仲間がいたのですか？」

「あの後、盗賊たちを尋問したんですが、そこで仲間がいると言うのです。仲間は何処にいるのか聞いても全く答えようとしません。そこで、捕らえたあなた方なら、なにか御存じではないかと思いい来たわけです」

「残念ですが、知りません。私たちも用事がありますので失礼します」

「いえいえ。こちらこそ引き留めて申し訳ありません。よい旅路を」

(説教から抜け出せた！いいところに来てくれたよ本当に……)

詰所の人たちはこれから、盗賊の仲間について、一生懸命捜査をすることになるだろうが、既に脅威はないので取り越し苦労に終わることとは明白だった。しかし、それを教えてやる義理も無ければ義務もない。逆に教えてしまえば、なぜ知っていたかなど聞かれることだろう。

白は、面倒事は遠慮とばかりに頭を振り、馬の手綱を握って宿場街を出るのだった。

道中は、特に何事も無く、目的地である湯の国へと夕方に着した。明るうちから、襲う者がいなかったとも言える。元々、感知タイプの班である。襲撃があったとしても、奇襲をかける方が難しい。

無事に荷物を引き渡し、一応の任務は完了した。後は、馬を木の葉の里へと持ち帰るだけである。荷車については、荷物と一緒に引き渡してあった。その後、馬を厩に預けに行き、その日は、湯の国の宿で一泊することになった。

5人が泊まれる大部屋へと案内される。そこで、早速と言わんばかりにキバが提案した。

「やっぱり湯の国って言ったら温泉だよな！」

「そうだね」

「この宿にも露天風呂がついてるわ」

「おっし！ 行こうぜシノ！」

「ああ」

「でも、赤丸って風呂に入れても大丈夫なの？ 忍犬とはいえ、風呂に入れるのはまずいような気がするんだけど？」

「それなら問題ねえな。赤丸。擬人忍法だ」

「ワンワン!!」

赤丸は、キバの頭の上から飛び降りると、キバそつくりに変化してみせた。

「これで問題ないな」

「そうだね（この場合の代金ってどうなるんだろう……?）」

その後、みんなで風呂場に行ったのだが……。

「なんでお前がこっちに来るんだよ」

「ここは男湯だ」

「白、疲れてるの?」

「女湯はこっちよ。見間違えるほど疲れているとは思わなかったわ」

白の目の前には、青い布に男と書かれている暖簾がぶら下がっていた。色と文字で明記されているのだ、見間違はずもない。ヤマトからは知っている人は少ない方が、良いかもしれないと言われていた

が、流石にこれから同じく活動していく班員に対して、隠し続けるのはどうかと思ったのか、自分が男であることを告げる。

「みんな勘違いしてるようですが、男ですから」

「『えっ!?!』」

みんな一斉に驚いたような声を出した。あのシノまで出したということは、かなり驚いたのだろう。ヒナタが驚いたことに、白も驚いていた。

「お前アカデミーではくノ一にいたよな？」

「聞いたことがある。性同一性障害というものだろう」

「胸がないからって、男ではないんだよ？」

「そこまでだったなんて……」

「……………」

みんなそれぞれ言いたい放題であった。面倒だとは思いつつも、どうしてこうなったのかの経緯を説明する。

「……………」

「……………」

ヒナタの世話をするためなどの部分を省きながらの説明を終えると、みんな黙って固まってしまっていた。それでも最初に紅が硬直から回復し訊ねてくる。

「この事を知っているのは誰がいるのかしら？」

「火影様には、報告がいつていると聞いています」

「そう」

「まあいいや。男だって言うんなら遠慮はいらないよな」

「元々遠慮などしていなかったらどう？」

「なぜヒナタが驚いているかはともかく、みんなが納得してくれて嬉しいよ」

「〈そんな……白が男だったなんて……〉」

みんなそれぞれ理解は示したが、約1名——ヒナタだけは違った。あまりの内容にショックを隠せないようで、呆然と立ち竦んでいる。

「早く入ろうぜ」

キバの声を切っ掛けにそれぞれ風呂場へと入っていく。呆然としたままのヒナタについては、紅が手を引いて連れて行った。

白は、そのことに少し心配していたが、キバたちと共に風呂場へと入っていく。宿には当然、白たち以外も泊まっている訳で、脱衣所には他の客もいた。その客たちは、好奇の視線で脱衣所に入ってきた白を見詰める。

(ちよつと……まさか……この視線はかなりキツイ……)

自分に向けられる視線に身震いし、その場に立ち止まる。

「気分が悪くなったから、やっぱりやめておくよ……(誰もいない時に入ろう)」

「そうか？ しっかり休んどけよ」

「体調管理は重要だ。気分が悪い時は無理をする必要はない」

「それじゃ部屋に戻ってるよ」

不愉快な視線から逃れて部屋へと戻る。1人になったことで、その間にやれることをやっておくことにした。

「そちらの様子はどう？」

「一応説明したんだけど……、なんか違う方向に進み始めたんだよね」

「どういうこと？」

「影分身解除したら伝わるから、その時にでも。それより、ちよつと忙しくなりそうだから当分は戻れない」

「えっ？」

「チャクラを使うようなことは極力ないから、問題ないし安心して……と言うか現在進行形で忙しいから、また連絡するよ」

そこで話は終わった。

(一体向こうで何が起きてるんだ？)

自分に安心していいと言われたが、内容を聞けないままだったので、逆に不安で仕方がないのだった。

57 和解？

風呂から先に部屋へと戻ってきたのはキバとシノ、それから赤丸だった。赤丸は既に犬の姿に戻っている。残りの2人は露出している肌の部分が真っ赤になっていた。

部屋へと入ってきた2人を見て白は不審気にその姿を見る。シノがキバに支えられて入ってきたからだ。

「シノはどうしたの？」

「長湯勝負してただけど、なんか茹っちまったみたいでさ。途中でやめて連れてきた」

「そんなことしてたのか……」

「医療忍者なんだろう？ パパツと治せないのか？」

「医療忍術は万能じゃないんだ。それに、なんとかに付ける薬は無いつて言うし、布団に寝かせて、団扇か何かで扇いでればいいよ」

医療忍者に対する考えを改めさせると共に、風呂で何をしているのかと、呆れたような声で、やる気なさげに適当な返事をする。

「おお！ そうなのか……。じゃあ頼んだぜ！」

「はあ？ 断るよ……。扇ぐのはキバがやってよ。どうせキバの方から勝負を挑んだんでしょ？」

「お前見てたのかよ……。まあそうだけどさ……。仕方ねえな……」

キバは面白くなさそうに言うと、シノを布団へと寝かせて、近くにあった盆を持ち、団扇代わりにシノを扇ぎ始める。しかし、始めてしばらく経つと、それも途中で飽きてきたのか、扇ぐのをやめて赤丸と戯れはじめた。

（はあ……。飽きるの早過ぎ。シノも勝負なんて受けなければ良かったのに……）

部屋の壁に差してあった団扇を手に取り、キバの代わりに扇ぎ始めた。キバはというと、今は赤丸の毛繕いに夢中なようだ。赤丸も満更ではない様子で喜んでいる。

それからしばらくして紅とヒナタが戻ってきた。紅は部屋の状態を見て眉を顰めながら部屋へと入り、ヒナタは紅の後ろに隠れるよう

にして部屋へと入ってきた。

部屋へと入ってきたヒナタの視線は白に固定されており、観察するようじつと見つめている。

「シノはどうしたの？」

「湯あたりのようです。誰かが勝負を仕掛けた結果ですね」

白はそう言うと、赤丸の世話に夢中になっているキバへと目線を向ける。

「あなたは止めなかったの？」

「そもそも風呂に入れてません。他の客の視線が煩わしかったので、人の居ないときに入ります」

「そう……」

紅は氣遣わしげに白を見た。そして、キバへと視線を移して溜息を漏らす。自分で行ったことを、他人任せにして自分のことをしているためだろう。

「取り敢えず……キバ！」

「はいっ!？」

赤丸の世話に夢中になっている時、突然呼ばれた自分の名前にキバは反射的に返事をする。そこで、自分と呼んだ相手が紅であることに気づき、冷や汗を流し始めた。動物的な直感で、目の前の紅が怒っていると分かったのだろう。

「あなたには赤丸の毛繕い以外にもやることがあるわね？」

紅はキバから白へと視線を向ける。

「はい……」

紅に尋ねられたキバは、赤丸から離れて、ゆっくりとした足取りでシノの元へと向かう。シノの看病を代わるためだ。そんなキバに、白は持っていた団扇を手渡した。キバは諦めたような顔をして団扇を受け取ると、シノの傍らに座り扇ぎ始める。

「白はヒナタと話をしておきなさい。ヒナタ……。いつまでも後ろにいないで出てきなさい」

なかなか出ないヒナタに、白は自ら近付いていく。そんな近付いてくる白に対して、ヒナタは更に硬直してしまい、その場から動くこと

ができなくなっていた。

白はヒナタの腕をとり、部屋の外へと連れ出していく。ヒナタは連れていかれるままに、身を任せるしかなかった。

廊下に出て、歩きながらヒナタに当たり障りのない言葉をかけるが、反応は芳しくない。落ち着いて話せる場所を求めて、歩いていると、廊下に長椅子が設けられていた。そこで、ヒナタと話すべく腰を降ろす。

「何から話そうか……」

「……ずっと一緒にいたのに……気付かなかった……」

「こつちも、てつきりわかつてるものだと思ってたよ」

「……………」

沈黙が少し過ぎたところで、あの場では言えなかった理由の一部を伝える。

「僕が拾われたのは知ってるよね？」

「……………」

「拾われたの最初の理由は、ヒナタの訓練相手のためだったんだ」

「……………」

このことについては、予想はできていたのだろう。何も返答はなかったが、ヒナタの目線は続きを促しているようだった。

「最初の手合わせで、実力もある程度知られてからは、ヒナタの世話と護衛も兼ねることで、アカデミーに通うことになったんだよ。その時に女として登録されたんだ」

「それで納得できたの？」

「納得も何も、命の恩人なわけなんだよね。だから、簡単に断ることもできないし……。それに、ヒナタと一緒にいるなら、女として登録していたほうが都合がよかったからね。言っておくけど、アカデミーには通いたいと思っていたから、ヒアシ様には一応感謝してるんだよ？」

「白は……父様に言われたから……私の傍にいたの？」

ヒナタにとって一番の心配事だった。人に言われたから一緒に居た……などと言われた時には、誰を信じていいのかすら分からなく

なっただろう。

そのため、白の次の言葉を聞き漏らすまいと、白の方へと向き直る。白を見るヒナタのその目は真剣そのものだった。

「これは前にも言ったかもしれないけど、ヒアシ様の言ったことは関係ないよ。ヒナタのことは家族だと思ってる。……この答えじゃダメかな？」

「……ううん。そんなことないよ……<ありがとう……>」

ヒナタは答えを聞くと、目尻に涙を浮かべて満足そうに微笑んでいた。そして、何かを思い出したように、目尻の涙を拭き取り謝罪の言葉を言う。

「ごつちこそ気付かなくてごめんね」

「いいよ。どうせこんな容姿だからね……。途中からは諦めてたんだ。まあ、くノ一なんて普通経験できることではないからね、何事も体験してみるものだと思ったよ（主に辛いことしかなかったけど……）」

「そうなんだ……。ねえ知ってた？ 白は女子生徒から人気があったんだよ？」

「えっ？ ……なぜ？」

ヒナタから言われた内容を始めて知ったことに、驚きを隠せなかった。そこまで目立つような行為をしている自覚が白にはなかったからだ。実際には、実技の成績は優秀なうえに、色々なことを知っており、そのことで威張るわけでもなく丁寧な対応をしていたので、一部の生徒から支持されていたのだった。

「たぶんだけど、何事にも冷静だし……色々知ってて頼れる人だったからかな？ 白がいないときに、よく趣味とか好き嫌いを聞いてくる子がいたんだよ」

「初めて知ったよ……ははは……」

任務などでいない時に、そのような話が上がっていたとは思いついかなかった事実には、苦笑いしか出ない。しかし、白もまたヒナタについての情報は持っていた。

「でもそれを言うなら、ヒナタも男子生徒に人気があつたことは知っ

「てた?」

「えっ?」

今度はヒナタが驚く番だった。自分に自信が持てないヒナタにとつて、あり得ないと考えていたのだろう。即座に否定し始める。

「そんなことあり得ないよ……。白みたいに綺麗じゃないし……。髪も短いし……。頭もよくないし……。<白に勝つてるところなんて……。>」

ヒナタは白と比べ始め、自分で思う劣っているところを言い綴っていく、最後の方に小さくつぶやくと、自分の胸に両手を重ねた。

「男子生徒が近付いて来なかったのは、日向家っていう名前と、僕が近くにはいたからだね。ヒナタは、ナルト君にしか意識がいつてなかったから気付かなかったかもしれないけど、結構な視線がヒナタに来てたんだよ」

「そうなんだ……」

未だに納得してないヒナタを見て、この時に言うしかないとはかりに白は問いを発する。

「と云うことで、男だと分かったんだから、髪の毛を短くしてもいいかな?」

「それはダメ!」

「ええ!? なぜ?」

ヒナタの強い拒絶の言葉に白はたじろいでしまう。女だからと今まで切らずにいたが、話したことで短めに切っても問題ないだろうと思っただからだ。既に髪の毛の長さは、足の付け根付近にまで伸びてきていた。

「白にはそれが似合うから」

「結構邪魔なんだけど……」

「家族の言うことは素直に聞いておくものだよ?」

「そこでそれを持ち出すの!?!」

「ふふふ」

その後も、笑顔を取り戻したヒナタと、アカデミーの生活において言えなかったことを、色々話をして部屋へと戻った。

「仲直りはできたようね」

「ご心配をおかけしました」

「すみません」

入ってきた2人の顔を見て紅は満足そうに言うと、報告書らしきものを片付け始めた。

「時間も遅いようだし、そろそろ人も少なくなっているでしょう。白はお風呂にでも入ってきなさい。キバはもう扇ぐのは止めていいわ」
「では行つてきます」

「ああー。やっと終わった」

白は着替えの荷物を持ち、風呂場へと向かった。

キバはあれからずっと続けていたのだろう、団扇を放り出すと、その場に身体を大の字にして倒れ込んだ。そんなキバを労うように赤丸が頬を舐めている。

ヒナタとの会話をだいぶ遅くまで続けていたせいだろう、脱衣所には誰の姿もなかった。そのことに安堵して服を脱ぐと風呂場へと向かう。扉を開けたそこにあつたのは露天風呂だった。

（さすが湯の国。当然露天風呂だとは思っていたけど、まさかここまで広い露天風呂とはね）

木の葉の里にも、露天風呂はあつたが、そこまで広いものではなかった。広さ的には木の葉の里と比べて、軽く3倍くらいはあるだろう。白はその光景に、多少圧倒されながらも歩を進める。

身体を洗い終わり、湯に浸かってくつろいでいると、誰かが風呂への扉を開ける音が聞こえてきた。湯煙で見えないが、足音から1人であることが分かる。徐々に湯煙の中を近付いてき、湯煙から姿を現したのはキバだった。

「あれ？ キバって1度入ったよね？」

「シノのやつをずっと扇いでたら、また汗を掻いたから入りに来たんだよ」

「ああ、なるほど。結構長い間扇いでたみたいだね」

「まあな。紅先生の目が厳しくてさ」

キバは掛け湯をすると風呂へと入ってきた。

「それにしても、ほんとに男だったんだな」

「まあね。性別のせいでも、結構アカデミーの時には苦勞したよ」

「そんなもんか？ 別に気にするようなことじゃないと思うけどな」

性別など全く気にならないのだろう。そんなことはどうでもい
とばかりに提案してきた。

「それよりも、どっちが長く浸かってられるか勝負しようぜ！」

「全く懲りないね……。勝負に関しては遠慮しておくよ」

「負けるのが怖いのか？」

「怖い以前に長湯は身体によくないからね。それじゃお先に」

「おい！ 待てよ！」

何か言い続けるキバを放って風呂を上がり脱衣所へと向かった。

白い肌は露天風呂に浸かったことでほんのりと赤くなっており、背後
から見れば女性と見間違うほどである。

浴衣に着替え終えて部屋へと戻り、シノの様子を確認した後に、そ
の日は就寝となった。

58 ガトー？

本体である白が湯の国にいる頃。再不斬の元へと行った影分身は——

豪華な調度品が壁沿いに並んだ部屋。その部屋には3人の人物が居た。1人は、その部屋の中にある応接セットのソファーに身を預け、書に目を通していた。そしてもう1人は、応接机を対面にして、書を見ては時折筆をはしらせ何かを記入している。最後の1人はもの言わぬ亡骸に等しい状態だった。

ソファーに身を預けているのは、白。そしてもう1人は再不斬の傍らに立っていた女だ。

「結構面倒臭いな……」

「お前があんなことを言いたさなければ……」

「再不斬さんがやられちゃうからいけないと思うんですけど、その辺どう思います？」

「お前のような奴が来たせいだ！」
「……………」

再不斬のことに触れた白を女は許せないのか、書へと記入していた手を止めて白を睨みつけた。この女にとって再不斬こそが全てなのだろう。

このような状況になった原因は、数日前に遡る——

「コピー忍者……写輪眼のカカシか……」

「ええ。一応付いてきてる下忍も約1名だけですが、中忍レベルくらいはあると思っただけです」

「そいつは楽しみだな」

再不斬はカカシの名前を聞いたことで、嬉しそうに目を細めた。戦えることに喜びを見出しているのだろう。有名な名を聞いて自分の力を試したいのかもしれない。

「さすがに再不斬さんでも、かなり危ないと思いますか？」

「ガトーから依頼が来るんだろう？ 雇われている以上は聞いてやる

さ。おい、鬼兄弟に行かせろ。殺れるなら殺っても構わないと伝えておけ」

「分かりました」

再不斬は傍らに佇む女へと指示を出す。女は、白へと睨みつけるような視線を送ってから部屋を出て行った。それを見届けてから、白は再不斬へ控えめに忠告する。

「戦力の小出しは、控えた方がいいと思うんですけど……」

「ただの様子見だ。これで殺られる程度なら俺が出るまでもないだろう」

しばらくすると、床に倒れていた忍者たちが意識を取り戻している。意識を取り戻した者たちへと再不斬は気遣うことなく言い放つ。「お前たちは倒れているやつらを連れて、俺が呼ぶまで別室に行つてろ」

再不斬からの一方的な言い方にも関わらず、忍者たちは頷くと、未だに倒れている者を連れて部屋を出て行った。

「さて、ガトーからの依頼が来るまでお前の遊びに付き合つてやる」「遊びではなく鍛錬なんですけど……まあいいです。教えてほしいのは、水牢の術と無音暗殺術のやり方です。ついでに戦闘技術を上げたいですね」

「……要望が多いな」

「……では、水牢の術だけでもいいです……」

「教えないとは言つてない。取り敢えず外に出るぞ」

再不斬は、ソファアの後ろに立ってかけてあった首切り包丁を背負い、部屋を出て行った。白もその後を追って行く。

その日から昼間は鍛錬をしてもらい、夜間に情報収集を兼ねて裏で動いていた。そして案の定、ガトーからタズナの暗殺依頼が入り、それを再不斬が引き受けた。既にこの時、ガトーが再不斬への金の支払いを渋っているという情報を得ていた白は、再不斬へと伝えたのだが……それを聞いても再不斬の態度は変わることが無かった。戦いたいと言う欲求が勝っているのだろう。

送り出してから数日経っても鬼兄弟は帰って来なかった。帰って

きたのは、鬼兄弟の動向を見張らせていた他の忍者だ。その忍者からの情報で、鬼兄弟があつかりと倒されたことが再不斬に知らされる。「だから言ったじゃないですか、戦力を小出ししたって無駄だって……それと服を着てください。暑いからって上半身裸はないと思います」

「お前が気にすることじゃない。情報では、そろそろこの島に着く頃か」

「はあ……やっぱり行くんですか？」

「今行かずにいつ行くんだ？」

「それは……まあ……行くのなら今でしょうね……」

ガトーからの依頼はタズナの暗殺である。そのタズナが何事も無くこの島にいて、あまつさえ橋の建設をしていれば、ガトーから何を言われるか分かったものではない。そのことを考慮に入れると、行動するのは今しかないだろう。

「それに、何か裏で動いているだろう？」

「ええ。どちらに転んでも問題ないように動いてはいます。ただし、再不斬さんが死にさえしなければ……ですが」

「……もし、死ぬことがあれば、あの女の好きにさせろ」

「ごつちとしては、戦うこと自体を止めてほしいんですけどね」

「それはできない相談だな。奴の実力を知りたいのもあるが、裏での賞金額はかなりデカイ。それがあれば、更に計画が早まる」

「欲張った結果、無駄にならないければいいんですけどね……」

再不斬は、白の言葉が終わる前に、首切り包丁を背負って行ってしまった。ああなってしまうては誰にも止めることなどできないだろう。

(このままだと見捨てたみたいで寝覚めが悪いな……)

そのすぐ後に、女が部屋へと戻ってきた。部屋の中を見渡して、目的の人物が居ないと分かるとう白へ問いただしてくる。

「再不斬様はどこに行かれたんだ？」

「この前話した人物に戦いを挑みに行きましたよ」

「なぜ止めなかった!? ……それよりも急がねば!」

「はい、ストップ」

白は一瞬で女と扉の前に移動し、部屋を出ようとするのを妨害する。この女が行ったところで足手まといが増えるだけで、再不斬の機嫌も悪くなることは明白だからだ。しかし、女の方は白のそんな考えなど知る由も無く、急いでいる時に妨害などされれば怒るのは当然だろう。そのため、そのことに対して怒鳴りつけてきた。

「何をする！ 邪魔だ！ どけー！」

「はあ……俺が代わりに行きますよ。霧隠れの里の暗部の面か何かありませんか？ それで顔を隠したいんですが」

「なぜ、お前に渡さねばならん？ これは、私が再不斬様から頂いたものぞ」

「つまり、今手元に持ってるんですね？」

女は懐を庇うようにして後ずさったが、そこからの白の行動は早かった。女の背後へと回り込み、首を絞めて気絶させる。女は常日頃から、再不斬から貰った暗部の面を携行していたのだろう。女をソファアへと寝かせた後、懐にあつた霧隠れの里の暗部の面を取り出した。そして、女の姿に変化して面を取り付ける。

(これで、バレないかな)

準備が整ったことで、すぐさま再不斬の後を追った。場所については、予想進路を事前に聞いていたので分かるが、絶対にその道を進むとは限らない。近くに水がある場所というのは確かなので、その辺りを目安に探すしかないだろう。

多少時間はかかったが、再不斬を見つけることができた。向かった先では、すでに戦闘が始まっている。現状では再不斬が有利と言ったところだろう。水牢の術でカカシを閉じ込めていた。

(ここから油断せずに、水分身を数体出して対応しておけばいいのに……近くで準備しておくか)

その後しばらくは、再不斬からの一方的な攻撃がナルトたちへと加えられていく。再不斬はカカシを捕らえたことで、脅威となる者がいないと分かったのだろう。その攻撃は、カカシに見せつけるために、わざと手加減されていた。その油断が、その後の明暗を分けるとも知

らずに……。

その後の展開は、予想通りだった。ナルトは一見、無防備に多重影分身で再不斬へと襲いかかったように見せつけ、その間に風魔手裏剣へと変化したのである。それを影分身へと持たせてサスケへと投げ渡していた。風魔手裏剣を2セット手渡されて、それを再不斬相手に悟られぬように、ひとつしかないように見せて投げるサスケの技量に感心しながら、その時を待つ。

下忍に頬とはいえ傷つけられたからだろう。再不斬からの殺気は膨れ上がり、ナルトへ照準を定めると、先ほど防いだ風魔手裏剣を片手に、攻撃しようとしたところでカカシに止められる。

(あーあ。完全に頭に血がのぼってるな……そろそろか……)

再不斬とカカシとの術の応酬。それを制したカカシが、再不斬へ止めを刺す前に、白は起爆札を再不斬へと投げつけて、再不斬を巻き込み周囲ごと爆破した。

再不斬の居た場所は、起爆札により土煙が舞い上がる。そして、土煙が消えたそこには、地面が抉れ、首切り包丁だけしか残っていないかった。

「協力感謝します」

起爆札を投げられた場所を特定したのでだろう。爆発前にこちらに気付いたカカシは、相手の面と言葉に多少不審に感じながらも警戒心を緩めた。しかし、他のナルトたちは、初めてその存在に気付いたように、警戒心を露わにする。

「確かその面は……霧隠れの里の追い忍だな……」

「ええ。抜け忍である再不斬を確実に殺る機会を窺っていたんですよ」

起爆札での爆破地点へと赴き、首切り包丁を回収する。

「なんなんだってばよ！ お前は！」

「安心しろナルト。敵じゃないよ」

「んなこときいてるんじゃないの！ あんないきなり来たような奴にあっさり再不斬が殺されたんだぞ！ 俺たちバカみてーじゃん！ 納得できるかつ!!」

カカシは騒ぎ立てるナルトを鎮めるべく、ナルトの頭に手を置き、諭すように語りかける。

「まあ、お前の気持ちも分かるが、相手も任務だ。しかも、追い忍ともなれば確実な任務達成が求められる。納得はできなくとも、理解はしておくことだ」

ナルトはバツが悪そうにそっぽを向き、不満そうな顔をしていた。追い忍などのことについて何も知らないからだろう。カカシに言われたからと言って、ナルトには納得も理解もできるものではなかった。

「それではこれで失礼します」

白はその場から走って立ち去っていく。カカシたちから離れて、見えない位置まで来ると立ち止まった。そこに居たのは、身体中火傷の後を負った再不斬とそれを治療している白だった。

あの時、準備として水分身を作りだして待機しており、再不斬が負ける瞬間を待っていたのである。そして、起爆札にて土埃を起こせることで視界を妨げ、その間に再不斬を影分身に移動させていた。この時には、無音暗殺術がある程度取得していたので、視界が悪い中で移動にも不都合はほぼない。

カカシたちへの対応を水分身に任せて、移動した影分身は、重傷な箇所のみ仙掌術にて治していく。

「酷くやられましたね」

「半分はお前にやられたような気がするがな」

「助けるにはああした方が良かったんですから文句は言わないください。それに、あのままだと確実に殺されましたよ」

「確かにな。写輪眼があそこまでのものとはな……」

「あれで再不斬さんが死んだと思ってくれればいいんですがね……」

そこへ役割を果たした水分身が首切り包丁を持って戻ってきた。

「これでひと通り酷い箇所は塞ぎました。後は養生していれば数日で治るでしょう」

「お節介野郎だな」

「これからどうする気です?」

「次なら……写輪眼を見切れる」

「見切れるだけで、勝てるとは限りません」

「……何が言いたい?」

「ローリスク、ハイリターン。より目的を達成しやすい方へと計画を変えませんか?」

「裏で動いていたやつか」

「ええ。ここで話しをするのもあれですし、取り敢えず戻りましょう」

白は再不斬を支えて拠点へと戻って行った。

建物へと到着すると、気絶させた女が凄惨な形相で白を睨み付けるが、支えられている再不斬を見て急に態度を変え、心配そうな顔をして駆け寄ってくる。

「どうなされたのですか!?!」

「気にするな。それよりも、お前にも話があるから部屋へ一緒に来い」
3人は部屋へと戻る。白は、再不斬をベッドへと寝かせてから、準備していた計画について説明をしていく。

「以前にも話しましたが、ガトーは最初から再不斬さんへの金の支払いはしないつもりのようなのです。現に街のチンピラを続々と集めてますしね。再不斬さんとの契約金に比べれば、かなり安いですが、人数が多いです。そいつらを使って再不斬さんたちを殺る計画ですね」

「それが分かっていながら、なぜ今頃話した!」

「一応前もって再不斬さんには話しましたよ」

怒る女に白は既に伝えてあることを話した時、再不斬が先を促す。

「その辺りはいい。計画について話せ」

「早い話がガトーカンパニーの乗っ取りです。ここ近年で波の国で大手を振っているようですが、実質仕切っているのはガトーのみ。他の奴らに発言権はありません。それに金をケチっているせいか、側近にも大した護衛は付いていませんからね。楽にやれるでしょう。もちろんガトーを殺すのは駄目ですよ。色々と情報を聞き出さないといけないので」

「確かに金を手に入れるには手っ取り早いですが、運用などはどうする気

だ？」

「そのために殺さずしておくんです」

「……面倒そうだな」

再不斬は、戦うこと以外あまり興味が無いんだろう。心底面倒くさそうに言う。

「再不斬さんは、そのまま雇われていることにしておけばいいじゃないですか。ガトーカンパニーに手を出してくる奴らと戦う。今とそう変わらないと思いますよ？ 運用に関しては、信用できる部下に任せたらどうですか？」

白は女へと視線を向ける。再不斬も女へと視線を移した。

「そうだな。お前は白と共に計画を進めろ」

「……分かりました」

女は明らかに不満そうではあったが、再不斬の言葉には逆らえないのか、頷くと白へと向き直る。

「さっさと行くぞ」

「はあ……（ここまで来たら付き合うしかないか……）」

その日。どこから聞きつけたのか、ガトーが護衛を引き連れてやってきた。白は顔が見られては不味いため隠れてその様子を見ていた。

「あんたがやられて帰って来るとは——霧の国の忍者はよほどのへぼと見える。鬼人と言われていたようだが、霧の国の中だけの話のようだな」

「……………」

「何とか言ったらどうだ」

ガトーが再不斬へと近付き、顔へと手を伸ばそうとしたところで、再不斬の傍らに立っていた女がその腕を掴む。その瞬間、護衛の2人が動き出そうとしたが、女は素早くガトーを前面に押しだし盾代わりにした。

護衛の2人は抜き放つ直前にて辛うじて止めたものの、あのまま抜ききっていればガトーを殺す結果になっていただろう。

（あの女、ガトーを生かしとけって言ったのに何してるんだ？）

「つ……次だっ！ 次に失敗を繰り返せば、ここにお前らの居場所は

ないと思え!!」

自分が死ぬかもしれないなかったことに動揺を隠せず、ガトーは捲し立てるように言いきると、護衛の2人を急かし、慌てて部屋を出て行った。そのことを確認し、白は姿を現す。

「では行ってきます」

「ああ」

その後、ガトーを尾行していく。ガトーたちが住処へと着いたところで奇襲を仕掛け、護衛2人には退場してもらい、ガトーを簞巻きにしたところで、必要なことを聞き出しながら必要な書物を読むことになったのだった。

59 達成？

荷物運びの任務。その終着点である木の葉の里が見えてきた。

任務が、あの木の葉の里の門を潜れば終わるといふ喜びから、キバは赤丸と共に門へ向けて競うように走り出した。その光景を見て、紅と白は溜息を漏らす。初のＣランク任務。それも、戦闘を伴うものだったためなのか、門を潜った後もキバは興奮しているようだ。

「ご苦労さま。私は報告書を提出してくるから、あなたたちは、今日のところは解散にするから休みなさい。白は悪いけど、その馬を返してきて頂戴」

「ひゃっほーい!! 久しぶりの休みだ! 赤丸、散歩に行こうぜ!」

「では、俺は虫集めにでも行くか」

「白はどうするの?」

「取り敢えず家に帰ってから考えるよ」

キバと赤丸は、疲れた様子すら見せずに、赤丸と走り去ってしまった。シノも一旦帰るのか、歩いて行ってしまふ。白とヒナタは、馬を返しに依頼人の元へと向かった。

それぞれが、その場から立ち去ったのを確認して、紅は溜息を漏らした。紅は上忍に成り立て、しかも今回が初の下忍の受け持ちである。そこへ更に初のＣランク任務。班メンバーでの連携は、そこそこできるようになってはきていたが、課題がないわけではなく、悩みの種は尽きなかった。

今回はたまたま相手が弱く、数も少なかったので助かったに過ぎない。この経験で自分は強いなどという思い上がりがないように、湯の国を出る朝に説教をしたのだが、それがどこまで伝わっているのか、紅には分からなかった。

班員全体に言えることだが、あの日の任務に対する指示の無視。キバは独断専行の傾向が強く、シノは寡黙に過ぎる。ヒナタは性格上仕方ないかもしれないが周りに流されやすく、白に至っては何を考えているのか分からない。それらの事柄を考えて、紅は再度溜息を漏らすと、報告を上げるために気持ちを切り替えて依頼所へと向かうのだっ

た。

白たちが馬を返却し、アパートへと戻ったそこには、扉に封筒が挟まっていた。

「どうかしたの?」

挟まった封筒の内容を見て固まっている白へと、不思議そうな顔でヒナタが声をかける。ヒナタから見た白の顔は、若干ではあるが引き攣っているように見えたからだ。ヒナタにとって白は、いつも落ち着いていて、色々なアドバイスをくれて、更には自分を励ましてくれる存在であった。時に困ったような顔をすることもあるが、このような顔を見たことがほとんどなかったのである。

「ちよつと用事ができたから、ヒナタは好きにしてて」

「えっ?」

その場から一瞬で立ち去った白を探すために、キョロキョロと周囲を見渡してみるが、近くには既に白の姿はなかった。

白が向かった先はヤマトの所である。挟まっていた封筒には暗号で、帰ってきたらすぐに来るよう記載されていた。何かあったのかと思ひ、急いでヤマトの元へと向かったのである。内容が記載されていないことがより不安をかきたてていた。

「ヤマトさん。戻りました。何か火急の用件ですか?」

「おかえり。用件についてだけ……、火急と言うほどのことではないんだ。ただ君に、決めてもらいたいことがあってね」

ヤマトは意味深な答えを返してきた。それを聞いて白の不安は更に高まっていく。そのため、用件を聞くのを躊躇ってしまった。そして、沈黙を保っていると、ヤマトの方から切り出してくる。

「用件と言うのはだね……中忍試験についてなんだ」

「中忍試験ですか? それがどう決めることに繋がるのかが分からないんですが?」

「君には選択肢が2つある。砂の国へ使者として行くか、それとも中忍試験の打ち合わせに参加するか」

「また、選択肢があつてないようなものですね……」

以前の出来事を考えるならば、砂の国に行くという選択肢は、白の中には存在しなかった。夜間に移動すればなんとかなるとはいえ、そこまでして行きたいと思えるほどではなかったのである。それに比べれば、部屋に缶詰にされるとはいえ、屋内での作業の方が遥かにマシであった。

「おそらく、そう言うとは思ったんだけどね……君がいない間に他の件名は埋まってしまったんだよ……。というわけで、僕と君で別れてどちらかを選ばないといけないわけなんだけど……。君の中では決まってるだろう？」

「ヤマトさんまで巻き込んでしまったみたいで申し訳ないです。そうですね……。すいませんが中忍試験の方でお願いします」

「謝る必要はないさ。……では僕が砂の国の方へ行こう」

「ありがとうございます。それにしても、なぜ今回も暗部を使うようなことになってるんですか？ 以前は地理を知るためということと納得できましたが……」

今回も砂の国へ暗部を使いに出す理由が分からなかったので、確認のために聞いたのだが、ヤマトは言い難そうに少し考える素振りを見せると意を決したように語り出した。

「……これはあまり知るべきではないんだが……暗部は2つあるのは知ってるかい？」

「ええ。火影であるヒルゼンの爺さん直轄とダンゾウ様の根の2つです」

「その通り。今回ダンゾウ様……根の方が怪しい動きをしているんだ。その1つに砂の国への働きかけも入っている。だから、極力色々な場所へ、火影様直轄の暗部を配置しているんだ」

「そして売れ残ったのが砂の国と中忍試験ですか……」

「売れ残ったというよりも、後に回して問題ない用件だったと言うべきだろうね。既に他の暗部の人たちは動いている訳だから」

（この段階で既に木の葉の里の改革でも狙っていたのか？ 今の火影とダンゾウは、上手くやっていると思ってたんだけど……）

今考えていても仕方ないと、思考を切り替えてヤマトへ質問する。

「打ち合わせはいつからでしょう？」

「まだ先だよ。君も以前したことあるから大体の期間は分かるだろう？ 約半月ほど先の話になる」

「結構前から他の人も動いてるんですね」

「これでも遅いくらいさ。僕は砂の国から帰ってきたら、火の国の大名様の警護に入る。君への指示はいつも通りの方法で行うから、気にしておくこと。それと他の国への依頼は極力受けられないように、紅上忍には話しを通しておくけど、君の方からも注意しておいてくれ。さすがにそちらにまで、気を割く余裕がなさそうなんだ」

「分かりました」

白は思い返していた。暗部へと入ったところに聞かされていた内容と、火影とヒアシとの取引内容を……。

それは、木の葉の里にとっては当然のことだった。その内容とは、日向家——白眼についてのものだ。白眼を他里に奪われてはならないのは分かる。それが宗家の者となれば尚のことだ。そのため、宗家であるヒナタが、里外に出る時には暗部の者が付くようになっていく。その役割を白に任せようというものが、火影との話し合いに含まれていた。ヒナタが里外に出るなど、下忍になるまでそう頻繁にあることではない。そのため、白に卒業までに暗部へと入るよう期限が設けられていたというわけだ。

そこまではよかった。白にとってはいい迷惑だったが、最後の内容を聞いて更に嫌な顔をしてしまう。それは……ヒナタの処遇についてだった。処遇と言っても特に何かをするわけではない。ヒナタは宗家であるため、分家には施されている呪印術——死んだ際に白眼の能力を封印する術式が刻まれていないのだ。そのため、遺体だとしても他国へと持ち去られるわけにはいかなかった。そして、白へと伝えられたその続きは……

「ヒナタ君については、遺体だとしても基本的に持つ……連れて帰ってきてくれ」

ヤマトは白からの視線を受けて言い直す。遺体とはいえ物扱いを

するというのは失礼だと思っただろう。

「……基本的にと言うと、他にもあるということですか？」

「君が運べない、もしくは敵に奪われると判断した場合は、生死を問わず処分するんだ。……特に頭に関しては確実に」

「……それがメインであの班に配属されたんですね」

「そういうことだよ。これが君に課せられている本来の暗部としての任務だ」

「死んでいるならともかく、生きている時もと言うのが……」

「君も分かっているだろう？ 日向家の跡取りに目されているのはヒナタ君ではない」

「……………」

理解はできるが、納得できるものではない。それを表情から読み取ったのか、ヤマトは元気づけるように続ける。

「悪い方ばかり考えないで前向きに考えればいい。君が守れるくらいに強くなればいいんだよ」

「まあ……そうなんですけどね」

ヤマトの励ましの言葉も、白にはあまり効果は無かった。ヤマトも心の整理が必要だろうと、この日はこれ以上、他のことを何も説明せず終えたのだった。

Cランク任務が終わってから、キバはCランク任務もいけると自信を付けたのだろう。毎回Cランク任務を要求してきていた。そして、その度に紅に叱られているのだが、諦めるつもりはないようだ。結果として、任務を受けずに訓練に割り当てられることが多くなる。紅なりに考え方を改めさせるためだろう。それでも……上忍と下忍の力の差を見せつけられても、キバの考えが変わることはなかった。

一応力の差を理解はしたようだが、Cランク任務を受ける受けないとは別という考え方のようだ。それが分かっているからは、訓練よりも任務の重要性を講義することになった。これにはさすがのキバも堪えたようで、何度か受ける内に、不満ながらもDランク任務に対して何も言わなくなった。言ったら講義が待っているからだろう……。

中忍試験の打ち合わせが近付いてきた頃に、影分身から短く連絡があり、影分身が解除された。それにともない、波の国での経験が一気に白の頭の中に入ってくる。

(なるほど、ガトーの処理に手間取っていた訳か……。首切り包丁欲しかったけど、再不斬さんが生きてるなら仕方ない諦めよう。それにしても、再不斬さんの部下って中忍以下しかいないのか……。まあ、情報収集が今後メインになってくるみたいだし問題ないな。あの女も忍者の能力はともかく、事務処理能力は優れてるみたいだし……。それにしても、あれからカカシさんとは殺らずにあんなことになるとはね)

再不斬がカカシに敗れて、その敗れた時の内容が原作と違うために、大幅に変わったと思っただがそうではなかった。

再不斬の治療力を高めるために薬草を採取しに行ったのだが、ナルトたちは木登りの修行をしていたのである。再不斬が生きていると仮定しての修行のはずが、死んだように見せかけてもされていたことに、白は驚いていた。それから、影分身はナルトたちを監視していたようだ。

その後、再不斬がカカシに挑むことはなかったのだが、ガトーに雇われていたチンピラたちは違った。上からの指示がなかったせいだろう。今までも好き勝手やってきたうえに、橋の完成を邪魔をするという目的については、最初の契約で聞かされていたので、上からの指示なく数人のチンピラが橋の職人たちに怪我を負わせたのだ。それからは木登りの修行を中断して、橋の護衛をナルトたちに任せている。カカシは再不斬との戦闘による後遺症の回復に専念といったところか。

そんな時に、また数名のチンピラが来たが、これをサスケが容易く撃退した。そこまでは良かったが、数日後に仲間を大勢連れてチンピラたちが戻ってきたのである。

多勢に無勢の中、サスケが写輪眼に目覚めると共に、ナルトも影分身で応戦するが、相手の数があまりにも多すぎた。ナルトたちは橋職人を庇いながらである。しかも、相手を倒すだけに留め、殺さない。

それがチンピラたちを調子づかせる一因にもなっていた。

助力しようかと考えていた時に、再不斬とカカシが同時に現れたのである。カカシは驚きで大声を上げた。確実に死んでいたと思ったのだろう。

「再不斬!?!」

「——霧隠れの術——」

そこからはあつという間だった。再不斬が霧隠れの術を使用し、橋の上が霧に包まれたのと同時に悲鳴が、あちらこちらから響きわたる。そして、悲鳴がなくなり霧が晴れたそこに、生きて存在しているのは、再不斬とナルトたち、それに橋職人たちだけだった。

「何故生きている? それに、そいつらはお前の仲間じゃないのか?」

「仲間だと? そんなやつは始めから存在しないな」

「……お前はタズナさんを狙っていたはずだ。なぜ同じ目的である者を殺った?」

「ああ。そこにいるじじいか。……狙う理由がなくなったとだけ言っておこうか。こいつらを殺つたのは俺のリハビリのためだ。お前と殺る気は今のところない」

「それを信じろと?」

「信じる信じないはお前の勝手だ。それとついでだ。お前たちにとっていいことを教えておいてやろう。ガトーの方針が変わったようだぞ。今いる下っ端共に話がいつているかまでは知らないがな。早く橋を完成させることだ」

カカシは再不斬の真意を見抜くことができないのだろう。再不斬の行動を見逃すまいと神経を張りつめていた。

しかし、再不斬は言い終えると、その場から姿を消してしまう。しばらくは油断なく辺りを探っていたカカシは、肩透かしを喰らってはいた。しかし、ある物が目に入ったのか、カカシは造りかけの端の先端の方へと顔を向ける。何故なら、船が橋の先端へと近付いてきているからである。

少しして、その船は橋へと辿り着くと、乗っていた者たちが渡り板を掛けて橋へと上ってきた。その船に乗っていたのはガトーに雇わ

れた者たちだったのだろう。増援として駆けつけたのだった。今度はカカシが戦うのかと見ていた矢先、カカシたち側にも増援が現れる。それは島の者たちだった。しかし、それだけだったならば船からきた者たちは戦いを挑んだだろう。それを見るまでは……。

ナルトたちで見えにくいその先にあつたのは、血を垂れ流し倒れている数多の人だった。中には見知った者もいたかもしれない。それに気付いた者たちが1人、また1人と後ずさり船へと戻っていく。残った者たちは訳が分からず立ち竦んでいた。これを好機と捉えたのか、カカシはナルトに影分身を解くように言いつて解かせ、仲間たちが倒れていることを見せつけたうえで、分身の術を使い、橋を塞ぐようにして人数を増やしたのである。これが船から上がってきた者たちには決定的だった。

我先にと船へと逃げて行き、中にはそのまま海へと身を投げる者までいたのである。

それを見届け影分身はその場を去ったようだ。それからしばらくは、ガトーカンパニーの仕事をしつつ、再不斬に鍛錬をしてもらってはいたが、チャクラが枯渇寸前になるまで粘ったようで、そこで終わりとなっている。

(最後まで鍛錬できていないのは残念だけど、目的は達成できたからよしとしよう。それにしても、一気に経験するのはきついな……)

頭痛を堪えながら、目的を達成できたことに取り敢えず満足し、中忍試験打ち合わせの日まで、習得したことの反復練習を行うのだった。

中忍試験

60 打合せ？

中忍試験の打ち合わせ。それは前年と同じ内容に決まろうとしていた。

前年度の中忍試験の1次予選の内容は、一定区域内におけるチーム同士の総当たり戦だった。決められた日数以内に、2チーム撃破したチームから抜けていく。その後、2次試験として残ったチームで個人トーナメントを行う。そして3次試験で、本選までの間に期間を設け、そこで情報収集能力をみるというものだ。

（原作とは違うけど、まあいいか。ペーパーテストが無いから楽そうだ）

特に異論なく進められようとした時に、1人がおもむろに立ち上がり意見を述べる。

「拷問・尋問部のイビキだ。今回の試験についてだが、情報収集の重要性を分からせるためにも、先に1次試験にてペーパーテストを行いたい」

「情報収集であれば、予選から本選までの間に行う分で十分ではないか？」

「そもそも、中忍として十分な実力がなければ、情報収集などできんだろうし任せられんだろうから、1次試験での必要性を感じないな」

「違うの考えるの面倒……」

イビキの意見に対して、疑問もあれば反対意見もあった。中には明らかに真面目に考えてない発言もあったが……。

周囲の言葉に動じることなくイビキは言い放った。いや、最後の言葉には微かに顔を顰めたがそれだけだ。

「それでは温過ぎる！ 下忍であろうとも情報の重要性を知らなければ、仲間から、それだけではなく里から、ひいては国からも信用を失う！ ……3次試験で情報収集能力をみるとはいつても、情報の重要性を説くわけではない。それを分からせる意味で1次試験で行うと

言っているんだ。分かっている者に、そもそも中忍試験を受ける資格すらない！ それに……内容については既に考えている」

イビキは最後に、面倒と発言した人物へと視線を向けて言葉を締めくくった。既に内容を考えているのであればと、打ち合わせに参加した者たちは賛同の言葉を続々と囁きだす。その声を聞き、打ち合わせのまとめ役である議長が発言した。

「異論のある者はおるか？ ……いないようであれば、イビキに1次試験の担当を任せよう。さて……では、2次試験については1次試験を持つてくるということになるが、これについて意見がある者はおるか？」

2次試験については誰も意見を出すことは無く沈黙が部屋を満たす。議長は部屋を見渡し、誰も意見が無いことを確認して頷いた。

「意見はなしと……。では担当を決めるか……そうだ、アンコお前がやれ」

議長は担当について少し考えていたようだが、何かを思いついたのか即決してしまった。指名された本人は驚きを隠せない。

「ええっ!?! なんで私がやらないといけないんですか！ そういうのは新米にやらせればいいでしょー!」

「最近の話なんだが……仕事中に団子屋である人物をよく見かけると聞いてな。まさか上忍にそのような輩がいるわけないと思い、見に行っただが……」

「ああもう！ やればいいんでしょ！ やれば!」

「なんだ。やる気があるのではないか。最初からそういえばいいんだよ」

「そのかわり、内容は私の好きにさせてもらいますからね!」

「チーム戦になるようであれば、内容は決めてもらって構わんよ。2次試験の担当はアンコで決定と……」

「私に任せたことを後悔するくらいに数を減らしてやるわ!」

「……と言っていることだし、3次試験は無くてもよいか……」

「一応ですが、設けといたほうがよくないですか?」

「もしかしたらってこともあるし、俺もその方がいいかと」

「3次試験は今回個人戦になるわけだし、特に決める内容もないから、あつてもいいんじゃないでしょうか？」

「そうだな……。では担当に付きたい者は居るか？」

「ここでまた沈黙になると思いきや、集合したメンバーの中の1人が意見を出した。」

「ここに今日集合していない人物はどうでしょう？」

「誰か来てない者などいたか？」

「ハヤテのやつが風邪をひいたと言つて来ていません」

明らかに自分に担当が回つてこないようにするための発言だが、周囲の者も同じ考えのようで、次々と後押しするように同意の意見をあげていく。

（こんな理由で今回の担当決まったのか……。1次試験はまともだけど、2次試験は完全に八つ当たりの対象だな、これは……。3次試験のハヤテさん……。風邪ひいて休むとか普通ありえない……。なにか別件かな？ 優秀な人は忙しそうだな……。誰かさんなんて団子屋でサボつてるっていうのに……）

議長が最終的な採決を取り、反対意見が上がらなかったことで、その日の打ち合わせは終了となった。

次の日。試験ごとに担当者の振り分けが行われていく。その中で白は1次試験に割り当てられていた。

「昨日も言ったが、既に内容については考えている。後は、ペーパーテストの問題内容についてだけだ。問題数は10問とし、最後の1問は考えているので、他9問を考えてもらいたい。中忍以上でないと解けないような問題を、だ」

「実際の内容とはどのようなものですか？」

「そうだな。説明しておこう。ルールについてだが、まず第1に、受験者各自に持ち点10点を与えておき、減点方式で行う。先ほども言ったが、問題は全部で10問あり、各1点とする。不正解の数だけ持ち点から引いていくわけだ。第2は、チーム戦であることを意識させるために、チームの合計点数——チーム単位で競う。第3は、分かり

やすいカンニング行為が発覚した者から、1回のカンニングに対してその者の持ち点から2点の減点をしていく。0点になった者……及びそのチームはその場で退場という流れだな」

「それだと、ただの情報収集と変わらないのでは？ 無様なカンニングをするなつてことだけですよね？」

「一応チームにも影響を与えるからプレッシャーにはなるんじゃないか？」

「しかし、情報の重要性を知るのには少々物足りなくないか？」

担当者の間からは口々に疑問の声が上がるが、イビキに堪えた様子はない。それどころかニヤリと笑う。顔の傷と相まって不気味な印象を担当者たちに与えていた。

「言いたいことは色々あるだろうが、これまで説明したのはただのルールで、1次試験の前座にすぎない。一番重要なところは問題の最後……10問目に設定する。10問目は試験開始から45分後に出題し、ここで精神的な揺さぶりをかけて、甘い覚悟を持った者を落とす予定だ。10問目は受けるか受けないかという2択だが、受けるを選び間違えた場合には、永久に中忍試験受験を剥奪するという偽の情報を流す。つまり、説明したルールは、受験者に精神的プレッシャーを与える為にあるようなものだ。もちろんそれまでに持ち点0となった者と、そのチーム及び最後の問題で答えられない者とそのチームには退場してもらう。簡単にいうと、最後の問題で受けるを選んだ者のみを合格とするという話なだけだ」

最後の言葉を聞いた担当者たちは、試験内容に特に異論を挟むことはなかった。

「異論がないようであれば、問題作成に取り掛かってもらいたい。下忍程度の知識では解けない問題で頼む」

「ああ。それなんです、最後の問題以外関係ないとは言え、カンニングによる情報収集能力もみるんですよ？ 下忍に分からない問題を出してもカンニングに意味がないんじゃない？」

「説明不足だったな。1チームだけ答えを知っている中忍の者を入れる。それを見抜いてカンニングするもよし、その見抜いた相手のもの

をカンニングするもよしといったところだ」

「そういうことですか」

「忍具……例えばですが忍獣などの使用については？」

「それは別に構わんだろう。それも個人の能力として取り扱う」

「分かりました（これで、キバの赤丸やシノの蟲は使えるってことだな）」

「他に意見がなければ早速問題作成に取り掛かってくれ。議長に試験内容の説明を求められているからいつてくる」

イビキはそう言うと、議長の元へと向かっていった。残されたメンバーで問題の作成を行っていく。

（これって俺が出たらカンニング以前の問題だよな……）

数日かけて問題を作り終えた。その内容は、中忍クラスでも難しいレベルにまで達していた。しかし、そもそも自力で解くようには設定しなくてもいいため、どうせなら……ということを決まってしまうのだった。

「やつと終わったな」

「なかなか問題作りもきついもんだ」

「お前のやつは暗号だったからいいじゃねえか。俺なんて、地形から敵戦力の規模と方角を割り出せっていうやつだったぜ？ 条件をシビアにするのにどれだけ悩んだか……」

「気分転換に、終わったことだし飲みに行くか」

「よし行こう！」

最終的な確認を終えてそれぞれが帰っていく。白も帰るべく席を立った時にイビキから声をかけられた。

「あー。ヒミトと聞いたか？ 火影様から呼び出しがかかっているからすぐに向かってくれ」

「分かりました（また任務か？ 人手不足も深刻だな）」

そのまま、白は火影の元へ向かう。執務室の扉をノックし、相手の返事を待たずして中へと入っていった。その態度に中にいた火影は、どこか諦めたような顔をして溜息を吐く。

「呼ばれたんできました」

「もう少し……いや、なんでもない。それはそうと、今回呼んだのは中忍試験についてじゃ」

「中忍試験の打ち合わせなら終わったから、今変更しようとしても無理じゃない？」

「打合せではなく、お主の処遇についてじゃが、今回お主は中忍試験には参加できない」

「ええー!? 紅上忍の班で参加できないの?」

中忍試験を楽しみにしていた白としては、火影の言葉に愕然とする。

「お主が参加したら色々均衡が崩れてしまうわ! ……それにスリーマンセルでの試験じゃからの。ついでに言うならば、お主は医療忍者としての試験を受けることになるから土台無理な話じゃな」

「試験内容知ってるから楽勝だと思ったのに……」

「分かっと思うが、試験内容は同じ班員と言えども言ってはならぬぞ」

「もちろん言わないよ。言わなくても余裕だと思っからね……」

ヒナタの白眼、キバの赤丸、シノの蟲。どれも情報収集である1次試験や、戦闘を含む探索の2次試験では十分すぎる能力ばかりだ。ここに白が加われば、確かにほぼ盤石の体制となるだろう。

気落ちしながらも火影へと返事をして帰ろうとしたところで、火影が呼び止める。

「ちよつと待て。まだ話は終わつたらん」

「まだなんかあるの?」

不機嫌そうな声を隠しもせず白は応えた。

「2次試験についてじゃが、暗部として白眼持ちに付けてもらう。ただし、手出しは無用じゃ。もし、死んだ場合は他里に調べられる前に回収することを任務とする」

「中忍試験でもそのことが付いて回るなんてね……」

「そういう決め事じゃったからの」

「あれ? でも中忍試験って医療忍者も同じ日にやるんじゃ?」

中忍試験の1次試験については同じ日にされるため、白の疑問は当

然だった。打合せの場においても、日を変えるなどといった話はなかった。そのため、今回も同じ日になると思っていたのだ。

「お主は今回の医療忍者としての中忍試験も諦めてもらうしかないの」

「ああ、そうなるのか……別にいいけどね。どうせ簡単な内容だし、来年の春のやつで受ければいいんでしょ？」

「そうじゃの」

「はあ……それにしても嫌な任務だよなあ……」

そんな白の様子を見て火影は白から身体ごと背けて、前置きを置いたうえで話し出した。

「ここからは独り言じゃが……暗部の者が、食料調達のために攻撃した余波が稀に……突拍子もないことになることもあるから困るのお。今年はどうなることやら」

白は火影の言葉に表情を和らげ、軽くお辞儀をすると静かに執務室を出て行った。

「全くもって、まだまだ精神が鍛えられておらん……。わしは……あの時は何もできなんだ。あやつには悔いを残さんで欲しいの……」

火影はキセルを加え、外の景色を見ながら回想に浸るのだった。

61 推薦？

中忍試験の最終打ち合わせが終わり、白は解放感に包まれていた。やっと、この環境から抜けられる……前回の時と同様に、部屋への缶詰め状態が続けば、終わった時のそれを強く思ってしまうのも仕方ないことだろう。

その後、数日間は、いつも通り紅班で訓練と任務を行っていた。

人探しに物探し、犬の散歩と任務をこなしていたのだが、この時、キバが任務に対して我が儘を言わなくなっていったのに白は驚いた。白が中忍試験の打ち合わせをしている間に何かあったのだろう。紅指導の下みっちりと任務の重要性について言い聞かされたのかもしれない。訓練に対してはいつも通りのやる気を見せているので、これで任務に対してもやる気を見せていけば、忍者としては良い方向に進んでいると言えるだろう。

中忍試験が近付いてきた頃。集合の合図である鳥の鳴き声が、『ピーヒョロロ』と聞こえてくる。今回は鳥の鳴き方から、下忍を指導している中忍以上の者が対象のようだ。この場合、白も医療忍者として下忍に対し、講義を行っているため対象に含まれていた。

(火影のところの広間に集合か……中忍試験のことだろうか)

紅もその鳥の鳴き声に気付き、白と同じように上空を窺っている。

「……あなたたち。……今日のところはこれで訓練を終わりとします。また明日いつもの時間にここへ集合するように」

「おうー」

「了解した」

「分かりました」

「では解散」

紅は言い終えると、その場から立ち去った。白も集合場所へと向かうために、ヒナタに呼びかけようとしたところで、キバが提案してきた。

「このまま訓練続けないか？」

「終わりって言われなかった？」

「続けちゃだめなんて言われてないだろ」

「俺は別に構わない」

「自主的にする分にはいいと思う……」

「まあ、こっちは、ちよつと行かないといけなところがあるから、ここで失礼させてもらうよ」

「やらないのかよ」

「医療忍者にないを求めてるのさ。取り敢えず怪我をしないように気を付けてね。それじゃ」

その場に留まっていれば、更に引き留められてしまうため、白は一方向的に言い切ると集合場所である広間へと急いで向かった。

集合場所である広間に時間ぎりぎりに到着して落ち着ける場所を探す。広間には既に、ほとんどの者が集まっているようだった。特に整列している訳でもなく、人によって場所もまちまちだったため、白は隅の方へと向かいその集まりに加わる。

部屋の奥には、火影が柔らかそうな椅子に座り、キセルを吹かしながら、予定の時刻になるのを待っていた。

そして、予定通りの時刻になったのを確認すると、今回の集まった目的について話し出した。

「さて……目的は以上じゃ。ということ、今回行う中忍試験についてだが、新人の下忍を担当している者で、中忍試験に推したい下忍はおるか？ おるのであれば、担当の者は前にだよ」

火影の言葉で、3人の上忍が集まりから離れ、火影の前へと出て行く。

「カカシに、紅に、アスマか……。言うまでもないことだが、形式上8任務以上こなしていることが条件となる。……通例としてはその倍が望ましいがの」

火影はそう言うと、手元にある書類を確認し、条件が達成されていることを確認した上で、再度前に出てきた3人に向けて確認する。

「8任務以上の条件はクリアしておるが……。中忍試験に推薦すること間違いはないか？」

「カカシ率いる第7班。うちはサスケ、うずまきナルト、春野サクラ……以上3名。はたけカカシの名をもって推薦します」

「紅率いる第8班。犬塚キバ、日向ヒナタ、油女シノ……以上3名。夕日紅の名をもって、左に同じ」

（やっぱり俺の名前は入らないか……）

事前に紅には白の取り扱いに関して話がいつているとはいえ、名前が出てこないことに白は少し気落ちする。

「アスマ率いる第10班。山中イノ、奈良シカマル、秋道チョウジ……以上3名。猿飛アスマの名をもって、左に同じ」

「ふむ。……では「ちよつ！ちよつとお待ちください！」……なんじゃ、イルカ？」

それまでの、火影とカカシたちとのやり取りを聞いて、驚きのため啞然とし固まっていたのだろう。話も纏まろうとしたところで、驚愕から立ち直ったイルカが、火影が言葉を締めくくる前に遮った。

「差し出がましいようですが、今、名を挙げた者たちはアカデミーで私の受け持ちでした。確かに皆才能ある生徒たちですが、下忍に成り立っています。中忍試験への受験は早すぎます！ 通例通り、もっと場数を踏ませてからの方が……担当上忍の方々の推薦理由が分かりかねます！」

「私が中忍になったのは、更に6つも年下の頃ですが？」

「ナルトたちはあなたとは違う！ 中忍試験は、試験とは名ばかりでかなり危険なものです！ あなた方はあの子たちを潰すつもりですか!?!」

「……大切な任務にあいつらはいつても愚痴ばかり。1度痛い目に合わせるのも一興……あなたの言うように潰してみるのも面白い……」

「なっ！ 何だと!?!」

初めて担当し、アカデミーを卒業した生徒たち。イルカの生徒への思い入れは相当なものだろう。そのため、カカシのあまりの言いように、イルカは驚愕と共に怒りで顔を真っ赤にし、拳を握りしめた。それを見て、カカシは言い直す。

「……とまあ、冗談はここまでとして……イルカ先生。あなたの言い

たいことも分かります。腹も立つでしょう。しかし……口出し無用！ あいつらはもうあなたの生徒ではない。今は……私の部下です」
「ぐっ……」

カカシの最後の一言にイルカは何も言えなくなる。その様子を見て、それ以上の言い争いを避けるために紅が止めに入った。

「カカシ……もうやめときなって……」

少しの間、イルカはカカシを睨んでいたが、火影が先へと進めていく。

「イルカもうよいな？ カカシ、紅、アスマは下がれ。次に3年以内の担当の者で、中忍試験に推す下忍がおる者は前へだよ」

そこからは数十名の上忍たちが、下忍を推薦していった。結果、約90名もの木の葉の里の下忍が、今回の中忍試験を受けることとなる。

中忍試験推薦の集会も終わり、帰ろうとしたところで、カカシとガイの声が白の耳へと聞こえて来た。

「カカシよ。今更だが、イルカ先生の話はもつともだぞ。俺の担当する子も、実力はあるが1年目は見送った……。もつと経験を積ませてからでもよかったのではないか？」

「それはガイの考えでしょ。うちはうちでやるから心配しないでちやうだい」

「しかしだな……」

「ま、その話は済んだことなんだし、蒸し返しても仕方ないでしょ」

「それはそうなんだが……」

カカシとガイは、そのまま話し合いながら部屋を出て行った。ガイはかなり不服そうに顔を顰めていたが、他の下忍の担当に対して強制することはできない。ガイはカカシをライバル視しているが、その反面カカシのことを心配しているので、余計にその思いは強いのだろう。

次の日。演習場へと集合した紅班のメンバーに、紅から中忍試験についての話があった。

「今日は訓練は休みとします」

「なんでなんだ？」

「説明を要求する」

「……………」

「昨日の話なのだけど、中忍試験にあなたたちを推薦しておきました」
「おお！ 早くも中忍になれるのか！」

キバは既に中忍になった気で、赤丸と喜び勇み始めた。

「落ち着きなさいキバ。ただ、白については医療忍者であるため、別試験になるわ。だから、今回推薦した中忍試験を受けることができるのはキバ、シノ、ヒナタの3名よ」

「試験の内容ってどんなのなんだ？」

「3人か」

「白は別で試験があるんだ……」

「試験の内容は、私たちには知らされてないわ。……はい、これを渡し
ておきます」

紅はキバたち3人に中忍試験の志願書を手渡す。

「本当ならあと1年様子を見ようと思ったのだけど、キバも落ち着いてきたし、シノとヒナタを合わせた連携も上手くなってきたので、推薦したわ。もし落ちても、来年も受ければいいのだから無茶なことはしないように」

「今年で合格すりや問題ないな！」

「油断は禁物だ」

「大丈夫かな？」

「ヒナタなら最後の方までいけると思うよ」

「受ける受けないは強制ではないからよく話し合いなさい。……受け
るのであれば、志願書にサインをしてアカデミーの301号室に、午
後4時まで集合すること。……いいわね？」

「おっしやー燃えてきた！」

「了解した」

「ヒナタ、中忍試験頑張ってね」

「白がそう言うなら……」

(ヒナタが受けないと他2人も受けれないんだよ……)

今回の中忍試験も前回と同様に、スリーマンセルでの行動となるため、1人でも受けなければその時点で残り2人も受験資格がなくなることになっていた。

全員が納得した所で解散となり、紅はどこかへ行ってしまった。

「よし！ どうせなら一緒に教室へ行こうぜ！ 2人も受けるんだろ？」

「そうだな。別々で行動するよりもいいだろう」

「うん」

「3人共頑張つてね(ナイス提案だよ！ キバ！)」

「少し早めに行つとくか。どんな奴らがいるか見ときたいし」

「情報収集は重要だ。今回は白がいないからな」

「別に情報屋じゃないんだけど……」

未だにアカデミーでの話を引つ張られるのは、里内の任務において、ちよくちよくではあるが情報を流しているためであった。そのため、こういういった場面では、医療忍者としてよりも情報屋として扱われてしまう。

「白は試験内容知ってるか？」

「んん。特に言うべきことはないかな」

「どういうことだよ？」

「3人の実力なら十分、中忍試験に通用するってことだよ」

「あたりまえだろ！」

「ワンツ！ ワンツ！」

「ああ。もちろん赤丸も含めてね」

「くはぐらかされているな」

シノは白がはぐらかしたことに気付いていたが、白を見て何も言わなかった。いつまでも頼りきりではないけないと思っただろう。表情を変えずにキバへと確認する。

「それで、何時に何処へ集合するんだ？」

「3時にアカデミー前でいいだろう」

「わかった」

「うん」

「それじゃあ帰ろうか」

「そうだな」

その後、各自志願書を持って、キバとシノは自宅へ、ヒナタは白と共にアパートへと帰っていった。

62 偽装？

中忍試験に伴い、ネジのヒナタに対する軋轢を解消しておく必要があった。それというのも、ほとんど関わりが薄いとはいえ、未だに幼い頃の印象のままできているため、ネジのヒナタに対する態度が変わってないからだ。

中忍試験で接触もしくはトーナメントの時に、ネジがヒナタへ過剰攻撃をする可能性がある。それを少しでも減らすために、中忍試験開始前に、白はネジに会いに向かっていた。

中忍試験前ということもあり、任務には行かずにネジたちは3人で訓練を行っていた。

「こんにちはー」

「白か……」

「久しぶりね」

「……………」

この時、リーだけが無言で白を見つめていた。白はリーからの視線を感じて挨拶がないことを不思議に思うが、前回倒れていたので自己紹介をしていないことに気付く。

「そう言えば自己紹介できてませんでしたね。白と言います。よろしくお願いします」

白はそう言うと、リーへと握手をするために、利き手では無い方の手を差し出した。利き手ではないのは、暗部での訓練で仕込まれたからである。実際には両方ともそれほど差はないのだが……。

差し出された手を見て、今まで白を見つめて固まっていたリーは、白にとって突拍子もないことを言ってきたのである。

「僕の名前はロック・リーと言います。白さんと言うんですね……。僕と付き合ってくっ!?」

リーは言い終わる前に、その場から吹き飛び――

『ドンッ!!』

木へとぶつかり、気絶したのかそのまま倒れていった。

かなりの衝撃だったのだろう。リーが前のめりに倒れると、その後

ゆっくりぶつかつた方の木が反対側へと倒れてゆく。その木が倒れるまで3人は誰も語らず、また、その場から動かなかつた。

白はリーの最後の言葉から一瞬ではあるが、リーが吹き飛ばされるまでの間、身体が無意識化で動いていた。条件反射とでも言うべきかもしれない。

リーは言い終わると同時に、白の手を握ろうとしたのだろう。そのリーの手首を白は掴むと、少し引つ張り身体を傾けさせ、腕を掴んだ側から顔面へと防ぎにくくしたうえで蹴りを放っていた。

この時のリーの反応は、さすが、と言うべきだろう。咄嗟のことに関わらず、その顔面への蹴りを反対側の腕で防ぐべく、手を伸ばしてきたのである。動体視力と反射速度が、かなり高いことがその反応から窺えた。

しかし、反応したその蹴りは残念なことにフェイントであり、本命の蹴りは見事にリーの鳩尾へと吸い込まれていったのである。そして白の蹴りが入った瞬間、そこで掴んでいた手首を離し、リーは吹き飛んでいったのであった。

この行動は一瞬の出来事だった。蹴り脚は振り抜き、一回転して元の立っていた姿に戻っている。ただ、テンテンには見えなかつたようだが、ネジには辛うじて見えたようで、驚愕の眼差しでリーを見た後に白を見ていた。

「……リーさん。いきなりあんなところまで瞬身の術で移動するなんてすごいですね！ 全く見えませんでした！ ただ、自分で制御できない速度は感心しないです。気絶するような速度で移動するなんて……。しかし任せてください！ 医療忍者ですので、治療は得意なんですー！」

「そ……そう？ でも何か言いかけていたような……それにリーは瞬身の術使えないはずなんだけど……」
「それなら凄い体術使いなんです！ あれだけ早く移動できるなんて！ 瞬身の術に見間違いましたよー！」

白は全力で誤魔化しにはいつていた。無意識で身体が動いたとはいえ、自分でやったという認識はあつたのである。それに対して、テ

ンテンは何が起こったのかよく分かってないようで、疑問に思いつつも曖昧な返事をする。しかし、少しでも見えていたネジは、真実を口にしようとしていた。

「……いや……今のは……」

「<僕のことを言ったらネジの秘密をばらす>」

「リーのやつ挨拶の途中でいきなり移動するとは非常識だな!」

白の呟きに、あっさりとなぐり返す。慌てて賛同の意を示した。この時の秘密とは言っても、嫌いな食べ物があると言っくくらいなのが、ネジはそう受け取らずに色々と深読みしたようだ。

白は、リーへと近付き状態を確認するために診察を行う。結果的には打撲だけで済んでいた。無意識とはいえ手加減をしたのだろう。そうでなければ、骨の2、3本は折れていたはずである。その事に安堵し、一応打撲箇所の治療を行う。

「一応打撲だけのようだけど、念には念を入れて場所を変えて診てみますね」

「ああ……」

「えつと……1人で大丈夫?」

「1人くらい運べます。訓練を引き続き頑張ってください。それは」

白は、ネジとテンテンに見送られながら、リーを連れて移動していく。

(ここまで来れば大丈夫かな?)

雑木林の中、周囲に人の気配が無いことを確認し、リーを地面へと横たえる。そして、白は懐から巻物を取り出してある物を口寄せすると、それをリーの口へと流し込み、変化の術を使用した。

「……起きてください」

「……ん……こは……う……」

気絶していたリーを起こし、虚ろな目に焦点を合わせて、更に幻術をかけていく。幻術と言っても、見る対象を術をかけた者に固定させるといったものだ。そのため、リーの視線は白へと注がれることになる。

「大丈夫ですか？　こんなところで寝てたら風邪ひいちゃいますよ？」

「……ぼくは……だいじょうぶ……です……」

明らかに大丈夫ではないのだが、それでもリーは無理に起き上がってくる。起き上がる際にも視線を外さないところを見ると、もつと近くで見ようとしているのだろう。

（効果時間が短いとはいえ、結構強力な薬なのに、もう動けるなんてね……）

飲ませた薬は、本来10分程度は身体が痺れた上で、意識が朦朧とするのだが、リーには1〜2分程度しか拘束の効果はなかった。しかし、満足には動けないようで、リーは上半身を起こすのが精一杯のようだ。上半身を起こしたまま、呆けたように白を見ている。

「大丈夫みたいですね。どこか異常があれば病院に行った方がいいですよ。私は用事があるので、これで失礼します」

未だに満足に動けないリーへと優しげに微笑み、その場からゆつくりと立ち去っていく。それをリーは見えなくなるまで、その姿を見つめていた。

（こんなところでくノ一の授業が役に立ち日が来るなんて……。ごめんサクラ……俺の代わりに犠牲になってくれ……）

白が変化の術で選んだ相手はサクラだった……。

中忍試験当日。

一次試験の試験官としての準備のために、白はヒナタより先にアパートを出て、アカデミーへと向かっていた。

（準備するって言われたけど、一体何するんだ？）

以前は、医療忍者の試験打ち合わせをただだけで、試験官になったのは今回が初めてである。事前に準備をするので、午後一番に集合するように言われたが、準備の内容を知らされず、白は不安を覚えていた。

ただ、以前に試験官として参加したことがある人たちは、楽しみにしているようで、嬉しそうにしていたのである。その人たちへと白が

訊ねても、ニヤニヤとするばかりで教えてはくれなかった。

白は、そのような不安を覚える心理状態のまま、アカデミーへと到着した。集合場所である教室へと入ると、そこには料理の数々が並べられている最中であった。

立食パーティーのようで、机がいくつも並べられており、その上に料理が運ばれていく。椅子については、教室の端の方に並べられていた。

白が教室に入り、その光景に驚いていると、料理を運んでいた男が近寄ってきた。丁度よいとばかりに白は問いかける。

「これは……一体何事ですか？」

「ん？ ああ。お前始めてか？」

「ええ」

「それなら知らないのも無理ないな」

男は白の言葉に納得すると何度も頷いた。自分の最初の頃のことを思い出しているのだろう。

「うんうん。俺もそうだったよ。噂ではこの中忍試験の中で一番きついつい役割だつて言われてたんだよ……。まあ、実際きついんだけどさ。その代わりに、こうやって持て成しもあるんだよ。これがなかったら結構な不満が上がってたと思うよ。本当に。他の役割のやつとは作業量が違いすぎるからな」

「そうだったんですか……」

「取り敢えず、議長が来るまでに準備終えとかないといけないから、残りの料理を運ぶぞ」

「分かりました」

その後、次々に来る試験官たちと一緒にパーティーの準備を行い、最後に議長を待つだけとなった。

「議長遅いな……」

「そうですね」

時間である午後1時になっても現れない議長に対して、周囲から疑問の声が上がり始めた頃、本人が現れた。

「いや。すまんすまん。みんな揃ってるか？」

「アンコのやつが来てません」

「ハヤテは風邪が治ってないので欠席するそうです」

「ああ。アンコについては聞いています。そのせいで遅れたんだからな。それにしてもハヤテもか……あいつは仕方あるまい。他の者はいるな？ ……よし。では食べるとするか」

議長は周りを見渡し、他に欠席者がいないことを確認すると、皿と箸を手に取った。そこへ、試験官から議長へと質問が飛ぶ。

「挨拶とかはしないんです？」

「なんでわざわざ挨拶なんぞしなけりやならんのだ？ 腹いっぱい食って英気を養う。それだけでいいではないか」

議長は早く食べたいのだろう、若干イライラしながら答えた。

「いや……。乾杯くらいはしてもよいかと」

「始まりと終わりくらいはいいんじゃないですか？」

「でも酒じゃないんだよな……」

「いくなよ……。この後、試験官しないといけないんだからさ」

英気を養うどころか、テンションが次第に下がっていく試験官たちを見て、議長は吹っ切れたのか、鼓舞するために大きな声で言い放つ。

「ああ！ 分かった分かった！ それでは大変だろうが頑張れ！ 乾杯！」

「！！！！はやつ！！！！」

試験官一同が同じ思いでハモる中、議長は言うだけ言うと、早速机の上の料理へと手を伸ばし始めた。余程お腹が空いていたのだろう。次々と料理を皿に移して食べていく。

なし崩し的に始まったパーティーは、約2時間後……午後3時半頃に終了となった。締め言葉も適当だろうとみんな思っていたが、議長は少しばかり真面目な顔をして話をし始めた。

「そろそろ時間だ。みな手に持っている物を置いてくれ。……儂は今年初めて議長になった。今までは試験官としてしか経験がなく、議長と言う立場になって初めて分かったことがある。議長と言うのはみんなの支えがあつてこそ成り立つというものだ。試験官をしておつた時は、ただのまとめ役だろうと思っていたが、それが間違いである

と気付かされた。そもそも「そろそろ片付けないと試験時間に合わないんで、要点だけ言ってください」……………」

議長の補佐をしていた男の言葉により、議長は口を開けたまま絶句し、補佐役へと顔を向ける。補佐役が終わりにも締めめの言葉をした方がいいと言っておきながら、したらずで止められたのである。食事の間に終わりの言葉を考えていたのだろう、周囲の者から議長へと憐みの視線が向けられていた。

(可哀想に…………)

議長は壁時計を確認すると、4時まで残り20分を切っていることが見てとれた。確かに、片付けの時間を考慮するのであれば時間が足りなくなってしまうだろう。議長は、少し考える素振りをし、締めの言葉を再開した。

「あー。時間もないので簡潔にいうが…………失敗しないように頑張れ。以上。片付けはじめ！」

「…………えっ?…………」

議長は言い終えると、率先して片付け始めた。他の者たちはあつさりした言葉に呆気にとられていたが、議長が動いているのに、自分たちが動かないとまずいとばかりに素早く動き出す。

しかし、時間は無情にも過ぎていき、片付け終わったのは午後4時ジャストだった。

「いかん! 1次試験の試験官はすぐに行くぞ! 試験官が遅れるなど恥もいところだ!」

「しかし、このまま行っても遅れることに変わりはないですよ」

「…………そうだ! 煙玉を誰か持ってないか? 煙玉を使って、煙が消えた場所から現れると言う演出をすれば、遅れたことを多少誤魔化せるはずだ」

「煙玉ならあります!」

「よし! 行くぞ!」

イビキの遅刻誤魔化し作戦を実行に移すべく、1次試験の試験官たちは会場へと向かうのだった。

63 1次試験？

中忍試験会場へと煙玉を投げ込む前に、登場する場所を確認しようとイビキが中を覗くと、部屋の後方——受験生が入ってくる扉付近で、受験生同士による諍いが起きていた。

白の耳にも、教室の中からナルトとサクラの声が聞こえてくる。

「カブトの兄ちゃん!!!」

「大丈夫!?!」

中の様子を確認して状況を理解したのか、イビキは先ほどまでの、パーティーの時のような緩んだ顔ではなく、険しい顔つきへと表情を変えた。

「少しは大人しく待ってられんのか……いくぞ! 前方ど真ん中だ!」

イビキが煙玉を投げ入れると同時に、試験官全員が移動する。煙玉は『ボンツ!』という音と共に、煙を限定的に、そして一時的に充満させていく。

その煙が晴れる前に、イビキが教室内に響き渡るような声で怒鳴り散らした。

「静かにしやがれ! どくされやろうどもが!」

怒鳴り声の聞こえた方向——煙玉の晴れた場所に現れた試験官たちに、受験生は目を釘付けにしていた。受験生の視線が、自分たちを集まっていることを確認したイビキは挨拶を行う。

「……待たせたな。……中忍試験の1次試験を担当する森乃イビキだ」

イビキは普通に挨拶しているだけなのだが、受験生たちの半数はその顔と態度、そして声に恐れをなしているようで、固唾を呑んで見入っている。この様子ならば、当初の目的である、煙玉誤魔化し作戦は成功したと言えるだろう。イビキだけでも十分だったかもしれないが……。

イビキは自己紹介をすると、先ほどの諍いを起こした主犯——音隠れの受験生へと指を突きつけた。

「音隠れのお前ら! 試験前に好き勝手やってんじゃねーぞコラツ!

いきなり失格にされてーのか？」

これに対して、反省の色を見せずに言い返してくる音隠れの受験生へと、イビキは鼻を鳴らして注意喚起をしていく。

(そんなに怖い顔して言っても内容が優し過ぎますよ……)

イビキの言った内容は、対戦や争いを禁止するもので、更に、試験官が許可を出したとしても、相手を死に至らしめる行為を許さないというものだった。

「……なんか甘っちょろいな、この試験」

(ほら、音隠れのやつに言われた……)

イビキの発言に対して同じような考えを持った者が他にもいるように、鼻で笑い馬鹿にしたような顔で試験官を見てきたが、逆に試験官たちは、その顔を見てニヤニヤと笑っている。それはそうだろう。なぜなら、この1次試験は、前回までと違い戦闘行為が全く関係ない筆記試験なのだから。

「ではこれから試験を始める。……志願書の代わりに、この座席番号の札を受け取り、その番号の席に着け。……着席し終えたら筆記試験の用紙を配る」

試験用紙の束を持った試験官と、座席番号の札の入った箱を持った試験官が、前に進み出たところで、受験生がざわめきだした。

「ペツ……ペーパーテストオオオオオオ!!」

「うるさいぞー！ 失格にされてーのか!？」

ナルトは白目を剥いて大声で試験の内容を叫んだ。その大声に、イビキは先ほどの音隠れの件もあってナルトに対し一喝する。これによりナルトは大人しく黙った。しかし、その顔色は悪いままだ。筆記試験の事など僅かなりとも考えていなかったのだろう。

順次、志願書と座席番号札を交換して座席へと座っていく。この時に、班員である3人が揃っているかの確認も行われていた。

ところどころ空席はできたものの、教室にいる受験者全員が座り終えたところで、イビキが今回の試験のルール説明を行った。この時に、他の試験官が問題用紙を裏向きで配布していく。

内容は打合せの通りのことを黒板に記入して、受験生へ分かりやす

いように説明していく。説明の合間にサクラが質問するが、そんなことはお構いなしにイビキは話を続けていった。

「説明は以上だ。試験時間は1時間とする。……始めろ!!」

イビキの言葉で、受験生は一斉に問題用紙を見て、数瞬後に固まっ
てしまった。下忍レベルでは解くことなどかなり難しいのだから当然だ。

(俺の担当サクラの列かよ……サクラは、カンニングしなくても余裕だろうからつまらないな……。隣のやつがナルトの列担当か……)

隣にいる試験官のボードに記載されている座席番号を見て、改めてナルトを見ると、隣にヒナタが座っているのが見えた。

(そーいや、ナルトの隣になるんだっけ……)

しばらくは、教室内をカリカリという音だけが響いていたが、おもむろにサクラの横にいた受験生が立ち上がりイビキへと質問する。

「あー。これだけは教えてほしいのですが……。一体上位何チームが合格なんですか?」

(立ち上がりでマイナス2点と、質問したからマイナス2点。チエツクチエツクつと。後、2回しかできないから気を付けろよ……。名前しないけど、砂隠れの受験者)

予想通り、イビキにより素気無くあしらわれて、すごすごと席へ座り直す。

その後また、カリカリという音だけが響き渡る。ここで、カンニング行為をしなければならぬと気付いたのか、大体の者が動き出した。自分たちの能力でカンニングを行っているのだろう。特にサスケやネジは分かりやすかった。瞳術を使用しているので、顔を見ればはつきりと分かるのである。無様なカンニングではないので、点数を引かれることはないだろうが……。

その後すぐに、初めての失格者が出た。ナルトのすぐ後ろの受験者である。その受験者の問題用紙に、試験官はクナイを投げつけて言い放つ。

「5回ミスった。テメーは失格だ」

「そ……そんな……」

「こいつのツレは、2人ともこの教室から出て行け。今すぐにな」

文句を言いながらも、3人の受験者は素直に従い教室を出て行く。

白はそれを見て、再度サクラの方を見ていると、隣の試験官がカリカリと記入する音が聞こえて来た。

ナルトのやつだろうなと思いつつ、覗いてみると、ナルトの点数が引かれているのはともかく、ヒナタの点数まで引かれていたのである。

（おいしい!? ヒナタは俺が教えてたし、自分で勉強してたから、今回の問題くらい解けるんだよ！ 引くならナルトだけにしてくれよ！）

ナルトとヒナタは仲良く6点引かれていた。ナルトの方を見ると、2人でこそそこそと会話をしている。そんなことをしていたら点数を引かれるのも当然だろう。

会話が止みヒナタは静かに前を向いていたのだが、その手が問題用紙を、ナルトに見えるようにして動かしていた。それをナルトは覗こうとして、更に隣の試験官が点数を引いていく。試験官の書き込む音が聞こえたのだろう、ナルトはヒナタの問題用紙を見ずに、自分の答案用紙と壁掛け時計を気にしながら大人しくなった。

（ナルトやばいぞ！ あと1回で試験終了のお知らせだ！ 変なことはするなよ！ ヒナタにも影響が出るんだからな！）

白の心配を余所に、徐々に受験者は減っていった。そんな中、突如サクラが机に伏してしまう。サクラの後方にいるイノが術を使ったのだろう。同じように机に伏している。

（これって俺がやることって、サクラ以外のやつを見とくだけなんだよな……。しかも既に見るやつがいつの間にか5人しかいないし……）

白の担当していた受験者は、同じチーム内の受験者の失格により、連帯責任で一緒に出て行ってしまっていた。サクラの横に座っているやつは、最初の時のカンニングで満足してしまったのか、あれ以来カンニングをせずに待機している。そのため、白は残りの受験生を見つつ、隣の試験官とナルトたちの動向を気にしていた。

途中騒ぎ立てる受験者もいたが、担当の試験官に壁に一瞬で押し付けられて、実力差を見せつけられると、あっさり引き下がり教室を出て行った。

（あーあ。今度はサクラの両隣の奴も一緒にいなくなっちゃったよ……見るのサクラだけだし、もういいや）

満足して、カンニングを止めていた砂隠れの里の受験者は、自分の班員の失格にショックを隠しきれていなかった。まあ、あの程度のカンニングで、情報収集できたと思っっているようでは、この先やっていくことは難しいので、ここで落ちた方が自身のためでもあるのだが……。

サクラは既に答えを記入し終えているのか、ナルトの方をかなり気にしている。別段カンニングではないと分かっているので放置し、白はヒナタとナルトの動向に注視していた。

（頼むからこれ以上変なことはいしないでくれよ……）

試験も残り約20分になったところで、カンクロウがトイレを要求してきた。本来認められないことなのだが、試験官に紛れ込ませた傀儡人形に許可を出させて、トイレへと向かって行ってしまおう。

トイレへの許可を出すことなど、あり得ないと分かっているとしても、一応無様なカンニングではないと見なしたのか、試験官の誰もチェックを入れていない。担当が誰かは分からないが、見逃してもらえただろう。

白の祈りが通じたのか、ナルトたちは特に問題を起こすことなく、規定時間の45分が経過した。時計を確認したヒビキが最後の10問目の説明を行おうとしたところで、カンクロウがトイレから戻ってくる。

「運が良かったな……。お人形遊びもほどほどにしておくことだ。……まあいい、座れ」

カンクロウが席に着いたところで、イビキはより厳しい顔つきに変えて、最後の10問目に対する説明を行う。

「まず、お前らに選ばせてやる。……この10問目の試験を受けるか、受けないかを……な」

「えっ……選ぶって……。もし、10問目の試験を受けなければどうなるの!？」

ヒビキの言ったことは、受験者にとっては当然の疑問だろう。

「受けないを選んだ者はその時点で、持ち点を0とし失格とする！もちろん同じ班の者も失格だ！」

このイビキの回答に受験者たちからは非難の声が上がるが、イビキは気にせずに説明を続けていく。

「そして……もう一つのルールだが、……受けるを選び、正解できなかった場合——その者については、今後永久に中忍試験の受験資格をはく奪する!!」

教室内を静寂が支配した。しかし、それも一瞬のことで、受験者から非難の言葉が、そこかしこから上がってくる。それに対しイビキは平然として切り返した。

「運が悪かったな……今年俺がルールなんだよ。……自信がなければ受けないを選べ。そして来年また受ければいい」

この言葉で、1人の受験者が受けないを選んだことにより、それに釣られるようにして、他の受験者も受けないを選び教室を出て行く。

そして、ある程度人数が減ったところで、他にも出て行こうとした受験者がいたようだが、ナルトの怒声により立ち上がるのをやめる。

「なめんじゃねー!!! おれは逃げねーぞ!!! 受けてやる! 中忍なんかにならなくなつて……意地でも火影になってやるってばよ!!!」
(いやいや……中忍になれないと、上忍にもなれないわけで……火影に推薦すらされないから……)

規則以前の問題だが、現状の規則では、下忍が火影になることなど不可能だ。この後、その規則が変われば話は別だが、この段階でのナルトの発言は完全に的外れである上に、考えなしと言つてもいいだろう。そんなナルトを見て、サスケとサクラが笑っていることに、白は理解できなかつた。

イビキとナルトの間で、言葉のやり取りがあり、このやり取り以降受けないを選ぶ者は出なかつた。イビキとしては、もう少し減らしたいところではあつたのだろう。しかし、ナルトの言葉で、これ以上受

験者が減らないとわかると、視線を巡らせて、教室の壁際にいる他の試験官たちへも確認を行う。他の試験官たちも同じ考えのようで、みんなイビキに顔を向けて頷くと、それを確認したイビキは受験者たちへと再度視線を戻した。

「いい覚悟だ……。では……。ここに残った全員に……」

イビキは一呼吸を挟み続きを口にする。

「1次試験の合格を申し渡す!!! 結構残ったな……。78名——26チームか……」

これに驚いたのは受験者たちである。最後の10問目の問題すら出さずに合格が言い渡されたのだ、当然だろう。ここで、受験者たちからの質問が上がり始め、イビキは今までの態度をコロツと変えると、律儀に答え始めた。

この時、教室内を探るような気配を感じたため、その先を辿ると、黒い布を持ったアンコが、向かい側の建物の突出しの屋根部分にて待機していた。

（あの人、パーティーに来ないと思つたら……。あれ作つてたのか……。）
アンコは準備した物の最終チェックをしているのか、教室内の様子を確認した後に、持っていた黒い布を広げて中身の確認をしている。そこには、『第2試験官 見たらしアンコ 見参!!』と、デカイ文字で書かれていた。その布の上部両端には、クナイが取り付けられていて、そのクナイで、作つた布を取り付ける算段なのだろう。白はそんなアンコを見ていて痛々しく感じていた。

イビキの話が終わり、口を閉ざしたのを見て取つたアンコは、試験会場である教室へ向けて飛ぶと、窓ガラスを突き破つて教室内に入ってきた。そして、準備した布についているクナイを天井へと投げつけ固定すると、大声で自己紹介を始める。

「私は2次試験担当のみたらしアンコ!! 次行くわよ! ついてらっしやいー!」

アンコは右手を振り上げて高らかに言い放つ。自分では、格好良い登場シーンだと思っっているのだろう。受験者たちのあまりの反応の無さと、教室内の何とも言えない静けさに、アンコは振り上げた右手

を降ろせぬまま固まってしまった。

(アンコさんの突入の仕方が悪いとはいえ、受験者の数名にガラス片が刺さってる……まあ重傷者はいなさそうだな)

アンコが、ガラスを突き破って入ってきたせいで、侵入してきた場所の近くにいた受験者数名が、顔や手から血が出ていた。どれも掠り傷だが、ひとつ間違えばかなり面倒なことになっていただろう。

シン、と静まり返った教室の中、そこにイビキがアンコへぼそりと呟く。

「〈空気読め……〉」

その言葉に恥ずかしくなったのか、アンコは顔を赤面させるも、すぐに話題を変えて、逆にイビキへと言い返した。

「イビキ！　なんで26チームも残したの!?　今回の1次試験甘過ぎ！　だから情報収集は後に回すべきだったのよ！」

「今回はたまたま優秀なのが多くてな」

「……まあいいわ。どうせ次の試験で半分以下になるんだし。でもこれだと、もしかしたらハヤテまで出番が回ってきそうね」

「それは仕方ないだろう。俺たちは俺たちの役割を果たすだけだ」

「そうね……それじゃあ、詳しい説明は場所を移してやるから、あんたたちは私に着いてきなさい！」

そう言うアンコは受験者を連れて行ってしまう。部屋を散らかしたままにして……。

「あーすまないが、数名はアンコのやった、コレの後片付けを……そうだな、窓側にいる者たちで頼む。俺は筆記試験の用紙を回収して報告書を作成する。反対側の者たちは、アンコの方に着いて行ってくれ……何をしでかすか分からん……議長も心配してたしな。取り敢えず、試験会場までいい、そこからは2次試験官に任せればいいだろう」

イビキの指示により、試験官たちはテキパキと動き出す。後片付けはすぐに終わり、イビキから解散を言い渡され、みんなその場を後にした。

64 罨？

1次試験が終わり、2次試験開始までの合間——午後1時に、白は一樂にて昼食をとっていた。

(第44演習場か……すぐにヒナタたちは到着したはずだから、気を付けるのは自分の身の方だな。大蛇丸が居るはずだし……。それにしても自給自足か、飯でも買っていっておこう)

食事を終えて一樂の影分身を切り替えた後に、白は早速食材の調達に向かっていた。今回の任務の性質上、紅班——特にヒナタから目を離すわけにはいかない。そのため、食事は持参しておかなければならなかった。

2次試験の開始時刻は午後2時半。買い物を終えた段階で、時刻は1時半。

(そろそろ行かないと始まってしまうな。……それにしても、この任務内容ってどこまでの人に伝わってるんだ？ アンコさんに話ってるのか？ 行ってなかったら説明面倒なんだけど……そうだ！)

思いついたら即実行とばかりに、白は移動を開始する。

第44演習場では、アンコから2次試験に関する説明が行われていた。その内容は、受験者同士による巻物争奪戦である。当然、争奪戦の過程で受験者同士の戦闘になる。それは、死ぬ可能性すらあることを示していた。そのため、アンコは死んだ際の責任を回避するために、同意書を取ることにしたのだ。

中忍試験の打つ合わせの場では、1次試験とのギャップの差に、当初はそこまでやるのかと意見が上がったが、内容については好きにしたいと議長から言われていたことと、意見を出してきた者に対してアンコが「じゃあ、あんたが責任とってくれんの？」と言ったことで、他の者も含めて何も言えずに、2次試験の内容はあっさりと決まってしまった。

アンコの説明が終わり、受験者に巻物が渡り終えた頃に、白は第4

4 演習場へと到着した。

「各チームは、担当の者についてそれぞれの出発地点へ移動！ これから30分後——2時半に一齐スタートする！」

2 次試験担当の試験官に連れられて、各チームは出発地点へと移動して行く。

（紅班はあつちの方向か。完全に内側に入る前に移動しないと、どのゲートか分からないな……）

今回の任務と2次試験会場への立ち入りについて、確認と同時に許可をもらう話をするため、白はアンコへと近付いていく。アンコも白（ヒミト）が近付いてきたことに気付き、話しかけてきた。

「あんた打合せの場にいたやつよね。一体何しに来たわけ？ あんたは2次試験に関係ないでしょ？ まさか……あいつのスパイじやないでしょうね!？」

アンコは、白のヒミトとしての顔を覚えていたが、返事は素気ないものだった。しかも、後半部分のセリフから、明らかにヒミトを警戒しているのが分かる。

（これは任務について聞かされてないな。議長かイビキさんの差し金と思われてるみたいだし……）

少し考え事していると、その沈黙を肯定と受け取ったのか、アンコは段々と機嫌が悪くなり始めた。それを見て、慌てて白は話を進める。

「スパイとかではないですよ。ちょっと演習場の中に入りたいたいもので、その許可を頂きにきました」

「あんた確か医療忍者よね？ この演習場は死の森って言われているのを聞いたことないの？ 医療忍者はただでさえ少ないんだから、そんな簡単に許可なんて出せるはずないでしょ。誰かが付いて行くならともかく……」

（死の森って言っても、それは下忍レベルの話であって、中忍以上の者にはただの食料の宝库なだけ……医療忍者だから、実力的に下忍レベルと思われてるのかな？）

ある程度予想されていた答えに対して、白は準備していたことを実

行に移した。

「それについては私が付いていきます」

白の後ろに現れたのは、暗部の面を付けた白の影分身だ。はつきり
いって白の自作自演である。しかし、それでもアッコは許可に対して
渋っているようで、顔を顰めている。試験に対しての責任問題を回避
した矢先に、今度は別件で責任を持つことになろうとしているのだか
ら、責任を取りたくないアッコとしては、許可を出すのを渋るのは当
然だった。それに対して暗部の面を付けた方の白が答えていく。

「この件については、既に火影様より許可を頂いておりますので安心
してください」

「それを先に言いなさいよ！ でも、なんで今から入ろうとしてるわ
け？ 医療忍者がやることなんてないわよ？」

「任務内容に触れてしまうので、お話しするわけにはいきません」

「ここは今、私が担当なんだから、私の許可なく入れるわけにはいかな
いわね。しかも、火影様から私の方には何も連絡来てないし……」

「急なことでしたので、後程ご確認ください」

「暗部を遣わせるくらいだから、そうなんだろうけどさ……」

暗部の方の白では、アッコの説得は難しいと判断したヒミトの方の
白は、未だに何かを言いそうなアッコの説得をするべく、準備してお
いた物を手渡す。

「アッコさん。お昼食べられましたか？」

「まだに決まってるでしょ。さつき説明が終わって受験者送り出した
のに、そんな暇なかったわよ！」

お腹が空いたのを思い出したのか、不機嫌な表情へと変わってい
く。

「でしたらどうぞこれを」

白が手渡したのは、木の葉の里で有名な甘味堂の串団子だった。そ
れを見てアッコの態度は急変した。袋に書いてある店名と、その内容
量に喜びを隠そうともしない。

「あんた分かっているじゃない！ やっぱり疲れた時には甘いものに限
るわよね！」

「喜んでもらえて何よりです。それで許可の方なのですが……」

アンコは受け取るや否や、串団子の入った包みを開けて早速食べ始める。それを見て、白は許可を取ろうとしたのだが、アンコはまだ若干渋っていた。

「さすが甘味堂ね。……許可だっけ？ 出してやりたいのは山々なんだけど、普通暗部が護衛に付く場合って、最低でもツーマンセルなのよね。……んく、それを1人っていうのはねえ……」
(しまった……そうだった……)

最近単独任務が多かったため、アンコの言った内容を白は失念していた。そこへ暗部の方の白が言い放つ。

「別段それほど危険な場所ではありません。私1人で十分です」

「普通の場合だったらそれでいいけど、今は中忍試験中。……予測できないことが起こっても不思議じゃない」

暗部の面を被った影分身の方が話すと、アンコの態度がどんどん悪化するのが分かったので、影分身へとアイコンタクトを送り、完全にやり方を切り替えることにした。

「アンコさん。団子ばかりでは喉が渇きませんか？」

「まあ、そうね」

突然話題が変わったことにアンコは、真意が分からないのだろう、曖昧に返事をして白（ヒミト）を見つめる。

「ここに、甘味堂のおしるこがあるんですが、演習場の中に入るのであれば、持つてはいけません。匂いが漂って他の受験者の邪魔になったり、動物を招きよせたりしてしまいますからね」

白が懐から出した缶を見て意図を汲み取ったのか、アンコは目の色を変えて頷いた。

「そうね!! 火影様も暗部1人で十分だと判断したんだろうし、行つてよし! おしるこは私が責任もって処分しておくわ!」

「ありがとうございます」

アンコへとおしるこの缶を手渡し、紅班の進んだ方向へ向けて走つた。

到着した時に、担当の者がゲートの鍵を開けて、キバたちが中へと

入っている最中だった。時刻を確認してみると、既に2時半になっている。担当の者は耳に付けている無線機で報告を受けているのだろう。キバたちに対して宣言した。

「時間だ。これより、中忍試験2次試験を開始する」

「よっしゃー!! いくぜー!」

「大声を出すな。……他に気付かれる」

「……シノ君の言うとおりでと思うよ……」

「はいはい。分かっているっての。取り敢えず進もうぜ」

紅班の3人は、そのまま真っ直ぐに森の中へと行ってしまった。そこから中へと入るべく、担当の試験官へと声をかける。

「中に入らせてもらいますね」

「えっ?」

「アンコさんには許可を貰ってますので、無線機で確認してください。少し急ぐのでそれでは」

「ちよつとー!」

担当の者の声を振り切つて、キバたちの後を追う。その途中で影分身と共に消臭しておくことも忘れない。

(シノの蟲の範囲も大体わかったし、気を付けるべきはヒナタの白眼だけだな)

一定の距離を保ちつつ様子を見てみると、キバたちは足を止めて罨を張り始めた。ここで他の受験者を待ち伏せする気なのだろう。

(こんな中途半端なところに張らないで、塔の近くに張ればいいのに……他の受験者が来るか分からないでしょ、こんなところじゃ……仕方ないな)

白は影分身へと視線を向けて合図を送ると、影分身は白に頷いてどこかへ行ってしまった。

しばらくは、ヒナタが白眼にて周囲を警戒し、その間にキバとシノが罨を設置していき、設置が終わってからは、周囲から見やすい位置で3人は立って話し合いをしていた。

「さて、罨も張ったし後は待つだけだな」

「ゲート間の距離的に、早ければもう接敵してもいい時間だ」

「今のところまだ来てないみたい」

この時、白は、地面に展開した魔鏡氷晶の中に入っていたので、ヒナタは発見することができずにいた。そうして待つこと約10分で他の受験者が近付いてくるのが分かる。白の居る位置の上空を、変化の術を使用している影分身が通った後に、それを追うようにして3人の受験者が通って行く。

それは木の葉の里の下忍だった。

(近くに居たのは木の葉の里の奴だったのか……まあ仕方ないな)

魔鏡氷晶から出て、一旦影分身を解除し、キバと追跡してきた受験者たちの様子を窺った。

追跡してきた受験者は、目立つところに居た3人を見て薄ら笑いを浮かべていたが、徐々に顔色が悪くなっていく。この演習場に棲んでいるトビヒルに吸血されているのだろう。1人の首の裏にトビヒルが取りついているのが見える。

それを見て他の2人がパニックを起こしたのか、大声を上げる。

「何だそりゃ!？」

急いで取りついているトビヒルを取ろうとしたのだろう。2人で慌てて近寄り、無理やり引き剥がしている。

慌てることなく落ち着いて対処すればよかったのだろうが、慌てていたせいで体温が上昇し、それにより発汗したことで、更なるトビヒルに襲われることになっていた。トビヒルの習性として、温度及び発汗による匂いを感じて、集団で襲いかかる生き物であることを知らなかったのだろう。

トビヒルの集団に襲われた受験者は、樹上から罫を仕掛けた場所へと落下してしまう。そこからは、張っていた網の罫に掛かり、樹上の方へと引き上げられてしまっていた。キバは勝ち誇ったように、トビヒルを脅しの道具として使用して、受験者から巻物を奪取していた。

そして、キバたちは巻物を手に入れると、中央の塔へ向けて移動を開始していく。巻物を奪った相手に関しては、罫に掛かったまま放置することにしたようだ。

白は影分身を再度使用して、キバたちの後を追わせた上で、十分に

離れたのを見計らい、罨に掛かって気絶している受験者をゲート付近へと運んでいった。

(あの程度の罨を解除できない上に、トビヒル相手に必死になる時点で、中忍になるには早すぎる)

ゲート付近へと運び終えた白は、ゲートに誰もいないことを確認して、ゲートの所へ受験者3人を置き、キバたちの後を追った。運が良ければ、ゲートに置いてきた受験者は襲われずに済むだろう。白としても、流石にあれ以上のことまで面倒を見る気はなかった。

65 我愛羅？

キバたちに追いつくために向かっていたが、途中で爆発音が微かに白の耳へと入ってくる。白は、他の受験者同士の鬪いに巻き込まれないよう、一直線に塔方面へと進んでいたが、その音を聞いて巻き込まれないように遠回りをした。

しかし、遠回りをしたことで、逆にその現場を目撃してしまう。

（げっ!?） 大蛇丸のやつと戦闘中かよ！ ……まだ気付かれてないな。退避退避）

大蛇丸はナルトとサスケとの戦闘に夢中のように、白の存在に気付いていない。余計な諍いに巻き込まれぬよう、白は再度遠回りに進路を取った。

他の受験者に目撃されないように、割と本気で移動していた為だろう。あつという間に塔へ到着したはいいものの、まだ誰も受験者は到着していなかった。それが分かったのは、受験者用の扉がどれも封をされたままだったからである。塔を一周し、確認し終えた白は、このままの姿でいると、受験者と間違われて襲われる可能性があると感じ、暗部の姿へと変化する。

そして、塔の少し上の部分で受験者の到着を確認していると、一番最初に来たのは我愛羅たちだった。我愛羅たちは塔へと到着すると、入口の1つからすんなり中へと入っていく。

（我愛羅たちが来たってことは、もうそろそろキバたちも到着するのかな？ 影分身にも連絡手段を持たせるべきだったな……）

影分身にキバたちの後を追わせたのは良かったが、連絡手段を考えていなかったため、白は塔にて待機せざるをえなかった。すれ違い防止のためである。しかし、ただ待つておくのは勿体ないと感じ、影分身を更に作ってから、白は塔内へと入ると、準備を進めていく。

今回の影分身は、連絡手段を持たせてあるので、何かあれば連絡が入るように対処済みであった。

白が準備を行っている場所——塔内というのがいけなかったのかもしれない。準備をしている最中に、既に到着していた我愛羅たち

が白へと近付いてきたのである。

「こんなところで何をしている」

「……見ての通り食事の準備だが……」

白は、自分の分を含めてキバたちにご馳走するため、ラーメン作りに精を出していた。そのため、匂いが部屋から外へと漂っていくことを失念していたのである。我愛羅たちは近くの席へ座ると、無言で白のやることを見始めた。

（休憩や暇つぶしなら他のところでやってくれよ……）

スープの灰汁取りをしながら、いつまでも見てくる我愛羅たちへと、意を決して白は話し掛けた。

「何か用か？」

「腹が減った」

「えっ？」

「おっさん、俺たちがここに居る時点で諦めるしかないじゃん」

「運がなかったね」

我愛羅たち3人は、暇つぶしのために居るわけではなく、食事の出来上りを待っていたのだった。予想外の展開に白は固まってしまいが、ここで反論しても危険度が増すだけだと言う事実には仕方なく諦める。

「言つとくけど、出来上がりまで時間がかかる」

「急げ……そこまで気は長くない」

「早めに作った方が身のためだよ……」

時刻は午後5時。夕食を食べるには少し早い時間だった。それでも、自分の身を守るため、白は速度を上げる。水分身に並行して麺を作らせるのである。

（こんなはずではなかったのに！）

出汁が十分に取れないまま、その後の味付けで誤魔化しつつ、短時間でラーメンを作成し終えた。途中から、明らかにイライラし始めた我愛羅を、テマリとカンクロウの2人が話し掛けることで、なんとか治まっていたが、その度に白へと八つ当たり気味に文句を言ってくるのである。白としては、たまったものではなかった。

「まだなのか!？」

「早くしろよおっさん！」

「俺はおっさんじゃねー……!!」 まだ十代じゃボケー……!!」

あまりの2人の言い草に素で返してしまっただが、そんなことはお構いなしとばかりに2人は言い返してきた。

「口よりも先に手を動かしな！」

「死にたくなかったら早くしろって！」

色々なやり取りを交えつつも、ラーメンを出し終えてたところで、暗部の者が部屋の前を通りかかり白を見つめるや近付いてきた。

「他にもいたか。丁度よかった。……何をしてるんだ？」

暗部であるはずの白が、ラーメンを作っているのだから当然の反応だろう。白は早くこの場を脱出したいがために、続きを促した。

「何か用事があったのではありませんか!？」

「そうなんだが……。まあいい、試験官であるアンコ特別上忍を探すのを手伝ってくれ。この塔に到着していてもおかしくはないんだが、まだ来ていないようなんだ」

「わかりました!……では諸君また！」

調理道具を巻物に収納したところで、食べていた我愛羅から声が掛けられた。

「またと言うことは、この時間にここへ来ればいいんだな」

「確か、食事は各自でとか言ってたけど、到着してからのことは聞いてなかったね」

「まあうまいから、残りの時間ここでいいじゃん」

「いや……ちゃんと2次試験通過者には、食事の準備はされてるから……」

白の言った通り、2次試験通過者は、通過後の安全の保障と、他の受験者への邪魔とならないように塔内で食事の用意がされていた。そのため、それを白は伝えたのだが……。

「夕食はこれでいい」

「我愛羅が気に入るなんて珍しいね」

「残り4日間よろしくじゃん」

「……俺の話聞いてた？」

「おい！ 早く行くぞ！」

「まだ、説明という名の説得が！」

「こっちの方が重要だ！」

白は、暗部の者に手を引かれてその場を連れ出されてしまい、その暗部の者とツーマンセルにてアンコを探すことになったのである。

探すこと約1時間でアンコを発見することができた。その時のアンコは、右手で首を押さえて息も絶え絶えといった感じで苦しそうにしており、更に周囲をトラ3匹に囲まれていた。アンコにとって、通常であれば全く問題はなかったが、首に浮き上がった呪印により、ともにチャクラを練れない上に、身体がまともに動かなかったのである。

弱っているアンコへとトラが飛びかかったところで、一緒に行動していた暗部の者が、トラたちに金縛りの術を使用する。

「こんなところにいたのかアンコ」

「……暗部の癖に来るのが遅いんですね」

「そういうな。とつくに塔へ到着していると思っていたからな」

「それについては……ぐっ!!」

「大丈夫か？（あの呪印ってそんなに苦しいもんなのか？）」

暗部の者が来た……と安堵したためだろう。アンコが少し気を抜いたことにより、首筋の呪印からの影響で苦悶の表情を浮かべる。

白たちはアンコへと素早く近づき、状態を確認した。その時に首筋の呪印を暗部の者は見た。

「あの呪印が浮き上がって……お前まさか!!」

アンコは暗部の言葉に頷くと、簡単に説明をし始めた。

「こうなったからには中忍試験は中止だ！ お前は火影様の所へ連れて行く！」

「いえ……塔に行つて……」

「何を言ってる!? 大蛇丸がこの里に来た時点で戒厳令が敷かれるんだぞ！ お前も知ってるだろう!？」

「……とにかく詳しい話は塔ですから……。火影様も塔に呼んで

……この試験は中止にできないのよ……」

「……理由があるんだな？」

「ええ」

アッコは返事をするのもきつそうにし始めたところで、もう一人から指示があつた。

「確かヒミトだよな？ 医療忍術で痛みを和らげることができないか？」

「まあ、できないことはありませんが……」

「ヒミトはこのままアッコを連れて塔へ。俺は火影様を呼んでくる」
「分かりました」

そう言い終えると、暗部の者は火影の元へいくため即座に姿を消した。

「応急処置にすぎませんが、取り敢えず首筋の呪印とやらを抑えます」

「ええ……お願いするわ」

(封印術についてももう少し勉強しておくべきだったな)

掌仙術の応用で、外からのチャクラを無理やり流し込み、呪印を抑えていく。これにより、アッコは多少表情を和らげたが、これは一時凌ぎにしかならない。移動するために白は、片手をアッコの首筋に当てたまま抱きかかえて塔へと急いだ。

「ちよつと！ この恰好はどうかならないの!？」

「黙っててください。治療しながら、しかも周囲に配慮しながらだと結構きついですよ。しかも、自分の治療ではないから尚更です」

この時の移動の恰好は、子供を抱きしめるような形になっていたため、アッコは抗議の言葉を発し赤面していた。白はそのようなことを考える余裕はなく、治療に加えて周囲への警戒……と神経をすり減らしながら移動していた。大蛇丸にいつ出会うかと思うと、油断できなかったためだ。

塔が間近に迫ったところで、何者かが攻撃を仕掛けてきたのである。練度的には大したことのない攻撃だったが、この時の白は気が立っていた。そのため、塔で待機していた影分身に攻撃を指示したの
は言うまでもない。

塔へと到着してからは、アンコを担当者専用の部屋へと連れて行き、その部屋のソファーに休ませた。その際に治療をやめたため、アンコは顔を顰めるが、最初よりも大分マシになったのか、治療の続きを要求をすることはなかった。

「取り敢えず助かったわ」

「一応これが仕事ですから」

アンコは首筋を押さえたまま、ソファーへともたれ掛けて休憩していたため、白は、現在の状況——砂の国の忍者がこの塔に既にいることを説明していた。

「そう……もうこの試験を突破してくるなんて……将来有望ね」

話をしている最中に、塔で待機していた試験官がノックもせず慌てた様子で入ってきた。

「お待ちしていましたアンコさん！ 至急ご報告申し上げたいことが！」

「……何なのよ？」

ゆつくりと休もうとしたところで、部屋へと試験官が入ってきたことにより、アンコの機嫌はかなり悪くなっていた。先ほどよりも声のトーンが下がっていることからもうよくわかる。

「これを見てください！」

「ビデオ？」

試験官はビデオを部屋にある機器にセットすると、モニターの右上を指差す。

「いいですか!? コンコン！ 時間を見ていて下さい！」

モニターに映されたそこには、我愛羅たちが映っていた。時間は16時9分。スタートから約1時間40分である。

「2次試験開始……1時間39分後の塔内の録画です！ 砂の国の忍び3名が……2次試験突破しました！」

「……………」

「わずか97分……下忍でこのようなことができる者など、未だかつていなかった……。これは異常です！」

「……………それで？」

この時、アンコは既に白から報告を受けていたので、驚くこともなく氷点下のような眼差しで試験官を見ていた。しかし、試験官はそんな視線に気付かず、興奮したように話を続ける。

「過去に同じような試験はありましたが、最高記録を約4時間も塗り替えています！ こいつら下忍レベルじゃないですよ！」

「……言いたいことはそれだけ？」
「えっ？」

その瞬間に、それまできつそうにしていたのが嘘のようにアンコが動いた。そして、それは数秒の出来事だった。何かをやり終えたアンコは、再びソファアーに腰を下ろしてもたれ掛かり、少し上がってしまった息を整える。

やり終えた場所に残っていたのは……ボコボコにされた試験官だった……。

「ヒミト。もう一回ビデオを再生して頂戴」

「この人はいいんですか？」

「騒ぎ立てる馬鹿を粛清しただけよ。気にする必要はないわ」

再度ビデオを巻き戻して映像を流すと、アンコはその映像を見て少し驚くと愉快そうに表情を緩める。

「もういいわ」

「何かありましたか？」

「あなたに聞いていたよりも、更に上をいつているみたいね、その子たち……特に瓢箪を背負った子」

「と言いますと？」

「傷一つない。……それどころか服にすら汚れ一つ見当たらない。入口からここまで直線距離にして約10km……。猛獣……。毒虫……。険しい道。それらをまるで何事もなかったように来ているということよ」

「そのような能力を持っているんでしょう（というか砂を纏ってるし、砂自体を操れるんだから、汚れが付くはずないって）」

その後、アンコは火影が来るまで休むということで、白はボコボコにされた試験官を担いで部屋を出て行った。

66 2次試験？

白は、アンコによって意識不明にされた試験官を医療室へと寝かせ、我愛羅たちが食べ終えた食器を片付けるため、休憩室である部屋へと向かった。そこで、無事に到着したキバたちが休んでいるのを見つけることになったが、キバたちは白に気付かず、部屋の隅の方で固まり話し合っていた。

影分身の方は、休憩所前の廊下で壁に背を付けて待機している。ここにいるということは何事も無く来たのだろうと、影分身を解除したことで、キバたちが部屋の隅で話している理由が判明した。

(そう言えば、我愛羅たちと遭遇するんだったな。赤丸が怯えてるわけだ)

いつもであれば、キバの頭の上にいる赤丸が、怯えたようにキバの懐に入って低い鳴き声を漏らしている。目の前で他の受験者を何の躊躇もなく殺つた上に、その手が自分たちへと向けられたのであれば、あの状態も当然かもしれない。影分身の方は、風遁の準備をしていたようだが、未遂で終わっていた。我愛羅たちと接触した時点で、助かることを思い出していたのだ。

声を掛けづらい状況だったため、我愛羅たちが残していった食器を回収して休憩所を後にした。

翌朝。我愛羅にラーメンを催促されていたことを思い出し、影分身に材料の調達を任せただが、もう1人の影分身の存在をこの時まで、白はすっかり忘れていた。朝になったことで、影分身から連絡が入ったのである。

「受験者狩り飽きたんだけど」

「……忘れてた……取り敢えず、術を解除するよ」

「了解」

影分身から入ってきた情報では、塔の周囲にいた受験者は、悉く狩り尽くしてしまっていた。人数的には、半数以上が影分身により脱落させられているようだ。みんな塔付近で待ち伏せをして巻物を手に

入れる気だったのだろう。しかし、それが裏目に出たようで、白の影分身によりやられてしまっている。

脱落させられた受験者は、ご丁寧に影分身が1つの巻物を広げることによって、試験官を口寄せし回収させているようなので、その点はまだ良心的であると言えるだろう。余った巻物については、その辺りに投げ捨てているようだったが……。

目を跨げば、キバたちも落ち着くだろうと白は思っていたが、そうはいかなかった。キバたちの様子を見ようにも、キバたちは与えられた部屋からほとんど出ることがなかったのである。3人で集まっているようだが、この塔内で我愛羅たちを見かけたのだろう、警戒しているようで、極力部屋から出ないようにしているようだった。

そのため、食事を作ってあげることも出来ず、夕食は我愛羅たちに振る舞うことになってしまった。何のためにこの場にいるのか、分からなくなっていた白だった……。

2次試験開始から4日目にネジたちの班が塔へと入ってきた。昼間から既にラーメン作りをしていた白は、休憩所へと入ってきたネジたちへとラーメンを振る舞った。あからさまに怪しかったのだろう、ネジだけは最初は箸を付けずに白を見詰めていた。しかし、リーとテntenはお腹が減っていたのか、すごい勢いで食べ始めてしまい、お替わりまで要求したところで、毒気を抜かれたのかゆっくりと食べ始めた。

「こんなところでまともに食事ができるなんて思わなかったわ」

「そうですね。外では食材はあっても器具がなかったですから」

「お前たちには、危機感というのがないのか？」

「ネジは頭が固すぎるのよ。塔に入って通過って言われたんだから、ここでこんな手の込んだこととして脱落させても意味ないじゃない」

「その通りです。それに、外での修行もいいですが、屋内での修行もしておかないと、いざと言う時役立てません！」

「リーは身体を診てもらっておきなさいよ。頑丈なのは知ってるけど、この後もまだあるだろうし」

「もう大丈夫です！ この程度で音を上げるようでは、サクラさんに振り向いてもらえませんから！」

白の目から診ても、リーは普通に動いているように見えていたが、微妙に他の人の言葉への反応が遅れていることから、聴覚に異常があるのが分かった。

「あまりこういうのを聞くのはよろしくないかもしれないが……リーと言ったか？ 君、どちらかの耳が聞こえにくいといったことはないか？」

突然、話に割り込んできた白をネジとテンテンは不審な目で一瞬見るが、リーが驚いたような顔をしていたため、その矛先はリーへと向く。

「リー……あなたまさか、あの時の傷が治ってなかったの!？」

「この程度問題ありません」

「程度の差の問題ではない。常に万全の状態にいるよう心掛けるべきだ」

「治るまで修業は休みね」

「そんなん!？」

修行はリーにとって生き甲斐に等しいのだろう。テンテンの一言で顔が見る見るうちに蒼白になっていく。

「よければ治療するがどうする？（リーには無意識とはいえ、以前蹴っ飛ばしてしまったからな。これくらいいいだろう）」

「いいんですか!？ 是非お願いします！ ほらリーも！」

「えーつと。いいんでしょうか？」

「気にする必要はない」

白はリーへと近付き、手を両耳に当ててチャクラを流し始めた。

「左耳か……」

元々の回復力が高かったためだろう。リーの耳の治療は数分で終わった。

「これで通常通り聞こえるはずだ」

「聞こえます！ これでもいつも通り修業ができそうです！ ありがとうございますー!？」

「礼には及ばないが、このことは内密にな。本来認められていないんでな」

「わかりました！」

リーは喜んで今にも修行を始めそうな勢いだった。

「暗部の人つてみんなこんなことできるんですか？」

「できる者もいればできない者もいる。人には得手不得手があるからな」

それから、白は2次試験の過程などを聞かされていた。ネジたちは、天と地の両方の巻物を手に入れた後も、他の受験者を倒して巻物を回収していたようだ。その時の苦労話を愚痴のようにテンテンは話してきている。リーに至ってはよい修行になったと言っているが……。

「そろそろいくぞ」

「えー……もう？」

「ではテンテンだけ残れ、俺たちは行かせてもらう」

「冗談だつて！ 私も行くわよ！ ご馳走様でした。それとリーのことうちがとうございます」

「ありがとうございます」

「……………」

「いや。前にも言ったが気にしないでくれ」

リーとテンテンは警戒心が無くなっていったが、ネジだけは警戒心を保ったままだった。会話にも混じらずに白をずっと観察していたのである。礼を述べてからネジたち3人は休憩所を出て行った。

（まあ、確かに怪しすぎるから、ネジの対応が正しいかな。他の2人は警戒心が低すぎるから、ネジが余計に気にかけてるだけかもしれないけど）

その後は、ここ数日と同じように我愛羅たちに食べさせて、最終日を迎えることとなった。

最終日の午前中に最初に来たのはイノたちで、話の内容から、塔の近くで他の受験者を待ち伏せしようとしていたところ、落ちていた巻物を拾い、それで巻物が揃ったために、すぐに塔へと入ってきたよう

だ。おそらく、落ちていた巻物は白の影分身が倒してしまった受験者の物だったのだろう。それを偶々見つけたようだった。

(なんて運がいいんだ……)

その後、音忍たちが到着し、昼過ぎになってやっとナルトやカブトたちも塔へと到着した。時間ぎりぎりである。それ以降に他の受験者が来ることもなく時間切れとなり、2次試験は終了となった。

最終日は夜まで塔へと滞在しないので、ラーメン作りを免れたと思っていた白は、火影に会ったことで不機嫌になっていた。今、白が居る場所は、試験官用のモニター部屋である。それというのも、火影に会った際にモニターで塔内の監視を命じられたのである。監視と言っても、対象は大蛇丸であり、そんな人物が簡単にモニターに映るわけもなく、カブトたちが到着した時にも、誰かと話していたようだが、モニターの死角に現れたようで映ることはなかった。

(これって音忍の上忍が大蛇丸って言っていた方がいいのか？ でも気付かれた時点で、誰かが身代わりにされて、大蛇丸じゃありませんでしたってオチになりそうなんだよな……)

そんなことを白が考えていると、試験官がアンコへと報告を行い始めた。

「アンコ様！ 2次試験通過者ですが、総勢21名となりました。中忍試験規定により3次試験を行います。以上で2次試験終了です」
「……………」

試験官が報告したにも関わらず、アンコからの返答はなかった。報告した試験官は首を傾げて他の試験官を見始める。

「俺、何かまずいこと言ったか？」

「いや……。普通だったとおもうぞ？」

「機械の調子が悪いんじゃないのか？」

「昨日まではちゃんと繋がってたぞ」

「もう一回言ってみろよ」

試験官たちは話し合いながら、機械の状態の確認などをしていたが、よく耳を澄ませば、アンコと火影のやり取りが聞こえていたのだった。さすがに、これ以上アンコ被害が拡大してはまずいと、白は

注意を促す。

「向こうは聞こえているようなので、指示を仰ぐだけでいいのでは？」
試験官たちは白へと視線を集中させた後に、次いで報告した試験官へと視線を移す。暗にお前が聞けと言っているようだった。

「えーつと。アンコ様聞こえてましたでしょうか？」

「聞こえてるわよ。それぞれの班の担当者は受験者を会場まで案内させなさい。それと、それぞれの班に最低でも2人は試験官がつくこと……いいわね？」

「分かりました」

「それと、そこに暗部のやつ1人いないかしら？」

「いますが……」

再度、試験官の視線が白へと集中する。白は嫌な予感に身を包まれていた。

「そいつにはこの部屋に来るように言ってちょうだい。あとは速やかに移動させること！ 今日中に3次試験終わらせるわよ！」

アンコは言い終わると、通話回線を切ったようで、その後に言葉が流れてくることはなかった。

「そういうわけだから、アンコ様のところへ行ってもらいたい。……それとさつきはありがとう」

「別に構わない。……慣れてる(どうせ、また別なこと頼まれるんだろうな……)」

試験官用のモニター部屋を出て、アンコのいる部屋へと行くと、アンコと火影が話し合っていた。部屋にはその他にも、アンコの後ろに試験官2人が立っている。

「取り敢えず、試験はこのまま実行する……。あやつの動きをみながらじゃが……」

「はい……」

「お呼びとのことでしたが」

火影だけならばいざ知らず、他の者がいる手前、白はいつもの態度で火影に接することはなかった。

「来たか……。お主には、3次試験会場までサスケのいる班について

もらう」

「分かりました（大蛇丸対策か……どうせここではまだ襲われたいだろうし問題ないな）」

火影からの指示を受けて、ナルトたちの元へ行くと、イルカともう1人の試験官が待っていた。

「連絡がいつているとは思いますが、この班の担当の3人目です」

「3人目がまさか暗部の人とは……」

「それよりも早く行きましょう。アンコさん怒ると怖いですから」

ナルトたち3人と合流し、第44演習場を抜けていく。影分身を先行させていたため、何かに襲われることもなく、無事に演習場を出た白たちは、そのまま次の試験会場へと向かう。

意見会場はすぐ近くの建物であり、そこには下忍たちの担当である上忍たちが待っていた。既に連絡がいつていたのだろう、2次試験通過者の上忍のみが来ているようだ。広間の奥にある、寅の印のきつた巨大な石造の前に上忍たちは並んでいた。

白は案内はここまでとして、直ぐにその場を去った。

あることを忠告するのを忘れていたため、暗部としてではなく、白としてこの場に来なければならなかったからだ。そのため、一時この場から去らなければならなかった。

67 3次試験？

会場の外で、変化の術を解こうとした時に、改めて白の元へと指示が飛んできた。鷹が運んできたのである。鷹は白の肩へととまると、片脚を上げて、そこに括り付けられている紙片を差し出してきた。

白が素早くその紙片を取ると、仕事は終わりとはばかりに鷹はどこかへ飛んで行ってしまった。白は、気にせず紙片の中を見て固まってしまう。その内容は、まるで図ったかのようなタイミングと内容だった。

紙片に書かれた指示の内容は暗号で書かれており、サスケ班の移動が完了次第、月光ハヤテを会場へと呼び、ハヤテの任務を引き継ぐというものだ。

予定では、2次試験を終えて、日を空けてから3次試験を行うはずだったので、ハヤテが今から3次試験を行うということは知らないだろう。確かに、そう言った意味では、知らせることの必要性はわかっ
てはいたが、白は納得できていなかった。

(ほとんどの暗部が忙しいのは分かるけど、根の方はまだ余裕がある
だろ……。しかも、なぜあの時言わなかったんだよ……)

白は内心で悪態を付きつつ、紙片に書かれたハヤテの任務先へと影分身を向かわせた。

ハヤテの任務内容は、砂の国から来た忍者の監視だ。同盟国とはいえ、過去に雲の国の裏切りがあつて以降、他里の忍者が木の葉の里に入った時には、監視するようになっていた。そのため、砂の国の忍者の滞在している宿付近に来たまではよかったのだが……

(ハヤテさん見つかからねー!!! あの人の隠遁舐めてたよ……さすがに火影が認めるだけのことはある……)

白はハヤテを見つけ出すことができずにいた。複数の気配が監視しているのは分かったので、手当たり次第に確認しているのだが、その悉くが違う人だったのである。

その後、時間はが多少かかったが、白はハヤテを見つけたことに安堵して近付いていく。

「よかった……探しましたよ」

「ヒミトさんですか……どうしました？」

「3次試験の日程が繰り上げになりました。すぐに会場へと向かってください。任務は私が引き継ぎます」

「繰り上げ……ですか？」

「ええ。繰り上げにすることの決定は火影様が決めたことのようなので、私には分かりません。ただ、会場には既に受験者が集合していますので、急いでください」

「分かりました。では引き続きお願いします。今のところ怪しい動きはありません」

「分かりました」

そう言うと、ハヤテはすぐにその場を立ち去り、試験会場へと向かっていく。

(ハヤテさん目の下の隈酷かったけど、大丈夫だろうか……。まだ俺の任務の方がマシ……。なのか?)

影分身はそのまま、砂の国の忍者の監視任務へと就いた。

白の影分身がハヤテの元に辿り着く少し前。3次試験会場に通過者が、整列し並び終えてしばらくしてから、火影が会場内へと現れた。当然のことながら、その場に3次試験の担当者であるハヤテの姿は無い。そのため、アッコが3次試験の進行を行っていた。

「まずは、2次試験の通過おめでとう！……これから火影様よりお話しがある！各自心して聞くように！……では火影様お願いします」

「うむ」

火影は鷹揚に頷くと、この中忍試験の目的について説明を始めた。その目的に対して、受験者からは、始め困惑の表情が出ていたが、内容を説明していくうちに理解できたのか、表情を変えていく。

「すなわち……これは己と里の威信を懸けた命懸けの戦いなものじゃ」

「納得いったってばよ」

「どうでもいい……それよりも、命懸けの試験とやらを早く始めろ」

「…………ふむ…………3次試験について説明したいところなのじゃが…………実は3次試験の担当の者が…………」

そこまで火影が言いかけたところで、ハヤテが試験会場へと到着し、火影の前へと現れた。

「お待ちせしました火影様」

「…………来たか」

「ここからは、3次試験担当を仰せつかったこの月光ハヤテから、説明を行わせていただきます」

火影が頷くのを確認してから、ハヤテはアンコからボードを受け取り、受験者たちへと振り返ると、全員を見回したうえで説明を始める。

「みなさん初めまして…………ハヤテと言います。…………まず、3次試験の目的についてです。あまり、3次試験が行われることはないのですが、1次試験と2次試験が甘かったせい、少々人数が残り過ぎてしまいましたね。中忍試験規定に則り、3次試験にて本選へ出場する人数を減らすために行います」

「……………」

「本選には、たくさんの方々が来られます。そのため、ダラダラとした試験はできず、時間も限られてくるんです…………と言うわけで、これからすぐに3次試験を行いますので、体調のすぐれない方…………他にもやめておきたいと思う方は今すぐ申し出てください」

「っ!! これからすぐだと!?!」

「…………いませんか?」

キバがハヤテの言葉に驚いたような声を上げるが、ハヤテは気にせず、辞退者の確認を行う。そこで、おずおずとカブトが手を上げて辞退してきた。

「あの…………。僕はやめときます」

「!!」「!!」

「えっ!? カ…………カブトさん…………?」

少しの間、静寂が包む中ハヤテが咳き込みながら、進めていく。

「えーつと…………。木の葉の薬師カブトくんですね…………下がっていいですよ」

ハヤテはボードへと書き込むと、思い出したように説明を付け加える。

「えー……言い忘れていましたが、ここからは個人戦です。1人がやめたからと言ってチームに影響は出ませんので、自分自身の判断でご自由に申し出てください。……他に辞退者はいませんか？」

カブトはしばらくその場に留まり、ナルトや同じチームの者と会話後に、その場を立ち去って行った。その後すぐに、サスケに異常が現れ始める。

サスケは急に首筋を押さえると、険しい表情をしたのである。それを見て、サクラは涙を流しながらサスケに試験を止めるよう伝えるが、サスケは聞く耳を持たず、サスケがサクラに小声で話している間に、火影側でもサスケのことについて話し合っていた。

「彼は試験から外し暗部を付けて監視すべきです！」

「そう素直に言うことなんて聞きませんよ、あいつは……なんせあのうちは一族ですからね」

「なに呑気なこと言ってるのよ！ あの呪印は、チャクラ練り込んだだけでも、呪印が勝手に反応して無理やり力を引き出そうとする禁術なのよ!? あの子が耐えてるだけでも不思議よ！ ……火影様からも言っただけでください！」

アンコは自分が同じ呪印を付けているためだろう。サスケの状態の危険性をカカシへと捲し立てた。

「ふー……大蛇丸の事もある……。サスケはこのままカカシ預かりでいいじやろ。それに加えて暗部に余裕はない……」

「ほ……火影様!!」

アンコは火影が賛同してくれるものと思ったのだろう、火影の言葉に苦渋の表情をしている。

「ただし、呪印の力が少しでも暴走したら止めに入れ」

「はい……」

アンコは未だに納得できていないようだったが、条件付きとはいえ、止めに入れることを聞いたことで素直に返事を返した。

「えー……ではこれより始めますね。この3次試験は一对一の個人戦

——つまり実戦形式の対戦となります。……丁度20名となったので、合計10回戦行い、その勝者が中忍試験の本選に進出できます。……ルールは一切ありません。どちらかが死ぬか倒れるか……あるいは負けを認めるまで闘ってもらいます。死にたくなければすぐに負けを認めてくださいね」

ハヤトの言葉に、ナルトたちは息を呑み真剣な表情で聞き入っている。これまでの任務や今回の試験で、殺し合いなどしたことがないため、この3次試験がどのようなになるのか想像して、緊張しているのだった。

「ただし、勝負がはつきりついたと判断した場合などは、無暗に死体を増やしたくないので、止めに入ったりなんかします。……以上で説明は終わりです」

ハヤテの言葉で、壁の一部が動きだし、そこに電光掲示板が現れた。「えー……この電光掲示板に対戦者の名前が表示されます。名前が表示された方はそのままここに留まり、それ以外の方は上に移動ください。ではさつそくですが、1回戦の対戦者を発表しますね」

ハヤテが言い終えて少ししてから電光掲示板に文字が映し出される。

『ウチハ・サスケ VS アカドウ・ヨロイ』

「では、掲示板に示された2名はそのまま留まり、他の方は移動してください」

対戦者以外が上へと移動し、サスケとヨロイが戦い始め、みんなの視線がそちらへと向いたところで、白はネジへと近付いていった。

「ネジ。2次試験通過おめでとう」

「……来ていたのか」

「まあ、一応同じ班の人が出るわけだしね」

「……知るのが早いな」

「……情報の伝達は意外に早いものなんだよ。それよりも、少し向こうで話さない?」

白は人が居ない場所を指差した。

「この試合を見ておきたいんだが……」

「結果が知りたいなら、サスケくんの勝ち。はい、それじゃ行こうか」
白はネジの腕を掴み問答無用で移動を始めた。ネジは不審な顔をしつつも特に抵抗せずに白に付いていく。

「さて、言っておきたいことがあるんだけど、その前に確認。ネジはまだ宗家に対して何か思うところはある？」

「!! あるに決まっているだろう！」

「はい、静かに……まあ予想通りなんだけど、一応言っておくよ」
「何をだ？」

ネジは不機嫌な声で白へと聞き返してきた。

「宗家を継ぐのは1人。そして、現在の宗家の跡取り候補はハナビ様。ヒナタはハナビ様のスペア扱い。このままいけばヒナタは、ネジと同じ分家になるんだよ。……それは分かっているよね？」
「……………」

ネジは小さい頃からヒナタは宗家という思い込みがあったため、ずっと宗家だと認識していた。しかし、よくよく考えれば分かることだったのだが、今までの憎しみの対象としてしか見てきていなかったため、そのことに思い至らなかったのだろう。それが、白の言った言葉で、ネジは理解してしまい考え込んでしまった。

「……………白は結局何が言いたいんだ？」

「まあ元を正せば、恨む相手が違うってことを言いたいんだけどね。……恨む相手は、雲隠れの忍びであって宗家ではないよ。まあ、殺してしまった落ち度はあるけどね」

「……………大体言いたいことは分かった。だが……………そんな簡単に割り切れるものではない」

「今はそれでいいよ。こっちとしては取り敢えず、手加減は不要だけど、過剰攻撃は控えてほしいと思ってるだけだから」

「……………まるで、俺とヒナタ様が対戦するような言い方だな」

「当たる可能性はゼロではないから……………念には念をってところかな？」

そろそろ試合が終わるよ」

白がネジを試合へと視線を向けさせた時、丁度、サスケがヨロイを蹴りあげていたところだった。

その後、上空へと蹴り上げられたヨロイに対して、サスケがリーの技を真似たことでネジが驚いている間にも、サスケはヨロイへと連続蹴りを放っていく。最初の蹴りは防がれたが、続く蹴りにヨロイは反応できずに顔面へと諸に喰らい、そこへサスケが追撃で腹部へと殴ること、地面への落下速度を加速させ、地面へと到着すると同時に、地面と挟むようにして胸へと蹴りを放った。

蹴りを放った後のことを考えていなかったのだろう。サスケも攻撃後に蹴りの反動で、その場から弾け飛ばされていたが、息を荒くしながらも、ゆつくりと立ち上がり、ハヤテによつて勝利者コールが成される。

「うちはサスケか……あれほどとはな……それにしてもあれはリーの技……」

「たぶん、リーさんがサスケ君の前で使った時に、写輪眼でコピーされちゃったんじゃないかな？」

「……………」

「それじゃあ、話は終わりつてことで、また後で」

白はネジにそう言うと、紅たちのいる元へと向かっていった。

白はネジとの会話後に、紅班のメンバーが集まっている場所へと向かった。

「みんな2次試験通過おめでとう」

「ありがとう」

「ああ」

「……………」

「ありがとう」

2次試験の通過に対する祝福を述べたのだが、紅だけは違和感に気が付き、白へと問いただしてきた。

「…………白。あなた、どうやってここに入ったの？」

「暗部の方に教えてもらって連れてきてもらいました。…………紅先生の口利きではなかったのですか？」

「…………いえ。それならばいいわ」

(怪しまれても仕方ないかな…………)

紅の疑問も当然だった。この会場は、試験官が周囲の警護に当たっており、関係者以外が、簡単に入れるものではない。白も紅班で関係者と言えば関係者ではあったが、理由を説明した所で簡単に入ることはできなかっただろう。そのことで紅は聞いてきたのだが、白の言った内容で、火影が手を回したのだろうと納得してしまった。

「白は気軽そうでいいよな」

「<全く気軽ではなかったけど…………>」

「何か言ったか？」

「なんでもない」

最初に軽めの挨拶を行ったせいだろう。キバは白に対して呑気に言ってくるが、白にとつてはストレスの溜まる2次試験だったため、小声で愚痴を言ってしまう。

ヨロイが医療忍者に運ばれて行き、サスケがカカシに連れて行かれたところで、再度ハヤテの声が聞こえてきた。

「さて、次を始めます」

そこからの展開は原作と一緒にと思ったが、順番が違っていた。次の対戦が……

『ザク・アブミ VS アブラメ・シノ』

だったのである。しかし、対戦の結果が変わることはないどころか、無傷でシノは白たちのところに戻ってきた。それに対して、紅は一安心といった様子でいたが、キバはシノに対抗心を燃やしているように、拳を握りしめるてやる気を漲らせているようだ。

(シノってどこかに攻撃をうけなかったっけ? ……まあいいや、勝ってるんだし。それにしても、キバ対抗心燃やしすぎ)

まるで、それを叶えるかのように、次の対戦者が電光掲示板に映し出される。

『ウズマキ・ナルト VS イヌツカ・キバ』

対戦相手が変わることはなかったが、次々に順番が変わっていくことに白は少し驚いていた。

(これは俺がいる影響なのか? ……でも、順番が変わっただけで結果は変わってないし……、問題は……ない……のかな?)

ナルトとキバの結果も変わることなく、ナルトの勝ちで終わった。ナルトはまだまだ元気いっぱいといった様子で上へと階段を上がってくる。そして、ナルトがカカシたちのところへ移動する際に、ヒナタが勇気を振り絞り、ナルトへと声を掛けて薬を差し出した。

「ナルトくん……。これを……」

「何だこれ?」

「この場面で渡すなら薬に決まってるでしょ。少しは闘うこと以外のことでも考えた方がいいよ」

この薬に関しては、ヒナタが色々な分野の勉強に手を出していた時に、白がヒナタに作り方を教えていたものだった。ヒナタには残念ながら医療忍術の才能がなかったため、白がない場合の怪我の手当て方法としていたのである。今回は、それを生かして、怪我をしているナルトに自ら手渡そうとしているのだろう。

白からの無言の早く受け取れというプレッシャーを感じたのか、ナ

ルトは恐る恐るといった感じで薬を受け取った。

「あ……ありがとだってばよ」

「う……うん……」

ナルトはそう言うと、カカシたちの元へと行ってしまった。続いてキバが担架に乗せられて運ばれて来た時にも、同じように傷薬を渡そうとするが、キバ本人によって渡す前に遮られる。

「いいかヒナタ……あの時に分かったと思うが、砂の奴と当たった時は絶対に棄権しろ。今の俺たちじゃ絶対に勝てない」

「……うん。分かってる」

「分かってるならいいが……」

そこで、次の対戦者が電光掲示板に映し出され、それを見てキバは更にヒナタへ顔を向けた。

「ヒナタ……あいつとは「はいはい。怪我人はさっさと移動、移動」……って白!? お前は分かってるだろ! あいつは……」

「担架で運んでもらっているんだからこれ以上迷惑をかけない! すいません。行ってください」

「あつ! おい!」

キバは何かをまだまだ言いたそうにしていたが、怪我を治す方が優先とされたのだろう。担架を持っていた医療忍者の2人は困惑しながらも、キバを連れて会場を後にした。

(次の対戦はヒナタとネジか……)

電光掲示板には『ヒュウガ・ヒナタ VS ヒュウガ・ネジ』と映し出されていた。

それを見て動揺しているのはヒナタのみで、ネジの方は白をちらりと見てから下の広場へと降りていく。

「ヒナタ。出番だよ」

「……そ……そんな……」

(確かにこの組み合わせって何か悪意を感じるよな……)

3次試験の始まる前に、火影が言った内容では、各里の保有する戦力を見せつけると言っていた。そのような中、日向家は木の葉の里でもかなりの戦力となる。それにも関わらず、その日向同士を闘わせる

というのは、白にとって納得できるものではなかった。他の里との合同なので理解はできてはいたが……。

「では4回戦を始めます。……開始！」

ハヤテの合図と共にヒナタは構えるが、ネジは特に構えもせずヒナタへと語りかけた。

「闘う前に言っておく。……あなたでは俺には勝てない。棄権しろ」
「……えっ？」

ヒナタはネジの言ったことがすぐには理解できなかったのだろう。ネジの言った言葉に驚いているようだ。

「……ハナビ様に負けてから、宗家としての責務から逃れて鍛錬を怠るばかりか、更には未だ自分に自信を持ってないでいる。……そんな考え方を持っているは、宗家どころか日向家としての格を落としていることにすら気付いていないだろうか？」

「……………」

「何も言い返せないか……かなり甘やかされていたようだな。だから分家からも落ちこぼれと言われているんだ。……あいつがあなただを変えようとしていたようだが、あまり効果は無かったみたいだな。自分を変えることもできないようでは、この試合自体が無駄だ。早々に棄権しろ」

ネジにとっては、ヒナタに対する憎しみの想いもあつたのだろう。棄権を促すことで、争いを回避しようとしたようだが、そこにネジの一方的な発言に対して怒鳴り声が入ってくる。

「いい加減なこと言うな！ そんなやつ言うことなんて気にするなヒナタ！」

ナルトは柵を握り締めて身を乗り出し、今にも下へと降りてヒナタの代わりにネジへと襲いかかろうとする勢いだ。

そんなナルトの声で決心がついたのか、ヒナタは表情を引き締めネジを見つめ直す。

「これ以上は無駄のようだな」

「……私はもう逃げない！ 勝負です！」

「いいだろう……」

(やっぱり闘うことになっちゃったか……)

ヒナタとネジの両者が構えを取ったところで、最初に仕掛けたのは意外にもヒナタからだ。ヒナタはネジへと初撃に掌底をくり出す。それをネジが弾いたところでヒナタの顔色が変わり、すぐに後退した。

「これは……点穴!？」

「やはり気付いたか……気付かないと思ったんだがな」

ヒナタは自分の腕にチャクラがいかないことに気付き後退した。これに気付けたのも、白との点穴を使つての鍛錬時に、チャクラを断たれた状態も試したことがあつたためだ。

「俺の白眼は点穴を見切る。あなたと同じだ」

「えっ……」

ネジは、昔白との試合にて、白が点穴の存在を漏らしたことにより、ヒナタも点穴を突くことができると勘違いしていたのだった。そのことにより、ネジはヒナタは才能があるにも関わらず、宗家の責務から逃れようとしている風に見え、強くあろうとしない姿に憤慨していたのだった。それはネジの鍛錬にも影響を与え、そのような存在に負られないと鍛錬を積んだ結果、点穴を見切れるようにまでなっていた。

「今度はこちらから行かせてもらう」

「っ!？」

ヒナタは防御の姿勢で対応するが、左腕にチャクラが練れないことで速度が落ち込んでおり、ネジの攻撃に対応出来ていなかった。それでも、動きの鈍い左腕を盾にしながら辛うじて凌いでいたのはさすがと言つていいだろう。しかし、じわじわとヒナタの身体全体の動きが鈍くなっていくと同時に、呼吸も荒くなっていった。

ネジの方は未だに無傷で、呼吸を乱すことなく、まるで予め決められていたかのような動きでヒナタを攻撃していく。

「……やはりこの程度か……」

その言葉以降、更にネジは攻撃の速度を上げた。ヒナタはこの攻撃について来れず両腕の点穴を全て突かれてしまう。ネジは一旦距離

を取り構え直して再度ヒナタへと言い始める。

「もう腕にチャクラは通っていない。……最終警告だ、棄権しろ」

「……わ……わたしは……まだ……」

「警告はした」

ヒナタは荒く息をあげながらも、構えを崩さずにネジへと向き合っていた。それに対してネジは、今までが遊びだったと思わせるほどの速度でヒナタへと柔拳を繰り出した。今度の攻撃は腕や脚ではなく真っ直ぐに胸へと突いてきた。

ヒナタはこの攻撃により血を吐きだし、地に膝をつく。これで終わりとはばかりに、ネジはヒナタを見下ろすような形で立っていたが、ナルトの声援によりネジはそちらへと視線を向けた。

「ヒナター！ ガンバレー……!!!」

ナルトの言葉で膝をついていた状態から立ち上がると、チャクラの練れない腕でネジへと反撃を行っていた。しかし、その顔から既に白眼が使われていないことが分かる。

完全に終わりのはずだった攻撃を受けても、反撃してきたことにネジは驚き、その反撃を喰らってしまうが、柔拳を基本とした攻撃だったため、触れられた程度の衝撃しかネジにはいかなかった。

そこから、ネジは更に身体の機能を奪っていくが、ヒナタは受ける攻撃を無視して反撃をしていく。

ネジはそのヒナタの攻撃にイライラし始め、一旦ヒナタから距離を取った。

「これで終わりだ」

「……………」

ここでネジからの殺意とヒナタの状態に気付いたのだろう、ハヤテが試合を止めにかかる。ヒナタは途中から無意識で攻撃をしていたのだった。

「この試合は終了とします！ ……ネジくん！」

試合終了の言葉を聞いても、止まることのないネジへ向けてハヤテが叫び、それと同時に上忍たちが動いて、ヒナタへと攻撃が当たる前にネジを止めた。ヒナタはというと、白に抱きかかえられている。

「ネジ……過剰な攻撃をしないで欲しいと言ったのを忘れたの？」

ネジはもちろんのこと、上忍たちも含めて白の言葉に驚き、白へと視線を向けた。言葉というよりも、ヒナタを抱きかかえてそこにいるという事実……。

「ヒナタは少々危険な状態なので連れて行きます」

その場にそう言い終えると、掌仙術にて治療を行いつつ病院へと白は向かった。

69 治療？

木ノ葉病院治療室で、白はヒミトとして1人ヒナタの治療に当たっていた。1人というのも、これから重傷者——リーが来るはずだからである。それに、一般の患者のためにも、他の医療忍者に頼むわけにもいかなかった。

ヒミトは、医療忍者の上忍と言うことで、治療の手伝いや講師として木ノ葉病院へとよく足を運んでいたため顔見知りが多く、治療室借用の手続きやヒナタの治療を1人で行うということなどを、承諾してもらうことができていた。ただし、事後に手続きは行うということが前提だが……。

(無意識の状態で、あそこまでよく動けたな……)

ヒナタは、通常であれば動かすことすら困難な状態であるにも関わらず、無理に動かしたことにより、所々で筋肉の負傷が見受けられる。

特に酷いのが胸への柔拳による攻撃だった。柔拳によりチャクラの流れが阻害されているため、少しでも白が供給するチャクラの流れを止めると、そのまま心臓が止まってしまうような状態だったのだ。

約1時間ほど治療を行ったところで、僅かずつヒナタのチャクラが流れ始めた。それを確認した白は、額の汗を拭い、一旦治療していた手を止めて一樂の方の影分身へと連絡を取り、影分身を一旦解除した上で、再度影分身を使用した。

ヒナタを寝かせてある治療台を左右から挟む形で立ち、腕から順に先ずはチャクラの流れを元に戻していく。今回は、点穴の箇所には痣が残っていたため、治療がし易くなっていた。しかし、点穴を柔拳により攻撃された数が多かったため、時間がかかったのは仕方ないだろう。

チャクラの流れを元に戻したところで、影分身にヒナタの着替えを取りに行かせ、その間に無理をして負傷した箇所の治療を行っていく。

その時、誰かが音も立てずに治療室へと入ってくるのが白には分かった。

「こちらは忙しいので、用件だけを言ってもらえませんか？」

白は振り返りもせず、部屋へと侵入してきた人物へと声を掛けた。

「まさか気付かれるとは思わなかったよ。ヒミト君……いや白君と言うべきかな？」

治療室へと入ってきた人物は、カブトだったのである。しかも、白の正体を知っているというおまけつきだった。一旦治療の手を止めて、カブトへと向き直る。

「再度聞きます。何か御用ですか？（なぜここに来るんだ？ サスケの方に行くんじゃないのか？）」

「いやなに。ここに来る途中偶々見かけてね。自分の手掛けた教え子に会っておこうと思ったんだよ」

「……教え子？（カブトに会ったのは中忍試験の時から初めてのはず……？）」

「気付かなかったのかい？ アカデミーの頃から色々と教えていたつもりだったんだけどね」

「……………（げっ！ まさかあの気のいい人がカブトだったのか……………）」

「気付いてなかったようだね……。君を教えていた医療忍者の上忍は僕だよ。……まあいい。それよりも、用件だったね。単刀直入に言う」と木ノ葉の里を出ないかい？」

「……………勧誘ですか……………」

「そうだよ。さすがに僕一人ではこれから先、荷が重くなりそうだね。何人か一緒に行くんだが、如何せん君ほど優秀なのがいらないんだよ。……………それでどうかな？」

白にとつて最悪な状況での選択を迫られていた。逃げることでなければ可能だが、その場合ヒナタを見捨てなければならず、闘ったとしても、ヒナタを庇いながらなので、良くて相打ち、悪ければ……死である……………。

（急いでいたからって途中で変化の術を使用したのはまずかったな……………まさか見られていたとは……………さて、どうしようか）

しばし、考えていたところに影分身が戻ってきた。カブトを挟み撃ちのような恰好にはなったが、それでも油断ができる状況ではない。正体がすでにバレているのもよくなかった。

「この件をあなたの上にいる方は知ってるんですか？」

「……なるほど、噂に違わず情報集能力も高いみたいだね。……この件は完全に僕の独断だよ」

（余計なこと言ってしまったか……）

白の言った内容は、逆にカブトの興味を引いてしまったようで、カブトは薄く笑みを浮かべた。

「そろそろ決まったかな？」

「条件があります」

「……言ってみるといい」

「俺の条件は完全にあなただけの中に留めて、上にいる人には言わないことと、俺への人体実験はしないこと。それに加えて、連れて行くのがそこにいる影分身でよければです」

「最初の2つはいいとして、3つ目は論外じゃないかい？ それに影分身なんてすぐに消えてしまいうだろう？ 裏切られたら目も当てられない」

カブトの言うことも最もな話だった。内容的には、スパイを潜り込ませてくださいと言っているようなものだ。しかし、これを否定されるのは想定済みだった白は更に条件を変えていく。

「しかし、こちらへのメリットがなさすぎると思うんですが？」

「そうだね……他に条件はないのかい？」

「では……」

白はカブトへと条件を変えて付け加えていく。

「……どこでそれを知った？」

カブトは白の出してきた条件を聞くことで、顔から薄い笑みが消えて無表情へとなっていく。

「過去を調べれば推測できます（本読んで知ってたなんて言えないよ）」

「……分かった。その条件を呑もう。では1か月後……中忍試験の本

選でまた会いに来るよ」

「それをお願いします」

影分身を扉の位置から移動させて、そこを出て行くカブトに一言付け加えておく。

「サスケ君のところに行くのであれば、急いだ方がいいですよ。カカシさんがそろそろ行くはずですよ」

「……君がどこまで知ってるのか非常に興味があるね」

「知っていることなんて高がしれてますよ。それよりも、早めに行くことをお勧めします」

「時間がないのは確かだね。それではまた」

カブトの気配が消えたのを確認し、影分身から着替えを受け取った白は、素早くヒナタの治療を終わらせると、血の付いた服を着替えさせていった。

(かなり面倒なことになったなあ……。まあ、本体だろうと一緒にいても逃げることは可能なんだけどね)

着替えさせたヒナタを治療室から病室へと移動させる。その合間に影分身にて手続きを行わせ、ヒナタの看病をしつつ、今後のことについて白は考えていた。

病室へと移動してすぐに、ヒナタの元へと紅がやってきた。

「ヒナタの容態は？」

「もう大丈夫ですよ。チャクラの流れは安定していますし、他の箇所についても休んでいれば治ります」

白の言葉に紅は安堵すると、表情を引き締め直して聞いてきた。

「場所を変えて聞きたいことがあるのだけど」

「お聞きしたい内容でしたら火影様が知っておられますよ。私の口からは言えません」

「そう……」

火影の名前を出され、紅はそれ以上の追及ができなくなってしまった。

「では、個人的なことを聞きます。あなたはなぜ医療忍者になろうとしているの？」

「後方支援が安全だからですよ。前で戦うよりは……ですが」

「理由はそれだけ？」

「後は自分のためですね。医療に関しては知っていて損はしません。忍者同士の争いの有無に関わらず、病気や怪我は絶えませんがね」
「あなたの実力があれば、他の人が傷つく前に助けることも可能ではないかしら？」

「いうほどの実力なんてありませんよ。ただ、足が速いだけです」

あの時の移動速度と、声を発するまで気配を感じさせない技量は、足が速いだけでは説明がつかないものだ。そのことで、自己紹介時に白と手合せを行ったことを紅は思い出した。たった半年ほどで、あれほどの成長をするはずがないからである。

「……自己紹介の時の実力は全力ではなかったのね」

「さあ、どうでしょう？ 逆にお聞きしたいですが、既に周知のことならいざ知らず、知られていないことを忍者が簡単に教えると思いますか？ もしくは自分の実力を晒すだけでも？」

「……分かったわ。これ以上は聞かないでおきます」

「そうしてください」

紅はあまり納得できていないようだったが、白はこれ以上自分の事について話すつもりは無かった。

「あなたはそのままヒナタの傍にいるのかしら？」

「ええ。数日あれば、治りそうですから、目覚めて落ち着けば退院ですね」

「ではヒナタの事は任せましたよ」

「言われずともそのつもりです」

その後、紅はそのまま病室を退出していった。

(この後、火影のところに行くか、それとも日向かな？ そう言えばキバも入院してるんだっけ……ほっといても治る怪我だからいいとして、リーはどうなったんだろう？)

しばらくすると、中忍クラスの医療忍者が慌てたようにして入ってくると、病室内を見回して白とヒナタしかいないことを確認すると、白へと慌てたように確認してきた。

「君！ ヒミト上忍を見かけなかったか!? この病室の子を治療したと聞いてきたんだが!」

「ヒミトさんがどうかしましたか?」

「緊急搬送されてきた子がいて、その子の治療を頼みたいんだが、どこを探してもいないんだ……知っていたら教えてくれ!」

余程急ぎなのだろう、医療忍者は必死の形相をして白へと詰め寄ってくる。

「見かけたら伝えておきます。どこの治療室ですか?」

「緊急用の第2治療室だ! 頼むよ!」

医療忍者は、言い終えるとすぐに部屋を出て行ってしまった。他の場所へと探しに行ったのだろうか。

（他の医療忍者は何をしてるんだ? 何のために1人でヒナタの治療をしたのか分からないじゃないか）

白はヒナタを影分身に任せると、ヒミトへと変化して治療室へと向かった。この時、白は悪態を付きながら影分身を使ったが、そこであることに思い至る。

白は今まで教えてもらっていた医療上忍——カブトの実力がこの病院の医療忍術の普段の実力だと思っていたが、実際の医療忍術の実力を確認したわけではない。上忍になってからはほとんどがヒミト主導で行っていたからである。

そしてその考えは正しく、既にこの病院内での医療忍術の実力は、白が飛び抜けていた。そのため、他の医療上忍から呼び出しがかかったのである。

治療室へと向かうその途中で、他にもヒミトを探していたのだろう。ヒミトを見かけると急いで駆け寄ってくる者がいた。

「すいません! ヒミト上忍ですよね? 第2治療室へ急いで来てください!」

「ええ。今向かっているところです」

「そんなに悠長にしてられないんです!」

その女性はヒミトの手を逃がさないとばかりに掴み、治療室へ向けて走り出した。ヒミトはあまりの女性の剣幕に流されるまま走り出

す。

第2治療室の扉の前では、ガイが立ってウロウロとしていた。

(やっぱり、中に入るのはリーか)

「先生!? リーが! リーが!」

「どいてください! 邪魔です!」

ヒミトの手を掴んでいた女性は、近付いてくるガイを壁の方へと押しのけると、ヒミトを治療室内へと連れて入っていった。

中の手術台に横たわっていたリーは麻酔をかけられ横たえられている。その傍では、掌仙術を使用している医療忍者がいたが、ただ、現状維持をしているだけだった。

「来ていただけましたか……」

「取り敢えず、そのまま現状維持をお願いします。その間に手術を行いますので」

「……分かりました」

かなりの衝撃及び圧迫を受けたのだろう。リーの身体は複雑骨折している上に、折れた骨が内臓へと刺さっていた。

開腹手術を終えると、周りにいた人たちから拍手が送られるが、ヒミトとしてはまだ終わっていなかった。この手術は一命を留めたに過ぎず、これから行う確認によって、全ての手術が終わるのである。

ヒミトはリーの身体へとチャクラを流すことで、異常箇所がないかを探すと、予想通り、背中にてチャクラの流れが悪くなっていた。

(これは……俺だけじゃ無理だな……)

白は確認を終えると、他の怪我をしている手足については、今いる医療忍者でも十分と判断して後を任せると、一緒に入ってきた女性に声を掛ける。

「すいませんが、この患者さんの担当の方が混乱してると思うので、先に出て伝えてもらえませんか? 一命は取り留めたのと、今後無理なことはさせないということ……」

「……分かりました」

女性に伝言を任せると、リーの治療が終わるまで、白は部屋の隅で治療の様子を窺っていた。

70 強化？

残りの手術は無事終了し、リーが病室へと移動されていく。

手術に立ち会った者たちは緊張から解放されたためなのか、それとも手術が無事終わったからなのか、皆疲れた顔をしつつも笑みを浮かべていた。

(下手に背中の中は言うべきじゃないな……みんな忍者としての活動は難しいことくらいは分かっているだろうし)

白は、余計な波風を立てぬよう何も言わないまま、治療室内の誰にも知られぬようそつとその場を後にし、ヒナタの元へと帰っていった。

数日後。ヒナタは無事目を覚まし、起き上がろうとして断念する。治療を受けたと言っても重傷な箇所だけであり、その他の箇所については自然治癒に任せているため、ヒナタが起き上がった際に痛みが発生したのだった。

「おはよう。いや、いまはお昼だからおそよう？ になるのかな？」

ヒナタは身体を動かさずに頭だけを白へと向ける。

「……白……試合はどうなったの？」

「ネジの勝ち」

淡々と言い放たれた言葉にも関わらず、ヒナタは当然のように受け止めていた。周囲を見渡せば分かる通りここは病室であり、身体を少しでも動かせば痛みがはしる。そのような状態で相手に勝つたとは到底思えるものではない。ただ、自分に言い聞かせるために確認しただけだった。

「……やっぱり負けちゃった……」

「ヒナタはどこまで記憶に残ってる？」

「……………」

白の言葉にヒナタはしばらく考え込んでしまった。試合の事を思い出しているのだろう、ヒナタの表情は徐々に暗くなっていく。

「……攻撃を……防いでいたのは……なんとなくだけ憶えてる。」

「……そこからは曖昧かな……」

「ヒナタは……今回の試合で何か思うことがある？」

「やっぱり、悔しいかな……手も足も出なかったし……まるで、白を相手にしてるみたいだった……」

「一応訂正しておくけど、ヒナタはネジに一撃入れてるよ」

「え？」

「憶えてないか……。柔拳ではないけど、普通の攻撃を入れてたよ。だから、手も足も出なかったというのは間違い（ネジが完全に油断してたけど）。というか俺を相手にしてるみたいって……」

「そうなんだ……」

自分の記憶にないためだろう、ヒナタは納得できないような顔をするものの、第三者——しかも白からの言葉により、ヒナタは自らの両手を、顔を顰めながらも持ち上げて見つめ始めた。

そんなヒナタを見つつ、白は話題を変えた。白の耳へと緊急呼び出しである鳥の声が聞こえてきたのである。

「さて、今後の事だけど、動けるくらいまで痛みが引いたら退院ね」

「……うん」

「ちよつと席を外すよ」

白は言い終えると、一旦部屋の外へと出て影分身の術を使い、ヒナタの護衛として残して火影のもとへと向かっていった。

緊急呼び出しと言うこともあり、火影の部屋へとノックもせずに素早く入り、白は開口一番で用件を尋ねる。

「緊急呼び出しと言うことは急ぎですか？」

「昨日ハヤテが何者かに殺られた」

「……ハヤテさんは監視をしていたはずですが、それが殺られたとなると……」

「1番に怪しいのはそうなる」

火影は怪しいという言い方をしているが、既に確信に近いものを持っているのか、いつもの顔ではなく、険しい顔つきをしていた。ハヤテが監視していたのは砂隠れの里である。それが殺られたとなる

と、疑われるのは真つ先に監視対象だ。それに加えて、砂隠れの里の不穏な動きがあると以前からも上がっており、それらの事を考慮すればぼぼ断定に近いものとなるだろう。証拠がないために砂隠れの里への追及ができないだけで……。

（砂隠れって思慮が足りなさすぎじゃないの？ わざわざ監視付けてるんだから、殺ったら怪しんでくれて言ってるようなもんでしょに……）

白は心の中で悪態をつきつつ、それを表情には出さずに火影へと呼び出しの用件を再度確認した。

「……俺が呼ばれた理由をお聞きしてもいいですか？」

「今、まともに動かせる暗部がお主しかおらん……ハヤテの代わりに監視をしてもらいたい」

「ハヤテさんを殺れる相手の監視ですか……」

「数人で監視しておるが、入った情報では砂の上忍を担当しておったようじゃが、その者は砂隠れに帰っておる。なので、お主の監視対象は今回の受験者の方となる」

「あの3人ですか……（問題は我愛羅だけなんだよなあ）」

白の言葉から、乗り気はしないことが、火影にも伝わっていたが、それでも現状で人が居ない状態では、監視の任に白を加えるしかなかった。

「……頼むぞ。それと、この後に上忍以上の者での集会を開く。場所はいつもの広間じゃ。それに参加してから監視となる」

「……分かりました。こちらからも1ついいですか？」

「なんじゃ？」

「中忍試験の場に居たので知ってるとは思いますが、そろそろ紅上忍の班にいるのは厳しいかと思えます」

「そのことか……あの後聞きに来たの……。今は少しでも人手が欲しいところじゃし……お主を外すしかあるまいて。……こちらから伝えておこう」

「お願いします。では先に行っておきます」

部屋を出る際の火影の顔は、哀愁漂うものへと変わっていた。

集合場所へと到着した時には、既に他の上忍や特別上忍が集まっております、部屋の一番前中央は空席で、相談役であるコハルとホムラがその両隣の席に座っていた。

白が部屋へと入り、少ししてから火影が現れ中央の席へと座る。そこから火影と白とのやり取りと同じことが続き、それに対して驚く者が多かった。それだけ、ハヤテの実力は皆の間では認められていたのだろう。

その後、他の隠れ里と大蛇丸との関連性を示唆することで、広間に居る者へと危機感を持たせることで、いつでも対処できるよう意識を植え付けて集会は解散となった。その終わりの際に、紅が火影に呼び止められたのを確認した白は、その場を後にして監視の任へと向かっていく。

監視対象である砂隠れの3人——我愛羅、テマリ、カンクロウは宿の一室にて休んでいた。

「お疲れ様です。監視対象の様子はどうですか？」

「ほとんど動きはないな」

「昨日の夜はどうでした？」

「……その件は報告済みだ。砂の上忍と我愛羅のみが外に出ている。ハヤテが後を追ったがな……」

「分かりました。では私はあちら側で監視します」

「ああ」

白は他の暗部とは別の場所へと行き、水分身を置いてその場を後にした。

(これからの動きはほとんどないはずだから、水分身でも十分でしょ)
白が向かった先はいつもネジたちが鍛錬を行っている場所だった。そこでは、ネジへとテンテンが色々な角度から武器を投擲しているのが見てとれる。この時、既に回天を会得しているようで、全方位からの武器攻撃を最後は一気に弾いていた。

ひと通り終わったところで、白は近付いていく。途中から気付いていたのだろう、ネジは白が近付いてきたことで顔を若干強張らせてい

るようだった。テンテンに至っては、武器攻撃を延々と続けたせいか、荒く息を吐きながら驚いたような顔をしている。

「……何か用か？」

「何か用がないときちやいけなかったのかな？」

「いや……そうは言わないが……」

ネジは白に対して後ろめたい気持ちがあるのだろう。バツが悪そうな顔をしていた。

「ふう……白ひさしぶりね」

「こんにちはテンテンさん」

テンテンへは笑み付きで返事をして白は本題へと入る前に確認する。

「聞きたいことがあるんだけど、……今ガイ上忍はリーさんに付きっ切りでこちらへは来てないで間違いない？」

「ああ……中忍試験の本選が終わるまでは、自主練をしておくように言われたな」

「他の上忍の人を付けるって言われたけど断ったのよね」

「と言うことはここにはガイ上忍は来ないんだね」

「それがどうかしたのか？」

白の含みのある言葉にテンテンは首を傾げ、ネジは怪訝な顔をして聞き返してきた。

「その前にもう一つ。ネジはヒナタの事をどう思う？」

「……もう、特に思うところはない」

「本当に？」

「……ああ。しかし、宗家に対する恨みが消えたわけではない」

「その辺はどうでもいいよ」

「宗家に対する考えを変えさせるために来たんじゃないのか？」

ネジは白が宗家に対する考え方を変えさせるために来たと思つたようで、白の考えが分からず困惑した表情へと変わった。テンテンに至っては、ネジの宗家に対する考えを知っているため、2人の話には参加せずにじっと傍観者に徹している。

「ネジにはヒナタを護ってもらおうよ。ついでにテンテンさんも鍛える

ね」

「護る?」

「えっ!? 鍛えるって……しかも私はついだ!?」

白の言葉にネジは疑問を、テンテンは驚きと突っ込みを返してきた。

「こつちにも事情があるから中忍試験の本選までだけど、それまでに最低でも中忍数名からヒナタを守った上で勝てるレベルにはなってもらおうよ」

「……それは絶対なのか?」

「っていうか私もなの?」

「ネジはもちろん断らないよね? テンテンさんにはそこまで求めてないです」

ネジは黙ったまま白を見つめ、テンテンに至っては呆れたような顔をしている。白のネジに対して言った言葉はもはや決定事項を伝えるに等しいものだった。白としては、これからの事を考えるとネジに強くなってもらわなくては困るので、拒否権を与えない言い方をしている。テンテンはそのとぼちちりを受けているに過ぎなかった。

「……なんか中途半端になげやりね……ところで、白はどれくらいの強さなの?」

「2人を相手にして勝てるくらいには強いですよ」

「……もう隠さないのか?」

「こちらにも事情があるって言ったばかりでしょ」

「……断ることもできなさそうだな」

「当たり前。テンテンさんはどうします?」

「さつきは強制みたいな言い方だったのにいきなりね。……まあ、私も強くなりたいし一緒にお願いするわ」

「分かりました。テンテンさんの実力がどれくらいなのか測らせてもらいますね」

「え? さつき勝てるって言わなかった?」

「ええ、勝てるんですが、どれくらい手加減すればいいのかを知りたいので」

「……手加減……」

手加減という言葉がテンテンの心に突き刺さったのか、肩をガツクリと下げて項垂れている。

「俺の方は「手加減しないよ」……」

「では始めますね」

テンテンに対して水分身を使い、テンテンへと攻撃していく。白としては、水分身を倒していくたびに人数を増やしていこうとしたが、人数が2人の時点でテンテンと実力が拮抗してしまっていた。水分身がすこし手加減している分を考えると、1人以上2人以下の実力となる。しかもテンテンの攻撃は……

「えーつと……なぜ武器でしか攻撃しないんです?」

「武器攻撃が得意だからに決まってるでしょ!」
「……………」

水分身2人の攻撃を躲しつつ、攻撃するので精一杯なのか、テンテンの返事は怒鳴りつけるようなものとなっていた。

「まあ、いいか……ではこっちも始めるよ」

「あれは影分身なのか?」

「違うよ。影分身よりも弱いけど必要チャクラ量の少ない水分身だよ」

「水分身?」

「そんなことはどうでもいいから、油断はしないでね。最悪意識不明になるから」

白は笑みを消すと無表情で印を結び、忍術による攻撃を開始した。

始めのうちは躲したり迎撃したりしていたが、段々と追い詰められると、回天を使い一気に消し飛ばし、白へと接近していく。白はその場を動かさずに立っていた。

「ここまできたら俺の範囲だ。柔拳法八卦六十四掌!」

ネジは白へと更に詰め寄り、人差し指と中指の2指を白の点穴へと向けて突き出してきた。

「八卦二掌! ……!?」

最初の違和感にネジは気付いたが、攻撃のチャンスを逃すまいと続

けていく。

「四掌！……八掌！……十六掌！……三十二掌！……六十四掌！！」

すべてを放ち終えたネジは驚愕の表情をしてその場に呆然と立ち尽くしていた。時間にして僅かだったにも関わらず、そこでネジのアゴへと衝撃がはしる。

「なっ……」

ネジは意識を保ったまま、その場に崩れ落ち動けずにいた。

「油断するなど言っただははずだよ……ネジ」

「どう……やって……」

「逆に聞きたいね。日向家においてしかも柔拳の相手をずつとしてたんだよ？ なんの対策も練らないわけがない。しかも、宗家にいたから調べることは色々できたし……ネジは指先で点穴を突こうとするよね？ はつきり言って相手が攻撃する方法が分かっていたら対処は楽なんだよ。両手に注意してればいいだけだからね。ネジみたいに、全身からチャクラをあれだけ放出できるわけじゃないけど、こっちは医療忍術を学んでいるから、両手からなら放出は可能なんだよ。だから身体の点穴に当てられる前にそこへ手を割り込ませただけ。……他にも方法はあるよ。昔みたいに圧倒的な速度での攻撃とかね……聞いている？」

「あ……ああ」

まだ平衡感覚が戻っていないのだろうネジへと訊ね、柔拳に対する種明かしをした。

「ついでに言うと、その額の呪印についても調べたんだ。後で処置をするけど、その呪印の機能を残したまま、宗家からの強制的な秘印も無効にするから気にしないでもいいよ。機能を残すのは、他の隠れ里に狙われる可能性があるから一応残しとくけどね」

ネジはやつと平衡感覚が戻ってきたのか、ゆっくりと立ち上がる。

「そんなことができるのはお前くらいじゃ……」

「思い込みはいけない。……立てるくらいには回復したみたいだし続きを始めよう。ちなみにさっきのは実力を見るためのものだから、今

からは徹底的にやるから気を付けて。怪我の心配はしなくていいよ。
ここに医療忍者がいるからね……」

「……………」

ネジは白の微笑むような顔の中で、目だけが笑っていないことを見て取り、絶望したような表情を白へと向けて立っていた。

71 病院？

中忍試験本選の前日。

「だいぶ対応できるようになってきたね。これなら明日も十分にいけるかな？（ヒナタを他の隠れ里から守って貰わないといけないし）」
「はあ……はあ……」

息も絶え絶えなネジに向かい、話しながらも白は追い討ちをかけていく。それに対してネジは、回天を幾度となく使用しているため、チャクラを大量に使用しており、今は身体能力だけで対応しているような状況だった。

明日の中忍試験本選では、砂隠れの里を監視していた組が、そのまま会場の警護に当たることになっている。他にも数名が加わるようになっていくが、人数は少ないと言っているだろう。

影分身を中忍試験中はヒナタに付ける予定ではあったが、今後の事を考えるとネジにヒナタの警護をしてもらわなければ難しいことになってくるため、白はネジを鍛えることにしたのだった。

ネジが動けなくなるまで追い込んでから休憩に入り、今度はテンテンの方へと白は視線を向けた。そこでは、水分身2人と拮抗している姿が見える。最初の頃と変わっていないように見えるが、手加減有りから手加減無しになっただけ進歩したといっているだろう。

（やっぱり1ヶ月だと普通はあれくらいの進歩が限界だよな）

白はテンテンからネジへと視線を移した。先ほどまで、寝そべって荒く息を吐いていたネジは、上半身を起こせるまでには回復したようで、座ったような状態のまま息を整えていた。そのような状態のネジへと白は近付いていく。

「最初に言った通り、後は軽く組手をして昼からは休みね。明日が本番なんだし」

「……分かった……」

「それと額の呪印に何か違和感はある？」

「今のところないな……しかし……本当に解除されているのか？」

「まあ、実際に使われてみないと分からないよね。……さて、十分喋れ

るみたいだし続きを始めよう」

「……………」

その後、息を整え終えたネジは立ち上がり、本日最後の相手へと取り組んでいった。

水分身にて監視していた砂隠れの3人はというと、どこから知ったのか、ここ数日ほど昼になると、一楽へと昼食をとりに来ていた。

特に会話らしい会話も無くただ淡々と食べては帰るを繰り返している。店のオヤジも空気を読んでか、特になにも言わずに注文された品を出していく。一緒に連れ出された2人——テマリとカンクロウは最初の方こそ喋ってはいたが、後になるにつれて全く喋らなくなってしまうていた。我愛羅が興味を持つことが珍しかったので、色々話し掛けていたが、全くの無反応なので、お喋りが無くなっていくのも仕方ないのかもしれないが……。

ただ、中忍試験本選の前日だけは、我愛羅が反応した。いつものように、最初だけテマリとカンクロウが少し話していた内容に、一楽の看板娘であるアヤメが、話しに乗っかっていったのである。傍から見れば2人が、我愛羅へと話し続ける姿が、あまりにも可哀想に見えたのだろう。そのため、話し相手になろうとカンクロウたちへと話し掛けたのだが、内容がいけなかった。

「あなた方はご兄弟ですか？」

「……………ああ」

(とうとう話し掛けてしまったか……)

話し掛けてくるとは思わなかったのだろう、テマリとカンクロウは最初に自分たちのこととは思わずに、返事が遅れてしまう。白としても、オヤジと一緒に話し掛けないようにしていたため、アヤメの様子を黙って見ていた。

「どこから来られたんですか？」

「砂隠れの里からに決まってるじゃん」

カンクロウは額当てを掴みながら、まるで馬鹿にしたかのように、アヤメに見せつけるようにして言い放った。アヤメはその額当てを

見ると納得顔で頷く。

「そのマークが砂隠れの里のマークなんですね。……初めて知りました」

「……………」

(……天然すぎる……。でも、一般人だと知らないものなのかな?)

アヤメの一言に絶句している2人を余所に、アヤメは更に話し掛ける。この時の内容が決定的だったのだろう、我愛羅が反応してしまった。

「ご兄弟共にしっかりとってますね。礼儀正しいですし、親御さんの教育が良かったのでしょね」

アヤメにとっては褒めたつもりだったのだろう。しかし、我愛羅にとっては違った。親は我愛羅を殺しに来るような奴という認識しかないのである。そのため、アヤメのこの言葉により我愛羅は頭を押さえると、何かを我慢するように苦しみだした。それを見て慌てたのはアヤメである。

「大丈夫ですか!?! すぐに病院に!」

(ヤバイ!?)

急な態度の変化に慌てたのはアヤメだけではなくテマリとカンクロウ、それに白もだ。白は、我愛羅へとおしぼりを持って近付こうとするアヤメの手を掴み引き寄せて、テマリとカンクロウへと言い放つ。

「今日のお勘定はいいから、その子をゆっくりと休める場所に連れて行くといい」

「ああ、すまない。……急ぐぞ」

「分かってる!」

焦るテマリとカンクロウに両脇を支えられながら我愛羅たちは店を出て行く。白はホツと息を吐きながら安心していったが、危険を感じとりそちらを振り向くと、オヤジが険しい顔をしながら近付いてきていた。

「覚悟はできてるんだろうな?」

「はっ?」

「歯あ喰いしばれ」

そう言い終えると、頭へと拳を振り下ろしてきた。白は、いきなりの事態についていけずに、そのままの状態であつていたが、おやじの次の言葉で理解した。

「いつまで抱きついてるつもりだ！ さつさと離れやがれ！」

そこで白は、顔を真っ赤にしているアヤメを抱きしめているという状態に気付き、慌てて掴んでいた手を離して、自らも距離を置く。

「すみません！ そんなつもりは微塵もなかったんですよ！ これは、その……緊急避難と言いますか……そう！ 事故なんです！ なので気にしないでください！」

白の言い訳が通じるわけも無く、アヤメは俯いてしまい、その後また白はオヤジに殴られるのだった。

店を出た我愛羅は、しばらく頭を押さえて歩いていたが、途中で両側から支えていた2人の手を振りほどいた。

「お前たちは先に帰っている」

「明日は大事な日なんだし、今日は帰ろう？」

「……そんなに時間はかからない」

「それなら俺たちが一緒にいてもいいだろ」

「目障りだ」

「……ああそうかい！ それじゃ先に帰らせてもらおうわ！」

「ちよつと！ カンクロウ！」

カンクロウはテマリの制止も聞き入れずに宿の方へと向けて行ってしまった。それでも、テマリは説得しようしたのだが、我愛羅は取りつく島もなかった。

「お前もだ」

「……わかった。ただし、明日決行なんだから余計なことほしないで」
「……………」

テマリは我愛羅へと忠告すると、カンクロウと同じく宿へ向けて戻っていった。それに伴い暗部の方も二手に分かれて監視を行う。白の水分身の方は我愛羅の担当となった。

我愛羅は宿へと戻っていく2人に見向きもせず、違う方向へと足を向ける。その向かった先というのが、木ノ葉病院だった。

監視対象の奇妙な行動に、もう1人の暗部から声が掛けられる。

「何かおかしくないか？　今まで宿でじっとしていたのに、今更病院に行くなんて……」

「ここに入院していて我愛羅と関係がありそうなのは……対戦したリーと音忍に負けたチョウジくらいのはずです。確率的にリーの方に会いに行くのでしようが……会わせるのは危険です。私怨が混ざっている可能性があります」

「……しかし、リーと言う子には、確かガイ上忍が付いていなかったか？」

「ついているはずですが、四六時中はさすがに無理でしょう……」

「そこを突かれるとまずいか……分かった。俺の方からガイ上忍へと伝えるから、お前はそのまま監視を継続してくれ。優先するのはリーと言う子の安全だ。……もし、監視対象が攻撃したらの話だな」

「分かりました」

我愛羅の後を追跡していると、イノとサクラが花を持って受付に佇んでいた。受付に人が居ないところを見るに、自ら記帳しているのだろう。我愛羅は2人を見つけると、後を追いつつ始めた。リーの病室が分からないためだろう。しかも、追跡に際して砂を使い壁に見立てているため、余程注意して見なければ気付けないほどのものだ。サクラは視線を感じたのか、何度か振り向いたが、気付かずにそのまま病室の方へと向かっている。

イノとサクラは、サスケの病室へと入るが、誰も居らず近くの看護師に確認しても逆に聞き返される始末で、諦めて近くの長椅子に座り2人で話し合っていた。

そこで、我愛羅は2人に見切りをつけたのか離れて行った時に、外から看護師の大きな声が聞こえてきた。

「何をしているんですか！　今すぐ止めなさい！　あなたは今動ける身体ではありません！」

「黙っていて下さい！……っ!?!」

腕立て伏せをしていたリーは、身体に無理をさせたことにより身体全体に痛みが発生し、その痛みに耐えきれずそのまま地面へと俯せに倒れ気絶してしまった。

「リーくん！」

「リーさん！」

看護師がリーへと駆け寄り状態を確認しているところへ、サクラたちが駆け寄っていく。看護師はサクラたちへとリーの事を頼み担架を取りに行ってしまった。

この場面で我愛羅が砂をゆつくりと動かし始める。その後すぐに、地震が響き渡った。この地震により砂の動きが一旦止まり、ゆつくりと我愛羅の元へと戻っていく。

そこで白本体が到着し、水分身と合流した。

(間に合ったか……というかあのカエルのお蔭だな)

地震の正体はガマブン太であり、ナルトを木ノ葉病院へと連れてきたところだった。その騒ぎの間に看護師たちはリーを担架に乗せて病室へと連れて行き、サクラはそれに付き添っていく。イノは、その場で別れると、チョウジのところへと向かったようだ。

水分身にはそのまま我愛羅の監視を継続させて、白は先にリーの部屋へと入っておく。少ししてリーを連れられた看護師たちが部屋へと入ってくると、リーをベッドへと寝かせ終えてそのまま退出していった。その場に残されたのはサクラのみである。

サクラは、手に持っていた水仙の花を花瓶に添えて、しばらくリーの様子を窺うと、悲しそうな表情をして帰っていった。

その後、サクラが十分に離れたところで、我愛羅が音も無く入ってきた。病室に入ると同時に砂での隠蔽を解除して、ベッドに寝ているリーへと近付いていく。途中何度か頭を押さえつつもゆつくりと近付き、リーの顔へと手を近付けていった。この時に、瓢箪が砂へと変わっていき、リーの周囲を包むようにして展開されていく。

そして、我愛羅の手がリーの頭に触れるというところで、その手がピタリと止まった。

止まった原因はシカマルの影真似の術である。そこへナルトが我

愛羅へと殴りかかることで、我愛羅がリーから少し離れた。

「てめー、いったいどういうつもりだつてばよー！」

「……おいナルト……影真似中は俺も一緒に動いちまうんだから気を付けろよな」

「あつ。わりいシカマル」

その後、我愛羅はリーを殺そうとしたことと、過去の話を持ち出していく。

（やっぱり、アヤメさんの親の話が発端だったか……）

途中でシカマルが駆け引きをしようとしたようだが、影真似の術はあくまで身体の自由を奪うだけのものである。そのため、既にチャクラを練り込んだのである瓢箪の砂を印なしで自在に操れる我愛羅には効果がなく、逆に煽る結果へとなってしまうていた。

（ガイ上忍早く来ないかな……来たか）

我愛羅が砂にて攻撃を仕掛けようとしたところで、ガイが病室内へと入ってきた。

「そこまでだ!!」

「!!!!」

いきなりの闖入者に3人は驚き、一斉に部屋の入口へと視線を向ける。

「ここは病室だ、静かにしている。それに、明日は本選だ。……どうしても闘いたければそこで闘えばいいだろう」

突然のことに驚きにより、ナルトは固まってしまい、シカマルは影真似の術は途切れさせ、我愛羅に至っては、ガイの顔を見たことで頭を押さえて苦悶の声を上げると、ゆっくり部屋の外へと向かっていった。そして、部屋を出る際に一旦立ち止まる。

「お前たちは必ず殺してやる。明日を楽しみにしている」

そう言い残すと我愛羅は部屋を出て行った。

「お前たちも戻るんだ。本選は明日だからな。……体調は万全にしておいた方がいいぞ！ 身体も心もな！」

ガイの言葉でナルトとシカマルは部屋を出て行った。その後、ガイはリーへと近付くと、その場で話し始める。

「居たのなら止めるべきではないのか？」

「攻撃が当たるようでしたら止めましたとも」

そこには、負傷したリーを抱えた白が立っていた。ベッドに居たのは変化の術を使った影分身だったのである。

「リーの件については感謝する」

「任務のついでです。もう襲われることはないと思いますが、ついてやってください。……それと、余計なお世話かもしれませんが、修業は控えるように言っておいてください。逆に身体の状態が悪くなります」

「……わかった」

白は影分身を解除して、リーをベッドへと寝かせてから病室を後にした。

72 中忍本選？

(とうとうこの日が来たか……)

中忍試験当日。夜明け前に、木の葉の里に居る火影付きの暗部は、火影の執務室へと集合していた。それというのも、木の葉の里の警備についての話である。

警備については、他の上忍や中忍なども行うことになっているが、木の葉の里全体に行き渡らせるには絶対数が足りなかった。そのため、所要所に配置していくしかなく、中忍試験会場に至っては上忍、中忍を除き暗部は8人でカバーしなければならない。

現在執務室に集合している暗部の数は20名、その内の約半数を1箇所に集中しているということは、それだけその場所が、重要であるということの証でもある。

残りの12名の内8名を木の葉の里の結界付近へ、他4名を里の内へと配置しており、白は中忍試験会場の配置……4名体制のイ班となっていた。

「……以上で配置の説明が終わる。……散！」

火影の説明が終わると、白以外の暗部は全員その場から立ち去っていった。火影は、配置に行くよう言ったにも関わらず、1人残った白に対して訝しむ。

「……言われた配置へ行け」

「……最後かもしれませんが言っておきたいことがあります」

「……最後……か……」

「はい」

火影は、白の目を見て、最後と言うのが自分の事だと認識した。白は火影から目を背けずに、周囲に誰もいないことを丹念に確認を行った。そして、誰もいないことを確認してから火影へと忠告を行う。

「だいぶ体力とか衰えてると思うけど、忍び装束で中忍試験会場へ行った方がいい。風影が偽物の可能性が高い。……トーナメントで、サスケの力を見るまでは動かないと思うけど、実際はどうなるかわからないし……。それと、情報としていってると思うけど、少し前

に歴代火影の墓が暴かれてる。あなたの気になっている人の開発していた術を考えると……完成したとみていいだろうね」

「……終わりか？」

「まあ、恨み言とか他にも色々あるんだけど、追い討ちをかけるみたいで、少しだけ後味悪いから止めとくよ」

「少しか……」

「少数を殺して多数を生かすやり方は、上に立つ者としては当然かもしれないけどさ、その少数に入ってしまったら最悪だよね」

「……………」

「まあ、悪いことばかりではなかったけどさ……時間もないし行くよ……あと、自分の決断には悔いのないようにね」

白は言い終えると、火影の返事を聞かずにその場を後にした。

中忍試験会場では、夜明け前にも関わらず、既に入り口前に行列ができている。見るからに一般人と分かる姿の者たちばかりだ。盛大なイベントの少ないこの世界では、中忍試験のような年2回行われる行事といえども、それを見ようと前日から並ぶ者も少なくはなかった。

そのような姿を尻目に白は会場内へと入っていった。夜明けが来るまでに、他に不審者がいないか確認し、夜明けとともに怪しい物が無いかの確認を行っていく。不審物などが無いことを確認した頃に、警備を担当する一般の忍者がやってきた。定刻になるまで一旦警備を上忍たちに任せて、白たちは会場周辺の警備に回っていく。

(ここでこうしても何もおきないんだよな……暇だ……)

特に何か起きるわけでもなく、時間になり会場への入口が開くと、我先にと人が入っていった。それに伴い、暗部である白たちも会場へと入っていく。

一般人用の場所は決まっており、そこを逃せば立ち見をする羽目になる。そのため、徹夜してまで並んで、場所取りに躍りになっているのだろう。しかし、白には理解できない考えだった。

(中忍試験なんて見てなにか楽しいのかな？ まだ、歓楽街で遊んだ

方が面白いと思うんだけど……)

一般人にとつて、忍者とは恐ろしいと思われる一方で、忍術を使つての闘いというものは、できない者たちからしてみると、格闘技などの観戦と同じような感覚だった。しかも、自分たちに害が及ばないのであれば、尚更近くで見たいと思うのが心情なのだろう。最前列を取るために猛ダツシユをしている人が見受けられる。

席取りが落ち着いて来た頃に外が騒がしくなってきた。時間的に大名たちが到着したのだろう。大名たちについていた暗部の者は、そのまま会場周辺の警備へと移つていき、一部はサスケの搜索へと向かつていった。

ここ数日、サスケをカカシに預けたところ、そのまま行方が分からなかったからである。搜索はしているが見つからないため、早朝の時点で行方が分からない場合は、暗部も搜索に加わることになっていた。

開始時間である8時手前頃になると、大名たちも席に着き始め、火影も会場内へと現れる。

(ヒナタに1人、一楽に1人、緊急時用に1人……ギリギリだな……) 今の白には長時間維持できる影分身は3人が限度だった。この後起こるであろうことを考えると、自分に近しい者を護るので精一杯の状態である。それに加えて、もしも自分の身に危険が迫った時のことを考えると、1人は安全な場所に待機する必要があった。

出場者であるメンバーが会場内の広場中央へと並び、開始まで待っているところへ、風影が現れた。火影はそれ見てにこやかに対応しており、2人で話し合っていたが、途中で火影の方が立ち上がり前へと進み出た。

「えー。皆様、この度は中忍試験にお集まりいただき、誠にありがとうございます。ございます!! これより予選を通過した者たちによる本選を始めたいと思います!! どうぞ最後までご覧ください!!」

火影の言葉に会場は盛大に沸き盛り上がっていく。それを火影は満足そうに見渡すと、自らの席へと戻つていった。

ルールは3次試験と同じで、何でもありの死または降参、そして審

判による判断に伴う中止である。

1 回戦の対戦者であるナルトとネジを除き、他の者たちは中央広場から出て行った。

2 人になり、会場が静かになってきたところで、審判からの合図がある。

「では……第1回戦始め!」

開始の合図後、少しの間、両者に動きは無かったが、突如ナルトの方から動き出した。ナルトは影分身の術を使い5人になり、その内の4体——影分身がネジへと襲いかかっていく。

ネジは、襲いかかってくる影分身を冷静に対処して、あつという間に撃退し構えをとったままナルトへと話し掛けていた。

「一応忠告しておく。大怪我を負う前に棄権をすることだ!」
「始まってすぐに棄権なんかするかかってんだ!」

ネジの言葉が頭に来たのだろう。ナルトは再び影分身を使用し、今度は20数名へと増えると、ネジへ向かっていく。そして、一斉にネジを取り囲み攻撃を開始した。

しばらく砂埃が舞い、視界が悪くなっていく。そして、晴れたそこに立っていたのはナルトだけだった。

「なんでも人数を増やせばいいというものではない」

1人離れていたナルトへ、背後から攻撃したネジが言い放った言葉で、ネジへと襲いかかっていたナルトたちは一斉に振り返った。

「1人離れているから本体かと思ったが……影分身だったか……なるほど、油断していたら攻撃を喰らったかもしれないな」

ネジからの攻撃を受けた1体は煙のように消え去っていく。

呆然と立ち尽くしているナルトたちのいる中心へとネジは素早く移動し、そこで回天を使用して一気にナルトたちを攻撃した。

攻撃を受けたナルトたちは弾き飛ばされ、本体を残し消えてしまふ。

そのナルト本体も弾き飛ばされたせいで座り込んだ状態になってしまっていた。それを好機と言わんばかりに、ネジは更に追撃していく。

「柔拳法八卦六十四掌……」

ナルトは危険を感じとり、立ち上がってその場から脱出しようとしたのだろう。しかし、立ち上がった瞬間には、ネジが間近まで迫っており、立ち上がったことで、逆に全身の点穴へと攻撃を喰らうことになった。

「ぐっ!!」

ナルトが倒れても、ネジは構えを崩すことなくナルトへ話し掛ける。

「全身64の点穴を突いた。……もうチャクラを練れまい……無駄なあがきは止めて棄権しろ。これ以上やっても結果は同じだ」

ネジにとつては相手に情けをかけているつもりなのだろう。しかし、逆にナルトにはその言葉が癪に障ったようだ。

「さつきから聞いてりや好き勝手言いやがって！ 無駄かどうかなんてお前が決めることじゃねえ！」

ナルトはそう言うと言わんとだがゆっくりと立ち上がる。

「点穴への攻撃をまともに受けて立つとは……な」

「俺は諦めが悪いんだ！」

ナルトは立ち上がってはいるが、脚は震えており立っているだけで精一杯であることが目に見えて分かる状態だった。強がりだということはネジも気付いていたのだろう。しかし、白眼は解いたが、構えを解くことなくナルトと対峙する。

「これ以上の攻撃はお前が死ぬ可能性もある。……それでもやるのか？」

「う……うるせえつてばよ！ こつちにはやる理由があんだよ！」

「……それは最初に言っていた火影とかいう話か……夢物語は寝ている間だけにしておけ」

「それだけじゃねえ！ 予選の時からそうだ！ 棄権しろ棄権しろと上から目線で人を馬鹿にしやがって！ そんなやつは俺がゆるさねー!!!」

「許さないからと言ってお前にどうこうできるとは思わないが……」

ネジはナルトへと近付き掌底を胸へと叩きつける。柔拳を使って

ないため、命に別状はないだろうが、十分な速度をもっていたため、ナルトには十分な攻撃だったようで、口から血を吐きながら倒れ込んだ。

「審判……これ以上は危険だと思うが？」

「……………」

審判は横たわるナルトを確認して、手を上げようとしたところで、その動きを止めた。

「に……にげんじゃ……ねえ……」

ナルトは立つことすら困難なのだろう。辛うじて上半身を起こし、胸に両手を当てて座り込んだままネジへと声を掛けてくる。

「おれは……にげねえ……自分の言葉は……曲げねえ……」

「現実を受け入れる。もう結果は決まっている」

「お前みたい……何でもかんでも決めつけるような奴に……負けるわけにはいかねえ……」

ナルトは徐々に回復してきたのだろう。座り込んだ状態からゆっくりとまた立ち上がってきた。

「何も知らない上に、実力もない奴が偉そうに言うのはやめろ……人は生まれながらにして、逃げられぬ運命を決定づけられることがある。……お前には分からないだろうがな」

「……わかるってばよ」

「……………」

ナルトの言葉にネジは険しい顔つきになり、殺気だつてナルトを睨みつけた。

この時に、会場へと来ていたヒナタの症状が急遽悪くなってくる。ネジの気配を感じ取って、無意識の時の状況であろうとも、あの3次試験の時のことを思い出したのだろうか。

（まだ完治してないのに来るから……）

白の影分身は、ヒナタを気絶させると抱き上げて席を離れ、観客席から遠ざかっていく。

向かった先は会場内にある治療室。そこにはベッドが数台設置しており、誰もいない状態だった。白はヒナタをゆっくりとベッドへと

寝かせる。その後、ヒナタの呼吸が安定するのを確認してから、周囲へと結界を張り本体と通じて試合を観戦する。こうすることで、影分身を解いた際の負荷を軽減することができるからだ。

試合はナルトが九尾の力を引き出したことよって、点穴を突いたことが無効になっていた。それに加えてナルトはチャクラを全身に纏いながら闘っている。ある意味、回天を使って闘っているネジのようなものだ。そのチャクラにより、一気に速度も上がったが、ネジはその速度に対応している。

ネジは攻撃をナルトに当てようとするが、ナルトの纏うチャクラにより弾かれ、逆もまた同じで、双方ともに遠距離からの攻撃では決定打がない。

痺れを切らしたナルトはネジが勝負を受けるように挑発すると、真正面から突撃した。

九尾のチャクラを纏ったナルトと、回天を使用したネジは、双方ともに弾かれて飛んでいく。

(ネジって九尾のチャクラと拮抗してるんだから結構すごいことだよな……)

ボロボロになりながらもネジは飛ばされた後も立ち上がり、構えをとるが、肩で激しく息をしている。九尾のチャクラを使用したナルトと、短い時間だが闘ったことで、かなり消耗しているのだろう。

そんなナルトの方はというと、飛ばされたまま地面に横たわっていた。ネジはゆっくりとナルトへと近付いていき、眉を顰めた瞬間、ネジの居た地面からナルトが拳を握りしめて飛び出してくる。

構えをとっていたのが功を奏したのか、辛うじて避けることができ、飛び上がってきたナルトの腹部へと、ネジは攻撃した。

「……白眼は……チャクラを見る……ことができる。……地中に居よう……同じことだ……」

この時点で終わりだと誰もが思ったが、ナルトへの攻撃が柔拳だったためだろう、ネジから離れることなくその場に膝をついただけに留まり、そこから最後とばかりにネジへとナルトは殴りかかった。しかし、その速度は先ほどとは見比べるべくもないほどに遅いものだ。

ネジはこれに対応しているが、ネジの方もそれまでの消耗が激しく、緩慢な動きとなっている。

2人の拳が交差した時、双方ともにクロスの形を取って相手の顔へと入り、そのまま2人とも倒れてしまった。

ナルトの方は既に意識は無いようで、ピクリとも動かずに俯せに倒れている。ネジの方は意識はあり、仰向けに倒れているが、脳震盪を起こしているのだろう。呻くものの立ち上がれずにいた。

審判は溜息を吐くと宣言する。

「第1回戦……双方ともに動けないため引き分け！」

このまま待つていればネジが先に回復したのだろうが、時間がかかることは間違いない。そのようなことに時間を割けるはずもなく、審判は判断を下して医療忍者を呼び、第2回戦の対戦者を呼び出した。(んく勝てると思っただけど、ネジはまだ甘いなあ……最初から意識を刈り取ればよかったのに)

少し待っていると、治療室にナルトが入ってきた。ネジも担架で運ばれたはずだが、一緒の部屋にしないのはそれなりの配慮があったのだろう。結界をヒナタの周囲だけに変更して、白はネジへと会いに部屋を出ていった。

73 計画始動？

ネジのいる部屋を医療忍者に尋ねて向かっていると、白の先にネジの部屋へと向かって歩いていている人物がいた。

(特に宗家との確執について語った訳じゃないのに、来るとは思わなかったな……)

その人物とは、日向ヒアシであった。その表情は思い詰めたようにしており、躊躇いがちながらも部屋へと向かっている。その後によく似たような形で、白もついていく。普通であればこのような形でついていけば気付くのだろうが、ヒアシにはそこまでの余裕はなかった。部屋の前までたどり着いたヒアシは、意を決したように部屋へと入っていく。白はその後には続かずに、部屋の外でヒアシが出てくるのを待っていた。

(ここに入っていったら、空気読めない奴確定だよな……)

しばらく経つとヒアシが出てきた。入ってきた時とは違い、その表情は晴れやかなものへと変わっている。長い間ネジに対して思うことがあったのだろう。一息ついたヒアシは、そのまま会場の方へと戻っていった。白はその姿を見送ってからネジの居る部屋へと入っていく。

「おつかれさま」

「……白か……」

ネジは白へと視線を向けるが、すぐさま窓の外へと視線を戻してしまった。特に機嫌が悪いわけではなく、その表情は満足げなものだ。

「……自分の父親の事について聞いた？」

「……ああ。……白は聞いていたのか？」

「まあ、そんな感じかな」

ネジの手元には、先ほどまでそれを見ていたのであろう広げられた巻物があった。

「宗家への憎しみとかは無くなった？」

「……そうだな……こうして遺言まで残してあるとは思わなかった……始めから欲しかったくらいだ……」

「その時に渡しても聞く耳持たなかったんじゃない？ 宗家つてだけで敵視してたくらいだし」

「……そうかもな」

ネジは外へと向けていた視線を巻物へと戻して呟く。

「話が変わるけど、ネジはこれから戦闘があっても十分に動ける？」

「……動けると思うが……何かあるのか？」

白の不穏当な言葉にネジは訝しみ質問してきた。

「ネジにはヒナタを護って欲しくてね」

「……白が護ればいいんじゃないか。その方が確実だろう」

「ちよつと任務で忙しくなりそうだから、こつちに余裕があんまりないんだよね」

「任務？」

「そう。……と言うわけで早速移動するよ」

ネジは困惑しつつも、広げられた巻物を片付けると、白に手を掴まれて連れて行かれる。

ヒナタのいる部屋へとたどり着いた先には、既にナルトの姿は無く、ヒナタだけがベッドの上に寝ている状態だった。

白はヒナタへと近付き、結界に異常がないかを確認する。

「これなら今日1日くらいもつかないかな……」

「どういうことか説明が欲しいところなんだが？」

ネジは未だに困惑したまま、ヒナタへと目をやり、ついで白へと戻して聞いただしてきた。

「ああ、誘拐されないように、ヒナタの周囲に結界を張ってあるんだよ」

「そつちじゃない。俺がヒナタ様を護る理由についてだ」

「それはさつき説明したじゃないか」

「納得できる説明が欲しいという意味だ」

ネジは自分がヒナタを護ることについて納得できていなかった。それはそうだろう、自分よりも更に強い者がついているのだから。それに加えて任務と言われても、下忍である自分たちに対して、この時期——ましてや中忍試験の最中に任務などあり得ないという思い

があつたからだ。

「なんて言えばネジは納得するの？」

「それは……」

ネジは自分が言った言葉が、白を信用していないという内容であることに気付き、バツが悪そうに言い淀んでしまった。

「今日と言う日が終わったら、ヒナタを屋敷の方に連れて行って」

「……？」

「ん？ ……ああ、知らなかった？ 今ヒナタと一緒に住んでるんだよ。……それで、ネジに頼みたいのは、ヒアシ様とヒナタの仲？ と言うか関係を取りもつことかな。……こればかりはこちらではどうしようもなくてね」

「それで俺か……」

「後のことを考えたら、ネジにしか頼めないでしょ」

「……任務と言うのは、戦闘行為に関係するの？」

「そうだね。最悪居なくなると思っておいて」

「……っ!？」

ネジは、白が何でもないことのように言ったため、理解するのが少し遅れたが、その内容を理解して絶句してしまう。

「この結界は時間が経てば効力を失うけど、それ以外で解除するのなら、この札を持ってベッドの裏の札を剥がせばいいだけだから。……じゃあ頼んだよ」

絶句したまま固まっているネジの手へと、札と共に手紙を握らせて白は部屋を出て行く。

「おい！ 白！」

白が部屋を出た後すぐに硬直から復帰したネジは、大声で白を呼び止めながらすぐさま部屋を出るが、そこに白の姿はどこにもなかった。

白とネジの会話が終わりを迎えた頃に試合は次々と移っていた。その間に行われた試合は、カンクロウのギブアップによりシノの不戦勝。テマリとシカマルの試合は、シカマルのギブアップによりテマリ

の勝利で終了している。

次の試合は我愛羅とサスケだ。シカマルの試合終了後にサスケとカカシが、広場中央に現れたことにより、流れていた我愛羅とサスケの試合が行われることになった。本来であれば遅れたことによる文句が出ようもののだが、大名や忍者などからは登場の演出や対戦者の組み合わせ内容などから、待っていたと言わんばかりの歓声が会場内に響き渡っている。

(そろそろか……)

白が我愛羅とサスケの試合を観戦している時に、1人の暗部が近づき、すれ違いざまに紙片を渡してくる。

渡された紙片の内容に目を通した白は、すぐさま紙片を細切れにし会場内へと散らせていく。

(どこでも雑用なのは変わりないけど、自由度はこっちの方が上か……)

試合は佳境に入り、我愛羅の絶対防御に対してサスケが千鳥を放ったところだった。

絶対防御であるはずの砂の球体をサスケの千鳥は貫く。その後すぐに、異変は起きた。サスケがいきなり苦しみだし、再度千鳥を放って離れる際に、サスケの腕を捕まえるような形で、球体から腕のようなものが伸びてきたのである。

属性の関係のためだろう、千鳥を放っていたサスケの腕を捕らえようとしていた腕は、あっさりと引き剥がされると、球体の方へ吸い込まれるように戻っていった。

その腕が戻った直後、球体の方から数瞬の間殺気が溢れると、その後球体は崩れ、中から負傷した肩を押さえ俯いた姿勢でいる我愛羅が現れた。

崩れた球体の砂は、少しずつ瓢箪の形へと戻っていくが、全ては戻らずに我愛羅の周囲へと散らばったままになっている。我愛羅自体もかなり消耗しており、荒く息を吐いていた。

その時に、鳥の羽が舞い散る。それは会場全体に突如として現れ、観客席にいた者たちを睡眠へと誘っていく。

これに気付いた者たちは咄嗟に印を組んで幻術返しを行ったが、木の葉の里の上忍と一部の中忍、下忍を除き全員が寝てしまう。

そして、ここからすべてが一気に動き出した。

幻術が掛けられた瞬間に、笛の音が響き、それを合図に暗部は火影の元へとすぐさま集まっていく。この時に、里の方から轟音が響いてくるが、暗部の誰もがそちらには見向きもせず、煙にて視界の悪くなった火影の元へと急いでいる。

「イ班は火影様！　口班は大名たちを守れ！」

ある程度集まったところで暗部のまとめ役から指示があり、口班は下へと戻っていく。イ班である白たちは、火影たちの居る煙の前で待機していたが、その煙の中から人影が更にも上へと上がっていった。

後を追うようにして、4つの人影がそれに続く。

「追え！」

すぐさま煙から出て行った影を暗部のイ班にて追って行くが、先に行った4つの人影が、四紫炎陣を完成させたことにより、その結界に触れてしまった暗部1名は、その結界の効果により身体を炎に包まれ、その1人は一瞬にして燃え尽きて消えてしまった。

「くっ！　結界か……」

「中に入る術者をなんとかすれば入れるんだが……」

「火影様に1人でも倒してもらおうしかないな」

「……こちらからはどうしようもない……」

「それにしても、ヒミトが死ぬとはな……」

「それはあいつの不注意だ」

「それはそうだが……」

会場内や木の葉の里が騒がしくなっている最中、白の本体はカブトと共に火影の家へと向かっている。四紫炎陣により燃え尽きたのは白の分身だった。

「本当にあるんでしょうね？」

「確証はないけど、捨てずに禁書扱いであるはずだよ」

「……どうやら向こうは順調のようです。四紫炎陣が組まれました」

「それは何よりだ」

特に表情の変化も無く、当たり前前の結果としてしかカブトはみていなかった。

火影の家に家族は誰もいない。会場へと全員で見に行ったのだろう。もし居たとしてもなにも出来なかっただろうが……。

家の中の禁書が置いてあると思わしき部屋を見つけたはいいが、結界が張ってあり、白はその部屋の前でカブトのしていることを眺めていた。

「前にナルトが入ったせいですかね。結界がしてあるのって」

「いや……どうも術者本人がいない時に発動する類のものようだ」

「術者本人と言うと……火影ですか……」

部屋に張ってある結界は、相当強固なものようで、カブトは話しながらではあるが、こちらを見ずに結界の解除に集中していた。

「時間があれば解除は可能だよ。本来ならそんな時間は無いのだろうけどね。今はみんな出払ってるからこちらへと回す余裕はない。そんな今だからこそできる……つと解除した。君は左から順に見て行ってくれ。僕は右から順に見ていこう」

待つこと約20分ほどでカブトは結界の解除を完了させた。これだけの時間があれば、木の葉の里を囲む壁からでも十分に間に合うだろう。

「全部持っていけばよくありませんか？」

「これだけの物量を持っていくのはさすがに無理だ。それにここを出た後に再度結界を張るのだから、必要な物以外置いておいた方が、何を持っていったのか分かりにくいだろう？　むしろ気付かないかもしれない」

「まあ、それでいいならいいんですけどね」

「あまり時間は掛けられないんだ。急ごう」

「分かりました」

2人は、以前大蛇丸が木の葉の里にいた時の研究資料を探しに来ていた。大蛇丸は火影に不老不死の研究段階で見つかり、そのまま戦闘になったことで、その時の資料を木の葉の里に置いてきてしまってい

た。今回は、木の葉崩しを含めて、その資料の奪還もカブトに与えられた任務に含まれている。

2人が火影の家の中を探している頃、影分身はと言うと……

1人目は一楽のおやじたちと共に避難しており、2人目は誰もいない演習場で待機していた。

そして、3人目はいまだ中忍試験の会場にいた。四紫炎陣にて一瞬にして燃え尽きたのは水分身だったのである。理由は、ヒナタの誘拐を阻止するためであり、会場内へと残り、雲隠れの忍者の様子を窺っていた。その雲隠れの忍者も、この騒動で動き出した。

混戦が繰り広げられている中、雲隠れの忍者は白眼を狙うために、近付いていく。ヒアシは騒動が起きてすぐに場を離れて戦いに行ってしまうていた。

ただ、白の予定とは違った結果になってしまう。雲隠れの忍者が攫って行ったのはヒナタではなくハナビだったのである。

ヒナタの部屋に入ったところを、ネジと協同して仕留めようと思っていた白にとっては、雲隠れの忍者の行動は予想外な出来事だった。雲隠れの忍者は、ハナビを攫った後素早く移動し、会場の外へと出て行く。

(えーつと……攫われるのって……ヒナタじゃなかったの？ ……折角守りを固めたのに意味ない……)

白はハナビが攫われた場所へと近付くと、雲隠れの忍者に倒された日向家の者から声を掛けられた。

「すまないが……ハナビ様を……頼む……」

そう言い終えると、日向家の者はそのまま倒れてしまう。

(まあ、イレギュラーは何かしらあるよね……)

白は、雲隠れの忍者の後を追ってその場を後にした。

74 木の葉崩し？

雲隠れの忍び2人は、木から木へと飛び渡りながら進んでいく。その表情からは笑みが絶えない。それはそうだろう過去に忍び頭が失敗した件を、中忍である自分たちが達成できたのだから。しかも、肝心の奪ってきた場所は、現在砂隠れの忍びたちにより混乱している。そのため、追手がかかったとしても、その時には遅すぎるという認識でいた。

雲隠れの忍びの1人の脇には、日向ハナビがぐったりとした状態で抱えられている。その状態には特に外傷は無く、ただ気絶しているだけだということが分かった。

「まさか、こんなことが起こるとはな。来てみて正解だった」

「あれだけ来るのを嫌がっておいて、今更何を言う」

「そんな昔の事は忘れたな」

「……まあいい。追手がいつ来るか分からんから、一応罨を張っておくぞ」

「俺はこの先の河原で待つてる」

「分かった」

2人は別れ、1人はそのまま先へと進み、もう1人は罨を張るためにその場に残った。

既に追跡者の視認範囲に入っているとも知らずに……。

(さて、丁度二手に別れてくれたことだしさっさと終わらせよう……)

—— 氷遁秘術・魔鏡氷晶 ——

白がクナイを片手に持つと、白から見て雲隠れの忍びの反対側に氷の鏡ができていく。雲隠れの忍びは、罨を張ろうとした矢先に、すぐ傍にできた鏡に驚愕し、すぐさまそこから離れようと、鏡を向いて後ろに跳び退った。

それが、その忍びの最後であり、地面へと着地した時には首を掻き斬られた状態で、声すらまともに出せぬまま、着地と同時にそのまま崩れ落ちていく。

白は、その倒れ伏した死体に見向きもせず、先に向かったもう1

人の忍びの後を追った。

すぐに追ってくるはずがないという油断があつたのだろう。もう1人の雲隠れの忍びは、特に急いだ様子も無く移動していく。そして、河原まで到着したところで、一旦脇に抱えたハナビを降ろすと、忍び装束のポケットから縄を取り出した。

そして、その取り出した縄をハナビに巻きつけようとしたところで、雲隠れの忍びの動きが止まる。

原因は2つ。

その内の1つは首に突き刺さった千本。そして、もう1つは胸に触れられた掌打だった。

首の千本は白が放ったものであり、胸の方の掌打はハナビである。ハナビは、途中で意識を取り戻して隙を窺っていたのだろう。一旦離れたところを狙ったが、それが白と同じタイミングでの攻撃となつた。

ハナビは上半身を起こしたが、意識がまだ朦朧としているのか、ふらふらと頭を振っている。

白はゆつくりとハナビに近付いていく。頭を振ったことで意識を覚醒させたハナビは、急に顔面蒼白になりながら、すぐに周囲の状況を確認しだした。自らが誘拐されたことを思い出したのだろう。雲隠れの忍びと、ゆつくりと近付いてくる白を見て、その表情も幾分ましになっていった。

「助けていただきありがとうございます」

「まあ、手助けはいらなかったようだし、それに知らない間柄ではないからね」

「?」

白は、未だに木の葉の暗部の面を付けたままであることに気付き苦笑する。ハナビは暗部の面をしているのが、白であると気付いていないのだろう、不思議そうな顔をして白を見詰めている。そのことに白は気付いて苦笑したのだった。

「もう大丈夫かい?」

「……はい」

ハナビには特に外傷はないようだったが、その表情は冴えないものへと変わっていった。

「そろそろ戻ろう。日向の人も心配しているはずだ」

「……いえ……してないでしょう」

「？」

今度は白が、ハナビの言葉に疑問を覚えることとなった。白は、日向家の者に頼まれて来たのである。それにも関わらず、攫われた本人は心配してないと言うのだから、白の疑問は当然だった。

「取り敢えず戻らないか？」

「戻ったところで、私の居場所はありません……」

「……何故？」

「……日向家は強いものが代々後を継いでいきます。……そして、中忍試験にてはつきりと父上は言われました。……日向で一番才能があるのは、ネジ兄上であると……」

ハナビは宗家と分家の関係を、日々鍛練ばかり行っていたせいで、碌に聞かされていないのだろう。宗家を継ぐのがネジであると勘違いしていた。

（ハナビの勘違いだから、戻ればなんとかなるだろう）

白がハナビを里へと戻そうと考え、言葉を発する前に、ハナビから提案してきた。

「そうです！ 私を暗部に入れていただけませんか？」

「はっ？」

ハナビの突然の言葉に、理解が追いつかなかった白は、しばし啞然としてしまう。日向家の人間がいきなり暗部に入れてくれと言われ、白にはそこに行きついた理由が分からなかった。

「駄目でしょうか……？」

「駄目以前に、俺が決めることじゃない。それにこの後、ある場所に長期間の任務で行かねばならないから、無理だな」

「その後であれば紹介くらいはしていただけということでしょうか？」

「暗部に入りたければ、親の許可を取った方が早いだろう（許可は下り

ないだろうけど)」

「……では、その任務に同行してもいいでしょうか？」

この時、ハナビは日向家には自分の居場所は無いと思いついでおり、他に自分の居場所を作ろうと必死だった。姉であるヒナタが、ハナビに負けたことで、日向家を出たように見えたことも、その思いに拍車をかけていたのである。

白に着いてくることに関して再度確認を行う。

「しばらく戻って来れない上に、死ぬかもしれないが……それでも同行すると？」

「はい。……忍びの世界はどちらにしても、死と隣り合わせです。それが早いか遅いかの違いでしかありません」

「……まあ、覚悟が決まってるならいいんだけどね」

白はここで、暗部の面を取り外し素顔を晒す。

「あなたは……」

「一応久しぶりってことになるのかな？ 日向家で会うことなんてほとんどなかったけどね」

「お久しぶりです。……まさかあなたが暗部に入っているとは思いませんでした……」

「色々あってね。……話は移動しながら行おう。っとその前に処理しておかないと」

「えっ？」

白は、暗部の面を再度取り付けてから、仮死状態に陥っている雲隠れの忍びに止めを刺して川へと流した。

「雲隠れの里との交渉などには使わないのですか？」

「こんな下っ端を交渉に使えるわけがない。逆に、向こうの都合がいのように言ってくるだけだ。昔の話を聞いたことはない？」

「そうなのですか……昔の話は聞いたことがあります」

「そう……まあその内話してあげるよ。……ではいくよ」

「はい」

白の影分身はハナビと共に本体と合流するべく移動を開始した。

火影の家にて、ひと通り物色をし終えた白とカブトは、部屋を出て結界の修復を行っていた。

「結界の再度張り直しではなく修復できるとはすごいですね」

「完全とは言い難いけどね……火影以外には、ほぼ分からないだろうね」

「火影が生きていたらどうするんです？」

「それは無い。四紫炎陣が完成した時点で、火影が死ぬことは確定してるんだよ」

「そんなものですかね」

自信満々に答えるカブトに対して、白は素気なく返事をする。少しだけだが、白が関わることでイレギュラー的なことも起こっているのだ、火影が生き残る可能性もゼロではない。ただ、白としては、火影に善戦してもらい、大蛇丸の術を確実に封じて欲しいがために、火影へと忠告したに過ぎなかった。

「……それよりも、君の方が気になるね。僕が誘っておいて言うのは何だけど、あつさりと木の葉の里を捨てられるなんてね」

「こつちのことを調べてあるのではないんですか？ 元々この里の生まれではないですよ？」

「知ってるよ。だからこそ、医療を教えている時に声を掛けてみたんだ。……暗部の時の姿を見たときは、どこかの密偵とも思ったけどね」

「密偵ではありませんよ。……下忍になるくらいまでは、木の葉の里が安全だと思っただから来たんです。それがいつの間やら強制的に暗部入りですからね……こつちも思うところは色々ありますよ……」

「……君の事情はある程度調べたけど、利用され続けているみたいだね。そして、それは今も続いている」

「……まあ、カブトさんの過去よりはマシかもしれません。自分の意思で親を殺して、ここに来たわけですし……」

白は続く言葉を飲み込み押し黙った。カブトが作業を一時中断して、白をじつと見詰めて、先ほどまでとは違い冷淡な声へと変えて問

いただきしてきたからだ。

「どこで知った？」

「(やばっ!)……暗部に居たんですから……ダンゾウがしたことを調べること可能ですよ」

カブトはしばらく白を見ていたが、納得したのか結界を張る作業へと戻っていく。白は、静まり返った空気を変えるべく、違う話題を出す。

「結界の修復はあとどれくらいで終わりそうですか？」

「もうすぐ終わる……これで終わりだ」

部屋全体に、白から見て来た当初と同じ結界が展開されていた。

「違いが全く判りませんよ」

「始めに掛かっていたものより強度が弱い。この辺りはさすが火影と
言うべきだろうね」

「では予定通り、向かいますが、集めた物はどうしましょう？」

「集めるのに時間はかかるだろうから……そうだね、この巻物を渡しておこう」

白はカブトから巻物を幾つか手渡され、それを懐へと仕舞い込んだ。

「収集用の巻物と連絡用の巻物だ。連絡用の巻物を使用した時には蛇が出てくる。その蛇に収集用の巻物、もしくは情報を渡してくれれば
いい」

「分かりました。では行きます」

「ああ。僕も会場の方に戻るけど……本当にできるんだろうね？」

「ええ。それに1人でやるわけではありませんから」

「僕たちの情報を漏らさずにできるのかい？」

「もちろんですよ。そちらも、情報の漏えいはしないでくださいね。
特にあなたの上の方には」

「分かってるよ」

その後、2人は言葉を交わすことなく火影の家から別々の方向へと立ち去っていった。

本体である白が、集合場所である演習場へとたどり着くと、本来居るはずのない人物が居ること、人数が合わなかった。

「はい。みんな集合！」

本体である白は、影分身3人を集めて輪を作り、ハナビから少し離れて話し合いを始めた。

「なぜその子連れてきたの？」

「いや、着いてくるって言うからなんだが……」

「俺の事を木の葉の里の連中に知られたらまずいでしょ」

「だから、このまま連れて行くんだって」

「技量はどれくらいなんだ？ 場合によってはすぐ死んでしまうぞ？」

「ヒナタ以上ネジ未満らしい。才能はネジ程ではないにしろあるはずだから、鍛えればそこそこ強くなるんじゃないか？」

「白眼ってだけで狙われる要素あるのに連れて行くか？」

「暗部の面を被らせるとか、変化の術使用るとか……色々方法はあるだろ」

白たちの議論がなかなか進まない中、1人が重大なことを言い放った。

「なあ……影分身解いて1人で決めた方がよくないか？」

「!!!」

その1人の言葉によって、すぐさま影分身を解いたことで、今までの経緯を含めて本体である白に情報が入ってくる。

（誘拐されてそのまま着いてきたのか……ちよつと待てよ……ハナビを連れて行けば、日向家に対する意趣返しにもなるし、ハナビが居なくなる、必然的にヒナタが大事されるわけで……）

「今のは一体なんですか……？」

「ただの影分身だよ」

「影分身？」

「それは追々説明するとして、取り敢えず移動しよう」

「はい」

白はハナビを連れて行くことを決め、木の葉の里を出て行く。これ

からある人物に会いに行くために……。

木の葉崩し後

75 再会？

一旦川を越えてから薬品で臭いを消し、進路を南東にとった。

木の葉の里をどンドン離れて行く最中、白はハナビへと問い質す。

「ハナビは今日の事をどこまで覚えてる？」

「今日の事……ですか？ ……サスケさんと砂隠れの忍びが、闘っている途中から意識が途切れて……その後、誰かに運ばれていたのは覚えていますが、意識を取り戻したところで、不覚にも雲隠れの忍びに後れをとって、気絶させられてしまいました……」

ハナビは落ち込んだ表情を浮かべると、少し俯いてしまった。

ハナビの言った内容から、里で今何が起きているのか知らないことがわかる。しかし、白は構わずに続けた。

「居場所がないって事だったけど、なんでそう思った？」

「……一緒にいたあなたであれば、分かるはずです……姉上は私に負けてから、父上との鍛練を外されました。そこまでは、理解できます。しかし、下忍になった時、父上は姉上のことを出来損ないと言った上に、日向家には要らないと断言されたのです……」

「……それで？」

「今日父上は……ネジ兄上に会いに行かれました。最初は暗い表情でしたが、戻ってこられた時には、一変して晴れやかなものへと変わっていたのです。……理由をお訊きしても、教えていただけませんでした……」

「つまり、ヒナタの代わりにハナビが跡目として教育されてたけど、今度はハナビの代わりにネジが教育を受けることになるってことを言いたいのかな？」

「はい……。白さんが出られた後ですが、父上の……姉上への待遇はいない者と同じような扱いでした……おそらく、それが原因で家を出られたのだと思います。……そして……今度は私の番です……」

今までの事を思い浮かべながら話しているのだろう、ハナビの言葉

は震えていた。

2人はしばらく沈黙したまま進んでいき、十分に里から離れたところで一旦立ち止まった。

「ここまで来れば取り敢えず大丈夫かな」

「どうかしたのですか？」

「問題を解決しておこうと思っただけ」

「問題……ですか？」

「そう、問題。ハナビは自分が白眼持ちであることは当然認識できてるよね？」

「それはもちろんです」

「白眼や写輪眼といった眠っているのは、他の里から狙われやすいつて言うのも分かる？」

「はい……今日の事で実感させられました……」

ハナビはまた過去を振り返り、簡単に攫われてしまった自分の情けなさに溜息を漏らしていた。

「と言うわけで、人相を変えさせてもらおうよ。どういう風な容貌がいいとか希望ある？」

「えーっと……」

白からのいきなりの宣言にハナビは戸惑っていた。そのことを分かっただけでも、白は言葉を続ける。

「希望がなければこちらで勝手に決めるけどいい？ ……ああ！ 整形みたいな顔に少し傷が付くことを考えてるのかな？ それなら、今回するのは、あくまで面のように張り付けるようなものだから、気にしないでいいよ。あまり違和感も感じないようにするし……。後は服装くらいか……」

「……そのようなことができるのですか？」

「できるよ」

「……暗部と言うのは色々できるのでですね……」

未だに色々勘違いしたままのハナビに対して、白は催促していき、

「それで希望はある？」

「いえ……特にはないです」

「そう……。じゃあこっちで決めるよ」

そう言い終えると、白は巻物から道具を取り出し、ハナビの顔を変えていく。

(カブトはこれを一瞬でやってのけるんだよなあ……)

数分掛けてハナビの顔を変え終えて、その出来上がりを確認する。

「なかなかの出来栄えかな？ 後はこれをつけてね」

「これは……サングラス……ですか？」

ハナビは白からサングラスを受け取り装着した。

「普通の眼鏡もあるんだけど、それだと白眼を隠せないから、そのためのサングラス。……連絡用にしか使ってなかったけど、こんなところで役に立つとは思わなかったな」

「連絡用ですか？」

「ああ、こっちの話。後、時間ができた時にでもコンタクトレンズを作ってみるから、今はそれで我慢しておいて」

「コンタクトレンズが何なのか分かりませんが……よろしくお願いします」

顔の変装を終えたところで、白自身は変化の術を使い、再度南東へと向けて走っていく。

夕刻頃になり、ハナビの体力も限界に近付いてきたところで宿をとった。

「やっとな波の国か……」

「目的地はどこなのでしょう？」

「波の国のある島。先に連絡を入れておいたほうがいいか……。」

――影分身の術――

白が影分身を先に向かわせて座り直すと、机を挟んで対面に座るハナビが聞いてきた。

「その影分身の術についてお聞きしてもいいですか？」

「そう言えば、後で話すって言ったっけ……」

「はいー」

ハナビは声高に返事をする、先ほどまで疲れていたとは思えない

勢いで、白へと詰め寄ってきた。

「アカデミーで習う分身には実体がないけど、影分身には実体がある。印の組み方はさっきの通り。後はチャクラの調整に気を使えば行けると思うけど、チャクラを結構消費するから今は使わない方がいいだろうね」

「すいません……印が早くて分かりにくかったので……その、ゆつくりでお願いします……」

ハナビは一旦椅子へと戻ると、申し訳なさそうに言ってきた。

「別には休むだけだからいいけど。……それ以前に服か……取り敢えず、身体はこのタオルで拭いて、寝る時はぶかぶかだろうけど服を貸すよ。明日は先に服を買おう」

「ご迷惑をお掛けします……」

「まあ、ついてくると言われた時から想定内だから、別に気にしないでもいいよ……ちなみに言っておくけど、俺は男だから勘違いしないように」

「はい」

ハナビの率直な返事に対して逆に白の方が戸惑ってしまった。今までの反応から、ハナビも驚くと思ってしまったからだ。そのため、ハナビに聞いてしまう。

「俺が男だつて言われておかしいと思わないの？」

「特に思いませんが……男だと何か問題でもあるのですか？」

「……ないね……」

ハナビには男女の違いでの考え方や、羞恥心といったものがないことをこの時に白は気付かされた。そのことにより、影分身より先に、そちらを教えて理解させることに費やすことになってしまった。

翌日になり、早朝と共に宿で朝飯を食べてから目的地へ向けて2人は出発する。

結局、昨日の夜の話については、半分理解はしたが、残り半分は理解していないというものになっていた。元々が戦うに当たって、有利になるか不利になるかという考え方を植え付けられて育てられたた

めだろう。男女の身体の構造の違いは理解できても、羞恥心などの心情については理解できないということだった。

白は近くの街に到着すると、早速ハナビの服を購入しに店へと入っていく。それに続く形でハナビも店へと入っていった。

「自分に合いそうな服を持ってきて、それを買うから」

「合いそうな服……ですか」

「そそ。5着くらい選らんできて。誰かさん曰く、俺にセンスは無いらしいし……」

「……分かりました」

白のトーンダウンした言葉を気付くことなく、ハナビは服を選び始める。

しかし、合うという言葉の意味をはき違えていることに、白はハナビが服を持ってきた時に気が付いた。

（いや……さすがにこれは無い……それ以前に、秋なのにまだ夏物を置いているとかおかしいだろ）

ハナビが持ってきた物は、ハナビの体型に合うものであり、容姿や季節に合うものではなかった。

「残念ながら、ハナビのセンスに関しては俺と同等かそれ以下であることが判明してしまった」

「合う服を持ってきたはずですが……?」

「……ちよつとこれは置いとこうか」

その後、店員を呼びハナビに似合う服を5着ほど選んでもらい、その服を購入して店を出る。

「サングラスがセンスの邪魔をしてるのですか?」

「あの店員の話はもう気にしなくていい……それよりも、先を急ごう」

白たちは木の葉の里から数日かけて、波の国のガトーが実権を握っていた島への入口へとたどり着いていた。そこには、以前まで繋がっていたなかった橋が既に繋がっており、多くの人の往来がある。ただ、橋は完成しておらず、繋がっているだけの状態だ。橋の脇に柵が無いところもあれば、一部鉄板で渡してあるところもある。

そのような中を白たち2人は島へと向けて歩いて行った。向かう先は、島内に建ててあるガトーカンパニーである。

長い橋を渡り終えて街へと入ると、昔の状態が嘘のように活気溢れるものへと変わっていた。未だに建物などは昔のままだが、今いる人たちのほとんどの顔には笑顔があり、店の品物も色々と並んでいる。物珍しげに周囲を見渡しながら先へと進んでいき、ガトーカンパニーの建物へと到着した。

建物は以前の時とは違い、増設したのか大きくなっていた。白たちは中へと入り受付に顔を出す。

「再不斬さんはいますか？」

「……どのようなご用件ですか？」

「白……と言えは分かりますかね」

「それでしたら伺っております。再不斬さまは2階の1番奥の部屋に居られます」

「どうも」

階段を上がったところで変化の術を解き、2階の1番奥の部屋へと入る。

「失礼します、再不斬さん」

そこには、だらしなくソファーに身体を預けた再不斬がいた。

「……白か……その後ろのガキはなんだ？」

「付き人……でしょうか？ まあ素性はハッキリしてるんで心配はしないてください」

再不斬は不審げにハナビへと視線を向けるが、興味を無くしたのか白へと視線を戻した。

「それで？ 何の用だ？」

「暇そうですね」

「暇だな……」

再不斬は退屈そうに上を向くと、天井へと視線を巡らしていく。

「商売の方はどうなんでしょう？」

「金は集まってるな」

「商売の内容までは知らないんですね……」

「そっちについては、あいつに任せてある」

再不斬は心底どうでもよさそうに答えると、白へと先を促してきた。

「さっさと本題に入れ」

「水の国への攻撃はいつ行うんですか？」

「……どこまで把握している？」

「クーデターを起こして失敗。今は力を蓄えてる最中というところで」

再不斬は、白の知っていることを更に聞こうとしたが、以前も同じようなことがあったのを思い出し、訊くのを止めて計画について話し始めた。

「金はできた。後は忍びを雇うところまできている」

「それに同行したいんですが構いませんか？ もちろん邪魔しませんよ。ただちよつと欲しいものがあるだけです」

「欲しいものとはなんだ？」

「忍び刀です」

「……別に俺は構わん。こいつがあるからな」

再不斬は背もたれに立てかけてあった首切り包丁を片手に持ち振り上げる。

「それでは、決行までに手伝えることがあれば手伝いますよ」

「あの女のところに顔を出しておけ」

「もしかして、未だに全部あの人任せですか？」

「俺にはこつちの仕事があるからな」

再不斬は首切り包丁を幾度か振るい、背もたれへと戻してから悪びれも無く言い放つ。

「でも、今は暇なんですよね？」

「……………」

「いえ、なんでもありません。では行きますね」

機嫌が悪くなり始めた再不斬から離れるべく、話を切り上げハナビを連れて部屋を出た。部屋を出て扉を閉め終えたところで、ハナビが白へと尋ねてきた。

「あの方はどなたですか？」

「元霧隠れの里の人で再不斬さん」

「元……ですか」

「こそ。……まあ、その辺は追々話していくよ。それよりも、今から行く人に会うと確実に仕事を任されることになる。そうなった場合、ハナビにも手伝ってもらうからそのつもりで」

「頑張ります！」

ハナビの元気な声を受けて白は、その隣の部屋へとゆっくり近付き入っていった。

76 お金？

再不斬に会いに来てから数日。白は豪華な机の上に並べられた書類の処理に追われていた。

あの日、再不斬への挨拶を済ませた白は、再不斬から話のあった女忍者へと挨拶をしに部屋を訪れた。

部屋には幅広い机の上に書類の束が乱雑に置かれており、その書類を目の下に隈を作りながら処理している女が居た。その女は、誰が入ってきたのかと、疲れた表情を書類から上げて、白と目が合った瞬間に硬直する。しかし、それもすぐに解けると、親の仇と言わんばかりの表情で白へと迫り、その手を掴むと問答無用に白を椅子へと座らせた。そして、白の目の前に書類を置き始めたのである。

「いきなりなご挨拶ですね」

「いきなりはどっちよ！ こっちはあれからずーっと一人でやってきたのよ！」

「事務処理できる人を雇えばいいだけでしょように……」

「外部の人間を信用できるわけないでしょ！ うちの奴らはこういっただことには役に立たないし……」

「一応俺も外部の人間なわけなんですけど……」

「あんたは逃がさないわよ！」

女はヒステリー気味に叫びながら、今まで座っていた椅子を扉側へと移動させると、事務処理の続きを始めた。場所を移動したのは、白を部屋から逃がさないためだろう。実力的にいつて、逃がさないことなど不可能なのだが……。

完全に置いてきぼりを喰らった状態のハナビは、事の経緯が分かっているため、部屋の入口で立ったまままで困惑しており、心配そうに白を見詰めていた。そんなハナビの視線に気付いた白は、書類仕事を始める前にハナビを招きよせて女へと自己紹介をする。

「紹介しますね。はい、自分で自己紹介をして」

この時に、女は初めてハナビの存在に気付いたようで、ハナビを見て驚いたような表情をすると、慌てたように、目の前の書類を身体を

覆うようにして隠した。そんなことはお構いなしに、白たちは自己紹介を始めていく。

「初めまして、ひゅう「はいストップ!」……?」

白はハナビの言葉を遮り、顔をハナビへと寄せて耳打ちした。

「日向の姓は名乗らない。今後はハナビだけで通すこと。日向姓なんて名乗ってたら狙ってくださいっていつてるようなものだろ。情報を簡単に渡すのは自殺行為だってことを覚えとけ」

「すいません……」

女は2人のやり取りに不審げな表情を向けて、そんな2人を注視していた。

「ではもう一度改めて」

「はい。……初めまして。ハナビと言います。えつと……よろしくお願ひします」

「……で? その子は信用できるわけ?」

女にとっては、信用の有無。それだけが全てであり、それ以外は必要がなかった。

「素性は明かせませんが、信用はできます。一応、俺がついていますので問題ありませんよ」

「……それならいいけど……なんで、こんな子供連れてきたのよ?」

何かあつたら白が責任を持ってばいいかと、女は書類を隠すために机に伏していた身体を上げて白へと尋ねた。

「まあ最初はこんな予定ではなかったんですが……タイミングが色々重なったから……としか言いようがないですね」

「あんたが責任を持ちなさいよ」

「あなたの心配している会社に関しては、たぶん慣れてないので、内容を見ても分からないと思いますよ?」

「その内分かってくるでしょ!」

「はあ……分かりましたよ」

その後、雑談を切り上げて事務処理へと手を付けていく。

ハナビに関しては、読み書き計算が出来るだけのレベルであったため、回される仕事もそれ相応なものとなり、主に書類の整理・運搬が

メインとなった。

しかし、白の方はそうはいかない。女忍者からしたら、再不斬の下、気に食わない相手ではあったが、一緒にやっていくだろうと思いついでいたのだ。そのような相手が、いきなり何も言わずに消えたのであれば、このような態度に出てしまったのも仕方ないだろう。実際には、再不斬に別れを告げてあったのだが、それを再不斬は女に伝えていなかったのだが、それを女が知るよしもない。

白は、影分身を使用して、急ぎの件名を数日間が終わらせてから、現在の状況の把握に努めていた。ガトーカンパニーの状況だけではなく、これから向かう先である霧隠れの里の状況の確認を含めてである。そこ以外にも向かわせているが、取り敢えず現状で欲しい情報は水の国方面だけだった。

（一応数億両の資産はあるけど、使えるのは数千両面といったところかな……その後の経営を考えなければ、全部使えるけど……クーデターを起こすのに必要な人数や金額ってどれくらいなんだろう？）

白は唐突に思い出したように、女へと今後の計画について知っているか確認を行う。

「ひとつ聞きたいんだけど、再不斬さんから今後の計画聞いてる？」

「えっ？ 今後の計画も何も、会社を任されてるんだから、どんどん大きくして稼ぐに決まってるじゃない」

「……………」

余程今の仕事があっているのだろう。女は当初の目的を忘れて、会社経営にしか意識がいつていなかった。白は溜息を吐いて呆れたように女を見てから、諭すように語りかける。

「まず、再不斬さんの目的を思い出そうか。……ここにいるのは力を蓄えるためであって、この会社を経営するためじゃないんだけど……分かってる？」

「うっ……。け……決して忘れてなかった！ ……力を蓄えるためにお金が必要だった……そう！ そのために会社を大きくしてるのよ！」

「お金は十分稼いでると思うんだけど？」

「まだまだ足りないわ！ 確実にいくにはもつと稼がないと！」

「再不斬さんは十分と見てるみたいなんだけど……」
「っ!？」

白の言葉に女は驚愕の表情をすると、机の上の整理された書類の中から数枚抜き取り、部屋を出て行ってしまった。出て行った部屋の中は、女が書類を乱暴に抜き取ったことで、その上に積まれていた書類が飛んでしまい、散乱している。

「はあ……ハナビ、悪いけどまた整理しといて」

「はい！」

ハナビは嫌な顔もせず、自分の仕事ができたとばかりに散乱した書類を集め始める。その間、白は通常の事務処理を続けて行っていた。た。

しばらくすると、女が満足そうな顔をして部屋へと戻ってきた。

「やはり、まだまだ資金が必要なようだ。再不斬様にも納得していただいたわ」

「……具体的に後どれくらい必要なわけ？」

「今の倍ということで相談したから、まだまだ先は長くなりそうね」

「……その根拠が知りたい……」

「それは、今いる忍びへの給金と移動や武器の調達に伴う経費、それに日数を加味して計算してるからすぐに説明できるわ」

「……変なところで優秀ですね。でも、今いるのって中忍レベルの忍びですよ？ そんなのがある程度の数がいようと簡単に撃退されると思いますか？」

女は白の言葉に、してやったりといったような顔をした。

「そうなのよね！ だから、それ以上の忍びを雇うには更にお金が必要なわけ。……さあ、目標に向けて頑張るわよ！」

女はそう言うのと、書類を机の上に置いて椅子に座り、再び事務処理へと戻ろうとしたところで、机の上の状況に気が付いた。

「あんたね。もう少し綺麗に仕事をしようと思わないの？」

地面へと散らばった書類は拾い上げてあったが、それを整理するために机の上へと書類を広げていたのである。それを見た女は、自分が

やったとは思っておらず、白が散らかしたと思っていたのだった。
「お前が言うな！」

さすがに女の言葉に突っ込まずにはいられない白だった。

仕事が落ち着いたところで、後を影分身と女に任せて、ハナビの鍛錬に付き合っていた。日々の習慣なのだろう、朝と夜の仕事がない時間帯に、ハナビは独りで鍛錬を行っていたのである。白もそれは同じで、鍛錬をしていたのだが、途中からハナビにその光景を見られたため、ハナビの鍛錬に付き合うことになったのである。

（白眼の透視で見つかるのか……考えてなかったな。結界張らない限り防ぎようがないし……まあ、油断していたこっちが悪いんだけど）
ハナビとの鍛錬を行う前に、現在のハナビがどの程度の実力を持っているのか確認を行った。結果的に、この年齢としては、アカデミーでの内容と比較しても十分に強いと言い切れるものであり、柔拳の型についてもひと通りできていた。ただし、それ以外の忍術や幻術ができていないに等しかったが……。

「大体わかった。……まず体術は良いとして、それ以外が全くダメな状態みたいだし、そこからやっつていこうか」

「お願いします、先生」

「……先生？」

「教える人の事を先生と言うのではないのですか？ アカデミーではそうでした」

「いや……間違つては無いけどね……まあいいか。この紙にチャクラを流してみて」

白は持つてきていたチャクラ紙をハナビへと手渡す。ハナビはそれを受けとり、不思議そうな顔をして白を見詰めた。

「それはチャクラ紙といって、自分のチャクラの属性を調べるための物なんだよ。チャクラ基本的な性質が5種類しかないのは分かる？」

「はい。それは分かります。火、風、水、土、雷です」

ハナビはスラスラと答える。この程度であれば、アカデミーでも初期にて教える項目なので、知っていて当然でもあるが。

「正解。……んでその紙にチャクラを流せば、火だと燃えるし、風だと切れる。水は濡れて、土は崩れ、雷はシワが入る……だったかな？」

「そうなのですか……先生はどの属性なのですか？」

「忍びは簡単に情報を教えない」

「……はい……」

白としては、怒っていったつもりはなく、一般的なことを言っただけでもりだったのだが、ハナビは初日に注意されたことを思い出したのだろう、自分のやったことに落ち込んでいるようだった。その様子を見て、白はフォローを入れておく。

「別に聞くことは悪いことじゃない。ただ、信頼できる者以外に情報を渡さないこと。これは本当に重要だから」

「……私は先生に信頼されてないのでしょうか？」

白はフォローで言っただけでもりだったのだが、その内容で更にハナビは落ち込んでしまっていた。そんなこととは知らずに、白は思ったことを話してしまう。

「ここに来た初日に、しかも初対面の人に、知られてはまずいことを平気で言うようでは、信頼できないに決まってるじゃないか」

白の言葉はハナビに追い討ちとなって心に突き刺さり、その表情が泣きそうなものへと変わっていきこうとしていた。そこでやつとハナビの状態に気付いた白は、言い訳がましくハナビへと話し掛けた。

「まあ、あれだよ。人には信頼できる人であるからこそ、知られたくないこともあるんだよ。うん」

「……いえ……先生の仰られることは最もだと思います。……だから、先生に信頼していただけるように、これから頑張ります！」

「あー……うん。頑張って」

ハナビの中で納得し、自己完結したのだろう。白を見詰める目には、先ほどまで泣きそうなものはなく、やる気を感じさせるものになっていった。いきなりの態度の変化に、白が逆に戸惑ってしまったほどだ。

「じゃあ早速、チャクラを流してみて」

「はい！」

ハナビはチャクラ紙を両手に持ち目を瞑った。そして、次の瞬間にチャクラ紙に変化が起こる。

(俺と被らなかつたか……)

「これは……」

ハナビの持つチャクラ紙はクシヤクシヤにシワがよっていた。ハナビの性質変化は雷だったのである。チャクラ紙の状態を見て、ハナビは先ほどの会話を思い出していた。

「属性は雷と……。ちなみにそれは先天的なもので、後天的に属性を増やすこともできるから覚えておいて」

「分かりました。……雷ということは雷遁系の術を鍛えていけばいいんじゃないでしょうか？」

「基本はそうだけど、それ以前のことをやっていこうか」

「それ以前……ですか？」

「そう。チャクラコントロールからね」

そう言うと、白はハナビを連れて、ナルトたちが修行していた場所へと赴くのだった。

77 活動？

白たちが波の国に来てからやっていたことと言えば、始めに来た頃と変わりは無く、カンパニーの手伝い・鍛錬・情報収集の主に3つ。ガトーカンパニーに関しては、順調に利益を上げていた。特に水の国と波の国の往来には、船が必ず必要となる。

現在白たちが滞在している島のように、橋を架けることもできないからだ。それに加えて、陸路の方でも人や物に拘らず運んでいた。陸路の方は、海路と比べれば少なかったが、それでも波の国に忍びの里がないためだろう、依頼されることが意外と多かった。金額についても言うほど高くは無く、一般人でも十分に払える額になっている。その分、物量をこなさなければならなかったが、それでも十分だった。

海路の運搬で、海賊などが出た場合の処遇については、通常数人の忍びを乗せているが、その船で本拠地を潰しに行くわけにもいかないため、暇を潰す目的も含めて、再不斬に数人の忍びを率いて出向いてもらっていた。そこで得た物については、完全に接収しているので、良い稼ぎになっており、再不斬のストレス解消にもなっていた。

もちろん運搬だけには留まらずに、農業の方も今は手掛けていていた。以前は武器などの供給を行っていたが、その運搬を抜け忍などに狙われる確率が非常に高いことが分かったため、完全に切り捨てる形となったのである。……ハイリスク・ハイリターンよりもローリスク・ローリターンを選んだ結果だが、今のところ問題は起きていなかった。始めに武器商人たちとの諍いがあったくらいだろう。

徐々にはあるが、住んでいる人の生活基盤となるものを押さえていくことで、前のガトーとは違った、経済支配を行いつつあった。外聞は、以前のイメージが払拭されて優良企業に見えているため、一般人には分からないだろうが……。

鍛錬については、元から才能があるためだろう。教えたことの呑み込みが早く、チャクラのコントロールに関しては家系のこともありすぐにできるようになっていた。しかし、残念なことに医療忍術の才能

はなかった。

そのこともあり、鍛錬の内容は忍術の方に傾いていくのだが、白自身が雷遁に関しての知識がほとんどないため、チャクラを雷に変えるやり方を教えて、後はハナビ自身で術を編み出すようにしていた。そのため、新しくできた術の相手をしたりしている。

「では行きます」

「いつでも」

ハナビはそう宣言すると、印を切りながら白へと向かっていく。途中から瞬身の術で一気に白へと迫ると、右腕を横一線に振るつてきた。その手を余裕を持って躲した白だが、ハナビの手に触れていないにも関わらず、服が横一線に斬れていた。

「やっぱり先生ですね……簡単に躲されてしまいました……」

ハナビは残念そうな言い方をしつつも、どこかホツとしているような表情を見せる。

「それが新しい忍術か……途中で雷遁の発生に気付かなかったら結構やばかったな」

「はい、以前教えていただいたチャクラメスを、自分なりに変えてみたものです」

「確かに普通のチャクラメスよりもリーチが長い」

ハナビの使用した術は、通常のチャクラメスの応用で長さはクナイ2本分程度だが、それでも十分に初見では対応しにくいものだった。瞬身の術で近付いてから、雷遁発生までのタイムラグが無ければ、白でも初見で躲すことは難しかっただろう。

「その代わりと言っては何ですが、持続時間が短いです」

「ということは、最初の不意打ちには使えそうかな？ 長さを自在にできるのなら話は別だけど」

「……今のところ、先ほどくらの長さが限界です……」

ハナビは申し訳なきように自分の今の限界を言ってきた。しかし、今の状態では接近戦でしか使用できないが、これからの鍛錬次第では、それすらも変わってくることに白は気付いた。

「まあ一定の形に留めようとすると、チャクラのコントロールが難し

いから仕方ない。取り敢えずできてはいるんだから、伸ばせるようにしてあげばいい。それと、発動までの時間を短縮すること」

「はいー」

「……それはそうと、ちよつと開発した術を試してみたいから、昨日の雷遁をこちらがいいと言ったら撃つてきて」

「っ!? 分かりました!」

ハナビは白の言った言葉に最初は驚き、嬉しそうに頷くと、期待したような眼差しを白へと向ける。

——風遁・風鎧——

白が印を切ると、周囲に風が巻き起こり、球状に白を包んでいく。「では撃つてみて」

「はい。——雷遁・地走り——」

ハナビは印を切ると、切ったその両手を地面に付ける。すると、その両手から白へと向けて地面を電撃がはしっていく。白はその場を一步も動かずに、その電撃を見つめていた。

電撃が白の周囲にある球状の風に触れた途端、電撃は簡単に進路を変えてあらぬ方向へと行ってしまい、近くにあった岩にぶつかるとそこで消えてしまった。その結果に満足して白は頷く。

「さすがに、雷影並みの速度とチャクラで迫られたら耐えられないだろうけど、普通の忍び相手になら十分使えそうだ」

「……今のは……一体なんでしょうか?」

ハナビは自分の術がいつも容易く無力化されたことで、少しショックを受けていた。何かしらのことは予想していたが、全く効かないどころか当たらなかつたからだ。

「基本となる術の相関関係は教えただろ? 雷遁は風遁より弱い関係にある。……ただし、絶対的なチャクラ量の差がある場合はこれに限らないけど」

「つまり、今のは風遁ということですか?」

「そういうこと」

ハナビは、先ほどまでショックを受けていたようだが、急に笑顔へと変わっていった。その表情を見て白は不審に思う。

「術を防がれたのに嬉しそうな顔をされると不気味なんだが……」

「今まで、私ばかり忍術を使用していたので……先生の忍術をまともに見たのはこれが初めてなんです！ 防がれたことは確かにシヨックでしたけど……属性を教えていただけたということは、先生から信頼されたってことですよね!？」

白が術を使う際に、ハナビが喜んでいたのは、なかなか自分の事を教えてくれなかった白が、ハナビに対して術を使ったことに加えて、開発した術を見せたためだった。

「ああ……（あの頃のことまだ引き摺ってたのか……）」

「これからも頑張って精進します！」

「まあ……やる気があることはいいことだね……」

その日から、少しずつではあるが、白もハナビに対して術を使用するようになっていった。

最後の情報については、影分身の1人を水の国へ。もう1人を火の国方面へと向かわせていた。水の国は以前の殺伐とした感じはなく、少しではあるが発展していた。道沿いに店しかなかったような場所に、新しく街ができていたり、元々あった街が大きくなっていたりと変わっていたのである。

（時が経てばやっぱり変わるもんだな……）

白は古い記憶を思い出しながら、以前泊まったことのある場所など行ったことのある場所を巡ったが、そこは既になくなっていたり、違うものへと変わっていたりと様々だった。

そして、一番驚いたことが、霧隠れの里の位置が分かったことだ。話を聞いていると、昔は血霧の里としてそこへ迷い込んだものは、2度と戻っては来れないと伝えられていたようだが、今は霧隠れの里として場所を公表しており、依頼などをするのに行く者もいるようであった。

街にて白は地図を購入し、霧隠れの里へと向かった。街などの人工物は変わっていたが、風景に変わりはない、懐かしさを感じさせるものがあつた。

数日掛けて霧隠れの里の入口へとたどり着いた。

そこはきちんと道を整備しており、人の往来もある場所へと変わっていた。入口に至っては、昔は木で出来た柵であったものが、今では石造りの堅牢な壁へと姿を変えている。そして、昔は無かった門を潜ると、中の様子は一変していた。

里の中は木の葉と同様に活気に溢れたものへと変わっており、建築物についてもこれまでに見てきた街と同様に、様変わりを果たしていた。

その光景を見て白は呆然と門の入口で立ち止まってしまっていた。

（ここが霧隠れの里なんてウソだろ？ 完全に違う場所じゃないか……約10年でこんなに変わるものなのか？）

門のところで立ち止まっていたためだろう。里へ入るための手続きをしている者から声を掛けられた。

「霧隠れの里は初めてですか？ 入るのであれば手続きをしてもらいたいのですが」

「あつ、はい。お願いします」

「では、こちらへどうぞ」

白は案内に従い門の近くに設置してある小屋へと入っていく。小屋といっても、少し細長い形を取っていて、対辺に扉が付いている。小屋のような形をしているのは雪が降ってきた時のためだろう。入口から入って、手続きを済ませた後に、反対側の出口から出るというものだ。

「こちらの方に記入をお願いします」

「分かりました」

受付台の上に置かれた冊子へと記入していく。内容は氏名・年齢・性別と簡単なものだった。ただし、その横に数字がふってあり、係の者はその番号を見ると、自らの持っている冊子へと何かを記入していく。そして、白が記帳をしようとしたところで、係の者が話し掛けてきた。

「どういったご用件でこちらに来られたんですか？」

「ただの観光ですよ」

「……観光……ですか？　言つては何ですが、特に見て回るようなところはありませんよ？」

実際に、霧隠れの里に名物と言えるものは無く、依頼を持ってくる者が、知り合いに会いに来るといった者がほとんどの中で、白の言った内容は係の者にとって意外だったのである。

「同じ場所に長いこと居るとそう思われるかもしれませんが、他の国から来た者にとっては珍しかったりするものですよ……はい。記帳はこれでいいですか？」

「……はい。大丈夫です。特に見るべきところはないかもしれませんが、一番人が多いのはこの先にある大通りになります」

「ありがとうございます」

白は係りの者へと礼を述べると、係の者に言われた大通りへと向かって歩き出した。

（係の人が持ってたやつは、たぶん身体的特徴とかを記入したものだだろうな……。それにしても、観光っていう言い方はまずかったのか？　これだけ変わつてて人が増えてるんだから、何かあつてもよさそうと思つただけけど……）

大通りには遠目から見ていたとおり、人が溢れており、色々な店が通りに沿つて並んでいる。そして、歩いていくうちに一軒の店の前で白は立ち止まった。

昔よく買いに来ていた酒屋である。外見が多少変わっているものの、看板だけは昔のまま入口の上に飾られていた。

白は気紛れで中へと入っていき、店内を見回した。外見が変わつていたので、白には予想はついてしたが、内装の方も変わっていたのである。ただ、人だけは変わっていないかった。老いはあるものの、昔と同じ人物である。

店内に他に人が居ないことを確認し、雑談交じりに昔から今に至るまでの経緯などを聞き出していく。

約10年前にクーデターがあり、そこで主犯格は逃亡。その時に水影に浅くない傷を負わせていたようで、そこから里を囲っていた柵を石造りへと変えて侵入しにくくしていったようだ。ただ、このクーデ

ターはその時だけに留まることがなかった。

今の水影率いる者たちが立ち上がり、恐怖政治を敷いていた4代目水影の抹殺に動き出したのである。その時は、里を巻き込んでの戦いとなったが、元々居た住民たちも不満を持っていたので、これを利用して、4代目水影を単独に追い込み、最後には討ち果たしたということだった。

「4代目水影の墓とかはあるんですか？」

「あんなやつ墓なんてあるわけないだろ！」

酒屋の店主は昔を思い出したのか、忌々しげに吐き捨てるようにして言い放った。

「そうですね。（4代目水影は無理か……）歴代の水影様のお墓はあるんですか？」

「それなら確か、里の奥にあったと思うが……今の水影様が変わってからどうなったか知らんなあ……あの時は結構色んなところが壊れちまったしな」

「そうですね……。では、いつまでも邪魔をしてはいけないので失礼しますね。後これください」

白が台に乗せたのは、昔買わされていた酒だった。今の所持金から考えると安い酒だが、あの当時はこの酒を買うだけでもギリギリな上につまみまで要求されていたのだ。そのことを思い出しながら、白は買った酒を持って今日から世話になる宿を探しに街中の探索に向かった。

78 出発？

霧隠れの里に来て数日。里内を観光という名目で、行けるところを探索し終えた白は、計画を実行に移した。

(まずは、守りの浅い水影の墓からだな)

夜の暗い最中、里の奥の物静かな場所に設置してある、水影の墓石へと白は近付いていく。墓石といっても、木の葉の里の、火影の墓石とは違いとても質素なものだった。

昼間にも何度か周囲の状況を確認する為に見に来てはいたが、特に忍が守っているわけでもなく、木の葉の里同様に無警戒なまま、その墓石は静かに鎮座していた。

白は目的の物を回収するために墓石へと近付いて行く。水影の墓には、結界が張ってはあったが、大したものではなく、無理をすればある程度の忍びであれば簡単に破れる程度のものであった。ただ今回は、後々に形跡が残らぬよう静かにする必要があったため、結界を解除してから墓を空けてゆく。

白は、墓の中にあつた物を巻物に収めて結界を張り直すと、自分の仕事ぶりに満足して静かにその場を立ち去った。水影の墓は、白が来る前の状態と変わらず、外見上は墓が暴かれたことなど、見ただけでは誰も分からない。しかも、結界が張り直してあるので余計にそう見えるだろう。

(これで1つ目は完了だけど、次からが問題だな)

次に白が向かったのは共同墓地である。こちらは、水影の墓とは違い、数人の忍びが定期的に巡回を行っていた。燃やしてしまえばいいのだろうか、死体をそのまま埋めているためだろう。その遺体を持ち去り解剖すれば、里の情報が漏えいする恐れがあるので、どの里も墓地には忍びを配置してあつた。

特殊な事例を除き、遺体を燃やすことのない今の状況を白は不思議に思いつつも、カブトからの依頼を達成するためには丁度よかつた。

(昼間と同じく人数は2人か……)

共同墓地は結構な広さがあるにも関わらず、そこに割り当てられて

いる警備の人数は少なかった。しかし、警備されているということ
は、墓を暴く際にどうしても見つかってしまう。そのため、白は一旦
墓暴きは中止し、宿へと戻っていく。

宿へと到着してからは、カブトから貰った巻物を使用し蛇を呼び出
すと、白は先ほど手に入れてきた物と手紙を蛇の前に置いていく。す
ると蛇は、それらを丸呑みにしてしまうと、その場から消えてしまっ
た。

(逆口寄せではなくて、自らが任意の場所に飛べるのか……そう言え
ばカエルの方もやってたな……忍獣しかできないんだろうか？ 四
代目火影の飛雷神の術みたいなものか？ 機会があれば調べたいな
……)

この日の最低限の目的を達成した白は、本体と連絡を取って次の計
画まで待機するのだった。

霧隠れの里からの情報を手に入れた白は、再不斬へとその情報を
持っていく。

「再不斬さん、今いいですか？」

「……何だ？」

最近の再不斬はストレスを発散する相手がいないために、その感情
を持って余しており、若干不機嫌そうにしていた。

カンパニーを乗っ取った当初は、色々とちよつかいを出してくると
ころがあったが、それも潰し終わり、海路の賊に関しても同じように
排除してしまったためだ。時折発生するが、いうほどの人数もおら
ず、歯ごたえもない相手では、逆に再不斬のストレスは高まっていた。
「霧隠れの里について何か調べてますか？ クーデターを起こす際の
作戦とか」

「……人海戦術をとれば特に問題ないだろう。前回は横槍が入ったせ
いで失敗したが、それさえなければいけるはずだ」

「調べてないんですね……。再不斬さんの目的は水影になることす
か？」

「別に水影になりたいわけではないな。……あのムカつく奴にいちい
ち命令されるのが癪に障るからやるだけだ」

「……えーっと。つまり……その相手って誰になるんでしょう?」

「水影に決まってるだろうが」

再不斬は昔を思い出したのか、更に不機嫌そうな表情へと変わっていく。

「……もし、4代目水影のことを言っているなら、もうこの世にはいないみたいなんですが……」

「何?」

白が言ったことが意外だったのだろう。4代目水影であるヤグラは尾獣持ちである上に、それを完全にコントロールしていたのである。そのような相手が簡単に死ぬとは思っていなかったため、再不斬は驚きを隠せていなかった。

「それはいつのことだ?」

「十年前に違う人がクーデターを起こしたようで、今はその時の発起人が水影をやっているようですね。……名前はメイ?とか言う人みたいですが知ってますか?」

「……少し上に、そんな名前の奴が居たような気もするが……それだけでは分らない」

「血継限界を所持しているみたいですよ」

「……あの頃、そいつを持ってるやつらは、粗方殺されたはずだが……」

「隠してたんでしょうね」

「……それにしても、俺がいない間にだいぶ変わったようだな」

再不斬は今後の事を考えているのか、そう言うと、頭を上に向けて天井を見つめると黙ってしまった。白は、しばらくそのような状態の再不斬を見ていたが、先を促すためにも尋ねた。

「これからどうするんです?」

「……どんな奴か会いに行くのも面白いかもしれん」

再不斬は少し考えたようだが、自分の目で実際に見てみたいのだろう。今の水影に興味を持ったようで、何かを考えているのか、嬉しそうな表情をしている。

(これはちよつとよろしくない展開になりそうな……)

白は再不斬の表情を見て取ると、再不斬を止めることが叶わないと分かり、最悪時に備えることにし、時間稼ぎの意味も含めて更に確認をしていく。

「いつ出発するつもりですか？」

「すぐに出る」

「1人でですか？」

「その方が動きやすいだろう？」

再不斬はさも当然のように言い放つが、白から見ればその考え方には同意できなかった。

「いえいえ。仮にもこのカンパニーのトップなんですから1人はまずいです。他にも部下を連れて行ってください」

「足手まといは不要だ」

「荷物持ちとか、宿の手配とか色々任せられて便利ですよ」

「必要性を感じないな」

白の必死の時間稼ぎ作戦も、再不斬にいと簡単に撥ね除けられてしまった。

再不斬は言い終えるとソファアールから立ち上がり、立て掛けてあつた首切り包丁を背負う。それを見て白は諦めたように溜息を漏らした。

「何を言っても行く気みたいですね……気を付けて行って来てください」

「何を言ってる？ お前も行くぞ」

「……えっ!？」

再不斬は当たり前のように言ってきたため、白は少し理解できていなかったが、理解すると同時に驚いてしまう。今までの流れから、再不斬1人で行くと思っていたからだ。

「お前が言ったんだろうが、誰かを連れて行けと」

「それはそうですが……」

「お前なら足手まといにはならんだろう」

再不斬の白に対する評価は高いようで、既に連れて行くことが確定していたようだった。再不斬が足手まといと言ったのは、その他に対する忍びのことだったのである。

「分かりました。ただ、この会社の事もあるので少し時間をください」「会社はあの女に任せておけばいいだろう?」

「分担が違うので、その引き継ぎをしておかないと後が煩いんです。そうですね……3日ほどいただけますか?」

「……まあいいだろう」

(よし! 取り敢えず時間は稼いだ。後はあの女との交渉だな)

再不斬が再度首切り包丁を背中から外し、ソファーへと立て掛け直したことで、白は安堵し、引継ぎがある旨を再不斬へと伝えて部屋を出て行った。

再不斬の部屋を出てすぐに会社を任せている女のところへと向かう。ノックもせずに部屋へと入りすぐに交渉を開始した。

「再不斬さんが霧隠れの里に2人で行こうとしているから、なんとかしたいんだけど協力してくれないか?」

「えっ!? 2人って誰のこと?! 私には何も連絡が来てないわよ!」

「心配するのそっち!」

女の思考回路に逆に驚きながらも、先ほどまでの再不斬とのやり取りを説明していく。

「つまり、最悪今の水影に襲い掛かる可能性がある……」

「そういうわけで、なんとかしたいんだけど、それをするにはお金が必要なんだよね」

「……水影はメイ……女……襲う……」

「ねえ……聞いてる?」

「断固阻止しないと! 今すぐ戦争しましょう!」

女の眼は決意に満ちており、机を強く叩いて立ち上がると言い切った。

「騒ぎを起こすのは歓迎なんだけど、戦争は困るな……」

「何を悠長なことを! 今こそ決断の時! お金を貯めたのはこの日のため!」

「なんか言ってることがおかしくない? いや……むしろ合ってるのか?」

「さあ準備を始めるわよ!」

「お金は使っていないんだね？」

「当たり前でしょう！」

「それが聞きたかったんだよ」

交渉する以前に、勝手にお金の使用について許可が下りたことで、白としては問題がなくなつた。立ち上がって、急いで部屋を出て行くとする女を、白は気絶させて部屋の中へと連れ戻す。

「ハナビ……後は任せたよ」

「よろしいのですか？」

ハナビは気絶させられて、白によって椅子へと座らさせられた女へと目を向けながら、白へと内容的に色々なことを含む言い方で尋ねてきた。

「影分身を残していくから、ある程度の事には対応できる。問題はこつちなんだよな……」

「私で手伝えることがあれば言ってください」

「……今まで通りやってくれたらいいよ。さっきの話聞いていたなら分かると思うけど、数日後に俺はここを離れるけど、影分身を置いておくから、何かあったらそつちに言っておいて」

「分かりました」

白は、ハナビへの説明もそこそこにして、部屋を出て行き、誰もいない部屋へと入り直して、周囲に誰もいないことを確認してから、火の国方面へと向かわせていた影分身と連絡を取り合っていた。

3日後。予定通りに、白は再不斬と共に霧隠れの里へと出発した。

「一緒に旅に出るのは久しぶりですねえ」

「……そうだな。しかし、なんで最初から船なんだ？ 陸路で行った方が早いだろう？」

再不斬の至極当たり前前のことに、白は頷き返して説明する。

「早いのはもちろん陸路です。しかし、陸路よりも船の方が楽ですよ。人を雇わなければなりません、お金ならたくさん稼いでるんです。問題ありません」

「確かに、自分で移動しない分だけ楽か……」

「そうですよ。……気にせずには到着するのを待っててください」

今、白たちは波の国を陸路で行くのではなく、始めから船に乗って出発していた。再不斬へは移動するのに楽だからという理由を言ったが、もちろんそんな意図は無く、白としてはこれも時間稼ぎのひとつに過ぎない。

(これで数日くらいは時間を稼げるはず。その間にあちらが動いてくれれば……)

再不斬が霧隠れの里に着くまでに終わることを祈りながら、白は更なる時間稼ぎのための工作を行うのだった。

再不斬たちが霧隠れの里へ到着する数日前。霧隠れの里は早朝から混乱に陥っていた。

何者かの襲撃を受けているのは分かるのだが、その何者かの特定ができていない。

襲撃者が単独なのか複数なのかも分からない。分かっているのは、里が襲撃を受けているという事実のみ。

この季節は特に里の周囲を霧が覆うことが多い。そのため、最初は誰もそれが術であると気付かなかった。異常に気付いたのは、里の中までも濃い霧が覆い始めたからだ。少しであれば気付かなかったかもしれない。なぜなら、里の周りを壁で囲んでからは、霧が里内にまで入ってくるのがほとんどなくなっていたからである。

霧隠れの里の者が気付いてからの行動は迅速だった。この事態に対処するため、霧隠れの忍びが里の内外へと散っていく。しかし散っていったところで、今度は里内の至るところで爆発音が鳴り響いた。いつの間にか起爆札が里内の至るところに設置してあったのである。更に、その爆発に合わせるかのように、里の壁が外からの攻撃を受け始めていた。

里の内に設置してある起爆札の場所に規則性は無く、色々な場所に設置してあるということしか分からない。また、里の外からの攻撃に關しては、忍びを放っているが、霧が里内よりも濃い上に戻ってくる気配はなく、状況を掴むことができずにいた。

事が起こる当日の早朝。薄く霧が舞う中、白は霧隠れの里の外にいた。そこで今日、依頼をこなしてもらったための人物を待っていたのである。

「待たせましたか？」

「……………いえ、全く……………それにしても、あなた方が来るとは思いませんでした」

「私たちを見てその程度の反応……………気になりますねえ」

「これでもびつくりしてるんですよ？ いや、ほんとに」

白の目の前にいる人物は、2人。イタチと鬼鮫だった。

早朝、事前に決めておいた集合場所で待っていると、突然2人が現れたのである。白は声をかけられるまで、2人を見てしばらく硬直していたが、傭兵として雇った組織に、この2人が居るのは当然だと思いい出していた。

「まあ、いいでしょう。それで？ いつまで遊んでたらいいか聞きたいんですが？」

「昼まででお願いします」

「いいでしょう。……イタチさんからは何かありますか？」

「……特に何も」

「まあ、楽な仕事で大金が手に入るんです。これで角都にも、しばらくは文句を言われなくていいでしょう」

「そうだといいがな」

イタチは終始興味がなさそうに受け答えをし、鬼鮫はどこか嬉しそうに話をしている。

「それとついでにお聞きしたいんですが、この里の地下について知っているのは、鬼鮫さん以外で誰かいますか？」

「どうでしょうねえ。あそこは水影以外立ち入らないような場所ですから、普通なら知らないでしょうが……暗部であるあなたが知ってるくらいです。他にも知ってる人くらいいるでしょう」

「そうですか……それだけ聞ければ十分です。……ではよろしく願います（ほぼ知らないと見てよさそうだ）」

白はそう言うと、霧が里内に入って来るまで、共同墓地にて待機すべくその場を立ち去っていった。

「それにしても、霧隠れの里も一枚岩ではないようですね。……暗部が造反しているようでは」

「霧隠れの里の者とは限らない。それに、あれは影分身だ」

「……霧隠れの里も恨みを色々と買っているようで……」

「始めるぞ」

「活きがいいのが来るといいんですが」

鬼鮫は話しながら印を組む。そして言い終わると同時に、辺りの霧が段々と濃くなっていた。

霧が里内を包んでいき、墓地にまでそれが来たところで、白は行動を開始した。共同墓地に居るのは通常通り2人だけ。その2人は段々濃くなっていく霧に対して異常を覚えたのか、2人でしばらく話し合ってから、すぐさま里の中央に向かって行ってしまおう。

それを見届けた白は、事前に準備していた起爆札を発動させていった。起爆札の場所は、偽物を含めて数十枚貼られてある。偽物は見つかりやすい場所。本物は見つかり難い場所。そうすることで、この墓地の方へと人が戻ってこないようにしたのである。

その後は、水影の墓を暴いた時と同じように、墓地に埋められた肉体の一部を巻物へと収めていく。ただし、水影の時と違いがあった。それは、結界が無いことと、後のことを考えずに墓を開けていることである。

結界が無いことは、忍びを配置していたことから予測できたことであり、後のことを考えていないのは、ここでも起爆札を使うからだ。

ひと通りの作業を終えた白は、起爆札を設置して、霧隠れの里の地下へと向かった。この場所については、ほとんどの忍びが知ることはない。白が知ったのは、再不斬がたまたま知っていたからだ。クーデターの時に、水影との戦闘で知ったとのことだが、詳細は不明だった。再不斬の記憶を頼りに入口をやつとの思いで見つけたのはいいものの、再不斬自身が霧隠れの里に行くと言いつ出したので、調査する暇も無く、白はぶつつけ本番で内部へと入らざるをえなかった。

地下へと入り、光の届かない中を白は音と匂いを頼りに、時折立ち止まりながら突き進んでいく。再不斬であれば、音だけですべてを把握できるため、わざわざ立ち止まることはないだろうが、この事に關しては白にそこまでの力量はない。そのため、ところどころで立ち止まったの確認が必要だった。

いくつかの分岐を行き来しつつ、搜索していると大きな広間に行きついた。そこで、初めて白は明かりを灯して周囲を確認する。そこに

は、行方不明とされていた忍び刀が置かれていた。

(双振りの刀に、でかい刀……千本のでかい針みたいなやつと起爆札みたいなのがいっぱいいた斧……？ 4本か。再不斬さんの首切包丁と鬼鮫さんが持つてるやつと……霧隠れの誰かが持つてたな。計7つで間違いなしと)

白は忍び刀の内一つを除いて巻物へと収めると、再度カブトからの巻物で蛇を呼び出して、忍び刀の収まった巻物と、墓地から回収した物が入っている巻物とを蛇の前に置く。

そうして、蛇が巻物を丸呑みにしてから消えたところで白は異常に気付いた。徐々にはあるが、霧が出てきていたのである。

(おかしい……こんなところにも霧が入ってこないはず……っ!?)

その霧が身体に触れたところで、微かに痛みを覚えてそちらを見てみると、その部分の服が溶けて肌にまで侵食していた。霧が危険であることに気付いた白は、まだ霧のない天井へとすぐさま飛び上がり、天井に取りつくと霧の発生源へと目を向ける。

「さすがに気付かれたようね……」

その言葉を合図に一気に広間が明るくなっていった。

「……その面はこの里のもの？ ……お前はどこの者です？ それとこのことを誰に聞きました？」

「…………… (非常にまずい相手に見つかってしまった……といかなかぜここに居る?)」

「話す気はないようですね。……では、動かなくなった身体に直接聞くとしましょう」

明るくなつて現れたのは、今の水影である照美だった。照美は妖艶に微笑むと、口から霧を出して更に濃くしていく。それに対処するべく白も動き出した。

—— 水遁・水龍弾 —— 霧隠れの術 —— 水分身の術 —— 水遁秘術・魔鏡水晶 ——

白は素早く印を組み、放った水遁にて霧を洗い流した上で、その水龍弾の行先を水影に向けて放つ。水影は何事も無いかのように土遁にて壁を作り水龍弾を防いでくる。しかし、白はそれを見越したうえ

で、防がれた後に残るその水を使い霧を発生させていく。

「この程度で私をやろうと思っているのなら、勘違いも甚だしい……」
照美は自身に向けられた水遁に対して顔を少し訝しむ。水気の無いこの空間で、これだけの威力の水遁を使用してくることに驚いていたが、照美は水・火・土の性質変化を持っているのである。しかも、血継限界についても2つ所持しているのだ。そんな相手に対して、ただの水遁で攻撃していくのはおかしいと感じた照美は、先に逃げ場所を無くすために通路を塞ぎにかかった。

「——溶遁・溶怪の術——」

照美は広間の中央へと素早く移動し、白の気配がまだ上にあることを確認した上で、この広間に繋がる通路2つを術を使って塞いでいった。

「これで2人きり……洗いざらい目的から全て教えてもらいましょうか」

「……………」

「だんまりですか……この通路は水影の部屋へと繋がるものだから、てつきり私の暗殺が目的かとも思いましたが……この程度の者を送るとは思えませんし……。それにしても、あの封印の先がこのような場所に繋がっているなんて……地下に何者かがいると言われなければ開きませんでしたよ」

照美は既に勝負はついたと言わんばかりに、周囲の状態を確認しながら自分の考えていたことを話した。

「無駄話もお終いにしましょう」

照美はにつこりとほほ笑むと、一瞬にして天井に居る白の元へと迫るとその首を掴む。そこで初めて照美は気が付いた。それが水分身であることに……。

水分身はすぐさまただの水へと変わり果てて地面へと落ちていく。その中で、手鏡サイズの光る物だけが残っていた。怪しみながらも、照美は確認するために近付いていくと、そこから声が聞こえてくる。「残念でしたね。始めから相手に逃げられないようにするべきでした。あなたはタイミングが遅すぎたんですよ。……それと、目的は達

成しましたので、里内の起爆札はもう爆発させません。見つけないくい場所とかにもあると思いますが、安心して根気よく探してください。……それでは」

「……残念……逃げられる……遅すぎた…………婚期……」

白が言い終えたところで、水遁で出来た手鏡サイズの物は碎け散り、周囲の水に合わさって消えていく。

そこへ、壁を破壊して2人の人物が入ってきた。

「大丈夫ですか!? 水影様!？」

「もつと綺麗に穴を開けることはできないのかお前は!？」

「うっ……すみません……」

入ってきた人物は青と長十郎であり、長十郎のヒラメカレイにて壁を壊して入ってきたのだった。その壁を壊した際に土煙が舞ったことに、青が長十郎を叱りつけたことで、長十郎は落ち込んでしまう。

「……綺麗に……できない……」

「もういい! 水影様を発見したと伝えてこい!」

「分かりました! すぐに行ってきます!」

長十郎はすぐさま開けた穴の中へと戻っていく。

「いやあ。いきなり居られなくなったのにはびっくりしましたよ」

青は安堵したような表情をして照美へと近付いていくが、照美の方も、顔を俯けたまま青へと近付いていく。

「それはそうと、誰が居たんですか?」

「……黙れ、殺すぞ」

「ええっ!？」

白は照美と会話することで時間を稼ごうとしていたが、白の意図とは別のところで、更に時間を稼ぐことになろうとは思ってもしていなかった。

その頃目的を果たした白は、元来た通路を戻り、外へと出ていた。

照美と相対した時に、勝てないと判断した白は、すぐさま逃げるための作戦を実行に移した。水分身をその場に残して、影分身の方は隠遁で霧によって見えないことをいいことに、先に通路へと逃れていた

のである。

ただ、影分身とて無事ではなく、あの後も残っていた霧により身体
の至るところが、服はもちろんのこと肌までボロボロになっていた。
(あまり長くはもたないな……)

白は、霧の中を忍びに気付かれないように移動していった。

80 霧隠れの里？

再不斬と白が霧隠れの里へ辿り着いたそこには、至るところに傷痕の残る壁があった。

「最近戦争でもしたような新しさだな」

「そうですね……」

「ここに来るまでにそういったことは聞かなかったが……」

「何かあったんでしよう。それよりも中に入りますか？ 再不斬さん一応抜け忍ですよ？」

再不斬と白は、正規の道から外れた林の中からその光景を見ていた。正規の道は里の補修に使うであろう資材が頻繁に持ち運ばれており、解放された門から奥の方を見る限り、今は人のチエツクまではしておらず、人や荷物が素通りしている。

「どうしますか？」

「せっかく来たんだ。見に行くぞ」

「はあ……わかりました」

再不斬と白は堂々と正面から入っていく。一応、外套を纏い、首切包丁には布を巻いているが、傍から見たら怪しいことこの上ない。しかし、忙しかったためなのか、誰も止めるものはなかった。

里の中は、建物がところどころ壊れており、その壊れている場所を職人が修復している。その修復方法は雑なもので、取り敢えず塞いでおけばいいというのがよくわかる。それもそのはずで、季節はもう冬に入っている。そのため、もしここで雪などが降ろうものなら家の中の者たちは凍えてしまうだろう。それらを回避すべく、速度を重視して塞いでいるのだった。

ひと通り再不斬たちは里の中を見て回ったあと、白たちは遅めの昼食を摂った。

「里の中も結構ひどいもんですね（俺がやったんだけど……）」

「……里の中での戦闘はなかったようだな」

「……なぜですか？」

「壊れた場所が不自然な上に、あの壊れ方……術でできたものという

より忍具……起爆札でやったような痕だ。……陽動かなにかに使ったんだろう」

再不斬は自分の考えを述べると、運ばれてきた料理に視線を向けて、嬉しそうに食べ始めた。

（さすが再不斬さん。簡単に見抜きますか……）

白も再不斬同様に運ばれてきた料理を食べていると、明らかにこちら目掛けて近付いてくる人物が居た。

「桃地再不斬様で間違いありませんか？」

「……お前は誰だ？」

周囲へと気遣った小さな声で話し掛けてくる。しかし、食事の最中に声を掛けられたせいだろう、再不斬は不機嫌そうに声を掛けてきた人物へと視線を向けた。

「私は水影様の護衛をしている青というものです。この後よろしければご同行願いたいのですが」

「どこかで聞いた名だな」

再不斬はすぐさま食べ終わると、青に向けて言い終えてから、目を瞑り考え込んでしまった。

「あなたほどではありませんが、それなりには知られています」

「……いいだろう。案内しろ」

再不斬が考えていた時間は短く、少ししてから立ち上がると同時に返事をした。その答えに安堵した青は、次いで白へと視線を向ける。再不斬はその視線に気付き、未だに食べている白へと声を掛けた。

「いつまで食べている。いくぞ」

「……どちら様でしょうか……私はしがない一般人ですが……」

再不斬は何も言わず、ただ白けたような視線を白へと向ける。その視線に耐えきれず、白は溜息を漏らすと、箸を置いて立ち上がった。「罨とかそういうの考えないんですか？ それ以前に再不斬さんだけで行くという選択肢はないんですか？」

「……程度であれば問題ない。それに始めから水影に会いに来たんだ。……向こうから案内を寄越すぶん話が早い。お前についてはつ

いでだ。どうせ今更他人面しても仕方ないだろう?」

再不斬は最後の台詞を青へと視線を向けながら話す。こいつ程度と言われても、青の顔色は変わらず、逆にそれを受けて青も頷いていた。

「勘違いをしておられるようですが、再不斬様におかれましては、霧隠れの里では英雄扱いになっています」

「えっ? クーデター起こしたのにですか? しかも里を抜けてるのに?」

白は完全に罨であると決めつけて話を進めていただけに、青の言ったことを信じきれずに、逆に聞き返してしまう。

「その辺りを含めてお話しますので、まずは水影様のところへ案内いたします」

青は2人分の支払いを済ませると、店の外へと出て行く。

「危険な場合は単独で逃げますよ……」

「そこまで神経質になる必要もなさそうだがな。それにあの顔には見覚えがある」

「はあ……なんか楽天的に過ぎるような……」

「罨だったらそれなりに礼をしてやればいいだけだ。……里がこの状況で、それをしようとは思わんだろうが……」

再不斬は特に気にすることも無く青の後をついていき、白も肩を落としてつつも再不斬の後に続いていった。青は特に後ろを振り向くでもなく、真っ直ぐに里の中央に向けて歩いている。

青に案内されて建物の中へと入っていった。建物の構造は簡単なもので大きな広間から3方向に通路が伸びており、真正面の通路の先が水影のいる部屋のように、わざわざ看板まで掛けてある。

他の2方向には看板は無いが、同じように通路の先に扉が付いているところを見るに、この建物は3つの部屋でできていることが分かった。

青の案内の元、受付らしきところを素通りし、真ん中の通路を通り部屋の前まで来たところで、中から話し声が聞こえてくる。

「あんたはいっぴになつたら婿をとるんだい!? 早く孫の顔を見たいん

だけどね。大体私はあんたが水影になることにも未だに反対なんだよ。そんなことは他の奴に任せてあんたは早く結婚しな！ ただでさえ水影っていう肩書が付いたせいで嫁の貰い手が遠慮しちまうつてのに……そうだ！ もう一度見合いをセッティングするから出な！ いいね？」

中から聞こえてくる女の声は、まるで相手を糾弾するかのようになり、一方的に言い放っているようだった。その声を聞いて青は顔を手で覆いまたかと言わんばかりの表情をしている。

「……長十郎、お帰り願いなさい」

「はいっ！」

「ちよつとお待ち！ まだ返事を貰ってないよ！ こつちで決めてもいいんだね？ こらっ！ お放し！」

「すいません！ すいません！」

先ほどから大きな声を上げている女と、謝る声が次第に扉へと近づいてきたかというところで、一気に扉は開かれて、中から女の腰へと抱きつくような形で、部屋の外へと出そうとしている長十郎がいた。

部屋を出てからも未だに言い放ち続ける女を、長十郎は一生懸命に押しながら青たちの横を通り過ぎていく。途中通り過ぎる前に助けを求めるような目を青へと向けるが、青は気にせずに再不斬たちへと向き直った。

「お見苦しいところをお見せしました。少しここでお待ちください」

青はそう言うと言いたままの扉を通して中へと入っていく。その空いた扉から見えた水影の目は、暗く灯っていたように白には見え、一瞬ではあるが悪寒を感じて硬直してしまう。

扉が閉まり、部屋の中から凄まじい衝撃音が鳴り響いていく。その衝撃音はしばらく続き、その後しばらくしてから、静寂がその場を包んだ。そして、物音のしなくなった部屋の扉がゆっくりと開いていく。

「お……お待たせ……しました」

中から現れた青は身体中がボロボロになっており、顔などは腫れあがっていた。そんなことを気にもせず、再不斬は中へと入っていく。

が、白はそうはいかずに中で何があったかを推察し、顔を引き攣らせたまま中へと入っていく。

「お待ちしておりました。再不斬さん」

「お前が今の水影か」

「はい。5代目水影……照美と言います」

2人は普通に挨拶を交わしていたが、部屋の中のはあちこちに散乱し、挙句には壁に穴が開いている。そんなことを気にせず、水影と再不斬がしばらく相手を探るように見詰め合っていると、扉が開き長十郎が戻ってきた。

「水影様の母上を部屋へと……っ!? 再不斬先輩っ!」

先ほど青と一緒に通路に居たのだが、女を押すことに精一杯で気付かなかったのだらう。部屋を出た時に長十郎の目に見えたのは青のみで、その後青が長十郎の視界を塞ぐような形で向き直ったため、再不斬を隠すような形となってしまったのだ。

そこで、再不斬は水影へと向けていた視線を、声を掛けてきた長十郎へと向けて訝しんだ。

「……誰だ?」

再不斬は長十郎に見覚えが無いのだろう。青の時とは違い明らかに不審がつている。特にその視線は背中に背負ったヒラメカレイへと注がれていた。

「長十郎といいます! ああ、再不斬先輩の後輩になります!」

「……まさかとは思いますが、忍び刀をこんなガキにくれてやるくらい人材不足なのか?」

興味が無くなったのか、再不斬は視線を水影へと戻し尋ねる。

「才能がありますよ。ヒラメカレイを扱えるほどには」

「……それで? ここに招いた理由はなんだ?」

「既に分かっておられるのではありませんか?」

「霧隠れの里に戻れと言う話か……」

「そうです」

再不斬は予想がついていたようで、水影から順に青、長十郎と見ていく。

「俺の今の扱いはどうなっている?」

ここで再不斬の問いに答えたのは青だった。青は、水影に目線を向けて頷き、水影が頷き返したのを確認して一步前に進み出る。

「それについてですが、……あの時のクーデターについては、里の者は皆、肯定的です。しかし、4代目水影様にとつては反乱者……そのため、抜け忍として取り扱っていました。ですが、おかしいと思いませんでしたか? 抜け忍なれば、追い忍が幾人も出されるはずですよ。その追い忍があなたの元へ来ることはありませんでしょうか?」

青は同意と確認を含めて再不斬へと問いたました。

「……ないな。逆に部下が付いてきたくらいだ」

「ええ。本来ならば同じ意思を持つ上忍など他にも数人行きそうだったのですが、それは思い留まってもらいました。……再びクーデターを起こすために」

「それにしても、そう簡単にあいつをやれるとは思わないが……どうやった? 俺ですら、隙について手傷を負わせるのがやつとだったぞ」

再不斬は再度この部屋にいる者たちへと視線を配り、あたかも、お前たちでは倒せないだろうという言い方をする。しかし、気分を害したような表情をする者は誰もいなかった。

「確かに、正面から立ち向かえば、かなりの被害を覚悟せねばなりませんでした。尾獣を完全にコントロールできた人でしたから……しかし、4代目水影様は何者かに操られていただけなのです。その幻術を解いて元に戻っていただきました」

「なるほどな……しかし、それだとヤグラの奴は生きていることになるが?」

再不斬は青の説明に納得して頷いた。思い当たる節があったのだろう、更に青へと質問を重ねていく。

「それが……最初は自分のされていたことを悔いて、里のためにできることを言ってくれとまで申し出ていただけたのですが……色々と話をお聞きする前に突然行方不明になられたのです」

「行方不明だと?」

「はい。こちらとしても、操られていたとはいえ、里を恐怖政治で縛っていた4代目を表に出すわけにもいきませんでしたし、何より4代目を倒したということを里内に広めた後だったため、行方不明であることを隠す必要がありました。今も捜索を続けているのですが……見つかっておりません……」

青は4代目水影とのやり取りを思い出した上で、行方不明になり、更に見つからないことへの憤りがあるのだろう。苦々しい表情をしている。

「口を挟んですいませんが、尾獣の尾の数は幾つですか？」

「3つだが？」

「3つですか……（あれ？ 3尾って亀だったよな……確かどつかの湖に野放しになっていたような……）」

「何かご存知か？」

「いえ。ただ気になったもので、話を続けてください」

白が口を挟んだことで、全員の視線は白へと集まる。そこへ、水影が口を開いた。

「そちらの子の紹介をしていただけませんか？」

「そう言えばしてないな」

今思い出したかのように再不斬は言う、視線を白へと向けて催促する。白は、どこか諦めたかのようにその視線を受けて、本日幾度目になるのか分からないほどの溜息を漏らしながら自己紹介を行った。

「はあ……白と言います。再不斬さんに無理やり連れて来られた、可哀想でひ弱な一般人です！」

白は最後の方を力強く宣言してアピールするも、再不斬の次の言葉によりすべてが台無しにされてしまう。

「そっちの長十郎とかいうガキよりも上だ。それにこいつも元々この里の者だから、この場に居ても問題ないだろう」

再不斬の言葉に部屋に居る全員が驚きを隠せていなかった。更に探りを入れるように皆の視線に力が込められていく。

（再不斬さん余計なこと言いますよ……これで目を付けられること間違いなし……）

「しかし、見たところ長十郎とあまり変わらぬ年齢……再不斬様が里を出られた年月を考えると、まだ赤子だったのでは……？」

「そうだな……年齢的にはな」

「……？」

明らかに白の話になり始めたことで、白は慌てて話題を変えにくく。これ以上自分の情報を与えたくないために。

「その話はいいじゃないですか。話は再不斬さんがこの里に戻るか否かですよ？　話を進めましょう」

「……そうですね。まずはそこからお聞かせ願えますか？」

「……そうだな「婚約者が来たんだって!?!」……」

再不斬が答えを出そうとしたところで、その女は扉を壊す勢いで開け放つと、凄まじい剣幕で部屋へと入ってきた。それを見て霧隠れの3人は溜息を漏らしていたのは言うまでもない。

81 交渉？

部屋へと入ってきた女は、部屋を見渡してから再不斬へと目を付けると、襲い掛からんばかりの勢いで再不斬へと近付いていく。

「あんたが婚約者だね！ ふんふん……なかなかいい身体をしてるじゃないか。これなら安心だ！」

女は、再不斬をバシバシと叩きながらいい放つ。それに対して、再不斬は気にした様子もない。

「勘違いするな。俺は婚約者などではない」

「違うのかい？ それじゃあ一体……？」

再不斬の言葉に、女は再度部屋を見渡すと白へと目を付ける。

「ん？ もしかしてあんたかい？ まさか……同性愛者になったんじゃないだろうね?! ……見知らぬ男を連れ込んだというから期待したというのに……」

女は白を見て心底がっかりしたような顔をする。これに白は少し苛立ち思わず言い返していた。

「あのですね、一応こんな見た目してますが男です（なんだこの人は？）」

「そうなのかい？」

女は腕を組むと、値踏みするように上から下まで白を見ながら、白の周りを回り始めた。

白は、助けを乞うべく再不斬へと視線を向けるが、明らかに面白そうなものでも見るかのような表情をしている。白は再不斬からの援護は無いと分かり、すぐさま諦め、今度は水影へと視線を向けるも、水影は俯いて小刻みに震えていた。続いて青と長十郎に視線を向けても、無理とばかりに顔と両手を振っている。

「うーん。なんかひ弱そうだね。こんなので大丈夫なのかい？」

「言ってる意味が分かりませんが……まさか、婚約者どうのという話じゃないですよね？」

「分かってるんじゃないか」

「婚約者では絶対にありません！」

力強く否定した次の瞬間、白は壁に向けて吹き飛んでいた。白は壁を突き破り、その先へと飛んでいく。それを見て、青と長十郎は青ざめた表情をし、女は何が起こったのか分からないのか、穴の開いた壁をポカーンと見つめるばかりだ。

「長十郎」

「はいっ!？」

「わかってますね?」

「もちろんです!」

いつの間にも移動したのか、水影は白のいた場所におり、長十郎へと微笑んでいた。この笑顔を見て、青と長十郎は2人して固まってしまいが、長十郎だけは、声を掛けられたことにより動き出す。

そして再び長十郎の手により、女は部屋の外へと出されていった……大声でわめき散らしながら……。

「あれはなんだ?」

「その……水影様の母親です……」

「気にしないで……それよりも返事を聞かせてもらえるかしら?」

青はとても言い難そうにし、水影は再不斬に気にするなど言いつつ、水影自身が気にしているのが、その表情から分かる。顔は笑っているように見えるが、目だけが違ったからだ。

「死ぬかと思える衝撃が身体をはしりましたよ」

壊れた壁から白が姿を現した。その姿は壁を突き破ったことによる土煙で、汚れてはいたが目立つところに傷は一切なかった。それを見て水影は少し驚いたような表情し、青に至っては驚愕していた。

「あら? 無事だったの? 見た目と違って意外と丈夫なようね」

「丈夫ではないんですが……」

あの時、完全に油断していた白は、水影からの攻撃を受けて吹き飛ばされたが、壁に当たるまでに——風遁・風鎧——を展開して壁への衝突による衝撃を緩和していた。壁を簡単に突き破ったのは風遁によるためである。ただ、攻撃を受けた箇所については無事ではなく、治療のために少し時間をかけていたのだった。

「返事については少し時間を貰う。それと、この里についてだが、どこ

かと戦争でもしたのか？」

「いえ……それが……戦争ではないのですが、何者かが城壁を攻撃してきた上に、里内に起爆札を配置して爆破してきたのです。辛うじて死んだ者はいませんが、負傷者は多数出ています。壁の外に出たものは、いつのまにか倒されていたり、操られていたり、犯人の特定には至っていません。……ただ、内部犯の可能性もあります」

再不斬は白をチラリと見やり答えると、それに対して硬直から復帰した青が答えてきた。

「目的は分かっているのか？」

「依然不明なままです。水影様がそれらしき者と交戦したようなのですが……」

「完全に逃げられました。ただ、この里の暗部の面をしていたので、少し油断していましたが、あのようなものはありません。……おそらくは、この里の者ではないでしょうが……」

水影は逃げられたことに対して不機嫌そうにしている。白と青は、水影がまた爆発するのではないかと、警戒心を高めてじわじわと後ずさっていた。

「ただ、忍びの1名が、この里の地下を通って来たところを考えると、この里の者ではないとは言い切れません。あの地下は、その封印されていた扉から行ける場所でした。今は地下内部の構造を把握させていますが、特にこれといった情報は上がっていません」

「……あの地下には忍び刀があるはずだが……前の水影がそのようなことを言っていた」

「!?」

（再不斬さーん。これ以上の情報をこの人たちに与えないで欲しいんですが……）

白の向ける視線と心の叫びも虚しく、その想いは叶いそうになかった。話は更に続き、再不斬の言葉に水影と青は驚きつつも聞き返してきたのだ。

「それが本当であれば、地下に入った者の目的は忍び刀……ということに？」

「おそらくそうだろうな、単独で水影とやり合おうとは普通考えないだろう。それならば、物を回収するために動いたと見るのが自然だ……忍び刀の所在については何処まで把握している？」

「長十郎の所持している双刀・ヒラメカレイと貴方の所持している断刀・首切包丁。干柿鬼鮫の大刀・鮫肌に、雷牙と名乗る者が雷刀・牙を盗んだことまでは把握しています。それ以外の3つの忍び刀についてのは不明です」

「……と言うことは、地下にあったのはその3つあたりか……」

「はい。鈍刀・兜割、長刀・縫い針、爆刀・飛沫が盗まれたとみて間違いないでしょう」

その場の雰囲気は重苦しく静まり返っていた。しかし、1人だけ心の中で安堵している者がいる。

（危なかった……選んだのが雷刀じゃなかったら使えないところだった……）

影分身にて選んだ一振りというのが、雷刀・牙であった。他の忍び刀については、取扱いに慣れるまでに時間がかかりそうであり、使い勝手が悪そうなために要らないと判断して、カブトに送ったのである。今回はそれが良い方向に進んでいた。

「明日の午前中にでも返事はしよう」

「それでしたら、宿の手配をいたします」

「……分かった」

再不斬が返事をする、青は水影に顔を向ける。それに対して水影が頷くと青は部屋を後にした。

「再不斬様は今までどこに居られたのですか？」

「いい加減様を付けなくてもいい。それと敬語もやめろ、曲がりなりにも水影だろうが」

明らかに再不斬の態度の方が水影よりもデカいのだが、本人は全く気にしていないようだった。

「では、再不斬は今までどこに？」

「……目的が無くなってしまったから言うが、今は波の国にいる」

「波の国……意外と近くにいたのね」

「少しでも他国に目を向けていれば、すぐに分かりそうなものだがな」
「恥ずかしいことだけど、未だ自国を把握するだけで精一杯の状況なのよ。しかも、海で隔たれているから余計に情報を集めにくいわ」
水影は溜息を吐きつつ、現在の状況を憂いていた。なかなか思うように進んでいないためだろう。そこへ、青が部屋へと戻ってくる。
「準備が整いましたのでご案内いたします」

青の案内の元、宿へと到着した再不斬と白は、それぞれの部屋へと向かった後に、再不斬の部屋へと集まっていた。

「監視は何人だ？」

「……4人ですね。まあ妥当なところかと」

「まあいい。水影も見だしこの国にもう用は無いな」

「と言うことは、断るんですか？」

「今更、誰かの下に付く気にならないだけだ」

暗部の頃と今の生活を比べているのだろう。再不斬は面倒臭げに答えた。

「白」

突然、口調を変えて再不斬が白へと呼び掛けた。

「何ですか？」

「忍び刀を今いくつ持っている？」

再不斬の言った言葉に一瞬白は頭が真っ白になってしまふ。しかし、よく考えれば分かることで、以前に忍び刀が欲しいと言ったことと、地下にそういったものがあると言うことを、再不斬から聞いていたことを考えると、タイミング的に白が疑われるのは当然だろう。

「（誤魔化すのは無理かな）雷刀・牙だけですな」

「それだけか……まあいい。それにしても、雷刀というのは都合がいいな。どこぞのやつが持っていたことになってるんだ。お前が手に入れたとしても問題ないだろう。元々忍び刀の何れかをお前に持たせようと思っていたしな。……同盟を結ぶまでは隠しておけ」

「分かりました」

白は返事を返したものの、複雑な表情をしていた。その理由は、特に危険なことをせずとも、忍び刀が手に入ったかもしれないのだ。

白のそのような表情を読み取ってか、再不斬は忠告する。

「今後俺の楽しみを奪うような真似をするな」

「危険を回避したただけですよ。おそらく再不斬さんでは今の水影には勝てません」

「なぜそう思う？」

再不斬は白の言葉に怒るでもなく問い返してきた。

「水影の性質は水、火、土。しかも血継限界2つ持ちです。近付いたらその内のひとつで身体を溶かされるし、離ればおそらく忍術でくるでしょう。再不斬さんの性質は水ですから、相性を考えると……」

「……なるほどな」

再不斬は自分の中でもシミュレーションしてみたのだろう。白の説明に納得いったのか、軽く頷いた。

「それはそうと、再不斬さんは水影になる気はないんですか？ 水影と結婚すれば、水影になれそうな感じでしたか？」

「水影のやっつてることを考えるとやる気にはならんな」

「クーデター成功したらどうするつもりだったんですか？」

「その時は、適当にまとめられそうなやつを置いとけばいいだろう」

「……その辺りは適当なんですね……」

「過ぎたことを掘り返すな。明日は朝食後すぐに水影のところに行くぞ」

「分かりました」

その後、白は自室へと戻り、雷刀・牙を持った影分身を監視の目を掻い潜らせて白の元へと来させ、雷刀・牙を受け取った。それをさまざま巻物へと収めて懐に仕舞い込み、影分身を解除した。

（断った場合忍び刀を返せとか言われそうだけど、再不斬さんどうする気だろうか？）

白は横になりながら、夕食までの間休憩するのだった。

翌日。朝食を食べ終えた再不斬と白は、水影の元へと来ていた。建物に入って行って、何かを言おうとしている受付を素通りし、水影の執務室へと足を運び、何も言わずに扉を開け放った。

「再不斬さん。さすがにこれは如何なものかと」

「昨日既に言ったはずだ。午前中には行くと」

「それはそうですね……」

再不斬は然も当然とばかりに部屋の中へと入っていく。部屋の中には水影と青が居り、入ってくるのが分かっていたかのように、驚くことも無く白たちを見ている。

「おはようございます。……返事をお聞かせ願えるということでしたが、早速ですが結論をお聞かせ願えますか？」

「ここに戻るつもりは無い」

「……そうですか。しかし、それですとこちらとしても困ります。ですので「最後まで話を聞け」……？」

青は事前に水影と話し合っていたのだろう。断られた場合の条件を再不斬へと言おうとした矢先に、再不斬によって阻まれる。

「昨日も水影には言ったが、俺は今波の国にいる」

「はい。それはお聞きしました」

「ガトーカンパニーと言う言葉に聞き覚えはないか？」

「水の国と波の国の運輸を請け負っている会社、という程度の知識はありますが……それがなにか？」

「実質波の国は、ガトーカンパニーの支配下に置かれていると言ってもいいだろう。その会社を運営しているのが俺の部下だ」

ここまで再不斬が言ったところで、水影と青はある程度のことを察したのか、先ほどまで難しい表情をしていたが、驚いたような表情へと変わり、話しの続きを促してくる。

「つまり何が言いたいのですか？」

「同盟と言う形ではどうか？ 波の国には大名もいるが、金の無い大名などなんの力もない。早い話が、ガトーカンパニーが波の国のトップにいるから、これは波の国の総意と取ってもいいということだ」

「……………」

再不斬の言葉に水影と青は考え込む。途中から予想はしていたが、そう簡単に決めれることではない。この時代で同盟などしてもあつてないようなものだ。しかし、相手は再不斬であり、霧隠れの里の英

雄でもある。その相手からの条件——内容は悪いものではなかった。

ガトーカンパニーは水の国と波の国との運搬をほぼ取り仕切っている。これを敵に回せば、情報や物が遮断されるのは間違いない。しかし、逆に同盟ともなれば関係は今まで通りな上に、こちらが何かしら譲歩すれば多少の便宜は図ってもらえるだろう。しかも、他の4大国の情報も入りやすくなる。水の国にとってはメリツトの大きな話であった。

「それはとても魅力的な提案ですが、こちらのメリツトが大きすぎます。あなたの狙いはなんですか？」

それはそうだろう。明らかに波の国としてはメリツトが少なすぎた。水の国を敵に回さないというのも大きいかもしれないが、ただそれだけだ。ガトーカンパニーに攻撃を加えることで損をするのは水の国なのである。敵対したからといっても、そう簡単に手が出せるものではなかった。

「最近だが、木の葉の里に対して砂隠れの里と音隠れの里が手を組み戦争を仕掛けた。結果は木の葉の里が勝ったようだが、人的被害はともかく、物的被害は木の葉の里しか被っていない。しかも、その戦いで火影が死んだようだ」

「っ!?! しかし、それだと、砂隠れの里は木の葉の里との同盟を破棄したということ?」

再不斬の言った内容は、初耳だったのだろう水影と青を驚かせるに十分なものだった。しかも、同盟を破棄したという事実で、再不斬の先ほど話した内容が矛盾してくる。これでは、いつでも裏切ると言っているようなものだ。

「正確には破棄ではない。風影が大蛇丸により殺され操られていたと公式に発表されている」

「そのようなことがあったのですね」

「本題はここからだ。……早い話が、いつ襲撃を受けるとも分からんからな、それなりの武力が欲しいと言うわけだ」

「その為の同盟と言うわけですね。確かに水の国への大規模な侵攻は

難しいでしょうが、波の国は陸続き……襲撃されればひと溜りもないでしょう」

「ああ。どちらにとつてもメリツトのある話だと思いが?」

「そうですね。その話が本当であれば、この話は受けましょう。先ずは事実確認をするから、それが終わり次第、後日そちらへと伺います。詳細はその時に決めましょう」

「ああ。それで問題ない」

水影は少し考えはしたが、既に同盟に関しては受ける気があるようで、顔を綻ばせている。青も話の成り行きから渋い顔をしていたが、最後には安堵の表情をしていた。

「それでは帰る。いくぞ白」

「はあ……俺ってなんのために来たのか分かりませんね。これじゃ殴られにきただけですよ……」

「波の国と言っても広いです。場所はどこになるのでしょうか?」

「……白、お前の出番だ、説明してやれ」

「……そんな出番はいらないです……」

ぶつぶつと文句を言いつつも、白は青に紙と書くものを用意してもらい、簡易な地図を書くと共に紹介状を認めた。

「これを見せればアポなしでも通してもらえます。くれぐれも無くさないでください」

「分かっている。くそれにしても、昨日水影様に殴られたようだが大丈夫だったのか?」

「く大丈夫なわけじゃないですよ。術が間に合わなければもつと酷い目に遭ってました」

「くあの一瞬で術を使えたのか!」

「くええ。まあく それではこれで失礼しますね」

紹介状と地図を手渡すと、再不斬と共に白は波の国へと戻っていた。

82 クリスマス？

場所はガトールカンパニー会議室。そこには、3人の姿があった。白、女忍者、ハナビである。

波の国へと戻ってきた白は、再不斬に女忍者へ説明しておくように言われたため、会議室にて事の経緯を簡潔に説明していた。

「と言うわけで戦争を回避できた上に、同盟を結ぶことになりました」

「よくやったわ！ 婚約など^{もっ}以ての外^{ほか}！」

「……もうそこまで思ってるんなら、そろそろ自分からアピールしたら？」

女忍者の態度は、再不斬のことについてあからさまにも関わらず、本人を前にすると全くその気配を見せなかった。そのことについて白は言ったのだが、女忍者は聞く耳を持たずに座ったままガッツポーズを決めている。

白は呆れたようにその光景を見ていたが、次のハナビの発言で少し考え込んでしまった。

「先生が言っていた任務というのは、霧隠れの里と波の国とを同盟させることだったのですか？」

「任務？」

女忍者はハナビの言葉に聞き返すが、その前に何か言わねばと白が口を開く。

「あ……いや、あれだよ。うん。今回の戦争回避の話だよ」

ハナビを連れて来る前に、長期任務で里を離れる旨を言っていたことを思い出した白は、慌てたように言い訳をする。それを知らない女忍者は、任務のことを白の理由に当て嵌めて考えたため、白をフォローする形となった。

「……そうね。そのためにお金使ったんだし。……それにしても、よく引き受けるところがあつたわね。普通引き受けないわよ？ 直接やりあうわけではないといえ、里を襲うなんて」

「そのあたりは、秘密ってことで」

暁の事を明かすわけにもいかず、白は端的に答える。

「まあ、うまくいったんだからいいわ。……それよりも、減った分のお金は回収するわよ！」

「はっ?」

「あんたの説明だと、こっちに戦力をもらえるのはいいんだけど、理由が不明じゃない? まるで、どこかからの襲撃を警戒してるみたいなんだけど? まあ、どちらにしても維持するためにはお金は必要よね」

白は、ハナビがいたため、木の葉の里のことを言わずに説明したのだが、女忍者にはそこで引つ掛かってしまったようだった。

(やはり言うべきかな……? 人の噂に耳を傾けていればその内分かることだし……)

白はハナビへと意識を向けつつ、女忍者へと説明する。

「木の葉の里が、砂隠れの里に戦争を仕掛けられたんですよ。結果的に、木の葉の里の勝利で終わりましたけどね。波の国としても、いつ、どこの国から戦争を仕掛けられないとも限りませんから。そのため
の武力です」

予想通りと言うべきだろう。ハナビは、白の最初の言葉で顔を青くし、勝利という言葉で安堵していた。離れていたとしても、里のことが心配なのだろう。

「理由は分かったから、稼ぐためのアイディアを募集します」

「お金と再不斬さんとどっちが大事なんですか?」

純粹に気になり、白は女忍者へと問いかける。

「再不斬様に決まってるでしょ。……でも、お金がないと満足に生活できないのも、また事実なのよね」

即答で断言し、どこか勝ち誇ったように言い切るが、後の言葉で色々と台無しだった。

「と言うわけで、話を脱線させようとしても無駄よ。早くアイディアを出しなさい」

「自分で出す気全くなしですか……」

「まずは、人の話を聞くことが大事だと思うのよね」

言っていることは、正しく聞こえるのだが、これまでのことを考え

ると、考える気がないのが分かっているだけに、白は呆れていた。「では、季節も冬ということで、クリスマスなんかどうですか？」

「クリスマス？」

クリスマスという単語に聞き覚えがないのだろう。2人して同じ反応を示した。

「えーっと。家族で祝う日と言うか、カップルで祝う日と言うか、なんて言ったらいいのかな……あれだ！ サンタが、寝ている子の枕元にプレゼントを置いていくんですよ」

「祝う日を作るというのは、取り敢えず百歩譲っていいでしょう。でもね、サンタとか言う怪しいやつを、枕元まで近付かせるなんてもつての他よ！ どうせ、プレゼントとか言うのも、寝首をかくとかいうことでしょうか？ そんなホラーはいらさないから」

家族と言う言葉に反応したハナビは、見るからに落ち込み、さらに女忍者の言うサンタ像を想像したのか、顔色が悪くなっていった。

「なにそのサンタ……プレゼントって言ったたら、子供が欲しがっている物を置いていくに決まってるでしょ」

「なんで子供だけなのよ？ しかもどうやってその子供の欲しがっている物が分かるのよ？ ……私にくれたっていいじゃない！ そのサンタとか言うのはケチなの？ それとも小さい子が好きな異常性癖でもあるの？」

女忍者は、自分のことを棚にあげてケチだの文句をいい始め、更には変態扱いである。このままでは、どんどん悪い方向に進むと思っただ白は、話を少し戻してから話を進めることにした。

「はあ……サンタの件は忘れていいから。……取り敢えずお金を稼ぐのに何か特別な日を作って、それを祝うための品物がある程度安く売り捌くことで、売り上げを伸ばしたらいいと思います」

「特別な日って言うのが、さっきの話ってわけね……でも、いきなり特別な日って言われてもなかなかピンとこないわよ？」

「そこはこっちで勝手に作るんですよ。ガトーカンパニーの創業記念日とか、切っ掛けはなんでもいいからこの日ってのを作るわけ」

段々とどうでもよくなってきた白は、言う内容が適当になり始める

が、次の女忍者の言葉に少し驚く。

「ようするにバレンタインデーみたいなものね」

「あ。バレンタインデーはあるんだ」

「分かったわ。その案でいきましよう」

女忍者が頷き納得したところで、それまで黙っていたハナビが白に声を掛けてきた。

「先生」

「ん？ 何？」

「あの……任務が完了したと言うことは……木の葉に帰るんでしょうか？」

ハナビは不安そうな表情をしながら白を見詰めてくる。やっと慣れ始めた生活——居場所が終わりを迎えようとしていることに対してのものだろう。

「いや。このままここに居ようと思ってるけど？ そろそろ長期休暇を貰ってもいいと思うんだよね。伝説の3忍である自来也って人も、任務が終わってから数年間だけど、自己判断で里に帰らなかつたみたいだし」

「……そうですか」

木の葉の里へは帰らないという言葉に、ホッと一安心したハナビはそれも一瞬のことで、表情を引き締めると更に白へと質問していく。「木の葉の里と砂隠れの里の戦争と言うことでしたが、被害はどのくらい出ているのでしょうか？」

「大きなところでは火影の死亡。これは大蛇丸にやられてる。後は、木の葉の里の建物が結構損壊してるけど、住民の避難は無事終えてるからそちらは被害なし。但し、忍びは結構な数やられてる」

「火影が死んだのは聞いてたけど、犯人があのだ伝説の3忍とはね……」
初めて聞いた話だったのだろう。ハナビはショックを隠せずにはなく、その犯人が大蛇丸であることの方に驚いているようだった。

その後、記念日をクリスマスとして名づけ、数日後に開催するべく計画を練っていくが、その間もハナビは俯いたまま何も喋ることはな

かった。

数日後。クリスマスという名のイベントを波の国全体で行った。祝い事に未だ貧しさの名残を残している波の国の人たちが、お金を出すのかと言う不安はあったが、いつもより遥かに安いと言うことと、祝うための品物を抱き合わせ商法で出すことにより、意外と好調な売り出しをしている。

また、期間を1日とは定めずに1週間程を予定しているため、ひとつひとつの利益は薄いのが、数を売ること少々の損など度外視しているほどの状態になっていた。

「まさか1週間でここまで売り上げが出るとは思わなかったわ！」

「はいはい、良かったですね」

朝からハイテンションで喜ぶ女忍者を尻目に、白は未だに起きてこないハナビの事を思っていた。

(いつもなら起きてきていてもおかしくないんだけど……?)

それからしばらくしてから、部屋の扉が開く。そこから現れたのはハナビだった。ハナビは片手にチャクラ刀を持って顔を俯かせたままゆつくりと入ってくる。

女忍者は不審に思ったのか、椅子から立ち上がりハナビに対して警戒し始めた。それを白は片手を上げて止める。それに疑問を抱いたのか女忍者は後ろに下がるのみで、白とハナビの様子を窺うことに決めたようだ。

入ってきたハナビはおもむろに白へと話しだした。

「先生……数日前にサンタについてお話を受けたと思うのですが……」

「したね。見たところ、そのチャクラ刀がサンタからのプレゼントだったんだろ？ サンタは良い子にはプレゼントを贈る物なんだよ(何が欲しいかよく分からなかったから、取り敢えずチャクラ刀にしてみたんだが……)」

ハナビの枕元へとチャクラ刀を置いた犯人は白であった。ハナビを起こさないように隠遁を使い、ゆつくりと音を立てずに近付いてプ

レゼントを置いていったのである。

「そのサンタと名乗る者が近づいたにも関わらず、気付けませんでした……しかも、置かれていたのはこのチャクラ刀です。……これはいつでも寝首を搔けるぞと言うことでしょうか？ 確かあの時、そのようなことを言っていたと思うのですが……」

ハナビはここ最近暗い表情をしていたが、そこへ更に不安が混ざったような顔をしている。

「違うから……っていうか、もういいか……それ置いたの俺だから。クリスマスプレゼントってことで、ハナビが何が欲しいのかよくわからなかったからチャクラ刀にしといたんだけど」

「……そうだったんですか……」

ハナビの顔からは不安は取り除かれたようだが、未だに暗い表情なのは変わりなかった。その理由を聞こうとしたところで、女忍者が割り込んでくる。

「あんたね。女の子になんてもの贈ってるのよ！」

「いや、自分の身を護れる武器くらい持ってた方がいいかなと思ったんだけど……」

女忍者の剣幕は、白を少し後ろへ下がらせるほどのものだった。

「まず、見た目がいけないのよね。特にそのサングラス！ そんな見た目だと女の子に見えないわ！ 今日から私が指導してあげます」

ハナビの服装は最初に買った物ではなく、今は動きやすさを重視した服を着ており、その服にサングラスという、あまり合わない恰好なのは間違いなかった。

「仕事があるからそんな時間ないでしょ」

「時間なんて、なければ作ればいいのよ！」

「名言ですね」

他人事のように話していたのだが、次の言葉でそれが他人事ではないことに気付かされる。

「と言うわけで、白。あんたが私の代わりに含めてやっつくのよ。期間未定。以上」

「……そんなの承諾するわけないでしょ！ なんで俺が1人でやらな

「いといけないんだよ！」

「あんた。勝手に居なくなつたわよね？ 罪悪感とかないわけ？ それにここで働く以上一番偉いのは再不斬様だけど、次いで偉いのは、わ・た・し、なのよ？ そのところ分かつてる？ まあ、安心しなさい、この子は私が立派な淑女に育て上げて見せるから、それまでの辛抱よ」

「……ハナビ……頑張ってきてくれ……」

「えっ？ あの？ どういうことでしょうか？」

話の展開に付いていけないハナビは困惑して、白と女忍者を見比べている。自分がこれから何かをするのは理解できるが、実際に何をするのか内容が分からないためだろう。そんなことは気にしないとばかりに、女忍者はハナビに近付き、腕を取るとそのまま部屋を出て行ってしまった。

白はこれからの仕事の事を考えつつも、先ほど言いかけた内容を思い出す。

（まあ、これで暗くなってる暇なんて無くなるだろう。あの女かなり強引だからな……。それにしてもなんでハナビはあんなに元気がないんだ？）

そこから冬が越す頃まで、白1人で仕事をこなすことになったのだった。

83 病気？

波の国は、冬が過ぎ去り暖かくなってきていた。

冬の間、水の国からの使者として、あの時の二人……青と長十郎が来た。それに対して、ガトーカンパニーというより、波の国代表として出たのは、再不斬と女忍者の2人だ。

水の国から使者が来る前に、波の国の大名には話を通しており、内容としても、波の国に不利益を被るものではないため、大名たちは賛同していった。

実際は、武力を持つことによつて、他国から戦争の準備をしているなどで見られる可能性もあるのだが、大名たちは目先の安全に飛び付いてきたのだ。中には渋い顔をする者もいたが、交渉した結果、了解を得ている。その交渉が、恐喝に近い形になっていたのは、言うまでもない。

同盟の条約については、双方ともに協力し合うという内容であり、水の国からは人材を、波の国からは資金を主に提供することが記されている。ただし、規模はそれほど大きなものではない。

この内容では、波の国の情報が筒抜けなのでは、という意見もあったが、そもそも会社を運営しているだけであり、怪しいことをしていないため、不正をしない限り情報が漏れようと問題ないのだった。

約1名の行動は別だったが、そもそも、その1名の行動についていけるほどの忍が、水の国から派遣できるはずもない。

その1名は、今小さな小屋で患者を診ていた。その1名は言わずと知れた白のことである。白は医療の腕を落とさない目的で、定期的に診療所を開いていたのだった。

ただ、その医療の腕が良かったために、波の国に静かに噂が広まっていく。

白の格好は、頭には髪を押さえるための帽子を目深に被り、再不斬と同じ様に口を布で覆っている。眼鏡の代わりにサングラスを掛け、服は白衣を着ていた。

そのような格好だったため、噂が広がっていることを把握してはい

だが、白が気にすることはなかった。変化の術を使用してはいなかったが、見ただけでは、白であると分かるはずがないからである。しかし、その考えもある人物が現れるまでだった。

「次の人どうぞ〜」

この時、白は特に気にすることも無く、いつも通りの対応をしていた。医療の腕を落とさないことが目的なので、比較的安い金額であらゆる怪我や病気を診ていたし、医者自体が少ないこの国で、その医者を害するような輩は現れないという思いもあり、油断していたと言ってもいいだろう。

「失礼する」

その人物を見てしまった瞬間、白は驚いた顔で呆然としてしまっていた。こんなところに来るなんて思いもよらなかつたからである。白には、止まっていたのは数時間にも感じられるほどだったが、実際は数分にすぎない。

その人物と言うのが――

「<うちはイタチ>……」

「……なるほど。……そうだな、久しぶり……とでも言った方がいいか?」

白の呟きが聞こえたのか、イタチが応えてきた。しかも、白にとっては聞き捨てならない言葉と共に。

「なぜここに? ……いえ、久しぶりというのはどういう意味ですか?」

「霧隠れの里で会っただろう? ……写輪眼はチャクラの質を見抜く。つまり、お前のチャクラと、霧隠れの里で会った影分身のチャクラが、一緒だったから久しぶりと言っただけだ。ここにいる理由はお前の今の立場を考えれば分かることだろう?」

写輪眼と言われて、白は自分がイタチの目を見ていたことに気が付き、慌てて視線を外した。しかし、イタチはそんな白を特に気にした様子もなく、話し続けてきた。

「もう幻術を掛ける気はない」

イタチの言葉を全面的に信用できず、白は視線をはずしたままでい

だが、イタチの『もう』という言葉に反応する。

それは即ち――

「既に幻術を掛けられた後……ということですか……」

「こちらも、色々事情があつてな……。保険が欲しかったただけだ。他意はない」

「保険……ですか？」

「俺の事を漏らされては困るからな。……木の葉にいた忍が、波の国にいるその理由を知った。これだけ言えば分かるな？」

イタチは簡単に言ったが、白にとっては今後の命運を握られたに等しかった。それを知ってイタチはわざと言っているのだろう。一種の脅しだった。

「それで、なにが目的なんですか？」

「聞いてなかったのか？ ……医者のところに来る用事と言えばひとつしかないだろう？」

ここで、イタチが病に侵されていたことを白は思い出した。今がどの程度進行していて、それがどのような病なのか……白に興味を抱かせるものだった。白は早速イタチを診ることにする。確かに、病に侵されていることなど、他の者に知られれば自分の弱点を晒しているようなものだ。保険が欲しいと言うのはそういうことなのだろう。

「取り合えず、自覚症状を教えてください」

イタチに服を脱いでもらい、椅子に座って貰って診察するが、痩せていること以外では外見上特に異常は見られない。しかし、次の瞬間にいきなりイタチが苦しい表情をする。

「っ!？」

イタチの病状はかなり危険な所まできているようで、両手で口元を覆って、上半身を前倒しにしている。その手の隙間からは血が滴り落ちていた。

その後の診察で白が出した結論は――

「イタチさん……もう、今後はあまり動かず療養してください」

「それはできない。……それに手遅れなのだろう？ 確認したいのは、後どれくらい保つのかだ」

寝台の上に座りながら、イタチは白を見詰めている。ここまできてはと、白もイタチから視線を外さずに目を合わせ、溜息を付きながらも、本当の事を答える。

「このままだと保って1年というところでしようか……。薬で多少延命できるかもしれませんが、根本的な解決にはなりません」

「薬だとどれくらい保つ？」

「じつと療養したと仮定するならば……。多分5年はいけると思いますが、それ以上は分かりません。どんどん病が身体を侵食していく訳ですから……。今の俺の知識では、薬である程度抑えるだけで精一杯です。それでも病が止まるわけではありません」

「……………」

自分の病状をある程度は把握していたのだろう。実際の年数を知らされて、イタチは目を閉じ考え込んだ。おそらくは今後の事を考えているのだろう。イタチとサスケの絡みを考えると、残り約3年。これから色々と動くことを考えれば、病の進捗と残りの年数との辻褄は合う。その事を考えて、イタチが意思を曲げるつもりがないことを確信した白は、止まらないことを前提に話を進めていく。

「……療養する気は無いようですね。薬を処方します。恐らくたまに激痛がはしっていると思いますが、それを和らげることが出来るものと、病状の進行を遅らせるものです。……後、この近くにいる場合は薬をお渡しできますが、一応薬の成分表をお渡ししておきます。ここに来れない場合は自作してください」

「すまないな」

「しばらくお待ちください」

イタチの目の前で、薬草を煎じて解説をしながら薬を作っていく。成分表を渡そうとしたのだが、覚えるから構わないと言われたためだ。確かに、成分表という物を残すことにより、その内容が分かる者が見れば、その所持者の病が分かる恐れがある。懸念材料は少しでも減らしておきたいのだろう。

「痛み止めはすぐに効くわけではありません。それと、痛みは止まりますが、それに伴い身体の動きも鈍くなりますから注意してください」

い」

「分かった」

白の言葉に、イタチは頷く。そんなイタチへと白は薬を手渡してから、少し目線を外し、再度戻した時には既にイタチの姿は無かった。(行ったか……。それにしてもあそこまで酷いとはね。サスケとの対決を考えると本当にギリギリだな……。) とうるか写輪眼甘く見過ぎてた。幻術対策の修行やり直そう……)

今回白にとって一番のショックは、イタチの幻術にいつも容易くかかってしまったことだった。これまで、一応幻術対策をしてきたつもりではあったが、全く抵抗すらできていない。イタチが言ったことが、ブラフである可能性も無いとは言い切れないが、楽観視はできなかった。

その日の内から幻術対策を重点的に行うと共に、張っている逆探知妨害用の結界の補強を行った。今いる場所は木の葉の里よりも小さな島だ。それを白1人で維持していた。維持といっても、島の端に結界用の札を風雨に晒されない位置に貼り付けただけで、定期的に見回っているだけだった。

今回補強を行う理由は、イタチの件が原因である。白は、居場所などバレないと過信していた。それを反省して、今は強いチャクラを持った者が侵入したら、知らせる仕組みを追加している。どこまで効果があるか分からないが、一定以上のチャクラを持っているれば引掛かるであろうものだ。それに加えて、島内であれば、そのチャクラの持ち主の居場所が分かる。これは再不斬やハナビにて実証済みだ。その結界の補強には数日掛かった。

それ以外にも変化は訪れている。ハナビにひと通りの常識を教えたと息巻いて、女忍者がハナビを連れて戻ってきたのである。

「どう？ 私のセンスもなかなかのものでしょう？ 全く、あんたときたら鍛錬ばかりさせて、重要なことを教えないなんてどういうことよ。……まあ、私が見つちり教え込んだから安心していいわ！」

「そうですか(安心する要素が見当たらないんだが……)」

そう言つて、ハナビへと視線を向けると、ハナビは女忍者の背後に

素早く隠れてしまい、顔の半分だけを出して、照れたように顔を赤くしながらこちらを見詰めてきた。

それに対して白が考えていたことは――
(ああ……そう言えば、くノ一の授業で、男の気を引き付ける授業か何かでこんな仕草あつたな……)

ハナビの仕草に対して、女忍者やハナビが考えていたような効果がない、全く発揮されていなかった。逆に、白に昔を思い出させて、憂鬱な気分にならせていたのである。

「ほらっ！ この子を見て何か言うなり思うことがあるでしょ！」
「……その服装だと戦いにくくないか？ それとサングラスは？」

ハナビの服装は、一般的な女性の服であり、忍びが着るような服ではないため、巻物を入れておくポケットも無ければ、手裏剣やクナイのホルスターも付いていない。戦闘という行為を考えると、実用性からかけ離れたものだった。しかも、サングラスをしていないので、白眼である白い目が丸分かりである。

「違うわよ！ そうじゃないでしょ!? このスカートは最近の流行なのよ！ 今まではロングスカートだけだったけど、今からはショート時代よね。男を魅了するにはこっちの方が確かにいいわ。これを考えた人は天才ね。いつまで隠れてるの？ ほら、前に出て」

女忍者に無理やり前に出されたハナビは、スカートの前と後ろを押さえながら、その場に立ち尽くしてしまっていた。どうやら、羞恥心というものを身に付けてきてはいるようだった。それに対してまとも白は見当違いなコメントをする。

「その格好寒くないか？」

暖かくなってきたとはいえ、未だに寒いときは寒い。しかも、スカートが短い上に素足を晒しているのだ。白には丁度よい温度だが、他の者は違うと言う認識を持っていたので訊いてみたのだが、またしても女忍者の怒りがかかってしまう。

「……あんたわざと言ってるでしょ？」

額に青筋を立てながら鬼気迫る勢いで白へと詰め寄ってきた。そして、白の傍まで来ると人差し指を白へと付きつける。

「こういう時はね、見た目を褒めるものなのよ！ それも服だけ褒めちゃだめよ。如何に相手の特徴にあっているかも合わせて言わないと……って聞いているの!？」

「……いや。あまりそう言ったことに興味が無いと言うか……」

この言葉にいきなり顔色を変えたのは女忍者である。突きつけていた指を震わせて、恐ろしいものを見たかのように震えだす。

「あんた……まさか……再不斬様を狙ってるんじゃないでしょうね!？」

絶対に許さないわよ!!」

「いや。それはない」

途中から女忍者が何を言いたいか分かった白は、即、否定の言葉を返す。それでも、まだ疑いの目は晴れずに女忍者は白を見ていた。白は溜息を漏らしながら、望まれているであろう言葉を言う。

「はあ……。可愛いんじゃないかな？」

「……なんで疑問形なのよ。まあ、あんたに期待した私がいけなかったわね」

「期待されてたなんて初耳だ……」

「それはもういいわ。……それよりも稼ぐわよ。今度は食品とか消耗品だけじゃなく服の方にも手をつけようかしらね」

「それは厳しいんじゃないかなあ……」

大国の間では服装に気を使う者も結構な数いるが、ここは波の国である。ガトーの圧政もあり、人々が貧しさからやっと脱却しようとしている時に、服飾にまで手を伸ばせるとは白には思えなかった。しかも、数年後には大規模な忍界大戦が待っているのである。波の国は戦場となる予定地から遠いとはいえ、イレギュラーが起こらないとも限らない。

「確かにそうね……。まずはこの波の国を豊かにして、そこから巻き上げないと駄目よね」

「いや……。そういうことじゃ……」

「それでは早速だけど、経済大国を目指すべく作戦会議を始めます。ハナビちゃんも、いつまでも恥ずかしがってないで座りなさい」

「……はい、ナナさん」

女忍者——ナナとハナビがそれぞれの椅子に座ったことで、今後の方針を決めるための会議が始まった。

84 名残り？

夏も近付いてきた頃に、木の葉の里に新たな火影が就任したという情報が入ってきた。

（火影は綱手姫で確定かな？ 女の人って話みたいだし……）

火影が決まれば、里の方針などを進めていくことができるので、これから木の葉の里は復興へ向けて一気に進んでいくだろう。

木の葉の里へは、波の国……というよりも、ガトーカンパニーからの援助と言うことで、多少なりとも資金や資材を出している。その理由と言うのが、ハナビのためであった。ハナビの元気が無いのは、里のことを心配してのことだったようで、それを聞き出したナナが今回の件を言い出し実行したのである。

霧隠れの里との同盟を結んでいるため、隣国の事だとしても波の国にほとんどメリットが無い。そのことを白はナナに対して何度も言っただが、止まることがなかった。

「だから、何度も言うけど、今は他国よりもこの国のことでしよう？」

「あんたはなんて薄情なの？ 仮にもあんたが居た里のことでしょ？」

それにね、被害にあった国や里への援助を惜しんでは、後々この波の国が困った時に助けてもらえないわよ？ こういう時は持ちつ持たれつってやつね」

「だから、そのために霧隠れの里と同盟を結んでるんじゃないか」

「霧隠れの里とは海を隔ててるんだから、到着するまでに時間はかかるわ。それに比べて木の葉の里は陸続き……しかも隣国なんだから、恩を売っても損は無いわよ。……たぶん無いでしょうけど、火の国が波の国へ攻め込まれる懸念を払拭できるわ。これだけでも、十分こちらへのメリットになる」

「火の国と言うか木の葉の里に、他国に攻め込むような考えの奴は

……（ダンゾウってどうなんだろ？）」

「いる訳ね!? はい、この案は可決されました。ハナビちゃんこれで安心していいわよ。じゃんじゃん情報も手に入れてくるから」

「はい！ あの、ありがとうございますー！」

「……………」

ナナは白が途中で言い留まって考えたのをいいことに、自分の都合の良い方向へと進めていく。実際に可能性として否定できない白は、何とも言えなかった。

そのような事情があり、木の葉の里の情報を持ち帰ることで、ハナビを安心させていたのだった。その甲斐あって、ハナビは元の状態にまで戻っていた。例え里を抜けていたとしても、今まで暮らしてきた場所の心配はするもののように、今も木の葉の里からの情報が記された紙を真剣に読んでいる。

（ハナビが元気になったのはいいが、金にうるさいこの女がよく実行したな……）

ハナビを連れて行って教育を施してからというもの、ナナはハナビに対してかなり甘くなっていた。傍から見ると、まるで自分の子供を可愛がる親馬鹿のようだ。仕事の際は普通の態度で接するのだが、今回のように再不斬関連以外での出費を決断したことに、白は未だに信じられなかった。

実際には、指導をしている過程で、ハナビがあまりにも性格が真つ直ぐな上に純粹だったため、ナナの母性本能に触れてしまい、自分の娘と思い込めるほどにまで情が傾いていた。また、それに拍車をかけるように、ハナビも素直にナナの言うことを聞いてしまったのも原因のひとつであった。

そして、白がその事を知ったのは、少し後のことだった。

夏の暑い時期に、白は太陽の光を木の陰で防ぎながら、波の国の海沿いを駆け抜けていた。

今回の目的地は雷の国である。中忍試験のヒナタ治療時に現れたカブトとの約束——取り引きをしているため、それを果たさねばならないが、取り引き内容としては、これで最後となる。

取り引き内容は、霧隠れの里から歴代水影と、過去に忍び刀を持った者の遺体の一部及び、忍び刀。そして、雲隠れの里からも、歴代雷影の遺体の一部を渡すことだ。最低でも、どの代でもいいので5影の

肉体の一部を確保せねばならない。

どの里も、歴代の5影については丁寧に石碑を立ててある。そのため、その墓を暴くだけでいいと、カブトには言われていた。

霧隠れの里については、水影と忍び刀と思わしき遺体の一部を回収したものを、送り届けたことで完了しているため、残すところ雲隠れの里だけである。

忍び刀の名前がリストアップされていたのに白は驚いたが、カブトは色々な国や里にスパイとして潜り込んでいたことを考えると、納得できるものだ。

もちろん、あの場でヒナタを見捨てるという選択肢をとれば、このような事にはならなかったかもしれないが、白としても、暗部として断れないのをいいことに、任務、任務と続けさせられて嫌になっていた部分もあった。そのため、カブトの言葉に乗ったのである。ただ、それだけではあまりにも白にとってメリットが無さすぎる上に、リスクも高かった。そこで、条件を付けて取り引きへと持ち込んだのである。

最後に付け加えたのは、穢土転生の術を忍び刀七人衆に使うのであれば、忍び刀の一振りが欲しいというものと、完成した際には見せてほしいというものだった。ここで、穢土転生と言う言葉にカブトは反応したのである。ただ、この取り引きを完了させた時点で、カブトの元へと行かねばならない。

本体が行くことにはなっているが、安全対策はしつかりとしてある。写輪眼などの瞳術で、一瞬に勝負を決められない限り白には逃げる算段はあった。それでも行かねばならないことに、憂鬱になりながら白は進んでいく。サスケが大蛇丸を倒すまでの辛抱だと思いがら……。

火の国に入ったところで、宿をとったのだが、思わぬ人物たちを見かけることになった。

(なんで、あいつらがここにいる？ しかも、同じ宿だ?!)

その人物とは、ヒナタ、キバ、シノの3人。紅班のメンバーである。この葉の里からだいたい南に位置するとはいえ、この場に3人がいて

も不思議では無かった。むしろ、木の葉を建て直すためにも、依頼をどんどんこなしていき、資金を集めなければならぬだろう。それに加えて、依頼を達成することで、未だに木の葉の里に力があることをアピールする必要もある。

一度弱味を見せると、他国ばかりではなく、大名たちからも舐められるからだ。そうになると、依頼が減少するばかりではなく、これ幸いにと攻め込まれる恐れがある。5大国の1つだからと言って油断ができるものではなかった。

この感知タイプの揃った班で、今一番要注意なのはヒナタである。キバについては、匂いを日頃から注意して消臭している。外に出るときなどは特にだ。そのため分かることはないだろう。

シノについても、常に蟲による探索を行っている訳ではない。なので、シノが意識を向けない限り気付かれることなないだろう。

しかし、ヒナタだけは別だ。白眼がある上に、長年一緒に居たこともあって、白が顔を変えているとはいえ、近づけば感づかれる恐れがある。今の技量がどの程度のものなのか分からないが、容易に部屋を出ることが叶わないことだけは分かった。

白は3人に見つかる前に素早く部屋へと戻り、巻物を広げて、周囲へと探知忍術を使用する。ここにあの3人が来ているということは、紅も来ている可能性があるためである。

探知忍術の結果、紅は居なかったが、いつここに来てもおかしくはない。白は溜息を吐きつつ、宿を移るために巻物を片付け、部屋を出ようとしたところで廊下から声が聞こえてきた。

「シノもだいたい接近戦が様になつてきたよな」

「うん。シノ君上達が早いよ」

「……慰めはいらない」

「慰めじゃねーって。素直な感想だよ。紅先生も今のお前を見たら、絶対同じことを言うと思うぜ」

「紅先生忙しそうだったね」

「ここに来れないくらい忙しいみたいだな。サスケのやつもいなくなつちまうし」

「キバ君！」

ここで、サスケが既に大蛇丸の元へ行つたことを、白は把握することができた。それと紅がこの場に来れないと言うことも……。その事に少し安堵した白は、ヒナタたちを監視することにした。折角とつた宿を移るのもばかばかしく、離れてさえいければ、正体がバレる恐れもほばないためである。

「？ ああ。わりいわりい」

「……やはりわざとか……俺を置いていったのは……」

「違うと思うよ。私もその時は行けなかったし……」

シノはキバの言葉に立ち止まってしまったようだ。そんなネガティブ思考に陥りそうになっているシノを、慌てたようにヒナタがフォローする。

「怪我が完治していないものを連れて行かないのは当然だ。それに、白のやつがいれば、白も一緒につれて「おいっ！ シノ！」……すまない」

「……ううん。……大丈夫だよ。白は死んだわけじゃないんだし。いつか戻ってくるよ」

シノの言葉にヒナタの気落ちしたような声が聞こえてくる。一応白が居なくなつたことに対してヒナタは立ち直つてはいるようだが、未だに少し引き摺っているのだろう。自分に言い聞かせるようにして話していた。

（ヒナタはまだ気にしているのか……。それにしてもこいつら、廊下に立ち止まって話しないで、さっさと部屋に戻れよな……）

白は心の中で悪態を付きつつも、3人の声を久しぶりに聞いて懐かしく思うと同時に安心していた。

影分身による変化での監視という名の盗聴のもと分かつたのは、滝隠れの里の抜け忍……。それも上忍相手に、シノが接近戦で負けたこと。それに伴って3人で特訓を行い、強くなることを目的としていることが分かった。

蟲使いは戦闘を蟲に任せている。しかし、それを操る者が接近戦を挑むと言う行為がそもそも間違っているのだ。これでは何のための

チームなのか分かったものではない。確かに、蟲使い本人が接近戦も強ければ特に言うことはないのだが……。

（取り敢えず、あいつらはここで特訓するみたいだし、こっちは早朝にでも出ていきますかね）

少々名残り惜しい気持ちを抑えて、その日は眠りについた。

翌朝。宿を後にして人気の無い森の中を北上していく。あの3人が起きた時点で影分身が教えてくるようにしているので、解除されていないので、未だ起きていないのだろう。

少し離れたところで、近くに誰か潜んでいることが分かった白は、戦闘態勢に入る。戦闘態勢に入ったのは、その潜んでいる相手の気配が非常に薄かったからだ。しかも、白の進行方向である。白は影分身を先行させて状況を確認させた。

影分身が解除されたことよって分かったことは、男が1人朝食を食べているという事実だった。男の周囲に蜘蛛の糸のような罟が仕掛けてあることを考えると、白を狙ったものではない。そう考えた白は、迂回しようとして昨日のヒナタたちの会話の内容を思い出す。

（そう言えば、滝隠れの里の抜け忍は蜘蛛を口寄せしたと言ってたけど、まさか……もしそうなら少し痛い目にあってもらおうか）

白は影分身を再度すると、本体は先に北上していく。そして、残った影分身は朝食を摂っている男へと近付いていった。さすがに上忍だけはあって、蜘蛛の糸に触れていないにも関わらず、誰かが侵入してきたのが分かったようだ。おそらく、蜘蛛の糸で結界を組んでおり、中に人が入れば分かるようにしているのだろう。

「誰だー！」

「……………」

「……………」

何も答えずに少しずつ近付いてくる白に、危険を感じ取った男はクナイを手に持ち構えをとる。一呼吸で詰め寄れる場所まで来たところで白は立ち止まった。

「滝隠れの里の抜け忍か？」

「!?」

男は驚きつつも、それを合図にしたかのように、白へと向かって行った。

滝隠れの上忍と言われていたので、それなりに警戒していたのだが、白の見た目が子供だったためだろう。それなりに警戒していたようだが、油断している部分が大きかった。何の術も使わずにクナイ片手に来ただけである。

白は呆れながらも、瞬身の術で男の背後へと移動し、冷めた目で男を見ていた。

急に白がいなくなったように見えたのだろう。男は立ち止まり周囲をキョロキョロと見回して、後ろに白が居ることを見て取ると、冷や汗を垂らしながら、今度は見逃すまいと再度構えをとる。

白が動かずにジツとしていると、男は瞬身の術を使用した。不意を突いたつもりだったのだろう。しかし、残念ながら白にとってその瞬身の術は、本当に術なのか疑いたくなるレベルの遅い速度だったのである。

(あまり通常の数度と変わらないな……これくらいのレベルなら3人掛かりで勝てるんじゃないの?)

白は、瞬身の術を使い、あっさりと男の鳩尾へと攻撃を入れる。あまりの衝撃に男は耐え切れず、クナイを手放し倒れて悶絶し始めた。

白はクナイを回収し、悶絶しているところを素早く気絶させて男の様子をみる。男の所持品は少なく、武器と言えるものは、白の持っているクナイしかない。財布を見たが、お金も少ししか持っていない。そのため野宿だったのだろう。

男の状況は、打撲のみで骨折まではいっていないかった。白としても、衝撃の感触から骨まではいっていないはずと思っていたが、悶絶している姿を見て、やりすぎたかと逆に思ってしまったほどだ。

クナイを没収した白の影分身はそれを隠して処分すると、本体と合流するべく術を解除した。

85 雲隠れの里？

雷の国。そこは、砂隠れの里と似たような風景が広がる場所だった。違う点は、空気が乾燥しておらず、水気が多いことだろう。湖がところどころに点在している。

雲隠れの里は、天然の要塞のようになっており、岩自体が壁の役割を果たしている。入口には分厚く大きな門が設置されている。おかしいところは、門があるにも関わらず、扉が無いことだろう、しかも、門の壁の厚さは、簡単には壊せそうにないほどの厚みを帯びていた。まるで、誰かを逃さぬように壁を厚く作った方がいいが、壁よりも薄い扉の方を破壊して外に出られてしまったかのようだ。その証に、門に扉が付いていた形跡が見て取れる。

何事も無いかのように中へと入るが、色々和白は目立ってしまった。夏場と言うこともあり、太陽光を遮るべく、完全フル装備で雲隠れの里に来ていたのである。ただ、以前のように服だけではなく、薄手のコートなどを羽織っているあたり、まだ意識していると見ていだろう。ただ、周囲にいる人たちは、雲隠れ独特の服装をしており、夏場と言うこともあって誰もコートなど着ていないため、さして意味はなかったが……。

雲隠れの里の中に入った方がいいが、特に誰かに止められるわけでもなく、白は簡単に入ることができた。

（なんでだ？ 他の里だと普通に呼び止められるのに……。もしかして畏かなにかか？ 人の数がやけに少ない）

白は、周囲にいる人たちへ分からぬように警戒心を高めつつ、雲隠れの里の奥へ向かって歩いていく。

奥へ進むと更に人気が無くなって行き、道もある程度細くなったところで、3人の忍びと思われる者たちが、道を塞ぐような形で立っているのが見えた。

その道を塞いでいる者たちとは、サムイ、オモイ、カルイの3人である。

3人は、明らかに白を見ており、まるで獲物を見つけたように、白

にも分かるほどの殺気を漲らせ始めていた。サムイに関しては表情に変化は無いが、雰囲気で分かる。他のオモイとカルイは、明らかに白を睨みつけていた。

（なぜだ？ 数人だが、俺の前を一般人も通つたはず。俺だけに殺気を放つ理由が分からない……。何かした覚えは無いんだが……？

やはりこの恰好がそんなに怪しいのか？ 服装が分からないようにコートで隠しているんだが、それでもだめだったのか？ それともこのターバンみたいなのが駄目だったのか？ 雷の国に入った時に売れ筋ナンバーとか言われたから買ったんだが……騙されたか……）

雷の国に入ったところで、流石に日笠は目立つだろうと、近くの街で買い物をする際に購入したが、いぎ雲隠れの里に入ると誰もそのような物をしている者などいなかった。

ただ、ここで後戻りなどしては余計に不信感を募らせるだけであり、特に何もしていないことから、白は歩みを止めずにそのまま進んでいく。

3人の内2人は、自分たちの元へと更に近付いてくる白を見ると、言い争いを始めていた。近付くにつれてその内容も白の耳へと入ってきた。

「あれは私の獲物だ！ お前は他をあたれ！」

「きつとあの人は俺を選ぶしかない……。可哀想なことだが……。それは、特にカルイだとあの人は死んでしまうからだ。それだと怒られてしまう……。カルイが」

「私だけかよ！ つーかお前が引つ込んでればいいだろ！ なんでここにいるんだよ！ ここは私の場所だ！ お前はどっかに行け！」

会話の内容から、白は自分が狙われていることを悟り、相手の実力の把握に努めていた。

（スリーマンセルを組んでいるということは下忍か？ ……とか、実力的にこの3人だけなら勝てるけど、その後が厄介になりそうだな……。取り敢えず、相手が襲ってきたら撃退する方向にしよう。正当防衛ってことで……。俺まだ悪いことしてないし……）

白は、コートの中で片手を雷刀・牙に、もう片方はいつでも印が結

べるよう準備をし、チャクラだけを練り込んでいく。

2人が言い争いをしている間にも、徐々に白と3人の距離は縮まっていた。ここまでできては、白も影分身を出すわけにもいかず、先に影分身を先行させなかったことを少々後悔していた。

残り数メートルまで近づいたところで、サムイが前に出てくる。他の2人は未だに言い争いを続けたままだ。

いつでも術を発動できる状態であったが、サムイの言葉でそれが無駄であったと思い知らされる。

「あなたはチケツトを持っていますか？」

「……えっ？」

「チケツトを持っていないければ買ってください」

「え？ ああ……チケツト？」

「はい。チケツトです」

サムイから見せられたチケツトには、『キラビー主演コンサート』と書かれていた。それを見た白は一気に脱力してしまう。

「この奥に行くのであれば必要になります」

「……分かりました。買います」

白がサムイからチケツトを購入したところで、他の2人がそのことに気付いたのか、言い争いを中断してサムイを睨みつけつつ駆け寄ってきた。その姿はあたかも獲物を横取りされた猛獣のようである。

「サムイずるいぞ！ そいつは私のだろ！」

「俺のノルマ全然減らないんだけど……」

「もう遅い。私のノルマはこれで終わったから、この人と一緒に先に行ってる」

「いつの間にも!？」

「やばいよ……もう始まつちまうよ……」

手元を見ると、オモイの手元にはチケツトの束が十数枚ほど残っていた。カルイの方はと言うと数枚といったところだろうか。2人はこれで人生が終わったかのような顔をしている。

白は後ろを振り返り、この道へと来る人を見てみるが、こちらへ来る人は少ない。しかも、チケツトを既に持っている可能性もあるの

だ。カルイはまだ、売り切れる希望はあるかもしれないが、オモイに至っては無理だろう。

「さあ。案内してあげるから行きましょう」

頭を抱え込んで座り込む2人を置き去りにして、サムイは奥へと歩き出す。白もその後へと付いていく。

（もしかして、門番とかいなかったのって、このコンサートを見るためじゃないよな？ もしそうなら……いや、仮にも忍びの里だ。そんなことあるわけない……と思いたい……）

途中で階段を昇り、建物の上へと向かって行く。辿り着いた先は、その建物の屋上だった。そこには、かなりの数の観衆がいた。その観衆の前には舞台が設置しており、真ん中にマイクまで用意してある。下からでは分からなかったが、屋上は観衆のざわめきで意外と煩く、白はサムイの声を聞き逃すところだった。

「私の案内はここまでだから、後は楽しんで」

そう言い終えると、サムイは観衆に紛れて何処かへと行ってしまった。残された白は、ここからビーのコンサートが終わる夜遅くまでその場に足止めを喰らうことになったのだった……。

翌朝。辛うじて昨日の夜に宿をとることに成功した白は、水分身を複数作りだし情報収集に励んでいた。

ここで知る必要のある情報は、雷影の墓、それだけである。そのせいでだろうが、直ぐにその所在を掴むことができた。

雲隠れの里の者を装い、雷影の墓へとお参りに見せかけて、警備状況などの配置を調べていく。さすが絆に厚い雲隠れの里と言うべきか、警備体制は尋常ではなく、常に4から5人体制で雷影の墓の近くを警備していた。

（死んだ人に対してなんつう警備体制なんだ……。他のとこみたい
に、フリーにしてくれればいいのに）

雷影の警備は夜も人数が変わることなく続けられたことで、白は一旦今後の計画を練り直すことにした。

（さすがに不意を突けば倒せるかもしれないけど、全員を一気には流

石に無理だ。それこそ、増援を呼ばれたら雷影の遺体を手に入れる前にやられてしまう……どうしたものかな……ずっとここに居るだけのお金もないし、なんとかしないと……」

定期的に影分身1体を波の国へと送り出し、波の国にいる影分身を解除して交代しなければならなかったため、それだけで2体分消費する。残り使える影分身は1体のみ。それをどう使うべきか悩んだが、白は結論を出すことができずにいた。

そして、そのままずると結論を先延ばしにした結果――

「はいっ！ いらっしやいー！」

雲隠れの里の飲食店で働いていた。警備が嚴重過ぎるあまり、付け入る隙が無い。また、お金も無いので傭兵を雇えるわけもない。無為に過ぎ去っていく時間が、白を追い詰めていき、白は現実から顔を背けていた。

ただ、何もしなかつたわけではない。情報収集は水分身に行わせているし、警備の状況も監視している。監視の時に危うく見つかりそうになるが、所詮は水分身であるため、すぐに術を解除して再び監視に付かせるだけだ。

働いているのも、お金が無くては何もできない。それに加えて、せっかく教えてもらつたことを不意にするのも勿体ないと、飲食店は飲食店でも中華店を選んでいった。

特にバイトを募集していた訳ではないので、店側としては雇うことを渋つてはいたが、ラーメンを作りその味を認められたことで、雇つて貰うことができ、今は厨房にてその腕を振るっている。

そんなことを数週間続けていた時に有力情報を得ることができた。その情報と言うのが、キラビーのコンサートである。キラビーのコンサート時には、色々な場所の警備が手薄になるといふ話を聞いた白は、そのことについて更なる情報を集めていった。

その結果と言うのが……

キラビーの思い付きで決まることが多い。

年に最低4回程度は行われている。

開催される数日前にチケット配布が始まる。

開催されるときは掲示板などに、日時などが記されたポスターが貼られる。

雲隠れの里を襲撃する者がほぼ居ないので、警備をしなくても大丈夫。

雷影によりコンサートが中止になることがある。

コンサートは雨天決行される。

意外と楽しみにしているファンが多い。

必ず屋外で行われる。

下忍はほぼ強制参加させられる。

他にも色々と情報があったが、ほとんど役に立たないものが多かった。

ただ、最初に雲隠れの里に来た時の門番が居なかった時のことを白は思い出し、次回のコンサートの日時の情報を得るために、毎日掲示板に張り付いている状態だ。

ラーメンの人气が徐々に広まっていった頃に、待ち望んでいた日が訪れる。白が雲隠れに来てから数ヶ月が経とうとしていた。

その間本体である白は、雲隠れ内で術の鍛錬や医療を行うことができないうえ、そちらは影分身に任せてラーメンの修行を行っていた。今まではラーメンのみに拘っていたが、そのトッピングである煮卵や、メンマの方にも手を出していたのである。

一樂ではラーメンの素の味で勝負していたので、なかなか手を出しづらいものだったが、ここでは誰も咎める者がいない。そのため、店を閉じた後に研究を重ねていた。店主も、ラーメンに関するものだけは白の自由裁量に任されている。それが売り上げに貢献されているためだ。逆にもっと作ってくれと言われているほどになってきていた。

その待望のコンサート当日。白は影分身と共に雷影の墓の近くに潜んでいた。

以前に集めた情報の通り、コンサートが行われると言うことで警備の者が誰一人としていない。

(この里の人たち本当に忍者なのか疑いたくなるレベルだな……。そう言えば、雲隠れの里から何かすることはあっても、他から雲隠れの里へ何かすることはないんだよ……。なんでだ？ やっぱり人柱力を2人も抱え込んでるからか？ まあ、そのお蔭で警備ゆるゆるだからいいんだけど)

一応、姿は本来のものとは違うとはいえ、見つかつてはまずいので、結界を貼って部分的に霧隠れの術を使用してから雷影の墓へと近づく。

雷影の墓には特に結界などは張られていなかった。ただ、代わりにかなり重量のある蓋が置かれていた為に、一時的にはあるが多重影分身で開閉することになった。

雷影の墓を元に戻し、術を解除して宿へと帰る。コンサートの日には働いている中華店も休みになっている。おそらく店主もコンサートに行っていることだろう。白の今回の主な情報源は店主なのだから……。

店の扉の隙間に辞める旨を記載した書を挟み込み、白は門番の居ない門を潜り外へと歩き出した。目的を達成したので、後はカブトから、目的達成後に居るように言われた研究所へと向かうだけである。

86 水化の術？

雲隠れの里から出発し、周囲に人氣が無いことを確認した白は、手に入れた雷影の遺体の一部が入った巻物を、蛇を使ってカブトへ送った後に、蛇を口寄せする巻物自体を風遁で細かく引き裂き、紙片を風に乗せてばら撒いた。

紙片が全て空へと消えていくのを確かめ、進路を再び南に取り進んでいく。

今から向かう研究所で、研究の手伝いを行うということだが、実際の内容を聞かされていなかった。それでも、その研究所には大蛇丸が来ないとのことで、大蛇丸に白の情報を与えないという取り引き内容と合致するものであり、術や医療の研究ができる設備があるとのことだったので、白としては、そこで手伝うこともやぶさかではなかった。

ただ、その場所と言うのが――

(なんで、火の国内に研究所なんて作ってるんだ？ あれか、灯台下暗しを素でやってる感じなのか？ まあ、バレなければいいんだけど……。波の国に近いのもいいな)

湯の国の南部から火の国へと入ったところに、その研究所はあった。研究所は地下の遺跡のような場所を改造したようで、地中に存在しているため、地上には木や岩が点々と存在している。その中の岩の1つが研究所へと繋がる入口になっていた。その中へ影分身を先行させながら入っていく。

研究所内部は地下だけあって薄暗く、ところどころにあるケーブルが発光することで、視界を確保できていた。その通路を探知結果を張りながら慎重に進んでいく。入る前に大きなチャクラを持った者がいないことを把握していたが、それでも、カブトが嘘をつき罫を用意している可能性が無いわけではない。

真っ直ぐに伸びる通路の先には、幾つもの培養槽とそれに繋がるケーブルの束が存在している広い空間になっていた。その広い空間に入る手前で白の歩みは止まる。白とまではいかないまでも、そこそこに大きなチャクラを持つ者がその広場にいるからだった。

白はチャクラの存在する方向を見てみるが、そこには培養槽のみで誰もいない。不思議に思いつつも、白は警戒を解かずに進んでいく。そして、広間の中央に来たところで誰かが白へと語りかけてきた。

「君たちは誰だい？ 新しく見る顔だね。1人は顔を隠しているようだから、もしかしたら知ってる人かもしれないけど……」

白は周囲を見渡すが、周りには誰もいない。白は幻術の類を警戒して影分身に触らせて解除しようとしたが、特に幻術には掛かっていなかった。声の聞こえてくる場所へと視線を向けるが、大きなチャクラの感知できた培養槽があるのみである。

「僕が誰か分からないのかな？ もしかして、たまたまここを見つけたとか？ それだと嬉しいなあ。お願いがあるんだけど聞いてくれない？」

「ここを知ってるのは偶然じゃない。ここで研究の手伝いをするように言われて来た」

「ちえっ。せっかくなここから出られると思ったのになあ」

声の主はかなり残念そうに、更に恨みがましく白へと語り始める。そこで、白はやっとそれが誰なのかに思い至った。

「もしかして水月？」

「あれ？ 僕の事知ってるの？ ん〜君みたいな子供に見覚えはないんだけど……大体の奴は殺っちゃったからなあ……」

「まあ、知ってると言えば知ってるよ」

最初は驚いたものの、その正体が分かれば何のことはない。水化の術で姿が確認できないだけなのだから。それでも確認したのは、確証を得るためだった。カブトであれば、実験と称して他にも同じような者を造りだしてもおかしくないからである。

「水月以外ここに人はいないの？」

「全く知らないんだね。どうしようかなあ……。そうだ！ ここから出してくれたら教えてあげるよ」

「自分で調べるからいいよ」

他の培養槽からも、ほんの僅かなチャクラを感知できているので確認したのだが、それこそ、ここに置いてある研究資料を読めば済むこ

とであると思ひ直した白は、元来た通路を戻るべく踵を返した。

「ああ！ 待った待った！ 言うよ」

「聞いといてあれだけど、よく考えれば聞く必要ないかなと」

「君がその気でも喋らせてもらう！ ここはね、僕の水化の術を他の忍びにも適用できないかを実験しているところなんだよ」

「それで？」

白は興味が無さそうに先を促す。

「結局は水化するに至って、身体が元に戻れずに、チャクラを含んだ水になってしまったみたいだ。やっぱり下忍レベルには難しいし、水遁の適性がないとそもそも無理なんだよね」

「ああ。だから他の培養槽から少しだけチャクラが感じられるわけか」

白は納得いったのか、他の培養槽へと目線を配り、それぞれの中の様子をよく見てみると、身体の一部と思わしきものが浮かんでいた。底へと沈んでいたりしていた。中に居た者は、その様子から既に死んでいるように見えるが、チャクラが感じられるあたり辛うじて生きていたのだろう。これを生きていると言うのかは不明だが……。

「たぶん、しばらくお世話になるから、これからよろしく」

「結局行ってしまっただね」

「この研究施設内にはいるよ」

「暇だから、毎日来てくれてもいいよ」

「……考えておくよ」

白は、振り返らずにそのまま通路の方へと、通路に幾つかある部屋の中を調べるべく戻っていった。

この研究所は、水月の水化の術を他者に付与できるかの研究ではなく、それを基にして医療や他の術に応用できないかを目的としていることが分かった。置いてある書類を漁りながら、白はどんどんと読み進めていく。

水月に言われたからではないが、巻物を読みながら水月の話し相手をしていった。

「本当に君は読むのが好きだね。身体を動かさそうとか思わないの？」

「身体は適度に動かしてるよ」

実際に、体術や忍術の修行は本体がやっており、影分身に巻物などの書物を読ませていた。それというのも、影分身だと経験などは術を解除した際に、本体へと還元されるが、体力などは付かないため、その維持向上に伴い本体にて行っていたのである。

「全く。こんな陰湿なところに籠ってたらおかしくなりそうだよ」

「大丈夫。最初からおかしいから。問題ない」

「僕のどこがおかしいって言うのさ！」

「全部？」

「なぜ疑問形!？」

水月はそんなことはないとはばかりに言い切った上に、白に対して突込みを入れてくる。自分は普通であると思っているのだろう。いつからかは不明だが、水化の術のまま、特に何も食べることなく過ごせる段階で、本当に人なのかを白は疑っている。それを持ち出すと大蛇丸などはその典型だったが……。

「そんなことより、治活再生の術っていう医療忍術があるんだけど、誰か試す相手いない？」

白が読んでいる巻物には、カブトが調べたであろう超高等忍術が色々と記載されていた。

「そんなことよりって……君自身で試せばいいじゃないか」

「術者だと難しいんだよね。集中出来なさそうだし」

「!! そうだ！ 僕で実験したらいいよ」

「却下」

白は水月の提案に即返答した。水月の考えがあまりにも見え透いていたためである。おそらくはこれ機に外へ出ようというのだろう。しかし、水月が水化の術をできる以上、部位欠損を修復する術は無意味だった。医療忍術の名称を聞いただけでは、何の術か分からないために水月は提案したのだろう。しかし、答えが分かっていたのか、それほど断られたことに対して落胆はしていなかった。

「はあ……。いつになったらここから出られるんだろうね」

「サスケっていう人が出してくれるよ」

「誰だい？ そいつは」

「君をここに閉じ込めてる親玉のお気に入りだよ」

「大蛇丸の？」

「そう」

水月は白の言葉に何かを考えているのか押し黙ってしまった。その間にも白は巻物を読み進めていく。元々、この研究所に水月と白以外にいないことは分かっていたことだった。ただ、間を持たせるためと話し相手をするために言ったに過ぎない。

白としても、1人だけでずっと過ごすということに、例え影分身の情報が入ってきているとしても寂しいものを感じていた。そのため、水月に定期的に会っているのである。しかし、そうしたゆっくりできる時間もひと月ほどだけだった。

唐突に探知結界内に入ってくる者がいたのである。それは、迷うことなく白たちのいる広間へと向かって来ていた。

「お客さんみたいだ」

「もしかして……大蛇丸？」

「いや。それにしてもチャクラ量がそれほどでもない……それにこの感じは……って来たか」

「やあ。久しぶりだね」

「そうですね。こちらとしては、このままずっと放置でも良かったんですが？」

「そうもいかない」

ゆっくりと広場へと入ってきた来訪者はカブトだった。

カブトは白の持っている巻物を見て満足そうに頷く。白の持っている巻物は、この研究所内にある術の中では一番難しいと思われる巻物だった。カブトはまるで、その巻物を読んでいることが当たり前のような反応を示す。

「君にこの場所に来てもらったのは、医療の知識を高めてもらうためだよ。君のことだからそろそろ読み終えた頃だろうと思ってね」

「確かに、ひと通りは読み終えましたよ。有意義だったのは認めます」

「それはよかった。そこで君に依頼をこなしてもらいたい」

「依頼？」

「簡単だよ。ある島に行つて薬草などの採取してきてもらいたい。これがリストだ」

白がカブトから受け取つたリストには多種多様な植物が記載されていた。それを見て白は訝しむ。

「これは明らかに一箇所に生息するような植物の類ではありませんよ」

渡されたりリストの植物は特定環境下や季節によつて生えるものなどであり、とても一箇所で集められるようなものではなかった。それに、季節のものもあるとなれば、かなりの長期間そこに滞在することになつてしまう。それらのことに対して白は訝しんでいたのである。

「大丈夫だよ。そこは、それらの植物が全て生息できる変わった島だね。まあ行けば分かる。以前の巻物を渡しておくから、集め終わつたらすぐに送つてくれ。あまり時間がなさそうだからね。5日以内には最低頼むよ」

「……分かりました。そんな島があるとは俄かには信じられません。君ならおそらく3日もあれば島に行くのは十分だろうけど、探すのに時間が掛かるだろうからね。その為の5日だ」

急にカブトから作つたような笑顔が消え、真剣な表情で白を見詰めながら話してくる。本当に時間が無いのだろう。話し終えたカブトは、用件は終わりとばかりに外へ向けて歩いていくが、通路のところで立ち止まる。

「そうそう。この依頼が終わつたら北か南どちらかの研究施設へと行つてくれ。どちらも実験材料には困らないだろう。ここには何も無いからね。行く方向が決まったら、依頼品と一緒に送つてくれればいい」

カブトはそう言うと、通路の奥へと進み姿を消してしまった。それを見送り白がどうしようかと考えていると、それまで黙っていた水月が白へと話し掛けてくる。

「君はカブトとどういう関係なの？」

「……どういふ関係なんだろうね？　一応師弟関係ってことになるのかな？」

「ふーん。師弟ねえ……。これで最後みたいだし僕をここから「それはできないね」そう」

「出したら怒られるのは俺でしょ？」

「君なら大丈夫かなって思ったんだけど……。ところで俺って言うてるけど、もしかして君って男？」

「あー。みんな間違えるんだよね。こんな姿だと」

今の白の姿は特に変装をしている訳でもなく、素の状態だった。誰も来ないため、姿を気にせずに過ごしていたのである。地下というところもあり、日の光にもほとんど当たっていないため、肌も白く、髪の毛も昔から切らずに伸ばしたままとなっている。顔立ちに関しては、相変わらず女性と見間違う状態のままだった。むしろ、女らしさが増したと言ってもいいだろう。

「男なら大丈夫かな……。もし、南に行くんなら香燐ってやつには注意した方がいいよ。いけ好かない奴だから、君を見たら嫉妬のあまり攻撃してくるかもね。まあ、北に行っても変な奴らしいないけど」「どっちに行っても一緒じゃないか……」

「まあそうかもね」

「……その辺は適当に決めるよ。それじゃあ、またどこかで」「またね」

白は渡されたりリスト内にある地図を頼りに、該当する島へ向けて行くべく、旅立つ準備を始めた。

87 七草島？

依頼された植物の島へと行くために、火の国最大の港に到着した白は、早速船を出してもらおうと船と船乗り探しをしていた。もちろん水月のいた研究所をでる際に、変化の術で姿を変えている。

「すいません。ある島までの往復の船を出してもらいたいんですが、いくらですか？」

雲隠れの里の飲食店を繁盛させたことにより、白の給金は上がり、かなり懐が温まっているところだった。そのため、多少船代が高くとも出す気でいたのだが、船乗りたちの意外な言葉でそれが頓挫させられていた。

「海には、今は出せねえ」

「は？？」

白は入った店を間違えたのかと、一旦店を出て、建物の看板を確認する。そこには、見間違いなくきちんと『渡し船』の文字が記載されていた。数瞬その文字を確認した後に白は再度店の中へと入っていく。

「ここは船を出すところで間違いありませんよ？」

「ああ、それは間違いはないんだが、こんなに海が穏やかな時には、船を出せねえんだ」

海を見ると、特に凪いでいる訳でもなく、穏やかにみえる。確かに風が無いので、それを推進力に期待しているのであれば駄目だろう。しかし、船乗りがその分働けばいいだけであり、白にはなぜ出れないのか疑問だった。そこで、これは賃金の交渉であると考えた白は、特にお金を出し惜しみすることなく、その要求を呑むことにした。

「多少はお金を持っているので、船乗りの人数を増やすことはできませんが、それでも無理なんですか？」

「金の問題じゃねえんだよ」

その言葉に白は軽く混乱してしまっていた。賃金の交渉でもなく、空は快晴。風も特になく海も穏やか。そのような条件下で、船を出せないということが理解できなかったからだ。

「では、どういう問題なんですか？」

「この港の入口に化け物が棲みついちゃったんだ。こんな晴れた日に船を出そうものなら、そいつに潰されちまう」

「化け物……ですか？」

「そうだ。でっかい帆船でも簡単にやられちまう。だから俺たちは天候が悪い日に船を出してるんだ。空が暗くて海が荒れてると襲って来ないみたいなんだな」

そう言った男は、その化け物に襲われたことがあるのだろう。思い出したかのように、身体が小刻みに震えている。それでも、白には時間があまりないため、悠長に天候を待つことなどできなかった。

そのため、船乗りは諦めて船だけを調達することにし、その交渉へと入った。

「では、船だけを売ってもらえませんか？　小型でいいので、というか1人だからむしろ小型がいいんですが」

「それなら別に構わないが……湾から外には出られないぞ？」

「いいんですよ。別にそちらとしても、損は無いはずです」

「……分かった。付いてきてくれ。それと釣竿はあるか？」

「いえ。要りません」

男は白が、湾内で船に乗って釣りでもすると思ったのだろう。しかし、白に断られたことで、訝しんでしまう。

港をしばらく歩くと、船が数十隻置かれてある場所に辿り着いた。

そこには、火の国最大の港と言われるだけであって、大小様々な船があった。そこで立ち止まった男は、小さな船が集まった箇所を指さす。

「あそこの辺りが、お前さんに売れる船だ」

男の指差した先にある船は、確かに小さかった。人1人が、横になつて寝られるくらいのおおきさしかない。もし、津波などきた日には一発で沈んでしまうだろう。しかし、それ以外に目を向けてみても、そこからワンランク上の船となると、一気に大きくなっていった。それでは、白1人で維持することは叶わない。

島までの距離は船で1日もあれば、余裕で到着するほどの近さであ

る。白は天候のことは忘れて、その小さな船で行くことに決めた。

「その船をください」

「毎度。しっかし、何に使うんだ？」

「もちろん船に乗るためです」

「いや。それは分かるんだが、言いたいことはそうじゃなくてだな……」

男は一応白のことを心配しているのだろう。船に乗る目的を最初に聞かされていただけに、この船で湾の外に出るのではないかと、不安そうな顔をしている。その考えは正しく、白はこの購入した船で島へと向かう気だった。

船を購入した白は、手続きを済ませると、食料を購入してそれを船に積んでから、湾の外へ向けて船を漕ぎ始める。今いる場所には他の船があるために、術を使うものなら巻き込んでしまおうからだ。

ある程度出たところで、船に付いている小さい帆を張り、術を使用する。

——風遁・大突破——

白の乗る小さな船は、風遁の術により一気に加速する。特に何も起こることなく湾内を出ようとしたところで、沖の方から何かに向かってくるのが見えた。

それは白の方からは1本の真っ直ぐな縦線に見える。もし、あれがそのままの方向で来ると、白の船に当たるとは必至だった。その縦線の大きさからいって一発で白の乗る船など木端微塵になるだろう。

しかし、白は特に慌てることなく次の術を発動する。

——水遁・水龍弾の術——

船は白が水遁を使用したことにより、海面から盛り上がった水で上へと上がっていく。そこで、初めて何が向かってきているのかが白にも見えた。何か大きな魚……カジキのようなものが来ていたのである。

その化け物と言われていたカジキもどきの魚を、船ごと回避した白は、そのまま湾外へと向けて進んでいく。そして十分に離れたと確認できたところで、後方を確認してみると、湾の入り口をぐるぐるとま

わっている背びれが確認できた。

確かにあんなものがあるのであれば、迂闊に船を出すことはできないだろう。もし出したとしてもすぐに破壊されて終わりである。

白はチャクラの節約のために風遁へと切り替える。しかし、白が安心するのは早く、これで終わりではなかった。

船が一瞬で大破したのである。

白が気付くのがもう少し遅れていれば、最悪白もそこで終わっていたかもしれない。それほどのことだった。

いきなり船の真下から角のようなものが、船を真ん中から突き破って出てきたのである。大破した船からすぐさま距離を取り何が起きたのかを確認した。

そこには大破した船に対して、執拗に、何度も、細くなるまでぶつかり続ける魚がいた。湾に出るところにいたものより幾分小さい魚。おそらくはその子供だろう。

細かい破片へと変わりゆく船を見詰めながら、白の中で何かが切れてしまっていた。

どれほど時間が経ったのか分からない。

白が意識を取り戻した時には、海の上に浮かんだでかいカジキもどきの上に、雷刀・牙を片手に持ち立っていた。そのカジキもどきの中には大きな風穴が開いており、それが致命傷であることが見て取れる。それ以外にも執拗に斬ったのか、斬り傷が無数にある。もし、風穴が開いていなくとも、その斬り傷だけでその内に死んでいただろう。

その光景をしばらく見つめていた白は、雷刀・牙を収納して、周囲を見回し状況を確認していく。

(えーっと。何が起こったのか不明だけど、取り敢えず悪は滅びた……じゃなくて、船が大破した。ここまではいい……いや、よくないけど。……と言うかもう昼なのか……微かにあそこに大陸が見えるってことは、東はこっちね。もう船を買いに戻るのもあれだし走るか……身体中がかなり痛い……)

白はそのまま走り続けて、夕刻にやっと目的の島へと到着すること

ができた。島へと上陸した白は、夕刻ということもあり、身体の痛みが激しいことから、その日はそのまま休むことにした。仙掌術を使わなかったのは、影分身を作れないほどにチャクラを消耗していたからである。

次の日になり、白が始めに行ったことは食料の調達だ。船に食料を積んでいたために、昨日の昼から何も食べていないのである。そこで、食料調達に勤しむことになったのだが、秋ということもあり、島の木々には食料がたくさん実っていた。

（身体の痛みはだいぶマシになったな……。腹も膨れたし、ぼちぼち依頼の品を探しますかね）

未だ多少の痛みを伴う身体を動かしながら、白は島を歩いていく。食料調達に伴い、カブトから貰ったリストに載った地図をある程度把握していたので、いくつかはそれほど探さずとも見つけることができた。

依頼された種類は全部で7つ。マンドラ草、活力人参、紅イモリ、ダイマトウ、葉起草、カララヘビ、万能泥の7つだ。それらを一定数集めて、また送らねばならない。

この日も天候に恵まれ、快晴だったために探すのには苦勞することはなかった。

始めに島の海岸沿いにある葉起草から採取していく。名前からは分かりにくいだが、早い話がつくしだった。これは下の葉の部分からつくしが生えてきており、その葉を残しておけば、また生えてくる。そのため、白は気にせずに、上のつくしの部分を採取していく。

また、その近くにはその葉起草を食べるカララヘビが生息しているため、葉起草採取をしつつも、周囲への探索を怠らない。しかし、そこまで集中する必要も無く、カララヘビを見つけることができた。数匹捕まえて眠らせてから瓶へと詰めていく。

島の中央へ向けて坂を歩いていくと、薄青い花が至るところに咲き乱れている場所へと出た。その薄青い花というのはマンドラ草だった。必要数採取した後、自分用と同じ分量を採取しておく、葉起草と違いどこにでも生えているものではないからだ。同じ場所に生

えていた活力人參も同様にして採取していった。

(こっちの白い毒草とかもついでに採っていくか……)

マンドラ草と色違いながらも酷似した毒草や、途中に生えていた痺れ草と一緒に採取しながら次の場所へと移動する。

次はオレンジの花が目印のダイマトウだ。花は椿のような形をしており、それが1輪ずつ咲いている。しかし、それが絨毯のように敷き詰めて咲いているため、椿が咲いているように見えるのだった。

山の頂部を目指しながら、ダイマトウを採取していく。採取し終わったところには、太陽が真上に差し掛かっており、もうすぐ昼であることを告げていた。

太陽の位置から昼が近いことを見て取った白は、腕時計で正確な時間を確認すると、次の目的地と地図を見比べる。

(次の川のところで昼飯だな)

次の目的地は川の上流に生息している紅イモリだった。河原で火を起こし、紅イモリを捕まえるついでに、魚を千本にて捕らえていく。上流ということもあり、紅イモリは多かったが、魚の数は少なかった。しかも、そのサイズが紅イモリの子供と大差なかったため、腹を満たすのに数を取ることになったのは言うまでもない。

腹を満たした白は、周囲に人が居ないことを探知結界で確認してから、河原の上……断崖絶壁と言つていいほどの高さにある場所へと視線を向ける。

(誰もいないな。——氷遁秘術・魔鏡氷晶——)

下の河原から崖の上へと一瞬で移動した白は、最後の万能泥を取りに、島の中央にある地獄谷へと向かって行った。

地獄谷と明記された場所には洞窟があり、白は影分身を使って先行させて内部の調査を行つていく。特に洞窟を通る時に危険は無く、万能泥の湧き出る広間へと到着した。

(なんかガス出てるけど、あれが毒か……。それにしても、地面の下になんかでかいのがあるな……。あれはなんだ?)

地図に記入された注意事項に、毒が噴出していること、それに伴い、その毒を長時間浴びると死に至る危険があるとだけ明記されていた。

しかし、特に生き物については渡された地図には書かれていない。そのことを不審に思いつつも、歩を進める。

微かに漂ってくる空気に、毒が含まれているのがわかることから、噴出している濃いガスの部分をまともに受けるとただでは済まないだろうことがわかるが、白は特に気にした様子も無く進んだ。

――風遁・風鎧――

途中、地面からガスが白へと吹き付けられるが、そのガスは白の纏った風に遮られ、届くことなく違う場所へとそのまま流れていく。

大きな生き物のいると思わしき場所の上部を通るが、結局は何事も起きなかった。いつ襲ってくるのかと警戒していただけに、拍子抜けした気分を味わいつつ、万能泥の湧き出る場所へとたどり着いた白は、用意していた瓶へと万能泥を詰めていく。

詰め終わり、帰ろうとしたところで地震が起きた。

それは自然に起きた地震ではないことは白には分かっていた。白がゆっくりと振り向いた先には、地面を割って這い出てきた大きなトカゲが居たのである。

(何こいつ？　もしかしてだけど俺を襲う気か？)

地面から出てきたトカゲは身体を震わせて、身体に付いた岩を退かすと、ゆっくりと白へと近付いてくる。その巨体はかなりのもので、そのトカゲの口は、白など簡単に呑み込めるほどの大きさだった。

チャクラを練り込んでいつでも攻撃できる態勢に入っていたが、その大きなトカゲは白の横に辿り着くと、万能泥を飲み始めたのである。

よく考えれば、このような生き物のいない空間で摂取するものと言えば、岩かガス、それに湧き出ている万能泥しかないだろう。

トカゲは白をその大きな目で見ているようだが、特に何もするつもりは無いようで、万能泥を飲み終わると、そのまま這い出てきた場所へと戻り、地中の中へと潜ってしまった。

(まあ、いいか……これで依頼達成だし)

白は元来た道に戻り、採取した物をカブトへと送り届けてから、その日は休息を取ることにした。次に向かう場所をどちらにしようか

と考えるながら……。

88 争い？

「作戦会議を始めます」

部屋の中には3人。それぞれが自分専用の机で仕事をこなしていた。そこへ、突然その内の1人が言い放つ。その言葉に残りの2人は言った者へと顔を向けた。

「いきなりなんです？」

「なんの作戦ですか？」

いきなり言ってきたのはナナだった。それに対して白は若干嫌そうな顔を、ハナビは純粹に疑問の顔をしてそれぞれ答える。

「決まっているでしょう。もうそろそろ、例の季節です。稼ぎ時です」

「ああ。クリスマスですね」

時が進むのは早いもので、もうすぐ冬に突入しようとしていた。去年はクリスマス商戦（と言えるほど他に競争相手がいないため独占だった）があつたことを白はナナの言葉で思い出した。

クリスマスにて稼いだ分については、波の国の街をカンパニーの名の下に整備することに使用したりして、知名度などを高めると共に、影響力をより強固なものへと変えていった。

「去年と同じではいけないんですか？ 稼げてるんですよね？」

「今回はそうはいきません」
「？」

白の言葉に、ナナは少し怒りの混じつたような苦々しい表情をしている。その表情を見て白は不思議そうに首を傾げる。

別段、去年と同じでも利益に関して、大差はないと思っていたからだ。事実、まともな競争相手がいない今の独占状態で、わざわざ真新しいことをしなくとも、客は来るからである。

（また、思い付きだろうか？ 提案するの毎回俺のような気がするんだけど……）

白は溜め息をこっそりと吐きつつ、ナナに問いを投げる。

「なぜ、今回は駄目なんですか？」

「それは、ここから北にある島国で、紅州島という小国があるのだけ

ど、そこがうちの商法を真似てきました」

「別に真似るくらいなら良いのでは？」

「甘い！」

白は、特に深く考えずに、気軽に言ったのだが、ナナは違った。机を『ダンツ！』と叩くと、白を睨み付けながら、一枚の書類を白へと突き付ける。

白は、その突き付けられた紙を受け取り内容に目を通した。

そこには、その島国だけではなく、波の国に対しても、夏場などに似たようなことをしてきている。

売り上げも、夏場に合ったものを使用しているためか、かなり荒稼ぎしていた。ガトーカンパニーとは違い、明らかに金を巻き上げているという報告も上がってきた。

「つまり、競争相手ができたということですね」

「勝つための作戦会議なんですね」

「なにを言ってるんです！ 商法を真似てくるどころか、波の国で商売をしようとしてるのです！ しかも、やつと普通の暮らしができるようになってきている波の国からお金を塗り取るうなど！ この国で、私の許可なく商売をするということが、どういうことになるのか、みっちり教えてあげなければなりません」

ナナは一瞬、般若のような顔をして、親の仇を見つけたかのように、白の持った紙を睨み付けている。

「つまり、2度と商売ができないようにしてしまおうというわけですね」

「……それは、可哀想かな……」

「ハナビ。騙されては駄目よ。この国の奴らは、波の国を昔の貧困な国に戻して、乗っ取ろうと企てているの。これはね、戦争を仕掛けられているのよ。戦争に負けた国は、ずっと搾取され続ける運命……波の国の人たちがそうなのはいけないでしょう？ 私たちは波の国を守らねばいけないのよ！」

「戦争だったんですか!?!」

「そうよ！ これは第3次忍界大戦ならぬ第1次商界大戦なのよ！

絶対に負けてはならないの！ 頑張るわよ！」

「はい！」

「……………」

白はナナの演説を白けた目で聞きながらも、内容については納得できるものもあった。波の国のインフラがやっと整ってきたのである。そこへ、他国から出てきた店にお金を取られるうえに、その金が波の国で使われていないため、経済の循環ができていない。しかも、一部詐欺のようなやり方をしている店まであった。

「というわけで、あんたはこの店を処理してきて」

明らかにハナビとの話し方のギャップを感じながらも、白はナナから店舗がいくつも記された紙を受け取る。そこには、店舗だけではなく、そこで働く人員まで記されていた。

「処理って……殺れってこと？」

「何を言ってるのよ。殺しはご法度よ」

ナナは目で、あんたなら何をすればいいか分かるでしょう、と言わんばかりに見詰めてくる。しかし、波の国は意外と広い。これでは結構な日数が掛かってしまうだろう。そのことを考慮して思ったことをナナへと白は伝える。

「結構多いし、ハナビに幾つかやらせてみてもいいんじゃない？」

「ハナビにそんなことさせられるわけがないでしょ！」

「私では役に立たないんですか？」

ハナビが落ち込む姿を見て、ナナが慌てたように言い繕う。

「そんなことないのよ。こんな雑用はこいつに任せて、私たちはいつものお仕事をしないとイケないの。通常のお仕事を蔑ろには出来ないのよ。ハナビちゃんには更に上のお仕事をこいつがいない間任せることになるわ」

「先生の代わり……ですか？ 私に務まるでしょうか？」

「大丈夫よ。少しずつ慣れていけばいいの」

ハナビの不安そうな言葉に対して、ナナは他の人には絶対に見せないような笑顔をハナビへと向けて、不安を取り除こうとしていた。

白のしている物量を、一気にハナビが持つには負担が大きすぎるの

は確かだろう。その分ナナが受け持つと言うことだが……。

「と言うか、これってナナさんでもできますよね？　一応霧隠れの里の忍びだったわけだし」

ナナはハナビへと顔を向けたまま、白の言葉に驚愕しているようで、笑顔を引くつかせて固まってしまっていた。自らが忍びであることを忘れていたのだろう。頬のあたりがピクピクと痙攣している。

「ナナさんは忍びだったんですか？」

「そんなこともあったような気がするわね……」

ハナビが純粹に好奇心でナナへと尋ねる。

ハナビはナナに色々と教えてもらえると思っているのだろう。しかし、残念ながら既にハナビの忍びとしての技量はナナの遥か上にあつた。ナナの実力は、波の国へと来た当初は中忍程度はあつたのだろうが、今では下忍程度あればいい方だった。

ハナビの目を見て、何か教えを乞う時と一緒だと見抜いたナナは、自分が不利になる前に、無理やり話題を変える。

「本命の作戦会議を始めるわよ！」

「……作戦会議って実際何するんです？　このリストの店を処理して終了じゃないんですか？」

「これは、紅州島と波の国の戦争よ。店だけなんてありえない。やるならば徹底的に。それこそ2度と同じことを起こす気が無いくらいに殺らないと」

「なんか、やる……という言葉に不穏なものを感じるんですが……」

「気のせいよ。それでは、早速だけど提案を受け付けます」

「またですか……」

白は以前のクリスマススの時のことを思い出して、溜息を吐く。ナナは提案を募集するだけで、自ら提案など毎回しないのである。ただ、アレنجジなどはするが……。

「そろそろ、自分で考えることも必要だと思います。俺はこれから、このリストのところに行かないといけないみたいです」

「駄目よ」

「何故です？」

ナナは特に慌てることなく、悪巧みを考え付いたような表情で、白へと答える。

「相手も私たちと同じように、クリスマス擬きをするとの情報を得ているわ」

「それと何の関係が？」

「それが開かれる前日に一齐にやってほしいのよ。人については、最近海賊や山賊も出なくて、暇そうにしているやつらが沢山いるから、そいつらを使ってちょうだい」

「(鬼だ……) 分かりましたよ」

白は、毒草や痺れ草などの事前準備をするために、ナナの言う部下たちへと会いに行くのだが、この時は未だ気付いていなかった。採取する植物の説明からしなければならぬことに……。

七草島での依頼を終えて、休息を取り、身体を万全に整えた白はどうするべきか迷っていた。

行くべき方向は決まったのだが、船が無いのである。一旦火の国の港へ海の上を走って行くという手もあるのだが、またカジキもどきに襲われてはたまらないと、その案を却下していた。

(仕方ない。どれくらい距離があるか分からないけど、走りますかね……)

白が七草島から出て走り出した方向は南。決めた理由は至って簡単で、波の国——それもガトーカンパニーの拠点に近いからと言う理由だった。

その島は、外からの見た目では大きな岩の塊のように見えるが、その内側は森林で生い茂っている。研究所はその中央にあった。

半日ほどかけて辿り着いた白は、研究所の所在を探していた。簡単に中央にあると言われても、正確な場所が分からないためである。ただ、しばらく歩いていると、何者かが近付いてくるのが分かった。

「お前がカブトの言ってた白ってやつか？」

近付いてきていたのは香燐だった。この段階で、既に香燐の探知能力が白より上であることを思い知る。近付いてきて分かった白とは

違い、香燐の方は、迷うことなく白のところへと来たのである。白よりも探知範囲が広い証拠だった。

「個人情報ダダ漏れ……それであつてるけどさ……。まあいいや、色々と研究や鍛錬ができそうだし」

白は周囲の環境を見ながら、思ったことを口にした。周囲を気にする必要も無く鍛錬できる。また、カブトが研究所と言うくらいであれば、水月のいた場所と同程度の設備と資料が期待できるからである。

「ん？ 何を言ってるんだ？ カブトからは、一緒にここの監視役をやるやつを送るって言われてるんだけど？」

「……。ああ！ そう言う名目なのね」

「取り敢えず案内するから付いてきな」

「はいよ」

香燐の後に続き入ったそこは、通路の両サイドに牢屋がいくつもあり、そこに人が何人も入っていた。

2人は通路の奥にある部屋の中へと入っていく。

「んん。それにしても良かったよ。あんたが来てくれて。ここつて私しか女がいなくなつてさあ。ああ、言い忘れてたけど、私の名前は香燐っていうんだ。よろしく」

香燐はソファーに座り背伸びをすると、先ほど通路を通っていた時とは違い、だらけきつたような体勢をとる。完全に白を女と思い込んでいるのだろう。股を広げてソファーの肘掛け部分に腕を乗せるその姿は、まるでどこぞのオヤジそのものだった。

白は癖になったような溜息を漏らしつつ、香燐の誤解を解くことにした。こういったことは最初に解いておかないと、後々面倒臭いことになることが多いからである。

「言っておくけど、俺男だから」

「……………はああ!？」

香燐は白の言葉にしばらく呆然としていたが、白を再度凝視すると驚きの声を上げた。それほど、今の白は女にしか見えなかったのだから。驚いた声を上げた後も香燐は固まったままだった。

しかし、それも束の間。自分の体勢を思い出したのか、きつちりと

座り直して白を睨みつけてきた。

「お前変化の術を使ってるな！ この変態野郎！」

「使ってるないんだけど……」

「どっから見ても女じゃねえか！ 早く変化を解きやがれ！」

香燐はイライラと怒りを隠そうともせず、捲し立てる。

「変化なんて使っていないって言ってるだろ！」

「ちっ。くカブトのやつが、大蛇丸様のお気に入りの1人だから、丁重に扱って言ってたのはこういうことか」

香燐は軽く舌打ちすると、小さく呟き違う方へと視線を向ける。

「もう、間違えられ慣れてるからいいけどさ……。それより、ここでの研究データってどこにあるの？」

「なんでお前なんかに教えないといけないんだよ！」

(これは言わなかった方が良かったかなあ……)

香燐は最初とは態度が急変してしまっていた。それを見た白は、教える気が無いと判断し、研究データを探すついでに施設の構造を把握することにして、部屋を出るべく踵を返す。

「どこに行く気だ？ 勝手な真似はするなよ！」

「それなら、香燐が教えてくれるのか？」

白は顔だけを香燐へと向けて尋ねる。

「教える訳ないだろ！ 馬鹿かお前は！」

「それならこつちで勝手にやるから。そんじゃ」

白が部屋を出たところで、慌てたように香燐も部屋を出てくる。

「何か用？」

「お前が変なことをしないか監視だよ！」

「変な事って……研究所の構造の把握と研究データの閲覧くらいしかないよ」

「そんなこと信じられるか！」

白は、これ以上の会話は無駄だと悟り歩き出す。それに香燐も続いて白の後ろを歩き出した。

ひとつ目の扉の前に着いて入ろうとした時に、それは白の後方から聞こえてきた。

「そこは、捕まえてるやつらの身体を調べるための部屋だ」
「……………」

白は無言で、ノブに掛けた手を一瞬止めたが、中を確認すべく部屋へと入る。そこには香燐の言った通り、被検体を調べるための手術室となっていた。

部屋の中をひと通り見回して、次の部屋へと向かう。香燐は尚も白の後ろに付いたままだった。

次の扉を開こうとする前に再度白の後方から声が発せられる。

「そこはトイレだ」

「……………」

開いてみると確かにトイレになっていた。その後も、扉を開ける前に香燐が扉の先の内容を簡単に言ってくる。

「教える気なかったんじゃないの？」

「誰がお前なんか教えるか！ 独り言に決まってるだろ！ 変な妄想やめろよな！」

「ツンツンだけで、デレが無いとかどうなんだ……………」

「はあ？ 何言ってるのお前」

「サスケの前では確かデレてたような……………」

「お前サスケのこと知ってるのか!! どうなんだ!? 教えろ！」

サスケの名前を出した途端、香燐は白へと詰め寄ってきた。既にサスケに会っているのだろう。サスケの事を聞き出そうとする気が見て取れる。

「この言葉を香燐に返そう……………教える訳ないだろ！ 馬鹿かお前は！」

白の言葉に、香燐はしばらく凍りついたままだった。それを白は、香燐が動き出すまで満足そうな顔をして鑑賞していた。

89 南研究所？

初めて香燐と白が研究所で会って以降、2人はほぼ接することなく日々を過ごしていた。香燐の方は、時折気にしたように、白へとサスケの事を聞きたくてしようがないのか接触してきたが、白の方は関係ないとはかりに研究資料を読み漁っていた。

実際に聞かれたとしても、サスケとの接点などほとんどなく、原作知識も途中までしかない。そのような状態で話したとしても、逆に失礼だろうと白は思っていた。香燐はただ、少しでもいいので、サスケの事を知りたいだけだったのだが……。

それでも、月日が経てば変わってくるものもある。研究ばかりではなく、偶に話しに来る香燐の相手をする程度には、2人の関係も修復——進んでいた。

そしてそれは突然訪れる。

「おい！ 聞いたか!？」

「部屋に入る時はノックくらいしたらどうなのさ」

白の部屋へと、ノックもせず蹴り飛ばす勢いで入ってきた香燐に、白は呆れながら応える。ここまで慌てるのを見るのは久しぶりだった。研究データを基にこつそり実験した時以来である。

「それどころじゃねーって！ あの太蛇丸が殺られたって情報が入ってきたんだよ！」

「ああ。もうそんな時期なのか……」

白は感慨深げに思考を巡らせ、今の時系列を軽く整理していく。

（サスケが仲間集め始めたら、大体が動き出すんだよな。サスケ捜索が始まって……途中までは一緒に居ないと日付が分からないところが歯がゆいな）

白は頭を軽く掻き筆りながら、頭を悩ませていると、香燐が問いただしてきた。

「そんな時期ってどういうことだよ！ 白は何か知ってるのか!？」

「サスケ絡みだと熱くなり易いよね」

「やっぱり知ってるんだな？ いいから話せっ！」

いきなり白へと掴みかかろうとする香燐を、適度にあしらいなから、白は仕方ないとばかりに話していく。どうでもいいという思いで口を滑らせた結果という諦めと、このまま言わないと長時間言い寄られるという2つのことから、言うことを決めたのだった。

「サスケが大蛇丸を殺ったんでしょ。んで、目的のために仲間集めしてるどころ」

「目的？ それに仲間集め？」

香燐は追い掛け回していた足を止めて白へと聞き返す。これにも白は答えていく。

「サスケの今の目的はうちはイタチを殺すことかな。そのための仲間集め。うちはイタチとの勝負に邪魔が入らないようにしたいみたいだね」

「ちよつと待てよ。そんな情報どこから手に入れたんだ？ 白が大蛇丸との接点が無いことくらい、うちにも分かってる。……もしかしてあのいけ好かないカブトか？ 白が来てから、あいつしかここには来ないけど、最近は何も来てないじゃないか。そのところどうなんだ？」

「どうだろうね。まあ、そんなことはどうでもいいじゃない。しばらくくしたらサスケがここに来るんだし」

「サスケが来るのか！」

白の言葉で、香燐は止めていた足を再度動かし、白へと詰め寄っていく。しかし、近づくことはできても、香燐に白を掴まえることはできなかった。

「いつ来るかなんてのは知らないよ。それでも、香燐を勧誘しに来るのは間違いないから身嗜みでも整えてたら？」

「うちを勧誘しに!? でも身嗜みって……」

白の言葉に、香燐は最初こそ驚きと嬉しさが混ざったような表情をするが、その後自分の姿を隅々まで見渡し、服の匂いを嗅いで困惑した表情をすると、白へ悲しそうな目線を向けてくる。

「うちどうすればいい？ これしか服ないんだけど……」

「まあ、小奇麗にしてればいいんじゃない？ 汚くなければサスケの

ことだし気にしないよ」

「アドバイスが適当過ぎないか……？」

「ソナコトナイヨ」

「なんで片言なんだよ……まあいい。ここに来るっていうんなら準備しとかなないと。それじゃまたな」

香燐は白の言葉に満足したのか、口元をにやかせながら部屋の扉を開放したまま出て行った。その後ろ姿を見送りながら白は溜息をつくと、扉を閉め直してはじけ飛んだ門を見やり、再度溜息をついて研究を再開した。

サスケが訪れるまでの間、毎日のように来る香燐を適当に受け流しながら、白も準備を整えていた。

「いいのよ。勝手に処分してしまつて」

「いいのいいの。どうせここには戻つてこないんだし」

白は研究所にある研究データを必要な物以外全て処理していた。まとめられるものはまとめ、巻物内に収めていく。それに伴い、研究所にあった道具についても持ち出していた。

「それ言い出したら、ここの監視つてどうなるんだ？　うち、ここを任されてるんだけど？」

「大蛇丸が殺られた段階で終わつてるから」

「はあっ!?　そういうことは早く言えよ！」

「聞かれなかったし。それに普通気付くもんでしょ？」

「いや、だって、大蛇丸が死んだつてのは情報だけで、確実な訳じゃないしさ……」

香燐は言い難そうに、区切りながら答える。事実サスケに殺られているのだが、香燐はそれを完全には信じ切れていなかった。それは、小さい頃に連れて来られ、人体実験を幾度も受けてきたのだから、大蛇丸に対する恐怖感が大きいのだろう。そのため、死んだという情報が来ても未だに監視を続けているのだった。

しかし、監視もその日で終わりを迎える。

「……!!　これは!!」

「誰か来た？」

「2人この島に近付いてきてる。1人はサスケだけど、もう1人は……なんか嫌な感じだ」

「ああ。たぶん水月だよ」

「あいつかよ……」

香燐は水月の名前を聞くと露骨に嫌そうな顔をする。白が来る前に何か水月との間であったのだろうか。白は特に気にすることも無く、準備した物をまとめて装備していく。

「……こつちの感知にも入った。やっぱり香燐の感知範囲は広いね」「当たり前だろ。うちを誰だと思ってるんだ」

「うずまき一族の末裔だね。＜ナルトと結婚させたいくらいだよ＞」

「……うちは出迎えの準備してくる」

「気を付けて……じゃないや、喧嘩腰にならないように気を付けて」「それ言い直す意味ねーし！」

いつも通り部屋の扉を閉めずに出て行った香燐を白は見送り、忘れ物が無いかを確認していく。ここで研究できたのは主に医療忍術と封印術及び結界術。結界術についてはオマケ程度ではあったが……。

旅装束の準備を完了させて、今日の分の影分身を放つと、白は香燐たちの元へと向かって行った。

香燐たちのいる部屋の前まで来ると、丁度水月が扉から出て来たところへと鉢合わせる。

「久しぶり水月」

「……その声と感じからいってもしかして白？」

「そうそう。思い出してもらえて嬉しいよ」

水月は最初こそ不審そうな目で見ていたが、にやけ面になると白へと語りかけてくる。

「ククク……。相も変わらず女っぽいねっ！」

その言葉に白は、チャクラを瞬時に溜めて水月の胸へと掌打を放った。完全に油断していた水月は、それをまともに受けて吹き飛ぶと、壁に当たる。壁は水を掛けられたかのようになっており、肝心の水月はどうも、壁の下にたまっていく水から這い出てきた。

「今のどうやったわけ？ ぼくの水化の術が効かないなんて……」

「今後言葉には注意しようね」

「教えてくれたら考えるよ」

「教えるのはいいけど、その前に服を着ようか」

水化の術により、服から弾き出された水月は、裸の状態で立っていた。水月は見られ慣れているのか、特に気にすることも無く服を着直す。

（やっぱり首切り包丁は持っていないか……）

水月の背には首切り包丁は無く、代わりにどこで調達したのか、大きめの野太刀を腰へと吊るしていた。着直したところで、水月は本来の目的を思い出したのか、白へと聞いてくる。

「思い出した。ここににいる囚人たちを解放するように言われてるんだけど、鍵の場所知らない？」

「知ってるよ」

「教えてよ」

「んじや、一緒に解放しに行こうか」

「なんか軽いね。通って来た時の囚人たちは暗い顔してたよ？」

「人は人。俺は俺」

「……中身はあまり変わってないみたいだね」

白をジロジロと見詰めながら、白の後をついていく。その後鍵を持って囚人たちの場所へ向かう前に、白は顔を布で覆った。

「なんで顔を隠すのさ」

「恥ずかしがりやなんだ」

「……絶対ウソでしょ」

「そりやもちろん」

「はあ……鍵貰うよ。僕がサスケに解放するように言われてるんでね」

平気で嘘をつく白に対して水月は大きく溜息をつくど、白から鍵を受けとり、囚人たちのいる牢へと近付いていく。

「囚われてる君たちに朗報だよ。ぼくが君たちを自由にさせてあげよう」

「それってつまり、あの樽は本当だったってことか！」
「そうだよ」

水月の言葉を聞いた囚人たちは喜びを露わにして、牢の扉付近に集まっていった。そして、その集まった囚人たちの視線は、水月の持つ鍵へと集まっている。

「ただし、自由にするに当たって条件がある」
「条件だと……？」

水月の言葉に喜んでいた囚人たちは、一斉に動きを止めて静かになると、鍵へ向けていた視線を水月へと向けて警戒し始めた。条件の内容によっては、今よりも酷いことになるかもしれないと緊張しているためだ。

囚人たちの視線が集まったところで、水月は条件を提示した。

「簡単な事さ。大蛇丸を倒したのはうちはサスケだってことを……この世に安定と平和をもたらすと喧伝して欲しいんだよ」

「そんなことでいいのか？」

「色んな場所に行ってくると嬉しいけどね。条件はこれだけだよ」

「そんなことならお安い御用だ。なあ、みんな！」

「もちろんだ！」

水月から提示された内容に、みんな一様に安堵の表情をすると、盛大に喜び始めた。それを確認した水月は、笑いを堪えながら牢の扉を開けて、次の牢へと向かい、同じように訊ねていく。他の牢の中に入る囚人たちも、最初の条件が聞こえていた為、水月の提案に反対もせずに全員賛同した。

囚人たちを見送ってから、水月は踵を返してサスケたちのいる部屋へと向かう。

「そう言えば、白はどうするのさ？」

「俺も途中までは付いていくよ」

「サスケがうんと言うかなあ」

サスケと白とのやり取りをシュミレーションしてみるが、サスケが素直に頷くとは水月には思えなかった。

「まあ、邪魔にはならないし、逆に役に立つから行けると思うよ？ そ

れに途中で抜けるし」

「途中で抜けられたら情報が筒抜けじゃないか」

「既に情報は筒抜けだから問題ないね」

「まあ、君もこっち側の人間だから、途中で抜けても、匿ってくれそうなどころはないかもしれないけどさ」

話しながらサスケたちのいる部屋へとたどり着いた。水月は取っ手を回して扉を開こうとするも、開く気配が無い。中から鍵を掛けているのだろう。

「あの女……鍵かけたな……」

水月は腰に吊るした野立ちへと手を伸ばし、水化の術の応用で腕を太くし始めた。それに白は待ったをかける。

「ちよい待ち」

「何さ」

明らかに機嫌が悪くなっている水月にポケットから取り出した鍵を見せる。

「文明人らしく、堂々と鍵を開けて入ればいいんだよ」

「持つてるなら最初から言ってくればいいのに」

「だから、それを振り回す前に止めたんでしょ」

白は取り出した鍵を使い扉を開けて中へと入った。それまで、サスケにくっ付いていたのだろう。香燐は素早い動きでサスケから離れると、眼鏡を触りながら言い訳を始めた。眼鏡を触るのは焦った時に見せる癖である。

「香燐鍵を掛けるなんて酷くない？ サスケと2人つきりになりたいからって」

「なっ……誰が2人きりになりたいなんて言った！ 鍵はそう、たまにまだ！ 鍵を掛けるのが癖なんだよ！」

「いつも人の部屋の扉を全開放の香燐が？」

「うるさい！ 白は何しに来たんだ！」

「白だと……？」

白と言う言葉に聞き覚えがあったのだろう。サスケは白を見詰めてくるが、白はその眼を見返そうとはしなかった。

「久しぶりって言ったらいいかな？ 木の葉の里以来だね。元気にしてた？」

「なぜお前がここにいる？」

「色々あったから……かな？ 説明すると長くなるけどいい？」

「……いや、いい。どうでもいいことだ」

サスケは、態々聞く必要が無いと思い直したのか、ソファから立ち上がり、扉へ向けて歩き出す。

「そうそう。どうでもいいことついでに、俺を少しの間連れて行ってほしいんだ」

「お前に何ができる？」

サスケは顔だけ白へと向けると、白へと問いたです。

「医療忍術とか封印術とか多才なところかな。自画自賛できるくらい」

「それは香燐で間に合っている。封印術はいらん」

「それなら情報というのはどうかな？」

「……そう言えばアカデミーでも情報屋をやっていたな」

サスケは過去を思い出したのか、遠い目をしたかと思うと、苦々しい顔つきへと変わった。木の葉の里の事を思い出すにあたり、イタチの事を思い出したのだろう。それでも、白の提案に対する決断は早かった。

「分かった。付いてこい」

「いいの？ サスケ」

「構わない。役に立たなければ捨てればいいだけだ」

そう言うときサスケは部屋を出て行ってしまった。

付いていくことができた白だったが、部屋へと残った水月と香燐の2人から、言葉の集中砲火を浴びることになる。水月からは白を心配するような内容を。香燐からは付いてくるなといった内容をそれぞれに受けることになった。

大蛇丸死亡

90 北研究所？

水月は南の研究所を出る間際に愚痴を言い始めた。

「また、歩き？ ずっと移動ばかりで疲れてるんだけど……。休憩してからでもよくない？」

「そんなんじや、北の研究所に着いた途端死んじまうぞ」

水月の愚痴に、香燐は呆れていた。愚痴の内容があまりにも子供の我が儘に過ぎる。これから向かうところを思うと、この様子ではすぐに殺されてしまおうと考えたためだ。

「船あるけど使う？」

その言葉に、3人は言葉を発した人物——白へと顔を向ける。

「あるの？」

「こんなこともあろうかと造っておいた」

「手造りかよ……。沈まないだろうな？」

「責任は持てない」

「持てないのかよ！」

白の言葉に素早く香燐は突っ込む。サスケは冷めた目でその掛け合いを見ていたが、興味を無くしたのか北の研究所に向けて海の上を歩き出した。

「ほら！ サスケが呆れてるだろ！」

「白……持ち上げて落とすのはさすがに酷いよ」

香燐と水月は、それぞれ白に言い捨ててサスケの後を追って行く。白はそんな2人の言葉を気にした様子も無く後に続いた。実際、造船の知識など無く、それらしく造っただけなので大凡の反応は想定していたからだ。

数時間歩いたところで陸地に辿り着き、そこから北へ向けて歩き出す。

「そう言えば、北の研究所ってどんなところなのさ？ ぼくは地図でしか知らないんだけど」

「北の研究所は、人体実験場だ。そこには、手の付けられないバケモノばかりが収容されている」

香燐は真剣な面持ちで話すと、移動しながら簡単に北の研究所について説明しだした。

「北の研究所で仲間を募るって言ったら、サスケのことだ。重吾のことなんだろうけど、あいつのことを知って仲間に入れようとしてるのか？」

「少しは知ってるよ。手合せしたこともあるし、なかなか強かったよ。何を考えてるか分からないような奴だったけどね。自分から大蛇丸に捕まりに来たって言うし、頭がおかしいのは間違いないね。あんまり好きになれそうにないのは間違いないかな」

手合せした時のことを思い出しているのだろう。水月は関わり合いになりたくないのか、仲間にするのに否定的な意見を出す。サスケに聞こえるように言っているが、サスケは聞こえてないかのように先へと足を進める。南の研究所に来るまでも同じように、サスケに言っていたのだろう。効果は無いようだったが……。

「どうして、自分から大蛇丸に捕まりに行つたか分かるか？」

「さあね……。頭がおかしいからでしょ？」

水月からしてみると、大蛇丸の実験体に自分からなりたいなど言いだす輩が、普通だとは思えなかった。それに加えて、手合せ時に話し掛けた時も返事が無かったことから、頭がおかしいと判断したのだ。

「重吾は、自分を抑えてくれるやつを探してたのさ」

「抑える？」

「自分だけではどうしようもない殺戮衝動……。これが、麻薬と同じでなかなか止められない」

実際にその場を見たことがあるのだろう。香燐は仲間にするのを止めさせるかのように話す。サスケも興味があるのか、視線を香燐へと向ける。

「……ようは、人殺しが大好きで歯止めがなかなか効かないから、誰か止める役が欲しかったんでしょ」

「少し違うな。その殺戮衝動については、普段は抑え込んでる。でも、

その抑えが限界に来た時に、恐るべき殺人鬼へと姿も性格も変わる」「ふーん。やり合った時は別の能力を使ってたけど、あれが全力じゃないわけだ」

水月は思い返ししながら、適当に相槌を返す。香燐はその言葉には反応せずさらに話を進めた。

「その能力は大蛇丸にとって魅力的だった……。だから、その能力を他者にも与えることができないかを実験してたのさ。北の研究所でね。……あんたたちも知ってるだろ」

「……？」

何のことか分からずに首を傾げる水月に、白が先読みして話す。

「呪印だよ。サスケの首にもついてるやつ」

「そうそう……って！　うちが話そうとしてたんだぞ！　てかどうやって北の実験の内容を……いや、いい」

「何事も諦めが肝心だよね」

香燐は、それまでの真剣な表情から一転させる。今までの南の研究所でのことを思い出しているのだろう。白の性格と、どこから手に入れたか不明な情報を聞き出そうにも、無駄だと分かったので、どこか諦めたような顔をする。

それでも、白の話が止まったことから、香燐はサスケの首辺りを見ながら続きを話した。

「ちなみに、重吾はその呪印のオリジナルだ」

「重吾に付いてる呪印を、他の奴らに与えてるってこと？」

「いや、そうじゃない。呪印の能力を持つてるだけで重吾に呪印は無い。大蛇丸は、重吾の体液から、その能力を他の忍びにも付与できるように研究して、それを呪印という形で完成させた」

ここで、興味を無くしたのか、サスケは視線を戻す。白も内容を知っているため、香燐の話に興味はなく、違う方向を見ている。そのため、香燐は必然的に水月へと話す形になっているのだが、そのことに気付いたのか、香燐と水月は渋い顔をした。2人ともお互いのことがあまり好きではないのにも関わらず、態々片方は説明し、もう片方はその説明を律儀に聞いているからだ。

それからは特にこれといった話もせず、4人は北上していく。堂々と大きな道を通る。サスケは誰に見つかろうと気にもしないのだろう。香燐と水月も気にした様子は無い。白はというと、コートに付いたフードを被り顔を隠していた。

「白は何してるのさ？　まるで怪しい奴だよ？」

「変だ変だとは思ってたが、外に出たら更に変な奴になったな」

2人からの言葉に、白はさすがに反論した。季節は夏。白の一番苦手な季節である。

「夏なのに、君たちのその薄着の神経がこっちには信じられないよ。この日差しを受けて何ともないの？　香燐は日焼けしたいの？　へそと太腿さらけ出して……あまり肌に良くないと思うなあ……。水月はその内、こっちのことを言ってる余裕なくなるからね？　後悔しても知らないよ」

白の言葉に、香燐は自分のお腹を見詰めて、次いでサスケを見た。サスケに自分の魅力的と思われる部位の肌を見せることで、誘惑するつもりだったのだろう。しかし、このままでは、さらけ出している部位だけが日焼けしてしまい、脱いだ時に痕が残ることに思い至り、少し焦っていた。

水月の方はというと、暑いことは暑い、未だ何ともないことに対して、白が何を言っているのが理解できていなかった。場所的には湯の国。このまま一旦北上し、西へ向けて行った先にある北の研究所を思い浮かべても、特に気にするようなことが起こるとは思えなかった。

そのため、香燐は上着の前の部分を掴むと、その両端を引っ張って腹に日が当たらないようにし、水月は余裕を崩すことなく、逆に白へと言い返す。

「ぼくがなんで後悔なんてするのさ。ただ、北の研究所に向かうだけなのに」

「忠告はしたからね。ちなみに、同じコートがもうひとつあるけど、香燐使う？」

「持つてるなら早く寄越せ！」

白はコートの中から、もうひとつコートを取り出した。そのコートを取り出した瞬間、それを引つ手繰るようにして香燐は掴み取り早速羽織ると、感想を求めているのか、サスケへと視線を向ける。

残念ながら、香燐の思惑は届かず、サスケはひたすら沈黙したまま歩みを止めなかったが。

北の研究所に近づくにつれて、水月は白の言ったことをしみじみと思いついていた。

「白。コートもうひとつない?」
「ない」

北の研究所の場所は火の国内とはいえ、光景は風の国に近く、違いは砂嵐のようなものが無いだけだった。周りは岩肌が所狭しとあり、風は無い。夏なので日の光も強く、それが岩を焼いて周囲の気温を熱くしていた。

白は風遁で風鎧をこつそりと纏い、持つてきていた水筒の中身を氷遁で少し凍らせながら、それで喉を潤して耐えていた。

水月は、明らかにバテて疲れたような表情をして、しきりに同じ言葉を定期的に発する。

「そろそろ休まない?」
「またかよ! 北の研究所までもうちよつとなんだから我慢しろよな」

「いや。歩き詰めでみんな疲れただろ? ぼくはみんなのためを思つて言ってるんだよ」

「うちはまだまだ行けるっての」
「俺もまだ耐えられるかな」

「……………」

誰も賛同の声を上げないことに、水月はガックリと肩を落とすと、手近な岩に腰を下ろしてしまった。それを見て香燐は眉をしかめる。「だらしない奴だな。そんなんで、サスケに付いて来れると思ってるのか? てかなんで水月が付いてきてる?」

「サスケに誘われたからって言っても香燐は納得しないだろうね。」

……ぼくにはぼくの目的がある。それを叶えるのにサスケと一緒だと都合がいいからさ」

「忍び刀七人衆のリーダーになることだよね」

「そうそう……なんで知ってるの？」

水月のいた研究所で、忍び刀七人衆についての情報を話した記憶が水月にはなかった。特に知られて困る内容では無かったが、白が知っていたことに対して軽く驚く。軽くで済んだのは、これまでの忠告などから、知っていても不思議ではないと思ったからだった。

「今のところはヒミツつてことで」

「今のところ……ね……」

「代わりにこれをあげるよ」

白は冷えた水の入った水筒を水月に手渡す。水月は不審気にそれを受け取った。

「これは？」

「冷えた水。暑さでバテてるの丸分かりだから」

「頼りになるね」

水月は受け取った水筒の蓋をあけて中の水を飲み始めた。余程暑かったのだろう。水筒の中身を一気に飲み干してしまい、空になった水筒を白へと返してきた。

「助かったよ。それにしても、かなり冷えてたけど、どうなってるの？」

「中の物の温度をそのままにしておける水筒が開発されたんだよ（この世界にはないけど）」

「便利だね」

「そんな物が今はあるのか」

水月は、研究所に何年もいたためだろう。外からの情報などほとんど入ってこないために、世間の情報に疎く、簡単に白の言葉を信じてしまった。香燐にしても、そういった細々した雑貨の類の情報など集めていなかったのだろう、こちらも白の言葉を信じていた。

再度出発し、アジトまであと少しといったところで、誰かが俯せに倒れていた。

「こいつは、北の研究所の監視のやつだ。……おい。何があつた？」
香燐は男を仰向けにして顔を確認してそう言うと、男を抱き起こした。

「助けて……くれ……。研究所の……囚人たちが……暴走……した。……このままじゃ……」

男はそこまで言うと、身体から力が無くなり、何も話さなくなった。
「あらら……。死んじゃった」

「何があつたつてんだ？」

「大蛇丸が死んだ情報が、研究所内に流れて、それを聞いた実験体が暴れてるんでしょ」

白に全員の視線が集まってきたところで、香燐だけは突如違う方向へと顔を向ける。遅れて白もそちらへと顔を向けた。そんな2人の様子に、サスケと水月も同じ方向を見る。

そこには、異形と化した者がいた。

「あれ何？」

「あれは呪印状態2だ！ かなり強いから気を……」

香燐が言い終える前に、いつの間にも移動したのか、サスケが剣を振り抜いた状態で異形の者の背後に立っていた。

異形の者は身体を数か所斬られており、数瞬後に呪印状態が消えて普通の人へと戻ると、そのまま前倒しに倒れてしまう。

「場所はすぐそこだ。さっさと行くぞ」

サスケは3人を振り返りもせず、北の研究所の方へと足を進める。

北の研究所の前に辿り着いたところで、研究所の出入り口の方から多数の足音がしてくる。それは地響きと言ってもいいほどのものだった。しばらくすると、研究所の前は、先ほど見た異形の者たちで溢れかえる状態になっていた。

「あれだと、監視してたやつらはたぶん全滅だな」

「あの中に重吾っているの？」

「香燐。どうだ？」

「ちよつと待ってる！」

香燐は、感知結界を張り巡らせ、溢れかえった異形の中を探り、すぐさま結論を出した。

「いないな」

「なら、全員殺っちゃってもいいね」

水月は野太刀を嬉しそうに構える。疲れよりも、斬れることの喜びの方が大きいのだろう。先ほどまでバテていたのが信じられないほどだった。

サスケも刀を構えて、やる気満々の水月に向けて言葉を発する。

「急所は外しておけ」

「はあ……お優しいことで……。さっきの男も殺しておけばいいのに、サスケって結構甘いよね」

2人が異形の集団へと突撃した所で、白と香燐の2人は研究所内へと入っていく。

「荒事は2人に任せて俺たちは鍵でも探しましょうかね」

「鍵の場所はうちが知ってるから探す必要ないけどな」

「そう言われるとそうだね。重吾の場所にしたって、感知結界でわかるんだろうし……」

香燐は迷うことなく鍵の置いてある部屋へと入り、鍵を持って出てくると、そのまま研究所の入口へと向かって歩いて行った。逆に白は、その場で感知結界を使い、研究所内のチャクラの場所を把握すると、そのまま研究所内部へと歩いて行く。

白は、ある扉の前でひとつ深呼吸すると、扉の取っ手に手を掛けて、鍵を解きゆつくりと開けていく。

ここに来るまでの経路には、異形の者はおらず、居たのは変わり果てた監視者たちだった。

暴走する前に、逃げ出そうとしたのだろう。隠れようとしたのだろう。あるいは戦おうとしたのかもしれない。しかし、その何れもが無駄であると、その変わり果てた姿から分かった。

(この建物内から感じられる、でかいチャクラはひとつだけだから間違いないな。後は死にかけくらいのチャクラが幾つか……)

感じられた大きなチャクラがひとつであることから、それが重吾であると確信した白は、ゆつくりと開いていた扉を一気に開いた。

研究所内に轟音が鳴り響く。その場所では壁の破片がそこらかしこに飛び散り、砂煙が視界を悪くしていた。

その轟音は1回だけに止まらず、次いで2回目は幾分弱くはなったが、それでも、静かな研究所内に響き渡る。

(始まったな……こつちも急がないと)

白は、研究資料の持ち出しに神経を使っていた。鍵が掛けられている以上、部屋に罠があるかも知れないからだ。しかも、鍵がどこにあるか分からなかったため、水遁と氷遁の応用で合鍵を作り、それを使つて部屋へと入っていた。正規の鍵でないため、何らかしらの罠があるかもと、神経を研ぎ澄ましていたのだが、今のところ罠の気配はない。

部屋をひと通り見て、必要そうな物を巻物へと仕舞つていく。巻物へと収納し終えたら、部屋を出て次の部屋へと向かっていった。

鍵の掛かっている部屋は少なく作業自体もすぐに終わった。他にも鍵の掛かる部屋はあったのだろうか、そういつた部屋は荒らされた上に、血がそこら中に付着している。そのため、その部屋の物を白は諦めていた。

作業を終えた白は、チャクラの集合している位置に向けて歩き出す。途中で急激なチャクラの高まりを感知するが、それが集まっている4人の誰かのものだったため、白は慌てることなく進んだ。

その場所へとたどり着いたときには、既に争いは終決しており、サスケが重吾を説得しているところだった。

「君麻呂は死んだ。俺のために」

「死んだ？ ……お前のために？ それじゃあ、お前の名前は……」

「うちはサスケだ」

「うちは……サスケ……」

しばらく、沈黙の流れるなか、白はゆっくりと近付いていく。白に気付いた3人は、目線をこちらへ向ける。

サスケは、すぐさま目線を扉へと戻し、香燐も同様にサスケへと視線を向ける。水月だけは、完全に白へと向き直ると、白に向かって肩をすくませる。

白が合流を果たしたところで、重吾のいる部屋の扉がゆっくりと開き、中から重吾が出てきた。

その重吾の顔を見て満足したのか、サスケは軽く頷く。

「外に出るぞ」

サスケは、そう言うのと外に向けて歩き出した。その場にいた残りの4人もサスケの後に続く。

入り口周辺は壁が斬り裂かれたり、破壊されたりと、ボロボロになっていた。そして、その下には、瓦礫と一緒に異形だった者たちが、呪印が消えた元の状態で転がっている。

微かに感じられるチャクラから死んでいないことは分かるが、この後はどうなるか分からないくらいに負傷具合だった。それらを後目に建物の外へと出る。

建物から少し離れたところでサスケは立ち止まると、後ろを振り返った。

「今から俺の目的を話した上で、お前たちの力を借りたい。……俺の目的は、暁のうちはイタチを殺すことだ」

「白の言った通りだな……」

香燐のこの言葉に、サスケは反応すると、白へとももの問いた気に視線を向ける。

「あつはっは。香燐は何を言っちゃってるのかな？（ここで言うなよ！）」

「？ 研究所に居た時に言ってたじゃないか。サスケの目的について」

白は、サスケが来ると分かった時に、そのような内容を話したことを思い出し、乾いた笑い声を上げながらも、サスケからの視線もあつて冷たい汗が背中を通るのを感じていた。

「お前はどこまで知っている？」

「えーっと、ある程度までは知ってる感じで……」

白は決してサスケと視線を合わせようとはせず、首から下を見つづつ問いに答える。ただ、サスケも自分の目的を知られようと構わないと思ひ直し、話を再開した。

「まあいい……。これから行動するに当たって、お前たちの意思を確認したい」

「僕はサスケについていくよ。僕の目的ともあつてるからね。……暁にいたる干柿鬼鮫、うちはイタチと組んでるんだけど、そいつの持つてる大刀・鮫肌が欲しいんだ。それが手に入るまではついてくよ」

「なんだよ。ただの刀集めか」「はいストップ」

香燐が言い終える前に白は香燐の口を塞ぎ、最後まで言わせない。途中から水月が、香燐を睨みつけていたのに香燐本人が気付いていなかった。先ほどのこともあり、余計な事を言わせないために、香燐へと意識を集中していた白は、すぐさま動き、香燐を口止めたのだが、結果としては遅かった。

「そういう香燐こそ、どうなんだい？ 僕は知ってるんだよ……。君は昔サスケに……」

香燐は白の拘束を振りほどくと、水月に向かって行き顔を殴るが、水化の術によりその衝撃は受け流されて、ただの水飛沫が上がるだけにとどまる。そして、水月は何事も無かったかのように元へと戻っていった。

「水月。香燐を煽るのはよせ」

「……分かったよ。それはそうと、重吾はどうするのさ？」

「俺は君麻呂が命を懸けて守ったサスケについていく。お前がどれほどの忍びか見届けるために」

重吾がサスケの目をしっかりと見詰めながら言い放つと、サスケはその言葉に満足したのか頷き、白へと視線を向ける。

「白……お前の目的はなんだ？」

「ある時期までサスケと行動することが目的かな」

「ある時期だと？」

「それがいつなのか分からないから、サスケについていくんだよ。まあ、そんなことより、空区のうちは専用店に行つて準備を整えない？」

重吾の着てる物が囚人服っていうのが可哀想だし」

白の言葉で更に訝しむサスケだったが、余計な時間を喰っていると判断し、話を進める。

「今後のことだが、俺たちはこのメンバーで行動する。それにあたつて、これより我ら小隊を蛇と名乗る。先ほども言ったが、蛇の目的はただひとつ……うちはイタチだ」

そこに乾いた拍手が響き渡った。言わずと知れた白である。

「名場面に立ち会えました。満足です」

そこへ、水月と香燐が白の両脇から肘鉄を放つ。しかし、白が軽く後退したことにより、その肘鉄は白に当たることではなく、水月と香燐で肘鉄を当てあうことになる。

「いつつ……空気を読め！ お前は馬鹿か！」

「せっかく突込みを入れようとしたのに、避けるなんて酷いじゃないか」

「ごめん、ごめん。この緊迫した小隊に、一時の清涼剤として自分の居場所を見つけようかと」

「別にお前はいらないんだがな……」

「……………」

サスケの言葉で打ちひしがれる白を余所に、サスケは歩き出す。それに連なつて白を除いた3人も歩き出した。誰も見向きもしないこ

とに白は軽く落胆すると、遅れて白もついて行く。

空区は火の国内にあり、北の研究所からも近い位置にあった。建物はところどころがひび割れており、街の中を行き交う人もほとんどいない。廃墟一步手前といった風景だ。

その中を5人は歩いていき、ある建物の前まで来ると、そこから地下へと下りていく。

「ここが白の言っていたところかい？」

「そそ。うちは一族の専用店。俺も入ったのは初めてなんだけどね」

「なんか、同じところを歩いてるみたいだ。これじゃあ迷路だね、ここ」

「それにしても陰気くさいとこだな」

香燐の言葉に通路を歩いていた5人以外の声が発せられる。

「陰気くさいところで悪かったな」

5人が振り向くと、そこには2匹の猫が佇んでいた。

「久しぶりだな。デンカにヒナ」

「サスケのボウヤか……何の用だい？」

「戦闘に備えて色々欲しいものがある」

「なにこのため「言わせないよ！」ぶはっ！」

水月を掌底で壁へと弾き飛ばした白は、サスケに先じて液体の入った瓶を取り出し、2匹の猫にそれぞれ手渡すと、軽く蓋を開けて中身の匂いを漂わせる。

「これはっ!? ……お前さん分かってるね。ついてきな」

「この時のために特別にブレンドしたから効果は抜群だよ」

デンカとヒナの2匹は懐に、白から渡されたマタタビの瓶を大事そうに仕舞い込むと、通路の先へと先導して歩き始めた。サスケは懐に入れようとしていた手を止めて、その後が続いて歩き出し、香燐と重吾もそれに続く。

重吾が少し興奮しそうになったが、水月が通路の真ん中から壁に移動しただけなので、特にそれほど威力が込められていた訳ではなく、暴力に見えなかったのも大きかったのだろう。それに加えて、マ

タタビに調合しておいた鎮静効果のある匂いで重吾はすぐに落ち着いた。

「前に聞きそびれたけど、なんで君には水化の術が効かないわけ？」

「ああ、それね。柔拳って知ってる？」

「どこかで聞いてことあるような……？」

2人は何事も無かったかのように、2匹の猫の後を追って行く。

「ちよつと長い間それに付き合ってた時に、色々と身体の構造とか経絡とか勉強したんだよね。それで、同じことができないかやってたんだけど、白眼がないと経絡が分からないんだよ」

「白眼ってことは木の葉の里か……。それで？」

「経絡が分からなくても、身体はどこかにはあるわけだから、身体全体に浸透するようにチャクラを放出すればいいと言う結論に至ったんだ」

「つまりなに？ その柔拳もどきでやられると、水化の術が効かないわけ？」

「水化の術は物理に対しては強いけど、忍術に対してはそうでもないよね？ 柔拳はある意味、忍術の一種だと思っ方がいいよ」

「……今度から君の突っ込みは避けることにするよ」

水月は危険な人を見つけたかのように、白を見ると少しばかり距離を離れた。それを見て取った白は、心外だとばかりに言い返す。

「大丈夫！ ボケない限り突っ込みはないから」

「じゃあさっきのはなんなのさ？」

「忍猫を狸って言おうとしたでしょ？」

「だって、どこから見ても狸じゃないか」

「どこを見たらそうなるのさ！ 猫に決まってるじゃないか！ ……ここに居る間は失礼のないようにね」

「分かったよ」

5人が案内された部屋には何匹もの猫が寛いでいた。部屋の奥にはベッドがあり、その手前にひかれた絨毯の上に初老の女が、キセルで煙草を吹かして胡坐をかき、猫を纏わせて座っていた。

その女は、頭に猫耳バンドを付けて、夏であるにも関わらず厚着に

マフラーという出で立ちだった。

「久しぶりだねサスケ。話はデンカから聞いたよ。準備ができるまで少しお待ち」

「ああ、世話になるよ猫バア。それと、マタタビボトルだ」

サスケは懐に手を入れると、瓶を取り出して初老の女へと手渡す。猫バアはそれを受けとり、懐に収めると特に何も語ることはなく、感慨深気にサスケを見つめた。

しばらく5人がその場で待っていると、女が忍具や医薬品の入った箱を持って部屋へと入ってきた。

「バアちゃん。準備できたよ。ここに置いてくね」

「中を確認しときな」

「ああ」

サスケは箱の中から物を取り出して、物や数量を確認していく。始めに手裏剣やクナイ類、続いてそれに付けるであろうワイヤーや起爆札を見ていた。時間が掛かると判断したのか、香燐が重吾を見る。

「重吾の奴にも何か服を買ってやったらどうだ？ 私の渡したコートだと寸が合わないみたいだし」

「そのコート、俺のなんだけどね……」

移動する際に、囚人服は目立つため、重吾には香燐が羽織っていたコートを纏わせていた。しかし、渡されたコートは白のサイズに合わせてあるため、身体の大きな重吾では合わずに、丈の長さも股のあたりまでしかなく、ポンチョのようなものになっていた。そんな重吾の見た目に、サスケは特に気にした様子も無く、ついでだと言わんばかりに猫バアへと追加する。

「服も追加で頼む。それと、全員分のコートもだ」

「分かったよ」

その言葉で、猫バアは頷くと女に目配せして、手配をさせる。女はそれに頷き一旦部屋の外に出ると、しばらくして衣類の入った籠を幾つか持って戻ってきた。

「重吾って人は誰？」

「そいつだよ」

香燐は重吾に指を突きつける。重吾は、コートと囚人服を脱ぐと、持ってきた服を着始めた。

サスケが数え終えて、忍具などを収納していく時に、猫バアがしみじみとサスケに向けて話し出した。

「イタチのところに行くのかい？」

「……………」

「肉球スタンプを集めてた頃はあんなに仲が良かったのに……………あんたら2人が殺し合わにやならんとは……………」

「もう行く。世話になった」

サスケは会話の内容に興味がないのか、金を猫バアに手渡すと、未だに服を合わせている重吾に視線を向ける。

「バアちゃん。この人に合う服がないよ」

「だったら、そのカーテンでも渡しときな」

「お金受け取ってるのに、それはあんまりだよ！」

猫バアと女で言い争っている中、重吾は猫バアの言ったカーテンへと手を伸ばすと、それを引きちぎり身に纏った。

「これでいい」

気に入ったのか、重吾はカーテンを巻きつけたまま笑顔で答える。それを見て、女は全員にコートを手渡していった。

「えつと、俺のは……………」

「えつ？」

1人手渡されなかった白は、あからさまに落ち込みながら訊ねると、女は驚いたように聞き返してきた。

「コート着てるから、いらないと思ってた……………ごめんね」

「いえ……………いいんです。どうせついでですし……………」

同じ色のコートの数は4つしかなかったようで、結局コートを着ていた白に手渡されることはなかった。それを見て、水月がにやけたように笑い、香燐は見下したように鼻で笑う。

「羨ましくなんかないもんね！（ちくしょう！俺だけ無いか酷過ぎる！）」

サスケはコートを羽織ると、そのまま何も言わずに部屋を出て行っ

た。それに続くように4人も部屋を出て行く。残された猫バアは、出
て行ったサスケたちを見やり大きく溜息を吐くのだった。

92 爆発？

空区を出たサスケたち一行は、近くの街で情報を集めることになった。その際に、サスケが白に嫌味を言ってくる。それというのも、多少は白の情報を期待していたためだろう。

「これからだ、まずは、イタチの現在地を知る必要がある。そこで、あそこに見える街から情報を探してくるんだ。集合場所は、ここにしよう。……誰かがはつきり知ってればよかつたんだがな」

地図で場所を指差しながら、サスケはチラリと白を見る。白は、慌てるようにしていいわけを始めた。

「今までずっと一緒だったのにどうやって情報を集めろと!? どう考えても無理じゃない? それに有用な情報あげたじゃないか!」

「木の葉が俺の搜索を始めたとかいうやつか……どうでもいい情報だな」

「(このブラコンめ! イタチ以外の情報要らないんじや話にならないよ……) それなら、熔遁使いの四尾が 干柿鬼鮫にやられたって言うのはどう? 場所不明だけど……」

「話にならないな」

「その場所どこさ!」

サスケは、場所が不明と聞いて興味をなくしたが、水月の方は、白の話に飛び付いてきた。白の襟首を掴み揺すりながら聞いてくる。

「だから、場所は分からないって言ってるじゃないか」

「役立たず!」

水月の言葉に白は精神的にダメージを受けていた。情報を渡しただけなのに、役立たず扱いである。ここまで、細々と食料や衣類などの準備をしていたのは、白ひとりであった。このメンバーで、食事を作るのが居ないので、当然できる者に回ったわけだった。

実際になにもしてないのは水月の方にも関わらず、この発言である。

「あの街に情報あるかな……」

水月はすぐさま意識を切り替えて、近くに見える街へと、白から離

れて見つめる。

白はうちひしがれた状態で、座り込むものの字を地面に書き始めた。

「料理頑張った。洗濯頑張った。薬の調合頑張った。資料の解析頑張った……」

「男がウジウジしてるの見るのはウザいな」

「男だったのか……」

「今更!？」

香燐の発言はいつものことだったので無視したが、サスケの呟きに白は振り向いてしまう。既に知っていると思っていたのだ。

「この巻物を渡しておく。これを持たないものは敵と見なすからそのつもりでいろ」

サスケは、蛇の絵柄の付いた巻物を手渡しで配っていく。受け取った各人はそれを見てから仕舞いこんだ。

「その蛇の絵は俺のチャクラで作ったものだから、複製は不可能だ」
「これなくても、写輪眼や香燐の感知で分かるんじゃないか……」

「俺と香燐は分かるかもしれないが、お前たちの間で分かるのか?」
「なるほど」

白はサスケの説明に納得して頷くと、香燐が口を挟んできた。

「お前馬鹿だろ」

「香燐も絶対分かってなかったよね!」
「うちは分かってたし」

香燐は分かって当然といった風情で、白を見下ろすようにあざけ笑った。サスケは、関係なしで話を続ける。

「そして、これが本題だが、もしイタチを見つけたらその巻物を使って俺を口寄せしろ。それと集合は3時間後だ」

「分かった」

サスケの言葉に重吾は答えて、他のメンバーも頷く。しかし、それも束の間。白は、先程の香燐の発言を引きずっているのか、水月へと愚痴り始める。

「悔しいよ、水月!」

「……ぼくは行くよ」

水月はそう言うと、白の発言を無視して、重吾と共に街へと向かう。水月へと伸ばしていた手をそのままに白が固まっていると、香燐が白にお前も早く行けと促してきた。

「変なことしてないでお前も行けよな」

「香燐もね！」

香燐は余計なことを言うなど言わんばかりに、白を睨み付けるが、サスケに街へ行くよう言われ、渋々といった様子で街へと向かう。

その場には、白とサスケのみが残った。

「人払いをした。言いたいことがあるなら言え」

「さすがだね。……もうすぐサスケに暁が接触してくる。爆遁使い……になるのかな？ 土遁がメインだから雷遁ですぐさま決めてしまふことをお勧めするよ。もうひとりはこの段階では、あまり害にはならないけど一応注意しといた方がいい。それじゃ、また後で」

白はサスケが何かを言う前に、白はその場を後にして街へと向かった。

白は、サスケから離れると、街に入る前に自身の臭いを入念に消すと、服を購入してから、飲食店に入りやけ食いをしていた。

サスケたちに言われたことにシヨックを隠せないのもあったが、表通りにいるとナルトたち探索チームに見つかるおそれがあるためだ。

探しているのはサスケだけで、白を探している可能性は非常に低かったが、ゼロではないだけに、まともなうろつくことができない。街に入る前に顔を変えているが油断はできなかった。

食事処で一服していると、外が騒がしくなってきた。それに反応した白は、支払いを済ませて素早く外に出ると、通りにいる人が向いている方へと顔を向ける。

そこには、巨大な十字架のような爆発が上がっていた。爆発の煙はしばらくそのまま続き、ゆっくりと消えていった。

（諸に集合場所って言うか、先に行ったから狙われるんだよね。離れ離れになってから一時間くらいかな？ 意外と早く決着付いたと

思っているのかどうか……。取り敢えず、行きますかね)

白は、通りの人が固まって爆発の煙を見ている中、ゆっくりと街の外へ向けて歩いていき、街を出て周りに人がいないことを確認してから、本格的に移動を開始した。

——氷遁秘術・魔鏡氷晶——

忍術を駆使して高速移動を繰り返す。そして、集合場所に一番乗りした白は、サスケから渡された巻物を広げると、サスケを口寄せした。口寄せにより現れたのは大蛇丸が契約していた蛇であるマンダだった。マンダの眼は写輪眼の模様をしており、幻術を掛けられていたことが分かる。その眼の模様も次第に消えていき通常の蛇の目に戻った時に、マンダの口の方からサスケがフラフラになりながら現れた。

「くっ……」

「こっぴどくやられたみたいだね」

サスケの身体は爆発の余波を受けたのだろう。着ている服が爆発により破けており、酷いところなどは肌が焼け焦げていた。

息が荒いままのサスケに近付き、掌仙術で大きな怪我を治療していく。チャクラが切れかけているのだろう。サスケは満足に立てないほど消耗していた。

「この……クソガキが……俺様を……利用するとは……この……」

「マンダ死んじゃったか……」

マンダの眼から生気が失われていき、真っ白に変化していく。

サスケの治療を酷い部分のみ粗方終えたところで、購入しておいた服を手渡す。

「はい。これ」

「わかっていたと……、言うことか……」

そこへ水月が現れて、マンダを見た瞬間に一瞬固まるが、動かないと見るやサスケたちの方へと再度駆け寄ってくる。

「サスケ……なんでそんなにボロボロなのさ……。それにこのデカイのって大蛇丸の一番のペットじゃなかった？　なんでこいつまでボロボロ……つていうか死んでるのさ？」

「暁の奴とやり合ってな……こいつを盾にした」

サスケは水月に説明すると、少し動く程度に回復したのか、サスケは服を着替えて、またその場に座り直した。

そこへ香燐と重吾が駆け寄ってくる。2人はマンダを見ても気にせずにサスケの元へと駆け寄ってきたところから、水月と違い大蛇丸をそれほど恐れてはいないのだろう。

疲れ果てて座り込んでいるサスケと、死んでいるマンダを見て香燐が口を開く。

「情けねえ！　なんでそんなに疲れ果ててんだよー！」

「暁とやり合ったんだ、仕方ないよ。そんなことより移動しようか。直ここに木の葉の忍びがやってくるから。……重吾はサスケを願
い」

「分かった」

自分で歩こうとするが、立っているのがやっとの状態のサスケを重吾は背負う。それを確認してから白はサスケのボロボロになった服を拾い上げると、消臭剤を辺りに撒き散らした。

「さっきの街だと気付かれるおそれがあるから、どこか違うところがいいんだけど、いい場所ある？」

「それなら、ここから更に西へ行ったところに、宿場があったはずだ」

サスケは腰から巻物を取り出すと、白へと投げ渡す。

「日光宿場ってところか……。それより急ごう、カカシ上忍の忍犬は優秀だから、長居していると見つかったちやうよ。一応サスケの匂いを辿って来るだろうから、囷を出すんだけど、たぶんそう時間は稼げない」

「……………」

（――影分身の術――）

影分身にサスケの服を持たせて違う方向へと走らせた後、白を先導にして、他の4人は西の宿場へと向かい駆けて行った。

白たちが去ってから十数分後にサスケ搜索班が到着するも、そこでサスケの匂いが一旦途切れて北に向かっていることと、マンダの死骸があったことで困惑を隠しきれなかった。それもそのはずで、サスケ

と一緒に居た者の匂いもそこで消えている上に、サスケの匂いだけが北上していたからである。

日光宿場へとたどり着いた5人は、民宿お越で休憩していた。

部屋に布団を敷いて、サスケを横にさせてから、再度掌仙術で大雑把にしていた治療を再開しようとするが、サスケに止められる。

「必要ない。すぐに治る。それよりもイタチの情報は集まったか？」

「そんななりで偉そうに言ってるじゃねーよ！」

「暁の情報はあつたけど、うちはイタチについての情報はなかったよ」

香燐の罵声などは無視し、水月の言葉を聞いても、サスケは特に落胆した様子も無く、今度は重吾へと顔を向けるが、水月が続きを話し始めたことで、顔をまた水月へと戻す。

「ただ、暁の奴らは特別なチャクラを持つ者を狙ってるみたいだ」

「特別なチャクラ？」

「尾獣のことだよ」

白が水月の言った言葉を補完していく。その言葉にサスケは眉をあげて反応した。

「尾獣だと？」

「そう。木の葉の里にもいたじゃないか、九尾が……。それに情報収集する前に言ったよね？ 干柿鬼鮫に四尾がやられたって」

「……………」

白以外の4人は、情報収集前に言った白の言葉を思い出していた。水月に至っては、自分の情報が既出であったと分かり、渋い顔をする。「そーいやそんなこと言ってたな。……うちの方は特にこれといった情報はなかった。重吾の方はどうだったんだ？」

「俺は動物たちに語りかけて、暁のアジトを幾つか把握した。場所については、白に渡された地図に記入してある。これだ。ただ……」

「ただ？」

重吾は巻物をサスケへと投げ渡してから一旦言葉を途切ると、肩に乗っている小鳥を見る。

「そこでは嫌な感じのチャクラを感じるらしい」

「へえ……低能な動「言わせないよ！」っぐ！」

水月が言い終える前に白は水月の傍へと瞬身の術で移動し、水月の顔へ平手打ちを放つ。それは、白が思っていたよりも結構な威力を発揮して、水月は身体ごと壁へと飛んでいく。多少威力を和らげようと、水月が飛んだことも要因のひとつだったが、その光景を見た重吾が興奮します。

「あつ。やばいやばい」

白はすぐさま懐から巻物を広げて、そこから薬を取り出すと、重吾の口へと無理やり飲ませる。重吾は殺戮衝動を抑えようとしていたようだが、事切れたように、そのまま寝入ってしまった。

「あれ？……鎮静効果のある薬と眠り薬を間違えたかな？」

「おい！ どうするんだよこれ！」

香燐は重吾を指差し、白へと詰め寄る。

「寝てるだけだから大丈夫だって……」

「いいから、重吾を部屋に連れて行くぞ！ うちも運んでやるから白は反対側を持って！」

「はいはい。……ここで寝かせとけばいいのに」

「男がグチグチいうな！」

「はいよっと」

白は重吾の腕を肩に乗せて立ち上がらせると、反対側を香燐が同じようにして支える。2人はそのまま重吾を隣の部屋へと連れて行き、布団を敷いてその中に重吾を寝かせる。

その後に、香燐が白へと相談を持ちかけてきた。

「＜白。消臭効果じゃなくて興奮する薬か何か持ってないか？＞」

「＜それってつまり媚薬ってこと？＞」

「＜お前っ！ ちがっ！ そう！ いい匂いがするやつだよ！＞」

「＜勘違いしてたよ……。はいこれ。本当は媚薬もあるんだけど、香燐はこっちが欲しかったんだね。やっぱり女性といたら香水だよね＞」

「えっ？」

「それじゃあ先に戻ってるから」

白は巻物を軽く広げて香水を取り出すと、それを香燐に手渡す。そして、放心気味の香燐を置き去りにしてサスケのいる部屋へと戻っていった。

部屋の中には水月の姿は無く、サスケのみが布団に入り横になったままだった。

「サスケ。重要な話があるんだけどいいかい？」

「……なんだ？」

「その前に確認したい。木の葉の里を守ることにどう思う？」

「……言いたいことが分からないな」

サスケは白の真意を探るかのように見つめるが、白は気にせず続ける。

「言い方が悪かったね。もし、サスケの大事な人が木の葉の里を守りたいと思っていたら、サスケはどうするのかと思つてね」

「そんな者は存在しない。それに目的については言つたはずだ」

「変わりそうにないね……。それじゃあ本題つと、その前に兵糧丸を渡しとくよ」

白はサスケの考えが変わることが無いことを確認し、巻物を取り出してから薬を幾つか取り出して、それをサスケの枕元へと置いていく。

「もうすぐ、君はイタチと再会することになる。その時は一対一の戦いになるだろう。最後に真実を知ることになると思うけど、その後に会おう仮面を被った奴の言うことは、話半分聞いておいて……。まあ、今言つても無駄かもしれないんだけどね」

白の言葉に考え込んだサスケは、唐突に起き上がり、白へと命令する。

「すぐに出発する。他の奴らを集めろ」

「ええー!?! なんですぐに出発するの!?!」

「お前がもうすぐといったんだろうが、と言うことは、こちらから行動すればその分早く会うということになる。水月は街へ買い物に行かせたから、先ずはそつちを呼び戻せ」

「そんな結論に至るなんて思いもしなかったよ……。分かった、水月

探してくる。香燐はたぶん隣の部屋で固まってるよ」
白はそう言い終えると、街へと水月を探しに駆けて行った。

93 救出？

サスケたちは、日光宿場を出ると、重吾の調べた暁のアジトを近場から搜索していた。

そのサスケが率いる小隊は、暁のアジトの前で立ち止まると、香燐に中の様子を探らせている。

その小隊の人数は4人になっており、そこに、白の姿はない。

肝心の白はというと……。

(早く雨止まないかな……たぶん今回の雨の筈なんだけど……)

雨隠れの里の近くに潜伏して、雨が途切れるのを待っていた。水月に集まるよう伝えた後に、そのまま雨隠れの里へと向かったのである。

雨が途切れるのを待っているのは、この雨が、感知結界の一部であると分かっているからだだった。そのため白は里の中に入らず、外からの監視をしていたのである。

白が監視を始めて2日目に、それまでずっと降り続けていた雨は、不気味なほど途中でパタリと止まる。

不審に思った白は、しばらく様子を見ていたが、雨が降り返すことはなかった。それに対して確信を得た白は、影分身を雨隠れの里へと放ち、自らは準備を始めていた。

雨隠れの里内の廃墟と化した場所では、頭に人を乗せた巨大な蛙と複数の頭部を持つ巨大な犬とが戦っている。

その戦いは、蛙の方がほとんど守るだけという、一方的な展開が続いていた。次々と巨鳥などが口寄せされるが、急にその口寄せ動物たちが消え去る。

その後、建物の内部に入ったのか、外は静寂に包まれる。それを確認し終えた影分身は、自ら術を解いて本体へと経験を還元した。

白本体はというと、廃墟の外辺にあたる、海と見間違えうような広さの湖の水面下に、空気層を作り、そこで待機していた。

(確か……見た目こんな感じのところだったよな……これで違ったら

苦勞が水の泡だ)

数十分程、壊れた柱に寄り添って待機していると、上の方から、瓦礫が水の中へと降り注いできた。それを見て白は、隠遁に集中する。水面下は流れもなく静かで、水の透明度もそれなりによかったため、水面上での人の動きを見てとることができた。

1対6。自来也は善戦した方だろう。障害物のほとんどない水面上で戦っていたのだから。

自来也は、1人に的を絞り、玉碎覚悟の特攻の形で掴むと、肩の蛙が印を組み、数瞬後にその場から消え去った。ペインの1人を連れ去って。

実際には、消えたように見えただけで、水面下に瓢箪のような形をした蛙が沈んでいくのが、白には見えていた。

(肉眼で見ないと、見つけられないレベルか……それ以前に、あの蛙にはチャクラとかはあるのかな？ 口に蓋？ 栓？ みたいなのにしてるけど、忍具扱いなのか、それとも忍蛙扱いなのか……)

その蛙はしばらく沈んだあと、止まりその場を漂い始める。水面上では、しばらく周囲の様子を見ていた、他のペインたちの搜索が一旦終わったようで、建物の方へと戻っていく。

その後、蛙の口の栓が外れ、その口から自来也が出てくる。自来也はゆつくりと、水面へ向けて泳いでいく。そして、壊れた柱に隠れるようにして顔を出し、ペインたちへと攻撃して、ペインたち全員の顔を確認した。

そこで、自来也は驚き、動きを止めてしまう。その短くとも止まった時間の中で、水面下に潜ったペインの攻撃を喉に受け、そのまま壊れた柱の上に叩きつけられ、他のペインたちからも身体中を刺し貫かれる。

(そろそろか……)

湖の中へと沈んでいく自来也を回収した白は、水面上の人影が消えるのを待つべく、待機していたところで気付いた。

(辛うじて生きてる……)

自来也自身は、動きはしないものの、刺し貫かれた金属は、心臓を

避けて刺さっており、その心臓が弱々しく動いているのがわかる。

白は、巻物から薬を取り出して、それを自来也に使う。そして、水面上に誰もいないことを確認してから、自来也へと氷遁を使用した。（予定とは違うけど、やってみますかね）

氷漬けにした自来也を連れてすぐさま移動する。一旦水面上へと浮上し、そこから瞬身の術にて雨隠れの里の外へと出る。

人気のないところまで来た白は、巻物から道具を取りだし、自来也に刺さった金属を抜いていく。

抜いた金属をすぐさま巻物に収納し、札によって結界を張った後、自来也の治療に取り掛かった。

仮死状態にしたまま、身体だけを治そうとするも、ひとりだけではチャクラが足りなかった。そこで、波の国にいる影分身を解除する。そして、チャクラを十分に溜めてから陰癒傷滅を自来也に使用する。傷は傍から見ても分かるほどすぐさま復元していき、白はチャクラの大半を使用して、傷を塞ぎ終えた。そして、自来也を毛布で包み込んだところで、そのまま意識を失う。

白は、頬に落ちてきた雫で目を覚ました。自分の意識が無かったことを思い出し、焦って周囲への警戒心を高めるが、特に何も起きていなかった。そこで、自分が結界を張っていたことを思い出し、安堵の溜息を漏らすと、改めて周囲の様子を探る。

（そう言えば、この人が居たんだった）

毛布で包み込まれた自来也の胸に耳を当てると、変わらずに心臓は動いていた。チャクラが回復しきっていない状態ではあったが、白は残りの小さな傷を消していく。小さな傷と言えど弱った状態の自来也では油断できなかつたからだ。

巻物から兵糧丸を取り出し、口に含んでから再度白は仮眠に入った。

数日間、自来也の面倒を見ていた白だが、一向に意識の戻らない自来也を前に考え込んでいた。

（全く意識が戻る気配が無いな……。このままここに居ても仕方ない

し、連れて行くか……)

影分身を1人波の国へと先行させて、残り3人で自来也を運んでいく。運んでいる間も、自来也は目を覚ますことはなく、更に数日かけて波の国へと到着した。途中で台車で運んだのは言うまでもない。

波の国に入ったところで、先行させていた影分身が、術を解いたことで重大なことが知らされる。

「ハナジを帰省させた!」

その情報は、受付からもたらされたもので、1ヶ月ほど、木の葉の里に商売の手を広げるついでに、ナナがハナジの両親に文句を言いに行くというものだった。これを聞いて慌てた白は、すぐさま木の葉の里に行こうとするが、出発した日を考慮しても、そろそろ木の葉の里に着いていてもおかしくはない。そこで、本体ではなく影分身2体を行かせて、自らは拠点としているガトーカーンパニーの方へと向かって行った。

(非常にまずいことになったな……)

自来也を治療小屋に影分身と共においでいき、白はガトーカーンパニーへと顔を出す。

「すみません。お客さま。お待ちください。先ほど申し上げた通り取締役は居られません」

「はっ?」

受付を素通りして奥の部屋へ向かおうとしたところで、受付に呼び止められた。しかも、毎回顔を合わせているはずにも関わらず、他人扱いされたことに白は啞然としてしまう。

「何言ってるの? 白なんだけど」

「えっ?」

逆に啞然としている受付をそのままにして、奥の部屋へと向かう。再不斬に問いただすためだった。

「再不斬さん! なぜ止めなかったんですか!」

扉を開けて開口一番で再不斬へと喰って掛かる。それに対して再不斬は落ち着いたもので、焦ることなく逆に聞き返してきた。

「何のことだ?」

「ナナとハナビのことですよ！ 俺の事情知ってるでしょう!？」

「ああ。そのことか」

「ああ。じゃないですよー!」

どうでもよさそうに言う再不斬に白は怒って詰め寄るも、全く効果が無かった。

「あまり心配するな」

「いや。それ無理ですから……」

再不斬の慰めの言葉に気落ちしつつも、白は次の事を考えていた。(波の国にいるのは危険だし、かと言って水の国は……同盟組んでからすぐに分かる可能性も……火の国と風の国は論外として、残るは土と雷しか……隠れて生活するしかないのか……)

移動先を考慮していると、再不斬から話しが続いた。

「あの女には、木の葉への同盟についても打診するように言っている。……お前の情報が確かなら、今の火影は人情に甘いのだろうか？ 以前にも物資の援助を行っているし、それに加えて、水の国と同じ条件を付け加えれば、木の葉からも警護が派遣されるだろう。そいつらがおそらく、お前を監視する任務に割り当てられるはずだ。お前の肩書きは、既にこの波の国では3番目になっているからな。おいそれと手出しできないだろう」

再不斬は白に説明をするが、白には納得できない部分があった。

「あのですね。木の葉にはダンゾウっていうのが居まして、そいつは手段を選ばないんですよ。物資の援助や同盟程度で手を出して来ないなんて考えられないんですが？」

火影と対を成す存在のような男、ダンゾウである。ダンゾウの部下は少数ながらも、特殊な技能や秘伝を持った忍びが多く、何をしてくるか分からなかった。抜け忍であると知れただけでも、刺客もしくは抜け忍リストに載せられてもおかしくはない。

「既に国力はあちらよりも、こっちが上回っている。それに忘れたのか？ こちらには既に水の国と同盟を結んでいるんだぞ？ その国に対して下手な小細工などしたとしても、逆にやられるだけだ。刺客については、お前の開発したこの術が便利だな。忍びがどこにいるか

がすぐに分かる」

再不斬は机の上に広げられた地図を見ながらそう答えた。

それは以前、イタチの件があつてからというもの、チャクラが一定以上ある者に対して反応するように開発したものだつた。今では更に分かりやすいように、島の地図を模した物が机の上に置かれて、それを半円の結界が覆っている。そして、その中をチャクラが光となつて移動する仕組みになっていた。

「うーん。……それで本当に諦めるでしょうか？」

「今のこの時代、軍縮が進んでいるからな。経済的に強い国の方が有利だろう。……後聞きたいんだが、少し前に受付のところに行った時、なぜ変化してたんだ？」

「えっ?」

変化など使用した記憶のない白は、自分の顔を触り、先ほどの受付の言葉を思い出す。

(しまった!? 変化するのすっかり忘れてた……)

自分の迂闊さに頭を抱え込みながら、再不斬へと返答する。

「顔を知られたくなかつたんで、いつもはこの部屋付近以外では変化してるんですよ……。まあ、それも無駄になりそうですが……」

「無駄になるだろうな。まあ、火影がそのダンゾウとやらにならない限り大丈夫だろう」

「あつ……」

「ん?」

口を開いて固まった白を見て、再不斬は怪訝な顔をする。今日の白は、この部屋に来てからというものの様々な表情の変化をしていた。

「忘れてました……そう言えば、木の葉の里もうすぐ潰れます」

「……どう言うことだ?」

「どうしましょうか……。しかも火影がたぶんですが、交代してしまします……」

「詳しく話せ」

白は輪廻眼や暁の情報について再不斬へと説明する。再不斬はそれを聞いてにこやかな笑みを浮かべる。

「前にも言わなかったか？ 俺の楽しみを奪うなど」

「奪ってません！ 何もしてません！」

「ビンゴブックに載った奴らが、波の国に入ったら俺の元へ届くようにしてたんだが、最近はそれすらも無くてな……いくぞ白」

「きつと終わってます！ もう終わってます！」

詰め寄っていた白の襟首を掴み、引き摺るようにして部屋を出ていくが、白は反発する。

「お前の影分身をここに1体置いていけ」

「もう、2体分木の葉に向かわせてます……」

「先にお前だけ遊びに行ったわけだな？」

自分の代わりに影分身が、木の葉の里に行っているということで見逃してもらおうと画策したが、逆に再不斬の眼が鋭くなるばかりだった。

暁

94 帰省？

白から説明を受けた再不斬の行動は早かった。

だらしなく着崩した服から、忍び装束へと袖を通し、背に首切り包丁をぶら下げる。そして、不安気な顔をしている白を捕まえて走り出したのだ。

このとき白は、困惑していた。それというのも、再不斬の微妙な説得が影響しており、もしかしたらばれても大丈夫なのでは？ というものと、ばれたらまずい、という2つの考えに挟まれていたからだっ

た。
それにより、再不斬に捕まれたままズルズルと木の葉の里へと向かって

先。先に木の葉の里に着いた、影分身からの情報により、未だ木の葉の里が健在であることは分かった。

「再不斬さん。まだ、木の葉の里は襲われてないようです」

「それはいいことだ……。それよりも、さっき言ってたことは、木の葉の奴等は知ってるのか？」

「知らないと思いますよ。多分ですが、今頃必死に解読しているはずです」

再不斬から、敵となるペインの能力を聞かれた白は、記憶にある注意事項を伝えていた。それでも、その後の答えが白の予想を裏切るものとなる。

「ペインとやらの本体の位置については、木の葉の奴等には教えるな」「えっ!？」

驚く白をそのままに、再不斬は続ける。

「本体は弱っているんだろう？ そんなやつと遊んでも面白くない。……それに、好きだけ暴れても、敵を討つためという大義名分まである。壊れるのは木の葉だ。殺るしかないだろうが」

「やるの文字が危険な言葉に聞こえたんですが……」

再不斬は、新しい玩具を得たかのように、嬉しそうに語りだす。余程楽しみなのだろう。

「自分が格上と思っている奴を殺るのは、いつ殺っても楽しいもんだ」
「ただ楽しみたいだけですわ……」

そう日もかからずに、木の葉の里の目の前に来た白は、変化の術を使用するため、一旦立ち止まり木の影へと向かおうとしたところで、再不斬に呼び止められる。

「何処に行く気だ？」

「何処にも何も、このままだと流石にまずいので、変化の術を使用して
おこうかと」

「このまま行くぞ」

「……意味がわかりません」

このまま入れれば、即捕まるのは白にとって明白だった。木の葉の里での、白の扱いがどうかは分からないが、ナナとハナビが既に里に入っているのである。白についての情報が、流れていると見て間違いないだろう。

それでも、堂々と正面から入っていく再不斬に、襟首を捕まれたまま木の葉の里へと入る。

最悪時に備えて、片手を袖で隠しいつでも印を組めるようにしていたのだが、それは杞憂に終わってしまう。

里の入り口で手続きをして、普通に入れたのである。むしろ、怪しまれたのは再不斬の方だった。

片や忍び装束。片や普段着。確かに怪しむのであれば、忍び装束の方だろう。しかも、自里の者でなければ尚更だ。それに加えて、波の国から来たというのが大きかった。

どうやら、先に来たナナが、色々と問題を起こしたようで、再不斬の肩書きを知るや、火影のいる場所へ、来てもらえないかと言われたのである。

少し不機嫌になりながらも、再不斬と白は先に宿を取るということで、案内をするという言葉にも、耳を貸さずに里の中へと入る。

再不斬が不機嫌なのは、最初に怪しまれた上に、面倒な手続きをし

なければならなかったからで、白の方は、完全に女と間違われたからだった。

(そんなに女に見えるだろうか……)

火影のいる場所への案内を断られても、そう簡単に諦めるわけにもいかない木の葉の忍びは、宿の案内を名乗り出て、今は再不斬と白を先導して歩いている。

「前に来た女は何処にいる?」

再不斬は、木の葉の忍びに尋ねる。

「今は火影邸に泊まっておられます」

(あの人が何してるわけ?)

白は、溜め息をつきながらも、木の葉の忍びについていき、宿に向かって歩いていく。知り合いに会いませんようにと思いながら……。

結局誰に会うこともなく、宿へと到着した。白は安堵しつつも、どこか寂しそうな表情をする。

(前とほとんど変わらないな……)

木の葉の里は、砂隠れとの戦争前とほとんど変わることなかった。店や家の位置など当時のままだ。少し違う店ができているようだが、数年もいなければ、そういったことがあっても不思議ではなかった。宿をとった白たちは、今度こそ火影の元へと向かう。

火影のいる建物内に入り、ある部屋へと通され、その部屋へ入ると既にナナが椅子に座って待っていた。

「何か進展はあったか?」

「いえ……特には……交渉は今からです……」

再不斬の問い掛けに対して、ナナは明らかに元気のない声で答える。いつも、再不斬を前にした時の態度を考えると信じられないものだった。

理由を聞こうと、白が口を開いたところで、火影である綱手姫とサクラが部屋へ入ってくる。サクラは両手にシズネの忍豚を抱えている。

「お待ちせした」

綱手姫はそう言うと、白たちとは対面の椅子に座り、簡単に自己紹介を済ませて、早速本題へと入っていく。

白は、内心何を言われるかと、ハラハラしていたのだが、サクラは全く白の事を覚えていないようで、視線は再不斬へと向かっている。「先ず、日向家の子を、保護していただいていたことについては感謝しよう。しかしだ。何故もつと早くに情報をもらえなかったのかお聞きしたい。これまでも、波の国とは取り引きがあつたはずだ。言う機会などいくらでもあつただろう?」

綱手姫は、責めるような形で問いかけてくる。それもそのはずで、ハナビについては、雲隠れの里に誘拐されたままの扱いになっており、責任の擦り付け合いで、両里の関係が悪化していた。

これに対して噛みついたのがナナである。先程までの元気のなさから一転し、再不斬の前にも関わらず、怒りの表情に変わると、忍びの世界の事など、全く考慮していない発言をし始めた。

「何を好き勝手なこと言ってるのよ! あんたたちがあの子を見捨てたんでしようが! あの子はもううちの子よ! こんな環境で育てさせないから! 今回来たのだから、あの子が里のことを心配してるみたいだから連れてきたのよ! そもそも……!」

延々と続きそうな話を遮るために、再不斬からアイコンタクトを受けた白は軽く頷き、ナナの後ろへと素早く回り込むと、速やかに気絶させた。

「この女は一体何を言ってるんだ?」

「気にする必要はない。少々妄想が激しいだけだ」

再不斬が、軽く溜め息を吐き、綱手姫の呆れたような問いに答える。呆れたようなと言うより完全に呆れていた。同じくサクラも呆れたように、気絶したナナを見ている

白はこの時驚いていた。再不斬が、溜め息を吐くところなど見たことがないからだ。それほどまでに再不斬も呆れていたのだろう。

「雲隠れの里との関係はどうだ?」

「最悪の一言に尽きるな」

綱手姫は、渋い顔をする。相当に悪化しているのだろう。以前のこ

ともあり、それに拍車をかける形となっていた。

その後も、聞きたいことだけ聞いた再不斬は、白へと声をかける。

「ふん。……白」

再不斬は、お前が説明しろと目で合図を送ってきた。話すのが面倒になったのだろう。元々再不斬がここに来た目的は戦闘である。この対談に興味などほとんどないと言っている。

「先ず、知らせなかったことについては謝罪します。しかし、我々は商人です。そこへ、忍びの世界の常識を持ち込まれても困ります」

「お前らも忍びだろうが！ 事の重要性は分かるはずだぞ！」

綱手姫は、お前もこの女と同じようなことを言うのか、という意味合いを込めた言葉で責めてくる。その表情も少し苛立って見えた。

白の背中に冷や汗が流れる。表情はほとんど変わっていないが、綱手姫から殺気が漏れ出始めていた。

(なんか、ヤバイんですが……)

横目に再不斬を見ると、口許をにやけさせていた。久しぶりの殺気に笑みがこぼれているのだろう。実に楽しそうに綱手姫を見つめていた。

それでも、事前に再不斬と話し合っておいた方向で内容を進めていく。

「そこで、我々からは謝罪の意味を込めて、ある情報を提供します」

「ある情報だと？」

「ある暗号と被検体についての情報です」

この言葉で、部屋は凍りついた。綱手姫とサクラは凍りついたように固まる。約1名はそのままニヤニヤと笑っていたが……。

「すぐに教えろ！」

綱手姫は、机など無視して移動すると、白の胸ぐらを掴み、軽々と持ち上げる。それに対して、綱手姫の行動は想定内とばかりに白は答えた。

「我々の謝罪を受け入れてくれるわけですね」

「それとこれとは話は別だ！」

「では、この対応はなんでしょう？ 波の国の代表として来ている

者の、胸を掴んでの話し合いが木の葉の里のやり方ですか？」

「この言葉でばつが悪そうに白を下ろすと、綱手姫は謝罪してきた。「すまない……。最近色々あって気が立っていたようだ。……。それにしても、何故波の国がその事を知っている？ ほんの数日前の事なんだぞ？」

一旦冷静になったのか、綱手姫は疑問をぶつけてくる。

「商人は、情報も売り買いますから……。それに、人の口に戸は立てられません」

サクラが白をじつと見つめてくる。何か記憶に引つ掛かるものがあったのだろう。それでも、話は止まることなく進んでいく。

「取り敢えず、内容を聞かせてもらおうか、判断するのはそれからだ」「分かりました。まずは暗号の方ですが、本物はいません。つまり、いくら倒しても復活するので無駄と言うことですね」

「……………」

綱手姫とサクラは黙ったまま、白を見つめてくる。

「次に被検体についてですが、あれは死魂の術みたいなものです。黒い金属がチャクラの受信機となって、それで操っています」

綱出姫はサクラへ目配せすると、サクラはそれに頷き返す。真偽のほどを確かめるためだろう。サクラはすぐさま部屋を出ていった。

「有益な情報提供には感謝する。……ただ、どうやってその情報を掴んだ？」

言うまで逃がさない気満々のようで、綱手姫からチャクラが練られていくのが分かる。少しでもおかしな真似をすればただでは済まないだろう。

それに対して答えたのは再不斬だった。

「そんなことはどうでもいい」

「そんなことだと？」

チャクラで身体能力を上げていたのだろう。机に乗せていた手を軽く振っただけで、机がいとまたやすく壊れてしまった。それでも、表情を変えずに再不斬は答える。

「もうすぐそのペインとやらがここに来るようなんでな」

「何!？」

再不斬の言葉に驚きを隠せない綱手姫は、しばらく固まっていたが、ハツとして再不斬を睨みつける。

「木の葉の里で戦闘になるだろう。……それも大規模な戦闘にな」

再不斬は心底嬉しそうに笑いながら言う、それまで見ていなかった綱手姫へと顔を向けて話し出す。

「この情報はかなり有益だと思うがどうだ？　もし、情報源について聞かないのであれば、俺たちがその戦闘に参加しても構わん。間に合うなら、同盟を組んでいる霧隠れに増援を頼んでもいいぞ」

「俺たちって……もしかして俺のこと含んでますか？　そっちにいるナナさんのことですよね？」

「どうだ？」

白の言葉を無視して綱手姫へと条件を提示する。綱手姫は事の真偽が不明なため迷っていた。しかし、次の再不斬の言葉で真だと決定づけられる。

「ここに九尾の人柱力がいるんだろう？　そいつを狙ってペインとやらが来る。暁の目的は尾獣を集めるためのようなんだな」

「……分かった。ただ、霧隠れの里の増援はいらん。あいつらは何を考えているか分からんからな。お前たちとは、一応取り引きなどをしていて知ってはいるがな……」

綱手姫は、再不斬を見ながら言い放つ。言外にお前も含むと言っているようだった。

「ただし、日向のことに關してはまた別問題だ。それについてはきつちりと……」

綱手姫が話をしているところに、慌てたようにして人が入ってきた。

「なんだ、騒々しい！　今は対談中だぞ！」

「申し訳ありません！　何者かが結界を突き破り木の葉の里に侵入してきました！　しかも、口寄せされた巨大生物が里内を襲っています！」

「なんだと!？」

その言葉を合図にしたかのようにして、地響きが届く。窓の外を見ると、牛のような巨大な生き物が、建物を破壊していた。それに驚く綱手姫に対して再不斬は立ち上がると、部屋を出て行く際に言い捨てる。

「契約は守れよ。いくぞ白」

「なんというタイミング……。逃げる暇が……」

未だに逃げようと画策している白に、再不斬から止めの一言がもたらされる。

「ここで、あの火影がお前の言うとおりに倒れでもしたら、そのダンゾウとか言うのが火影になるんじゃないのか？」

「!？」

「そうなるよ、お前の立場はなかなか面白いことになりそうだな」

尚も楽しそうに語る再不斬に、白は縫るような気持ちで問いかける。

「えーっと、でもですね。波の国の実質3番目に偉いんですよね？」

手出しはなかなかできませんよね？」

「俺とあの女は別にして、お前の顔は広まっている訳ではないからな。どうなるんだろうな？」

再不斬の言葉に絶句している白を余所に、再不斬は言葉を続ける。

「それが嫌ならさっさとそのペインとやらをやりに行くぞ」

「はめられた……。だまされた……」

「いつまでも女々しい奴だ」

「<……そうだ……。全部ペインが悪いんだ……。殲滅だ……。瞬殺だ……」

>

再不斬の女々しいという言葉に我を忘れた白は、ぶつぶつと呟くと外に向けて飛び出した。

95 ペイン？

木の葉の里は突如として起きた爆発や、巨大な動物による攻撃で建物を破壊されていた。

急に起きた事態にも関わらず、木の葉の忍びたちは多少慌てたものの、自分たちの役割を思い出し、ある者は木の葉の里に住む一般人の避難に当たり、ある者は敵の捜索に当たっていく。以前に大蛇丸からの襲撃を受けたことで、こういった事態に慣れていたのもあり、一般人にしてもほとんどの者が迅速に避難をしていた。

この時に、もう少し詳しく白たちからペインたちの情報を聞いていれば良かったのだろうが、侵入してきた人数は1人であるという情報が木の葉の忍びに伝播していた。それにより、敵の捜索に当たっていた者は、あまりの攻撃範囲の広さに戸惑うことになる。また、実際にペインと対峙した者たちも、他の場所で爆発音が鳴り響いたことで不思議がっていた。

白と再不斬の2人が飛び出して、始めに出会ったペインは、修羅道と餓鬼道のコンビだった。ここでは、木の葉の忍びたちが遠巻きに術を発動しては餓鬼道に吸収され、接近戦に持ち込もうとしては修羅道にミサイルで迎撃されていた。

そのペインたちの周辺には、木の葉の忍びが倒れ伏している。辛うじて生きている者もいたが、倒れ伏している者のほとんどが死亡しているのが、チャクラが無いことからわかる。それでも物量で押そうとしているのだろう。止むことなく術を行使しているが、一向に効果が発揮されることはなく人数だけが、修羅道のミサイルにより徐々に減っていった。

白はしばらくペインたちを見つめながらチャクラを溜めていたが、ペイン2体の視線が向いていないのを確認すると、何も言わずに忍術を使用する。

（――水遁・水龍弾――）

片手で水龍弾の印を組み、もう片方で違う印を組むと、餓鬼道たちに仕掛けた。それに少し遅れて、再不斬も水龍弾の印を組んで発動す

る。水龍弾が出現したことで、その光景を見た木の葉の忍びたちは、それまで風遁や火遁の忍術を取りやめて、急に現れた水遁に見入ってしまう。

それもそのはずで、木の葉の里に大規模な水遁を使える忍びは少なく、限られていたこともあるが、敵であるペインが忍術を使用してこなかったため、味方の術であるという認識があり、それを邪魔してはいけないと、忍術を中断して見ていたのである。

再不斬の水龍弾の方は上から餓鬼道に向けて、もうひとつの白の水龍弾は、修羅道と餓鬼道を取り囲むようにして向かっていく。

案の定、餓鬼道に向かう水龍弾を吸収しようとするが、吸収できるのはチャクラだけのようで、チャクラを失った水龍弾はただの水となり餓鬼道へと降り注いだ。

しかし、ただの水……しかも水龍弾程度の水の量では圧殺するには程遠く、餓鬼道その場に立ち止まらせて、濡らすだけに留まった。

もうひとつについても、自分たちへ向けて来ると思ったのだろう。修羅道は術を吸収しやすいようにと、濡れた餓鬼道の背中に回ると、そこから白へと腕を向ける。向けられた腕はあつという間に変形していき、数瞬後にはその腕からミサイルの群れが発射された。

発射されたミサイルは、あつという間に白に命中すると爆発を起し、その周辺の建物を含めて瓦礫へと変えていく。

その時に餓鬼道は、白の方の水龍弾へと手を伸ばそうとしたが、その水龍弾は餓鬼道たちに向かうことなく、白へとミサイルが命中すると共に、その場に散らばりただの水となった。

修羅道と餓鬼道が、ミサイルのぶつかった白から顔を逸らし、再不斬へと視線を向けた瞬間、修羅道と餓鬼道の身体中を痺れが襲う。

餓鬼道と修羅道は痺れながらも周囲へ目を配り確認した。するとそこには、両手に雷刀・牙を持った白が、それを水溜りへと突き刺して片膝をつき、水に向けて雷撃を流していた。先程ミサイルがぶつかったように見えたのは、水龍弾と同時に印を組んだ影分身だったのである。

餓鬼道はすぐさまチャクラの吸収を開始して、身体の痺れを取り除

く。それにより、修羅道に流れていた雷撃も途切れて、修羅道も痺れが取れた。

痺れがとれたことにより、それに合わせて修羅道が白に向けて移動する。ミサイルでは、確実に白を葬ることができないと判断したためだった。

修羅道の背中から薄刃で長いのがぎり状の物が生えてくる。それで白をひと突きにするつもりなのだろう。しかし、白へと修羅道が辿り着く前に、再不斬が次の忍術を発動していた。

（霧隠れの術）

辺り一帯を霧が覆い隠していく。その現象に慌てたのは木の葉の忍びの方で、そのような中でも、餓鬼道は迷うことなく周りの霧を吸い取るために手をかざす。

この時、修羅道が白を葬るために餓鬼道から離れたのは間違いだった。餓鬼道の周囲の霧は消え去っていたが、修羅道付近の霧まで吸収できていなかったのである。

もちろん再不斬が全て吸収し終わるのを待つはずも無く、術の吸収をしていた餓鬼道の元へ移動して、首切り包丁で斬りつける。

元々接近戦を得意とする再不斬に、一対一では分が悪く、餓鬼道は追い詰められていった。再不斬は、久し振りに歯応えのある敵を前にして、口許に笑みを浮かべると、非常に楽しそうに餓鬼道へと斬りかかっていく。

近くにいるはずの修羅道が、餓鬼道の元へ助けに行くことはなかった。何故ならその頃、白によって足止めをされていたのである。

雷刀による電撃で痺れることが分かった白は、霧の中修羅道へ近付くと、片手の雷刀・牙で修羅道の胸を一気に突き刺して、雷撃を流していた。そして、もう片方の雷刀・牙を頭へと突き刺して同じように雷撃を流す。

修羅道は霧によって何も見えないまま、身体中を雷撃により痺れさせていた。白は、雷撃を流したまま雷刀を動かして、硬い身体にゆっくりと斬り込みを入れていく。

白が修羅道を解体していると、急に現れた大刀が、いとも容易く修

羅道の首を一瞬にして斬り落とした。餓鬼道を倒し終えた再不斬が、今度は修羅道へと斬りかかったのである。

それが分かった白は、すぐさま雷刀を修羅道から抜くと、修羅道から離れて、忍術を使用する。

（――風遁・大突破――）

霧を吹き飛ばして現れたのは、身体をバラバラに斬り裂かれて倒れ伏す、餓鬼道と修羅道――ペイン2体の姿だった。

その光景を見た木の葉の忍びから歓声があがり、そこかしこで喜びの声が上がるが、それも束の間、大型の動物が、周囲を破壊しながらその場に來たのである。

それに対して、木の葉の忍びはその場から一旦離れると、忍術を使用して大型の動物に攻撃していく。大型の動物は口寄せされたものであり、この動物に対しては忍術が効いた。しかし、やっと倒したと思った矢先に、次の口寄せ動物が來るといふ、流れになってしまっていた。

木の葉の忍びが、口寄せ動物の相手をしている中、白は巻物を取り出して、バラバラになっている修羅道と餓鬼道を封印し、収納する。

これにより、巻物を奪取して出さない限り、修羅道と餓鬼道の復活はなくなった。

巻物に収納し終えた白は、口寄せ動物を無視して次のペインを探し始める。1度、霧隠れの里襲撃の依頼をした時に雨隠れの里で感じたチャクラを感知した白は、その場所へと向かう。

再不斬は、その場に残り、斬っても斬っても分裂を繰り返す、大型の犬のような口寄せ動物と派手に戦っていた。何度も斬り裂き増えていくが、それを気にせず、再不斬は斬りまくる。それに伴い周囲の被害も増えていったが、再不斬は全く気にした様子はない。

しかし、人的被害を抑えるためだろう。綱出姫の口寄せ契約相手であるカツユが、倒れた人々を包み込み、戦闘の無い場所に向けて移動させていく。移動させているのは、辛うじてでも生きていた者のみで、死んでいる者は、その場に置き去りの状態になっていた。

次いで白が出会ったペインは、人間道だった。場所は木ノ葉暗号部の建物上。その真下では、悠長にシズネたち数名が話し合っている。人間道は、話し合っていたシズネたちの中央に降り立つと、すぐさま目の前にいた者の頭を掴み、起爆玉を置いて爆発を起こすと、再び建物上へと戻ってくる。

その手に捕まれていたのは、イノだった。イノは絶望したかのような顔で、下にいるみんなを見つめている。

「動くな……。動けばこの女は死ぬぞ」

「ちっ！」

いのいちが舌打ちしているが、動くことができずに見守っていた。人間道は、イノの頭の中を読み込もうとしているのだろう。周囲が凍っていくのに気付くのが少し遅れる。

人間道が、周囲に出来た氷の鏡へと視線を向けた時には、イノを掴んでいたはずの手首から先が無くなっていった。次々とできる氷の鏡に人間道は対応できず、手首を斬り落とされたあとは、反対側の手首、脚と、少しずつ白の秘術により削られていく。

解放されているはずのイノは、振り返り攻撃しようとしたのだろうが、それを止めて間近で呆然と人間道が解体されていく様を見ていた。建物の下にいた者たちも、その光景を呆然と見ている。今までの敵の行動から、こうも容易く倒されてしまうとは思っていなかったのだろう。人間道が、バラバラにされるまで、その場の誰も動くことはなかった。

人間道を解体し終えた白は、巻物を取り出して修羅道たちと同じように封印し収納する。

「あ……あんたは誰だ？」

イノの父親であるいのいちが、一番始めに硬直から脱出し白へと問いを投げ掛ける。

この時になって、初めて周りに人が居たことを認識した白は、両腕を組みどうしようかと悩んだ末に答えた。

「波の国からの援軍です」

「波の国？ ……隣国とはいえ、こんなに早く着けるわけが……」

「戦力にならない人は、里の端に移動した方が身のためですよ」
「待ってくれ！」

そう言っただけのペインを探すために集中しようとする白を、いのいの言葉が遮る。少しでも敵に関する情報が欲しいのだろう。しかし、その遮るといふ行為そのものが、白を苛立たせていた。

「あんだ、敵のスパイかなにかか？ 俺をこの場に足止めしたいのか？」

「なっ!？」

白のあまりの言葉に、絶句するいのいちを無視して、白はカツユに向けて話し出した。

「地上にいる全員に伝えろ。すぐに里の端に移動するようにと。それと、ナルトのやつへもう一度伝令を飛ばせ。妙木山との伝令役のカエルは、ダンゾウに殺られてる」

「何を言ってる……」

尚も何かを言おうとするいのいちを遮って、カツユが答える。

「分かりました。伝えておきます。それと、敵の数は残り3人です。1人はカカシさんとチョウザさん、チョウジさんの3人で戦っておられますが、敵は無傷のようです。もう1人は、口寄せしては姿をくらませています。最後の方については、見付けても紙のように散らばり、すぐにその場から消えてしまうため、こちらについても、場所がわかりません」

カツユは、白に答えると、いのいちに言い聞かせるようにして話し出した。最初の返事を確認した白は、再度集中してペインの場所の把握に努める。

そして、一番近くにいたペインは移動を繰り返して行った。

(この移動してるのは、多分口寄せするやつの方だよな……)

遠目に、犬と戦っている忍びたちの方を見て、白はそのペインに向かうのを止めた。そして、今度はカツユへと問いたただす。

「ペインは全部で6体で、それ以外にも女が1人いる。俺が封印したペインは3体。残り2人は動いているとして、木の葉の忍びで倒したもう1体はどこにいる？」

「商店街の方にいますが……それがどうかしたのですか？」

「近くに人はいるか？」

「エビスさんと、木の葉丸くんという2人が近くにいますが、それがどうかしたんですか？」

「……探すの面倒くさい……」匹連れて行く」

白はその場にいたカツユを一匹手に取ると、自分の肩に乗せてカツユに再度問いただした。

「場所は何処？」

「あちらになります」

カツユはつのの部分がある方向に向けると、白はそれに従って移動を開始した。

96 □寄せ？

カツユを肩に乗せた白は、地獄道の倒された場所へカツユの案内のもと向かっていた。

その場所では、地獄道の近くにエビスが座り込んでおり、木の葉丸が傍に立ってエビスと会話していた。

「何とか……倒せたようですね。木の葉丸君……」

「当たり前だこれ！ ナルト兄ちゃん直伝の螺旋丸だこれ！」

「螺旋丸……ですか……。超高等忍術を……会得するとは……流石です」

エビスは、木の葉丸が螺旋丸を習得していることを知らなかったように、驚きと共に、木の葉丸を褒め称える。

ただ、エビスはかなりの負傷をしているのだろう、言葉を途切れ途切れにししながら、木の葉丸に伝えていた。木の葉丸は倒したことで興奮状態になっており、エビスの状態に気付いていない。と言うよりも忘れていたといった方がいいだろう。

その姿を見た白は、エビスの傍に移動すると、肩に乗せたカツユをエビスへと移動させる。急に現れた白に対して驚愕した木の葉丸は、すぐに後退して距離を開けると白に指を突きつけてきた。

「何だお前！ エビス先生から離れろ！」

木の葉丸は残りのチャクラが少ない中、更に影分身を使用して螺旋丸を作り始める。敵として見てしまった理由は、木の葉の忍装束や額当てをしていない上に、里内で見たことが無いため、白を敵と勘違いしているからだだった。

白は溜め息をつくくと、螺旋丸が完成する前に瞬身の術で木の葉丸の後ろへと移動し、木の葉丸の1人に当て身を喰らわせる。それにより作りかけだった螺旋丸は突風に姿を変えて荒れ狂った。

当て身を喰らわせた方は影分身だったようですぐさま消えてしまふ。それに合わせて、木の葉丸も力尽きたように片膝を突き息を荒げる。

「木の葉丸君おやめなさい！ その人はおそらく敵ではありません

！」

「そうですね！ 波の国から、援軍として今回加わっていただいています！ 名前は白さんと言うそうです」

エビスとカツユからの言葉で警戒心が解けたことにより、木の葉丸はそのまま後ろに大の字となつて倒れ込んだ。

「取り敢えず、ある程度回復したら、こいつを連れて里の端に移動してください」

「あなたはどうするのです？」

「あれを処理したら、他の奴に向かいます」

白は倒された地獄道を指差してみせる。それに対して不審顔をしていたエビスにカツユが説明し始めた。

白はその間に、地獄道を封印するべく足を運ぶ。そして、再起不能にするために雷刀を構えたところで、地獄道が煙と共にその場から消え失せてしまった。

（あれ？ ……げっ!? 口寄せのこと忘れてた……。今どこに……）

感知結界を広げたところ、火影のいる近くに口寄せされたことが分かり、白は慌てて再不斬の元に移動する。

「すぐに里の端に移動しろ！」

エビスへと言い捨てて、白はその場を後にした。

口寄せ動物との戦いは残すところ、大型の犬のみとなっていた。それでも増え続けた結果、その数は数十匹にまで膨らんでおり、木の葉の戦力のほとんどがその場に集中している。

「再不斬さん！ そろそろ不味いです！ 里の端に移動しないと巻き添え食らいますよ！」

「……確かに、そろそろこいつの相手も飽きてきたところだ。移動するか……」

首切り包丁を振り回しながら、緊張感のない声で返す再不斬に、白は再度忠告をしようとしたところで、上空に異常な量で増えていくチャクラを感じる。

嫌な予感と共に白が上空を仰ぎ見ると、そこには両手を上に向けて

浮かんでいるペインの姿があった。

「再不斬さん……。今から奇襲をかけますが、失敗したら逃げるんで後はよろしくお願いします」

白は一旦ペインを見つめてから、更に上空へと視線を向ける。

（――氷遁秘術・魔鏡氷晶――）

ペイン天道の更に上空へと移動した白は、落下しながらすぐに次の術を発動した。

（――氷遁秘術・千殺氷翔――）

白の周りに氷でできた千本が無数に現れ、一斉に天道に向けて放たれる。

術を放った後に、白は雷刀を構えるが、他のペインに見られていたのだろう、天道は今まで下に向けていた顔を上に向けた。

「お前か……。先程から邪魔をしているのは。神羅天征」

天道が呟いた一言で、白は行使した氷遁もろとも弾き飛ばされる。しかも、白に関しては真上からの強襲だったため、そのまま上空へと飛ばされた後、同じ軌道で落下していく。

（ペインの視界……。そう言えば全部潰してなかったな……。ここまでみたいですよ。再不斬さん）

再度天道に向けて落下してくる白に向けて、神羅天征が放たれる。

その後、何事もなかったかのように、天道は上空へ再度両手を向け直しチャクラを溜め始める。

チャクラの増大に伴って、危険と判断した者たちは、天道から離れるようにして移動していく。チャクラの感知ができない者たちでも、その威圧感を感じることができるとのチャクラが練り上げられていた。

あまりにも上空にいるため、術が届かないことと、再不斬から離れるようにカツユ経由で警告を受けたため、天道から離れるのも早かった。

しばらくして、天道は挙げていた手を下に下ろし呟く。

「ここより世界に痛みを……。神羅天征」

この術により、木の葉の里は壊滅的打撃を受けた。

波の国の診療所にいた影分身も、時を同じくして消え去っていた。
「めっちゃ痛い……」

影分身が消え去り、その診療所のベッドに腰かけていたのは、先程まで木の葉の里でペインと戦っていた白だった。

痛みに対して鈍感な白が痛みを感じていることから、神羅天征によるダメージがかなり酷いことが分かる。

あの場で奇襲の失敗を悟った白は、神羅天征を喰らった後に波の国の影分身に連絡を取り、2発目の神羅天征を受ける前に逆口寄せで、波の国へと逃れていた。

着いて早々、ボロボロの身体を回復させるためにすぐさま影分身を解き、掌仙術を使用するため服を脱いだところで、凍り付く。

「あぶないところでしたね。それにしても、ここはどこですか？」

服の中に小さなカツユが居たのである。これを見て、白は凍りついたのだった。

「大丈夫ですか？」

カツユの気遣うような声で我にかえった白は、混乱している自分の頭を整理するためにも、カツユに質問する。

「なんでここにいるの？」

「それはもちろん、情報を迅速にお伝えするためです」

「いやいや。俺は確かあの時、倒れてる眼鏡の人を回復するために渡したはずだよな？ その後、連れて行った記憶がないんだけど？」

地獄道との戦いで負傷したエビスに、渡したはずのカツユが、何故か白の服の裏についていたことに疑問を持つ。その後に連れて行った記憶もなければ、それ以前に渡して以降触った記憶すらない。

そのため混乱していたのだが、カツユの次の言葉で謎が解ける。

「はい。あの時分裂しておきました。回復のためのチャクラについては、ほとんど向こうに渡しましたが、やはり、未知数の敵と戦うのであれば、情報は大切ですので」

「……………」

当然のことです、という空気を出すカツユに、白は再び凍りついた

のだった。

「あつ。安心してください。無事であることは伝えてあります」

「余計なことをおとおお！」

「えっ!？」

突如として大きな声をあげた白に、カツユは驚いて角を引っ込める。突如として消えた白——しかも、ペインを数名倒したという話を、カツユは聞いていたので、木の葉の里の者たちが不安にならないよう、そして、同じ波の国から来たという再不斬に無事であることを知らせるために、先に報告したのだった。

白にとっては、これでまた死んだことにできるかも、と目論んでいた。上空から地上を見たときに、忍のほとんどが、里の端に移動していたことも、理由に含まれる。

そうとは知らないカツユは、引っ込めていた角を出すと、困惑したように白に訊ねる。

「なにか不味かったでしょうか？」

「取り敢えず、こちらからこれ以上連絡するのは禁止。絶対禁止」

「理由をお聞きしてもよろしいですか？」

「よろしくない……。もう伝えたことは諦めるけど……。向こうの状況は分かる?」

白は気落ちしながらも、木の葉の状況の確認を行う。それによつては、この波の国を出なければならぬ。

カツユは納得できないながらも、白の質問に答える。

「一般人の被害は、避難が早急に完了したためにほとんど出ていませんが、今回の戦いで忍の方に死傷者が多数出ています。それと、最後にペインから放たれた術についてですが、里の建物はほぼ全壊しています。しかし、人的被害はほとんどないようです」

カツユの報告にひと安心した白は、答えを返さずに自分の治療に集中する。それを見たカツユは、なにも言わずに見守った。医療忍術の難しさを理解しているため、白の集中を妨げないという配慮のためだ。

簡単な治療を終えた白はひと息吐くと、服を着ながらカツユに随時

里の状況を聞き出す。

「ナルトのやつは来た？」

「はい。今は、里の中央でペインと戦っています。戦況はナルト君が押してますね……。ナルト君をご存じなんですか？」

カツユはナルトとの接点について尋ねてくるが、白はその質問を後回しにさせて、更に質問する。

「その辺は後でどうせ分かるから、決着がいたら教えて、後綱手姫の状況も」

「決着については構いませんが、契約相手の情報はおいそれとお教えするわけにはいきません」

カツユの口調は、絶対に言わないという決意が込められており、これは言い方が悪かったと反省する。

「言い方が悪かったよ。綱手姫の意識の有無を聞きたかったんだ。里の者を助けるのに、だいぶチャクラを消耗してたみたいだからね」

あくまで、綱手姫が心配で尋ねているといった風に装う。

服を着終えた後は、ベッドに横になった。カツユはゆっくりと白の枕元の方へと移動しながら答えた。

「分かりました。それでしたら、お伝えできます。チャクラの消耗は激しかったようですが、ナルト君が来てくれたお陰で、今は、十分な休息がとれています」

「つまり、意識はあるんだね？」

「はい。疲れておられますが、意識ははっきりしておられますよ」

それを聞いた白は安心して目をつぶる。しかし、変な違和感を覚えた白は、その方向へと視線を向けると、こちらをみている自来也と目があつた。

しばらく、そのまま両者で見つめあつたままではいたが、先に口を開いたのは白だった。

「盗み聞きはよくないと思うんですが？」

「さつきから話しているのは、木の葉の里で間違いないか？」

質問に質問で返されて、若干不機嫌になりながらも、白は答える。

「ええ、そうですよ。どこから聞いていたか分かりませんが、木の葉の

里が、ペインに襲撃を受けているところですよ」

ここで、それまで大人しかかったカツユが口を開いた。大人しかったというよりも、隣のベッドからもたらされた聞いたことのある声に、確認しようとしたところで、寝ている自来也を見て、驚きで固まっていたというのが正しいだろう。

「自来也さんが何故ここに!?!」

「わしにもよく分からん。確かにペインにやられたはずなんだがのぉ……。つて、そんなことを言つとる場合ではない! ペインをいくら倒しても無駄だ! あれの中に本物はいない! 本物は別の場所だ! ペインたちを操つとる! 早く伝えねば、被害は広がるばかりだぞ! つ!?!」

自来也は一気に捲し立てた後に、起き上がろうとしたのだろう。しかし、身体中の痛みでそれができずに、うめき声を漏らして口を閉ざす。

「カツユ……分かってると思うけど、木の葉の里に連絡したら、この人殺つちやうよ!」

「えっ!?!」

今まさに連絡しようとしたのだろう。白の言葉に驚き、先程交わした内容を思い出す。

「しかし、これは大変重要なことなんですよ!?! それを伝えないなんて……あなたは一体何がしたいのですか!?!」

「まず言つとくけど、この人助けたの俺だから、しかもその代償に、かなり危険な目にあつてるんだよね」

「危険を省みずに助けたことは素晴らしいと思いますが、それとなんの関係が……」

印を組み、何らかの術を使おうとした自来也の首に向けて千本が放たれる。自分が人質になつていて事態を変えようとしたのだろう。しかし、感知タイプでもある白には、チャクラを高めた段階で、自来也が何かをしようとしているのが分かった。

千本が首に刺さったことにより、自来也の動きが完全に止まる。

「そんな……」

絶望したような声を出すカツユに、話を続ける。

「仮死状態にただけだから。話の続きだけど、この件は取り敢えず、木の葉の争いが終わるまで連絡しないこと。理由は争いが終わったら分かるよ」

「聞いたら分かるや、終わったら分かるばかりでは納得できません！」「この争いで死んだ人たちが、蘇るかもしれないけど、それを阻止したいなら好きにどうぞ」

「詳しく説明してください……」

何故駄目なのか全く理解できないカツユは、困惑しながらも、今にも泣きそうな声で説明を嘆願する。

（なんか、俺が苛めてるみたいだ……。泣きたいのはこっちだよ……。予定が色々狂ったし……。この人には交渉の材料になってもらうしかないな）

白は自来也へと向けていた顔をカツユに向ける。そして、カツユに他言無用、と再度念押しし、輪廻眼や自分の状況について説明するのだった。

97 自来也？

白はカツユに説明するにあたり、カツユからの提案でベッドから移動し、机の上にカツユを移動させて、自身は椅子に腰かけていた。「話は分かりました。しかし、分からないこともあります。あなたがどこからその情報を得ているか、ということですよ」

「それは……言えません……」

説明していくことで、白の興奮状態も大分落ち着いてきていた。それにより、カツユの疑問に安易に答えるような真似はせずに、白は俯き黙り込む。

少々興奮気味の状態の説明したため、ギリギリのラインと思しき所まで説明をしたせいで、逆に疑問を持たれてしまったのだった。

「……分かりました。お困りのようですし、何より、あなたに木の葉の里を助けていただいたのは間違いありませんので、深くはお聞きしません。それと、今は最後のペインをナルト君が相手にしているようですよ。あなたの言う尾獣化はしていませんが……」

「あー、それはたぶん、この巻物にペイン3体を封印しているからかと……」

白は懐からペイン3体を封印した巻物を取り出し、カツユの前にゆつくりと置いた。カツユはそれを興味深げに見てから話を戻す。

「それで復活しないということですね。……ただ、あなたの言った説明についてですが、シカクさんたちが推測したようです。1小隊で今から本体のいる場所の搜索に当たるみたいですよ」

「さすが奈良一族。頭いいですよね、あの人たち」

「私が伝えたとは思わないのですか？」

「まあ、その辺は信じるしかないんですけどね——影分身の術——」

カツユに対して言った言葉とは裏腹に、白は唐突に影分身を使用する。影分身はすぐに部屋の外へと出て行った。それを見たカツユは不審に思い、白に尋ねる。

「今のは一体なんですか？ 実体があるようなので、影分身だと思い

ますが……」

「一応この島の見張りを影分身にさせておこうと思ひまして、今この島の守りを、霧隠れの里の者にしてもらってますが、そこまで強くありませんので」

「影分身はチャクラの消費が激しいですから、今の状況ではあまり乱用しない方がいいですよ」

「ええ。気を付けます」

カツユからの心配する言葉に相槌を打ちながら、自来也の方へと視線を向ける。説明する前に、首に刺した千本を取り除いてあるので、そろそろ目覚めてもいいのだが、未だに動く気配はない。それを確認してから、白はベッドへと移動する。

「寝るのですか？」

「さすがに疲れましたからね」

「ゆっくりと休んでください。何か変化があれば起こしますから」

ベッドに横になったところで、白はまた違和感を感じ、そちらを向くと真剣な表情でこちらを見つめる自来也がいた。

自来也は術を使うことなく、白を見つめ続ける。耐えかねた白が声をかけた。

「何かご用ですか？」

「ふむ」

自来也は目を瞑りしばらく考えるそぶりを見せた。そして、開口一番言い放つ。

「ボクっ娘ならぬ、オレっ娘もありだの……」

「なんの話をしてるんですか……」

「自来也さん。目が覚められたのですね」

「おお。久しぶりだの、カツユ」

起きてきた自来也は、慌てることなく、逆に呑気にも今回の戦いのことなど考えずに、新しい小説のことを考えいた。それもそのはずで、先程までの白とカツユとの会話を聞いていたからである。それに加えて自分の役目は、この段階では既にないとも考えてもいた。

「はい。〴〵無事でなによりです。あなたほどの忍が、死んだと聞かさ

れたときは驚きましたよ」

「わしも死んだと思っただがの。この通り……いたたた」

元気なところを見せつけようとしたのだろう。上半身を起こそうとして、そのあまりの痛みに苦悶の声をあげる。

「無理はなさらないでください」

「せっかく治したんだから、自分から痛めるのはやめてください」

「お主が治しただと？」

「そうですよ」

余程意外なことだったのだろう。自来也は目を見開いて驚くと、白に聞き返してきた。

「私も掌仙術だけですが拝見しました。その技量はシズネさんに勝るとも劣らないものをお持ちです」

「つまり、命の恩人な訳です。……この借りはでかいですよね？」

「わしは、水に沈んだはず……つまり人工呼吸を受け「受けてません」……つまらんのお」

白やカツユの言ったことを完全に無視して、自来也は自分が受けたであろうことを話そうとするが、白に遮られて残念そうに呟き、溜め息を漏らした。

「お主の見立てでは、わしはあとどれくらいで回復する？」

「自然治癒なら、1週間もあれば、動けるくらいにはなりますよ。薬を調合すれば、もう少し早くなるかもしれませんが……」

「そうか」

なんとも言えない沈黙が広がり、少し気まづくなるが、カツユが慌てたようにして、新しい情報を知らせてくる。

「っ!? ナルト君の九尾化が始まりました!」

「……尾は何本か分かるか？」

慌てるカツユに、それまで黙っていた自来也が訊ねる。

「……4本です。カカシさんたちが蘇ったペインを抑えに入ったのですが、その際ペインにカカシさんが……」

「倒しただけで、封印したりバラバラにしたりしなかつたんですね……」

最後には蘇ると聞いていても、里の者が亡くなるという行為に胸が痛いのだろう、沈んだような声でカツユは話す。

「四本か……ギリギリだの」

「ペインは、ナルト君だけを連れて里の外に向かったみたいです。他の人たちは口寄せ動物たちと戦っています」

「なんか、知ってるのとだいぶ変わってるな……」

カツユからの情報だけでは、現地の状況がうまく把握できないが、かなり混戦状態になっていることだけは分かった。

少し考え込んでいた瞬間を狙っていたのだろう。自来也は乱獅子髪の毛を白に向けて使用してきた。

その白い自来也の髪が白を捉えたかに見えたが、その場所に白の姿はなく、髪は空を切る。

「何ですか？ 今度は緊縛プレイがしたいとか言い出すんじゃないですよ？ もう一度死んでみますか？」

「緊縛プレイ……それもいいかもしれん」

術での捕獲が失敗し、更に髪の毛が凍っていく現象を、冷や汗を滴らせながら見ていた自来也は、顔をこわばらせながらも、ふざけた回答をする。

「次やったら、治るまで永眠してもらいますね」

「それは矛盾しとらんかのお……」

「で？ 何故捕らえようとしたんですか？」

自来也は言いにくそうに話し出す。

「いやなに……。お主が、あまりにも詳しく知りすぎておるのでな……ちよつと」

2人の言い争いもここままで、更なる情報が入ってくる。

「尾が……6本までは確認できましたが、里の外に出たのでこれ以上はわかりません……本当に大丈夫なんですよね？」

「はい、もうすぐ終わりですね」

「6本はまずいぞー」

落ち着いている白とは対照的に、自来也は尾の数を聞いて焦っていた。自来也は、尾の数が4本の段階で1度死にかけていたからであ

る。そのため、6本と聞いた瞬間に、顔を青ざめさせていた。尾獣化とは聞いていたが、尾の数が6本までいくとは思ってもいなかったのだろう。

「自分の愛弟子くらい信じたらどうですか？（どうせ、最終的には9本出るんだし）」

顔を青ざめさせて、慌てる自来也に冷ややかな言葉を投げ掛ける。それを聞いた自来也は、落ち着きを取り戻し、逆に開き直った。

「……そうなの。1度は死んだのだ……心配はすれども、後は見守るだけのお。それより、この氷をどうにかしてくれんか？」

「取り敢えず解きますが、大人しく寝てください。あなたには教わりたいことがあるので」

「そうだったか……男自来也。美人の願いは無下にはせぬ!!」

本当は決めポーズでもやりたいのだろう。顔をしかめながら言いきった。

何度も身体を動かして痛みをしかめる自来也に白は呆れる。

カツユはその言葉に疑問を浮かべるが、木の葉の方が心配なため、そちらに集中しており、聞くだけで、なにも言わずにいた。

（間違えられてるのは苛つくけど、我慢するか……誤解を解いて、変に意固地になられても面倒だし）

氷遁を解くと、自来也は髪を元に戻していく。それを確認してから、白もベッドに戻っていった。

ベッドに戻り、巻物から兵糧丸の入った瓶を取り出して、中の薬を飲み込みチャクラを回復させる。

自然回復が望ましいが、これ以上何かする場合、今のチャクラ量では、些か心許ないためだった。

「しかし、何もできないとなると暇だのお」

「そんな暇なら、小説のネタでも考えてたらいいじゃないですか」「そう言えば、何かを書こうとしていたような……」

水に沈んだ時の記憶が朧気で出ないのだろう。思い出そうとするが、思い出せずにいた。

そんな自来也に一応警戒しつつ、白は仮眠をとる。油断などしよう

ものなら、何をされるか分かったものではないからだ。

それからしばらく経ち、全てが終わったことを聞かされる。

「あなたの言った通り、里の人たちは生き返りました。俄には信じがたいことですが、輪廻眼とはすごいのですね」

「綱出姫は無事ですか？」

「はい。ただ、かなり疲れているようで、眠ってしまいました。今は、サクラちゃんが看てくれています」

そのカツユの言葉に、白は安堵して、横を見ると、自来也は目を閉じ寝てしまっていた。

「これでナルトも英雄ですか」

「それを言うのであれば、里のみんなが英雄ですよ。ただ、今回のことでナルト君を、里のみんなが認めてくれるのは間違いないですね」

「そうですね。ナルトが目的で、ペインが里に来たのがバレなければですがね」

悪どい笑みを湛える白に、カツユは押し黙ってしまふ。確かに、九尾が目的でペインが木の葉の里に来たのであれば、今回のことはナルトが木の葉の里に居るせいだととられても不思議ではない。

綱手姫がナルトを気に入っているのを知っているだけに、カツユは何も言えないのだった。

「俺も鬼ではありません。あなたが約束を守るのなら口外しませんよ？」

「分かりました。約束については必ず守ります。しかし、自来也さんに関しては、知らせないというのは難しいと思います……知らないかもしれませんが、自来也さんは自由気ままに過ごされているので、おそらく噂が届くのも時間の問題なのです」

「まあ、それはこれからの交渉次第ですかね」

「交渉ですか？」

波の国との同盟についての話までは聞いていないようで、そのことを説明するとカツユは納得した。

「それで、最初の状況説明に繋がるのですね」

「そういうことです」

その後数日経ち、多少動けるようになった自来也から口頭だけで術を教えてもらっていたが、自来也が土遁と火遁がメインなため、教わるのがかなり少なくなってしまうていた。

「まさか、黄泉沼が土遁だったなんて……沼なんだから水遁でしょう!？」

「わしに言われてものお。それにしても、物覚えが早い。……お主、仙人になってみんか？」

「妙木山ですか……ちよつと考えさせてください」

「うむ、分かった。……師弟で寝食を共にする。これは素晴らしい案かもしれない」

「……………」

自来也が何を考えているのか丸わかりな発言を聞いた白は、何も言わずに呆れたような目を自来也に向けていた。

波の国との交渉の時の連絡役ということが残っていたカツユから、予想だにしない言葉を聞かされる。

「未だに目を覚ましません……」

「……さて、色々準備をしなければならぬので、これで失礼しますね」

「待ってください！ 疲れて寝ているだけなんです！」

「それは、昏睡状態と言います！ むしろ、その状態で口寄せであるあなたが消えないことに驚きですよ！」

通常の口寄せであれば、術者が気絶したりした段階で、口寄せ契約した動物も消えるのだが、カツユが消えなかった為に、白は綱手姫が休息を取っているだけと思っていたのだった。

「始めに大量のチャクラをいただきましたから、それがなくなるまでは大丈夫です」

「最初の段階で終わってた……」

自分の行動が始めから無駄だったと分かり、軽く絶望した白は、旅立つ準備を始める。

「さてと……。妙木山に向けて行きましょう」

「何故妙木山に行かねばならん？ わしは、妙木山に行くなど一言も言つてはおらんぞ。師弟の旅と言え、各地を転々と回らねばなるまい！ 特に、この身体を早く治療するためにも、湯の国は欠かせぬ！ 混浴はあるのかのお……」

「……………」

最後に本音を漏らす自来也を、どうしてやろうかと考えていたところで、カツユから提案があった。

「取り敢えず、交渉の内容次第と言うことでしたら、それまでお待ち願えませんか？ もし、よければ自来也さんを救ったことを伝えることもできますし」

「そうだった……。最悪そつちの方向で」

早くも自来也に見切りをつけて、カツユに伝えるが、それを自来也本人から止められた。

「それはちと待ってくれんか。これから師弟で旅に出なければならんのに、生きているのが分かれば、綱手のやつに何をされるか分からん」「……………」

こういった人物だと分かっているても、白とカツユは自来也に対して、呆れてものが言えなくなってしまう。それでも、気を取り直し話を進める。

「むしろ言つてもいいかもしれない」

「交渉状況によってはすぐに使いますね」

「再不斬さんには伝えておいてください」

「分かりました」

「いや……。わしの意見は……？」

自来也の発言を無視し、白とカツユで、交渉時に出るであろう内容と、それに対する答えを考えるなど、話を進めていくのだった。

98 条件？

波の国と木の葉の里との交渉の場に、カツユを居させることで話を進めていたが、木の葉側の人数が多くなるという理由により、木の葉側が拒否してきた。

これにより、波の国からは再不斬とナナが。木の葉からはコハルとダンゾウが、交渉の場に出ることになった。

そのため、事前にカツユと白で考えたことを再不斬に伝えて、後は報告待ちの状態になっている。

ただ、交渉は意外と早かった。その日の内に終わり、再不斬は帰り支度をしているとカツユから情報提供があった。

「意外と早く終わったけど、中身分かる？」

「少ししか分かりませんが、再不斬さんは笑っているようでしたよ」「嫌な予感しかしない……その少しって言うのは？」

「ナナさんの波の国での情報を木の葉の里に提供すると言うことと、波の国からの援助が私たちの話した内容とほとんど一緒ということですね。白さんのことは、答えていただけませんでした……」

「そうですね……」

申し訳なさそうに答えるカツユに、嫌な予感しかしない白は沈み込んだ声で返す。

「わしのこととは何かいっとったか？」

「名前は出さないようにとのことだったので聞いていませんが、確認した方がいいですか？」

「いや……。やめておいてくれ」

自来也は、白と共に不安な気持ちで、ガツクリと肩を落とす。

「そろそろ、旅に出る準備でもするかの、白よ」

「そうですね。ここは拠点としてとてもよかったです……」

白が言いかけたところで、カツユに止められる。

「白さん。再不斬さんから、待ってるとのことです。……それと、条件があるみたいです。それについては戻ったときに話すそうですよ。良かったですね！ 条件付きとは言え、抜け忍にはならないようです

！」

「おおっ！ ……って、条件というのが気になるんですけど？」

カツユの言葉に一旦喜んだものの、条件という言葉に我に返り、カツユに聞き返した。

「悪いようにはなっていない、としか答えていただけません……。すみません、お役に立てず……」

「いえ、気にしないでください。あの人が、悪いようにはなっていないとしか言うんだから、最悪なのは回避したんだろうけど……」

「しかし、よく考えてみよ。わしと一緒に旅に出た方が安全ではないか？」

自来也は白の傍に寄ると、不安を煽る様な言い方で、旅へ出ることを勧めてくる。余程白を旅に連れて行きたいのだろう。

「確かに、三忍とまで言われた人と一緒にあれば、それなりに安全なんでしょうが……。逆に身の危険を感じるんですね……。行先は妙木山になりませんか？」

「1ヶ所に停滞するのはよくないぞお。お主も新しい場所に向かう!?」

片手で夕日を指差し、もう片方の手で白の肩を掴んだ瞬間、自来也は宙を舞い地面へと叩きつけられた。それは見事な一本背負いの形となつて、宙に弧を描いた。

何が起きたか分からずに、叩きつけられた格好のまま自来也は白を見上げる。一瞬のことだった上に、完全に油断していた。それに加えて、身体も完全に回復していない時に投げられては、如何に自来也と言えども対応できなかつた。

白はやってしまったと手を顔に当てていたが、自来也のにやけ顔を見ると、逆に開き直って自来也に言い捨てる。

自来也は、白の纏ったコートの中を、地面に倒れたのをいいことに覗こうとしていた。白がズボンを履いているにも関わらずである。

「気安く触らないでください。身の危険を感じて投げ飛ばしてしまいました」

「それは厳しすぎんかのお……」

自来也から少し距離を置くと、悲しそうな顔をする自来也を放つて、白は再不斬が戻ってくるのを待つことにした。

次の日。再不斬が戻る少し前に、カツユが戻ることになった。元々少しのチャクラしかなかったので、数日とはいえ、よく持った方だったのである。

「今日は自来也さんをお見かけしてませんが、何処におられるんでしょう？ ご挨拶したいのですが」

「きつと何処かで誰かの風呂場でも覗いているに違いないので気にしないで良いですよ」

否定のできない白の言葉に微妙な空気が漂うが、気を取り直して別れの挨拶をする。

「それでは失礼しますね。また会いましょう」

「ええ。また」

白の言葉を最後に、カツユは煙と共に消えてしまう。

その後すぐに再不斬が戻ってきた。部屋へと戻っているところを捕まえて条件について急ぎ訊ねる。

「再不斬さん！ 条件を教えてください！」

「そう慌てるな」

再不斬は自室へと行きソファアに深々と腰かけて、後について立ち尽くしている白へと、顔を向けて答える。

「後ろにいる奴は誰だ？」

「えっ？」

白は驚き、後ろを振り向くが誰も居なかった。しかし、感知結界で確認すると確かにチャクラを感知することができる。再不斬はソファアに座る前に、感知結界の地図へ視線を向けて確認し、白へと問いかけたのだった。

チャクラの感知された場所は地面……白の影からだった。そのことに気付いた白は、影の中に潜む術を自来也が持っていたことを思い出す。

白はわざとらしく気付かぬ振りをして、腰に取り付けた雷刀へ手を

伸ばし両手に握る。それを素早く影へと刺し貫くべく振り下ろした。

貫く寸前。影が動き雷刀を素早く避ける。

「影操りの術ですか……操らずに潜むこともできるんですね」

「かなり自信があったんだがお……」

「感知結界を張つてあるし、地図もありますからね……つて、そうじゃなくて、なんでここに来たんですか？」

「わしも聞きたいことがあつてな」

何を言つても無駄な気がした白は、自来也を居ない者として考えて、再び再不斬へと問いかける。

「この人はただの変人なので気にしないでください。それよりも条件をお願いします」

「変人か……。まあいいだろう、お前の知り合いのようだしな」

再不斬は白と自来也を交互に見て、先ほどのやり取りで納得したのか、条件について語り出した。

内容についても、白のことがメインであるため、その本人が許可を出したので、言つても構わないという判断でもあつた。

「話は簡単だ。お前の代わりにあの女を渡してきた。あれでも肩書きは、この国の実質ナンバー2だからな。そのせいで、あまりお前たちの協議した内容は必要なかったがな」

「道理で一緒に帰つて来なかつたわけですね」

そこで、ナナがいないことに思い至つた白は納得する。

再不斬の機嫌がよかつたのは、どんどん駄目になっていくナナを、体よく厄介払いできたからだつた。

ナナはハナビに付きつきりであつたため、まともに仕事をしていたのは、白とハナビだけである。そのため、昔のことは知つていても、最新の情報など持つてはいなかつた。

それに加えて、薬品と忍術により、ガトールカンパニートップの入れ代わりについては、初期の段階で記憶の改竄とプロテクトをかけているため、脳を覗かれても困ることはない。

そのせいで、自身が忍であることを早々に忘れてしまい、利益のこぼばかり考えるようになってしまつていたが……。

「あの女から情報を得ることと、物資と人材の援助で話は付いた。ただ、お前が血継限界と知れたからか、子を寄越せと言ってきたな」
「ああ……。まあ、それくらいならいいですけど……。いずれは結婚とかしたいですし」

白は照れたような表情をすると、頭を軽く搔く。

「そう言うだろうと思って、俺も承諾しておいた」

「相手は誰とか分かりますか？ 年がかけ離れていたりするのは、流石に勘弁してほしいんですけど」

木の葉に人はたくさん居るが、あまりにも年の離れた人は遠慮したいと思ひ訊ねると、白の知っている名が出てきた。

「ああ。年は近いらしいぞ、事前に向こうでも選んでおいたんだろうな。確か日向だったか……」

「日向ですか……。となると、近い歳でいくなら、ヒナタかハナビあたりかな？ 他に居なかったはずだし」

「そのような交渉に安易に乗ってはいかん！ 身体は大事にせねば！」

勘違いしたまま、必死に白を思い留まらせようとする自来也を無視して、話は進んでいく。白は慣れたものだったが、再不斬は興味深そうに自来也を見ていた。

「名前はネジと言うらしい。まあ、後は当人同士で話し合え」
「はっ？」

再不斬の話は終わりとばかりに目を瞑ると、ソファアの背もたれに背中を預けて黙ってしまった。

「ネジと言えば、日向の天才児と言われとった子か……。確かにわしほどではないにしろ、いい男と聞くが……」

顎に手をやり考え込む自来也を余所に、白はその場で凍りついたように立ち尽くす。

自来也は、小声でぶつぶつと呟いていたが、結論が出たのか、再不斬と白との話が終わったのを確認し、再不斬に訊ねた。

「わしのこととは何か言っとったかの？ 自来也と言うんじやが」

「……本物か？」

再不斬は、自来也という名を聞くと、閉じていた目を開けて、自来也を見る。

木の葉の伝説の三忍については、閉鎖的な水の国にまで届いていたのである。その中の一人が、いきなり目の前に現れては、疑わずにはいられないのだろう。白に目を向けて訊ねるが、白は固まったままだった。

「わしを騙る者はそうおるまい。わしのような良い男を真似ることなど不可能よ！」

「……………」

白の変人という言葉を思い出した再不斬は、どうでもよさげに答えた。

「話題にすら出なかったな」

「そうか!! これで、自由に行動できるというものだ！」

自来也は、嬉しそうに腕を組んで頷くと、満足そうな表情を浮かべる。

「わしが聞きたいことはそれだけだ。では、お先に失礼するとしようかの」

そう言うと、自来也は部屋の外へと向けて歩きだす。余程自分が生きているということを知られるのが嫌だったのだろう。上機嫌で部屋を出ていった。

それに対して白は、未だに立ち尽くして固まったままである。それを見た再不斬は不審に思い、首切り包丁を握ると、それを白の頭へと振り下ろした。

白は呆然としたままだったが、日頃の鍛練の賜物だろう。身体が反射的に動き、首切り包丁を避ける。

身体が反射的にでも動いたことで、意識を取り戻した白は、首切り包丁で攻撃を受けたことなど気にもせず、再不斬へと詰め寄った。

「どういうことですか!?! 何故ネジなんですか!?!」

「何か問題でもあるのか?」

白の言いたいことが分からずに、再不斬は眉間にシワを寄せて不審気に聞き返す。

「あのですね。ネジというのは男なんですよ！　あり得ないでしょう！？」

「……………」

再不斬も、まさか相手が男だったとは思わずに押し黙り、白が固まっていた理由を納得した。

「何を考えているんだろうな、木の葉は……」

呆れたような物言いで、天井へと目を向けた。木の葉側の情報では、暗部リストにも、そしてアカデミーにも女として登録してあったので仕方ないと言えばそれまでだった。

ヒアシへの説明についても、血継限界の血を入れると言うことと、相手が女であるという説明しかしておらず、ダンゾウが強行して話を進めていたのである。

ただ、ヒアシも黙っていたわけではなく、本人がよければという条件を出した。ここまではよかったのだが、この時ネジは不在だったために、別途火影のところに行くことになったのである。

ネジは話を聞いて、最初は断つたが、渡された資料を見て、ダンゾウの言葉に思わず頷いてしまった。

「それが相手の女だ。日向家にいたというのだから面識くらいはある。木の葉の為にも協力してくれるな？」

こうして、この話はセッティングされたのである。

期限については特に無かったが、定期的に木の葉へと行かねばならなかった。

再不斬は、交渉時の会話を思い出し、白へと指示を出す。

「取り敢えず、支援の手配ついでに、そのことを伝えておけばいいだろう。さっさと動くことだ」

「そうですね……」

意気消沈し、とぼとぼと部屋を出ていく白を、再不斬は不憫そうに見送った。

更に数日後。水影が波の国を訪問してきた。お供には青と長十郎がついて来ている。

「久しぶりですね」

「ああ。今日来たのは五影会談についてか？」

「話が早くて助かるわ。長十郎こちらへ」

「はいっ」

長十郎は、呼ばれてすぐに照美の隣へと立つ。

「五影会談から戻るまでの間、この子に忍び刀での戦い方を教えてあげて欲しいのよ。まともに教えることができるのは、あなたくらいでしょうし。仕事についても、教えれば真面目にやる子だから、それほど足手まといにはならないわ」

「再不斬先輩よろしくお願いします」

長十郎は、照美の話が終わってすぐに、再不斬へと頭を下げて懇願する。再不斬も、他の忍び刀使いに興味があるのか、承諾した。

「いいだろう。今の霧隠れの実力を知りたいいい機会でもあるしな」

「良かったわね、長十郎」

「はい！ありがとうございます」

長十郎は、何度も照美と再不斬に向けて頭を下げる。

今回のことは、長十郎が照美へと願い出たのだろう。霧隠れの里で会った当初から、尊敬のような眼差しを再不斬に向けていた。

「代わりに、あの子を連れて行きたいのだけどいいかしら？ 護衛には、それなりの実力者を連れて行きたいし、なにより雷刀を持っているわよね」

雷刀と言われて、思い付くのは1人しかない。

今回連れていける護衛は2人と決まっているため、ここで、長十郎が抜けた場合、もう1人を補充しておきたい、そこで目をつけたのが白だった。

しかも、忍び刀まで持つており、実力もある程度はあると照美も見ているため、長十郎の願いをきいたのである。

波の国側からしても、同盟国としての範囲内に十分に収まるものだった。忍び刀所持者の期間限定での交代。多少波の国に不利な条件ではあるが、白が影分身を使えることを考慮すれば、波の国にとつては、それほど理不尽なものではなかった。白にとっては違ったが

……。

「隣の部屋にいるはずだ。もしくはは街の治療小屋か。どちらかだな」

再不斬は立ち上がり、地図へと目をやると、照美に答える。

それを見て青は感心したように、再不斬へ話しかけた。

「このような物があるとは……これは、チャクラの大小を躪しているのですな。素晴らしい」

「青。そういったことは後になさい。今は五影会談に行かねばなりません」

「はっ！ 失礼しました」

「では、失礼しますね。長十郎は体に気を付けるのですよ。再不斬さんよろしく願いますね」

「ああ」

再不斬の返事に満足した照美は、長十郎に微笑むと、部屋を出ていった。それに続き青も出ていく。

隣にいる白の部屋へと向けて。

99 鉄の国?

その部屋で、白は影分身と2人で一心不乱に書類と格闘していた。本体は物資に関して、影分身は人材に関して纏めている。

2人の顔は怒りに染まり、それが仕事にも表れていた。書類は殴り書きし、終わったものは投げ散らかす。完全に八つ当たりだった。後の事を全く考えていない状態である。

そのようなピリピリとした空気の張り詰めた部屋に、照美と青が入ってきた。

「少しいいかしら?」

「駄目です」

白は顔も上げずに返答し、作業を続ける。カンパニーの誰かだと思っただろう。素気ない上に即答だった。それを聞いて、青が慌てたように白に近寄って忠告する。

「<白! 水影様だぞ!>」

白はそこではじめて顔を上げて照美を見た。その表情は、いつものこやかな笑みを浮かべながらも、青筋が浮き出ているのが分かる。

まさか、いきなり断られるとは思わなかったのだろう。しかも、顔を見ずに。

「お久しぶりです。今日はどのようなご用件ですか?」

白は顔を引き攣らせながら、照美に挨拶を行う。しかし、もう1人は気付かずに作業を続行していた。そこで、強制的に影分身を解除して1人に戻った。

「あなたには、五影会談に赴くために、私の護衛をしてもらうことになりました。期間は10日ほどです。なにか聞きたいことはありますか? 言っておきますが、この件については、再不斬さんに了承を得ています」

「護衛ですか? 正直言って水影様に護衛は不要なのでは? と言うか、再不斬さんも、また勝手に決めて……(いやまてよ……。ダンゾウがどうなるかを確認するには、ついていった方がいいかもしれない……)」

「五影とは言えだ。体裁というのものもあるが、何かあってからでは「行き
ますよ」……そうか」

行くことに決めた白は、青の話を遮って答える。それに安堵した青
はホッと溜息を漏らした。白は我が強いので、何かにつけて駄々を捏
ねると思われていたのだ。

それというのも、波の国と霧隠れの里で親睦を図るために時折交流
をしており、大まかにではあるが、相手の性格なども分かる程度には
親密になっていた。

「場所は鉄の国ですが、今からでも行けますね？」

「少し準備をして行きますので、橋の袂にある茶屋で待っていていた
だけませんか？」

「分かりました。……それにしても汚い部屋ですね……少しは綺麗に
したらどうです？」

「そうですね……」

「俺も手伝おう」

照美は白の言葉に頷くと、部屋の中を見渡して、足元に落ちている
紙を机の上に置いたために手に取る。

それはたまたまだった。事前にネジたちに向けて当てた手紙の失
敗作が落ちていたのだ。そこにはダイレクトに婚約破棄や認めない
など色々書かれており、それを目にした照美の表情が変わる。

青と白の2人はそれに気付かず、足元に落ちた書類を拾っては机の
上に整理して置いていつていた。

紙を手に取り立ち尽くす照美に気付かずに、照美が手に持っている
紙を貰うために白は近付く。

「拾っていただきありがとうございます」

「<お前か……>」

「はい？」

「これを書いたのはお前か！」

突如として豹変した照美に危険を感じた白は、すぐさまチャクラを
練る。その直後に白は吹き飛び、霧隠れの里の時と同じく壁を突き
破っていった。

「水影様落ち着いてください！」

「こんなもの！　こんなもの！」

照美は怒り狂い、拾った紙を散り散りに破り捨てながら叫ぶ。それを必死に青は宥めているが、興奮しているのか、照美には聞こえておらず、その散り散りになった紙を足で踏みつけていた。

白は何事も無かったかのように穴から出てくると、穴の開いた壁を見て溜息を漏らす。そして、影分身を使い再度散らばってしまった書類を拾い直すと、本体は出かける準備を別に別の部屋へ、影分身は書類を纏めるために同じく別の部屋へと出て行ってしまった。

それを横目に青は唾然として口を開けたまま、しばらく何もできずに立ち尽くしていた。

（乱獅子髪の術は結構使えるな……）

今回は、風遁で防いだわけではなく、チャクラを練り込んだ髪の毛で防いでいた。これには印が必要ではなく、自分の意思で動かすことができる。

白が準備を整えて指定した茶屋に行くと、照美と青が、先程まで大暴れしていたとは思えないほど大人しく、茶を啜りながら待っていた。

「お待ちせしました」

「それほど待つてはいませんよ」

照美は、物言いも柔らかくなっていて、表情も穏やかなものとなっていたが、反対に青は、疲れきった顔をして、遠い目をしつつ茶を啜っていた。

「では、参りますよ！　青！　白！」

元氣よく歩きだす照美の後ろに、青と白はついていく。少し歩き島から離れたところで、青が白に小声で言ってきた。

「＜頼むから例の言葉は使いなよ＞」

「＜好き好んで使いませんよ。さっきのは不可抗力です＞」

「＜宥めるのにどれだけ苦労したか……分かるか？＞」

青から沈んだような声で、これから何かを語ろうとした矢先に、白にあしらわれる。

「＜大変ですね＞」

「＜他人事のように言うな！ これからは、お前も一緒なんだぞ！＞」

「＜大丈夫ですよ。青さんこそ無意識で言わないでくださいよ？ 特
に今夜食う物はなんだ？ とかは絶対言っては駄目です＞」

危険を回避するべく、事前に青へと釘を刺す。被害が言った本人だけであれば、問題はなかったが、照美の白への対応から、青だけではなく、白も八つ当たりの対象になると考えたからだ。

白の言葉の意味が分からず、青は聞き返す。

「＜その何がいけないのだ？＞」

「＜今夜食う、と言うのが、婚約に聞こえる可能性があるからです＞」
「＜言われてみれば、そうかもしれない＞」

青は白の言葉に納得し頷くと、照美との離れた距離を縮めていった。それに、白もついていく。

その日の行程も無事に終えて、波の国内で宿をとることになった。その宿は海に近いため、海鮮物をメインとしているが、波の国の品物の流通がよくなっているため、山の物も比較的簡単に手に入るようになり、食事のメニューが豊富であることが売りである。

その宿で事件は起こった。

3人は宿に着くと、大広間に通されて、荷物を下ろす。そこで、1日の終わりに対して、照美から労いの言葉をいただいた後に、雑談へと入っていった。

ここまでは、よかったのだが、その後がいけなかった。

「初めての場所というのは、なかなか新鮮でいいですな」

「そうね。しかも、この料理のメニューは、色々と種類が豊富とこの
とですから、楽しみです」

照美と青の2人の宿の印象はいいようで、口々に接客から部屋の手入れまで、幅広く誉め称えている。

「そうだ。料理と言えば、今夜食「青さん！」……そうだった。すっかり失念していた。助かったぞ白よ」
「気を付けてくださいね」

口の緩んだ青が、危うく口を滑らせようとしたのである。

幸い照美には聞こえなかったようで、ホッとひと息入れると、青の言いたいことは分かっていたので、白の方から言葉を変えて訊ねる。「夕食のことですよね？」

「その通りだ」

青が頷き、それに対して白は、メニュー表を照美と青に手渡す。

「この中から選んでください」

渡されたメニュー表は、照美が到着した時言っていたように、種類が多かった。そのため、1人数品ずつ選ぶことになったのだが……。

「種類が多いので迷いますね……。ここは、青と白に任せます」

「そうですね。では、このコンニャク料理とやらにしてみますか。あまり聞きなれぬ名前ですし」

「俺は、せっかく海に近いので、カワハギの煮物でも頼みます」

白の頼んだ物の名前に興味が出たのだろう。青が訊ねてきた。

「む？ 名前からして川のものではないのか？」

「いえ、皮を剥ぐという由来からカワハギというらしいです。美味しいですよ」

「確かに、普通だったらウミハギになるはずだしな」

この時、多少なりとも照美に注意を払っておけばよかったのだが、1番の難関を乗り越えたことで、白は油断しており、青は始めて見る名前のメニューに少し興奮していて気付かない。

「コンニャク……婚約……。ハギ……。破棄……。婚約破棄……」

これにより、白の書いた手紙を思い出したのだろう。照美の目が怪しく光り出し、身体を小刻みに震わせている。

「他にもないか？ これだけだと飽きてしまっただろう？」

「飽きる……」

この青の言葉が決定打となってしまった。照美は、無言で近くにいた青に近付くと、青を一瞬のうちににして床に叩きつける。

「お前らのような男がいるから……」

「えっ!？」

床に叩きつけられた衝撃で気絶したのだろう。青はピクリとも動かない。

白に至っては、何が原因かも分かっていた。突如として怒り出した照美に、ただ恐怖を感じるばかりである。

(何も言っていないのに、いきなり襲われるとか……。ヒステリー持ち怖い……)

白はすぐさま隠遁で姿を眩まし、メニユー表を持って部屋を出ていく。興奮状態の照美が、白へと視線を向けた時には、既にそこに白の姿はなかった。

(青さんの犠牲は無駄にしません)

注文をして部屋の前に戻り、恐る恐る部屋の中の様子をしてみる。そこには、いつもの穏やかな表情をした照美と、顔の腫れ上がった青がいたの言うまでもなく、それを哀れんだ白が青を治療するのだった。

鉄の国。そこはこの争いの多い国の中、ただ一国、中立を保つ国である。

侍という武力は持つが、侵略や援護等はせず、静観するのみ。その力は自国を守る時のみ使用されてきた。

他の国でも、この中立を保つ国には手を出さないというのが、暗黙のルールとなっていた。

そういった国柄だからこそ、今回の五影会談の場所として選ばれたと言える。

鉄の国に入ると、雪が少しずつ降り始めた。その雪は降り始めなのか、まだくるぶし程度の高さまでしかない。しかし、奥に進むにつれて、次第にその高さも上がってくる。

水影一行の辿った後には、その雪に残る足跡が、2人分しか存在しない。

それというものも、無駄に高い白の技量によるもので、水の上に立つ際に、波紋を起こさず立てる力量があれば十分にできることでもあった。

「なぜ足跡が残らないのだ？」

「なぜ足跡が残るんです？」

一方はできないために疑問に持ち、もう片方はできてしまうがゆえに、できないことが理解できなかつた。

「無駄な議論もおしまいです。……着きましたよ」

そこには、塀が横に見えなくなるほど続いており、その奥には大きな城が見える。更に背景には、3つの巨大な牙の形をした岩が存在感をこれでもかと主張していた。

門の前では、2人の侍の警護。その更に手前に、3人の侍の国とおぼしき者たちが並んで立っている。

その3人に近付くと、雪の降るなか待っていたのか、照美の持つ、水影の文字の入った笠を見て声をかけてきた。

「お待ちしておりましたぞ。それがし、この国の大将を務めるミフネと申す者。水影殿ようこそいらした。中に温かい茶と茶請けを用意してござる。……中へ」

「お気遣い痛み入ります。ミフネ殿」

ミフネは横に立っている者に、声をかけて案内をさせる。それに続き水影一行も中へと入っていく。

幾つもの門を潜り抜けて、目的の城の中へと入る。そこは外とは違い、温かな空気で満たされていた。

「やつと到着しましたね」

「油断はするなよ。中立国とは言え、他里の者も来ているのだからな」
「ええ。もちろんですよ」

青の言葉に相槌を打ちながら、周囲を見渡して、建物の構造を把握していく。

「そんなにキョロキョロと見渡すな。田舎者だと思われるだろうが。それに、なぜ急に顔を布で隠す？」

白は建物に入つてすぐに、医療時に着けるマスク代わりの布を着用していた。その布は目元付近から下を完全に隠す形になっている。

「顔を見られるのが恥ずかしいので装着しました」

「一応、護衛は面禁止なのだが……、これは大丈夫なのか？」

「そのくらい構わないでしょう。行きますよ」

部屋へと案内されたそこには、こたつとその上にミカンと急須、湯

呑みが置かれていた。

「おお！ こたつ！」

白は喜び勇んでこたつへと駆け寄り、こたつの中を確認してから、その中へ足を入れてミカンの皮を剥き始める。

「しかも、掘りこたつとか……懐かしいな」

遠い目をしながら、皮を剥いたミカンを食べ始める。いきなりの白の行動に、他の3人は呆気にとられていた。

それでも、案内していた侍が抑えたように笑いを漏らすと、それに気付いた照美と青が恥ずかしそうに俯く。

「お恥ずかしい限りです。白！」

「はい？」

いきなり怒ったような声で呼び掛けられると思っていなかった白は、不思議そうに照美を見る。

しかし、侍は微笑ましいものでも見たかの様に言ってきた。

「気に入っていただけで何よりです。時間が来ましたらお呼びしますので、ごゆるりとおくつろぎください」

そう言うと、侍は部屋を出ていってしまう。

それを見送ってから、信じられないようなものを見る目で青が見てきた。

「お前は本当に白か？」

「何を言ってるんです？」

「白。今後このような恥ずかしい真似はしないように」

「えっ？」

「分かってないのか……我々は霧隠れの里の代表として来ているのだ。そのように子供のような真似をしては、里の威信に関わる」

ここのまで言われてやっと自分のやったことに気付いた白は、ぼつが悪そうな顔をして俯く。

「すいません。今後気を付けます」

「それはそうと、警戒心の高い白が、知らぬ場所では出された食べ物に、簡単に手を出すのには驚いたぞ」

「そうね。白は長十郎より、もっと慎重な子だと思ったのだけど、私の

思い違いだったのかしら?」

その後、色々と言われ続け、コタツのあまりの暑さに白は参ってしまっただった。

100 五影会談?

「何故そんなにバテているのだ?」

「何時間もこの場に釘付けにされるとは思ってもみなかったもので」

コタツから脱出した白は、部屋の隅の方で風遁により身体を冷やしていた。その顔には汗が滴り落ちており、疲労の色が見て取れる。

コタツの暑さから解放されて涼んでいると、扉がノックされて、部屋に先ほどの侍が入って来た。

「お待たせしました。ご案内いたします」

部屋から出て通路を通り、大きな広間に出たところで、白は上の方を仰ぎ見る。そこには暗く見難かったが、黒い影のようなものが幾つか見えた。

その黒い影は、白が顔を向けるとすぐに見えなくなる。

(サスケたちあれで隠れてるつもりなのかな? 香燐以外チャクラ丸分かりでバレバレなんだけど……むしろ、青さんたち他の感知タイプの人は、あんな場所に不自然に固まってるチャクラに気付かないのか?)

不思議に思いつつも、白は青と共に水影の後ろを歩いていく。

五影が集う場は、半円を描いた机が置かれ、その円周の外側には垂れ幕で水、風、火、土、雷と書かれていた。その半円の机に各五影が座り、五影の視線が集中する先には、もう一つ別で机がある。そこには、門の前で挨拶をしていた鉄の国の大将であるミフネが座っている。

護衛たちはそれぞれの垂れ幕の裏にある、壁に身を潜めて、事の成り行きを見守っていた。

「各自、五影の笠を机へ……」

その言葉により、各自自身の目の前に五影の笠を置き、ミフネへと視線を集中させる。

「この場にて議長を務めさせていただくミフネと申す。……ではこれより、五影会談を始めるが異存ありませんか?」

各五影が頷くのを確認し、ミフネは話を始めた。

「ではどなたから議論をはじめましょうや」

ミフネの言葉に先じて発言したのは風影である我愛羅だった。そこから各五影たちが話を進めていく。

「<白……お前は何をしているんだ?>」

「<見ないでください。覗きは犯罪ですよ>」

「<なっ!?!>」

白は紙に色々と記入していた。それは今いる建物の縮図であり、パツと見した青は不思議に思って訊ねたのだった。その予想だにしない答えに青は驚き固まってしまう。

白はさつきと書き終えた紙を懐に入れると、五影への話へ集中する。そこで、雷影のチャクラが高まるのが分かった。

「<白!>」

「<分かってます>」

それまで呆然と立ち尽くしていた青も、その不自然に高まったチャクラを感じ取り、白へと呼びかけるが、その時白は既に、腰程度までしかない壁の上へと身を乗り出していた。

「グチグチといい加減にしろお前ら!!」

雷影は立ち上がると、自分の目の前の机を右腕を振り下ろして破壊する。その破片が舞う中、各五影の護衛たちが各里の五影を守るべく前に出た。

雷影を中心に取り囲むようにして雷影以外の護衛が広がる。各自がいつでも攻撃できるような緊迫した中で、欠片以外の時間が止まったかのように誰も身動きしなかった。

その重苦しい緊迫した空気を破ったのは、議長であるミフネだった。ミフネは落ち着いた声で諭すように雷影へと顔を向けて苦言する。

「この集いは、雷影殿が提案されて形成された場でごさる。提案されたご本人が、礼を欠くような行動は慎んでもらいたい」

「フンッ!」

雷影はその言葉に不機嫌そうな声を出して座り直した。それに合わせるようにして各護衛たちも垂れ幕の裏へと戻っていく。

話は尾獣から始まり、暁の話へと変わっていく。暁の話題になつてからは、雷影がこれでもかと言うほどに、各里へ言及していった。話の内容から、尾獣であるキラビーを暁に捉えられたことが、余程頭にきているのが分かる。

土影と雷影の言い争いが始まり、再度雷影のチャクラが高まつてきたところで、火影であるダンゾウが口を開く。

「冷静な判断力があるうちに言っておきたい……」
「なんだ!？」

口を挟んできたダンゾウに対して、威嚇するようにエーは身体を向けて大きな声で聞き返した。

「暁のリーダーは、おそろくうちはマダラだ」

「!?!?!?!」

ミフネも含めてダンゾウを除く五影全員が驚く中、ダンゾウが話し終えたところで、ミフネから提案が上がる。それは、白の知っている通りの流れである連合軍の結成であった。

「＜青さん。火影の右目あたりを調べてもらえませんか?＞」

「＜何?＞」

「＜いいから、いいから＞」

青は不審に思いつつも、白眼でダンゾウを見ると右目と右腕に異様なチャクラを感じ取る。

そして、そのチャクラを特定した時に、衝撃を受けたような表情をみせた。

「＜馬鹿な……あれはうちはシスイの色……なぜ火影が……＞」

青はそう呟くと、ハツとして我に返りすぐさま垂れ幕の表……五影のいる空間へと身を乗り出し、ダンゾウへと問い詰める。

「火影殿。その包帯の下の右目をどうやって手に入れたかお聞かせ願おう」

「どういう事じゃ?」

話の流れについていけない皆に分かるように、青は説明していく。

護衛の注意が青へ移ったのを確認した白は、その間に影分身を行い、紙と巻物を複数、そして薬を持たせる。影分身は、それらを受け

とると、隠遁を使い廊下の方へと消えていった。

それを確認してから、白は風遁・風鎧を纏って五影の方へと視線を戻す。

「キサマー!!」

雷影がそう言っただ瞬間、五影の中央に白ゼツが、突如として現れた。それを見た瞬間、護衛たちは五影の前に立ち塞がる。

「うちはサスケが侵入してるよー!! どこにいるでしょー!!?!」

「なんだとおお!?」

雷影は叫びながら白ゼツの首を掴み、情報を聞き出すとするが、あまりにも掴む力が強いために、白ゼツはすぐに動かなくなる。

「こんな奴らにビーがやられたというのか!? シー! 探せ!!」

「殺さずに暁の情報を聞きだせばよかったでしょう! せつかくの情報源だと言うのに……」

「暁はそこまで甘い相手ではない。情報を聞き出そうとしても徒労に終わるだけだ」

「オキスケとウラカクは第二戦闘態勢の発令後に、うちはサスケを探すよう命を出せ」

雷影は殺した白ゼツを床に捨て置き、サスケの搜索をシーに任せると、イライラしながらそれを待ち、ダンゾウを睨む。そんな雷影の勝手な行動に、照美は非難するが、逆に我愛羅は照美の言葉に対して反論した。それらを土影は面白いものでも見るかのように、何も言わずに笑みを浮かべて、高みの見物を決め込んでいる。

「雷影様。大凡の居場所を掴みました! ここに来る途中にあった下の大広間に、不自然なチャクラを感じます!」

「よし! 霧の隻眼! お前は火影の見張りだ! いくぞ!」

そう言い終えると、雷影は壁を突き破り部屋を出て行ってしまふ。その後、部屋の中は各人が小言を言うものの、最初の頃の静けさに戻っていった。

その頃影分身の方は、侍たちの警備を掻い潜り、サスケたちの元へ

と、もうすぐ到着しようとしていた。

(香燐は口止めしとかなないと確実にまずいな)

香燐と水月の口の軽さを知っており、尚且つこの後のダンゾウとの戦い後に、香燐が木の葉へ行くことを考えると、香燐の口を塞ぐ必要があった。

そのため、他の者たちより先に行動して、香燐が1人になったところへ会いに行く必要があった。

(発見って……、ここまで近付いて香燐は気付かないのかな？ なんか震えてるみたいだけど……。もしかしてサスケのチャクラと何か関係あるのか?)

香燐が白の視界に入った時には、水月、重吾、香燐の3人しかその場には居なかった。香燐は見るからに震えており、他の2人は顔だけを出すような形で、下の広場を見つめている。

サスケは1人、広場で待たれを相手に戦っていた。そのチャクラは以前あった時よりも、禍々しく冷たいものへと変わっている。

白は、香燐が1人になるのを待ったために、待機しようとしたところで、突如天井が壊れて瓦礫が落ち、砂埃が舞い上がった。

天井から現れたのは雷影だった。雷影はそのまま侍と交戦していたサスケへと、すぐには近付かずに言葉を発する。

「小僧！ 貴様に恐怖というものを教えてやる!!」

サスケは気にせずに雷影へと突撃したところで、重吾は慌てて広間へと下りたつと、呪印状態を開放してサスケへと駆け寄る。サスケのことが心配だったのだろう。その行動には何の躊躇も無かった。

一瞬広間を覆い尽くすように発光した瞬間。今度は水月が広間へと下りていく。そして、その場には香燐のみとなった。その状況を確認した白は、すぐさま行動を開始する。

「何を震えてるの?」

「っ!」

自身のすぐ近くで声が発せられたことに驚き、香燐は身を竦ませて、辺りを見渡してきた。

「腕が大分鈍ったね……」

「その声は……白か……？」

「正解」

隠遁を解いて香燐の前に姿を現した白は、香燐の前に膝をついて座ると、香燐の症状を確認する。

「特に異常はなしと……。ところで何しにここへ来たの？」

「お前こそ、途中でいきなりいなくなっただろうというつもりだ!? あれから大変だったんだぞ!!」

香燐は白からの質問など無視して、逆に質問をしてくる。

白の行動に腹を立てているのだろう。

その後急に急変したサスケの態度に、困惑していたのかもしれない。

それが大きな声となって白へと返ってくる。その声は、下で起こる戦闘音で、かき消されるほどの音量だったが、静寂になった瞬間であれば、十分に居場所が分かってしまう程度には大きかった。

「大きな声を出すと気付かれるよ。それに最初に言っておいたじゃないか、途中で抜けるって」

「だからってあんなどころで抜けるやつがあるか！ サスケはサスケで、復讐対象を木の葉に変えちまうし……。復讐が終わったら2人で静かに暮らそうと思ってたのに……」

「香燐の野望はまた今度ゆっくり聞いてあげるから、こっちの質問に答えてくれる？」

「新しく火影になったダンゾウとか言うのを殺るんだと。……っていうか白は何でここにいるんだ？ うちらを見付けたから会いに来たのか？ もしかして、あのゼツとか言うやつ仲間なんじゃないだろうな？」

香燐は白の質問に答えた後に、怪しいと言うことに気付いたのだろう。白へと質問し直して、その上に、更に質問を重ねていく。

「二応、今は雇われみたいなの護衛任務してるんだよね。ダンゾウの場所ならこの地図を見ればすぐにいけるよ。感知タイプが勢ぞろいしてるから、香燐が探りを入れた瞬間に気付かれるから気を付けて」

「……白は一体何がしたいんだ？ 広間を通る時に確認したけど、水影の護衛なんだろう？ そんなところへ通して問題ないのか？」

「もちろん問題あるけど、狙いはダンゾウなんですよ？ 水影に危害が加わらなければ問題ないよ。それと、俺のことは黙っててね」

「はあっ!? なんでうちが白の言うこと聞かないといけないんだ？ そんな義理ねえし」

香燐は腕を組むとそっぽを向き、目を閉じて口を閉ざす。

「まあ、そう言うだろうと思っただけだね。では、このサスケのブロマイドで手をうってよ。中にピッキングツールの入ってる優れものだよ」「っ!?!」

香燐は白が手に出した、ブロマイドを横目にする、素早い動作でそれを奪い取ると、懐へと仕舞いこむ。

「うちは、そんなんじや買収されねえし」

「貰つといてそれは酷いんじゃないかな?」

その時、広間の方から爆音が響くと共に建物全体が振動する。それに驚き広場の方を見てみると、雷影がサスケを抱えて地面に突き刺しているのが見えた。その衝撃で地面は放射状に割れてへこんでいる。

サスケはそこで、不完全ながらもスサノオを発現して、その衝撃を緩和していた。それを見て雷影は一旦サスケから離れるとチャクラを練り直して増大させる。そのチャクラの量はまるで……。

「尾獣並みだぞ……あのチャクラ量は……本当に人間か?」

「香燐。これを飲んで落ち着くんだ」

「ああ……」

白との会話で忘れていた震えが香燐を再び襲う。それを見て白はチャンスとばかりに、香燐へと薬を飲ませる。

(これで、ここ最近の記憶は朧気になるはずと。すぐ目を覚ますだろうし、ここに放置で大丈夫かな)

飲んですぐに倒れた香燐の手に地図を握らせてから、下へと移動するために手すりへと足を掛ける。

丁度その時に、雷影が天照を纏ったサスケに雷虐水平という名のチョップを放ったところだった。

天照を気にせずに放たれたそれは、サスケをスサノオと天照を纏ったまま吹き飛ばす。その攻撃は、サスケの不完全なスサノオを簡単に

打ち砕き、サスケ本体へと衝撃を伝えるほどだった。

吹き飛んで倒れたサスケに止めを刺すべく、雷影は飛び上がり、ギロチンのように片脚を伸ばしてサスケの首へ向けて降下するが、これをサスケは防ぐために炎遁・加具土命を目の前に展開する。

両者の技が衝突する瞬間、砂が両者の間に割り込み衝突を受けきつた。受けきつたというよりも、雷影の技に対して、砂と炎遁の2つで受けたと見た方がいいだろう。それほどの攻撃を雷影は放っていた。

雷影は攻撃を砂に吸収されたと見るや、その場を離れて砂を操っている者へと怒鳴りつける。

「何のつもりだ風影！ 返答次第では貴様も敵とみなすぞ！」

「あのままだと、あんたの身体はあの炎でさらに傷付けることになった。それを防いだに過ぎない。それに、こちらにもうちはサスケに用がある」

砂を操った本人である我愛羅は、雷影に返答してサスケへと向き直ると、周囲を壁で覆い天照の被害が出ないようにする。それを見て、雷影は不服そうにしていた。

「フンッ！ こんな傷など」

そう言つて、自らの腕を切り落とそうとしたところで、白が雷影に声を掛ける。

「少しお待ちください」

「水影のところの奴か……何の用だ？」

白は何も言わずに懐から巻物を取り出しその場に広げる。そして、両手で印を組み術を発動させた。

——封火法印——

その時間はかなり短く、あっという間の出来事だった。雷影の左腕から天照の炎を取り除いた白は、巻物を素早く丸めると紐で閉じ、その上から封印符を貼って懐へと再度仕舞い込む。

天照の炎で焼かれた腕は表面が黒く炭化して、下の筋肉にまで到達していた。そこに手をかざして掌仙術を施していく。

「治るまでしばらくかかります」

「これくらいなら治療はいらん！」

白の治療を邪魔扱いして、振りほどく。

「せめて腕の治療が終わるまで待つていただけませんか？ 腕一本分の代価として」

「これは貴様が勝手にやったことだろうが！ それを「ボス！」……シーとダルイか……」

「霧隠れの……すまない。雷影様の治療はこちらで受け持つ」

シーはサスケの幻術により、精神攻撃を受けてボロボロになりながらも、雷影を宥めながら、白の代わりに掌仙術を使い腕を治療していく。

ダルイはそれを確認してから白に訊ねてきた。

「さっきの黒炎は消えないって聞いたんすけど……どうやったんすか？」

「えーっと。巻物を使った封印術で、小さいものであれば封印できますが……」

「何度でもいけます？」

「巻物は予備のやつがあと一本しかないんで、このまま大人しくしててほしいんですけど……」

「……？ 取り敢えず、あと一回は行けるってことっすね。……だそうですよボス！」

ダルイはそれを、後ろに居る雷影に向かって投げ掛ける。雷影は白とダルイの話を聞いていたのだろう。ダルイの言葉に頷くと、簡易の治療を受けた手を何度か握り締めて調子を見ると、再びチャクラを練り始めた。

(ちよつと……。ここでサスケ死んでしまうんじゃ……)

ここに至っては白に止める手段などなく、見守ることしか出来ない。

サスケの状態を見ようにも、サスケの方には砂の壁が存在していることはできず、チャクラの状態からかなり弱っているのが分かるくらいだった。

雷遁チャクラを纏ったところで、サスケのチャクラが変質している。そのチャクラは先ほどよりも更に冷たく暗いものになっていた。

それが、砂の壁を越えて、白たちにも見える形で姿を現す。

先ほどまでの身体と腕の部分的なものから、上半身の骨と一部筋肉の付いたスサノオへと進化していた。

サスケから渴いた笑いとともに、声が聞こえてくる。

「これが我愛羅、お前以上の絶対防御……スサノオだ」

「やばいので下がることを提案します。それでは」

白はサスケの言葉を聞くと、雷影たちにそう言い残して、足早に広間から通路へと避難して行った。

サスケはゆっくりと立ち上がると、スサノオの持つ剣を一閃させる。剣は砂の壁をいともたやすく切り裂き、柱まで一緒に切り裂いていく。その攻撃範囲は広く、大広間の柱のほとんどが崩壊し、それに伴って天井が崩落してきた。

それを他人事のように見届けながら、影分身の白は隠遁を使い外に向けて走り出す。

天井が崩壊してから少しして、五影会談の行われた部屋の垂れ幕が全で一瞬にして落ちる。それに合わせてその場にいた皆が天井へと視線を向けた。

そこにはサスケが天井に立っており、その場にいた皆を見下ろしている。

先に動いたのはミフネだった。ミフネは腰から抜いた刀を抜くと、サスケに向けて飛び上がり斬りかかる。サスケは何事も無かったかのように、その攻撃を抜き放っていた刀で受けた。

剣での応酬は一瞬の間に行われ、ミフネが飛び上がったから、下に降りるまでのその短い時間で、ダンゾウ率いる木の葉組は部屋から姿を消す。

それを、部屋の入口の廊下から恐々と見ていた香燐が、サスケに向けて叫ぶ。

「サスケ！ ダンゾウは逃げたぞ！」

その声に反応したのは、サスケ本人とサスケに視線を奪われていた青だった。

「ちい！」

「しまった！ 水影様！ 私はダンゾウを追います」

サスケは香燐の言葉に反応してダンゾウを追おうとするが、ミフネからの攻撃は続く。ミフネは地へ足が着くと同時に、何度もサスケに向けて斬りかかっていった。サスケは鬱陶しそうに、イライラとしながら応戦している。

「分かりました。ただし、深追いはやめなさい！」

「はっ！ それではまた後で！」

青は水影に自分の行動を伝えて了承を得ると、ダンゾウの後を追って、雷影の開けた穴から部屋の外へと出ていく。

照美はサスケを見ると、青とダンゾウの出た場所へと入って行く。白へと待機を命じてから。

「白は、サスケとかいう子が、あの穴以外から出ていくのを防ぎなさい」

「善処します（みんな好き勝手やってるなあ……俺もだけど）」

そう言ってから、ダンゾウたちが出ていった通路とは反対側の通路に身を潜める。

サスケは、ミフネの攻撃を不完全なスサノオで無理矢理防御すると、香燐に命令する。

「香燐行くぞー！」

サスケは近付いてきた香燐をスサノオで掴むと、雷影の壊した穴から、ダンゾウを追うために部屋を抜け出る。

しかし、その先には照美が待機しており、サスケが入ってくると同時に、溶遁の術で入ってきた穴を塞ぐ。

しかし、それも束の間のこと、白以外の皆から急に白ゼツが姿を現した。

白ゼツは、取り憑いたものからチャクラを奪い取っていくのが分かる。

その後すぐに、サスケのいた通路と五影会談が行われていた壁が破壊される。よく見ると、反対側の壁も破壊されていた。

スサノオはチャクラの消費が激しいのだろう。荒い呼吸を繰り返

すサスケに白ゼツが近付いていく。

サスケは避けようとするが、既に避ける力もないのか、スサノオが解けた状態に戻ってしまい、白ゼツに取り憑かれてしまう。

しかし、白ゼツに取り憑かれたことにより、サスケのチャクラは次第に回復していった。

それを見て今度は土影が動く。

自身についた白ゼツを土遁・加重岩の術で無理矢理剥がし、サスケに近付いていった。

「こんな小僧がデイダラをやるとはのう。お主に恨みはないが、死んでもらうぞ」

言い終わった直後に、土影から術が放たれる。

塵遁・限界剥離の術……一定空間を根こそぎ分子レベルにまでバラバラにする術である。それを受けたサスケと香燐はその場から消え去ってしまう。

そこへ、下で戦闘をしていた雷影たちが戻ってきた。

「サスケはどこだ!？」

「わしが塵にした」

「なんだと!？ それはわしの役目だったはずだぞ!」

サスケの死亡を聞いて喚きたてる雷影に、突如として現れた人物が声をかけてくる。

「雷影。その機会はまだ残っているぞ」

そこには、サスケを肩に乗せた面を着けた者……暁のリーダーであるうちはマダラが、部屋の皆を見下ろす場所で立っていた。

忍界大戦

101 忍び連合？

面の者は、その場を集った者たちに向けて言い放つ。

「自己紹介といこう。知っている者もいると思うが……、俺の名はうちがマダラだ」

その名を聞いてその場に緊張がはしる。その中で真っ先に動いたのは雷影だった。雷影はなにも言わずに、マダラとサスケに向けて殴りかかる。

当たると思われた瞬間、その拳は身体ごとすり抜けて、マダラの後ろの壁を破壊した。

すり抜けたにも関わらず、雷影は焦ることなく振り向きマダラを見据える。そして、今度は逃さないとばかりに、チャクラを更に練り上げ始めた。

マダラも焦ることなく、サスケを見せるのは終えたとばかりに、面に開けられた眼へとサスケを吸い込んでいく。吸い込み終えたところで雷影の準備はできたが、その時にはサスケがいなかったために、動きを一時止めてしまう。

「サスケを出せ……いや、始めにビーを返してもらおうか」

「そう慌てるな。まずは俺の話を聞け」

「少し待て雷影。聞いただけ聞いて話はそれからじゃぜ」

雷影の隣にゆっくりと移動しながら、土影が雷影を止める。雷影も、先ほど自分の攻撃を避けたからくりが判明しないこともあり、渋々とだが、チャクラをそのままに話を聞く体勢に入った。

そのやりとりを聞いてからマダラは、更に高所へと移動しそこに座ると、自分の計画について話し出す。

「話を聞く気になってくれたようだな。……話と言うのは俺の目的、月の眼計画についてだ」

マダラは、月の眼計画について語り出す。途中で、サスケの事や、八尾がまだ捕まっていないことが話された時、その都度話が中断されて

いくが、大筋はズレることなく進んでいく。

(これって、サスケがマダラに操られたって説明つければ、抜け忍の件はどうかなるんじゃない?)

月の眼計画について賛同するものなどいるはずもなく、始めから分かっていたかのように、マダラは声高だかに宣言する。

「やはり、理解は得られんか……。いいだろう。ここに、第四次忍界大戦の宣戦を布告する」

それだけ言うと、マダラは自分自身を眼の中に吸い込み、その場から消え去ってしまった。

「さて、どうしたもんかの……」

土影の言葉で、沈黙を保っていた者たちも今後のことを話し合う。

「敵は既に尾獣を7体も所持している。忍び連合をつくるしかないだろう」

「雷影様はどうなのですか?」

「ビーは無事だったようだが……。暁のやつらに、これ以上好きにさせるわけにはいかん! 忍び連合で一氣に叩く!」

この一言で、火影を除く四人は領き、意思がひとつになる。

マダラの言葉は、それだけ衝撃的であり、また、忍び連合を設立するに十分な内容だった。もし、ここにマダラが現れず、月の眼計画を話さなければ、こうも早く纏まらなかっただろう。

「しかし、逃げ出した火影はどうするんじゃない? どちらにしても、木の葉にこの事を伝えねばなるまい」

「ダンゾウは信用できん! 今回のことでそれがよく分かった! それに、この事が木の葉に伝われば、里での信用も失うだろう……」
「それだと、誰に話せばいいのかしら?」

ダンゾウの今回の逃亡により、信用を失ったことで、五影たちは木の葉の誰に、今回のことを話すべきか迷っていた。しかし、それもすぐに提案が上がる。

提案者は、風影である我愛羅だった。

「木の葉で信用できる忍びなら心当たりがある」

その言葉により、皆の視線が集まったところで、その名を口に出す。

「写輪眼のはたけカカシだ」

白い牙の息子と言うことで、その実績と知名度から土影は納得し、鉄の国へ来る道中での出来事により雷影はダンゾウよりも信用できると判断する。水影は白を見ると、白がそれに領り返したことで納得した。白が波の国であり、木の葉の里と同盟を結んでいるので、それを判断材料としたのだ。

ただ、火影の事だけだと思っていた白にとって、水影の次の言葉は予想に反したものだだったが……。

「では、木の葉には私たちが伝えましょう。丁度ここにいる白は、波の国の者で、木の葉とは同盟を結んでいますから」

「えーっと。まだ同盟を結んだばかりですし……（いや、まてよ……）」
水影の言葉に反対しようとしたところで、ダンゾウとコハル相手に結ばれた、自分の誤解を解く良い機会であると考えた白は、考えを改めて賛同の意見をあげようとするが、我愛羅に先を越される。

「それには及ばない。こちらは帰り道に寄る程度で済む」

「そう……。ではお任せしましょう」

「あ……」

白を置き去りにして次の話へと進んでいく中、白は自分の判断の遅さに肩を落として落ち込んでしまう。

しかし、話の中で雷影の言葉に白は顔を上げる。

「ここに来る時に、はたけカカシと九尾のガキには出会った。その辺を探せばまだいるかもしれない」

（そうだ！ 今追わせてる影分身から伝えて貰えば！）

白はゆっくりと後ずさり、柱の陰に入ってから水遁秘術を使用して、連絡を取り合う。

影分身との話が終わった頃には、忍び連合の話は終わり、忍び連合の代表は雷影が務めることとなった。これにより、忍び連合軍が結成となる。

「各影は、それぞれの国の大名に話を通してもらおうか。それから大名会談の設定だ」

「大名会談の立会人については、こちらで準備するでござる」

雷影はそれに頷き、五影会談は終了となった。

「白。青の後を追いますよ」

「分かりました」

ちやつかりと、柱の陰から照美の後ろに移動していた白は頷き、外へ向けて走り出した照美の後に続く。

外に出るからのある程度までの足取りについては、鉄の国の侍が知っており、途中まではその話を基に追跡する。侍の監視網から出たところからは、青の付けた目印を追っていく。

「目印から見て、そう時間は経っていないようね。……青がどこに居るか分かりますか？」

「あちらに、反応があります」

「では急ぎますよ」

「その前に伝えておきたいことがあります」

「なんです？」

ここで白は、青に誘導尋問を仕掛けるよう照美へと進言した。流れ通りであれば、心転身の術で青の意識が、ダンゾウの部下と入れ替わった状態であるはずだからであり、その憶測が正しいことを、青のチャクラが雄弁に語っていた。

青がいる場所に辿り着いた時には、丁度青が木から飛び降りたところだった。照美はすぐさま瞬身の術で青を抱きかかえると地面へと降ろす。

青が飛び降りた先には、木に括られた鎌が設置されていた。

「ありがとうございます。水影様」

荒い息を上げながら、青は照美へと礼を述べる。それは演技とは思えないほど、見事なものだった。

「何があったの？」

「ダンゾウの部下の術で、身体が自由が利かなくなり、危うく命を落とすところでした」

「幻術か何かかしら？」

「心転身の系統だと思われれます」

照美と青が話している間に白は周囲を見渡し、目的の物を探す。そ

れはすぐ近くにあった。

(こんな藁人形に相手を移し入れる術か……。研究のためにもお持ち帰りしたいけど、もうすぐ解けちゃうんだよな)

白は、木に鎌で突き刺さった藁人形を取り外して、早速術式について何かないかと調べ始めた。青のチャクラはこの藁人形から感じられ、逆に青の身体からは、ダンゾウの部下のチャクラが感じられる。「その右目の術が発動したということは、あなたの白眼を狙ったよね」

「そのようです。それよりも、この手の縄を解いていただけませんか？」

青は両手を照美に差し出して、縛ってある縄を解くように願い出した。それを照美は快諾する。

「ええ。分かりました……。暗部のトップであるあなたが、こうも容易く術に掛かるなんて……。精進が足りないのではないですか？」

「面目次第ありません」

謝る青に対して照美は、青の両手を結んでいた縄を、更に強固に結び直して青に言い聞かせる。

「あなたは誰？」

「何を言っておられるのです？」

「暗部のトップは長老です。あなたではありません」

「……カマを掛けられたか……。食えないババアだ」

その直後に鈍い衝撃音がし、青は吹き飛ばされた。照美は拳を前に出した状態で、白へと視線を向ける。

「今のは……。私が……。言ったのでは……」

「白。今度はどう？」

「まだチャクラの残滓を感じるのですが……。(もういないのかな?)」

確信が持てずに白が答えると、照美は頷き返答する。

「分かったわ」

「ちよっ！ 待っ！」

青が言い終わらないうちに、再度鈍い衝撃音が青を襲うことになった。

その頃、先に隠遁で追跡をしていた影分身は、離れた位置から望遠鏡にてダンゾウたちを監視していた。

(ゆっくり歩いてくれて助かるな。感知結界なんて使ったらすぐにバレルだろうし……。文明の利器は使わないと)

鉄の国を出ようとしたところで、白の見覚えのある場所が、ダンゾウたちの前方にあることに気付く。

(あの石橋は……)

そこは、ダンゾウがサスケたちと戦った場所だった。白は、その場所へと先回りして、全体を見渡せる場所へと移動する。

ダンゾウたちが、石橋の中央に差し掛かったところで、突如何者かの襲撃を受けた。

それは、先ほどまで五影会談の場にいたマダラである。

マダラは、1度攻撃してから離れると、ダンゾウの護衛役と戦い始める。その間にダンゾウは、右腕に取り付けられた拘束具のネジを取り外していた。

ダンゾウの部下であるフーとトルネの攻撃は、尽くマダラには効かずにすり抜けてしまう。しかも、1度物体の中に入った場合は、マダラのチャクラを感知できないようで、2人して周囲の警戒を行っていた。

トルネの方は上着を脱ぎ、身体を変色させていつでも攻撃できるようにし、フーはトルネの背後が見えるように、トルネの前に立つ。

どこに現れるか分からない以上、2人で視野をカバーしあうしかなかった。しかし、それすらもマダラには関係がなく、トルネの背後に現れると、逃げられないようにトルネを掴み取り吸い込んでしまう。

マダラは、トルネに触ったことにより、毒蟲に感染してしまった右腕を、根元から千切り取って感染の拡大を防ぐ。

その瞬間を逃すことなくフーはマダラに攻撃するため近付くが、マダラは、毒蟲に感染して千切り取った右腕をフーへと蹴り飛ばし、フーがその右腕に気を取られた隙にフーを吸い込んでしまった。

時間にして、ダンゾウ襲撃から10分も経っていないだろう。しか

し、その時間でダンゾウは右腕の拘束具の解除を完了して巻いていた包帯をほどき始めた。

それから、一旦消え去ったはずのマダラは、再びダンゾウの前に現れると、その眼からサスケと香燐を出す。

サスケはダンゾウの姿を認識すると、一步前に出てダンゾウに話しかけた。香燐はマダラに何かを言われて、すぐに柱の陰へと走っていく。

話していた途中で、ダンゾウは印を組み終わると、サスケに向けて走りだした。サスケはその場を動かずにチャクラを高めていく。

ダンゾウが、サスケに攻撃しようとしたところで、サスケの不完全な、一部のみのスサノオが発現しダンゾウを捕らえた。

そして、離れている白のもとまで聞こえる声で叫ぶ。

「本当の事かと聞いてるんだ!!」

叫んだと同時にサスケのチャクラが、あの広間の時のように変質していく。今度はあの時のような冷たいものではなく、怒りに満ちたものだった。

ダンゾウからイタチの事を語られたサスケは、ダンゾウが言い終えぬうちにスサノオで握り潰してしまう。

「お前がイタチを語るな……」

そうサスケが呟いた時、幻のようにして、サスケの背後にダンゾウが現れた。

ダンゾウは再度印を組むと、今度はクナイを片手にサスケに攻撃するが、スサノオによって阻まれる。

スサノオは更に進化し巨大化すると、その拳を降り下ろし、ダンゾウを圧死させた。

しかし、今度もまた、圧死したはずのダンゾウの姿は幻のように消え去り、今度は柱の上に現れる。

物理的な攻撃では効かないと判断したのか、サスケはスサノオで、ダンゾウの乗っていた柱を破壊し、空中で身動きのとれないダンゾウに天照を使用する。

ダンゾウは天照をくらい、石橋に落ちて燃え尽きた。

それを確認したサスケは、かなりバテているのか、スサノオを解いてしまう。香燐により多少はチャクラを回復したとはいえ、その前に雷影たちとやりあっていたので。この疲労は当然の事と言えた。

それを待っていたかのように、ダンゾウはまたしても、サスケの背後に幻のように現れると、風遁で攻撃を仕掛ける。

気配を察したサスケは、素早くその場を飛び去り風遁の直撃を避けるが、避けた先は石橋の外だった。

サスケは慌てることなく、風遁で受けた傷から血を取り鷹を口寄せしその上に乗ると、上空からダンゾウを見据える。

サスケはチャクラが残り少ないのだろう。スサノオを出さずにダンゾウへと斬りかかった。ダンゾウは敢えてその攻撃を受ける代わりに、サスケの首を掴むが、速度が速すぎたために、すぐに拘束から逃れられてしまう。

斬り捨てられたはずのダンゾウは、また幻のように消え去り、再び違う場所に現れた。

しかし次の瞬間、ダンゾウの動きが一時的に止まる。それはサスケの幻術だった。しかし、その止まった時間は2人にとっては十分な時間だった。

サスケはダンゾウの背後に回ると、刀で突き刺そうと手を伸ばす。しかし、その伸ばされた手は途中で止まり、サスケの身体に呪印が現れる。それは、ダンゾウがサスケの首を掴んだ際に刻んだものだった。

動かないサスケに慌てた香燐は、柱の陰から姿を現して、ダンゾウへと襲いかかるが、あっさりと蹴り返されてしまう。

ダンゾウは印を組むと、サスケの刀を手に取り首へと突きつける。

「イタチは何故このようなゴミを残したかったのだ……？ これは、完璧だったお前唯一の失敗作ではないか」

それに合わせて、マダラはサスケを吸い込もうとし、香燐は駆け寄ろうとするが、それよりも早くダンゾウに迫るものがあった。

それはひとつの巻物。

どこにでも見かけるような普通の巻物である。

ダンゾウは、その上から落ちてくる巻物に気付き、それを剣で払い退けようとした。

——解火法印——

しかし、払い除けることができたのは巻物のみで、その巻物から発せられる黒炎に、ダンゾウは包まれてしまう。

(これで1回分と時間稼ぎはしたからね)

サスケの幻術に、ダンゾウが陥ったときに動いたのはサスケだけではなく、白も動いていた。

懐から巻物を取り出し、札を剥がしてダンゾウ目掛けて放り投げたのである。

距離もあり、放り投げた分落下までに時間が掛かったが、それを香燐がカバーしたことにより丁度よい具合で、巻物はダンゾウの元へたどり着いた。

この時、ダンゾウはすぐにその場を離ればよかったのだろうが、落ちてきたのが巻物と分かり油断したのだろう、払い除けたのが間違っていた。

(さて、次はどこに現れるのかな?)

黒炎にて燃えている最中、サスケはダンゾウの言葉により、雄叫びをあげてスサノオを発現した。そのスサノオは今までの骨と筋肉だけのスサノオではなく、衣を纏った人そのものだった。

それを見たマダラは、吸い込むのを取り止め、香燐はその姿に立ち止まってしまう。

サスケは次にどこに現れるかを、スサノオが持つ弓矢を構えながら探るが、出てくる気配はない。

業を煮やしたサスケは、手当たり次第に矢を放ち始めた。

「出てこい!! いままで隠れてるつもりだ!!」

スサノオの攻撃で、石橋は次第に崩れていく。その攻撃は石橋の上にあった香燐にも影響を与えた。手当たり次第に攻撃したため、香燐にも攻撃が当たったのである。

しかし、そんな攻撃も長続きするはずもなく、スサノオを維持できなくなったサスケは、血を吐き片膝を付く。

それからいくら待ってもダンゾウが現れることはなかった。

(逃げたのか？ 探知結界に捉えられないんだけど……。 というか、香燐やばいんじゃない？……)

そんなサスケへとマダラは、近付いていく。

「サスケ……ダンゾウを殺つたのはいいが、天照はやり過ぎだ。遺体が完全に燃え尽きてなくなってしまった」

「……ダンゾウは死んだのか？」

「ああ」

「そうか……」

自分でとどめをさしていないので、釈然としないのでだろう。俯きなに……とか呟き始める。

マダラは、巻物を囀として、天照をサスケがダンゾウに喰らわせた と勘違いしており、スサノオの新しい形態変化に内心喜んでいた。

白はと言うと、いつまで経っても現れないダンゾウに対して、まさかと言う思いから、冷や汗を流していた。

102 裏切り？

マダラはサスケの無差別攻撃により、ぼろぼろに倒れ伏す香燐を見ながらサスケに話し終えると、その場から消え去ってしまう。その後、サスケはゆっくりと香燐へ近付いていった。

白は感知結界を張ってみるが、白の感知範囲には誰もいないことが分かる。それを感じ取った白の顔には、冷や汗が伝っていった。

(もしかして……俺がやってしまった……?)

サスケは香燐の傍まで歩いて行くと、手元にチャクラを集め出した。それは次第に高まっていき雷遁チャクラへと変わっていく。このまま、その雷遁を纏った手でとどめを刺すつもりなのだろう。

(ダンゾウが稼ぐはずの時間を潰してしまつた……まずいな……)

サスケが腕を振り上げたところで、サスケに向けて周囲から水の千本が降り注ぐ。サスケはすぐさま後退し、それを放った本人……白を睨み付けた。

「何のつもりだ」

「出張るつもりは無かつたんだけど、香燐が危険みたいだったから……お節介を焼きに来ただけだよ」

香燐から離れた位置に、突如として現れた白に驚くことなくサスケは訊ねる。

「なぜお前がここにいる？」

「ダンゾウしか見えてなかつたんだね……。五影会談の場にもいたんだけど……」

白はわざとらしく悲しそうな素振りを見せつつ、チャクラを高めていく。白がチャクラを高めたと同時に、サスケは白に向かって瞬身の術を使い迫っていった。

白は素早く印を結ぶ。

サスケが白に向けて突きを放った時には、そこに白の姿は無く。代わりに、サスケの周囲を囲むようにして白が数人いた。

「影分身か……」

「不正解。水分身でした。……それでは攻撃開始」

白の合図と共に、水分身はサスケに向けて次々と襲いかかってくる。サスケは雷遁チャクラを纏った手で、つまらなさそうに次々と屠っていった。白はそれを気にした様子もなく、懲りずに何度も水分身を作り上げては、サスケに向けて襲わせていく。

「こんな無駄なことをいつまで続ける気だ」

「これはただの時間稼ぎ」

しばらく続いた水分身からの攻撃に、サスケがイライラし始めた頃を見計らい、白はサスケに向けて瞬身の術を使い近付くと、サスケの足元に集まった水に向けて手を付ける。

水は一瞬にしてサスケを包み込み、水球となってサスケを閉じ込めた。

「サスケ……だいたい思考能力が落ちてるみたいだね。眼も写輪眼じゃなくなってるし、チャクラも少なそうだ」

「……………」

サスケを包む術の名は水牢の術だった。サスケは余計なことを喋らずに白を見据える。この術は話せば話すだけ、肺の中の空気を出してしまい、最終的には溺死してしまう。

水牢の術は、中から破ることは通常では出来ないが、抜け道は幾つもある。術の対象者よりも遥かに巨大なチャクラを持つている者は強引に破ることができし、天照や心転身のように、視界の範囲内の対象に術を行使できる者には、術者が水球に触れていなければならぬことから、簡単に破られてしまうのだった。

しかし、今のサスケは天照を使えるほどの体力、精神力共に無いといつていいほどだった。無理をすれば命に係わるだろうことが白には感じ取れる。

それを分かった上で、白は水牢の術を使ったのだった。

水分身を使い香燐を十分に遠ざけてから、白は水牢の術を解いてサスケから離れる。

「これで終わりか？」

サスケは何事も無かったかのように、水で濡れた髪を掻き上げて白に向けて訊くと、再びチャクラを手に集め始めた。

「サスケ……。ここから早く離れた方がいいよ」

「いまさら命乞いか？」

「そこまで見えなくなってるとは驚きだね。俺が影分身であることすら分からないなんて」

「……………」

サスケは無言で白に向けて突きを放ってきた。白は慌てることなく風鎧を纏い、その手を避けることだけに努める。チャクラを纏ってもおらず、写輪眼すら使っていない突きは、白に容易く避けられる。

何度か当たりそうになるものの、それすら風鎧に逸らされて白は無傷のままだった。

そうして避け続けていると、白が待ち望んだ時が来る。

「サスケくん!!」

「サクラか……」

サスケは攻撃を止めると、サクラを見て眩く。サスケのその眼はサクラの声がする方を見ているだけで、ほとんど見えていないに等しかった。サスケの視力はダンゾウとの戦いの後のスサノオの暴走行為により、そこまで落ちていたのだ。

「あなたは波の国の……………」

「お久しぶり」

白は、すぐさまサスケから離れてサクラの近くに移動する。サクラが白を見ていたのはそこまでだった。その後すぐにサスケへと視線を向け直す。

「以前のサスケじゃないから気を付けてね」

白の言葉にサクラからの返事はない。何故なら、サクラはこの時、サスケに視線を固定して、サスケの口から紡がれる言葉を聞き逃さないうように集中していたために、白の言葉が聞こえていなかったからだ。

白は、そんなサクラを見て溜め息をつく。サクラには、サスケしか見えていないことが分かったからだ。

サクラはサスケが動かないことから、自身の身体を前に進める。

「サスケくん！ 私を連れて行って！ 私も木の葉の里を抜ける！」

「お前になにができる？　なにを企んでいる？」

サスケは無表情にサクラへと問いかける。その声からは何も感じ取ることはできなかった。それでもサクラはそれに対して返答する。

「私は綱手様のもとで医療忍術を学んだから、前の時とは違ってサスケくんの役に立てる！　私はサスケくんが里から出ていったあの時……一緒にについていかなかったことを後悔してた……。今度こそ後悔したくないの！」

「俺がこれから何をするのか知っているのか？」

「知らないけど……サスケくんの望み通り動くわ」

サクラの言葉には、何かを決心したかのような意思を感じられた。しかし、その意思もサスケの次の言葉で揺らぐことになる。

「俺はこれから木の葉を潰す。徹底的にだ」

「えっ……」

「それでもついてくるのか？　木の葉を裏切れるのか？」

「……サスケくんが……そうしろと言うなら……」

言葉とは対照的に、サクラの顔は強張り、声は幾分小さくなる。

「……それならついてこい。丁度医療忍者の代わりが欲しいと思っていたところだ」

「分かった」

サクラはサスケに向かって歩いていく。サクラがサスケの傍に来たところで、サスケは白のいる場所を少し見てから、後ろへと向きを変えた。

それを待っていたかのように、サクラはフードの下で握っていたクナイをサスケに向けて突き刺そうとするが、それはサスケに刺さる寸前で止まる。

サクラは目を瞑り泣いていた。

先ほどまでの決心を忘れて、ひたすらに涙を流し続ける。

「いつまで経っても甘いな……」

サスケは雷遁を纏った手をサクラへと突き出す。その手に迷いは無く、逆に殺意が込められていた。サクラは泣くばかりでサスケの行動を見てすらおらず、ただクナイを構えて立ち尽くしたままだった。

サスケの手がサクラに届く前に、その間へとカカシが割って入る。カカシはサスケの突き出して腕を片手で掴み、反対側の手でクナイを突きつけようとしたが、掴んだ腕で逆にバランスを崩される。カカシがバランスを崩した隙に、サスケはカカシに蹴りを放つ。しかし、カカシはサスケの腕を支点にして上に飛び上がり、その蹴りを避けるとサスケに向けて蹴りを放った。サスケはその蹴りを喰らって少し飛ばされるも、ほとんどダメージはない。

「次から次へと……邪魔な奴らだ……」

カカシはサスケから視線を外さずにサクラへ声を掛ける。その言葉により、サクラは泣き止みカカシを見つめた。

「サクラ……サスケを一人で殺ろうとしたんだろう？」

サクラはカカシへと向けていた視線を落とし、俯いてしまう。その行動は肯定していることと同義だった。

「サクラがそんな重荷を背負うことはないんだ……」

カカシはサクラへと言葉を投げかけると共に、自分の不甲斐なさを悔いていた。

サクラへ慰める言葉を掛けるが、それは自分への言葉でもあった。最後にカカシはサクラへ謝ると、意識をサスケに戻してサスケに最後の警告をする。思いが届くようにと……。

サスケは黙ってその言葉を……冷めた目を向けながら聞いていた。「サスケ……俺は何度も同じ言葉を言うのは好きじゃない……。しかし、もう一度だけ言おう。……復讐に取りつかれるな!!」

それまで黙って聞いていたサスケはその言葉を聞いて笑い出した。そんな言葉など意味が無いとばかりに……肺の空気を全て出す勢いで笑い続ける。

ひと頻り笑い終わった後に、呟くようにサスケは言葉を紡ぐ。

「イタチを……、両親を……！ 一族を全てここへ連れてこい!! そうすれば復讐なんて止めてやる!!」

呟くような言葉は次第に大きくなり、それまで無表情だったサスケの顔が怒りに染まる。イタチの真実を……うちは一族のクーデターを……色々と知ってしまった今のサスケには、何を言っても逆に怒り

を買うだけだった。

それでも、カカシは説得を試みる。それがサスケの怒りを助長させると分かっているにしても止められなかった。サスケが自分の教え子だっただけに、その思いは変わることはない。

「サクラは下がってるんだ」

「でも……」

「これは俺の役目だよ」

カカシは布で覆っていた左目を出すと、サクラが離れたのを確認し、白に目を向ける。

「あー。これが終わったら、波の国としてではなく、一個人としてカカシ上忍にお話がありますので、よろしくお願いします」

一瞬その言葉に呆気にとられるものの、すぐにサスケへと顔を向ける。白は言いたいことは言い終えたとばかりにその場を離れて行った。

サスケはその隙ができていた時、顔を下を向けて写輪眼を見せるカカシを睨みつけて呟いていた。

その呟きが終わった瞬間、サスケは下へ向けていた顔を上げて、カカシに叫びながら向かって行く。

「うちは一族でもねえ忍びが！ その眼を使つてんじゃねえ！」

走っていく中でサスケの瞳は普通の瞳から写輪眼を経由し、万華鏡写輪眼にいきつく。感情を爆発させたせいかわ、残りのチャクラの事などお構いなしにスサノオを展開すると、その矢でカカシを狙った。

カカシは、サクラに被害が及ばないように、石橋の下に向けて避ける。サスケはその後を追って、下の川へと降りて行った。

カカシへ言いたいことを伝えた白はすぐに香燐の元へ向かっていった。水分身で安全な場所に移動させただけで、怪我の治療などができていなかったのだ。

香燐の傷は致命傷ではなかったが、十分に重体の域には達していた。白は掌仙術にて大きな傷を塞いでいく。

しばらく治療に専念していると、石橋の方から水飛沫が上がり、大きな衝撃音が響いてくる。その音を合図にして白は治療を一旦取り

やめると、水分身に手紙を持たせて、カカシたちの元へ向かわせた。

白本体は、照美と共に鉄の国から波の国に向けて移動を。

1 体目の影分身は、自来也の元修行を。

2 体目の影分身は、香燐の治療を。

そして最後の影分身は、ある里で必死に説得を試みていた。

「お願いします！ 教えてください！」

「……しつこく」

「本当にまずいんですって！」

ある国とは雨隠れの里のことで、その相手とは小南のことだった。

雨隠れの里に来てからすぐに感知結界で小南を探り、見つけて押しかけると、挨拶もそこそこにひたすらお願いしていたのである。この時、小南の後を追っていけばいずれ目的の場所に行くということが、もう少し考えていれば分かったのだが、小南に聞くという意識に支配されていた白には思いもつかなかった。

それに加えて、自来也が生きていることを伝えていても変わったかもしれないが、視野の狭まった白が気付くことはない。

「何度も言いますが、暁のリーダーであるうちはマダラが、輪廻眼を狙ってるんです。なので、その前に眼を潰さないといけません。あなたが潰せないというなら俺が潰すので、案内をお願いします」

「マダラだろうと誰だろうと、触らせはしない」

「そんなこと言っても、写輪眼の前にはそんな考えも無駄なんですって！」

「……………」

小南は素気なく返事をするのみで、次第に口数や返答も少なくなってきた。

それでも、今更諦める訳にもいかず、説得を続けていたが、それもこの日までだった。

「あなたが居ては、私が会いに行けない……消えて」

「俺も一緒に会いに行きますよ。……そうだ！ この里を出ましよう！ この里に居るからいけないんですよ！ 遺体も一緒に連れて行

けば……!?!」

この言葉が引き金となり、紙が白の周囲を囲み始める。

この雨隠れの里は、どんなに酷い環境であろうとも、どんなに周りから酷く見られようとも、小南にとっては故郷だった。それを馬鹿にしたような発言に、さすがの小南も許せず、起爆札を白の周囲を埋め尽くすように舞わせていく。

「えっと……これは一体……?」

「私は警告した」

「いや……さすがにこの展開は……」

「死にはしない……」

小南の言葉と共に、起爆札は爆発を始める。白は爆発に巻き込まれながらも、消える前に、悪あがきのごとく叫んだ。

「手遅れになっても知らないよー!」

その言葉を最後に、白の声は途絶える。そして、起爆札が爆発した後には、何も残ることはなかった。

103 帰還？

水分身がたどり着いたそこでは、ナルトがサスケに向けて話しかけているところだった。

(あれは、うちはマダラと白ゼツか……)

場は膠着しており、誰もその場を動こうとはしない。

その中で、ナルトは自分の想いをサスケへとぶつけるが、サスケはそれを冷めた眼で見つめるばかりだった。

しかし、ナルトの次の言葉に反応してしまう。

「俺も……お前の憎しみを一緒に背負って死んでやる」

「お前は一体なんなんだ!? 何故俺に構う!?!」

さすがのサスケも、ナルトの言った内容が理解できなかった。そのため、サスケは大声を上げて、ナルトに問う。

ナルトはその問いに対して笑みを作ると、ハッキリとサスケに聞かせるように答える。

「友達だからだ!!」

サスケはその言葉に目を見開き、ナルトを見つめる。

予想だにしていなかった言葉だったのだろう。

そのことだけで、一緒に死ぬと言う考えそのものも理解できなかったのだろう。

サスケは、自分なりに言いたいことのまとめきれしていない話続けるナルトを、次第に睨み付けていく。

カカシも、その言葉に納得できなかったのだろう。サクラに言った言葉と、同じような内容をナルトに伝えるが、ナルトの想いを変えることなどできなかった。

ナルトはそれまでの顔つきを変えて、真剣な表情をすると言い放つ。

「サスケとは俺がやる。これは誰にも譲れねえ」

サスケはそれまでとは違い、口許に笑みを浮かべる。それは呆れているようでもあり、納得したようでもあった。

その後すぐにマダラによって、サスケたちはその場から消え去って

しまう。

それを見たナルトは、急に周りにいた影分身を解くと倒れてしまった。徐々に沈んでいくナルトを慌てたようにしてカカシが支える。

サクラもそれを見て慌て始め、カカシに諭され急いでナルトの顔へと手を翳す。

ナルトの回復をして戻ってきたカカシに向けて白は、歩み寄る。カカシに言ったことを実行するために。

サクラは、近付いてきた白を忘れていたことに、ばつが悪そうな顔をするが、何か記憶に引つ掛かるものがあつたのだろう、じつと白を見つめる。

カカシは近付いてくる白を見て警戒するも、サクラの次の言葉でそれが揺らいでしまった。

「……………あつ！ あんた白でしょ！ ……つて、なんであんたが波の国にいるのよ!? あれからヒナタ大変だったのよ!! 大体生きるなら生きてるで、連絡くらい寄越しなさいよ!」

白の事を思い出したのか、一気に捲し立ててくる。白はそれには答えずに、持っていた手紙をカカシに手渡した。

「絶対にあんな条件は認められません! もし、その条件を飲めと言うならば、木の葉に対して嫌がらせしまくります!」

「条件?」

話の内容についていけないカカシは疑問を浮かべると、白に聞き返した。

「取り敢えず、その手紙を読んでください。それと、もうすぐ綱手姫が意識を取り戻すので、その内容を里の上役にもちやんと伝えてください」

「それは本当!?」

反応したのはカカシではなくサクラだった。サクラは白に詰め寄り、逃がさないとばかりにその肩を掴むと、問いただしてくる。

ただ、そのあまりの力に水分身である白が耐えきれはすもなく、ただの水となって崩れ去ってしまった。

呆気を取られているサクラたちを余所に、白は移動を開始する。

(今のサクラに捕まったら、ただじやすまない……)

白は辛うじて意識のある香燐を連れて波の国へ急ぎ戻って行くのだった。

白本体は、波の国への帰還中、頭を押さえて頭痛を堪えながら、再び影分身を使っていた。

影分身を再び雨隠れの里に向かわせるためである。

最後に小南が言った、白が居ては会いに行けない、という言葉から、今度は隠遁を使い小南の後を追うことに決めたのだった。

そして、こつそりと長門たちを回収するために、影分身に巻物を持たせる。

何事もなく波の国についてからは、影分身を解除して香燐の治療に当たる。そのついでとばかりに、身体の菌形も消していく。

何度か自来也が潜り込んで来ようとしたが、再不斬に会う際に1度出し抜かれた経験から、感知結界を張り巡らせているため、その都度撃退していた。

白本体が波の国に戻ってきた時には、香燐は元気な状態に戻っていた。

「なんだっーの！ このおっさんは!」

「やはりおなごはいいのう。少しでいいからその胸を触らせてもらえんだろうか?」

「それはセクハラです」

「さわらせるわけねーだろ!!」

香燐は叫び、胸を腕で隠しながら、自来也から後ずさる。白は特に止めるつもりもなく、ただ淡々と事実を述べるのみだった。

白は仙術の修行を行う過程で、自来也に男であると知られてしまっていた。

その修行方法とは、自来也に仙術チャクラを流してもらい、その感覚を掴むと言うものだった。その際に、自来也のチャクラを、身体の隅々にまで行き渡らせたことで知られてしまったのだが、後の祭りである。

1度引き受けたからには、と言うことで、ある程度形になるまで面倒を見てもらえることになっていった。

その感覚を掴んでからは、自分で仙術チャクラを少しずつ練り上げる。

余分に取り込んでしまった分については、自来也に吸い取ってもらうことで石化を防いでいた。

しかし、それも短い期間で修得しつつあった。そこへ、香燐を連れて白が戻ってきたのである。

その顔と胸を見て、自来也は心配すると共に、無事と分かるとテンションが上がり始め、香燐に構い始めたのだった。

影分身に溜まった仕事を消化させて、その間に白本体は仙術の修行を再開する。

香燐については、行く宛も無いことから、この波の国に滞在するこ
とになった。

そして、やっと本格的に仙術の修行ができるかと張り切っていた矢先に、影分身から白本体に連絡が入ってくる。

白が考えていたよりも事態は早く進行しており、影分身が雨隠れの里についた時には、小南のチャクラは感じ取れなかったのである。

記憶を頼りに、一旦上空へ移動した白は、秘術を使い高速移動しながら水面上を見渡していく。

目的の人物は程無く見つかるが、既に死んでいた。その表情はもう変わることはないが、悔しそうな表情に白には感じられた。

(殺されたばかりかな? ……この人をうまく使えば、貸しが作れるな)

小南の死体を巻物に収めると、白本体に連絡を取り逆口寄せで一氣に波の国へと戻る。

白は巻物を受け取ると、影分身に治療小屋の外にいる自来也と香燐を呼びに行かせ、寝台の上に巻物から小南を出して横たえる。

「小南!」

「誰?」

診療所に入ってきた2人を見た白は、影分身を全て解除して巻物か

ら兵糧丸を取り出す。

自来也は寝台に駆け寄るが、それが遺体と分かると、悲しそうな表情をして呟いていた。

「すまなかつた……。わしはもうお前たちに会うまいと思っていた……。わしのことなぞ忘れて、平穩に暮らしていくとばかり思っておった……」

「へで？ その人だれなんだ？」

香燐は白に小声で聞いてくるが、その声を無視して白は、香燐の口に無理矢理兵糧丸を飲み込ませる。

「あまり時間は無いので、自来也先生も手伝ってください」

自来也にも同じように兵糧丸を渡して飲ませ、白は自らも飲み込むと、メスを取り出して香燐に近付く。

「ちよつと血を貰うよ」

「はっ?」

白は香燐の腕を掴み小南の元へ連れていくと、香燐の腕をメスで切り裂く。それは小南の口の中へと入っていくが、量は少しどころではなかった。

「痛っ!? いきなりなにすんだ!!」

香燐の言葉を無視して白は香燐の腕の傷に応急処置を施してから、これから行うことの説明をする。

「これから起死転生という術を使用します。死んだばかりなので、まだ間に合うかもしれません。成功しても失敗しても、チャクラをかなり持っていかれるので、そのつもりで。それと、もし、この人が雨隠れの里に戻ろうとしても自来也先生が止めてください。二人とも手を出して」

それぞれの手を自分の肩に乗せると、白は小南の心臓に片手を乗せるようにして当てる。

「香燐は医療忍術を使用する感覚でチャクラを送って。自来也先生は仙術の時の感覚でチャクラを送ってください。では始めます」

有無を言わせぬ迫力で言い終えると、小南の胸に当てていない方の手で印を組む。

「——起死転生——」

その瞬間。白からと言わず、自来也や香燐からも、反強制的にチャクラを小南の身体は吸い取り始める。

一番消耗が激しいのは、術者である白で、みるみる憔悴していった。その代わりに小南に生気が戻ってくる。

この術は、大蛇丸が開発していた不屍転生に改良を加えたものだった。この術の資料については、香燐のいた研究所にあり、そこで読むと同時に改良を施していたのである。

不老不死に興味があつたのもあるが、それを他人に使えないかと考えたのである。砂隠れの里のチヨが、転生忍術を使用していたことから、応用できるはずと研究した結果がこれだった。

胸に当てた手から、心臓の鼓動を感じ取つた白は、手を離して安堵の溜め息を漏らすと、そのまま倒れこみ気絶した。

起死転生には条件が幾つかあつた。死後24時間以内や大量のチャクラを要することなどである。しかも、理論だけが完成しているだけで、白が使つたのは今回が初めてだった。使用者が死亡することがないと分かってはいても、もし、自分のチャクラを全て取られそうになつた場合には、手を離すつもりでいた。手を対象者から離すだけでこの術の効力が切れるためである。

失敗にはさせたくないことから、無理矢理その場全員のチャクラ量を上げた上で、香燐の血に宿る再生能力に賭けてみたのだった。時間があるのであれば、他にも人を呼び寄せることは可能だったが、いつ死んだか分からない以上、すぐに術を行う必要があつた。

結果は成功と言つていいだろう。白も気絶したとはいえ、それも次の日には起きれる程度のものであった。小南の意識は未だに戻らないが、香燐が面倒を見ている。

働かざる者食うべからずの精神で、香燐には診療所の手伝いをさせていた。毎日文句を言いつつも、言うことを聞く辺りが香燐らしい。

自来也も小南の件で、白に対して嫌そうな顔をせず、言うことを聞いてくれるようになったのは大きいだろう。今までは、色々などころに廻りたいという自来也の要望を、白は抑えてきていたのだから。

そんな白はと言うと、カンパニーの運営と仙術の修行に精を出していた。

基本的に島の守りは自来也に任せて、診療所については香燐に任せている。後は波の国を富ませていけば、ナルトたちがなんとかするだろうと思いい、それを手助けする意味合いも含めて輪廻眼の回収を阻もうとしたのだが、失敗に終わってしまった。

忍界大戦の結果が分からないための措置だったが、不安であることに変わりはない。

白が五影会談から波の国に戻って数日後に、木の葉の里から物資の支援要請がきた。霧隠れの里に関しては、照美が長十郎を連れて帰る際に再不斬へと言伝してあった。再不斬はそれを聞いて、嬉しそうに承諾してしまう。大戦と聞いて心躍っているのだろう。

照美たちが帰ってから、再不斬は白に大戦の行われる大体の位置を聞き出すと、すぐに出て行ってしまった。いつ行われるか分からないにも関わらず、だ。

波の国からの支援は食料品や医療品などの雑貨的なものだけで、人的な要求が無かったのは白にとって喜ばしいことだった。

木の葉からの書面に付随して、条件に付いても解除する旨が書かれていた。これにより、物資の過剰要求を通そうとしているのだろう。白の言った嫌がらせをするという言葉が、多少なりとも効いたかもしれないが……。

結局、物資の使用者は一緒なため、霧隠れの里と木の葉の里の要求は一緒なのだが、そこまで両里間の連携は取れていないようであった。自里のことで精一杯なのだろう。白はその要求を呑む旨の手紙を書いて、それぞれの里に送った。

それから数日後に小南が目覚めることになる。

104 信用？

「何故私をここに連れてきたの？」

小南が白に会って最初に発した言葉がこれだった。白は慌てることなく返答する。この場には自来也がいるために、下手なことは言えなかった。

「治療するためかな……」

「聞きたいことはそんなことではない」

「まあまあ。意識が戻ったばかりでは「先生は黙ってて」……わしは心配して……」

小南の言葉に遮られた自来也は、嬉しそうな顔から落ち込んだ表情へとすぐさま切り替わる。そんな自来也など気にせず、真意を見極めようと小南は白を見つめてきた。

「今カンパニーを運営してるんだけど、実際かなりの人材不足なんだ……。1度死んだ身なんだし、生き返らせた分の貸しを返すと思って手伝って貰おうと思ってね」

「……………」

白の言葉に何も答えず、小南は黙したまま見つめ続ける。本当のことなど白に話せるわけもなく、また、少しは白の思いも入っていた。

ナナは木の葉の里から戻って来たはいいが、記憶の抜けが著しく、まともに仕事ができる状況ではなかった。そのため今は療養中である。

自来也には島の守りと修行を頼んであるし、まともにカンパニーの仕事をするとは思えなかった。香燐には診療所を任せてあるが、サスケの行方が分かったら出て行くだろうことが容易に想像がつくために、任せることに不安がある。そのため、カンパニーの経営に回せる人材が居なかった。

実際に人材はいるのだが、信頼ができなかったのだ。その点小南は、後ろに誰もいない。仕事については、これから覚えていけば十分だと言う考えもあった。

「こんな世の中だからね。信頼できる人が欲しいんだ。後ろでどこに

も繋がっていない人なんかは特に」

「そう……」

「取り敢えずゆっくり休んで、身体を回復させるといいよ」

小南は納得したのかしてないのか、曖昧な返事をする、白から視線を外して天井を見上げると黙ってしまふ。そこへ、自来也が小南へと声を掛けていた。

「それよりも、身体の調子は大丈夫なのかの？」

「先生はいつも心配し過ぎ」

白はその光景を見てから診療所を後にした。

白が診療所を出てきたところで香燐も一緒に出てくる。診療所の扉には本日休診の札を下げていた。2人の邪魔をしないためだろう。

「どうしたの？」

「あんな空気のところについてまでもいられないっつーの」

師弟で色々と話したいこともあるのだろう。それ以外の者がいるには微妙な空気が漂っていた。それに耐えきれずに、香燐は白を追って出てきていた。

それ以外にも、毎日恒例の香燐による白への質問が目的でもある。

「それよりも、サスケの情報が入ってきてないか？」

「今のところ来てないね。木の葉も無事みたいだし。戦争が始まったからそれどころじゃなくなるから、サスケが木の葉に来るのは……戦争の後になるかな？」

「やっぱり、戦争が終わるまで待ちかあ……」

「たぶんね」

白は適当に相槌をうつ。香燐はサスケの行方が分からないことから、少し悲しそうな顔をするが、それもすぐに変わり、白に要求してきた。

「そう言うわけでもう昼だよな？」

「どういうわけか分からないけど昼だね」

「この前食べたかつ丼は美味かったなあ」

「俺はラーメン派なんだけど」

香燐はわざとらしく、白を見ながら言ってきた。

「そんなこと言わずにかつ井作れっつーの！ 私がかつ井が食いたいんだよ！」

「昼はラーメンだろ！ むしろラーメンでいいだろ！」

白と香燐の言い争いはしばらく続き、何故か最終的にジャンケンで決める結果になった。この時点で白に勝機はなく、5回先勝のジャンケン勝負にストレート負けを喫したのは言うまでもない。

物資の手配を終えた白は、波の国の大名たちからの説明を求められていた。それと言うのも、他国の大名たちが、今回の大戦にあたり、敵から身を守るために移動するという情報を得て来たからだだった。

波の国での情報伝達能力は早く、それはあつという間に浸透する。それが今回の大名たちからの説明要求に繋がっていた。

白は面倒臭がりながらも、波の国内での大名会議をテレビ会議にて行う。通常大きな国で無ければ保有すらしていない物であったが、そこは金に物を言わせて購入済みである。また、一番電源の消費の激しい本部……ガトーカンパニーのある島には白がいた。白は雷刀を電池替わりに使って電源をまかなっていたのである。これも購入する要因のひとつだったりする。

今回の戦争とそれが起こると想定される場所を説明した上で、おそらく波の国まで敵は来ないであろうことを説明を行った。

実際の大戦の影響範囲は何処まで行くのか不明な点が多々あるのだが、戦場のたまかな場所を知っているがゆえに、さすがにここまで来ないだろうと思っていたのだ。

忍びの護衛を付けてほしいと言う大名もいたが、忍びは全て大戦に出払う旨を伝えた。更に、他国の大名たちと行動を共にする場合は、戦場に近付いてしまうことを伝えると、露骨に嫌な顔をしてきたことから、その話も大名たち自身で否定してしまったのである。

そのため、最終的には各自の判断で避難してもらうことに納まった。

説明を終えた白は、通常通り部屋へと戻ろうとしたところで自来也に呼び止められる。

「ちよつといいかの？」

「どうしたんですか？　こんなところまで来るなんて珍しい」

自来也は、通常カンパニー内には来ずに診療所や島内の店巡りをしていた。それに加えて、最近では公衆浴場を作りたいと言ってきたため、その案の検討中だったりもする。目的が見え見えだが……。

「今日の修行はどうするのかと思つての」

「そう言えば大名たちへの説明のせいでもいつもより遅れてますね……。今からでもいいですか？」

「おお。構わんぞ」

仙術に関しては、既に隈取りができるまでに達していた。自来也については、保険でいてもらつているような状況である。

「それにしても、動きながら仙術が使えるとは思ひもせなんだ」

「こつちもですよ。本当は影分身を動かさずに置いておこうと思つていたんですが……なんでできるんでしょう？」

「その手があつたか！」

自来也は今気付いたとばかりに手を打つが、あることに気付き問い返す。

「しかし、それじゃと影分身でチャクラを消耗せんか？　基本的なチャクラが多くなければ厳しい気もするんじゃないが……」

「反応速度と感知範囲が上がるので、全くの無駄と言うわけではないです」

2人は歩きながら、いつも修行を行っている場所へとたどり着く。

「まずは仙術チャクラを練つてみるところからかの」

「ではお願いします」

白は仙術チャクラを練るために目を瞑る。自来也は背後から白の肩に手を置いていつもの体勢に入る。そして、仙術チャクラを練り始めたところで白は意識を失った。

「こんな手に引つかかるとは……信用されるといのがわかる分、辛いもんだのお」

「先生……。準備はできた。たぶんこれで全部」

そこには白の戦闘時の忍具や医療薬品、巻物が乗せられている荷台を引いている小南がいた。先ほどまでの修行の話は、白を島から連れ

出すためのものだったのである。仙術チャクラを練る初期段階の、目を瞑ることで生じる隙を狙い、自来也は白を気絶させたのだった。

自来也はただ大人しくこの島に居たわけではなく、密かに蛙を使って情報収集を行っていた。波の国は情報の伝達が異常に早い。そのため、自来也に戦争の事を知らせないようにならざることを無理な話であった。そのために、島を守ってほしいと言うことに変えたのだが、それも大戦の規模を知ってしまったては無駄に終わってしまう。今回のように……。

自来也は白を小脇に抱えて不思議そうに見る。

「こやつは修業はするくせに、戦場に出ようとせんとは……なにを考えとるんだ？」

「さあ……。変人の考えることは分からない」

小南はハッキリと自来也を見つめながら言い切る。まるで先生も変人ですよと言っているような見方だった。自来也は苦い顔をしながらそつぽを向いてしまう。

「わしはこやつとは違う……。それよりも……そこに隠れておるお主も来るか？」

それまでそつぽを向いていた顔を、ある木に向けて自来也は語りかける。そこにはチャクラは存在せず、また、音もしていない。しかし、その顔を向けた木の陰から人が現れ言葉を発する。

「なんでわかった？」

チャクラを完全に断っていたにも関わらず、自分の居場所がバレた香燐は動揺を隠せなかった。

自分の隠遁にそれなりの自信があったからだ。

「わしほどになれば、おなごの居場所を特定するなど朝飯前よ」

「あなたが風上にいたから、匂いで分かったと言ってる」

「これ小南。バラすでない」

「……………」

香燐は自分の居場所が分かってしまった原因が、匂いであることが分かり絶句してしまう。忍犬などの獣ならいざ知らず、人が分かるとは思ってもいなかったからだ。

そんな香燐を後目に、自来也と小南は話を続ける。ひと通り話終えたところで、再び香燐に聞いてきた。

「それで、どうするか決めたかの？」

「うちは別にここにいってもいいんだけど……。んー、サスケが戻って来るのって木の葉の里らしいから、木の葉の里に行ってみる」

「そうか……。では達者での。——口寄せの術——」

自来也は口寄せの術でガマブン太を口寄せする。それにより、地響きがなり、周辺の木々はなぎ倒される。

「なんじゃ？ ……自来也か!? お前は今まで何をしとつたんじゃ!!」

「まあそう怒るな。わしにも色々あった。それに……。これから敵地へ乗り込もうと思ってるの」

「はああ?」

自来也は、敵の拠点となっている大まかな位置を把握していた。そのため、ガマブン太に乗って一気に移動することにしたのだった。簡単にはあるが、ガマブン太に状況の説明をしていく。

先手必勝の奇襲を仕掛けようというのである。ただ、戦力として見るならば、少数精鋭とは言え、自来也と自来也の行動に賛同した小南だけでは心許なかった。

そこへ、仙術を扱えるようになった白がいたのである。そして、その能力も申し分ない。しかし、一緒にいる中で、遠回しに何度か誘ってみたものの、全て断られていたことから、あまり自ら戦うことはしない忍びであると考えた自来也は、今回強硬策に出たのだった。

この大戦は世界全体を巻き込む。それほど大きなものであると感じたため、少しでも強い忍びには参加してほしいと言う考えもあった。

「海を渡って行ってくれ! 場所はこちらで指示する!」

「なんやよう分からんが、戦のようじゃし、わしもやったるわ!」

ガマブン太は自来也たちを乗せて海へ入ると、自来也の指示に従い進んでいった。

身体を揺さぶる力により白は目が覚めた。すぐに起き上がり周囲へと目を配ると、辺り一面見渡す限り穏やかな波を湛える海が見える。それを呆然と眺めながら白は自分の頬をつねっていた。

「そんなことをしても夢ではないぞ」

「なんでこんなところなの？　ここはどこです？」

「もうすぐ敵地じゃから準備せい」

「はっ？」

白は自雷也の言葉が理解できずに、口を半開きにして固まってしまった。そして、再び頬をつねった上で、自身のチャクラを感じ取る。夢でなければ幻術に掛かっていると考えたからだ。

嘘であると信じたかったが、現実は厳しく、チャクラに乱れはなかった。そんな儂い希望が潰えたところで、自雷也から声が掛けられる。

「早う準備せんと危うくなるぞ」

変えられない現実に溜め息を漏らしながら、荷台に寄せられた忍具などを装着していく。

巻物に収められるものは収めていき、医療薬品を自雷也と小南に投げ渡す。

明らかに見た目いじけているように見えた。

「よく、俺の道具の場所まで分かりましたね……」

「細かい場所は小南が入れるからの。結界はわしが解いた」

「全部集めるのに苦労した」

それぞれの言葉から、かなり前から、既に今回の計画が進んでいたことが分かった白は、再び溜め息をつく。

（これまで持ってきてくるとはね……）

巻物を懐に仕舞いこみ準備を整えた白は、自来也に訊ねる。

「今どの辺なんですか？」

「もうそろそろ、陸が見えてくるはずなんだがお……おお！　あれだのー！」

指差した先には確かに陸が見える。しかし、それは白にはどこかで見えなかったような光景だった。

「……あそこって雷の国じゃないんですか？ 雷の国が敵地ですか？

（敵の場所って変わったのか……？）

「なぬっ!？」

「先生……いつまで経ってもドジ……」

「くっ!」

目的の場所ではなかったのだろう。自来也は苦々しい顔をしている。それを冷めた眼で小南は見ていた。呆れていたのかもしれない。白たちが見えた陸地は、白ゼツたちや穢土転生体が上陸する海岸だったのである。似たような光景を見た気がした白が問いただした結果が、自来也の勘違いだった。

白は保険のために、影分身1体を陸に向けて走らせる。

「進路変更！ 西へ面舵一杯!」

「ノリで誤魔化そうとしても無駄」

西の方向へと指を指して、自来也はポーズを決めると声高く宣言した。小南はそれに対して、素早く突っ込みをいれるが、自来也が気にした様子はない。

白はそれを眺めてから、諦めたように、敵の注意点を教えておく。

白ゼツにチャクラを吸いとられると、全く見分けがつかないことや、穢土転生により、大量の不死者がいることなどを説明していった。

105 潜入？

説明を終えた時には、自来也は腕を組み考え込んでしまう。自分のチャクラを真似できるとなれば、感知結界を張っても意味がなく、最悪仲違いになってしまう。しかし、逆に少数精鋭だからこそその強みもあった。

白ゼツはそれほど強くないのである。早い話が、一緒に巻き込むくらしいの攻撃をしても、他の2人であれば、十分に避けるなり、防御するなりできるだろうと考えられた。実力を知っているからこそ、実施できることではあったが……。

小南は神の紙者の術による起爆札で離れた位置から攻撃するため、そもそもチャクラを吸いとられることがない。白も基本的に通り返しに斬りつける戦い方だ。残るは自来也だけだが、2人には気にせず攻撃するように言うと、仙人化のためのチャクラを練り始める。穢土転生体については、小南と白で封印することになった。

そこはかたなく不安な白は、チャクラを高めていつでも対処できるようにしておく。穢土転生体の中でも、長門やイタチが出てきた時のためだ。

説明の上でも、この2人が相手になった場合は、逃げに徹することを伝えていた。

これには2人とも了承し、イタチは自来也が。長門は小南が相手をするので話をついた。白の知識の中で危険な相手は、この2人だと思っただからだ。

2人は長門の遺体を取り返すという目的もあったので、これに、長門の魂を昇天させることも白の説明で追加された。

敵の拠点に潜入してからは、見つかったものが囹となって逃げる手はずで自来也から説明を受けたが、そう事が容易く進むとは思えず、問い返す。

「こちらの位置が感知されてると思うんですが……？」

「まあ、わしらは敵の情報の奪取と戦力を削ぐことを目的としとる。感知されてると分かれば、作戦を切り替えるしかないの」

「結局戦うんじゃないですか……」

「そんなに嫌か？」

自来也の言葉に意外なものでも見るような目で、白は自来也を見つめる。

「争いを無くす世を目指していた人の言葉とは思えませんね」

「わしも好んで戦うわけではない。それに人がいる以上、大なり小なり意見が異なる。……争いがなくなることはないだろう。しかし、此度の大戦だけは今までと別なのは分かる。……5 大国が手を組むなど今まで無かったことだ。今まで自国の事しか考えてこなかった者たちが手を取り合っておる。……この大戦が終われば、平和な世が来ると、信じるに足ると思わんか？」

「それ死亡フラグなんじゃ……」

自来也の最後の言葉を聞いて白は呟く。そんな白に自雷也は首を傾げた。言っている意味が分からないのだろう。そこで白は、あることを感知して自来也に伝える。

「まだ少し先ですが、水面下のかなり広範囲に大量のチャクラを感じます。多分白ゼツです」

「もうバレおったか……ブン太いけるか？」

「わしがそいつらをやりつつ、余った分は上にやる」

そう言うと、ガマブン太は水面下に潜ってしまう。水面上には3人のみが立ち尽くしていた。

しばらくすると、水面が盛り上がり、大量の水飛沫と共に、こちらも大量の白ゼツが上空へと打ち上げられた。

打ち上げられた白ゼツに向けて、それぞれが攻撃を開始する。

白は雷刀牙を片手に構えて、氷遁秘術・魔鏡氷晶の高速移動を繰り返す。広範囲に展開された魔鏡氷晶は、その間を繋ぐ線上の敵を逃さずバラバラに切り裂いていった。

小南は上空に飛び立つと、起爆札を海面周辺へとばら撒き、落ちてきた白ゼツを一気に爆発の中へと誘っていく。起爆札は小南の口寄せにより次々と現れ続け、爆発が落ちてきた白ゼツを、また上へと持ち上げて落ちるを繰り返し、息絶えるまで続けていく。

自来也は、仙人モードになると、両肩に口寄せした蛙に、怒鳴り散らされながら殴られていた。

「いつまでも遊ばないでくださいよ！」

「なんじゃお前は！ わたしやあ小僧に用があるんじゃ！ おぬしやあ黙つとれ！」

自来也の横に現れて諫める白に、シマが言い返してきた。自来也が生きていたことが嬉しいのだろう。白に言いたいことだけ言うと、また自来也への追及へと入っていった。それを見て白は言っても無駄だと悟り、白ゼツとの戦いに戻っていく。

「かあちゃん。どうやら今はそれどころじゃなさそうじゃ」

フカサクは周りを見て、シマを諫めた。それにあわせて、シマは周りで起きている事へと目を向ける。

「いったいどがーななつとるんじゃ？」

「それがどうやら忍界大戦が起きているようでした」

「人らの争いに、あたしらは係わらん！ そんなところに呼ぶな！」

「お待ちください。今回の大戦は、今までのものと違いますので」

自来也はフカサクとシマに説明していく。その間にもいたるところで、水柱が上がり……爆発が上がり……バラバラになった白ゼツが落ちていく。

それでも、下を通る全体の、ほんの1パーセント程度にすぎなかった。

「そぎやーなことは、はよ言わんかい！」

「かーちゃんがよう聞きもせんと喚くからじゃ」

「とーちゃんはだまつとき！ そうと決まったらさっさとやるで！」

自来也は、更に2匹の蛙を口寄せする。2匹の口寄せ蛙にはシマから、ガマブン太の後押しをするために、水面下へと向かうよう指示を出した。それから自来也も白ゼツとの戦闘に参加していく。

自来也も白や小南と同じように近づかずには仙法にて遠距離から攻撃していった。

水面からの水柱は更に数を増やし、白ゼツの数も増える。さすがに全てに対応することも出来ず、時間が経つにつれて通り過ぎていく数

も増えていった。

しかし、3人共に周囲を気にせず戦えるということで、打ち上げられた白ゼツを次々と屠っていく。

それは下の白ゼツが通り終えるまで続くかに思われたが、夜も明けようという時にフカサクの言葉で終焉を迎えることになった。

「連合が組まれとる言うたの?」

「ええ。この後方の雷の国に本部があるようです」

「この下のやつらは連合とブン太たちに任せて、わしらはアジトに行つた方がいいんと違うか?」

「それもそうですの」

そう言つて、一旦仙人モードを解除した自来也は、白と小南に大声で呼び掛け、シマとフカサクは海中のガマブン太たちに新しく指示を出す。

「白! 小南! 海中のやつらはブン太たちに任せてわしらは敵のアジトにいくぞ!」

白は聞こえてませんとばかりに、移動を繰り返し、小南は爆発音で聞こえない。そんな2人に業を煮やしたシマが口から白に対して蛙の鳴き声による音波攻撃を仕掛けた。同じくフカサクは、小南に対して水遁による水鉄砲を口から放つ。

その両者からの攻撃で、一旦その場は静かになった。白は耳を押さえながら、小南はずぶ濡れになりながら自来也を睨みつけている。

(白ゼツ相手をずっとやっておこうと思つて感知したのを伝えたのに……)

2人は自来也の元へ集まる。白は露骨に嫌そうな顔を。小南は無表情に。

「大きい方を叩くけんついてきんさい!」

「分かつた」

「はい……」

それぞれ返事をする、自来也は頷いて走り出した。それに続き白と小南も走り出す。

陸地についてからは、慎重に行動するかと思えばそうではなかつ

た。ある程度場所を知っているのか、途中で何度か数体の白ゼツに遭遇して交戦したり、立ち止まって方角を確認しながら、迷わずに自来也は突き進む。白はあることを思わずにはいられなかった。

(また、天然で間違えますように！)

そんな白の願いも虚しく、アジトの近くまでたどり着いた自来也は、アジトを見下ろす位置で不審に思い始めたのか立ち止まる。

「変ですのお……。ここに来るまでにほとんど妨害が無いとは……」

「ここがほんまにアジトなんかいな？」

「調査したので間違いありません」

「ほんなら後は入るしかないの」

「白は何か感じるか？」

白に向けられた視線と言葉に、白は仙人化して嬉しそうな声と表情で答える。

「ぼっちり。感じますよ！ チャクラが数人分しか感じられないのを

！ 尾獣チャクラは感じません！」

「ん？ 敵のアジトはここじゃろ？」

「そのはずですがの」

自来也は不思議がりながらも、慎重にアジトへ向けて素早く足を進めていく。小南も身体を蝶の形をした紙へと変えてアジト内部へと入っていった。

白もそれに続く形で感知結界を張り、一応安全のために影分身にゆっくりとアジトへ入らせていく。本体は隠遁を使いアジトの入口が見える所で報告待ちをしていた。

白が余裕を持って入っているのには理由があつた。白の影分身は現在雲隠れの里の本部に潜り込み、戦況を白へと伝えていたのだった。そのため、現在この場所に外道魔像も無ければ、マダラも居ないことが分かったからである。

それらは現在雷の国で暴れまわっていた。穢土転生体もそちらに大半が向かっている。イタチと長門は、違う場所でナルトとキラビー相手に立ちまわっていた。ただ、それらの情報から安心はしていたが、嫌な感じもしていた。

(なんか冷たいような、どこかで感じたことのあるような……?)

アジト内のチャクラの数が減っていくのが分かった白は少し不審に思い始めていた。自来也や小南が相手にしているにしては場所が違うのである。

(他にも先に中へ入ってるやつがいるのか?)

この時、よく考えていれば分かったのだが、ここには1人マダラたち以外にも要注意人物が居たのである。

そのチャクラは白がアジトの入口から入っていくと同時に、地面を貫き、更に巨大な骨を砕き、アジトの上の方へと着地すると、白を見つめてきた。

地面を突き破って出てきたのはサスケだったのである。サスケは白に視線をやるが、用はないとばかりに南に向けて歩き出す。

それを見ていた白はかなり焦っていたが、サスケが去るのを見てホッとひと安心した。

それというのも、出会ったのは影分身なので、もしやられても問題はなかったが、最悪時のことを考えると、白本体がやられていたかもしれないからだ。

サスケも影分身であることを見抜いたのだろう。

(サスケの存在をすっかり忘れてた……イタチの眼を移植したんだっけ?)

白へのショックはそれだけではなかった。しばらく呆然としていた意識を取り戻し、安全になったはずのアジト内部へと入っていく。外に居ては逆に危険と感じたためだった。

内部では、生き残っていた白ゼツの尋問をしている自来也がいた。白は周囲をよく確認しながら自来也に近付いていく。原始的な罠が無いとは限らないからだ。

「無駄だよ……。僕から情報を聞き出そうとしても」

「ふん……。やはりしゃべらんか。……そう言えば、なぜ白は穢土転生について詳しくあったんじや?」

「まあ、ここまでできてからあれですけど、大蛇丸の孫弟子?になるからですかね」

「大蛇丸だ?!?」

予想もしていなかった答えに自来也は驚く。

「大蛇丸の部下にカブトって人が居て、その人からまあ色々教わったんですよ。んで、音信不通になったのを機会に、色々な施設を巡って、穢土転生の術式を調べただけです。不老不死とかもあつたんですけど、不老はともかく、不死はちよつと遠慮したいかなと……いつまでも生きてるって、なんか不気味じゃないですか?」

自来也は黙って白を見つめていると、小南が自来也たちの元へ戻ってきた。その後ろには紙で包まれた、大きく細長い塊が浮かんでいる。おそらく中身は長門なのだろう。

「大きな部屋の壁に人がくっ付いてるわ」

「ふむ。会いに行ってみるかの」

小南の案内の元その空間へ向かうと、壁に見知らぬ石像らしきものと、その隣にヤマトが壁に埋め込まれていた。ヤマトは意識が無くガツクリと項垂れたような状態で、下半身と両手を壁に埋め込まれている。

「こやつは、暗部だった者だの……」

「ヤマトさんですね……」

自来也と白がヤマトを見つめている中、小南が2人に声を掛ける。

「結局この人どうするの?」

「幻術に掛けられてるみたいですし、取り敢えず解きます?」

「そうじゃの」

幻術を解きヤマトを壁から救出する。しかし、ヤマトの意識が戻ることはなく、以前としてぐったりとしたままだった。それでも、生きていることは分かりそのまま横たえて白は診察する。

「薬物投与されてますね……」

毒を抽出する要領と同じようにして、ヤマトの中にある薬物を抽出していく。その作業はすぐに終わり、しばらくするとヤマトの意識が戻った。

「うーん……ここは……」

白は素早く自分の髪の毛を操り顔を隠す。ここでヤマトに見つ

かつては、何を言われるか、たまったものではないからだ。

意識を取り戻して起き上がったヤマトに、自来也は事情を訊ねる。

その傍ら、小南は白ゼツを紙で身動きが取れないよう見張りをし、白はその部屋の下部にある蓮を見つめていた。

106 穢土転生？

ヤマトから事情を聞き終えた自来也は、フカサク及びシマとヤマトを交えて相談していた。ここに敵がない以上居ても仕方なく、肝心の敵が現在どこにいるか分からないのである。

白本人には、敵本体がどこに居るのが分かつてはいたが言うつもりは無く、素知らぬ振りをして蓮を見続けた。

そこへひと通りの相談を終えたのか、自来也が呼びかけてくる。

「白もこちらへ来い」

既に小南は自来也たちの元へ行っており、そこから白ゼツの見張りをしていた。白は呼ばれたので振り向き、頷くと自来也の元へ歩いていく。

しかし、それも束の間。ヤマトがその名前に反応する。

「白？ ……あぁー!! 君ねえ！ 分かっているのかい!? 君のやったことは「だまつときんさい!」 ……はい……」

白に叫びながら詰め寄っていたところをシマに叱られた上に、その長い舌に巻き取られて元の位置に戻される。ヤマトは叱られたことで項垂れていた。既に上下関係がはっきりしているようだ。

そのことに安堵しながら白は自来也たちの元へ近付いていく。それを恨めしそうにヤマトは見ていたが、状況を思い出したのか、意識を切り替えて表情を元に戻す。

「取り敢えず戦場は、雷の国の方へ移ったとみて間違いないだろう」

「そうと決まったら急いで戻るで!」

「その前に聞きたいんじやが、穢土転生は初代柱間様も蘇らせることは可能なんかの?」

自来也は壁に埋め込まれた柱間を見てから白へと訊ねてくる。

まるで、初代柱間を穢土転生しろと言ってきたようなのだ。確かに相手がマダラと聞いては、それと対等に渡り合えた柱間を蘇らせたいと思うのは当然だろう。

「たぶん無理だと思いますよ。魂が違う場所で封印されてるので、呼び出すことができないと思います。それに生贄が必要になりますし。」

ここにそんな生贄は……」

白が言い終える前に皆の視線がひとつところに集中する。それは身体中を紙で覆い尽くされて身動きの取れない白ゼツだった。

「丁度よさそうなのがおるんじや。ものは試しにやってみてくれはせんか?」

「はあ……。まあ、やってみますが無理だと思えますよ」

フカサクからの言葉で、無駄だと分かりつつも柱間の形をしたものから欠片を抜き取り、それを広げた巻物に付けて簡単に穢土転生の説明を行ってから、術式を行使する。

「穢土転生!」

白が叫ぶと同時に穢土転生の術式の模様が浮かび上がるが、それだけで、それ以上は何も起こらなかった。白は分かっていた結果だけに、特に落胆はしなかったが、他の者……特にヤマトは肩を落として落胆している。

しかし、自来也は何かを思いついたように、白に話し掛けた。

「もしや、その柱間様の形をしたのは、柱間様ではないということは考えられんか?」

「うーん。どうでしょう……。でも、他の人の身体の一部って言われても……。俺は一応持つてはいますが、今は違う人に穢土転生されるので無理なんですよね」

「それは何でもいいんかの?」

「ええ。どこでもいいですよ」

「それならいいもんがある。お守りと言ってミナトのやつから貰った物だ。あやつも同じような物を持つておつての、僕の一部を魂を込めて入れた、と言うとった。何やら縁起物らしい」

そう言うのと、自来也は懐からお守りを取り出して白へと手渡す。それを溜め息交じりに白は受け取ると、もう一度だけ同じことを自来也に説明した。

「ミナトさんって4代目ですよね? 屍鬼封尽で封印された人ですよ

ね? さつきも言いましたよね? 無駄だって」

「さつきのは本当に初代様のものかわからなかったからの。今度はミ

ナトの物で間違いない」

「はあ……これで最後ですよ。本当に……」

白は面倒臭そうに今一度同じ手順にて穢土転生を行う。前と同じように穢土転生の模様が浮かび上がり、白ゼツに塵が集まり始めた。

そして次第に人型へと姿を変えていく。

周囲はそれを唾然とした表情で見つめていた。

蝦蟇仙人夫妻については本当にできるとは思っていないかったのだろう。

自来也については、大蛇丸なら術を完成させていてもおかしくないで、白の術式に問題があるのではなく、説明の内容……封印されているから無理だろうと思っていたところへこの変化が起こったために。

ヤマトは、ただただ信じられずにその光景を見ていた。

小南も目を見開きその現象を見つめている。

白自身も成功するとは微塵も思っていなかったで、その光景をその場のメンバーと同じように見つめていた。術の制御を忘れて……。

「ナルト！」

その人物は周囲を見渡してナルトを探しているようだった。そしていないと分かると、もう一度周囲を見て、見覚えのある人物へと詰め寄る。

「ナルトはどこだつてばね!？」

自来也は胸ぐらを掴まれて持ち上げられると、慌てたようにして胸ぐらを掴んできた相手に言い聞かせる。

「クシナ落ち着け! ここにナルトはおらん!」

「じゃあ……どこに……?」

穢土転生で蘇ったのはナルトの母親……クシナだったのである。クシナは不安そうな顔をしながら自来也を見つめていた。それを当惑した表情で自来也も見つめている。

周囲はそれについていけずに見守るばかりだ。

「ナルトは元気にしとる。尾獣チャクラをコントロールするため、今は雲隠れの里「雲隠れ!」 あっ!?! これ! 待たんか!!」

クシナは何も言わずに迅速な動きで何処かへと走り去ってしまった。それを黙って見送っていたうちの1人である小南が、自来也に訊ねる。

この中で一番冷静なのは彼女だけだったのかもしれない。あの蝦蟇仙人夫妻でさえ呆気にとられていたのだから。

「結局あの人は誰？」

「ミナト……木の葉の里の4代目火影の嫁なんじゃが……相変わらずじゃのお……」

深々と溜め息を漏らす自来也に、小南は不思議がり、ヤマトは驚愕の表情に変わっていた。白はやつと呆然とした状態から復帰して、何も見なかったと言わんばかりに巻物を懐に片付けていった。

「さて、ここには何も無いようですし、帰りましょう」

白の言った言葉は見事に無視され、自来也は両肩に乗った蝦蟇仙人と相談を始める。自来也たちも先ほどの光景を見なかったことにしたようだ。

「自来也ちゃん敵の拠点はここで間違いないんか？」

「ここのはずなのですが、尾獣のチャクラを感じないことから、ここは放棄されたのでしょうか」

「それなら、ナルトちゃんのところに行った方がよくありませんか？」

話し合いをしている最中にその声は聞こえて来た。

「ここどこだってばねー!!」

その後すぐにクシナが戻ってくると、矢継ぎ早に自来也に訊ねてきた。

「この中に感知タイプの子はいる!？」

その瞬間。その場の皆の視線が白へと集中する。まるで示し合せたかのような連携だった。

(ああ……今なら白ゼツの気持ちがよく分かる……)

白が現実逃避をしていると、クシナは白の手を掴み取り逃がさないとはかりに、その場から連れ出していった。

他の者たちは白が連れ出されていくのを黙って見送っている。奇襲作戦が失敗した以上、潜入部隊に意味はなく、逆にクシナの相手を

してもらおうと考えたためだった。この時その場にいた皆の気持ちが1つになる。

その後、どうするかを残ったメンバーで検討していくのだった。

連れ出された白は、雲隠れに向けてひた走るクシナに手を捕まれて、同じように横を走っていた。

「取り敢えず一緒にいきますから離してもらえませんか？ ナルトに会いたいのは十分に分かりましたから」

「本当に？」

「ええ」

クシナは少し疑いながらも掴んだ手を離す。白はやつと解放されたと、安堵しながらクシナへと問いかけた。

「ナルトに会ってどうするんです？ と言うか今の状況分かってますか？」

「どういうこと？」

そこで初めてクシナは立ち止まると白へと説明を求めてきた。それに対して、白は忍界大戦のことや、無限月読計画について説明していく。

大人しく聞いていたクシナは説明が終わってからしばらく考え込む。しかし、それも少しのことだった。

「つまり、この大戦はナルトを守るためのものってこと？」

「そういうことです。今は大量の影分身を各戦場に送り込んでみるみたいですね。ここから一番近いのは……このまま走っていくと、早くても1日はかかります」

「んーもつと早くならない？」

「まあ……やれないことはないと思いますけど、試したことが無いんで何とも」

「やれるならやってみるってばね！」

それくらいのガッツを見せろと言わんばかりに、クシナは拳を握りしめて白に言った。白は諦めたようにして、クシナを抱えると移動を開始する。

やはりと言うべきか、クシナの身体は耐え切れずに、身体のうちがちがボロボロと崩れ始めた。

「ぎゃあああああ!!」

「静かにしてください」

喚くクシナを余所に魔鏡氷晶を繰り返して移動していく。そして、目的の場所付近に着いた時には、クシナの身体は頭と胴体を残してほとんどもが無くなっていたが、次第に周辺の塵を集めて元の形へと戻っていく。

「これは一体どういうことだつてばね?」

「これは穢土転生っていう術なんですよ。死んだ人を蘇らせる術ですね。まあ身体は塵なんですけど」

「穢土転生……?」

「それよりも、たぶんここからは危険なんで1人で行ってください。今はナルトの影分身が雷影と戦ってるみたいなんで」

「……? 忍び連合は五影たちが作ったのよね? それなのになぜ雷影と戦ってるの?」

「ああ……。敵と言うか相手も穢土転生を使ってるんですよ。それで死んだ雷影と戦ってるんです」

未だに不思議がつているクシナに簡単にではあるが、穢土転生について説明を行う。魂の呪縛を解いて自ら滅ぶか、封印するしか手が無いことを。そして連合軍は封印して回っていることなどを伝えると……。

「封印なら任せて!」

「うずまき一族ですもんね」

「そりゃね! じゃあそろそろ行きましようか」

クシナはやる気を漲らせてチャクラを高めていく。そのチャクラは辺りの空間を埋め尽くすほどだった。

「だから、俺は行きませんって、案内だけのつもりでここまで来たんですよ（相手の能力未知数の相手となんて危険すぎる……）」

「男がグダグダと言わない! 行くつてばね!」

クシナはいつの間に出したのか、チャクラの鎖を白に巻きつけると

戦場に向けて走り出す。その走る姿はとても嬉しそうに見える。

実際会えるのが嬉しくて堪らないのだろう。白への鎖の締め付け具合が、戦場に近付くにつれて段々と上がっていく。

さすがにこのままではまずいと感じた白はクシナへと意見する。

「ちよつと、このままだとやばいんで、この鎖を緩めてください。一緒にいきますから」

「あなたさっきの移動で緩めた隙に逃げるつもりでしょう？ そうはいかないわよ」

クシナは緩めることなく逆に鎖の量を増やしてきた。それに諦めたようにして連れ去られる。そこで、本部の感知結界に気付かれたことが分かった。

白は動けないのをいいことに集中していく。

クシナたちが戦場に到着した時には、雷影が大きな壁を破壊しているところだった。

クシナはそんな雷影の後ろから迫ると、雷影を包むようにして鎖の結界を張る。雷影はその鎖の結界から出ようとしますが、全く出れないことが分かると、結界を張った者を睨み付ける。

そして、雷影はその結界を張った者へと素早く近付き拳を突出して身体を破壊するが、その身体がすぐに戻っていく様を見て驚愕した。

「なぜ穢土転生体がこんなところに居る？ お前は一体……」

「そんなことはどうでもいいってばね！」

鎖で出来た結界は徐々に小さくなって行き、最終的には雷影をその鎖で捕らえてしまう。そこで、他にも鎖で掴まえている者を見て納得した。

「なるほどね……。君がいたとは今の今まで忘れていたよ。全て処分しなかったのは迂闊だったね」

「言つときますけど、俺は今回の大戦には参加するつもりないんですよ」

「今の現状を見てそんなことが信じられると思ってるのかい？」

「ですよね……」

「まあいい。君の存在を忘れていた僕がいけなかったんだ。それを考

慮して戦略を組み直そう」

「忘れてください。全力で」

白の考えなどお構いなしに雷影の中のカブトが言うと、その瞳は通常の穢土転生体のものへと変わっていく。白はガツクリと項垂れていると、それまで静かだった戦場が勝利の雄たけびで一気に沸き立った。

そこへナルトの影分身が近付いてくる。

「なんでかーちゃんがこんなところにいるんだってばよ!？」

「ナルト!!」

クシナの意識がナルトへ向いた一瞬を見計らい、ほんの少しの間だけ仙人モードになり白はクシナの鎖から脱出してから、封印班に向けて雷影を封印するように指示を出す。

しかし、白の言葉を聞く者はほとんどいなかった。いきなり現れた上に、忍びの額当てもしていないのであるが、それ以上に周りの声が煩すぎて声が届かなかったのである。

前線の方にまで来ていたテマリが気付いたことによつて、雷影を封印することができたが、白はカブトに敵認定されてしまったことにショックを隠せなかった。

107 マダラ?

ナルトが感動の再会を果たしている中、白は憂鬱な気持ちで現実逃避をしていた。

「お前大丈夫か？」

「……………」

テマリからの声掛けにも反応せず、白は本部の状況を見ていたのである。どこにいれば一番安全なのかを確かめるために。ここからの知識が無いために、白は本部に行つて感知班として頑張るのか、それとも医療部隊に居た方がいいのか迷っていた。

しかし、戦場に安全な場所など無く、あるとすれば、雷影がいなくなつたこの場が、今のところマシだと言えるだろう。

その後、水影の方も封印されたということで、忍び連合の第4軍は1箇所に集まることになつた。

負傷者は後方に運ぶ余裕もほとんどなく、その場で手当てをしていく。

動けるものは、戦場に散らばつた忍具の回収や、他の部隊への増援に向かうべく、隊を分けたりとしていた。

白も本部を通して全体的に有利にことが運んでいることを知りホツとする。この様子ならば、後は尾獣とマダラをなんとかすれば良いと考えていたからだ。魔像がどこにあるのかが分からなかったが、マダラは尾獣チャクラを纏つた者たちを連れて、違う場に居ることが分かつている。

今度は制御するために、話している背後からクナイを頭に刺し込む。これにより、一瞬クシナの動きが止まるが、また元の状態に戻つた。

「あつ。紹介するね。こつちの子が今回私を穢土転生してくれた子。名前は……………なんだったばね？」

「白ですよ……………」

「ああっ!? お前白だつてばよ! なんであの時」

しかし、ナルトの言葉もそこまでだった。急に現れた巨大なチャク

ラを感じ取ったからだ。

白は、ここが安全な場所であるという考えが間違いだったことを悟る。そのチャクラは余りにも馬鹿げた大ききさだったからだ。

感知タイプの忍びは他にもいたのだろう。一斉にそのチャクラの方を向く。その周りの忍びも異変に気づいたのか、同じ方向を向いていく。

そこには、穢土転生体が2体、石柱の上に佇んでいた。1体は無であることは分かったが、もう1体に見覚えがない。その見覚えのない方が膨大なチャクラを宿していた。

その人物の正体は、土影の言葉で誰なのかが判明する。

「うちは……マダラ……」

「えっ？」

その名前を聞いて白は、混乱していた。

(あの面がうちはマダラじゃなかったのか……。じゃあ裏で操っていたのは誰だ?)

白の混乱など気になどせず、うちはマダラと無は会話をしている。それは連合側も話し合っていた。しかしそれは話し合いと言うよりも白と一緒に混乱していたと言った方がいいだろう。

その混乱から脱したのは風影である我愛羅だった。我愛羅は、砂を操り死角から攻撃するが、容易く避けられてしまう。

それを切っ掛けにうちはマダラが連合軍に対して攻撃を開始した。

その動きは素早く、次々と忍びたちは殺られていく。封印しようにも速すぎて簡単に逃れられてしまうことから、クシナも手が出せずにいた。

その中で辛うじて攻撃らしい攻撃を出来たのは、五影とナルトだけだった。

白と言えば、嫌々ながらも無の監視をしていた。塵遁を使われるといやなので離れていたのだが、土影の言葉で嫌々なのが嬉しい表情へと変わる。

「分裂体では塵遁はつかえんぜ！」

無が塵遁の恰好を取るが、塵遁が発動しなかったのである。それを

見て白は安心して監視をしていた。その安心も頭に陰が差したことで怪訝に思い、上を見た時に焦り出す。

白たち連合軍の上部には巨大な、惑星かとも思える大きな岩が落下してきていた。

白は無の監視を一旦取りやめて、急ぎ移動を開始する。地上では混乱が増していたので、敢えて上空へと移動していった。その落下してきている岩を超えたところで、その更にも上から岩が落ちてきているのを見つめる。

(一体何個落ちてきてるんだ……?)

結局落下個数は2個であった。1個目は途中から土影によりゆっくりとした落下へと変わっていき、その間に、巨大な岩の下にいた忍びたちは、蜘蛛の子を散らすように、急ぎ落下地点から離れていく。そこに我愛羅の砂が合わさるが、2個目の巨大な岩の落下を受け止めきれることができずに、2個目のその勢いのままに落下した。落下した瞬間、地震が起き、土煙が辺り一帯を覆い尽くす。

土煙が晴れたそこには、落下した岩が飛び散り、ほとんどの忍びたちがその下敷きになったのが分かる。

その中でゆっくりと元に戻る存在が3体いた。

マダラ。無。クシナである。

クシナはマダラに近付くと、封印の鎖で縛りあげた。それをマダラは冷めた目で見つめる。

「油断したわね。このまま封印させてもらおうわ」

「その髪は……ミトの子孫か……。こいつも穢土転生のようだがお前がやったのか？」

「いえ。それは僕の弟子がやったものです。今は敵同士ですので気にしなくても構いません」

「そうか……」

マダラは鎖など気にもせずに、無の中のカブトと話を進める。カブトもマダラが慌てない様子から、特に動くことなく隣で悠長に話をしていた。

クシナはチャクラの量を増やして、鎖を強固にしていくが、マダラ

の表情が変わることはなく、その場から動くこともない。逆にクシナの表情から焦りが見え始めた。

「これでも無理だなんて……」

「この程度で俺を縛れると思うな」

その瞬間。チャクラが高まっていき、鎖が引きちぎられた。それをクシナは呆然と見ている。

ただ、この瞬間を狙っていた者もいた。

（八卦封印式！）

仙人モードになった上で、クシナを操り、封印術を使用したのである。

クシナの身体から一瞬にして、辺りの空間を根こそぎ削り取る形で、黒い光が広がる。

そのようなことを想定していなかったのだろう。マダラと無は、黒い光に包まれてしまった。

その黒い光が消えた後には、身体中に幾何学的な模様を身体に刻まれたクシナが倒れていた。白は素早くクシナへと近付き、封印札を更にその身体へと貼っていく。しかし、それもすぐ塵が集まり修復していった。その上に更に封印札を重ね掛けする。

そして、仙人モードを解いたところへ、雷影と綱手姫が到着した。

「マダラはどこだ！」

雷影は周囲を見渡して叫び、火影は額の封印を解いて、忍法創造再生を使用する。それに遅れるようにして水影も到着した。

「準備はできたぞ。土影と風影は私が見る」

綱手は、土影へと近付いて癒していく。その間に五影のうち、後で来た3人は辺りを注意深く確認していた。

そこへ、我愛羅が言いにくそうに白たちの方を見る。白は、微妙な顔をしてその3人を見ていた。

「あんなたちには悪いが、マダラ封印に成功したようだ」

「なに!？」

「どういうことか説明しろ」

「白？ あなたがやったの？」

五影からの睨み付けるような視線に耐えながら、白は説明している。

「つまり、あなたも穢土転生が使えるのね？」

「それよりも、マダラの驚異がなくなったのならば、もうひとりの黒幕の方にいくぞ！」

「雷影すこし待て！ 穢土転生の止め方を聞く方が先だ！」

簡単にだが、穢土転生の説明を行った上で、止め方を説明する。

「つまり、術者を見つけねば意味がないということか？」

「そういうことですね」

綱手は納得したのか頷くと、クシナの方へと視線を移した。クシナは目を開けてから立ち上がってからのというもの、腹のあたりを擦っている。ナルトは心配そうに声を掛けていた。

部隊を幾つかに分けて、カブト捜索に入るよう指示を出していく。特に、カンクロウの奇襲部隊が、一番敵のアジトに近いことから、本部との連絡をやり取りしていた。

そこへ白が言いにくそうに、綱手に伝える。

「えーつとですね。敵のアジトにはいませんでしたよ」

「どういうことだ？」

「敵のアジトからこちらへ来たので……もし、周辺を探すのならば、一番近いのはヤマトさんたちになると思います」

「たち……だと？」

不審な目で見つめる綱手に対して、白は思い付いたように、仕返しを敢行する。

「まず、捕らえられていたヤマトさんは助け出しました。アジトに潜入したメンバーですが、3人です。俺と、前に木の葉を襲った元暁メンバーの小南さん。それと、自来也先生です」

「自来也だと!? ……穢土転生体か？」

綱手は白の胸ぐらを掴み、説明を要求してきた。サクラのように、身体を締め付けはしてきてはいないが、服で首がしまっていていく。

綱手の手を叩き喋れないことを伝えると、しばらくして落ち着いたのか、手を離れた。

「詳しく説明してもらおうか」

綱手の剣幕は変わることなく白を睨み付ける。白は、自来也が生きていることと、生活の放蕩振りを若干脚色を付けて綱手に話すと、綱手の顔に青筋が立ち始める。

「そうか……あいつはそんなに楽しそうに暮らしていたのか……こちらのことを考えもせずに……」

その後、アジトの場所などを説明していく。元々アジトの場所は、大体の位置を把握していたのだろう。特になにも言われることなかった。

怒りの矛先が自来也にいったことに、白はホッと一息ついてから現状の把握をするため、影分身へと意識を向ける。現状で一番大変なところは、既にナルトのところと言ってもいいだろう。

白の説明を元にして、綱手は再度本部とのやり取りを開始する。

カブトが何処にいるか分からない以上、どうしようもない。

穢土転生で蘇った者たちの封印は、ほとんどが完了しているので、これ以上の危険はマダラと名を偽った者だけ、という認識を持った白は、後はナルトに任せようとその場に座り込む。

しかし、その認識は甘かった。

「みんな離れて！」

急にクシナが叫ぶと、クシナの身体が膨れ上がり、その次の瞬間。爆発してマダラと無が出てきたのである。

クシナが叫んだときには、みんな異変を感じ取り、即座にその場を離れていた。

「なかなかの封印術だったな……。破るのに苦労したぞ」

「おそらくは八卦の封印式でしょう」

「いい暇潰しにはなったな」

緊張感のない言葉をマダラは無と交わしている間に、五影は連合の忍びに指示を出して後退させる。相手が相手だけに連合の忍びでは敵わないと分かったのだろう。ここに至っては忍びたちの準備した封印すら意味が無いことが分かる。

ただ、少しの時間ではあったが、封印で時間が稼げたために五影の

回復が完了したことは、連合側にとっては良かったのかもしれない。(はい、戦略的撤退！あれが効かないんなら、俺の出る幕なしつと……)

白は五影が後退指示を出した瞬間に、一番早く後方、と言うよりも遙か彼方まで移動していた。

安全と思われる場所まで移動してから、周囲へと気安めだろうとも結界を張り巡らせ、クシナを通して状況を確認する。

そこには辺り一面を巨大な木が、横に幅広く拡がっていた。

前面には疲れた状態のナルトが、クシナに支えられている。一旦は木の進行を防いだのだろう、木は円形状に挟れて止まっていた。

そんな疲れた状態のナルトの前に五影が立ち並ぶ。

「ナルト。お前はこの場以外に集中しろ」

「だけどー！」

「ここは任せてもらおうか」

未だに言い淀むナルトを五影たちが、口々に説得していく。

もはや、ナルトがこの戦場にいる時点で、最初の計画は破綻しているのだ。それならば、ナルトを戦力としてみるのも当然だろう。

もうひとりのマダラを名乗る面の者の方が、穢土転生体であるマダラよりも、危険度が高いと言うのもあった。マダラの実力から言って、普通の忍びでは足手まといになってしまう。そのため、五影はその場に残ることにしたのだ。

穢土転生体のマダラを五影で足止めし、その間にカブトの穢土転生を連合の忍びで止める。そしてナルトが面の者を倒せば、全てに片がつくという計画だ。

「この戦争……勝つぞー！」

「ああ!! もちろんだっつてばよー! じゃあ、かあちゃん行ってくるー!」
「絶対に勝ってくるつてばねー！」

親指を上につき出すクシナにナルトは頷き、影分身を消すと、その場から去ってしまった。

連合軍は、他の戦場に向かったため、その場に残るのは、五影とクシナだけとなる。

全体としては3つに分かれていた。

マダラと五影。面の者とナルトにキラビー。カブト搜索。

マダラについては五影が対応して足止めを行い、その間にカブトを連合で搜索して術を止める。術の止め方は白から伝わっているの、後は術者を見つuckerだけだ。搜索は、最後にアングが消息を絶った場所を中心に探していくことになっており、その場へと連合の感知タイプを中心に向かっていた。

面の者については、キラビーとナルトが戦っており、そこへカブト搜索以外の連合軍が向かっていく。

(もうそろそろ、この大戦も終わりなのかな?)

白は、悠長に考えていたが、状況はそのようなことを許さなかった。すぐ傍を爆風が吹き荒れていく。結界は歪み、爆風が過ぎ去った後に元の形へ戻っていくが、強度がかなり落ちていることが分かった。後2発も同じことが続けば、結界もろとも吹き飛ばされるだろう。

それを感じ取った白は、一旦現在の場所の状況を把握するために上空へと移動して、安全な場所が近くにないことに気付いてしまう。

白がいた付近には、隕石が落ちてきたのかと思えるほどのクレーターがあり、それが遠く至るところに点々と出来上がっていた。まるで逃げ場など最初から無いと言わんばかりである。

(どこに行けばいいんだ……)

白は迷った末に考えを決めた。

それは、ナルトの近辺に居るといふものだ。それと言うのも、主人公が死ぬわけがないと言う考えであった。そしてナルトたちが戦っている場所へと向かう。辺りに出来たクレーターの原因がナルトたちだとも知らずに……。

白の考えは間違いだったことに気付いたのは、そのチャクラを感じ取ってからだ。人柱力のチャクラのはずが、完全な尾獣のチャクラへと変わっていたのである。

更に付け加えるならば、戦場となっている場所は更地と化してい

た。

キラビーは尾獣化して、ナルトと共に戦っている。

八尾と九尾なだけにはあり、他の尾獣たちと接戦に持ち込んでいたが、さすがに数の暴力には勝てず、徐々に押されてゆく。

(尾獣のチャクラを感じるけど大分サイズが小さいな……尾獣なら封じられるだろ……)

人柱力の形を残したそれらは、赤黒い身体を持ち、それぞれ尾の数が違っていた。

離れた位置からそれを見ていた白は、クシナを口寄せしようと、一旦マダラの方の戦況を見た。

マダラは遊んでいるのか、分身体を大量に出してはいるが、マダラよりも弱いのだろう、大半をクシナにより封じられていた。

それでも、その数体はスサノオを展開してクシナを真っ先に攻撃していく。封印が解けてしまえば、また縛り直すのに時間がかかる上に、今度は逆に各個撃破されかねない。

我愛羅と綱手が基本的にはクシナを守り、他の五影で撃破してはそれをクシナで縛るを繰り返していた。

マダラは、その光景を高みの見物とでもいうように、腕を組んで高所から見下ろしている。

(これ、クシナさん口寄せしたら大変なことになるな……完全に戦力に組み込まれてるし……)

白は、尾獣たちの封印を諦める。一体分だけならば、自分の身体に封じることが出来るが、後が続かないのである。しかも、封じた場合自分が人柱力になることを意味するため、カブトからだけではなく、面の者からも狙われることは間違いない。

能力がどこでも行けると言うことを知っているだけに、いつまでも逃げ切れないことも分かっていた。それ以前に人柱力になることが嫌なことが大きかったが。

途中で、尾獣たちの元へカカシやガイ、再不斬など、カカシの部隊で戦力になると思わしき忍びたちが到着する。

それでも、一方的な展開とまでは行かずに、互角になるくらいだっ

た。

面の者はその光景が気に入らなかつたのだろう。人柱力たちの尾獣の力を解放して尾獣本来の姿へと形を変える。それまで、人柱力サイズだった相手が巨大化したのだ。

ナルトが、やつと一匹を輪廻眼の呪縛から解放した時には、連合の忍びたちのほとんどがボロボロの状態になっていた。

しかし、ナルトが解放した尾獣は、面の者の口寄せした外道魔像の口から伸びた鎖に縛られて吸い込まれていく。

その後、一気に終わらせるつもりなのか、一旦他の尾獣たちを外道魔像の近くまで連れてくると、各尾獣たちが口元に大量のチャクラを蓄積し始めた。尾獣玉である。

（尾獣玉って結構でかいんだな……）

ナルトへ向けて放たれた尾獣玉は、九尾の巨大なチャクラを纏ったナルトの、同じく尾獣玉によって上空へと進路を変えられた。避けなかつたのは、ナルトの後方にいた連合軍の忍びたちがいるので、それらを守るために上へと弾いたのである。

尾獣玉同士が上空で大爆発をし、空全体から光が溢れた瞬間にナルトは動いた。

九尾の尾を使い、今出ている5体の尾獣を捕らえると、同じようにして輪廻眼の呪縛から解放する。

しかし、それも束の間。またしても、外道魔像の口から伸びた鎖でその5体も吸い込まれていく。尾獣たちも、抵抗はしているようだが、あまり意味のあるものではなかつた。1度吸い込まれているためだろう。その鎖は5体のチャクラを徐々に吸い取り始め、その力を削いでいく。

その抵抗はある瞬間を境に一気になくなった。ナルトのチャクラが増増したのである。それはまるで、他の尾獣たちのものが合わさつたようであった。

実際にチャクラを受け取つたのだろう。今までにないまでに高まっている。

その時、頭に語りかけてくる声があつた。その声は一方通行であ

り、戦場全てに居る忍びに伝えられる。

『本部より通達！ 増援場所の状況は優勢！ ナルトとビー殿、先に着いた者たちが踏ん張ってくれている！ 俺たちが護るべき者たちがだ!! 今はそんなことは言ってもらえない状況だが、強い思いを持って戦ってくれているのは間違いない！ みんなもその思いに続いてくれ！ その強い思いが……この戦争の勝利へと繋がる！』

ひと息に言い終えると、その後通信がパタリと止む。

本部の方では鼻から血を流しているイノイチがいた。かなり限界まで能力を酷使したのだろう。胡坐をかいた体勢で荒い息を上げながら、倒れないように床に手をつけていた。しばらくはその能力も制限されるだろう。ただ、イノイチは役目を終えたと言わんばかりに満足そうに口元に笑みを浮かべていた。

影分身である白は呆れながら、イノイチへと近付いていく。それに青が真っ先に気付いた。

「白!? なぜここに……? いや、戦場の方に気を取られ過ぎていたか……」

「まだ終わったわけではないですからね。イノイチさんの治療をしますよ」

「待て！ 動くな！」

青の制止を聞かずに、イノイチへと近付く白は、後数歩と言うところで歩みを止める。シカクによる影真似の術である。

「それ以上動かないでもらおうか。敵である可能性を否定できん以上、後から来た者は拘束させてもらう」

「仕方ないですね」

影分身はしばらく動かずにいたが、その眼の周りに隈取りが出来始める。そして、次の瞬間には影真似を強制的に断ちきっていた。

「なに!？」

驚くシカクを余所にイノイチへ近付くと、顔へ手を近付けて疲弊した経絡系を治療していく。その治療はすぐに終わり、手を離れたときにはイノイチは元の状態に近いところまで戻っていた。

白は仙人モードを解いて説明を行う。

「実力的にはこれで分かってもらえたと思います。やろうと思えば、ここにいる人たちは俺1人でも十分なんですよ。ちなみに俺は影分身なんで、そのところはよろしくお願いします」

「では……本体はどこにいる？」

「ナルトたちの近くにいますよ。隠遁を使ってるので、余程1人に集中して探さないと見つけるのは困難だと思いますけど」

「……………」

白の説明に、敵ではないと割り切ってシカクは元の状況整理に戻る。今となっては、各戦況の連絡を、円滑に行うために、この本部はあるに過ぎない。今更ここが全滅したとしても、多少の混乱や不安は高まるだろうが、各戦況にそれほど影響が出るとは思えなかったからだ。

「白。お前は何ができる？」

「ひと通りは……………」

「詳しく教えてもらおう……。しかし、こうも容易く侵入されるとはな……………」

シカクはそれから黙り込むと、瞑っていた目を見開き白へと顔を向けて訊ねはじめた。

五影たちの方は、分身体を全てクシナの鎖で封印したところだった。各五影は疲労はしているもの、特に目立った怪我はない。

「意外とやるものだな。もつと苦戦するかと思っただが……。上手く連携を取るものだ」

「次はお前だ！」

雷影が叫び、マダラへと接近する。雷影の背には土影が張り付き、雷影の放つ攻撃を一瞬だけだが重くすることで威力を上げていた。

前から行くと思せ掛けて、背後に回り込み突きを放つ。それを分かっていたかのように、反対側から照美が溶遁を使い挟み撃ちにする。

マダラはそれに反応して避けることにより、共倒れを狙ったが、避

けたところで、地面の砂に捕まり、スサノオから引き剥がされて元の位置に戻されてしまった。

ボロボロになった状態であれば封印できるだろうと、クシナも封印の準備をしていた。

マダラはスサノオを諦めると、左手を溶遁に。右手を雷影たちへ向ける。そして、当たると思われた溶遁を吸い取り雷影たちを弾き飛ばす。

その後足元の砂のチャクラを吸いとった。

「輪廻眼か!？」

悔しそうにして一旦雷影は離れると、他の五影と合流する。

「さすがに五影というだけはあるな……。しかし、そろそろ飽きてきた。……よからう、俺の本気を見せてやる」

マダラはスサノオを展開すると、自分のチャクラを更に高め始める。スサノオは、そのチャクラに呼応するかのように形を変え始めた。

そして、最終的に天狗へとその姿を変える。

そのあまりの大きさに、五影は見上げたまま立ち止まってしまふ。それもすぐに意識を戻したが、攻撃をしあぐねていた。

明らかに以前と姿形だけではなく、チャクラの質まで違ったからだ。五影たちは、一度サスケとのやり合った経験から、今までのスサノオよりも遥かに強いことを感じ取ってしまう。

マダラは感触を確かめるように、剣をひと振り造り出すと、それを無造作に振るう。

その剣からは何かが飛んでいき、剣を振った線上にあるものを斬り裂いていった。

その光景を見て五影は絶句する。

斬り裂いたものというのが山だったために。

「なぜじゃ……。なぜそのような力を持っていながらあの時……」

「赤子相手に本気になるやつはいないだろう?」

土影の言葉の眩きにマダラは答える。やっと、お前たちは赤子から抜け出したと言わんばかりだった。

クシナはその鎖で足を絡め取り動きを制限しようとするが、全く効果はない。

そこからは、マダラによる一方的な攻撃が開始された。

雷影はマダラの攻撃を避けつつも攻撃をするが、効果はない。他の者に至っては、避けることで精一杯の状況だった。

避けきれないと判断したものは、土や砂で作ったゴーレムにて時間を稼ぎ、その間に剣の線上から逃れる。避けきれずに負傷した者はすぐに綱手が回復すると共に、チャクラも供給していった。

マダラは無表情に剣を振り回す。それはただの消耗戦だった。五影たちが力尽きるのを待つだけという……。

しかし、長く続いたその戦闘も破綻を迎える。マダラの崩壊と共に。

それはいきなりだった。スサノオが振り回していた剣が消え、スサノオ自体も幻だったかのように消えていく。まるで何もそこには無かったかのように。

それに驚いたのはマダラだったが、それよりも驚いていたのは五影たちの方だった。

マダラからは、淡い光が漏れ出し上空へと昇っていく。それと共に身体の塵が剥がれていっていた。

「穢土転生の術が解除されたようだな」

「どの忍びか分からんがやってくれたようだな」

マダラは自分の両手の塵がゆっくりと舞い上がっていくのを見ながら呟く。その呟きを聞いて、五影たちの表情は歓喜のものへと変わっていった。

誰かが穢土転生の術を解いたのは間違いないだろう。その淡い光の柱はあらゆる戦場から立ち昇っていた。

しかし、ここで油断していたのだろう。この崩壊の時にクシナが封印しておけば良かったのだろうか、それを見送ってしまう。

「術者に言っておけ！ 禁術を不用意に使うとな！」

マダラが印を組むと、飛び散っていたはずの塵はまた元に戻っていき、マダラの形を留める。それに気付いたクシナが慌てたように鎖を

飛ばすが間に合わずに避けられてしまった。

「厄介なのはお前だけのようだが、術者は近くにいないようだな……。俺を穢土転生したやつといい、陰険な奴が多いようだ」

「くっ！」

クシナは鎖が避けられたことを悔しがる。マダラのスサノオが解けたとは言え、五影たちのチャクラは尽きかけていた。この中で今まともに動けるのはクシナだけだろう。そんな自分の油断が招いたことにクシナは悔いる。

「さて、どうするべきか……」

マダラが考えている最中、一筋の光が綱手へと降り注ぐ。それにより、綱手は光に包まれていくと、チャクラが見る見るうちに回復していった。そしてチャクラが回復し終わると、すぐに他の者のチャクラの回復にまわる。

マダラはそのようなことなど気にも留めずに、不意打ちだけを喰らわぬようにしながら考えをまとめていた。

「そろそろ、九尾を取りに行ってもいいな……」

「ナルトの元へは行かせない！」

かなりの広範囲を包むようにして鎖の封印をクシナが展開する。1度破られているので、時間稼ぎにしかならないことを承知の上だった。それをマダラは冷めた目で見つめてひと言呟く。

「無駄だな……」

穢土転生が解けたことは白にも分かった。本部への情報が各戦場から入ってきたからだ。

クシナの方へ意識を一瞬向けて状況を確認する。そこでは丁度マダラが他と同じように散っていくのを見てとれた。

（誰かが穢土転生を解いた！ これで使えるー！）

白は、すぐさま仙人モードのために目を閉じ力を溜めていく。そして仙人モードになってから、一番近くにいるチャクラを持つ者へと近付いていった。

それらは、後方から連合軍を襲おうとしていた白ゼツたちだった。そのチャクラの量は微々たるものに抑えられ、奇襲をしかけようとしているのがよくわかる。

白はついでとばかりに、白ゼツたちを始末することに決めた。仙人モードにはそう長い時間なっていることはできないが、その分術の威力は桁違いに上がっている。敵1体を水龍鞭で絡め取り、他の敵には逃げられないように氷牢の術で囲む。

そして、仙人モード時に使える氷遁系の最大の術を放つ。

——仙法氷遁・雪月花——

氷牢の術の内部のあらゆる物を凍らせていく。それは空気中に漂う塵や埃も凍らせていった。それが地面へと雪のように降り注ぎ、凍った地面に積もっていく。それは結晶となり見た目は花のようだった。その花は成長していくと、逆に蕾になる。そして、一定の大ききになると、一気に破裂して周囲へと千本を飛ばしていった。

蕾の近くにいた白ゼツたちに避けるすべはなく、その攻撃を喰らう。その千本は地面に落ちるとまた花の結晶となり蕾へと変わっていく。それは中の白ゼツたちが全て息絶えるまで続けられた。その氷牢は上空から見れば、月のように丸くなって見えただろう。

白ゼツの処理を終えた白は仙人モードを解いた。それと同じくして氷牢の術も解けて、バラバラになった白ゼツたちが現れる。

捕まえておいた1体を髪縛りの術で縛り、懐から巻物を取り出して

術を行使する。

「穢土転生！」

穢土転生の術が発動し、白ゼツを生贄に周辺の塵が集まっていった。

「またか……。穢土転生は止めたはずだ……。それにイザナミを使ったはずの右目が見えるだと……？」

「失礼しますよ」

穢土転生されたイタチの頭に、操るためのクナイを保険で入れておく。ないとは思うが、クシナの時のように暴走されてはかなわないからだ。

イタチは自分の身に、最初何が起こったのか分からずにいたが、白を見て何か思い出したのか話し出す。

「そうか……。あの薬を作ってもらった時か」

「その通りです。それにしても……。止めたのはイタチさんだったんですね」

波の国にイタチが訪れていた時に、白は、イタチを診察するに際して、イタチが吐血した時の血を回収していたのである。

その後、サスケとの決闘で死ぬことが分かっていたので、穢土転生を行うために、手に入れていたのである。しかし、死んでいないのか、それとも既に穢土転生されたのか、術は成功しなかったので、そのまま持つ形となった。

「しかし、今更俺に何の用だ？ 穢土転生を止めた以上、残るのはうちはマダラだけのはずだ」

「それが、ちよつと状況が変わりました」

「どういうことだ？」

「それよりも、少し離れましょう」

イタチと共に陰遁でその場から離れる。先程の氷遁のせいだろう。連合の忍びと思わしき者たちが近付いてきていた。

ある程度離れたところで、状況を伝えるために本部へと連絡を取ったところで、白は驚かされる。

「最悪だ……」

「どうした？」

頭を抱える白にイタチが訊ねる。白は肩を落としてイタチに状況を説明していった。

それは、面の者がマダラではないこと、マダラが穢土転生から解放されて、既に不死者となつてしまったことに続いて、各戦場の状況なども説明していく。

「白は、どこまでの術が使える？」

白は自分の情報を伝えた。イタチから情報が漏れることがないこともそうだが、さつさとこの大戦を終わらせるため、という理由の方が大きいだろう。

「六道仙人の道具に、九尾の力を持った者を閉じ込めたといったな？」
「ええ。それがどうしたんですか？　もう奪われて手元がないですよ」

「それにマダラを封じればいい」

「ですから、手元がないんですって！」

白はイタチに、何度言えばわかるんだと、少し強めに言うが、イタチは慌てることなく諭すように言い返す。

「それならば、奪い返せばいい。おそらく、それを奪ったのは、九尾が手に入らなかつた時のための予備だ。白の話が本当であれば、残るは八尾と九尾だけだが……、既に八尾はその一部を外道魔像に取り込んでいる。後は九尾さえ手に入れば、十尾を復活させることは可能ということだろう」

「でもですよ、既に外道魔像に取り込まれてる可能性が……」

「その可能性は低いな……。暁にいる時に、簡単な説明を受けたが、九尾は最後に吸収させなければならぬ。一番強いのもそうだが、そうしなければ、十尾をコントロールすることが難しくなるそうさ。つまり、九尾の一部だけでは、コントロールが効きにくい可能性が高い」
「じゃあ、それを吸収する前に奪取してしまえば……」

「十尾復活の妨げはできるし、マダラを封じることでもできる」

自信満々に言い切るイタチに、白はある疑問が浮かぶ。

「でも、その道具を使いますかね？　今九尾化したナルトと戦つてま

すが……」

白は、ナルトたちへと指を指す。

「戦っているのがいい証拠だ。まだ、諦めきれていないのだろう。後は白が吸収される前に奪えばいい」

「簡単に言ってくれますね……」

「サポートはしてやるから行くぞ。早く終わらせたいのだろうか？」

「ええ。ではお願いします」

白は、イタチと共にナルトたちの元へと走っていく。

しかし、時は遅く白たちが着いた時には、既に外道魔像へと取り込まれたところだった。外道魔像は、頭を抱えて苦しみます。

「……………」

「取り込まれたな」

イタチは冷静に状況を口に出す。外道魔像は瓢箪と壺を口に放り込んでからというもの、苦しみ続けている。

呆然と見つめる白とは別に、イタチはこの場での状況を分析し終わったのか、白へと話しかけてきた。

「マダラも輪廻眼で間違いないな？」

「……………え？ ……ええ」

「今の状況は分かるか？」

「普通のスサノオを出した状態でマダラは止まっていますね。クシナさんの鎖でその場から動けないようです。まあ、動かないだけかもしれません……」

更にマダラの方の状況を聞いたイタチは頷くと、白へ作戦を説明をしていく。

「と言うわけだ。理解できたか？」

「確かにできないことはないですけど……」

言い淀む白を説得するようにイタチは話す。

「これで戦争も終わりだ。そうなれば、今までのような諍いも少なくなっているだろう。俺のようなやつが居なくとも安全だ」

「その間、俺って結構無防備になるんですが……？」

「早く終わらせたいのだろうか？ それに心配ならば影分身を置いてお

けばいい」

この言葉が決め手となり、イタチの作戦に白は乗ることにした。そのため一旦イタチを棺の中へと戻してから、影分身を使い、その後にくシナへと意識を繋げる。

マダラと五影たちとの戦いは、結局時間稼ぎにしかなっていなかった。

それでも、マダラ相手に時間を稼げるだけでもその実力は高いと言えるだろう。

白はくシナを操り、イタチをマダラのいる戦場へと口寄せする。五影やマダラはそれを黙って見ていた。五影はいきなりの事態にただ呆然と。マダラは興味があるのか、何が口寄せされるのかを見ていた。

そして出てきたイタチを見て五影たちが騒ぎ出す。

「うちはイタチだと!？」

「ナルトの話では、カブトの穢土転生体ではなかったか？」

「くシナさんが口寄せしたということは、これも白の仕業なのかしら？」

イタチはそんな五影たちなど気にもせずスサノオを展開する。

「俺が奴を倒すまでの間、あんたたちは、マダラと俺を離れた位置から囲んでくれ」

「なんだと!？ 貴様、誰に向かって「雷影!!」なんだ!？」

「イタチ……。やれるのだな?」

「ああ」

「分かった」

綱手の言葉に対して端的に返事を返すと、イタチのスサノオは更に姿を変えていく。それを見て五影たちはマダラを囲むような形でそれぞれ走って行った。自分たちでは時間稼ぎしか出来ないことが分かったのもあるが、スサノオにはスサノオを……穢土転生体には穢土転生体をぶつけるのが一番いいと判断したためだ。

「それは……貴様もうちはか……スサノオまで出せるとはな」

白はくシナを操り、鎖をマダラから解くと、五影の方へと伸ばして

いく。

それを許すマダラではなかったが、行く手をイタチに防がれていた。

マダラは仕方ないとばかりにイタチへと剣を振るうが、八咫の鏡に防がれて、逆に弾き返される。これにはさすがのマダラも驚いていた。自分の攻撃が初めて防がれた上に、自分へと弾き返されたのだから当然だろう。

イタチは牽制とばかりに、勾玉を飛ばすが、マダラに当たるものの、ほとんど効果が無かった。

「それは八咫の鏡か……。攻撃は弱いが、防御に徹すれば面倒だな……」

「俺も穢土転生体。十尾を倒すまでの時間稼ぎをさせてもらう」

「確かに、そこにいる五影よりも厄介ではあるが……」

マダラとイタチが話している間に、五影がマダラとイタチを囲むように移動し終えたところで、それぞれを鎖が繋ぎ終わる。

「五行陽陣！」

クシナが叫ぶと、五影を人柱にして光が真っ直ぐに立ち昇り、それを埋めるようにして光の壁が出来上がる。それぞれが火、風、雷、土、水の光の柱を上げていたが、柱同士を壁が繋いだ時に色は変わり、柱も壁も白一色となる。それは夕焼けに包まれ始めたその場を、昼間のような明るさへと戻すほどだった。

その囲いが出来たのを見たイタチは、八咫の鏡を前面に出して、完全に防御の形を取った。

「なるほど。確かに時間稼ぎにはうってつけだ。これでは出るに出来ないな……。しかし、穢土転生体である貴様やミトの一族ならともかく、今の五影たちのチャクラがいつまで保つかな？」

「俺は俺の役割を果たすだけだ」

「ふん。まあいい。そこまで言うならば遊んでやろう」

マダラは八咫の鏡に注意を払いながらイタチへと攻撃を放つが、それを悉く躲かされてしまう。八咫の鏡の大きさが、スサノオの半分を覆うほどの大きさなのもあるが、マダラがスサノオの完全体を出さない

のが大きいだろう。五行陽陣のせいで出せないと言った方が正しいかもしれないが。

しばらく、スサノオ同士の闘いは決着が付かずにいた。マダラは、五影たちのチャクラが切れるまでの遊びだと割り切り、八咫の鏡をどうすれば潜り抜けられるかを試していた。イタチの方はそれをさせまいと、勾玉で牽制しながら防いでいく。

五影たちのチャクラが段々と弱弱しくなっていくなかで、マダラは勝ち誇ったようにイタチへと話し掛ける。

「そろそろ終わりのようだな。この結界が解け次第行かせてもらおうぞ」

「ああ。そろそろのようだな」

イタチは勾玉を放ち八咫の鏡で隠れるを繰り返す。怪訝な表情をするマダラは、それでも遊び感覚でイタチへと攻撃していった。

そして、勾玉を放ち続けた結果、マダラのスサノオの一部に亀裂が入る。そこは、マダラ自身が一番始めに自分の攻撃を反射されて受けた場所だった。イタチは同じところを執拗に勾玉で攻撃していったのである。

「弱い攻撃でも数を受ければ、ひびくくらいは入るか……」

ここで、イタチはスサノオの両手に勾玉を出すと、マダラへ向けて突撃した。

「ひびを入れたくらいでいい気になるな」

ひびが入ったスサノオを修復するには、一旦スサノオを解いてから再構築せねばならない。それを知ってか、イタチはひびの入った箇所へと、勾玉の連続攻撃を叩きつけるつもりだと考えたマダラは、逆に攻撃を仕掛けてやろうと構える。

穢土転生体であるので、勾玉の連続攻撃を喰らっても修復できるが、それ以前に勾玉の連続攻撃を受ける前に、イタチへと攻撃を当てれば、勾玉の連続攻撃を喰らうことも無く、マダラ自身も傷つけられることはないと考えたからだ。

しかし、マダラのその考えが仇となる。

イタチは勾玉を投げつけて、更にひびを大きくして次を放とうとす

るが、その前にマダラの攻撃がイタチへと当たる。

マダラはにやりと笑い、同じくしてイタチも笑う。

次の瞬間マダラは驚愕の表情へと変わった。

「これは……十拳剣だ?!」

マダラのひびの入ったスサノオを突き破り、イタチの持つ十拳剣はマダラへと刺さっていた。

マダラは逃れようとするが、スサノオごと一気に十拳剣に吸い込まれていってしまう。それを確認した白は、五行陽陣を解除した。

白の操るクシナにより、限界までチャクラを絞り出された五影たちは、その場で力尽き倒れている。それをイタチと共に回収してから白はイタチへと話し掛けた。

「取り敢えず、なんとかなつたみたいですが、こつちはちよつと凄いとになってます」

「何があつた?」

「本部が十尾の放った攻撃で吹き飛びました。それに加えて、十尾に向かつて行った連合軍も、大半が十尾の攻撃を受けて壊滅状態まで追い込まれています」

「そうか……では口寄せするぞ」

「ええ。お願いします」

白はイタチの口寄せにより、五影たちの元へたどり着くと、真つ先に綱手のチャクラを回復させた。

それでも、疲労が激しいのだろう。こちらを見るばかりで、話す余裕はない。白は薬を各五影へと配っていった。

そして、少し回復させたところへ自来也たちが現れる。かなりの速度で走ってきたのだろう、その顔には汗が滲んでいた。

自来也は仙人モードを解いており、小南は身体の半分が紙の状態になっていた。ヤマトは白たちと合流すると同時に倒れてしまう。

「今度はうちはイタチか……」

「自来也先生なぜここが？」

「あれだけでかい封印術を見せられれば嫌でも場所は分かる。後は小南に上空から探してもらっただけだの」

自来也の言葉に反応した者が1人いた。その者は、今まで疲れて倒れていたとは思えない速度で自来也に掴みかかる。

「自来也！ 貴様と言うやつは!!」

「うっ……。すまんがそうだったことは終わってからに……」

「何が終わってからだ！ ちょっと歯を食いしばれ！」

自来也が綱手に殴られるのを横手に見ながら、綱手の代わりに、カツユと共に五影たちを回復させていく。

誰も綱手の行いを止めるものはいなかった。それでも、今が戦時だということ、数発で済んだのはまだよかったかもしれない。自来也の顔は仙人モード時のように腫れ上がっていたが……。

綱手が、ひと通り殴り終わって落ち着いたときに、数人で近付いて来た者たちがいた。

「久しぶりね。あなたたち。……自来也生きてたの？」

挨拶をしてきたのは大蛇丸だった。他にも水月と香燐が、その後が続くようにして近付いてくる。

大蛇丸は、自来也が穢土転生とでも思ったのだろう。目を見てしばらく驚いていたが、顔を見て笑みを浮かべると香燐に指示を出す。

「香燐、綱手の回復をしてあげなさい」

「なんのつもりだ？」

綱手は大蛇丸の言動に困惑を隠せなかった。死んだと思われた大蛇丸が、いきなり現れたこともそうだが、回復するとまで言ってきたのだ。木の葉を一度潰そうとしただけに、すぐに信用することができなかった。

「私も色々と考えが変わったのよ。自分で風を起こすのもよかったけど、今は他人の起こす風に乗るのが楽しくてね」

「……………」

綱手と自来也は大蛇丸を見て、2人は顔を見合わせて頷くと大蛇丸の提案を受け入れる。

「いや、私よりもこっちの白を回復させてくれ」

「白？」

大蛇丸は綱手の申し出に疑問を浮かべる。今更普通の忍びを回復したところで、戦争の役に立つとは思えなかったからだ。

「えーっと。初めまして…………？」

「……………」

こっそりと距離をとっていた白へと矛先が向く。大蛇丸は白を上から下までじっくりと見つめた。そこへ大蛇丸の後ろから声が掛けられる。

「あれ？ 白は、大蛇丸様のお気に入りじゃなかったのか？」

「白。君、今逃げようとか考えてないよね？ 大蛇丸様は、それはもうしつこいくらいに追ってくるよ？ くつくつく」

香燐は疑問を口に浮かべただけだったが、水月は何かを察したのか、白の逃げ道を塞ぎにかかる。白は余計なことをと内心思いながら、大蛇丸から目を離せずにいた。

その間に、水月と香燐が大蛇丸へと白のことを説明していく。

「あの子が弟子をとるなんてね…………。と言うことは、私の孫弟子になるのかしら？」

「いや。白は、わしが教えたからわしの弟子じやろ」

「医療忍術が得意なようだから、私が弟子をとってもいいかもしれないかな」

3人の話し合いにイタチが水を差す。

「そんなことよりも、十尾をなんとかするべきじゃないのか？」

「そうよ！ ナルトのところに早く行くってばね」

イタチの作戦はシンプルなもので、今現状で一番脅威となる人物…………マダラの封印を行い、その戦力を全て十尾へと持っていくこと

だった。

マダラと十尾では、十尾の方が能力が未知数な分脅威ではあるのだが、十尾を確実に倒せるという根拠がなかった。そのため、まだ倒せる可能性のあるマダラを先に倒すことになったのだった。

「状況が動きました」

「移動しながら聞くとしよう」

「俺が砂で運ぶ。みんなはチャクラを温存してくれ」

「香燐。白の回復を」

「うち、サスケ以外の男に噛まれるの嫌だな……」

「サスケ好きを認めたね！」

「ストックあるからいいよ……もう……」

カツユからの報告でみんなが一斉に動き出す。我愛羅の砂がみんなを乗せて行く前に、白はクシナとイタチを棺へと戻す。

香燐と水月が、砂の上でも言い争いをしている中で、白は巻物を取りだし、その中から輸血用のパックを取り出した。香燐の血である。チャクラを戻している間に、最後の戦場の状況をカツユが説明していく。

「おじい様たちが十尾を封じているのか!! 穢土転生体と言うことは……」

「これも白なの?」

「俺はクシナさんとイタチさんだけです」

「それは私よ」

綱手と照美からの質問に、白は知らないとばかりに否定の言葉を伝えようと、大蛇丸が横手から答えた。

綱手や他のメンバーが納得するなか、次々と状況報告が上がっていく。

十尾を操っていた面の者は、カカシと共に何処かへと消え去ったので、残るは十尾だけ。その十尾も操るものがないので、ただ暴れているだけだった。

ただ、そのチャクラ量は相当なもので、十尾の分裂体を大量に身体から出して、本体へと近付けさせないようにしている。

連合の忍びたちで分裂体を相手にしているが、その数は減った傍から増えていき、いつまでも終わることはなかった。

その中で、まともに本体へと攻撃出来ていたのは、ナルトとサスケ、それと歴代火影の影分身だけだったが、それは焼け石に水程度の効果しかなく、すぐに分裂体によって本体から離されてしまっていた。

「あれか……」

白たちが歴代火影による封印術が見える位置までたどり着いたところで、十尾の大きさとそれを封じる術の規模に驚いていた。

「後はあれを倒せばしまじゃの」

「油断はするなよ。おじい様が封印術にて縛っているということは、現状では倒す術がないか、時間がかかるということだからな」

「柱間殿のことはお主よりも知つとる」

「おしゃべりもそこまでだ」

土影の安易な言葉に、綱手は諫めるが、土影はどこ吹く風とばかりに受け流す。それを我愛羅が止めに入った。

戦場に到着すると、至るところに連合の忍びが倒れ伏しているだけで、敵の死体はどこにもない。敵はやられると、ただのチャクラの物質となって地面へと吸い込まれていつていた。

五影たちが到着することで、土気は更に上がったが、打つ術が今のところひたすら十尾のチャクラが切れるまで攻撃するしかないということが分かり、白はげんなりとする。それでも、火影の封印術により十尾による尾獣玉が来ないことが分かり、ホツとすると攻撃に専念していく。

仙人モードへと変更しそれを感知した所で、白は忍び連合の杜撰な攻撃に辟易する。決して無駄ではないのだが、切り裂かれたり、倒された十尾の分裂体は、地面へと吸い込まれた後に、また十尾へと還元されていたのである。

完全に塵にしてしまうナルトの風遁・螺旋丸や、サスケの炎遁・加具土命のように燃やし尽くしてしまわねばほとんど意味が無かった。

白は両手で印を組み仙術を使用する。

(仙法・明鏡龍水)

連合軍が倒した敵を、龍水弾の形をとった水が、地面へと還元する前に次々とチャクラ物質を取り込み、最後には鏡の中へと消えていく。そして、鏡自体も消えてしまった。

白は、それを続けていく。他の連合の忍びたちも、気付いた者は同じように封印したりと削ってはいくが、十尾のチャクラが減ったようには、誰も感じることはできなかった。

いつまでも続くかと思われた攻防にも、終止符がうたれる。十尾の頭上に、面が割れた状態の男が現れたのである。時を同じくしてカカシも連合側へと姿を現す。

「オビト！　これ以上はやめるんだ！」

「何度も言わせるな。この無意味な世界になど興味はない」

オビトはカカシ同様ボロボロの状態であつたが、十尾へと自分を繋げると印を組む。十尾はそれまで出していた分裂体を全て呼び戻して吸収し始める。

「いかん！　あの者を誰か止めよ！」

柱間の叫びに呼応して、一気に攻撃を仕掛ける。一番早かつたのは、ミナトだった。オビトに飛雷神の術のマーキングを付けていたのだろう、ミナトは動揺しながらもクナイをオビトへと突き刺す。

「君が面の男だったなんて……」

「……あんたはいつだって遅い」

ミナトがクナイを引き抜くと、オビトはその場に倒れ伏しながら呟くようにミナトへ言う。

誰が見ても負け惜しみにしか見えなかったが、その瞬間、十尾の中へとオビトは吸い込まれてしまった。

これで十尾だけだと皆が考えたとき、十尾が縮小し始める。それに伴いチャクラも、その中心へと凝縮していく。

そこには、十尾を人の形にしたようなものがいた。それは歪な形をしており、いきなりナルトに向けて小さな尾獣玉を撃ってくる。それをナルトは躲すが、その尾獣玉は火影たちが張った四赤陽陣を貫通し、その先にあるものを消し飛ばしていく。

「この結界を貫通するだ?!?」

ナルトはキラビーと共に尾獣玉で相殺を試みるが、それは上へ弾くことが精一杯だった。尾獣玉は執拗にナルトを狙ってくる。

「なぜナルトを!?!」

「自分に似たチャクラを持っておるからだろうか」

「八尾もいますが……」

「危険度の問題であろうぞ……」

十尾の時よりも明らかに素早くはなったが、狙いがナルトと分かっている分、対処はし易かった。ナルトへ向かう尾獣玉は、全て2代目火影とミナトの飛雷神の術により遠くへ飛ばされていく。その間に連合の忍びは十尾へ向けて攻撃していた。

しかし、連合の攻撃のほとんどを無視して、十尾だったものはナルトを攻撃する。連合軍の攻撃は当たるのだが、忍術や通常の攻撃では掠り傷すら負わない。

(これは普通の攻撃では無理だな)

白の仙人モード時の攻撃で、微かに攻撃を受けるレベルの十尾に、白は一旦攻撃を止めて距離を取る。

結界を潜り外へ出られては困ると、火影たちは開けていた結界を塞ぎ直して、十尾を連合軍もろとも結界内に閉じ込めた。

白は十尾からの分裂体が無くなったことで、仙人モードを解き、穢土転生させた2体を口寄せする。

ナルトへ何度目かの攻撃をしようとした時に、イタチがその間へと割り込み八咫の鏡で防ぎ返すと、初めて十尾にダメージを与えることができた。

十尾は一旦距離を置いて尾獣玉を出すのを控え、今度はイタチを含めて警戒し始める。

「イタチ! なんてあんたが!?!」

「サスケ。無駄話は後だ」

「あの十尾が攻撃受けるなんてすごいってばよ!」

「その盾で防いでいれば倒せるんじゃないか?」

皆の顔に希望が出てきたところで、イタチから無慈悲な言葉が伝え

られる。

「そう何度も保たない。後数回が限界だろう」

掲げられた八咫の鏡には、霊気であるにも関わらず、僅かな亀裂が入っていた。

しかし、白が口寄せしたのはイタチだけではない。もう1体居たのである。もう1体であるクシナは、十尾がイタチを警戒しているのいいことに、十尾へと近付き鎖で縛りあげる。

「クシナ!? ……そうか!」

「ナルトを!」

「へっ!」

ナルトは訳が分からないとばかりに疑問の表情を浮かべるが、クシナとミナトは迷いなく動く。

ミナトはクシナの元へナルトを連れて飛雷神の術で移動すると、ナルトの手をクシナの出す鎖へ掴ませる。

「九尾とのチャクラの綱引きは覚えてるかい?」

「九喇嘛とのやり取りなら覚えてるってばよ」

「それを今度は十尾相手にやるんだ」

「ええ!」

「大丈夫だってばね!」

「今度は1人じゃないよ!」

柱間は十尾が動かぬように更に上から封印を施していく。ミナトはナルトの背に手を伸ばすと、忍びたちへと大声で呼びかける。そのミナトの声と共にチャクラの糸が広範囲へと伸ばされていった。

「みんなも引っ張るのを手伝ってくれ! そのチャクラの糸を掴み、自分のチャクラで引っ張るイメージを思い浮かべて欲しい!」

ミナトの声に従い、結界内にいる忍びたちはチャクラの糸を掴み取り、チャクラを高め始めた。各人がイメージしているのだろう。十尾からナルトに向けて少しずつではあるが、チャクラが流れ込み始めたのが分かる。

イタチや火影の影分身たちは、ナルトたちの前に尾獣玉が来た時のために立ちはだかる。

このナルトたちと十尾とのやり取りが行われている間に、傷ついても重傷を負った者は、結界の外へと移動させていき、結界内には多少の傷はあっても戦闘が可能な忍びたちのみとなった。結界内に残った忍びたちの数は、最初に比べると限りなく少ない。

(これで、本当の終わりなのかな?)

ナルト親子や他の忍びのやり取りを結界内で見ながら、自身もミナトから放たれた綱を握り、周囲へと目線に移す。そこには忍びたちの屍で地面がほとんど埋め尽くされていた。そんな中、白の視点はある一点で止まる。

そこには見知った顔があった。

「えっ?」

白は信じられずにゆっくりと近づく。その人物は、胸に風穴を開けて、仰向けに倒れているネジだった。

ネジが倒れてから1日経っていないと判断した白は、周囲へと呼びかけようとしたところで、それを言葉に出せずに十尾を見つめる。

十尾が急速にチャクラを変質させ始めたからだ。それに伴い、歪だった形も変わっていき、流出していたチャクラも途切れる。

結局十尾を押さえつけることは、僅かな間しかできなかった。十尾だったものは完全な人の形……オビトになると、押さえつけていた柱間の封印術である仙法・明神門を力づくで打ち破り、同じくクシナの鎖を引き千切り、ゆっくりと立ち上がる。

そのチャクラは今までの事が全て準備運動だとも言うべき程大きくなっていた。

111 人柱力？

オビトから溢れ出た黒いチャクラに似たような何かは集まっていたけど、それが変質して錫杖へと変わる。

身体にあつた傷は何処にもなく、背には勾玉の模様が九つ浮き出ている。

但し、始めからなのか、身体の半分は木でできた鱗のようになってるのが見てとれる。

オビトが黒い錫杖を振ると、首の周囲に勾玉が、背後に球体がそれぞれ九つずつ現れた。背後の球体はオビトを守るように周回し始める。

「あれって十尾の人柱力だってばよ！」

「なぜ分かる？」

「さっきの綱引きで、尾獣たちのチャクラを貫うときに、その事を尾獣たちと話してたってばよ！」

サスケの問いに、ナルトが答えたことで、その場に緊張がはしる。それは、感知タイプの忍びではなくとも、寒気を覚えるほどの威圧感を放っていた。

柱間は明神門の数を更に増やしてオビトを押さえつけようとするが、すぐにその門にひびが入っていき、崩れさる。それは呆気ないほど簡単に破られてしまった。

オビトは錫杖を目の前に浮かせると、両手を広げて掴むような動作をし、それを交差するようにして胸の前に持つてくる。すると、それまで火影たちの張っていた四赤陽陣が歪み、その次の瞬間には紙を破るようにして結界が解けた。

(これ以上は!!)

白は呆然とその光景を眺める者たちを、クシナを操り、その鎖でオビトから離すべく、掴んでは投げるを繰り返す。

歴代火影による結界すら簡単に破るような相手に、一般的な強いレベルの忍びなど無意味だと悟ったからだだった。

それを見てとったオビトは空へとゆっくり上がっていく。そして、

辺り一体が見渡せる高さまでくると、黒い棒状の物を広範囲に渡って飛ばしていった。

意味が分からずいたが、次のオビトの言葉と現象で理解させられる。

「これで終焉だ。この中で最後を見ているがいい。——六赤陽陣——」

黒い棒を起点にして結界が張られる。先程火影が張っていた結界よりも、更に強度を増したものが、白が飛ばした者たちを含めて、連合軍全てを包む形で張られる。

オビトの手によって……。

オビトはまたゆっくり降りてくると、錫杖を地面に突き刺し、黒い球体をその錫杖とオビトを囲む形で廻りへと移動させていく。

「やつを倒せば終わりぞ！ 弱気になるな！」

イノを通しての柱間の言葉で、それまで固まっていた忍びたちは動き出した。

しかし、瞬身の術で攻撃を仕掛けた二代目火影とミナトは呆気なく、オビトの周囲を漂っていた黒い球体に阻まれた上に、触れた場所が挟り取られる。

それを見て、他の者も接近を避け忍具や忍術へと切り替える。

忍術に関しては、柱間が木龍を放つが、同じようにして、黒い球体に当たり消え去っていく。

ヒルゼンの放った手裏剣影分身では、当たっても傷すら付かない。

二代目火影は、挟り取られた身体を使い起爆札の連続口寄せを使うが、防ぐまでもなく、手裏剣影分身同様、起爆札では傷を負わせることはできなかった。

「やつと身体に馴染んできたな……月読の準備に入るか……」

連続で口寄せされる起爆札を、虫でも払うかのように、手を振るう動作のみで終わらせると、黒い球体を全て地面へ向けて放った。

黒い球体は地面に大きな模様を描いていく。その模様を止められる者はいなかったが、代わりに、オビトの周囲を漂っていた黒い球体が無くなったことで、オビト本体へと攻撃を仕掛ける2人がいた。

ナルトとサスケである。

2人は互いの忍術……風遁・螺旋手裏剣と炎遁・加具土命を合わせると、瞬身の術でオビトに向かうが、明らかに飛雷神の術を使う火影たちの攻撃よりも遅かった。

しかし、2人の忍術は、飛雷神の術を使う2人の火影による飛雷神回しによって、オビトに命中させることができた。

二代目火影が起爆札の連続口寄せ時にオビトへとマーキングしていたため、それを用いて、ミナトにナルトとサスケの攻撃を当てさせて、それを二代目火影が、ミナトとオビトの位置を変えることで、オビトに攻撃を当てたのである。

そこへ、オビトの上空に、スサノオを展開したイタチが白に抱えられて現れる。

「これで終わりだ」

イタチの持つ十拳剣がオビトへと振るわれた。

それで終わると思われたが、十拳剣はオビトを吸い込むことなく、オビトを地面へと叩きつけるだけに終わった。

奇襲が失敗に終わったことを悟った6人は、すぐさまオビトから離れる。

オビトは、何事もなかったとばかりに立ち上がると、錫杖へと手を伸ばした。錫杖はオビトの元へと飛んでいき、その手に収まる。

「十拳剣が効かないなんて……」

「当たる寸前、首の廻りにある勾玉に防がれたな」

白がイタチと話している間に、口寄せの陣は完成し、大きな樹が現れる。それは、幾重にも蔓の様なもの絡み合っただけの樹となっており、その上部には大きな蕾が付いていた。

その樹は、結界内にいる者たちへと根を伸ばしていく。触れては不味いと、忍術で切ろうとするが、忍術は吸収され、刀などで直接斬りかかった者は、その根に捕まり、チャクラを吸いとられてしまった。

その根は、速くはないが確実に結界内にいる忍びたちへと近付いていく。そして、チャクラを吸い取られた者たちが干からびていく様を

見せられ、忍び全体へと動揺がはしった。

触れることも、止めることもできないので当然だろう。

しかも、オビトの張った結界により外へと出ることができない。それは、結界内にいる忍びたちに絶望を植え付けるには十分だった。

しかし、その絶望的状况を覆す者がいた。

ミナトはチャクラを溜め終わると、飛雷神の術を使う。次の瞬間、連合軍の忍びたちは結界の外へと移動していた。

ミナトは、チャクラの綱引きをしていた際に、ミナトから放たれた綱を、握った者全てにマーキングしていたのである。

連合軍の忍びは絶望から困惑へと変わる。未だに自分達に何が起こったのか分からないのだろう。

ただ、結界内に取り残されてしまった者もいた。ガマ吉である。ガマ吉は根を避けながら、腰に刺した短刀で根を防ぎつつ、オビトへと近付いていく。

「ガマ吉!!」

「心配せんでええ!!」

ナルトの心配を余所に、ガマ吉は口からオビトに向けて液体を吐き出すが、オビトはそれを錫杖を円盤へと変えてそれを防ぐ。

防がれたガマ吉は、そのまま煙を発して消え去ってしまった。

「逆口寄せで帰ったようじゃの」

「ああ!? エロ仙人!! なんでいるんだってばよ!」

「なんで。わしがいると都合が悪いんかのお……」

「お前たち、そういうことは後でやらんか」

ナルトは自来也がいることを今知ったのか驚きを隠せなかった。それに対して自来也が少し落ち込む。状況は全く進展していないのにも関わらず、呑気に話をしている2人をヒルゼンが窘めた。

オビトは自ら動くつもりはないのか、その場で月を眺めていた。オビトの方は、無限月読が完成するまでの時間稼ぎができればいいだけなのである。それを連合軍は、自ら無限月読を行うための媒体から離れたのだ。オビトにとっては好都合と言った方がいいだろう。

「しかし、忍術や武器では、奴に傷を付けることは叶わん……有効手段

がイタチのスサノオだけとなると厳しいの……」

「いや。そうでもない」

「お主も気付いたか……」

「ああ」

ヒルゼンの言葉をイタチは否定した。二代目火影はイタチへと確認するとイノを呼び、連合軍へと呼びかける。

『この中で仙術を修めたものは居るか?』

『俺は修めておるぞ!』

『兄者には聞いていない』

『……』

二代目火影が探しているのは仙術が使える忍びだった。最後のガマ吉の攻撃は仙術を含んだものであり、それをわざわざ錫杖を盾にしてまで防いだのである。それが意味するところは、ガマ吉の攻撃を大なり小なりオビト自身が危険だと判断したことに違いなかった。

『わしとナルト……それに白も使えます』

『兄者と合わせて4人か……さっきのスサノオを使う小僧を入れても5人……ほとんど足場のない場所では心許ないな……』

『仙術が使える者を探してどうするのです?』

『最後の蝦蟇が使った術は仙術であった。忍術や忍具といったものは避けなかったあやつが、わざわざあの錫杖を盾に変えてまで防いだのだ。……つまり、仙術は有効手ということになる』

『なるほど……。それならば重吾、サスケ君に力を貸しなさい』

『……分かった』

重吾は大蛇丸の指示に従い、サスケへと歩み寄ると、サスケの肩へと手を置き目を瞑る。サスケへと置かれた手を伝って、重吾からサスケへと力が流れていった。それは白たちが使う仙術チャクラであり、重吾は仙術チャクラを渡し終える前に、ひと言サスケを見て呟くと、その場に倒れてしまう。

その呟きにサスケは頷き、スサノオを展開した。その展開されたスサノオは、今までのサスケのスサノオとは違い、天狗に近い形へと進化しており、イタチのものと酷似していた。

『足場が無ければ、わしが浮かせましょう』

『じじい。あれは慣れないと難しいぜ。それにじじいほど速度出せねえし』

土影の提案に黒ツチが難色を示す。土影にとって空を飛ぶことは普通にできることだったが、他の者は違う。失敗の許されない場所で、戦闘以外に集中力を削がれてしまつては、成功するものも失敗してしまう。そのような思いが伝えられた。

『では、俺が砂で足場を作ろう』

我愛羅の提案は受け入れられ、足場の問題についても解消される。

『ここまで来て何もできんとは!!』

『それは俺も一緒だぜブラザー！　ここは皆で応援！　やつを倒して公演！』

『お前は黙つてろビー！』

雷影がキラビーにアイアンクロウをしている中で、仙術を使える者たちが集まる。

『あの者を倒した際に、十尾が解放されるだろう。そうなれば、十尾からチャクラを抜き取れるはずだ。その時のためにも身体を回復させておけ』

二代目火影の言葉に、それまで見ているだけだった者たちは、座り込んだり薬を飲むなどして身体の回復に専念し始める。

『あの樹についてはどうするんです？』

『通常口寄せ陣にて口寄せしたものは、術者がいなければ、元の場所へと帰るものぞ』

『元の場所ってどこなんでしょうね……』

『この世界にあるものとは思えんな……。取り敢えず、今やるべきことは奴を倒すこと、それだけぞ』

二代目火影は仙術の使える者たちへとマーキングしていく。その間にも攻撃に関しての注意事項を伝えるが……。

『各人いつでも攻撃できる準備をしておけ、俺と4代目で飛雷神を回していく』

『俺は1人でも十分行けるってばよー！』

『俺も1人で十分だ』

ナルトが自信満々に言い放つと、それに対抗してかサスケまで1人で行けると言い始めた。2代目火影は溜め息をつくど、他にいないかを確認する。

『危うくなくても、基本は自分で身を守ってもらおう……。寧ろ囿になってもらおうか。……。他に居ないだろうな?』

『俺も1人でやります』

『お前もか……。最近の若い奴は協調性がないな……。里ではどういう育て方をしているのだ?』

白の言葉に2代目火影は呆れかえり、五影へと聞こえるように嫌味を言うと、作戦を伝えた上で、オビトのいる結界内へと、飛雷神の術で飛んで行った。

112 一斉攻撃？

基本的には、柱間には扉間が付きサスケをカバーし、自来也にはミナトが付き、ナルトをカバーすることになった。

白については、前回イタチのスサノオで攻撃したことから、イタチのカバーに回ることになる。

「俺と兄者でまずは様子を見る。それを見てから攻撃を仕掛けろ」

二代目火影の言葉に頷くと、ミナトが全員を結界内へと飛雷神の術で移動させる。その後すぐに我愛羅が足場を作り、それを広範囲へと広げていく。下からの根が突き上げてくることを警戒して、その砂の足場は所々に穴が開いていた。

「もう諦めたらどうだ？ あの月がこの蕾の真上に来たら全てが終わる」

満月を見上げながら呟くオビトに、誰一人賛同することなく、それぞれどころか先制とばかりに攻撃を開始した。

満月が蕾の真上に来るまでそう時間は無い。よく見れば分かったかもしれないが、蕾も満月の動きに合わせてゆっくりと開き始めているた。

始めに柱間と扉間が影分身を出して、3方向から同時に攻撃をする。しかし、その攻撃は、オビトの首にある勾玉が結界となって防ぎ、連続で攻撃しようとした時には、オビトの手から術が放たれる。オビトの手から放たれた術は、黒い流動体のようなものだった。それは瞬時に細長い棒状へと姿を変えて柱間、扉間コンビへと襲い掛かる。

それを扉間は避けようとするが、避けきれずに扉間の肘から先を消し飛ばしてしまった。一旦距離を離して扉間は自分の腕を見つめる。

「あれはなんぞ？」

「まともに受けない方がいい」

扉間は肘を柱間に向けて塵が集まらない様を見せつける。それを見て柱間も気付いたのか、他の者へと注意を促す。

「あれは恐らく、全ての忍術を無にする陰陽遁をベースにしたものだな……」

「皆の者。敵の出す術は絶対に喰らうな。穢土転生体でも元には戻らぬぞ」

そのひと言で更に緊張がはしったが、誰も諦めることはない。

ただ、回避に専念するような戦いとなつてしまつていた。オビトの足元周辺の砂は、操れないため足場に来れず、近付いて攻撃しても生半可な攻撃では、柱間たちの時と同様に、簡単に防がれてしまう。

それに加えて、オビトの使つた陰陽遁の術により、オビトに付けられていたマーキングは消えていた。

飛雷神の術を使つて近くから攻撃をしようにも、勾玉による自動防御によつて防がれて、マーキングすらままならない状態だった。

それでも、諦めることなく、休むことなく、攻撃を続けていく。時間はまだほとんどない。残り十数分といつたところだろう。

ナルトが仙術・螺旋丸を前方から放ち、後方からサスケのスサノオで挟み撃ちを狙うが、勾玉に防がれる。そして、攻撃直後の2人の隙目掛けてオビトが術を放とうとしたところで、イタチと自来也が左右から攻撃を仕掛ける。ナルトとサスケを囮にしたものだったが、オビトは気にせずにナルトたちへと攻撃をした。

自来也とイタチの攻撃は結局勾玉に防がれてしまい、それが分かつた瞬間2人はすぐに後退した。ナルトとサスケについては2代目と、ミナトの飛雷神の術により回避済みである。

後退したのを見計らつたように、白の雪月花で全方位からの攻撃をオビトへと仕掛ける。

さすがに全方位からの攻撃には、オビトも対処出来ずに攻撃を受けた。

しかし、仙術の威力が弱いのか、当たったものは全て浅手の傷程度で終わつてしまう。元々の攻撃の主体が氷の千本なので、この結果は仕方ないと言えるだろう。

「あれで掠り傷が精々ですか……（せめて突き刺さるくらいはすると思つただけど……）」

白が暗い声を出す、2代目とイタチはそうではなかった。

「全方位からの攻撃には対処できないようだな」

「勾玉2つが明らかに、他の勾玉よりも動きが遅い」

2人が冷静に分析している間にも、他の者は攻撃を仕掛けていた。ナルトやサスケの攻撃は威力は大きいですが、その範囲も大きいため、他の者まで巻き込んでしまうものだった。ただ、それをサポートするのは柱間と自来也である。オビトに隙を与えぬように、威力を凝縮して小さい範囲に絞りそれぞれが攻撃していった。

ミナトはオビトの攻撃が向かう先の人物を移動させることに神経を集中させる。

「ナルト！ お前の得意なことを思い出せ！」

サスケは何を思ったのか、大型の風魔手裏剣を複数口寄せする。そして、風魔手裏剣に雷遁を纏わせてオビトへと投げつけていった。

ナルトもサスケの言葉で何かに気付いたのか、風魔手裏剣を大量にオビトへと投げつけていく。

9つの勾玉によって、ある程度までは防がれたが、全てを防ぐことはできずに攻撃を受けるが、掠り傷すら負わない。勾玉に防がれたり、身体に当たってもダメージを受けることがないと分かったオビトは、両手を自来也と柱間へと向けて、そちらの攻撃を牽制する。

その攻撃は続くかに見えたが、オビトが両手を柱間と自来也に向けた瞬間。動きの遅い勾玉2つを潜り抜けた風魔手裏剣があった。それは風魔手裏剣に変化したナルトである。これにより、ナルトは至近距離でオビトに、螺旋丸をぶつけることに成功する。

「やっとだつてばよ……」

ナルトの言葉を無視して、他の者は更に追撃へと入った。しかし、オビトは、螺旋丸の威力により口寄せした樹の根の中へと飛ばされていってしまう。

「ちっ！ 厄介な！」

サスケが舌打ちして、苛立ちながら、オビトの後を追うべくササノオの剣を一振りすると、今まで傷つけることができなかつた根を断ち斬ってしまった。

それまでオビトを倒すことに思考が傾倒していた。皆はそれを見て二手に分かれる。

イタチとサスケなど、長物を持った2人が根を斬り裂いていき、ナルトと自来也が仙術螺旋丸で斬った場所を拡げていく。

その間、柱間と扉間、白でオビトの足止めにも動いた。

ゆっくりと浮き上がってきたオビトの視界を防ぐために、白は霧隠れの術を広範囲に渡って壁のごとく使用する。

しかし、白が仙人モードでいられたのはそこまでだった。白はさすが、後方へと移動する。

白は、我愛羅の傍まで戻ると、薬を取り出して飲み込むと、再度チャクラの練り直しに入った。

(仙人モードが一番に切れるか……)

白は、悔しそうに顔を歪ませながらも、理性で感情を抑えつけて仙術チャクラを練っていく。

その間にも、樹を斬り倒そうとするが、オビトに気づかれ、今度は逆に防御に徹することになっていた。

今まで受けに徹していたオビトが、攻撃へと転じたのである。その攻撃は首の勾玉だった。それを6つ……イタチやサスケたちに向けて飛ばしていく。イタチ、サスケ、自来也、ナルトそして4人をサポートする形でミナトがついてはいるが、その数に翻弄されていた。

樹を削り取れたのは円全体で見ると5分の1程度。しかし、満月が真上にくるまでに倒しきるには、十分な速度で削り取っていた。

そのままであれば斬り倒せただろう。

邪魔が入らなければ、だが……。

そこで、キラビーが急に倒れたことが伝えられる。意識をオビトへ向かわせている間に、キラビーを狙っていたのである。仙術チャクラを扱えないキラビーに、まともな抵抗などできるはずもなく、八尾を抜かれてしまったのだった。

「これで後は九尾だけだが……。ここまでくれば十分だな」

オビトはそう呟くと、オビトの首に残っていた勾玉の1つが一瞬輝き、また黒へと戻っていく。

「どうやら、勾玉1つに尾獣1体が対応しているようだな」

それが分かってからは、再度仙人モードになった白を交えて攻撃を

放つ。しかし、柱間と白だけでは手数が足りなかった。樹を斬り倒すメンバーで4人で勾玉6つ、オビトへ攻撃を加えるメンバー2人で勾玉3つ。オビト側の勾玉の1つが遅くとも他の2つで十分にカバーできてしまう。

しかも、数に対しては警戒しているようで、錫杖を壁にして勾玉と陰陽遁の両手を常時展開している。

見つけたと思つた弱点は、既に弱点になっていなかった。

その時にイノを通してシカマルから提案が上がる。

その提案を了承した結界内にいる皆は、一旦攻撃の手を止めると、それぞれが各人最大威力の仙術チャクラを高めていく。

オビトは樹を斬る行為から離れたイタチたちを不審にがりながらも、チャクラを高めるのを見て、勾玉を戻して、更に錫杖を円盤上にして防御の体勢に入った。

白たちは仙術チャクラを高め終わると、オビトを中心に5方向に分かれる。そして、同じ速度でオビトへと向かっていった。

5人それぞれの攻撃がオビトの勾玉に防がれる瞬間。我愛羅を除き、オビトを含めて全員がその場から消え去る。

残つたのは、勾玉と錫杖を円盤上にしたものだった。

それらは幻のようにゆっくりと樹の中に消え去っていく。それに合わせるようにして、オビトの張つた六赤陽陣も解除された。

結界内にいた者たちが再び現れた場所はカカシの前。倒れている者は1人だけ……オビトだけだった。オビトは身体を斬り裂かれ、潰され、更に眼を潰された状態になっていた。その身体は、人柱力となる前の、不完全な、歪な形へとなっていく。

その次の瞬間。連合軍ほとんど全体から歓声が上がる。無理と思われた相手に勝つたのだから当然だろう。

あの瞬間、カカシはオビトの目を通して、攻撃の当たる瞬間を見ていた。そして、その瞬間に合わせて、神威により別の空間へと、オビトの勾玉と錫杖を残して飛ばしたのである。その代償として、カカシは気絶してしまつたが……。

しかし、ある光景がその歓声を徐々に消し去っていく。

「樹が……消えない?」

白の眩きがその場全員の想いを代弁していた。そして、少しずつ元の絶望したような表情へと戻っていく。

ここで、ナルトの仙人モードも切れてしまった。

「みんな! もう1度十尾からチャクラを全て引き出す! 手伝ってくれ!」

その感情を忘れさせるかのように、ミナトが叫ぶと、クシナと柱間も封印術を使い、十尾が暴れないように縛り上げる。ナルトは九尾モードへと変わると、クシナの放った鎖を握りしめた。

「サスケ行くぞ」

「ああ」

「わしも手伝おう」

「わしたちじやろが」

イタチとサスケはスサノオを展開して樹へ向けて移動する。それにガマ仙人を両肩に乗せた自来也が続いた。

今からでも、樹を斬る時間は残されている。今度は邪魔も入ることなく、イタチたちは斬る作業へと入っていった。時間はギリギリだ。

そして、ナルトたちは十尾からチャクラを引き出していた。こちらも、オビトのように邪魔するものが無いため、1回目の時よりも早くナルトに向けて、十尾からチャクラが流れ込んでいた。

樹を斬り終わる作業が、あと少しというところまで来た頃に、唐突に樹の根が動き出す。

根はそれが意思を持っているかのように、イタチやサスケたちを襲い始めた。

扉間は影分身を使い、3人一緒に飛雷神の術で樹から引き離す。根は斬られ、削られた場所に根を当てる時、その場所を根で塞ぎ始める。それを察して、再度近付いて斬りかかるが、斬った傍から根で塞いでいく。

悪いことはそれだけに留まらなかった。十尾が地面へと、溶けるように消えてしまったのである。

それに合わせて、樹の根の活動が活発になる。まるでそれは、十尾を栄養としているかのようだった。

そしてそれは姿を現す。

「こうなってしまうとはな。身動きがまともに取れなくなるが、もつと早めに動くべきだったか……」

樹にその者の顔が浮かび上がったのである。

「なぜやつが!?!」

「やつは封印したはずじゃぜよ……」

「バカな……」

イタチの十拳剣により、封印されたはずのマダラがそこに現れていた。

113 最終決戦？

固まっていたのはほんの一瞬。すぐさまマダラへと攻撃を仕掛けるが、マダラは樹の根を操り近付くのを塞ぐと同時に、連合軍へとその根を伸ばしていった。

ナルトとミナトにより、連合軍の生きている者たちは飛雷神の術により遙か彼方へと移動させる。こと、ここに至っては、連合軍にやれることはなかった。

「どうやってあの封印を逃れた？」

「ああ。本体の方は封印されたようだな」

「本体？」

「説明してやる義理は無いが……そうだな。無限月読までの時間潰しに教えてやろう」

根で攻撃を受け流しながらも、マダラは説明をし始めた。

「今の俺は陰陽遁で作られた意識体だ。お前たちで言うところの黒ゼツと言われていたやつだな。本来ならば、長門かオビトのやつを使つて輪廻転生するはずだったんだが、予定が狂ってしまったようだ。俺も遊びが過ぎたようだし、反省せねばなるまい」

今度は油断しないとばかりに根の範囲を増やすばかりか、樹の再生速度も上げていく。その速度は削り取る速度を遥かに上回っていた。それでも諦めることなく攻め続ける。

あと数分もなく、また、今から斬っても間に合わないにも関わらず、なかなか諦めない者たちにマダラは呆れたような声で続ける。

「もうすぐ、俺の望んだ恒久の平和が訪れる。意思は統一され、国同士……里同士……人同士が争うことなく過ごすことのできる世界……」
「それは所詮幻にすぎぬぞ！ マダラ!!」

「お前の掲げる理想では、いつまで経っても変えることなどできぬ。今回の連合も所詮は一時的なものだ」

それぞれが仙術で攻撃しても、効果は無く、満月は無情にも樹の真上へと近付き、同じくして樹の真上の蕾も開き終わるところだった。
「もう、終わりだ」

その言葉を合図にしたかのように、樹の真上にあつた蕾は開き終わり、輝き始める。それと同時にマダラも姿を消した。

根の動きも止まり、樹の再生も止まる。それでも諦めずに攻撃を続ける他のメンバーを余所に白は違う手を打つ。

（あの花の光を月に反射させて無限月読に掛けると言うなら、その光を遮れば……）

花の上まで一瞬で移動した白は、花の中心にある瞳のような場所を雷刀で傷を入れようとするが、雷刀のチャクラを吸い取られて通常の短刀にされてしまう。仙術チャクラを練って攻撃をしても、下の根とは違い傷すら付かない。

それでも白は諦めずに霧隠れの術を使う。花からの光を月へと漏らさないように。より濃密になるように。その間に樹を斬り倒すことを願って。

時間は無情にも過ぎ去る。

そして満月は、樹……花の真上に来てしまった。

霧隠れの術などお構いなしに、花から月に向かって光が上り、霧を払いのける。その光は月に向けて一直線に進んでいった。その光を妨げられるものは何もなかった。

月に光が当たった時に、花の中央にある眼のような模様と同じものが月にも投射される。その月を見ないようにと白は目を逸らした。大部分の者が白と同じ行動を取っただろう。

オビトの説明していた無限月読ならば、月を直接見なければいいと、誰もが考えたからだ。

その月に映しだされていたのは写輪眼の瞳だった。

それを見たものは、一瞬にして倒れ、その光を浴びた者も同じようにして倒れていく。

光は障害物など関係なく、降り注いでいった。

それはチャクラを持つものすべてを、幻術に掛けていく。

世界にいるすべての人・獣などチャクラを持つ生き物たちは、全て倒れ伏して動きを止めた。

そして、満月が花の真上を通り過ぎて光が止んだ時に、マダラは花

の上に影のような黒い状態で立っていた。

「後は世界を作るだけか……いや……まだいたか……」

無限月読が完成した後も動けたものがいた。ナルトとミナトである。2人は不思議そうに手元を見て、すぐさま行動に移す。

2人は身体の中にいる尾獣によって、中から叩き起こされていた。

「しつかりするつてばよ！」

「駄目だナルト……。この幻術は他者に触れられた程度では解除できない」

ナルトとミナトは、その場に居た者たちに触ることで幻術を解こうとするが、無限月読に外からの幻術破りは効果がなかった。

そんな2人にマダラから声が掛けられる。

「人柱力なだけはある。無限月読を耐えるとはな」

「みんなを元に戻せつてばよ！」

「取り敢えず、術者を倒すよナルト」

「そう簡単に行くかな？」

ナルトとミナトによる螺旋丸は、閃光の名に相応しい速度をもつてマダラへと当たるが、マダラは全くその場を動くことなくそれを受けただ。

「しまった！ 陰陽遁で術の効力がないんだ！」

「とうちゃん！ そう言うことは早く気づいてくれつてばよ！」

ナルトの非難を無視する形でミナトは続ける。

「と言うことは、仙術で倒すしかないね」

「わかった！」

ナルトは影分身をして、その場に座禅を組むと仙術チャクラを練り始める。しかし、マダラがそれを許すはずもなく、攻撃を仕掛けてきた。

それをミナトは飛雷神の術を使い、遠くへと移動させる。マダラはナルトたちを追わずに樹の方へと戻っていく。

しばらくすると、仙人モードになったナルトが、ミナトと共に戻ってきた。

それに合わせて、溜め息混じりにマダラは応じる。

「今度こそやってやるってばよ！」

「諦めたらどうだ？ 俺をやったところで、この無限月読は解けんぞ？」

「そんなことはやってみなくちやわかんねえ！ ……それに俺は諦めねえ！ それが俺の忍道だ！」

それから、ナルトとミナトによるマダラへの攻撃が始まった。マダラはとどころで攻撃を受けるが、ダメージを受けているのかが、身体が黒いために判断ができない。

今回は、ミナトの移動速度にもマダラはついていき、逃がさないとばかりに、逆に攻め立てる場面もあった。

決定打に掛ける攻防は、ずっと続くわけではなかった。ナルトの仙人モード用の影分身が減っていき、最後の一体になってしまう。

そして、ナルトに決定的な一撃を入れるところで、マダラの身体が一瞬硬直し、次の瞬間、身体は鎖によって縛り上げられ止められる。「なにっ!？」

「今度こそ終わりだな」

驚くマダラを余所に、イタチのスサノオの一撃を受けたマダラは、十拳剣に吸い込まれていった。

啞然としているミナトとは別に、ナルトは確信を持ったような顔で頷く。

「信じてたってばよ！」

「これは結局どういうことだい？」

「仙人モードの時ってば、俺の感知範囲は広がるんだってばよ」

時間は無限月読が完成し、花からの光が終わったところまで遡る。

あの時に、無限月読が効かなかった者がもう一人いた。

それが白である。

倒れた状態から起き上がり、何が起きたのかとしばらく呆然としていたが、下で戦闘音がしたことでそちらへとそっと覗いたところ、ナルトたちが戦っていたのである。

状況がよく分かっていなかったが、2人が戦っているのは分かつ

た。そこで気付く。

なぜマダラは、ナルトばかりを狙っているのかと。

(もしかして、感知できないんじゃない?)

駄目元で仙術チャクラを練り始める。しかし、マダラが白の元へ来ることはなかった。

仙人モードになった白は、穢土転生した2人を口寄せする。

「イタチとクシナを。」

口寄せした時は、特に他の者と同様に動くことはなかったが、新たにクナイによる命令の上書きで動くことが可能になったのである。

2人に状況を簡単に説明し、いざ、ナルトに加勢しようとしたところで、イタチに止められたのである。

「待て。確認したいことがある。……まず、この樹はもうチャクラを吸収していないようだな」

「そう言えば……」

仙術チャクラを纏っていないにも関わらず、チャクラの吸収は無くなっていった。イタチの言葉にクシナは自分の身体を確認していた。

「後、幻術を解けば、その後は無限月読に掛かることはないということだ」

「そうですね」

イタチの言葉通り、会話している以上無限月読に掛かっているわけではない。マダラの言葉が本当であれば、このような惨状の世界を作るとは思えなかったからだ。それに加えて、自分のチャクラに乱れが無いことも感じ取っていた。

その後は、ナルトが攻撃しているのを観察し、マダラの情報を集めていく。

「あそこで、なぜ追撃しないんでしょう? マダラにとって結構有利になったはずなのに……」

「どうやら、この樹の根の広がっている部分が、マダラの活動できる範囲のようだな」

「私が鎖で縛れば……」

悔しがるクシナにひと目やると、イタチは白を確認する。

「白……他人のチャクラに仙術チャクラを纏わせることは可能か？」

「やったことないですね……」

「ナルトができたんだ。他の者もやれるだろう」

「やってみますよ」

それからクシナの鎖に仙術チャクラを混ぜる練習をやってみたが、結果はうまくいかなかった。他人のチャクラに合わせるなど、そう簡単に行くものではない。それも、扱いが難しい仙術チャクラならば尚更だった。

しかし、これもイタチの提案で覆される。

「外から無理ならば、中からどうだ？」

「つまり、クシナさんを操ってってことですか？」

「そうだ」

ナルトたちの戦闘を見ながら、白へと言ってくる。

この言葉は、予想外の結果を白にもたらす。白は、他者がそう簡単に、仙術チャクラを練れるとは思っていなかったのである。

しかし、操っているのは白。チャクラ比を合わせるのも白ならば変わってくる。

そして、それは簡単にできてしまった。

啞然とするクシナを余所に、できたことを横目で確認すると、イタチは白に話しかける。

「後は、継続時間を延ばせるように溜めておけ。俺は試したいことがある」

「分かりました」

そう言うと、イタチは根に隠れて倒れている忍びの1人に近付き写輪眼で幻術を解こうとするが、結局解くことはできなかった。

それを確認したイタチは、白の元へ戻ってくると、ナルトの状況を確認してから簡単に仙術を説明し、行動へ移す。それに合わせて、白もクシナを操り移動を開始した。

クシナが最初に白を捕まえた時のように、チャクラを空間へと浸透させていき、根のギリギリの範囲で張っていたのである。ナルトはそれに気付き、マダラをそこへ誘導した。

イタチは、地中でマダラが捕まるのを待ち、捕まえたところをスサノオの十拳剣で貫いたのである。

「後はこの幻術を解くだけだってばよー!」

「しかし、外から解くことはできない……俺の写輪眼でもだ」

「ええっ!」

それから、色々と試したが効果は無く、時間だけが過ぎていく。静かな夜明けが出て来た頃に、白は早口でナルトへと詰め寄る。

「ナルト時間が無い。ネジを生き返らせたからついてきてくれ」

「そんなことできるのか!!」

「今のナルトなら大量のチャクラがあるからできるはずだ」

「それならすぐにでもやるってばよー!」

ナルトを連れてネジの元へとたどり着く。探すのに少々時間を掛けてしまい、少し焦りが白には出ていた。

「なんでそんなに慌てるんだ?」

「この術は死後1日……24時間以内に使わないと効果が無いんだ」

「ええ!?! それじゃあ。連合の皆は……」

「取り敢えず、俺にチャクラを分けてくれ」

「お……おう」

ナルトからの大量のチャクラを受け取り、ネジの胸に手を置いて印を組む。そして術の名を口にしました。

「――起死転生――」

ナルトからのチャクラがあり、ネジの穴の開いた箇所は、どんどん肉が付いていき、生気が宿り始める。それは傍から見ても生き返ったのが分かるほど劇的なものだった。最初の状態が状態だけに、分かりやすいと言えるだろう。

しかし、代償はナルトのチャクラだけではなかった。チャクラを精密に扱わなければならないこの術は、白の精神力を削っていく。

小南の時ほどではないが、白は疲れ切った状態でネジから手を離れた。離したというよりも、ネジが起き上がったことにより手がずれたと

いった方がいいだろう。

「おはようネジ」

「……白か!？」

「俺もいるってばよ……」

「今の戦況はどうなっている!？」

「一応終わった……」

そう言い終わったところで、白は横へと倒れ込んだ。

「おい！ 白！」

「ごめん。休む」

白が地面に倒れ込む前にネジが支える。白は気絶はしなかったものの、まともには動けないほど疲れ果てていた。

「死んで生き返った者は無限月読から解放されるわけか……」

「白君のあの状況を見る限りでは時間的に数人が限界かな……」

いつの間にか、イタチを含めて白の傍へと来ていた面々は、それぞれの考えを口に出していく。

「そうだ！ 輪廻転生の術で！」

「誰が輪廻眼持ってるのさ?？」

「……………」

白の言葉にナルトは黙り込む。しかし、それも束の間。

急に立ち上がると、ミナトの元へ行き、何かを話してから、手を組み目を閉じて集中し始めた。

それまで九尾モードの状態だったナルトは徐々に変化していく。

それは、九尾のチャクラから十尾のチャクラへと変わっていった。徐々に変わっていったナルトは、オビトの時のように変化していく。そして、オビトの時と似たような形を取った。違いと言えば、九尾モードの時のようにコートや羽織った状態ということだろう。

ナルトは十尾の人柱力となったのである。

その眼は輪廻眼へと変わっていき、手には錫杖が現れた。首には勾玉も9つ現れ、コートの端が十に分かれており、それが尾のように見える。それが十尾の人柱力の完全体であるかのように。

オビトの時とは違い早く終わったのは、尾獣たちが協力したからだ

ろう。

「これでいけるってばよー！」

「輪廻眼!？」

驚く周囲を余所に、ナルトは意気揚々と花のところへ向けて浮かんでいく。

「ナルト！ 輪廻転生を使うと死んでしまうんだぞ！」

「俺はそんな簡単に死なねえってばよー！」

ナルトはハッキリ宣言すると花の上までいくと、世界へ手を伸ばすようにして広げると、十尾のチャクラが世界を包むように広がっていく。

ナルトにより、1度皆死んだ状態までもっていき、その後に輪廻転生で生き返った。

これにより、無限月読の呪縛からあらゆるものが解放される。

多大な犠牲を払って……。

114 最後？

最終決戦が終わり、忍び連合の者たちは、狐に化かされたような顔をして、自分の身体を見つめたり、近くにいる者を見ていた。

しかし、それも生きている実感が沸いてくると、歓声へと変わる。今度こそ本当なのだ。近くにいる者同士で抱き締めあい、泣いて喜ぶものまでいた。

皆の身体には一切傷痕は無い。

しかし、大戦の傷跡は、それ以外にはしつかりと残っていた。

それは着ている服だったり、建物だったり、果ては山地だったり。一番被害を受けたのは雷の国と言っていいだろう。主戦場だっただけにその規模は大きい。しかし、物資が一番集まっているのも雷の国だった。

食料や医薬品、忍具や巻物、建設資材など集めていたのだから当然だろう。

優先的に建設資材は、雷の国……雲隠れの里への寄付と言う形で割り当てられ、他を4つの里で分ける形となるのだが、その前に問題が発生する。

その問題には、すぐに気付くことになった。

それは……。

「まさかチャクラが練れなくなっているとは……」

「違和感しか感じないな……」

問題と言うのが、チャクラを練れないことである。それは、白眼や写輪眼などの瞳術にも表れていた。

その瞳で能力が使えるということではなく、他の者同様に一般的なただの瞳へと変わっていたのである。

巻物についても、なにも口寄せできず、忍術も使えない。近くにいる者たちに呼び掛けて、一度、本部が置かれた雲隠れの里に集合することになった。

元々半数が、あの最終決戦の場に居たので良かったが、カブト捜索に出ていた面々や、被害のあった場所にいたり、戦場から離れてい

た他の忍びたちは、連合軍が帰ってきたり、見つけてもらうまで混乱の局地にいたのは言うまでもない。

ひと先ずは、里に戻り、無事に大戦が終わったことを伝えることになる。

その帰る前の集まりにて……。

「何故リンがここに!?!」

「オビトがその状態で驚いてるってことは、どうも無限月読じゃないみたいだね」

「あれ?　なんで……私カカシに……」

オビトは自分が生きていることよりも、リンが生きていることに驚く。カカシは周辺の状況やオビトの状態を見てそう呟く。

オビトはリンを見て酷く狼狽し、カカシは周辺の状況の確認を終えてからは、リンをマジマジと見つめていた。

「リンの遺体がないと思ったら、オビトが持っていったとはね」

「オビト?」

「いや。!?!　けして疚しいことは!?!」

カカシから振られた台詞にオビトは狼狽し、リンへと必死に言い訳を始める。リンは不思議そうに2人を見つめると、2人に向けて非情とも言える言葉を言い放つ。

「あなたたち誰?」

「えっ!?!」

それは、子供の頃のままのリンだった。

別のところでも3人が言い争いをしていた。3人といっても、伝説の三忍。その中でも言い争いをしているのは、主に2人だけだったが……。

「さあ!　キリキリ吐け!　生存報告が無かった理由は何だ!?!」

「違うんじゃない。わしは穢土転生で「あら?　穢土転生じゃなかったわよ?」

自来也は首元を綱手に掴まれて、詳細を迫られていた。自来也が嘘をついたり、言い訳をするたびに、大蛇丸がそれを見抜き修正していく。それを聞いたたびに、綱手のこめかみに青筋がはしり、自来也の腹

へと膝蹴りが入る。

理由は不明だが、綱手はチャクラが無いにも関わらず、元の容姿を保っており、それは大蛇丸にも言えた。この中で、一番の見た目年寄りでは自来也であり、まるで虐待をしているように見える。それを遠くから見ていた柱間が止めようとするが、ヒルゼンと扉間に止められていた。

「綱が……あのような暴力を……」

「兄者。あれはどうやら違うようだぞ」

「柱間様。あれが、あの3人にとっては挨拶のようなものなのです」

「暴力が……挨拶……」

自来也へと加えられる膝蹴りに慌てていた柱間は、ヒルゼンの言葉を訊いて落ち込む。自身が甘やかしたせいで博打を覚えてしまったのは分かっていたが、それが暴力娘に育っているとは思わなかったからだ。落ち込む柱間を必死に宥めるヒルゼンを余所に、扉間は周囲を見渡してある1点を見つめる。

「あれだけ慕われていれば、可能かもしれんな」

扉間の視線の先には、サスケを囲んで3人が言い争いをしていた。

「サクラはナルトに告白したんでしょ！ ナルトのどこ行きなさいよ！」

「何言ってるのよ！ あれはナルトを止めるためのものに決まってるでしょ！ 私は最初からサスケ君一筋よ！ っていうかあんたはなんな訳!?!」

「そうよ！ あんた誰よ!?!」

サスケの目の前で行われていたサクラとイノの言い争いの矛先は、サスケを後ろから抱きついているもう1人へと向けられる。

「サスケがうちのこと必要だって言ってくれたから一緒にいるだけだし」

「二本真なの!?! サスケ君!?!」

あっさりと言う香燐の言葉に、サクラとイノはサスケへと詰め寄る。チャクラを使えず、写輪眼もないサスケには、腰へしつかりと抱きつく香燐を振りほどくことも、サクラとイノから逃げ切れる自信す

ら失わせていた。それは顔に出ており、口元を引くつかせている。そして、視界の端に見知った人物を見つけて助けを求めた。

「イタチ！ イタチ！ 助けてくれ!! ……兄さん!!」

そんな叫びを後ろに聞きつつイタチは連合軍を離れていつていた。

「呼んでるけどいいの?」

「ああ。サスケがいれば、うちのは家系も安泰だな。写輪眼などというものもないが……」

「それよりも、本当に付いて来る気?」

「元暁メンバーのよしみだ。それに、1人では連れて行けないだろう?」

「すまない」

「気にするな」

イタチは小南と共に、小南が長門を置いてきた場所へと向かっていた。整備のある程度整っている木の葉の里よりも、雨隠れの里の復興にむけて。木の葉と里と雨隠れの里は、大きく見れば隣同士に当たる。音隠れは壊滅的打撃を受けているし、鉄の国は中立、湯の国は争いには関わらないし、砂隠れの里と波の国とは同盟関係にあるため、木の葉の里のことを考えるならば、近隣で一番大きい箇所は雨隠れの里となる。

それに、今回で今生の別れになるわけではないので、落ち着いたら木の葉の里に戻るつもりでもいた。

「それに、あいつを支えるのは俺じゃなくてもできる」

「……そうね」

イタチと小南の視線の先には、両親に囲まれたナルトがいた。

「まさか、生き返られるとはね……」

「信じられないってばね……」

「へへっ。俺ってば、やる時はやるってばよー!」

ナルトは嬉しそうに笑いながら両親と会話していた。

あの時、穢土転生されて魂の浄化をされていない者たちは、そのまま肉体を得たのである。

ナルトの輪廻転生は長門の使った輪廻転生とは桁が違った。無限

月読と同じように、世界の隅々まで、時間を掛けつつも力を広げていったのである。

広げ終わってから時間も掛かった。それは、皆の記憶を、1人1人の過去の記録を読み取っていったからである。埋められた死体を墓から引き上げ、最後に、一気に生き返らせていく。この時に、全ての者たちからチャクラ経絡を取り除いていた。チャクラがなければ、今回のような大きな大戦は起きないと信じて。

輪廻転生はナルトの命を代償としたものだったが、その代わりをした者たちがいた。尾獣たちである。尾獣たちもただ簡単に諦めたわけではなく、陰と陽にわけられると、陰がナルトの命の代わりとして消え去った。

その後、オビトの呼び出した樹……神樹を月へと送り込んだのである。それに伴い、一緒に尾獣たちも月へと送る。これは尾獣たちの願いでもあった。

その送り出しが契機と言わんばかりに、ナルトからもチャクラが無くなる。無くなると言っても完全にはなかったが、忍術が使えるほどではなかった。

他の者はチャクラ経絡がないので、違和感だけで今後済んだが、ナルトだけは、癖で練ってしまうたびに倒れてしまうことになる。

そして、例外はもう1人。

「だから悪かったって」

「悪かっただど!? あの手紙を受け取ってから、俺がどんな想いをしてきたと!」

白は、ネジに色々なことを謝っていた。紙には簡単に、今後の事を書いていたのだが、それでは遺書に見られても仕方ないだろう。そこへ、笑顔で近付いてくる者がいた。

「白。元気そうだね……」

まるで、白眼が機能しているかのように、眼だけは笑っていないヒナタである。その姿からは、ネジ以上に、具体的説明を要求する意思が感じられた。

「……お久しぶり。ヒナタ」

冷や汗を流している間に、身体は危険を察知したのか、逃げるための行動に入る。しかし、いつの間にも手配されていたのか、日向家の人たちに、遠巻きにはあるが包囲されていたのである。

「これは……一体？」

「私ね……当主代行権限を持つてるの」

「へー……」

「ネジ兄さんに、足止めしてもらってる間に、集まってもらって、逃げられないようにしただけ」

「いや……。うん……。代行とは言え、当主になれてよかったね」

何をされるかと、ビクビクしていた。

（説教なのか!? それとも……まさかの折檻なのか!?）

ここまで、ヒナタの意思が強くなっているとは思っていなかった白は、逃げ腰でいた。

しかし、そんな白の考えとは裏腹に、ヒナタは白に抱き付くと、何も言わずに泣き出したのである。これには、白もどうしていいかわからずに狼狽える。

結局まともに謝ることすらできず、頭を撫でることしかできなかった。

その撫でる手は、ヒナタにとって、昔を思わせるほど温かく感じることでできるものだった。傷付いて、毎回癒してもらっていたあの頃の手と。

―後日―

各国は、今回の件で、同盟を結ぶことになった。元々、国の軍縮が進んでいた中で、忍びたちのチャクラがなくなったのである。今後、大きな戦が無いとは言いが切れないが、世界規模の大戦が起きないことだけは皆にとつての共通の認識だった。

大戦が落ち着いてしばらく後に白は、木の葉の里に招かれて、日向家に泊まることになり、そこで正式に婚約をすることになる。

「では、立会人は、私……綱手が確かに承った」

「よかったね」

ヒナタの言葉に、恥ずかしながらも頷くと、そのまま下を向いてしまふ。

婚約相手は、ハナビだった。白眼がなくなったことで、他国へと嫁に出しても問題がなくなったからである。むしろ、これからの事を考えれば、自国の者を他国へと嫁がせる事が重要だった。

白の周囲は、木の葉の里の者しかいない。完全に取り囲まれていた。これには、幾つか理由があるが、一番の要因は、白本人が認めた手紙だろう。

再不斬は、好きにすればいいと言って、波の国へと帰ったのだが、それは満足そうな顔をしていた。他のことなど、どうでもいいのかというほどで、今なら全て許容してしまえばよかった。

実質、一緒に帰路を共にしていた照美から、誘われるままに、そのまま霧隠れの里へ行ってしまっているの、あの時、白が感じたことは間違いないだろう。

白がハナビを嫁に貰うこととは逆に、ナナが日向家に嫁ぐことになった。一時的にだが、日向家に泊まった際に、日向コウとヒナタとハナビのどちらが素晴らしいかの言い合いになり、最終的には打ち解けたのだった。

ナナは、記憶の混濁からもほとんど開放されていたが、記憶を失っている部分が戻ることはなかった。同情的な部分もあったのだろうが、コウの方から言い出す辺り、気になっていたのだろう。

あのコウが、白に頼むのだから……。

戦後、ヒアシはヒナタに当主の座を譲ると、完全に裏方へと回った。最初はヒナタとの話し合いで、ネジにも当主の話がいったのだが、ネジの辞退により、そのままヒナタとなった。

婚約も無事に終わり、同席したヒナタへと意趣返しに白は、詰め寄る。

「それで？ ヒナタはどうなの？ まさか、あれから進展ないなんて言わないよね？」

「えっ!? それは……その……私なんて相手にしてくれるか……」

ヒナタはそれまでの毅然とした態度から一変し、気弱な昔の姿に

戻っていた。言い訳がましく両手の指をつつきあっている。

「ネジ！　なんで、気弱なままなのさー！」

「そう簡単に性格が変わるわけないだろう。いや……告白ならあの戦場でしたぞ！　思い出した！」

ネジの言葉に、ヒナタは益々顔を赤くしていく。それを確認した白は、片方の腕を掴み、ネジにアイコンタクトを送った。

ネジも理解したのか、反対側の腕を掴む。

「えっ？」

理解できないままに、2人の顔を訳がわからないと、見比べるヒナタを連れて、ある場所に向けて歩き出す。

「救世主は家ですか？」

「ん？　ちよつと待て……今日はあの日だな……、けりをつけるとか言って申請してきていたから、今ならアカデミーに行ってるはずだぞ」

綱手から、居場所を確認してアカデミーへと向かう。シズネから手帳を見せられて、スケジュールを確認している時に、チラリと見えたが、その手帳はメモ書きで埋め尽くされていた。よくあれでわかるものである。

日向家から出ていった先。アカデミーの外の広場では、人が集まっていた。その中心には、お目当ての人物——ナルトとサスケが向かい合って立っている。

「あれは？」

不思議に思っただけで近付くと、こちらに気付いたテンテンが手を振りながら、呼び掛けてきた。

「ネジたち！　こっち、こっち」

「これは何してるんですか？」

「今までのことに白黒着けるんだって。忍び組手で。2人共、木の葉の里の有名人だから、結構な人が集まっちゃったんだよね。まあ、ほとんども同期に近い人達ばかりだけどね。あつ！　あつちで賭け札売ってるよ」

テンテンの言う通り、周囲を見てみると、椅子に座っている人たち

のほとんどが、知っている人ばかりであることに気付く。

「これは出直してきた方がいいのかな？」

横を見ると、それまで隣にいたはずのヒナタがいなくなっていた。辺りをきよろきよろと見渡していると、テンテンから脇をつつかれ、指差した方向を見ると、賭け札の売っている場所で、購入しているのが見てとれる。その隣には、どちらを購入しようかと迷っている柱間がいた。売り子が非常に困ったような顔をしている。ずいぶん長い間迷っているのだろう。

「まさか……」

「多分そのまさかだと思う……。ネジと一緒に見てたからってわけじゃないけど、あの子……分かりやすいよね。ちなみにナルトのご両親はあちら」

そこには、ナルトの両親とサスケの両親、それにイタチがいた。そこへヒナタを連れて行くべく、もう1人の相方へ声をかけようとしたが、先に言われてしまう。

「情報料としてネジは貰うね」

「仕方ないですね」

「……俺は物じゃないんだが……」

ネジを置いていき、ヒナタを連れてナルトの両親の元に向かう。途中には色々な人たちが口々に結果の予想等をしていた。

「ガイ先生！ やはり、僕たちこそが次代を担うべく、青春を後輩に指導していくべきだと思います！ 体術に全てを費やしてきた僕たちが、木の葉で一番強いのは間違いないありません！ これからは僕たちの時代ですよ！」

「いや、リーよ。そろそろ青春についてはだな……」

弱気なガイにリーは更に熱く語っていたが、全てを聞き取る前に過ぎ去ってしまう。

イノ、シカマル、チョウジは3人揃って座っている。イノの横には香燐がおり、その香燐を挟むようにしてサクラが座っている。恐らくは、抜け駆けできないように見張っているのだろう。眼から火花が出ているかのようにだった。

シカマルたちの後ろには、忙しいにも関わらず来たのだろう、我愛羅やカンクロウ、テマリが座っている。シカマルの後ろでも、何やらテマリと、瓶の底のような眼鏡を掛けた女が睨みをきかせあっていた。どちらかと言えば、一方的にテマリが睨んでいただけだが……。「きさま何者だ？」

「私ですか？ シホと言いますけど何か？」

「その席を私と変われ」

「お断りします。何時間前から張ってたと思うんです？ この場所はとても重要なのです。絶対に渡しません！」

「ここでも、なにやら熾烈な争いが行われているようだった。」

ナルトの両親の元へたどり着いた白は、挨拶もそこそこに、本題へと入る。

「あなたのところの息子の嫁です」

「君が？」

「違う！ こっちー！」

ミナトの意外だ、という顔と声に思わず突っ込みをいれてから、ヒナタを全面に出して挨拶をさせると、クシナの隣へと強制的に座らせる。

顔を真っ赤にして固まるヒナタへクシナは、優しく話しかけていたが、ヒナタが手に握りしめているものを見て笑い始めた。ミナトもそれに気づき微笑む。

それからしばらくして、忍び組手は始められた。

「両者共に体調は万全か？」

試合の審判はイルカである。そのイルカの言葉に、ナルトとサスケは頷く。

「では対立の印をしてから始めること」

2人は円の中心部。イルカの前まで歩いていく。

「これで決めるってばよー！」

「それはこっちの台詞だ」

2人が対立の印を交わしたのを確認してから、白は陰遁を使いその場を離れて日向家へと戻る。

理由は不明だが、他の皆が、チャクラを失っているにも関わらず、白のチャクラはなくなっていなかった。減ることは減ったのだが、ナルトのように使ったら気絶するようなこともない。

周囲の人たちが、チャクラが練れないと騒ぎ始めて、自分の異常事態に気付いた。

こつそりとやってみたが、口寄せや五行の遁術などは使えないが、身体を強化したり、気配を薄くするなどには使えることが判明した。不思議に思いつつも、バレてはまずいと皆には黙ったままである。

ひと仕事終えて、全てに片がついた気持ちで日向家へと戻ると、怒った顔をしたハナビが出迎えて来た。

「婚約者をいきなり置いていくなんて信じられません！」

「ごめん、ごめん」

本気で怒っていないことは、態度で分かったが、それを口には出さずに、頭を撫でる。昔ヒナタにしていたように。それで、機嫌を直したのか、改めてハナビは白を見ると、仕切り直しとばかりに言い直した。

「おかえりなさい」

「ただいま」

115 その後？

伝説

歓楽街。そこは、夜中でも灯りの絶えない場所として至る国に点在している。

その中でも、火の国の短冊街では、新たなる伝説が打ち立てられようとしていた。

「はい！ はった！ はった！」

「今度こそ当てるぞ！」

「おじい様より先に当てる！」

賭場の熱気に当てられているのか、2人は周囲の事など全く見えていなかった。少しでも注意を払っていれば分かつただろう。周囲の人たち全ての視線や耳が、自分達の次に出すであろう言葉に向いていることに。

「半ぞ（だ）！」

「「「「「」」」」」

自信満々に答える2人に、合わせるようにして、こちらも自信満々に打てば響くとも言うタイミングで、答える。

その場にいる全ての者たちの顔には、外れるはずがない、という揺るぎない自信に溢れていた。必ずどちらかが外れるにも関わらず、である。

根拠がどこにあるかなど、前者2人には無かつただろう。あると言われれば、この次こそ当てるという思い込みこそが、根拠だった。それに比べて後者は違った。必ず前者2人の反対へと賭けていたのである。当たるといふ根拠はそれだけで十分だった。

最初の方こそ、前者2人の答えが、2つに分かれた時にどうするか……。そのような考えが浮かんでいたが、それが杞憂であつたと分かるのはすぐだった。全く同じ答えだったのである。毎回、毎度。分かることなくそれは今も続いている。

どちらかが反対に賭ければいいのだが、一切そのような事をしようとはせず、一斉に合わせて言っているようだった。その顔は、2人と

も嬉しそうにしている。純粹に賭け事が愉しいのだろう。

その2人の少し後ろでは、青い顔をした付き添い人が、1人だけついてきていた。その顔色から、ついてきてはいけなかったと、後悔しているのがよくわかる。それは、胸に抱いていた豚にも言えることだった。

「はい！ 出目は……丁！」

「よし！ 次で取り戻そうぞ！」

「次こそは当てる！」

外れたというのに、微塵も悔しそうな顔を見せず、次の勝負へと気合を入れ直している。その様子は、どこから見ても、血縁者であるということがよくわかった。

「む!? 持ってきた金が、もう無くなってしまったな」

「次に行きますか！」

「行こうぞ！」

「止めてください!!」

出ていく2人を止めるべく、必死に苦言を呈し、身体を張って食い止めようとするが、2人に両腕を掴まれて、抵抗虚しく次へと一緒に連れていかれてしまう。

それに続くようにして、その賭場から人が行列のように続いた。

それを見た人たちは口々に語り継ぐことになる。

鴨が、鴨を背負ってきたと。

——完——

——再会——

1人は一生懸命に弁明し、もう1人はそれに茶々をいれていた。

「んー……。こっちはカカシ君だって分かるんだけど……。あなたはオビトに見えない。ごめんなさい」

弁明を受けた少女……。リンはカカシの後ろに隠れながら、オビトへと謝る。純粹に頼れる人が、今では両親とミナト、カカシ、ガイ（リーをガイと勘違いしている）しかおらず、いつまでも家の中に閉じこめるのは良くないと、両親の申し出によりカカシが外へと散歩に付き

合っていた。カカシとしても、リンには早く里に馴染んで貰いたいため、快く承諾し今に至っている。

「いや。ちよつとくらい面影残ってるって、ほらよく見てくれよ！」
そして、当然のごとく、リンへと説明しているのはオビトだった。あれからというものの、しばらくオビトは拘束されていた。大戦の主犯だったのだから当然だろう。ただ、その記憶が残っている者はほとんどいなかった。ナルトにより、消されていたのである。

オビトは、リンが生き返ったことで魂が抜けたかのように牢獄内で過ごしていた。いつまでも牢獄内で過ごしさせる訳にはいかないということで、働かせていたのだが、魂の抜けた状態のオビトではほとんど役に立たないと言ってもよかった。そこへ、オビトにカカシがリンの写真を渡したことで劇的に変わったのである。写真が欲しければ、一生懸命働くことを条件に出すと、今までが嘘だったように働き出した。今ではアルバムにて大事にしている状態だ。

これならば、もう大丈夫だろうと、上層部にカカシが掛け合い外に出したのだが、外に出した途端カカシを締め上げて、リンの居場所へと連れて行かせたのである。カカシも、その必死さに、無闇矢鱈に近づかないことを条件に出して了承させたのだが、あまり意味のあるものではなかった。

ストーカーと化してしまったのである。オビトの中のリンはあの頃の姿のままだったため、余計にその想いに火を付けたと言ってもいいだろう。昔付けていたゴーグルや服などを購入したり、プレゼントを送るなどアピールするものの、逆にリンの警戒心を煽る結果となっていた。

「あんまり近寄ると逆効果だと思うよ」

「お前は分かって貰えたからいいかもしれないけど！俺はまだなんだよ！」

オビトは必死に、自分の顔を指差して、リンに自分をオビトだと認めてもらおうと昔話を交えて説明をしていたが、リンの中ではオビトは既に過去の人になっていた。それに加えて、自分が死んだはずなのに生き返っているということと、カカシが大人になっていることか

ら、未だに現実味が無い状態だったのである。そんなところへ、いくら説明しようとも素直に受け入れられるはずも無かった。

「ほら！ このゴーグルなんて俺が昔いつも使ってただろ！」

「大人の状態で着けても怪しいだけだよ」

「カカシは黙ってる！ ……ちくしょう！ なぜ変化できないんだ！」

オビトはカカシへ怒鳴りつける。それがリンの感情へと更に悪循環になっているとも考えずに……。そして忍術が使えないことを悔しがり、頭を抱えていた。

「<この人大丈夫なの？>」

「<たぶんね>」

オビトがリンに、オビトだと認められるのは、このストーリーカー行為のせいで、数年掛けていたの言うまでもない。

——完——

——仕事——

波の国は、大戦以後再び活気に溢れていた。

元から忍術などに頼ったやり方をしていなかったために、チャクラの恩恵が無くなっても然程変わらなかつたことが大きいと言えるだろう。

しかし、波の国の上層部……ガトーカンパニーでは大変なことになるっていた。ナンバー1とナンバー2が揃って他国へと行つてしまったのである。

ナンバー1の再不斬に至っては、もう大戦は起きないだろうことを予見し、霧隠れの里のアカデミーで生徒の指導をしている。再不斬にまともに生徒の指導など出来るのかと、疑問に思うかもしれないが、意外と手加減が出来るようになっていた。最初の白へのやり方などを真似していれば、死者が出ていてもおかしくは無かつたが、チャクラが無い今はそのような事が簡単には出来ないようになっていた。

霧隠れの里へ向かったのはそれだけが理由ではなかつた。照美からの提案で、コロシウムが作られるとのことで、その手伝い兼参加

者で向かったのである。開催してから今のところ、チャンピオンとして君臨し続けていることから、それなりの手合いがボチボチとは来ているのだろう。そうでなければ、自ら探しに行くはずである。

波の国は圧政の影響にあったためか、あまりコロシウムといったよ
うな、人が争うことを好まない傾向があるため、建設は難しかった。
民衆の意思を無視すれば容易いが、人の入らないコロシウムなど、た
だの処刑場である。そんなところに好き好んで人が来るとは思えな
かった。その為の移動だったのである。

最近。照美との結婚の噂も流れていることから、式の日も近いかも
しれないが、その噂を流しているのが、どうやら照美の母親のよう
なので、どこまで信用できるのかが不明だった。もしかしたら、外堀か
ら埋めていって周知の事実とし、強制的に結婚させようとしているの
かもしれない。情報の重要性をよく理解しているといっているのだら
う。それが再不斬に効くかと問われると甚だ疑問だが。

ナンバー2のナナに関しては、コウと真つ当に木の葉の里で新婚生
活を送っているようだった。特に、波の国に来るわけでもなく、色々
などころへ旅をしているのを確認している。

実際には、既にナンバー2などという肩書きも無いに等しく。本人
にもその気が無いため、今では代わりにハナビがその席へと座ってい
た。

形式上、ナンバー2を誰にするかを白はナナに確認した。特にいな
ければ、空席のままにしておけばいいと思っていたのだが、何を思っ
たのかナナは覚えていないはずにも関わらず、ハナビの名前を出した
のである。自分で口に出した言葉に不思議がついていたが、それでも、
その名前の子に譲ってほしいということ、その通りとした。これ
は、ナナがまだ木の葉の里に行く前である。ハナビへの愛情は本物
だったと思わされた瞬間だった。

波の国に戻ってからは、空いた日数分の事務処理に追われていた。
この日ほど、影分身が使えないことを惜しんだことはないだろう。た
だ、動体視力や身体能力は、前の状態に近い状態まで持つて行けるこ
とが判明しているので、その処理速度が早いことには変わりない。

今ではナンバー1の席で事務処理をしているのだが、意外と公衆浴場が人気だったりする。自来也の提案で始めた計画だったが、今では各街に最低1箇所は設営してあるので、どこでも気軽に入れるようになっていた。素泊まりの宿が多い街では人気が高いようだった。これも大戦前に必要資材などを準備していたお蔭である。

数年経って他の国の復興も終わった頃、それは突然としてやってきた。

「私たちは子供は作らないのですか？」

「ぶっ！ はあはあ……いきなりなに？」

お茶を飲みながら、書類に目を通していたため、諸にその口に含んだ茶が書類に掛かり、苦い顔をしながら白はハナビへと問い返す。何の前置きも無くいきなりだったため、白は心の準備ができておらず、むせこんでしまったのである。

「木の葉の里から手紙が来ました」

「手紙？ 誰から？」

ハナビが見ていたのは、仕事の書類ではなく手紙の束だったのである。それを手に持ちながら白へ視線を向ける。

「父上とヒナタ姉上とネジ兄上と」もういいよ！ よくわかった！」そうですか？」

手紙の枚数分言うつもりだったのだろうが、一番上の手紙を読んでからこちらへ声を掛けたことから、この発言の原因の相手がヒアシであるあたりをつける。

（なんてことを書くんだ！ 手を出したら犯罪の予感しかしないじゃないか！ まともにアカデミーに通わせないからこんなことになるんだ！）

不思議そうに、白を見つめるハナビの視線に堪えられず、白は顔を横に向けると、小声で悪態をつき始める。

「＜今度行ったときに薬を盛ってやる。医療技術と薬草学なめるなよ！＞」

「何をなめるんですか？」

「っ!? 誰だ！ そんなことを教えたやつは!？」

「あなたです」

ハナビの言葉にショックを受けて、白はその日仕事が手に付かなかったとか。

—— 完 ——

—— 計画 ——

その暗い部屋では、男2人が、ろうそくの灯りのもと、相談をしていた。

「それにしても、歳をとったな、ダンゾウ」

「二代目様が若いままなのです」

「俺も、生き返るとは思わなかったからな……」

扉間は、生き返ってから、何度目になるか、自分の手を何度も握りしめては広げるを繰り返す。未だに生き返った実感の湧いていない内の1人である。

「それよりも、これは本当にいけるんだろうな？」

「間違いありません」

ダンゾウは自信満々に二代目へと頷く。計画は用意周到だった。

生き返ったダンゾウは、チャクラが練れないことに不思議を覚えていたが、自分の最後を思い出して周囲の警戒を行った。実際に無駄に終わるのだが、人に会うまで疑心暗鬼に駆られたのはいうまでもない。

大戦が勝利に終わったと聞いたダンゾウは、すぐさま木の葉の里に戻った。大戦が終わればすぐに戦後処理が待っているはずだからである。

今回の規模は、かなりのものであるということが分かっている。単純に計算しても死傷者がかなりに上っているはず、その思いから行動を起こすために戻ってみると、結果は誰も死んでおらず、それどころか逆に人が増えていた。

混乱しているダンゾウを見つけたのは、自主的に見回りをしていた扉間である。傍目に、拳動が怪しかったことから捕まえたが、それがダンゾウと分かり、自分の住みかへと案内していた。

ヒルゼンとダンゾウ。2人の火影候補で扉間の気に入っていたのはダンゾウだった。急場でなければ、非常に合理的な考え方をするためである。2人とも里の事をよく考えているだけに、最後の問い次第では、ダンゾウに火影を任せることも有り得た。

最後に必要だったのは、判断速度。ただ、それだけだったのである。ダンゾウを落ち着かせて、大戦の話をしていただけだが、いつしか木の葉の里を今後よりいっそう繁栄させていくための話に変わり、いつしか、それを行うための計画を練っていたのである。

ダンゾウは、少々強引にでも計画を進めていた。今度こそ認めてもらうために。

「計画は順調か？」

「順調です。金についてもほぼ予定金額を貯め終わりました」

「よし！ まずは周囲の国からやっていく。くれぐれもしくじるなよ」

「分かっております。計画については、私と二代目様の頭の中のみ。金の所在については二代目様より教えていただいた場所にありますゆえ」

「うむ。さすがにあの場所の事を知る者はおるまい」

2人は頷き合うと、その場に痕跡など残さぬよう細心の注意を払い、その場を後にした。

数日後、2人で金の場所を確認しに向かい、中が空っぽになっているのを見て絶句し、持ち出した相手が分かって更に頭を抱える2人がいたとか、いないとか。

——完——

——子供——

それは、第四次忍界大戦が終わってからすぐのことだった。白はヒナタからの呼び出しに応じて、木の葉の里に来ていた。

呼び出された場所に行ってみると、落ち着きなく、部屋の外をうろろするアスマの姿があった。

ここは、木の葉病院の手術室前である。手術室前の廊下の両端にあ

る長椅子には、紅班のメンバーであるヒナタに加えて、アズマ班のメンバーであるシカマルが座っていた。そして、見知らぬ人も4人、2人ずつに分かれて座っている。

「おはようございます」

「おはよう、白」

「ああ。おはよう」

「落ち着いたらどうつすか？ 相手は逃げも隠れもしないつすよ」

アスマはシカマルに言われて、一旦座るものの、少し経つと、また立ち上がりうろろとします。全く落ち着きというものがなかった。

ヒナタはそんな姿を見て、笑みを浮かべ、シカマルは呆れているようだった。普段このような事を見ることがないためだろう、新鮮であると同時に、シカマルには理解できなかった。

見知らぬ4人はその様子に、女の方はヒナタと同じく微笑み、男の方は、目を閉じて何も言わず、沈黙を保っている。

しばらくして、手術室の中から声が聞こえてくる。

「おぎゃああああ!!」

「!!」

アスマは扉にへばりつき、中の音を聞き逃すまいと、片耳を当てて、耳を澄ませていたが、中から開けられる扉の邪魔になっていることに気づき、すぐさま離れる。

「おめでとうございます。無事にお子さんは産まれました」

アスマはその言葉を最後まで聞かずに、手術室の中へと入っていく。余程早く会いたいのだろう。その動きに躊躇いは一切なかった。

残った7人は、ゆつくりと中へ入っていく。入ったそこでは、壊れ物を扱うかのように、胸に抱くアスマと、疲労困憊ながらも、嬉しそうに笑っている紅がいた。

「おめでとうございます」

「ありがとう」

白やヒナタが挨拶を兼ねて、祝いの言葉を添える。話しているなかで分かったが、見知らぬ人物は、アスマと紅の両親であった。

少しすると、面会は終わり部屋の外へと出ることになる。そこへ、

残りのアスマ班と紅班のメンバーがやってくる。

「残念だったね。今面会謝絶になったところだよ」

「ええー!? まさか、もう産まれたの!？」

「イノちゃんはタイミングが悪かったね。折角ずつといたのに……」

「チョウジ!! あんたがさつさと動かないからよ!」

「僕に八つ当たりされても……」

チョウジは、助けを求めするように、一緒に来たメンバーであるキバとシノへ視線を向ける。しかし、キバには気付いた様子はない。シノは……。

「自業自得だ。何故ならいくら呼んでも起きなかったからだ」

無常にも、イノの後押しをしていた。それを聞いて、チョウジは更に落ち込むことになる。実際に傍から聞いていても、内容的に悪いのはチョウジであると判断しただろう。

医療関係者に祝いの品を渡して、言伝てを頼むと、メンバーで食事をしに向かう。向かう先は、言わずと知れた焼肉屋である。

アスマ班はよく利用しているようで、注文に關しても手慣れたものだった。そこで始めて白は、違和感の正体に気付く。

「一体いつからシカマルは、煙草なんて吸うようになったの?」

「ん? そうか、もう癪になっちまってたな。これは、アスマが死んだときにな……。生き返っちまったから、もう必要ないんだけどな。ついつい手がでちまう」

「アスマ先生の前では吸わないようにしなさいよ。折角禁煙してるんだから」

「分かってるって」

シカマルは、面倒臭そうに受け答えすると、まだ火のついていない、口に加えた煙草を箱へと戻す。

「シカマルの変化には気付いても、俺の変化には気付かないのだな……」

「シノはどこが変わったのか? いつもと一緒に見えるぞ?」

「……………」

シノは不満そうに言ったところへ、キバからの返答を聞き、更に不

満をあらわにしていた。実際が変わったところと言われても、昔の印象からそれほど変わったようには見えなかった。

未だにコートを愛用しており、サンングラスもかけていることから、表情も分かりにくい。そこからどこが変わったかなど見破るのは難しかった。あえて言うならば、背が伸びたことくらいだろう。

「……そう言えば、蟲たちはどうしてるの？」
「気付いたか」

シノは満足そうに頷くと答え始める。

「蟲たちは「待たせたな！」……」

タイミングよく入ってきたアスマに、シノは黙ることしかできない。元々が、アスマを祝うためのものであるので、当然と言えば当然であるが。

皆が席についたのを確認し、シカマルが仕切り、アスマが照れ臭そうに受け答えしていく。

主に質問者は女2人組……イノとヒナタであった。男に関しては、ひたすら肉を食べ続けている。

「何度もいつてますが、おめでとうございます」

「ありがとよ。まさか、自分の子を抱けるとは思わなかったからな……」

感傷に浸るアスマに、質問は更に続く。

「お子さんの名前は決まってるんですか？」

「名前か……名前は……」

その後も、遅くまでその集まりは続き、焼き肉の匂いが染み付いた状態で、アスマは紅に会いに行ったために、紅から怒られることとなるのはまた別の話。

——完——

——放浪——

僕が何者なのか。気付いたときには、薄暗い洞窟のなかにいた。外へ出てみても、全く見覚えのない景色が広がっている。

僕の姿を見ると、上半身裸の状態だった。近くに荷物が見当たらない

かったことから、もしかしたら強盗にあったのかもしれない。殺されなくて良かったと思うべきか、出会ってしまったことを嘆くべきか。悩むところだった。

一番始めに出会った集団が、商いを生業にしているところだった。この人たちに拾われたことは、感謝してもしきれないだろう。僕の過去の記憶はないが、薬の調合や、医療に関する記憶は残っている。怪我をしたと耳にしたときに、いきなり頭の中に浮かんできたのである。それまで何も思い出せなかったのに。

薬は良く効くと評判になり、今ではこの集団の医者として一緒に行動している。拾ってくれた恩返しはもちろんある。それ以外にも、記憶が戻るかもしれない、という考えも含んでのことだ。

あれから、色々などころを回っているが、見たことはあっても、そこで何をしていたのかを思い出せない。

デジャヴとは、こういったことを指すのだろうか。分からない。次は木の葉の里に向かうらしい。見たことのある風景が広がっている。今のところ僕を知っているという人に会ったことはない。

僕が記憶にある人の名前と顔は1人だけ。その人を寄る街で探してはいるが、広いこの世界では、見付からない可能性が高い。それでも、何処かにいると信じている。

「もうすぐ木の葉の里につくぞー」

団長の言葉が聞こえてくる。ここでは、知っている人に会えるだろうか？

僕がどういう人物で、どういうことをしていたのか。とても気になる。きつと何処かには、僕のことを知っている人はいるはずだ。

人は1人では生きていけないのだから。

———完———